

ソードアート・オンライン パラダイス・ロスト

hirotani

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「これは、仮想に生きてきた者達の物語だ」

《前編》

2022年の正式サービス開始と同時にデスゲームと化したVR MMORPG「ソードアート・オンライン」。

クリアするまでゲームの世界からは脱出不可。

ゲームでの死は現実の死に直結する。

絶望と恐怖に包まれながらも、ゲームの舞台である浮遊城アインクラッドで、プレイヤー達はゲームクリアを目指すために攻略へと臨む。

アインクラッド最強の攻略ギルド「血盟騎士団」に所属する少年セツナ。

彼に与えられた任務は攻略ではなく、アインクラッドの犯罪者プレイヤーを暗殺することだった。

過酷な戦いへと身を投じるセツナには、救いのない戦う理由があった……。

《後編》

全ては、終わったはずだった――

※全体的に暗いです。多分ギャグは殆どありません。オリキャラが多数登場するので原作キャラが空気になりがちなエピソードがあ

ります。作者の独自解釈のもと展開していくので、知識不足で不快な
思いをする方がいるかもしれません。それとタイトルが某特撮作品
の劇場版と同じですが、ストーリーの繋がりは一切ございません。

批判・糾弾・嘲笑は全て受け入れる所存です。

なので最初に謝罪させていただきます。ごめんなさい。

2017年2月22日の日間ランキングに入りました！

目次

前編

プロローグ

1

第1話 出会いの時にはこんにちは

5

第2話 気持ちには言葉を

15

第3話 騎士には血盟を

29

第4話 約束には指切りを

42

第5話 村には軍隊を

63

第6話 支配には解放を

77

第7話 遺跡には伝説を

100

第8話 冥王には冠を

117

第9話 迷宮には相棒を

137

第10話 罪には覚悟を

153

第11話 弦には弓を

168

第12話 求める者には楽園を

186

第13話 誓いには口づけを

203

第14話 渇きには水を

217

第15話 死者には棺桶を

231

第16話 因縁には決着を

252

番外編

2023年11月

268

後編

プロローグ

290

第17話 特異点には分岐を

292

第18話 革命には指導者を

307

第19話	誕生には祝福を	322
第20話	墓前には花を	339
第21話	同志には歓迎を	354
第22話	敵には殺意を	367
第23話	思い出には写真を	382
第24話	開戦には狼煙を	401
第25話	問いには答えを	416
第26話	観客には興行を	432
第27話	演出には音楽を	443
第28話	罪人には裁きを	458
第29話	悲劇には時の氏神を	472
最終話	別れの時にはさようなら	494
モノローグ		516
エピソード		529
あとがき		545

前編

プロローグ

そこは楽園のはずだった。

百の階層に及ぶ空飛ぶ城。その中には街、草原、森林、湿原、雪原、砂漠、山岳が広がり、住人たちは飽くなきまで探検することができる。道を阻むかのように現れるモンスターが冒険に適度な緊張感を、戦いの勝利は現実では味わえない達成感と爽快感を与えてくれる。

その世界に住人の肉体は存在しない。

そこはゲームの世界。プレイヤーの脳から発せられる信号をネットワーク上に送り込むことで訪れることができる世界。その世界で動く肉体もまたデータであり、本物の肉体は現実の世界で眠っている。

だが、その世界は現実とゲームという決定的な隔たりを超えた。コントローラーなど存在せず、プレイヤーは仮初めの肉体を自らの意志で動かし、現実では所持を許されない剣を振ることができる。

2022年。文明を発展させ、高度な社会を維持するためにあらゆることを制限された人類は、仮想世界にて楽園の創造を実現させた。

楽園の名は、浮遊城アインクラッド。

その城が存在する冒険の舞台。

ソードアート・オンライン。

その名は楽園の名として、科学の英知の結晶として語り継がれるはずだった。

ソードアート・オンライン、略してSAOのサービスが開始された2022年11月6日、全プレイヤーが第1層始まりの街の中央広場を集められ、このゲームの開発者でありゲームマスターの茅場昌彦がSAOの「本当のチュートリアル」を始めた。

チュートリアルで、茅場は新たなシステムを追加した。

1、ログアウトコマンドの消滅により、自発的なログアウトは不可能。

2、アインクラッド最上層のボスを倒せばログアウトすることができる。

3、SAOの世界でHPが0になると、現実でプレイヤーが装着しているヘッドギア型ゲーム機ナーヴギアから強い電磁波が発生し、プレイヤーの脳組織が焼き切られ死亡する。

4、外部から強制的にナーヴギアの停止を試みた場合も、電磁波によってプレイヤーの脳は焼き切られる。

5、プレイヤーは事前に計測した身体データを基に、現実と同じ容姿のアバターで攻略を行う。

この5つのシステムが、SAOプレイヤーたちの運命を決定づけた。

即ち、ゲームでの死は現実の死に直結する。

「これは、ゲームであつても遊びではない」

茅場が告げたその言葉は、デスゲームの開始宣言だった。

多くのプレイヤーがパニックに陥った。茅場の言うことはでたらめだと叫んだ。ゲームオーバーが現実の死に繋がることを証明することはできない。だが同時に、彼らは現実の世界に戻ることもできなかった。実証可能な片方の事実だけでも、プレイヤーたちを絶望させる十分な材料になった。

デスゲーム開始から1ヶ月、モンスターに敗北しHPが尽きる者たち、ログアウト不可能な状況に絶望しアインクラッドから身を投げる者たちが続出し、既に犠牲者は2000人を越えていた。

更に、サービス開始前のベータテスト出身のプレイヤーが自分の生存を優先して攻略を進めたことが、死を恐れて萎縮する者たちの反感を買い、両者の間に確執を生んでいた。

たった1ヶ月で、楽園と謳われた世界は地獄へと変貌した。

◆ 夕暮れの草原で、少年は茜色に染まった空を睨みつけた。

正確に言えば、空のみならず目の前に広がる草木や、アインクラッドを支える柱。視界に映るもの全てを睨んでいた。

草原に吹く風が、草と少年の髪を揺らす。少年はその風さえも不快

だった。

歩くたびに足裏には草を踏む感触が、草が擦れる音が耳孔に響く。何もかもが紛い物だ。ナーヴギアによって遮断された脳の信号がこの世界に送られることで起こる現象だ。現実の体は、きつとどこかの病院のベッドの上で寝ている。

自分のHPが表示されている視界の隅で、何かが動いた。

近付いてくるそれは、イノシシのモンスターだった。第1層では雑魚モンスターとして多く徘徊していたが、この第38層ではそれなりの強さだろう。

少年は、装備しているコートのフードを深々と被った。戦う前にいつもしている、儀式のようなものだった。

モンスターが突進してくる。標的は間違いなく少年だ。少年は腰に提げたホルダーから剣を引き抜いた。姿を現した刀身が、夕日に反射して鈍く光る。

モンスターがこちらとの距離を詰めてくる。少年は歩いたまま、剣を軽く素振りする。

モンスターがこちらに突っ込んでこようと跳躍した。その牙を少年の体に突き刺そうと迫って来る。

だが牙よりも早く、少年の剣先がモンスターの額を貫いた。一撃でHPが尽きたイノシシモンスターの肉体が色彩を失い、ガラス細工のように砕け散った。

やつぱり雑魚だった。ソードスキルを使うまでもない。

ガラスの破片が消えゆく様子を見ながら、少年は剣を鞘に収めた。今日もいつものように日が暮れて夜が訪れる。

他のプレイヤーたちは、あの夕日に何か想いを馳せているだろうか。

悪夢が始まったあの日。

自分たちがこの箱庭の世界に閉じ込められた日から、丁度一年が経ったことに。

2023年11月6日。ソードアート・オンライン正式サービス開始から365日。

攻略は第48層まで進んだ。

それと引き換えに、1万人いたプレイヤーの内の3割以上が犠牲になっっていた。

これは語られなかった物語。

この俺、キリトが知らなかった、とあるプレイヤーの物語。

楽園を求めた少年の物語。

もうひとつのソードアート・オンライン。

ソードアート・オンライン

パラダイス・ロスト

第1話 出合いの時にはこんにちは

煙草が吸いてえなど、バルドルは思った。

現実でも1日に一箱を消費するほどのヘビースモーカーだった彼は、S A Oにおける唯一の不満が嗜好品に煙草がないことだった。ゲームなんて子供の娯楽品に、現実での喫煙を促進してしまうようなものを実装しないものは当然といえば当然だが。

とはいえつても、このS A Oの世界に閉じ込められてから早1年。煙草のない環境にすっかり慣れていたバルドルは禁煙に成功したはずだが、この日はいつになく落ち着かず、もはや懐かしいとさえ思える衝動が現れていた。

原因は分かっている。バルドルが率いるギルド、ビスマルク・ヘッドに新入りが来るといふのだ。

先日、「狩り」に出ていたメンバーが1人のプレイヤーと出合い、そいつが自分たちのギルドに入りたいと言い出したらしい。拠点に戻って事の報告をしたメンバーを、まずバルドルは怒鳴りつけた。

「狩り」を目撃されて、しかも目撃者をこのこと逃がすなんて、自分たちにはあつてはならないことだ。「軍」が来て拠点を襲撃されることは容易に想像できる。

怒鳴られたメンバーは泣きべそをかきながら、フレンド登録をしたそのプレイヤーへメッセージを送った。またヘマをしないように、内容はしっかりとバルドルが指示を出しておいた。

内容は、今日の正午に第12層主街区の転移門前でこちらの人間をよこすから一緒に拠点まで来いというものだ。

「軍」の関係者だったと判断したなら、適当に遠回りして時間を稼げと言つてある。その間にバルドルたちは準備を整え、拠点を離れるという算段だ。だがその入団希望者は本当にビスマルク・ヘッドに入リたかったようで、マップ上に示された点は主街区から最も早いルートでこの拠点に向かつていた。

それにしても、なぜこのギルドに入ろうなどと思つたのか。

ビスマルク・ヘッドは圏外に建つ家を拠点として購入できる、どち

らかといえは裕福なギルドだ。だがギルドなんて現実でも知り合いだった連中が組むもので、後から入る者は門前払いされることが多い。ビスマルク・ヘッドも、SAOで知り合ったメンバーもいるが大半は現実でも付き合いのあった者たちだった。

不毛な思索を巡らせているうちに、家のドアが開いた。ノックぐらいしろと他のメンバーが言った。

ドアから迎えによこしたメンバーに続き、そのプレイヤーは入ってきた。足元まで届く黒いロングコートを着ていて、フードを被っているため顔は見えない。

ソファでくつろいでいたバルドルは起き上がり、その新入りの前に立った。不自然なほどに顔を近付ける。顔は半分以上がフードに覆われ、見えるのは口元だけだ。

「顔を見せろ」

バルドルが威圧しない、だがどこか圧を与える声色で言うと、新入りは素直にフードをゆっくりと脱いだ。俯いていた新入りだが、その視線をバルドルへ向ける。

新入りは、まだ年端のいかない少年だった。歳は中学生か高校生の境目といったところか。背丈はまだ成長途中といったところで、癖のついた少々長めの黒髪が揺れている。何よりも、前髪の隙間から覗くその目が、バルドルの興味を引いた。

とても成人前の子供とは思えない。このSAOで何度も修羅場を潜ってきたバルドルだからこそ核心でできることだった。

このガキ、俺たちと同類の目をしてやがる。

生存競争が激しいこの世界では、常に身の危険に追われていると言っている。ましてや「攻略組」など、皆闘志を剥き出しにした目をしている。だがこの少年は、彼らとも、中層であぐらをかいて平和ボケしているプレイヤーたちとも違う。

バルドルは少年の目を凝視した。その目に秘めている狂気を見てやりたい。

「お前、名前は？」

「セツナ」

少年は控えめな声で名乗った。バルドルに怯えている様子はない。普段からあまり会話をしない性分であることが推測できた。

「俺はこのビスマルク・ヘッドのリーダー、バルドルだ。セツナ、このギルドがなぜこんな家を買う程の金を得ることができたか、お前に分かるか？」

バルドルの質問にセツナはすぐに答えず、家の内装と、周りで見渡しているギルドのメンバー達をゆっくりと見渡した。メンバーの中にはセツナと目が合つて不機嫌に睨む者、彼の眼差しに怯えて目を逸らす者、興味なさげにアイテムのストレージを整理する者など反応は様々だった。一通り眺めるとセツナは答えた。

「他のプレイヤーから奪った」

それはまさに100点満点の回答だった。バルドルは笑みを浮かべる。

「そう、俺たちはオレンジギルドだ」

オレンジギルド。

S A Oの舞台であるアインクラッドで形成された社会で問題となっている、犯罪行為を行うプレイヤー。プレイヤーの頭上に表示されるカーソルがグリーンからオレンジに変わることから、オレンジプレイヤーと呼ばれている。バルドルたちは圏外で道行くプレイヤーたちを襲撃し、金品を奪ってきたのだ。

「俺たちは他の連中から金やアイテムを奪い、この家を買う程の富を築き上げてきたわけだ。脅し、傷を負わせ、抵抗する奴は殺した。俺たちはそうやって生き延びてきた。モンスターよりもプレイヤーの方が多くのブツを持つてる」

バルドルがビスマルク・ヘッドを結成するにあたって問題になったのは、資金の確保だった。多くのプレイヤーたちがその問題に直面し圏外に出てモンスターと戦うことになっていたのだが、ビスマルク・ヘッドの中に戦闘を得意とするメンバーはいなかった。

下層のモンスターを倒すのに数人がかりでないと話にならず、死活問題になってしまった。そこでリーダーであるバルドルが提案したのが、プレイヤーの襲撃だった。

圏外で人気の少ない場所を探し、そこを通りかかったプレイヤーを襲い金品を奪うのだ。この方法はうまくいった。現実でも地元では名の通った不良集団だったバルドルたちの形相に多くのプレイヤーが恐れをなし、自らのアイテムや金を差し出した。

中には腕に自身があるのかバルドルを返り討ちにしようと思いを挑んだプレイヤーもいたが、バルドルたちは数の暴力によって、半ばリンチに近い形で相手を殺した。

「軍」に勘付かれる前に場所を移し、ビスマルク・ヘッドは遊牧民のように各層を移動し「狩り」を繰り返してきた。そしてようやく、圏外の村で家を買うことができた。もうその頃になると、15層より下の層はもはやビスマルク・ヘッドの庭と言っても良かった。

まるでアル・カポネのようなギャングスターの道を歩んでいるようにだと、バルドルは揚々と日々を過ごすことができた。

だからバルドルにとって、この自分たちと同じ目をした少年は幸せを呼ぶ青い鳥のような気がする。見たところ腰のホルダーからぶら下がっている剣も見えない代物だ。そこらの店で売っているようなものではないだろう。モンスタードロップした武器か、それとも鍛冶職人のプレイヤーが鍛えた業物か。何にせよその剣が、セツナが腕の立つプレイヤーであることを証明している。

「歓迎しよう、セツナ」

バルドルは右手を差し出した。セツナもまた右手を差し出し、握手を交わした。

その日の夜、ビスマルク・ヘッドの拠点では盛大な宴が執り行われた。

メンバーたちは貧相な料理スキルで調理した肉をかじり、酒を飲んだ。

その食材や酒も全て、他のプレイヤーから奪ったものだった。

宴の主役であるセツナは、食べ物には手を着けずワインを飲んでいった。一応酒アイテムは飲めば酔酩感を覚えるのだが、それは成人以上のプレイヤーで、未成年のプレイヤーにその作用は適用されない。現実での飲酒を防ぐことが目的だろう。

顔色を変えないセツナに、すっかり酔っていたバルドルが聞いた。「なぜギルドに入ろうと思ったんだ？」

バルドルの質問にセツナが答えたのは、数瞬ほど間を置いてからだった。

「……居場所が欲しかったから」

その答えを聞き、バルドルは騒ぐ他のメンバーたちにも劣らない声量で笑った。

「ならここは、お前にとっては絶好の居場所だな」

「……………」

セツナは何も言わない。バルドルは続けた。

「SAOは自由な世界だ。ここじゃ力がものを言う。俺たちにとって、ゲームの世界はまさに楽園だ」

◆

マルソはいつもよりそわそわしていた。ビスマルク・ヘッドの中でも末端の彼は、いつも使い走りのような役回りを課せられる。

現実でもグループの新参者であったため、ゲームの世界では強くなって一目置かれようと意気込んだ時期もあったが、戦闘センスの無さからその評価は低いままだった。

そのため、いつもリーダーであるバルドルからの怒号を恐れ、しばしばその不安が現実になってしまう。先日もまた、狩りの現場を見られてしまいバルドルに殴られたのだ。

そのマルソの狩りを目撃し、マルソがギルドに連れてきた新人のセツナは、黙ってマルソの後を付いてくる。

マルソはセツナの教育係を任されていた。今日はセツナに、ギルドの活動である「狩り」を教えるために、圏外の森へと赴いた。

マルソはいつもよりそわそわしているが、それは恐怖ではなく期待だった。現実の頃からビスマルク・ヘッドにはマルソよりも後に入ってきたメンバーはいるが、誰も先輩であるマルソに敬意を見せない。マルソのいないところで彼等が自分を嘲笑っていることを彼は知っていた。それでも知らない振りをするしかなかったマルソに、ようやく先輩面できる後輩ができた、バルドルからセツナの教育係を任さ

れたときに思った。

セツナは他の後輩よりも大人しそうだ。マルソの言うことに文句は言いそうにない。これからこいつをこき使ってやろう。ミスを犯したら殴ってやろう。

「この辺りでいいか」

そう呟いたのは、狩場まで連れていくマルソではなくセツナだった。マルソは「え？」と背後で足を止めたセツナへ振り返る。

何を言っているんだ。ギルドが目を付けているプレイヤー達の通り道までにはまだ距離がある。こんな誰も来そうにない森のど真ん中でなぜ止まる必要があるのか。

「おい、狩場までまだあるんだ。早くしろ」

マルソが声に険を込めて命令するが、セツナは歩く気配がない。変わりに、コートに付いたフードを深々と被った。幼さを残した顔が口元のみを見せていた。

「おい……」

マルソは背筋に悪寒が走った。SAOでなく現実だったら、全身に汗が滴っていることだろう。

セツナは腰に提げた鞘から、銀色に光る剣を引き抜いた。

◆

「バルドル、急いだよがいい」

ゆっくりとした足取りで歩くバルドルにそう言ったのはビスマルク・ヘッドの2番手で、バルドルの側近のような立場の KouSuke だった。

2人は数分前に拠点の家を出て、森の中を歩いていた。

異変に気付いたのは KouSuke だった。メンバー達がしつかりと狩りをしているかマップで確認をしていた時、次々とメンバー達の反応が消えていったのだ。

最初に消えたのは、セツナと一緒にいたマルソだ。マルソが消えた後、近くにいたメンバーから反応が消えていった。消えたメンバーは、皆セツナと接触していた。

セツナがメンバー達を殺して回っていることがすぐに結論づけら

れ、バルドルとコウスケも殺しに来ることは容易に想像できた。

襲撃しに来るであろう家を出たのはいいが、コウスケには行く当てがなかった。カーソルがオレンジの2人は圏内に入れず、他に拠点になるような場所はない。

「もういい」

そう呟いたバルドルが、ゆっくりと動かしていた足を止めた。

「バルドルー」

コウスケが声を荒げた。叱責しているようにも聞こえたが、バルドルは気を悪くした様子はない。

「セツナをギルドから除名して居場所を特定できなくしても、奴は諦めないだろう」

バルドルは剣を抜いた。コウスケは肩を震わせ、冷笑を浮かべるバルドルを睨んだ。

「あんたの腕は知っている。だが、無事に済むかも分からない時に、俺は無謀な選択はしない」

コウスケはバルドルから視線を放し、背を向け歩き出した。

「ずっとあんたに着いていくつもりだったが、もうお手上げだ。俺はまだ死にたくない」

じゃあなど、コウスケが軽く手を振ろうとバルドルの方へ振り返った時だった。

「っー」

木々の影から飛び出した銀色の閃きが、コウスケの体を貫いた。HPバーの緑ゲージが一気に減り、0になる。一瞬の出来事にコウスケは言葉を漏らすことなく、体をガラスの破片のように散らしていった。

さつきまでコウスケを形作っていたポリゴンの欠片の中から、黒いコートを着たプレイヤーがゆっくりと歩いて出てきた。フードを深々と被り顔を覆ったそれは、森の影に紛れていたのだ。

「コウスケは腕も立つし、頭も切れる奴だった。だがせっかちな所があつてな、事を急ぎすぎて視野が狭くなる。いつかそれが仇になるときが来ると思っていた。そして、それがいま来た」

バルドルの言葉に、セツナは何も反応を示さない。彼は無言のまま剣を構え、バルドルに突っ込んできた。重みのある両手剣で受け止める。

「俺達に恨みでもあるのか？ それとも誰かに頼まれてか？」

ビスマルク・ヘッドはオレンジギルドだ。他者から奪い、時には殺して金とアイテムを手に入れてきた。だから憎まれても不思議はない。あの短時間でバルドル以外のメンバーを殺したということは、この少年はどこかのギルドが寄越した殺し屋か。

だがバルドルは、誰が自分たちを殺そうとするのかなど気にしていない。バルドルの興味は、自分を殺しに来たセツナ自身に向けられていた、

バルドルはセツナの剣を振り払った。反動で体がのけ反るが、セツナはそのまま重力に身を任せ、頭が地面に触れるまえに両手をつき、見事なフォームのバク転で体制を立て直した。それは戦いというより、躍動的なダンスにも見えた。

その激しい動きでフードがはだけ、セツナは顔をさらけ出した。

バルドルはセツナの目を見た。彼が初めてギルドに来た時から、その瞳の奥に秘めるものに興味があった。そしてバルドルは今、それを見た。

黒かった。とてつもなく深い底なし沼のような黒。初めから黒い絵の具で塗ったような黒ではない。何十色もの絵の具を乱暴に塗りつぶし、それらが混ざり合っただけでできた黒だった。

同類なんてものじゃない。この少年には、自分たちよりも桁外れの狂気が渦巻き、それが混ざり合っただけでこの黒い瞳を色づけているのだ。バルドルはセツナの目から視線を逸らすことができなかつた。剣を持つ手が震えていた。

「あんたは言ったな、この世界は自由だつて」

セツナの言葉が、突き刺さるように耳孔へ響いてくる。

「確かにこの世界は自由だ。どこへ行こうと、何をしよう」と

セツナが地面を蹴った。バルドルとの間合いを一気に詰めて、振り下ろした剣をバルドルの両手剣が受け止める。

互いの距離が近づくと、セツナは囁くように言った。

「だが自由は残酷でもある。自由に生きる権利は強い者しか持てない。弱い者は淘汰される」

「俺が弱いと言うのか？」

「強いとも思っていたのか」

バルドルは力任せに、セツナの剣を薙ぎ払った。

ふざけるな。

俺は今まで、他人から奪って生き延びてきた。

それは他の連中が弱かったからだ。

それは俺が強かったからだ。

それを否定されるのか。

こんな子供に。

バルドルは震える手に力を込めた。自分の中にある恐怖を押し殺すように。

セツナが剣を構える。お前を殺してやると主張するかのようなその姿に、バルドルの剣に込める力が一層強くなった。

バルドルは剣を高々と上げながら走り出し、セツナの脳天に剣を叩き付けた。

だが剣がセツナの脳天を両断することはなく、その剣先は地面を軽く抉った。剣を振り下ろした瞬間までそこにいたセツナが消えたのだ。

どこに行つたと周囲を見渡すバルドルは、自分の真上から濃い影が落ちていくことに気付き、上へと視線を向けた。

一瞬バルドルは、ゲームのグラフィックにバグが生じたと錯覚した。視界が暗くなり、何がどうなったのか分からず混乱する。

すぐさまそれが宙を舞うセツナの黒いコートであることに気付くが、その時にはすでに遅く、銀色の煌めきがバルドルに迫り、その驚愕も、恐怖も、怒りも、何もかもを消滅させた。

◆

地面に転がる色彩を失ったバルドルの頭を、セツナは踏みつけた。瞬間、それはポリゴンの欠片となり、傍で倒れている体と共に宙を霧

散していく。

セツナはシステムウインドウを開き、メッセージ欄をタップした。新規メッセージを作成し、文章を打ち込んでいく。

『ビスマルク・ヘッドの殲滅を完了。カルマ回復クエストの攻略へ移る』

指定した宛先へ送信し、森の出口を目指して歩き始める。歩き始めてそう時間も経たないうちに、返信が届いた。

『ご苦労だった。ゆっくり休んでほしいと言いたいところだが、至急別のオレンジギルドの殲滅に向かってほしい。対象ギルドの情報を同封しておいた』

セツナは文面に目を通すと、文章を打ち込んだ。

『了解した』

その短い一文を、ヒースクリフという送信元へと返信する。

セツナは再び歩き始めた。森を出ると、既に日は傾き、外周から見える空が茜色に染まっていた。

その光が眩しく、セツナはフードを被り、指定されたギルドのもとへと歩いて行った。

第2話 気持ちには言葉を

「おめえ助かったぜ。あのままじゃ全滅してたわ」

第50層の森林に、その男の明朗な声が響いていた。

クラインと名乗るその野武士然としたプレイヤーと彼の5人いるパーティメンバーは、1人を囲み感謝と賞賛の言葉を次々と投げかけてくる。彼らの中心にいるセツナが慚然とした表情のままでも、機嫌を損ねることなく止むことがない。

一仕事終えたセツナが帰路についていた道中、獣人タイプのモンスターを相手どっていた彼らを見つけた。苦戦しているようだったから、セツナはその戦闘に乱入した。人助けのつもりはない。ただセツナのレベルなら簡単に倒せると思ったからだ。

予想通り、セツナは一撃でモンスターを撃破した。モンスターとクラインの間に割って入り、モンスターの首を落とした。そうしたらこの有様だ。既にアインクラッドは53層まで解放されたが、この50層も解放されてから日は浅い。彼らのように前線で戦おうとするプレイヤーがレベル上げに精を出すのも珍しくはなかった。

そんな彼らにとって、数人がかりで苦戦したモンスターを単独撃破したセツナは目指すべきプレイヤーなのだろう。だからこうして賞賛の声をあげ、スキルや装備など色々とおやかりたいのだ。

別に感謝されたり賞賛されたりするのは嫌いじゃない。でもセツナはあまり自分のことを他人に話すことは極力避けたい。性格的な問題もあるが、仕事上の問題が大きい。

「なあ、良かったらフレンド登録してくんねーか。俺たち、おめえみてーにもっと強くなりてーんだよ」

クラインが指を動かしてウィンドウを開いた。でもセツナはその動作をしない。

「断る。俺は暇じゃない」

それだけ言ってセツナは他のパーティメンバーをすり抜けるように歩き出した。暇じゃないのは嘘じゃない。彼らに戦い方をレクチャーしている時間はない。

「おい！」

背後からクラインの声が聞こえた。セツナの態度に腹を立てたのか。そう思ったが、クラインがセツナに向けたものは怒りではなかった。

「ならせめて、おめえの名前だけでも教えてくれよ」

予想外の言葉に、セツナは振り返ってクラインの顔を見た。3Dオブリエクトで構成された表情に怒気や蔑視といった感情は読み取れない。どこか晴れやかだ。こんなお人好しも珍しい。

「……セツナ」

控えめに名乗ったが、クラインにはしつかり聞こえたようだ。

「セツナか……。可愛い名前じゃねーか。女だったら惚れてたかもな」

気持ち悪いぞ。と言葉に出してしまいそうだった。殺伐としたアインクラッドでよくそんな気楽なことを言えるものだ。

「じゃあなセツナ、邪魔して悪かった。生きていたらまた会おうぜ」

◆

セツナは森の中を歩き続けた。微妙ではあるが、背後から感じる足音を聞き取りながら。さつきクライン達と会う前からも、この足音は聞き取っていた。それにしても粗末な尾行だ。索敵スキルは極めているが、それを抜きにしても筒抜けだ。

セツナはウインドウを開き、ストレージから武器を選択して装備を切り替えた。腰に提げた細身の剣が消滅し、代わりに小ぶりの短剣が現れる。投剣スキルの技は習得しているが、わざわざ使うこともないだろう。セツナは短剣を引き、木々の間に投げた。瞬間、木々の暗闇の中から人影が飛び出した。影は自分に向かって飛んでくる短剣を自分の得物で弾き、そのままセツナへと向かってくる。

セツナが投げた短剣《スローター》は宙で弧を描き、地面に突き刺さった。どこかの町で買った安物で武器同士の衝突ではすぐに折れてしまいそうなものだが、知り合いの鍛冶屋が鍛えただけあって頑丈だ。あの鍛冶屋は良い仕事をしてくれた。

その影がモンスターでないことはすぐに分かった。索敵スキルで既に気づいてはいたが、モンスターが向かってくる短剣を弾くなんて

芸当はまずできないし、得物がソードスキルを放つ際のライトエフェクトを纏っていたからだ。

そのプレイヤーは最初の一撃でセツナを仕留めるつもりだったらしい。だがセツナはそのソードスキルの動きが読めていた。スキル発動時のプレイヤーはシステムアシストに従って決まった動きをするからすぐ分かるのだ。ましてや初歩的な突進技の《レイジスパイク》では。

セツナは突き出された刀身を避け、そのまますれ違うプレイヤーの背中に裏拳を打ち付けた。バランスを崩したプレイヤーがその勢いを止められないまま地面に転がる。セツナは素早くウィンドウを開き、装備中の《スローター》を捨てて、装備フィギュアの空白に愛用の剣を選択した。

地面に伏した相手はすぐに体勢を立て直そうとしたが、その顔がこちらに向いたその瞬間、セツナの剣先が相手の眼前で静止した。

相手は女だった。女はブラウンの瞳に憎しみを込めてセツナを睨みつけた。だがすぐに両手を挙げ、わかりやすい降参の意を示した。セツナも剣を下ろし、鞘に収める。

「何で殺さないの?」

「仲間がいるかもしれない。他に何人いる」

「あいにく私一人よ」

セツナは「そうか」とだけ言って、地面でカーソルを宙に浮かせている《スローター》を拾いストレージに収めた。森の中で呑気にウィンドウを開くその姿に、女は皮肉っぽい笑みを零した。

「信じるの? 本当に仲間がいるかも」

「全員あんと同じくらい強さなら、返り討ちにできる」

「へえ、ギルトひとつ潰しただけのことはあるわね」

セツナは女を見た。足元から頭まで。

「あなた、マディーンタスクの生き残りか」

女が「ええ」と肯定する。マディーンタスクは、さっきセツナが壊滅させたギルドだ。奇襲や恐喝といったセコイ手口でプレイヤーからアイテムと金を巻き上げるオレンジギルド。学生のアウトロー集

団のような連中だが、最近になってその被害が一般プレイヤーの間で問題視されるようになった。ギルドがとうとう殺人を犯したからだ。看過できなくなり、セツナはクライアントからギルド壊滅を指示された。そしてこの第50層の森林エリアを拠点にしているギルドに奇襲を仕掛け全滅させた。1人残らず殺すことで。

目の前の女はギルドの面々がいた場所にはいなかった。たまたま出払っていたのだろう。となるとこの女はギルドの壊滅を知ってから、ずっとセツナを探していたということか。カルマ回復クエストで長い時間同じエリアにいたから、そのせいで見つかったのかもしれない。

一応情報は仕入れていたが、どうやらギルドの人数全てを把握できていなかったらしい。鼻根にしている情報屋もそこまでは掴めていなかったようだ。

だが情報不足に憤りを感じることはない。セツナの仕事ではよくあることだ。暗殺対象が以前潰したギルドの生き残りなんてことは何度も経験している。

「報復でもするのか」

「違う、試したのよ。私を守れるほどの強さか」

「守る？ 何から守るといふのだ。」

口に出さなかったセツナの言葉を汲み取ったのか、女は続けて言う。

「マデインタスクからよ。あんたが殺したのはリーダーと取り巻きだけ。まだギルドは存在してる」

「なぜ自分のギルドから守ってほしい」

「もううんざりなのよ。最初は弱い者同士が生き残るためのギルドだった。奪うのにも必要最低限のアイテムだけ。でも、皆は変わっちゃった。奪うだけに飽き足らず痛めつけることを楽しむようになった。私はまっとうに生きたいのよ」

言葉を紡ぐ毎に、女の口調は激しくなっていた。見たところ成人間近といったところだが、まるで癩癩を起こした子供みたいだなとセツナは思った。

「オレンジギルドに変わっていく典型的な例だな」

全てのオレンジギルドが犯罪目的で結成されるわけではない。S A Oという生き残りをかけたゲームで、個人で競争するより徒党を組んだ方が生存率が高い。だが装備やアイテムを揃える金がないギルドが他のプレイヤーから強奪してオレンジ化する。多くの場合「軍」の取り締まりを受けることで大人しくなるが、厄介なのはある程度の実力を持った中層のオレンジギルドだ。組織としては巨大だが弱体化している「軍」は手を出すことができない。

そういつたギルドやプレイヤーを始末するのがセツナの仕事だ。

「あなたは私たちのギルドを潰すのが目的でしょ？ だったら私の話に乗るのは決してデメリットがあるわけじゃない」

「ああ、そうだな」

「私はあなたにギルドの拠点を教える。だからあなたは今度こそギルドを潰して。私が奴らに裏切り者として狙われないように。あいつらを一人残らず殺して」

随分と身勝手な女だな。

セツナは半ば呆れるが、悪い話ではないことは確かだ。このまま中途半端に仕事を終わらせることもできない。

「分かった」

「ほんとう？」

女は少しだけ頬を緩めたが、すぐに元の険しい顔つきに戻った。信じたわけじゃないとでも言っているかのようだ。だがそれはセツナも同じこと。

「あくまでマデインタータスクを潰すためだ。あんたを守ることが目的じゃない。だから報酬はいらない」

無報酬で引き受けたことに女は驚いたようだ。何か言おうとしたみたいだが「そ、そう…」としか言葉が出ていない。女は手を差し出した。意図は分かっているが、セツナはそれに応じない。

「握手よ、握手」

「俺たちにそんなものは必要ない。あんたもマデインタータスクのメンバーだ。場合によっては、あんたも殺すことになる。それを忘れない

でほしい」

セツナのその言葉で、女は互いの立場をようやく理解したようだ。手を引つ込め、また険のこもった目でセツナを睨みつける。

「でも一緒に行動するわけだから、名前くらいは教えて。私はレブロ」
「セツナ」

◆
第50層の主街区アルゲードは騒がしい街だった。これまで解放された層の主街区の中では一番広いらしいが、小さい屋台や建物がひしめき合つて開放感なんてまるでない。

レブロは旅行で東南アジアの市場に行つたことがある。アルゲードはそこによく似ていた。

怪しげな雑貨を売る露天商。

鼻をつくようなハーブや香水の匂い。

大声を張り上げて逆に何を言っているのか分からない店主。

一番静かな店を知っているとと言うセツナに着いて路地裏のレストランに入つたが、ここも十分騒がしい。2人が座つた席の隣では、大柄な筋肉ダルマのような男が「イツキ！ イツキ！」というコールに囲まれながら樽に入つた酒を一気に煽っている。男が酒を飲み干すと、店中に歓声が沸いた。

場違い。レブロは席についてから一言も発していない男を見て思った。男というより、少年と言つた方が適切かもしれない。

「一番静かな店ってここ？」

「ああ」

ぶつきらぼうに答えてセツナは茶を啜つた。

「さつきからお茶飲んでばかりね。食べないの？」

「腹は減っていない」

「あつそ」

レブロは固いパンを噛みながらセツナを観察した。表情や仕草をくまなく。その観察で分かつたことは、セツナは決して表情を変えないこと。笑いもしなければ怒りもしない。そして、ずっとお茶を飲んでいること。さつきから飲み干してはウェイターにおかわりを注文

している。いったいどんだけお茶が好きなんだ、この男は。

「まさか、話に聞いていたのがこんな若い男だったなんてね」

レブロの言葉にセツナは反応を示した。この男、とことん無表情だから何を感じているのか全く分からない。

「何の話だ」

「あんだ、私たちの界限じゃ有名人よ」

「犯罪者狩りをしている事か」

「そ。顔や名前までは分かっていたいなかったみたいだけど、オレンジギルドを誰かが潰し回っていることは噂になった。犯罪防止のNPCって噂もあつたけど」

セツナは「そうか」とだけ言ってまた茶を啜る。本当にこの男はどれだけお茶を飲むつもりなのか。もう6杯目だ。

「噂に尾ひれがついて、鎌を持ってたとか脚がなかったとか、そんな話も聞いたわ。ま、そんな長いコート着てたら脚なんて見えないだろうけど」

レブロの話にセツナは興味を示しているのか分からない。まったく表情を変えないのだ。見たところ年下っぽいから歳相応の反応を見てみたいと思つて「年上のお姉さん」を演出してみたのだが、この少年はそういった感性が枯れているんじゃないかと思う程無表情だ。話しているうちにレブロが疲れてしまった。

「あんだと話してもつまらないわね」

「俺もあんだの話はつまらない」

「な……」

この小僧、とことん生意気だ。考えてみたらずっとタメ口じゃないか。

「あーそう。じゃあ質問させて。あんだのセツナって名前、それって本当のキャラネーム？」

フレンド登録をしていないプレイヤーを凝視しても、頭上にはHPバーとカーソルしか現れない。レベルも名前もごまかすことができる。さっきのバンダナをつけた男のギルドにもセツナと名乗っている場面をレブロは見ていたが、全てが疑わしいこの男なら偽名を名

乗っていてもおかしくはない。

「ああ」

セツナは素っ気なく答える。その素っ気なさがかえって真偽をはぐらかしていた。さつきからずつと反応を注意深く見ているが、それは全て無駄だったように思える。

考えてみれば、この男はアインクラッドの裏社会で恐れられながらもずっと謎のベールに包まれていたのだ。顔を知られたからといって、そこから全容を暴き出せるとも思えない。

今のレブロに分かっていること。

犯罪者狩りを行っているプレイヤ―は「セツナ」と名乗っている。

セツナは外見からしてレブロより年下。

セツナは決して表情を崩さない。

セツナはとにかく強い。

セツナはお茶をよく飲む。

セツナは6杯目の茶を飲み干すと、指でウィンドウを開いた。

「情報屋がこの町に着いたらしい。行くぞ」

◆

「済まないナ。オレっちとしたことが情けナイ」

アルゲードの転移門広場に、セツナに先ほどメッセージを送った情報屋がいた。小柄でフードを深々と被ったその出で立ちは怪しげだが、アルゲードの街並みによく溶け込んでいる。フードから覗く頬のフェイスペイントはまるでネズミの髭のようだった。

「問題ない。それで、新しい情報は」

「ああ、仕入れてきた。マディーンタスクのメンバーのリストと拠点。リーダーはお前さんがやったから、現リーダーはギルド2番手のクライスって奴だろうナ」

情報屋はセツナにオブジェクト化した紙を手渡した。セツナは内容をさらりと確認し、ストレージに収める。

「わざわざ済まないな」

「いいってことヨ。渡したネタに不備があっちゃ、オレっちの名が泣くぜ」

2人のやり取りを見ていたレブロは情報屋にずっと視線を向けていた。本当にこんな子供みたいなのが情報屋なのか。とでも言いたげな様子だ。メンバーのことなどギルドに所属しているレブロに聞けばいいものだが、セツナもレブロを信用していない。鼻屑にしている情報屋なら確かだと思える。

「短期間でギルドメンバー全員の情報を集めたの？ 一体どうやって……」

「よせ」

レブロの言葉がセツナによって遮られた。

「迂闊に話すと金を取られる」

「本当は嬢ちゃんが聞いてる時点で、貰いたいんだけどナ。にやハハハ」

情報屋は「じゃあナ」とだけ言って、転移門の揺らめく空間の中へ消えていった。

セツナは情報屋から受け取った紙をオブジェクト化した。横にいるレブロにもその中身を見せる。

「間違いはないか」

紙に載っている名前とスナップ写真、拠点の場所を示す地図。それらに目を通すレブロにセツナは聞いた。

「うん、間違いない。あの情報屋はどうやってこれだけの情報集めたの?」

「さあな」

セツナはそれだけ言うのとレブロの手から紙を取り上げ、自分のストレージに収めてしまった。

「さあなって、あんた興味ないの？ あんたの情報も掴まれてるかも」
「掴んでも買い手がつかなければ問題ない」

「問題ないって……」

レブロはまだ何か言い足りないようで口元をせわしく動かしている。しかし言葉が出ないようで、セツナは次に出る言葉を待たずに転移門へと歩き出す。

「ちよつと……」

「行くぞ、ギルドの拠点は37層だ」

◆ 第37層は岩に囲まれたエリアだった。赤茶色の渓谷が広がる景色はアメリカのグランドキャニオンに似ている。もしかしたら制作時のモデルになっているのかもしれない。渓谷の間を縫うように小道が伸びていて、マッピングされていなければ迷宮区に引けを取らない。実際、解放されたばかりの頃は行方不明者が続出してそれなりの騒ぎになっていたらしい。エリア全域のマッピングが済んだ今でも、この層のフィールドに出るプレイヤーはそういない。道が入り組んでいて移動が面倒なのだ。

主街区を出たセツナとレブロは高い岩肌に囲まれた道を歩いた。情報屋から渡された地図によると、西の渓谷の奥にマディータスクが拠点を構えているらしい。

レブロから拠点まで使われているルートを開き、セツナはそれとは別の迂回する形のルートを選んだ。それがレブロには理解できなかったらしい。

「ねえ、どうして回り道するのよ」

「途中で出くわしたら困る」

「……どうせ殺すのに？」

「仲間が殺されたと知ったら連中は逃げ出す」

「あくまで隠密に殺すってわけね」

渓谷の道はいくら歩いても景色が変わることがない。見るもの全て岩だけ。それが通る者の不安を煽ることから人を寄せ付けないエリアなのだが、これくらいの方がオレンジギルドの隠れ蓑にはうってつけなのだろう。

地図上では、もうすぐマディータスクの拠点に近い。セツナはウィンドウでそれを確認するとフードを被った。

「確認するが、俺はこれからあんたの仲間を殺す。本当にいいのか」

「ええ、もうあいつらに仲間意識なんて持ってないし、あいつらとおさらばできるなら何でもいいわ」

「よくギルドから抜けようと思わなかったな。そんな風に思っている

のに」

レブロはセツナに向けていた視線を落とした。眉間に力が入り、しわが刻まれている。

「前にギルドから抜けようとした子がいたのよ。もうついていけないって。でもその子は殺された。麻痺毒で動けない所を皆の前で処刑だって言っただけで刺された。もう逃げられないんだって、私は絶望した」

「自分を苦しめていた連中が死ぬ様を見て、安心したいのか」

「その言い方、まるで私が酷い女みたい。でもそうね、私は安心したい。ずっとフィールドの固い地面で寝てたから、久しぶりに宿屋のベッドで寝たいかな。その後は……、てちよつと」

レブロが話している途中でセツナは足を進めた。心底どうでもいいと思った。この女のこれからなんて。レブロがこれから別の人生を送ることになっても、セツナには関係ない。セツナはマディインタスクを滅ぼした後も、別のオレンジギルドを滅ぼすだけだ。

2人は道が急なカーブを描いて曲がっている所で止まった。岩肌で先が見えない。地図によるとマディインタスクはこの道の先を拠点としている。セツナは岩に体を密着させ、その影から曲がり角の先を覗き込もうとした。

瞬間、セツナは砂が舞う音を聞き取った。それと同時に剣を抜き虚空へと剣先を突き出す。それと全く同じタイミングで、岩の影から人が現れた。虚空に向けて放たれたはずの剣先が、突然飛び出してきたプレイヤーの喉元に突き刺さり、首を貫通する。プレイヤーは「え？」と、自分の喉に刺さった銀色の剣を見て眩いていた。セツナが剣を横薙ぎに振るい、プレイヤーの頭は困惑した表情のまま体から離れ宙に飛んだ。

プレイヤーの頭と体がポリゴンの欠片を撒き散らす。セツナは光る欠片の中を走り抜けた。その先にはぎつと10数人の集団がいた。全員得物を構えている。中にはソードスキルの構えを取っている者までいた。

男がセツナに大剣を振り下ろしてきた。セツナはそれを受け止め、

交差する剣の先にある男の顔を見る。情報屋から受け取った写真の中にあった男だ。

男は筋力に自信があるようで、細身なセツナを押しってくる。だがセツナは逆に男を押し返した。「うおっ」と上ずった声を上げて男の体が後退する。更に腹に食らったセツナの蹴りでバランスを崩した。セツナはよろける男の顔面に剣を突き刺す。男の体がポリゴンの欠片になる頃、セツナは既に標的を変えていた。

セツナに向かつてくる攻撃の手は止むことがなく、ソードスキルの構えを取る暇がない。それでもセツナにとっては通常攻撃で十分だ。それにソードスキルを使ったら使用後の硬直時間が生じてしまう。多勢に無勢のこの状況では自殺行為に等しい。

ライトエフェクトを纏った剣がセツナに襲いかかる。セツナはそれを避けてがら空きになった敵の腹に剣を一閃する。敵の体が上下に分かれた。

斧を振り上げた敵の顎を蹴り上げる。よろけた敵の体に剣を振り下ろして頭から股まで刃を滑らせていく。敵の体が左右に裂けた。

敵がダガーを突き出してくる。セツナはダガーを持つ手を手首ごと切り落として絶叫する口にライトエフェクトを纏った拳を打ち付ける。敵の頭が体から離れて吹き飛んだ。

セツナは剣を交える敵の顔を見た。明るいブラウンの長髪と面長の顔をした男。ギルドメンバーのリストにあった現リーダーのクライスだ。

「野郎おおおおっ」

クライスは殺意に満ちた雄叫びをあげた。両手持ちの剣を何度も振り下ろしてくる。セツナは膝をクライスの腹に打ち付けた。咳き込むクライスの顔面に拳を打ち、そして再び腹を蹴り上げる。引き剥がされるように後ずさりしたクライスは剣を構えた。刀身がライトエフェクトを纏い、それを携えクライスは地面を蹴り走り出す。クライスが剣を突き出すと同時にセツナは跳躍した。クライスの剣が虚空を突き、その頭上にいるセツナのライトエフェクトを纏った剣がクライスの首へと滑り込んだ。

片手剣単発技《月弧刃》^{げつこじん}。攻撃対象が人型モンスター及びプレイヤーであれば、首を斬り落とし一撃で仕留めるソードスキル。セツナにとつて一番使い勝手の良いソードスキルだった。

クライスの頭と体が砕けるのを見て、恐怖の表情を浮かべたグリーンカーソルの男が逃げ出した。だが敏捷度の差ですぐに追いつき、セツナはその背中に剣を刺した。男の体は色彩を失い砕け散った。

攻撃の手が止んだことに気付いて、セツナは周囲を見渡す。もう誰もいなかった。さっきの喧騒が嘘のようだ。セツナは仕留めた人数とリストに載っていた人数を照らし合わせる。リストに載っていたマデインタスクのメンバーは全部で23人。50層の森で殺した5人と、ここで殺した14人を足すと22人。1人残っている。その残っている1人はすぐに現れた。セツナは背後を振り返る。視線の先には剣先を向けるレブロがいた。剣が震えている。

「初めから俺を殺すつもりだったのか」

セツナの問いにレブロは震える声で答える。

「気付いてたの？」

「信用していなかったただけだ」

レブロが本当にセツナに助けを求めていたとしても、セツナが彼女を信用することは絶対がない。セツナは自分の立場を理解している。オレンジギルドから常に正体を探られていることも。常に命を狙われていることも。

「でも、私がギルドから抜けたかったのは本当なの。それは信じて」

「……」

セツナは何も言わない。無言のまま、レブロの剣先を掴んだ。レブロの体が大きく震える。セツナは掴んだ剣を自分の胸に突き立てた。

「っ！ 何を——」

レブロの視線がセツナの胸から頭上に表示されているHPバーに映った。セツナの視線にも映る緑色のバーは1ミリ程度しか縮んでいない。レブロが攻撃したという形になるが、カーソルがオレンジのセツナを攻撃してもレブロはグリーンのままだ。

「お前に俺は殺せない」

レブロは咄嗟に剣を引いた。セツナの胸、剣を掴んだ指の関節にダメージを示す赤いエフェクトが貼りついている。

「グリーンは抹殺対象外だ」

セツナの言葉に、レブロは驚愕の表情を浮かべた。

「あなたを縛っていたギルドは消えた。町で宿でも取れ」

フリーズでもしたように数瞬硬直し、「え…」とだけ声を漏らす。

「でもあなた、さつき……」

「うっかり殺した」

「どうして……。あなたを殺そうとしたのに……」

レブロの手から剣が落ちた。糸が切れた人形のように膝をつく。そんなレブロにセツナは吐き捨てるように言った。声に何の感情も乗せることなく。

「今すぐ俺の前から消えろ。そして俺のことは忘れろ」

「……………」

レブロは何も答えない。その目に整理がつかない乱雑とした感情を宿しセツナを見つめている。

「10秒以内に消えなければ、この場で殺す」

レブロは膝をついたまま、ポーチから青い結晶アイテムを取り出した。

「転移、はじまりの街」

転移結晶が砕け散り、レブロの体が青い光に包まれていく。光と共に、レブロも消えた。

セツナ1人になった溪谷は静かだった。モンスターの気配もない。フードを脱ぐと、溪谷に吹く風がセツナの髪を揺らした。

セツナはメツセージウィンドウを開き、クライアントに向けての文字を打ち込んだ。

『マデインタスク、殲滅完了』

第3話 騎士には血盟を

起床アラームの音で、セツナは瞼を開けた。体を起こし、ベッドから降りて窓のカーテンを開け放つ。外周から広がる空は、灰色の厚い雲に覆われている。そんな天気の日が滅入るのか、窓から見える街の大通りはいつもより人通りが少ない。

セツナは視線を部屋へと戻す。ベッド以外の一切の家具が廃された部屋に窓からの光はあまり入ってこない。昨日引越して気ばかりのように殺風景だが、セツナはここに住んでもうすぐ半年になる。

視界の隅に未読メッセージを示すアイコンが表示されていることに気付き、セツナはメッセージウィンドウを開く。

『突然で済まないが、今日の午前9時に本部へ来てほしい』

手短に『了解』という2文字を返信する。現在の時刻は6時08分。ステータスウィンドウで装備を選択すると、体に衣服と剣の重みがかかってきた。

いつもの黒いロングコートではなく、形は同じだが正反対の白を基調としたコート。縫い目には赤いラインが走り、両襟に2つと背中に大きく1つ十字架の刺繍が施されている。一応ズボンと靴、剣を提げるホルダーも白にまとめた。本部へ入るときはこの格好でなければならない。この格好が通行証代わりなのだ。

正直目立って仕方ないが、これでもかなり地味な方だ。最初は甲冑と純白のマントといういかにも騎士然とした格好だったのだが、敏捷度を重視したセツナのビルドに合わないため今の形になっている。

予想通り、薄暗い路地裏から開けた大通りに出ると周囲のプレイヤーたちがざわつき始める。第14層モレノの町の転移門広場へ行くにはどうしてもこの大通りを通らなければならない。

飾り気のない田舎のような雰囲気の流れにセツナの格好はただでさえ目を引く。セツナの背中に描かれた十字架の意味を知らない者でもすれ違ったら振り返るだろう。

セツナは「仲間」がそうしているように、背筋を伸ばし堂々と石畳の道を歩く。背中のもと同じ十字架を掲げる血盟騎士団として。

◆ 転移門の湾曲したゲート空間から出てきたセツナを、グランザムの鋼鉄が包み込むような街並みが迎えた。日光が差し込まないせいで、突き刺さるように建っている無数の尖塔は黒光りすることなく街に影を落としている。それだけで重苦しい雰囲気を作ることには容易だが、鍛冶職人が多い街の賑わいはいつもと変わらない。

「鉄の都」というグランザムの呼び名は鉄で作られた建物だけに由来しているわけではない。鍛冶や彫刻の職人たちに最高の業物を鍛えてもらおうと、腕自慢のプレイヤーたちが押しかけてくる。そのプレイヤーの着込む鎧と溢れるほどに生産される武器。この街は建物も人も鉄にまみれている。そこから「鉄の都」と呼ばれているのだ。

街の中でも一際高い塔。赤地に白い十字架をあしらいい風に揺らめく旗を目指しセツナは歩き出す。ゆつくりと歩き、途中で店に寄つてしばらく物色していたが、それでも大して時間を食うことなく、血盟騎士団の本部に辿り着いた。

幅の広い階段を上り、開け放たれた大扉を潜ろうとした。

「待て」

扉の左右に立つ重装備の衛兵が、手に持っている槍でセツナを阻んだ。

「見ない顔だな」

目立つ団服を着ているから顔パスで済むと思っていたが、そう簡単なことではないらしい。いつも建物に出入りしている者なら顔を覚えるだろうが、セツナがここを訪れたのは3ヶ月ぶりだ。忘れていても仕方ない。それにもしかしたら前とは別の人間が門番を務めているのかもしれない。

「一応確認させてもらう。団服を勝手に作って団員を装う輩がいるのでな。名前は？」

「セツナ」

衛兵はウィンドウを開き、「セツナね…」と呟きながらギルドメンバーのリストをスクロールする。

「あった。引き留めて悪かったな」

衛兵が槍を引っ込め、右手を額に当てて敬礼する。セツナも敬礼を返した。

「ギルドの面子は全員覚えていると思ったが、お前と会うのは初めてな気がする。新人か？」

「ああ、そんなところだ」

本部の一階は吹き抜けのロビーになっている。上の階へ繋がる螺旋階段がまるで迷宮区の塔を彷彿とさせた。まるでこの塔そのものがアインクラッドのミニチュアみたいだ。

現時刻は8時を回ったばかり。セツナはロビーに置かれたソファに腰かけた。ストレージに溜め込んだアイテムを品定めする。整理を長いこと怠けていたせいか、ストレージにはかなりのアイテムが溜め込まれていた。どこで手に入れたのか、《リザードマンロードの脳》なんてものを41個も持っていた。今度50層にある怪しい店に売ってみるか。

「ねえ」

近くで女の声が聞こえた。こんな重苦しい場所に珍しいなと思った。

「ねえってばー！」

半ば苛立った声色と共に、その声の主はセツナの肩を叩いた。それでようやく、セツナは声が自分に向けられていたことに気付いた。反射的にウィンドウを閉じ、ソファの横で仁王立ちしているその女の顔に視線を合わせる。

栗色の髪をストレートに垂らしているその女、少女と言った方がいいだろう。髪と同じ色をした瞳はセツナを捉えていた。少女の装備はセツナの「仲間」であることを示す赤いラインが入った純白の戦闘服だ。

「ねえあなた、今日がギルドの定例会議の日だって知ってた？」

定例会議など今まで参加した覚えがない。そもそもセツナは単独で任務をこなし、任務の内容もメッセージで送られてくるため会議に出る必要がないのだ。

「ああ、知っていた」

本当は知らない。だがそう言えばこの女の苛立ちを助長するのは目に見えている。

「じゃあどうして会議に出ないの？ 今日59層の迷宮区を攻略する日よ」

周囲を見ると、同じ色彩の格好をしたプレイヤー達が一齐に螺旋階段を下りている。来たときロビーに誰もいなかったのは、全員会議に出席していたからか。

「別任務にあたっていた。会議を欠席することは団長に連絡してある」

「別任務？ どんな任務なの」

「クエスト調査だ」

「あなた1人で行ったの？ そんな強そうには見えないけど」

女はセツナの全身を見つめる。セツナの白く彩られた装備からセツナの黒い髪と瞳まで。

「ここはゲームの世界だ。判断するところは外見じゃない」

「まあ、そうだけど。うちのギルドは簡単に入れないし」

納得の意は述べているが、それでも女は疑念のこもった目でセツナの腰に提げた剣を注視する。セツナはその視線よりも、視界の隅にある時刻表示に意識を向けた。8時55分。丁度いいだろう。セツナはソファから立ち上がり螺旋階段へと歩き出す。

「あ、ちよつと」

不意に女がセツナの前に回り行く手を阻む。立って並ぶと、細身のため長身に見える女はセツナよりも背が低い。

「あなた初めて見るけど、もしかして新人？」

「ああ、そんなところだ」

さっきの門番と同じやり取りだ。思えば、3ヶ月前に来たときも何人かと同じやり取りをした覚えがある。本部に来る度にこんな不毛な会話をしなければならぬのか。

「どおりだね。副団長の私にため口使うからそうじゃないかなって思った」

実は副団長だった女の頬が緩みくすりと微笑する。普通ならセツ

ナの不遜な態度に怒りそうなところだが。

「失礼しました、副団長」

セツナは頭を下げ謝罪する。副団長は慌てた様子で「や、やめてよ」言った。

「ため口でいいわよ。副団長だからって仰々しくされるのって、あまり好きじゃないの」

何度も言っていることなのだろう。顔に照れ臭さを感じない。むしろ疲れているように見える。

「偉い立場は大変だな。それでは行かせてもらう。団長に任務の結果を報告しなければならぬ」

副団長を横切り、セツナは螺旋階段を上る。途中で「あ、名前は」という副団長の声が聞こえたが、セツナは聞こえない振りをした。

セツナはこの血盟騎士団では「空気」のような存在でいなければならぬ。ある日突然現れれば新人、何日も姿を見なければギルドを抜けたと片付けられるような、そんな存在に。だから副団長である彼女に覚えられるのは避けなければならぬ。彼女にはセツナのことよりもギルド運営に意識を向けてもらわなければならない。

しかしあの副団長、初対面のはずだがどこかで見ることがある気がする。

セツナの中で浮かんだ疑問は、会議室の扉を前にしたところで消えた。女としては美人に属する容姿だ。以前一目見かけた際に印象に残ったのだろう。そう結論付けた。

2回ノックすると、扉の奥から「入りたまえ」と返ってくる。セツナは金属製の両扉を開け、金属特有の鈍い光に迎えられるながら部屋に足を踏み入れた。

◆ 「突然呼び出して済まなかった、セツナ君」

セツナが会議室に入って開口一番、壁全面に張られたガラスを背に男は労いの言葉をかけてきた。部屋の中央に置かれた半円形の机には5脚の椅子が並んでいるが、中央以外は全て空席だ。恐らく、さつき副団長が言っていた迷宮区攻略のために出払っているのだろう。

中央の席に座る人物。あまり年齢を重ねているようには見えないが、オールバックに一房だけ額に垂らした灰色の髪と、面長な顔立ちがどこか貫禄を感じさせる。

この男が、『聖騎士』の呼び名を持つ血盟騎士団のギルドリーダー、ヒースクリフ。

ヒースクリフはあまりギルドの指揮を執らない。運営や作戦指揮は主に副団長が行っているらしい。それでもこの男がギルドを率いる立場にいるのは、その圧倒的な強さによるものだろう。

フロアボス攻略に殆ど参加しないセツナは、ヒースクリフがボスと戦う姿を1度しか見ていない。だがセツナはヒースクリフの強さを存分に知っている。その身をもって味わったのだ。単純にレベルの差だったのかもしれない。だが一度だけ剣を交えたあの時、セツナはヒースクリフに一撃も当てることができなかった。その圧倒的な強さにセツナは恐怖した。

ヒースクリフがああ強さを最前線で発揮していることは容易に想像できる。その強さとギルド運営に消極的な謎めいた姿勢が羨望の目を集め、彼をカリスマとしているのだ。

そのヒースクリフがギルド運営に消極的な理由、その謎をセツナは知っている。セツナ自身がその理由だからだ。

血盟騎士団のギルドリーダー、ヒースクリフ。そのもうひとつの顔が、セツナのクライアントだ。

血盟騎士団は、いや正確にはヒースクリフ個人がアインクラッド攻略とは別の活動を行っている。犯罪者狩りである。

犯罪者プレイヤーによる被害は下層や中層に限られたものではない。件数は圧倒的に少ないが上層でも被害がある。攻略組の方が圧倒的に金やレアアイテムを持っているのだ。獲物としてこれ以上魅力的なものはないだろう。

血盟騎士団でも何人かがPKの被害に遭っている。アインクラッドでトップギルドに位置するが、規模はそれほど大きくはない。貴重な戦力を失ってしまう不安要素を摘み取るために、ヒースクリフは犯罪者狩りを行うことを決めた。既に悪名高くなってしまった「軍」な

ら公然と犯罪者をPKできるが、大衆の憧れであり尊敬の的である血盟騎士団はそうはいかない。トツプギルドの座とカリスマ性を守り続けなければならない。

その役目を遂行するために白羽の矢が立ったプレイヤーがセツナだった。実力は攻略組に引けを取らない。それでいて攻略にはあまり熱心ではない。そして何より、犯罪者プレイヤーが相手とはいえPKに抵抗を持たない。ヒースクリフが敵とする犯罪者と紙一重なセツナは適任だった。

セツナはヒースクリフから提案されたギルドへの参加を了承した。ヒースクリフは犯罪者達の情報をセツナに提供してくれる。自力であちこちの層を彷徨って探すよりもずっと効率が良い。

誰にも知られずひっそりと犯罪者を狩るならフレンド登録で済みそうなどころだが、その点でヒースクリフはしたたかだった。

セツナの実力は攻略でも通用する。そう踏んだヒースクリフは犯罪者狩りの環境を提供する代わりに、非常時にはセツナも攻略に参加することを要求してきた。セツナはこの取引を受け入れた。最前線でレベル上げに勤しむことは決して損ではなかったからだ。実際ギルドに入ってから半年が経つが、攻略に駆り出されたのは2回だけだ。それに、団長であるヒースクリフと直接話す際はギルドの本部に来なければならぬ。入所時に「団長の友人です」と門番に話すと結構な騒ぎになることは目に見えている。だからセツナは団員という形でヒースクリフと協力関係を結ばなければいけない。

「構いません。団長」

セツナは社交辞令を述べる。普段ならこのようなことは言わないが、今は「従順な団員」を演じる必要があると判断した。部屋の中にヒースクリフとセツナ以外にもう1人いたからだ。

セツナは机の前に立つと、隣にいるもう1人のプレイヤーを見やる。ブラウンの髪をツインテールにまとめた少女が立っていた。一目でセツナよりも年下と分かるほど幼い。装備の色が目を引き赤であるため一瞬「仲間」と思ったが、装備に施された十字架の形がギルドのマークと違う。ギルドの十字架は剣をモチーフにしている。そ

の派手な装いよりも目を引くのは、少女の肩にとまっている水色の小さい竜だ。確か《フェザーリドラ》というモンスターだったか。

「彼女は」

セツナはヒースクリフを訪ねた。何となく、隣の少女が今回セツナの任務に関わる気がする。

「彼女の名はシリカ。中層では有名なビーストテイマーだよ」

そういえば聞いたことがある。フェザーリドラのテイムに成功した唯一のプレイヤーがいると。その話題性が高い理由は、テイムしたプレイヤーが幼い少女だったからだ。どうやらシリカがそのプレイヤーらしい。

「彼女は3週間ほど前からストーカー被害を受けていてね。先日59層の迷宮区にいたところをギルドの偵察隊が保護した。彼女は8層にいたそうだが、フィールドに仕掛けられた回廊で迷宮区に飛ばされたようだ」

「ポータルPKですね」

セツナが導き出した結論をヒースクリフが首肯する。転移系の結晶アイテムで任意の高レベルモンスターがいる場所へ転送し置き去りにする手口だ。以前潜入していたオレンジギルドでそんな手口を使っていた。

「我が血盟騎士団は、シリカ君をストーカーから保護する方針を取る。セツナ君には、彼女としばらくの間行動を共にしてほしい」

セツナはヒースクリフの目に視線を向ける。真鍮色の瞳からはどんな感情を抱いているのか読み取ることができない。しかしセツナはその意図を完全ではないが察した。

「了解しました」

この男がただ人情で動くとは思えない。だとすれば、シリカを保護する以外に何か思惑がある。護衛にセツナを指名したとなれば、セツナの仕事絡みだ。

ヒースクリフがシリカへ視線を移した。

「さて、シリカ君。済まないが外してほしい。彼と話したいことがあるのでね」

「は、はい……」

シリカはヒースクリフに、そしてセツナに会釈するとフェザーリド
ラと共に部屋を出ていった。部屋を出る際、「失礼しました」と微かに
震える彼女の声が聞こえた。

「それで、本題は。彼女の背後に何が潜んでいる」

「勘がいいな。やはり君を選んで良かったよ」

シリカがいなくなった途端、不遜になったセツナの態度に機嫌を損
ねることなく、ヒースクリフは余裕を崩さず続ける。

「彼女をストーカーしているのは、タイタンズハンドではないかと
思っている」

「タイタンズハンド……」

そのギルド名はセツナの記憶に新しい。3週間前、セツナが壊滅さ
せようとしたオレンジギルドだ。だがセツナが襲撃する前に、ギルド
は壊滅した。被害者から依頼を受けた別のプレイヤーが、リーダーの
ロザリアとその部下を牢獄に送ったらしい。そのプレイヤーはベ
ータテスト出身の攻略組とだけ聞いていた。

「残党がいるのか」

「その可能性がある」

つまり今回の任務は、シリカの護衛なんて生温いものではない。タ
イタンズハンド残党の調査及び壊滅である。

「彼女はそのためなのか。あんたも残酷だな」

「君に言われるとは、よほどということかな」

ヒースクリフが冷たい微笑を浮かべる。穏やかだが、その冷たさに
圧を感じる。

「分かっているとは思いますが、万が一彼女に君の正体を知られてしまっ
た場合……。彼女も殺さなければならぬ」

ヒースクリフは淡々と述べた。大衆から《聖剣士》と呼ばれ、いざ
戦闘に立てばその圧倒的な強さで勝利に導く英雄が。そのイメージ
を根底から覆すことをセツナに命令している。だがそれが現実にな
らないために、セツナはセツナ自身の秘密を守らなければならぬ。
そのためあの幼い少女を手にかけるべきではない。

セツナは自分の立場を理解している。だから彼は答える。「了解」

セツナが会議室から出ると、扉の前にいたシリカが駆け寄ってきた。

「あ、あの……」

言葉が詰まって続きが出てこない。顔が青ざめているから照れではないようだ。こんな重苦しい所にいれば、重圧に押しつぶされそうなほどにこの少女は儂げな雰囲気を持っている。

セツナが手を差し出すと、シリカはようやく俯いていた視線をセツナの顔に向けた。

「セツナだ。いつまでかは分からないが、しばらくの間よろしく頼む」シリカは目の前に差し出された手を小さな手で握った。シリカの顔に少しだけ血色が戻ったような気がした。

「はい、よろしくお願いします。セツナさん！」

◆
シリカはどうにも落ち着かなかった。

先月から身の回りで誰かの視線を感じてからずっとだ。街を歩いていても、誰かが見ている気がする。中層では名が知られているシリカをパーティやギルドへの勧誘、しまいには結婚を申し込まれたこともあるほどにシリカは常に周囲の視線を集めている。

でもここ最近で感じていた視線はそれとは違う。もっと暗いものを纏っているような、鋭い針で射抜かれるような視線をシリカはずっと感じてきた。元々他人に対する警戒心は強かったほうだが、最近はそのに拍車がかかり、誰とも目を合わせないようになった。圏内でも外に出るのが怖くなり、宿にこもっていた日もあった。心が休まるのはいつも一緒にいてくれるピナと遊んでいるときだけだ。

街にこもっていたシリカだったが、宿の客室で飛び回るピナを不憫に思い、たまには圏外で思い切り飛ばせてあげたいとフィールドに出た。それが仇になってしまった。

シリカが何気なく草原を歩いていると、光と共に暗い洞窟に飛ばされた。転移結晶を持っていないシリカはダンジョンを彷徨う羽目に

なり、モンスターとエンカウントしても何層か分からないため一度も戦うことなく逃げていた。そこに偶然、血盟騎士団の偵察隊が通りかかって、シリカはダンジョンを脱出することができたのだ。

あそこが最前線である59層の迷宮区だったと知ったときは震えが止まらず泣き出しそうになった。今のシリカでは、戦ったら絶対に死んでいただろう。ヒール能力を持つピナがいても。

結果的に血盟騎士団に保護してもらい、護衛までつけてもらったことに感謝はしている。しかし全てのことに疑心暗鬼になっているシリカは、この護衛についているセツナというプレイヤーすらも怪しく思っている。

せつかくの厚意なのだが、セツナはあまり強そうに見えない。

血盟騎士団の所属を表すロングコートの上に鎧の類は一切付けていない。腰に提げているのは細身の片手剣。しかも盾無し。

ゲームだから強さを決めるのは外見ではなくレベルだ。それにあの血盟騎士団に所属しているのだからハイレベルのプレイヤーに違いない。それは分かっているのに、どうにもこの人となると落ち着かない。

シリカは男性というものに恐怖を抱いている。どんなに優しそうな人でも、裏では何か企んでいるのではないかと悪く考えてしまう。今まで多くの男性プレイヤーに話しかけられてきたが、セツナはその中で一番怖い。特に目が。

目から感情が全く読み取れないのだ。NPCの方がよっぽど人間味がある。でも皮肉にも、そんな彼の目が人払いに役立っていた。街を歩けば声をかけられるシリカだが、この35層主街区に来てから一度も声をかけられていない。

理由は明らかにセツナだ。血盟騎士団の人間が一緒にいるから怖気づいてしまうのだろうか、それ以上に皆セツナの目を恐れているのだ。街に転移してすぐ、シリカに気付いた男性プレイヤーが近付いてきたのだが、セツナを見て「ひっ」と上ずった声をあげて逃げるように去ってしまった。

「あの…、セツナさん」

シリカは隣を歩くセツナを見上げた。黒い前髪がかかる黒い瞳でシリカを見下ろしてくる。

「気持ち嬉しいんですけど……、そんなに警戒しなくても大丈夫ですよ。圏内ですし……」

「俺は普通になっているつもりだが……」

セツナは眉をひそめる。でもやっぱりその目は何を感じているのか分からない。

ふと、シリカはいつも右肩に乗っているピナがいないことに気付いた。

「ピナ？」

シリカは周囲を見渡した。ピナが今までシリカから離れたことは一度もない。シリカはピナのペールブルーの綿毛を探した。

だがピナはすぐに見つかった。とても意外な所で。

すぐ近くでピナの鳴き声がしてそこを向いた。その光景を見てシリカは絶句し目を見開いた。何とピナがセツナの頬に顔を擦りよせているのだ。セツナが無然とした表情のままピナの首筋を指で撫でると、ピナは気持ちよさそうに鳴いた。

シリカはその場で数秒ほど固まり、ピナをセツナから引き離すことを忘れていた。

「ピナ！ 駄目だよ離れて！」

ピナはシリカの言う事を素直に聞き、定位置であるシリカの肩に乗った。でも残念そうに喉を鳴らしている。

「す、すみませんセツナさん……」

「気にしていない」

「でもどうして、ピナが人に懐くなんて……」

セツナは何かのアイテムをオブジェクト化し、シリカに見せた。赤紫色をした小さな果実だった。

「これは……」

「モランイチゴの実だ。フェザーリドラの好物らしい。持っていても仕方ないから食わせてみた」

そんなものがあつたのも驚きだが、何よりも驚いたのはピナが他人

に懐いたことだ。今までシリカ以外に顔を擦り付けるなんて行為をしたことがないというのに。高級食材で餌付けしようとした者がいたが、その時は目もくれなかった。

ピナを見ると、その目はジツとセツナを見つめている。セツナはまだモランイチゴの実をオブジェクト化しているのに、餌には興味を示していない。

悪い人じゃないのかもしれない。

そう思ったとき、シリカの中で何かが合致した。

このセツナと一緒にいると落ち着かない理由、それはこの剣士があの剣士にどことなく似ているからだった。

黒い髪も黒い瞳も。色は違えど体のシルエットを隠す服も。顔立ちは彼よりも鋭く彼よりも背が一回り高いけど、纏っている雰囲気はピナを生き返らせシリカを救ってくれたあの黒い剣士と同じだった。

シリカはセツナの目を見つめる。相変わらずその目に宿しているものが分からない。

この人にとってシリカを守ることは、ギルドの任務でそれ以上でもそれ以下でもないのかもしれない。

でも、信じてみようと思える。

この人は守ってくれる。あの人みたいに。

第4話 約束には指切りを

とても商売をしている身とは思えないほどに顔を歪めながら、店主は目の前の品を凝視している。

その髪が剃られた頭と顎に蓄えた髭、明らかに日本人ではない黒い肌に筋骨隆々の店主を眺めながら、セツナは横にいるシリカと共に鑑定結果を待っていた。

アルゲードの賑やかな、というより騒々しい街の一角に構えるこの店も、街の雰囲気にならず雑多という言葉が一番似合う。店内に飾られているのは武器や装備品が主だが、棚にはアイテムの他にモンスターをかたどったオブジェや剥製といった一風変わったものまで置かれている。以前客引きにと3メートルの熊型モンスターの剥製を置いたら、逆に客が怖がって赤字が続いたという話も聞いた。

「セツナ、《リザードマンロードの脳》なんて何に使うんだ……？」

店主が外見に違和ない野太い声で唸る。威圧しないよう声色に気を遣っているのは分かるが、それでも地響きのように低い声と外見のせいで凄みは増している。その証拠として、横にいるシリカがセツナの裾を掴んで離さない。それを見て店主はバツが悪そうに髪のない頭をポリポリと掻いた。

「俺が何でも買い取ると思ったか？　ウチは廃品回収じゃねえんだ」

「アイテムの説明を見ろ。トロトロとした食感と書いてある。食材として使えるのかもしれない」

「まあ、アメリカでも豚の脳は食うが……」

「俺が持て余すより、上手く使ってくれる奴に売ればいい」

店主はため息を吐きながらも、「しようがねえな」とトレードウィンドウに金額を入力した。

「ミルシエでレストランを開いた知り合いがいるから、そいつに売ってみるか。《リザードマンロードの脳》、41個で3000コルな」

「悪いな、エギル」

「にしても……」

エギルはセツナの裾を掴んだままのシリカを一瞥した。シリカは

その視線から逃れようとセツナの後ろに隠れてしまった。ピナも主人と同じ行動を取り、セツナの頭から2つの尾羽がはみ出している。「お前がああシリカと一緒にいるなんてなあ。連れがいるってだけでも驚きだつてのに」

「任務だ」

白亜のコートに身を包んだセツナをエギルが凝視する。この店にはよく足を運ぶが、この服で来るのは初めてだ。いつもの黒ずくめとは正反対の出で立ちに、来店時にエギルは目を丸くしていた。

「お前がKOBのメンバーだったとはなあ。驚くことが多すぎるぜ」
「忙しいな」

やはりこの格好で来るのは失敗だったと、セツナは密かに後悔した。シリカの護衛について4日。どこで何をするかはシリカに任せていたのだが、今朝シリカに「セツナさんの行きたい所に連れてってください」と言われた。フィールドに出るのはシリカの安全を考えるのと好ましくないため行動は圏内に絞られるのだが、これがセツナにとっては鬼門だった。

普段は任務かアイテム収集で1日の大半がフィールドに出ているセツナは、主街区の店や名所の情報に詳しくない。そういうものは中層プレイヤーであるシリカの方が豊富だろう。しかしこのSAOで1年以上過ごしてきたのだから、行きつけの場所の1つくらいはあるのが普通だ。だからセツナの「行きつけ」としてこの店に来たのだが、やはりエギルにセツナの所属を知られることは好ましくなかった。

血盟騎士団は少数精鋭だ。そこに所属しているというだけで話題の種になる。あの名高い血盟騎士団に所属していながら無名となると怪しまれるかもしれない。この前ギルド本部の門番が言っていた「団服を勝手に作って団員を装う輩」だと思われてほしいと、セツナは微かな期待を抱く。

「まあ、KOBのお前がウチの常連となれば、結構な宣伝になるかもな。《KOB御用達》ってよ」

「よしてくれ、目立つのは好きじゃない」

「そんな派手な服着てよく言うぜ」

エギルは笑いながらセツナの肩を乱暴に叩いた。真顔だと厳ついが、その笑顔にはどこか愛嬌がある。厳つさが消えているわけではないが。この男は何度か店に来るうちに、こんな軽口を言うようになった。セツナの方は初めて来た時と同じくぶっきらぼうで、笑顔を彼に見せたことはないが。深い付き合いではないが、この男は信頼できる。だからセツナを店の宣伝に刷り込むことはしないだろう。

「シリカ」

「は、はいっ」

エギルに呼ばれたシリカが上ずった声で返事をした。セツナの背中から顔だけを出して、エギルを覗き込む。

「セツナを頼むぜ。こいつは見ての通り無愛想だからな、お前さんが愛嬌つてやつを教えてやってくれ」

シリカはエギルからセツナの顔へと視線を移した。その鋭く吊り上がった目と真一文字に結んだ口を見て、どこがツボにはまったのか噴き出した。必死に笑いを呑み込もうとしているが、堪えきれずに口元をおさえながら震えている。

「余計なお世話だ」

セツナはそれだけ言って店を出た。シリカはエギルに頭を下げて、ピナと一緒にセツナを追った。外に出る際、エギルの「また頼むぜ」という野太い声が聞こえた。

「ごめんなさいセツナさん……」

アルゲードの人混みの中で、シリカは控えめな声でセツナに謝罪した。エギルの店で笑ったことの罪悪感が今になって湧き出たようだ。「気にしていない」

このやり取りも何度目だろう。一緒に行動して4日間、シリカは会話の中で笑い、そしてセツナの無表情な顔を見て謝罪する。それにセツナが「気にしていない」と返す。シリカが気を遣う必要もないし、セツナは不快に感じたこともない。だがシリカが不安げな顔を見ると、嫌でも周囲の視線を集めてしまう。中層の人気プレイヤーと血盟騎士団の団服を着たセツナはただでさえ目立つというのに、これでは誰がシリカのストーカーなのか分からない。セツナは一刻も早くス

トーカーを見つけたかった。

「セツナさん、これからどこに行きますか？」

シリカが元の無邪気な顔でセツナに訪ねた。シリカの表情は変わりやすい。笑ったと思えば困った顔をして、困った顔をしたと思えばまた笑う。

「シリカは行きたい所はないか」

やんわりとセツナはシリカに行き先の選択を転嫁する。あの店以外にセツナが他人に案内できる場所といえば、グランザムの鍛冶屋くらいしかない。ましてやセツナのマイルームに招くことなどできないし、提案してもシリカは警戒するだろう。

シリカは視線を落とし「うーん」と唸った後、顔を上げた。

「そういうえば、さつきエギルさんがミーシエにレストランを開いた人がいるって言ってましたよね」

「ああ」

「じゃあ、そこでご飯でも食べませんか？ あたし、行ったことないですけどそのお店知ってるんです」

エギルの知り合いの店というだけで怪しい響きだが、横にいる少女はそこで提供される料理にそんな不安を持たないようだ。店に行くまでの間に店主が《リザードマンロードの脳》をエギルから仕入れないことを願いながら、セツナはその提案を呑むことにする。

「ああ、そうしよう」

こんなことになるなら、60個も持っている《サンドビートルの羽》を売れば良かった。

そんな後悔を表情に出さないまま、セツナはシリカと一緒に転移門を目指した。

◆

エギルの知り合いが経営しているというレストランは、第35層主街区の転移門広場からそう離れていない通りに店を構えていた。

小さいから目立ちにくい店と聞いていたのだが、街をよく知っているシリカはすぐに見つけることができた。

「前にプレイヤーがレストランを開いたって噂を聞いて、ずっと来て

みたかったんです」

シリカはセツナに笑顔を向けてそう言った。街に着いてから揚々とした気持ちを抑えきれなくなっていた。ミーシエはシリカが気に入っていた街だし、それに何より彼と一緒に来た街だからだ。いつもなら《風見鶏亭》だが、たまには冒険してみたい。

《トラットリア・オット》という看板を掲げる店に2人が入ると、店主らしき長身痩躯の男性が「いらっしやいませ」と笑顔で出迎えてくれた。時刻は昼食時で、こぢんまりとした店内の席は殆どが埋まっている。店主はテーブル席に2人を案内してくれた。

「あたし、プレイヤーレストランの料理って初めてですよ」
「俺もだ」

シリカはワクワクしながら店主から手渡されたメニューを開いた。NPCレストランだとファーストフードみたいにかウンターで注文するから、こうして席でじっくりとメニューを見るのは現実に戻ったみたいで安心する。

メニューも豊富だった。何を食べようか迷ってしまう。でもこの迷う時間も楽しい。ふとセツナをメニューの陰から見ると、彼はもう決めたのか、コップの水を飲みながら窓から見える街並みを眺めている。あまり待たせてはいけないと思い、シリカはメニューの選択を急いだ。結局、シリカが決めるのにあと10分近く要した。

店主に注文してから、シリカはじつと外を眺めるセツナを見ていた。賑やかな店内で、2人の間に行き交うのは沈黙だ。セツナは口数が少ない。この4日間で会話は全てシリカの方から切り出してきた。セツナはシリカに何かを要求することもなく、シリカのやることに文句ひとつ言わずに付き合ってくれている。年はそう離れていないようだが、年上には違いないセツナを振り回す度にシリカは謝罪した。表情を変えずシリカに付き合ってくれるセツナを不憫に思ったからだ。本来ならギルドで攻略に励んでいるところを、シリカと一緒にいることで不毛な時間を過ごさせているような気がした。

「どうした」

「えっ!?!」

突然セツナから向けられた言葉に、シリカはビクリと肩を震わせてしまった。それがとても恥ずかしくなって、顔が熱くなっているのを感じた。多分赤く染まっていることだろう。

「俺の顔は珍しいか」

「いえそうじゃなくて、何だか似てるなって……」

そこまで言ったところで、シリカはしまったと口を半開きにしたまま止まった。慌てていたとはいえ、余計なことを言ってしまった。

「似てる」

しかもセツナは興味を持ってしまったようだ。セツナは声に抑揚がなく興味があるのか分らないが、一瞬眉がピクリと動いたのをシリカは見逃さなかった。シリカはひと呼吸おいて、話すことにした。もう逃れることはできないと腹を括った。

「あたし、3週間前にピナを死なせちゃったことがあるんです。この層にある迷いの森で。そこで黒ずくめの剣士に助けてもらって、ピナを生き返らせるためのアイテムと一緒に取りに行ってくれたんです。キリトさんというんですけど、その人とセツナさんが似ているなっと思っただけです」

ピナはテーブルの上で、セツナが分けてくれた《モランイチゴの実》を食べている。あの出来事はシリカの慢心が招いたことだ。もしピナを生き返らせることができなかつたら、もしあの剣士に出会わなかつたらと考えるだけで涙が出そうになる。それだけあの剣士のことはシリカにとって大きな存在だった。

思えば、シリカがああ視線を感じるようになったのはピナを生き返らせてからそう日が経っていない頃だった気がする。前線に戻ったキリトに相談したかったが、攻略組である彼に「しばらく一緒にいてください」なんて言えない。そんなことを言うのはとても勇気が必要だし、シリカがキリトと一緒に前線に出るとしても足手まといになることは目に見えている。

「セツナさん、もしかして妹さんとかいますか？」

シリカの質問にセツナは眉をひそめた。表情を崩さないセツナにしては珍しい反応だった。当然かもしれない。この手のゲームで現

実のことを聞くのはタブーらしい。シリカはMMOをプレイするのはSAOが初めてだが、1年以上ゲームの世界で暮らしてきたのだからそれくらい分かる。それでもセツナは答えてくれた。何となくだが、シリカは答えてくれるという確信めいたものがあつた。彼も答えてくれたから。

「いや、姉が1人だけだ」

予想とは違う答えだった。もしかしたらと思つたのだが、そんな偶然の一致は起こらないようだ。でもシリカは嬉しかった。目の前の無表情な剣士のことを少しだけ知ることができた。

「なぜそんなことを聞く」

「あ、そうですね。キリトさんがあたしを助けてくれたとき、なんでそこまでしてくれるんですかかって聞いたら『妹に似てるから』って答えたんです。それ聞いたら何だかおかしくて、あたし笑っちゃったんです」

話しているうちに、あの時の照れ臭そうな剣士の顔を思い出してまた笑ってしまう。せつかくの厚意に申し訳ないという気持ちはあるのだが。

「だからセツナさんにもキリトさんと同じで妹さんがいて、それであたしに良くしてくれるのになつて」

「俺は任務でお前と一緒にいる。それだけだ」

セツナは無表情に言い放つ。その言葉で、シリカはセツナと一緒にいる理由を思い出した。自然と笑みが消えてしまう。

シリカがどこで何をしようと文句を言わずに着いてきてくれるのは、団長からそう命令されたからだ。セツナはシリカに何の感情も持っていないのかもしれない。本当は疎ましく思っているのかもしれない。

でも、シリカはセツナの善意を信じずにはいられない。任務とはいえ、セツナがシリカの傍をずっと離れずに守ってくれていたのは事実だ。

「そうですね、セツナさんにとってはお仕事ですよ。でも、セツナさんも良い人です。それはキリトさんと同じように」

「俺が……、良い人」

「はい！ピナもそれを知ってるから、セツナさんに懐いてるんです」
シリカは真っ直ぐにセツナと目を合わせた。その瞳の奥で何を感じているのかは分からないが、その黒い瞳はやはりどこか彼と似ている。セツナはふつとため息をついて目線を逸らした。

「どうだろうな。その時近くを通りかかったのがそのキリトではなく俺だったとしても、同じことをしたと思うか」

「はい、思いますー！」

シリカは力強く言った。セツナはどう反論すべきかコップを見つめて思索しているようだが、たとえセツナ自身が否定してもシリカが前言を撤回することはない。

セツナが反論する前に、2人のテーブルに料理が運ばれてきた。シリカの前には《コラル牛チーズのラザニア》、セツナの前には《ポロネーゼ》が並べられた。味は申し分なかった。味以上にプレイヤーが作ったという温かみが、噛む度にシリカの体に染み渡っていく気がした。

◆ 『情報なし。護衛と調査を継続する』

ヒースクリフへのメッセージを送信し、セツナは客室の椅子に腰かけた。ウィンドウを出して武装解除し、寝巻のTシャツ姿になる。

《トラットリア・オット》で昼食を済ませた後、シリカの提案で51層のフィールドに出て経験値稼ぎに励んだ。シリカのレベルでは安全圏とはいえなかったが、いざというときはセツナがいるので彼女の冒険を了承した。夕方までにシリカのレベルが3上がったところで切り上げ、主街区で夕食を済ませ宿を取った。

アイテムストレージから《クリスタル氷山の雪解け水》をオブジェクト化し、瓶の中身を一気に飲み干す。HPを少し回復させるアイテムだが、宿で休めば全回復する。それでもセツナはこの無意味な行いをせずにはいられなかった。セツナはテーブルに置かれた瓶を見つめた。月明りに照らされた瓶の水がクリスタルのような光を放っている。

《トラットリア・オット》でのシリカとの会話を思い出す。3週間前、シリカはピナを蘇生させるために47層へ行った。同行していたのが話に出てきたキリトで、恐らくタイタンズハンドを牢獄に送ったのもキリトだろう。情報屋が、追加料金が発生すると言って教えなかったベータテスト出身の攻略組とは、きっと彼のことなのだと言合致する。

ピナを蘇生させたのが3週間前。シリカへのストーリーカーが始まったのも3週間前。あまりにも短絡的な推理だとは思いますが、シリカのストーリーカーはタイタンズハンドの残党であると考えるのが妥当だろう。こんな推理をしたところで無意味かもしれない。

セツナの仕事はオレンジプレイヤーを殺すことだ。シリカを殺そうとした者がいて、それを殺すためにセツナは彼女の護衛を名目に行っている。

目的をはき違えるな。目的はシリカのストーリーカーを殺すこと。彼女を守ることにじゃない。セツナの秘密を知られたら、彼女も殺さなければいけないことを忘れるな。

だから、このままシリカと一緒にいるわけにはいかない。こうしている間にも、ヒースクリフはセツナに回すべき案件を積み重ねているのかもしれない。そろそろ仕事を片付けなければ。

セツナは自分が抱える焦りを自覚しながら、2本目の水を飲み干した。3本目に手を出そうとした時にドアをノックする音が聞こえ、セツナはウィンドウを閉じる。代わりに壁を叩いてポップアップメニューを出現させて部屋の灯りを点けた。

「あの、セツナさん……」

シリカの声が聞こえる。セツナは椅子から立ち上がり、ドアへと歩き出した。

◆
?

「あの、セツナさん……」

シリカはドアの前で返答を待ったが、何も聞こえない。時刻は23時だ。もう寝てしまったのかもしれない。やっぱり迷惑だ。そう思

い自分の部屋へ戻ろうとした時、ドアが開いた。少しだけ開いたドアの奥で、セツナがシリカを見下ろしている。

「どうした」

まさか出て来るとは思わなかったので、シリカは硬直してしまう。来た理由なんて考えてもなく、短時間で思いつくこともない。だからシリカは正直にいう事にした。

「あの、少しお話しませんか……？」

ようやく声を絞り出したというのに、虫の息のようなかすり声になつてしまった。とても恥ずかしくなつて逃げたくなつた。だがセツナはそんなこと気にしていないようだ。

「なら下に行くか」

「いえ、あたしすぐ戻りますからここで……」

シリカはまた、《トラットリア・オット》の時と同じように口を止めた。また余計なことを言つてしまった。しかもセツナは無言のまま、少しだけ開いたドアを更に開けてくれた。シリカはおずおずと中へ入りながら、恥ずかしさで火が点きそうになつた。心細いからお話したいなんて、まるで子供だ。

部屋で過ごすセツナは彼を印象付けるロングコートを脱ぎ、半袖の黒いTシャツ姿だった。昼間の服装が肌の露出を抑えていたからか、それとも着痩せするタイプなのか、部屋着のセツナは昼間の彼とは随分と印象が違った。全体で見れば細いが、ぜい肉がない腕はしなやかな曲線を描いており、体にびったりと貼りつくシャツには6つに割れた腹筋が浮き出ている。少年らしさを残した顔には不釣り合いな体をしていた。

アバターであるこの世界の肉体は暴飲暴食しても太らないし、いくら過酷なトレーニングを積んでも筋肉が付くことはない。おそらく、現実では何かのスポーツに熱を上げていたのかもしれない。だが戦いが日常茶飯事の世界に放り込まれたシリカには、彼の肉体が戦いのために作り上げられたもののように感じた。

セツナはシリカを椅子に案内したが、シリカはベッドに座ることにした。ピナがシリカの頭に乗っかりながらうとうととしていたから、

ベッドで寝かせてあげたいと思ったからだ。ピナはベッドの上で丸まっつてすやすやと寝息を立てている。可愛いなと思いつながら、シリカはピナのふわふわとした背中を撫でた。

「何か飲むか」

セツナはそう言いながら、マグカップにポットとランタンをオブジェクト化させた。ポットに水を注ぎ、お茶のパックを入れるとランタンをクリックして火を灯す。

「物持ちがいいんですね」

「ダンジョンじゃ必需品だからな」

使っている器具は簡素で飾り気のないものだが、手慣れた様子を見るとやっぱり攻略組なんだと、シリカは見入ってしまう。シリカはこんな野営用の道具なんて持っていない。フィールドに出てもあまり探索せず、お腹が空いたらすぐ街に戻ってしまう。でもこの人は、ずっと迷宮にこもってモンスターと戦っているんだ。モンスターだけじゃない。アイテムやコルを狙うオレンジプレイヤーの恐怖とも戦っている。全てはゲームをクリアするために。

「セツナさん達が前線で戦っている時に、あたしはずっと中層で遊んでいて、申し訳ないです」

「そんなことを気にする必要はない。攻略組は好きで攻略に励んでいるだけだ」

「でも、あたしは何もできません。ずっと、守られてばかりで……」
「下手に前線で戦って死なれては困る。中層で大人しくしてもらった方がありがたい」

セツナは無表情のまま、マグカップに沸騰したポットの中身を注いだ。その表情の冷たさが、言葉の素っ気なさど相まって更に温度を下げている。

「味は期待しないでくれ」

差し出されたマグカップをシリカは受け取る。そういえば、セツナから何かを要求されたのは初めてだ。何気ないことだけど、シリカは嬉しかった。シリカは湯気を立たせるカップを啜った。口の中に紅茶の苦みが広がる。《トラットリア・オット》で食後に飲んだ紅茶と比

べたら粗末だけど、その温かさはシリカの冷え切った胸のつかえを溶かしていった。同時に、それこそ自分がこの世界に来て失ってしまったものを思い出させた。

シリカはベッドから立ち上がり、カップをテーブルに置いた。セツナは何事かとシリカを見やる。シリカはセツナの服を掴み、その胸に顔を埋めた。ポリゴンで構成されたその体は温かい。涙が溢れた。

「セツナさん……。あたし、怖いです……。いつまでこの世界に……。いなきやいけないうつて……。パパに会いたい……。ママに会いたいよ……。」

ピナと出会えたことで、シリカの心に空いた穴は埋まったと思っていた。それは事実でもある。ピナがいたから、シリカは今日まで生き残ることができた。でもやっぱり、現実への恋しさは消えない。生き残ることだけを忘れて忘れようとしても、それは大きな波のようにシリカの心に押し寄せてくる。

家に帰りたい。

両親に会いたい。

学校に行きたい。

友達に会いたい。

シリカの頭にも温もりが訪れた。それはセツナの手だった。セツナは右手をシリカの頭に添えて、優しく抱きとめてくれた。

「ゲームがいつクリアされるかは分からない。だから、お前の望みがいつ叶うのかも分からない」

とても冷たい言葉だと思う。でも、セツナの言っていることは事実だ。セツナは事実しか言わない。無責任に慰めをかけるよりも、事実だけを述べるのが彼の優しさなんだ。

「でも今は安心している。お前を守ることが俺の任務だ。何があっても必ず守る。それだけは約束する」

あまりにも素っ気ない言葉だ。でも彼の確かな優しさを感じ取ったシリカは、セツナの胸の中で涙を流し続けていた。

？



51層の街を歩きながら、シリカはチラリと横を歩くセツナを見る。セツナがその視線に気付きこつちを向くと、シリカは素早く前へと視線を戻す。さつき宿を出てからずっとこの調子だ。朝食を食べている間も、シリカはただ食事に集中して目の前に座るセツナを見ないようにしていた。

原因は分かっている。昨晚シリカは散々泣いた後、自分の部屋に戻って眠りに落ちた。疲労感が一気に訪れて熟睡し、朝起きてようやく冷静になることができた。

男の人に抱きついて、しかも泣いちやった。

もう完全に子供だ。しかもセツナの方はいつもの様子で、シリカに対する素っ気ない態度は変わらない。気にしているのが自分だけみたいで尚更恥ずかしい。

「シリカ」

「え？ ギャッ」

何かと俯いた視線を上げたら、前を歩いていたプレイヤーにぶつかってしまった。しかも顔を向こうが身に着けていた鎧に。シリカは鼻をおさえながら「ごめんなさい」と謝罪した。

「ちゃんと前見て歩け」

「はい……」

年齢差は兄妹といったところだが、まるで親子みたいなやりとりだ。恥ずかしい。

冷静ではなかったにしても、あんなことをするなんてシリカ自身も思わなかった。いくら彼に似ているからって、我ながら何て大胆な行動に出ってしまったのだろう。泣き虫だと思われてしまったのだろうか。誰でも泣きつくような子だと思われたくない。これからどんな顔をすればいいのだろう。悶々とした羞恥に潰されそうになりながら、シリカは半歩前を歩くセツナの背中を追いかけた。

2人は一言も会話を交わさなのまま、街の転移門広場から目的地へと転移した。目的地である第39層の街を出て、東の森の中へと入った。

「この先か」

「はい」

昨日夕食を食べながら話し合ったサブダンジョン攻略に向けて、2人は森の中を突き進んだ。この森を抜けた先に無人の古城があって、そこでレアアイテム取得のクエストが発生するらしい。提案したのは珍しいことにセツナだった。シリカは賛同した。それ以外にセツナへの恩返しがいつかなかった。こんなことを言えば、「任務だから気にするな」と返されそうだ。

道中で何度かモンスターと出くわしたが、2人ともノーダメージで切り抜けることができた。経験値がシリカに多く振り分けられるようにと、セツナはアシストに徹していた。目的がクエスト攻略で良かったと、シリカは安堵した。モンスターと戦う間は、緊張感が高ぶって恥ずかしさが消える。

「結構進みましたね」

「ああ、城はもうすぐだ」

倒したモンスターのドロップアイテムと経験値を確認し、2人が歩き出した時だった。

「コリドー・オープン！」

その高々とした声と共に、目の前の空間が青白い光を放って渦を巻き始めた。同時にセツナがシリカの背後に回り、どこから現れたのか見知らぬメイス使いの男が放ったソードスキルを自分の剣で受け止めた。しかしその衝撃を受け止めきれず、2人もろとも光の渦へと飲み込まれていった。

一瞬の光の後、シリカは固い地面に転んだ。ピナが顔を近づけて泣き声をあげる。そこはとても暗かった。壁に松明が灯っているが、それは周りを申し分程度に照らすだけですぐに闇の中に溶けてしまう。2つの松明の間をうっすらと両扉がそびえ立っているのが見えた。人間の背など優に越している。

「迷宮…、回廊結晶か」

既に立ち上がっているセツナがそう呟いた。

「迷宮…、どうして？」

「回廊結晶の出口にこの迷宮が設定された」

シリカは立ち上がり周囲を見渡した。2人を取り囲むように、ざつと6人が武器を構えていた。全員カーソルがオレンジだ。更に2人が出てきたであろう光の渦から、もう1人が出て来る。その1人が出てきたところで、光の回廊が消えた。

「つたく、貴重な回廊結晶を2個も使う羽目になっちまった。K o Bの連中が通りかかるなんてタイミング悪すぎだぜ」

回廊から出てきたグリーンカーソルの男が頭をぼりぼりと搔きながら言った。斧を構えたオレンジの1人が笑いながら言う。

「さあて、どうやって殺すよ。ボスの間に引きずり込んで死ぬところ見るか？」

「バーカ、ここで殺すに決まってるだろ。このチビをなぶり殺してやんだよ」

シリカには何が起きているのか理解できなかつた。とにかく絶体絶命としか分からない。

「シリカのストーカーか」

セツナが賊にそう聞くと、グリーン系の男が手に持っているメイスの柄を地面に叩きつけた。その顔は怒りに歪んでいる。シリカはその目を知っている。ずっとシリカが怯えていた射抜くような視線。それはこのメイス使いだったのだと。

「ああそうさ。そいつのお陰で俺達のリーダーは牢獄に送られたんだ。そこのガキが連れ込んだたビーターによ」

グリーン系の男がメイスでシリカを指した。そしてシリカはようやく彼らは何なのかを理解することができた。あの真っ赤な髪と唇の女性が率いていたオレンジギルド。

「タイタンズハンド……」

その答えをセツナが代弁した。

「でもどうして、キリトさんが全員牢獄に送ったはずじゃ……」
「完全に潰れたわけじゃないということだ」

2人の声をかき消すように、グリーン系の男がメイスの柄を床に叩きつけた。濁いた音が通路に響き渡る。

「こんなことのために最前線の迷宮をマッピングしたんだ。きっちり

礼はしてもらうぜ。まずはガキをなぶり殺しにする。んでKOB！
てめーはボスの間で1人ボスと戦って無様に死んでもらう」

賊は皆自分の得物を構え、一斉に2人めがけて走り出した。シリカは腰のダガーに手をかける。だがその手はセツナに掴まれた。その不可解な行動に「え？」とシリカが呆気に取られている内に、セツナは右手でシリカを、左手でピナを抱えると床を蹴って駆け出した。
「わあああああああー！」

セツナは賊の間を縫うようにして包囲から抜けると、ボスの間とは逆方向の通路を走った。後ろから「追え！」という声が聞こえるが、その声はすぐに小さくなって消えてしまう。シリカの視界に、通路に灯る松明の残像だけが映った。まるで車でトンネルの中を走っているみたいだ。

通路の途中でセツナは止まり、両腕に抱えたシリカとピナを下ろした。ジェットコースターに乗った後のようだ。頭がくらくらする。セツナは剣のホルダーに取り付けていたポーチから青い結晶アイテムを取り出し、それをシリカに手渡した。

「これで脱出しろ」

「セツナさんも一緒に——」

「俺は奴らを捕縛しなければならぬ」

「嫌です！」

叫ぶように言ったシリカは、セツナの腕を両手で掴んだ。

「あたしを守ってくれるなら、一緒にいてくださいー！」

セツナが数瞬の沈黙の後、「分かった」と言ったところでシリカは手を放した。セツナがポーチからもうひとつの転移結晶を取り出す。

「団長に報告する。グランザムに行くぞ」

「はいー」

2人は転移結晶を掲げた。

「転移、グランザム！」

通路に響いた声は、シリカの声だけだった。「え……」と、シリカは無言のまま転移結晶を掲げるセツナに視線を向ける。セツナは何も表情に出さない。シリカの手の中の転移結晶が砕けた。

「いや！ セツナさー」

最後まで言い切る寸前で、シリカの視界は青い光に覆われていった。
？

◆
賊はすぐに追いついてきた。敏捷度にものを言わせての全力疾走だったのだが、案外早かったなと思う。賊はセツナの姿を見て眉をひそめていた。彼が身に着けているものが先程とは正反対の黒いコートだったからだ。

「ガキは転移したのか。にしてもてめー、たった1人で俺達を相手にするつてのか。着替えた割には随分と粗末な装備じゃねえか」

メイスを担ぐ男はセツナをせせら笑った。

「おいお前ら、こいつに麻痺毒をかけておけ。俺はガキを探す。確かグランザムつて聞こえたな」

メイス使いが腰から転移結晶を取り出す。それを宙に掲げる前に、セツナは賊の最後尾にいるメイス使いの腹を剣で貫いた。何が起こったのか分からないという表情のまま、メイス使いは自分の死を理解しないまま砕け散った。

セツナは背後を振り向く。賊はカーソルがオレンジに変わっているであろうセツナに凍り付いた視線を向けた。賊の1人が震えた声で言う。

「こ、こいつまさか……、オレンジプレイヤーを殺し回ってるつていう……」

セツナはゆっくりとフードを被る。シリカを殺すことは避けられようだ。ふと、セツナは自分が安堵していることに気付く。しかし、その安堵の理由を追求するのはひとまず置いておこう。まずは仕事を片付けなければ。

「オレンジのお前達は圏内に転移できない」

セツナは松明の光を反射する銀色の剣を携え、目の前の標的へと突っ込んでいった。

？

◆ 視界に映る時刻が、15時43分を表示していた。ゲートに入る者、またはゲートから出て来る者で転移門広場は主街区で最も人が集まっている。昼間は絶えず人が出入りするため、ピナを肩に乗せたシリカは広場でその出入りを見逃すまいと注視し続けていた。

転移結晶でピナと一緒にグランザムに転移してすぐ、シリカは血盟騎士団の本部へ向かい助けを求めた。

「セツナさんが迷宮区に取り残されたんです！ 助けてください！」
本部の入口で門番に止められたシリカは喚くように言った。門番に何層の迷宮かを聞かれ、最前線と答えたら門番は驚愕の表情を浮かべていた。

「最前線って60層か?! あそこの迷宮はまだマップデータが公開されてないんだ。そう簡単に搜索隊を出すわけにはいかない」

59層も3日前に解放されたばかりで、60層の迷宮攻略もあまり進んでいないらしい。ギルドに所属していても、迷宮区にはリストから居場所を確認することができない。ヒースクリフも攻略のために出払っていた。何を言っても動きそうにない門番2人にシリカは「もういいです!」と吐き捨て、転移門広場へ引き返しはじまりの街へ行った。

黒鉄宮にある生命の碑でシリカはセツナの名前を探した。彼の名前に死亡を示す横線が引かれていないことを祈りながら。シリカが見つけた《Set suna》という名前には横線も引かれず、死亡日時も死因も記されていないかった。ひとまず安堵したシリカはグランザムに戻り、転移門広場でずっとセツナの帰りをピナと一緒に待ち続けた。昼食時を跨いだが、食欲なんて湧かなかった。14時半にはヒースクリフ率いる血盟騎士団が列を成して帰還してきた。今日の迷宮攻略を切り上げたらしい。周囲のプレイヤー達が歓声に沸く中、シリカはヒースクリフに駆け寄った。シリカが何か言う前に、ヒースクリフは事を察してシリカを本部の応接室に案内して話を聞いてくれた。ヒースクリフならギルドの仲間であるセツナを助けてくれると思っていた。

「ボスの間までマップピングはできていないのが現状だ。いたずらに危険を冒すことはできない」

ヒースクリフの言葉は、シリカの胸に冷たい刃を突き刺すようだった。それを聞いてシリカはとうとう我慢の限界を迎え、端を切ったように涙を流して喚いた。

「どうしてすぐに助けようとしませんか！ あなたの仲間なのに！ あんな良い人を見殺しにするなんて最低！」

ヒースクリフは迷宮の攻略にセツナの搜索も兼ねると言ったが、それは火に油を注ぐような発言だった。それではまるでセツナのことには「ついで」みたいだ。

結局セツナを助けるために誰も、シリカも動けないまま、グランザムの転移門広場で待ち続けている。ゲートから出て来るプレイヤーの顔を凝視して彼を探し続けた。夜になってプレイヤーの数もまばらになり、シリカはその日は諦めて宿に行った。宿のベッドで横になっても、シリカは寝付けなかった。次の日の早朝、一睡もできなかったシリカはピナと一緒に転移門広場でプレイヤーの出入りを見ている。朝から夜まで待ったが彼は現れず、シリカはその日も宿に泊まった。その日の夜も一睡もできなかった。流石に足がふらつきながらも、早朝にシリカはピナを連れて転移門広場まで足を運んだ。

まだ生きているのかな？

眠気でぼんやりとしながら、ふとそう思った。また生命の碑に行ってみようとシリカは歩き出したが、2日も睡眠を取らなかったせいで足元がおぼつかなくなり、自分の足につまずいたシリカは倒れ込んだ。だが地面に衝突する前に、親切なプレイヤーがシリカの体を抱きとめてくれた。お礼を言わなくちゃ。そう思い顔を上げた。

「ちゃんと前見て歩け」

その素っ気ない声がシリカの耳孔に入り込んでくる。その顔は相変わらず無表情だ。何事も無かったかのように彼はシリカにその黒い瞳を向けた。

「セツナさん！」

その名前を呼んで、シリカは目に涙を浮かべながら彼に抱きつい

た。人目もはばからず、周囲のプレイヤーの視線などお構いなしにシリカはセツナの胸に顔を埋めて泣いた。あの夜と同じように、セツナはシリカの頭を撫でてくれた。

「心配かけて済まなかった。もう大丈夫だ」

？

◆

転移門広場で散々泣いた後、シリカはその場でセツナの胸に顔を埋めたまま眠ってしまった。いくら呼びかけても起きる様子が無かったため、抱きかかえて宿まで運んだ。セツナもその日は宿で睡眠を取ることにした。迷宮区からの脱出、カルマ回復クエストにそれぞれ1日を要したせいで休む間もなかった。

次の日の朝、宿屋のロビーでシリカのファンらしき男から、彼女が2日間ずっと転移門広場にいたことを聞いた。

「シリカちゃんを泣かせるなよ」

その男はセツナにサムズアップして宿を出ていった。何やら勘違いをされているらしい。しばらくはアインクラッドで面倒なゴシップが出回りそうだ。

9時になってようやく起きたシリカを連れて、セツナはギルド本部へ行った。会議室でヒースクリフに「タイタンズハンド残党の捕縛」という形式上の報告を済ませ、その報告をもってようやくシリカ護衛任務の終了を告げられた。

本部の扉の前で、シリカは深く頭を下げた。顔を上げると、そこには屈託のない笑みが浮かべられていた。

「セツナさん、本当にありがとうございます。何かお礼しないと……」

「任務だ。必要ない」

ウィンドウをスクロールするシリカに短く言い放つ。シリカはその態度に気を悪くした様子はなく、むしろ笑っていた。

「セツナさんならそう言うと思った」

一体何がおかしいのか。誰かに似ていると言ったり、いきなり抱きついたり。この少女が自分に何を思っているのかさっぱり分からない

い。更に理解不能なことに、笑っていたはずのシリカは視線を落とし、ぼそりと呟くように言葉を発した。

「また、会えますか?」

「会えるさ。生きていれば」

セツナがそう言うのと、シリカの表情が明るくなった。表情がコロコロと変わって忙しいなと思った。

「じゃあ絶対生きて、また会いましょう!」

「ああ」

シリカが右手を差し出してきた。拳を握っているが、小指だけ立っている。

「約束です」

察しの悪いセツナにシリカが口をとがらせた。セツナも右手を出し、小指をシリカの小指と絡めた。

「約束だ」

シリカは軽い足取りで街の群衆へと紛れていった。その姿が見えなくなるまで何度か、こちらを向いて手を振っていた。セツナは本部の中へと戻り、螺旋階段を上って再び会議室の扉を開ける。

「改めてご苦労だった、セツナ君」

椅子に腰かけるヒースクリフが、さつきと同じように労いの言葉を述べた。今日もヒースクリフ以外の4席は空いている。

シリカは元の日常に戻った。そしてセツナもまた、元の日常に戻る。

「早速だが次の任務だ。案件が山積みになっている」

第5話 村には軍隊を

『第4層は軍の目がある。十分に警戒してほしい』

ヒースクリフからのメッセージには、最後にそう書かれていた。

確かに主街区には重苦しい金属鎧を装備した《アインクラッド解放軍》が街を巡回しているのを何度か見かけた。目を付けられたら面倒だが、任務を終わらせたらすぐにホームへ戻るつもりだったこと、任務の内容が簡単だったことから特に気にする必要はないと思っていた。

実際に任務はかなり簡単だった。内容は、4層で何度か目撃されたオレンジプレイヤーの暗殺。何人、何十人も殺さなければならぬギルド殲滅よりは楽だ。ただ現場に行つて殺して帰ってくればいい。それに目標のカーソルがオレンジなら、PKしても自分のカーソルはグリーンを保てる。

暗殺の対象としてヒースクリフに目を付けられたオレンジが殺人を犯したという証言はない。だがそのオレンジの装備した手甲に施されていたマークが、セツナを暗殺に寄越すに十分な理由だった。

目撃証言によると、マークは顔のついた棺桶の形をしていたらしい。そのマークは今や知らなければ命取りと言われるまでにポピュラーなものだ。その簡単な説明だけで、暗殺対象の所属は判明した。
ラフィン・コフィン
笑う棺桶。

そのポップかつ不気味さを醸し出す、映画「チャイルド・プレイ」を彷彿とさせるようなギルドネームが、連中の恐怖をプレイヤー達に植え付けていた。

連中の名がアインクラッドに知れ渡ったのは、今年2024年の元旦だった。ある者は新年の訪れを祝い、ある者はこの世界であと何回年を越すのかと怯え、またある者は行事など関係なしといつも通り攻略に励んでいた。そんな年初めに連中はアインクラッド中にギルド結成を宣言し、プレイヤー達の恐怖を煽った。

今年に入ってからセツナの仕事は忙しくなった。《笑う棺桶》結成以前にもオレンジギルドは存在していたが、犯行は生存目的の盗みや

恐喝に留まっていた。それが連中の活動が始まってから一気に凶悪化した。アイテムを強奪したついでに殺し、新しい武器の切れ味を試すために殺し、ただ苛ついていたら殺すと、オレンジプレイヤー達のPKに対する心理的ハードルが下がっていく様をセツナは見てきた。

連中はまるで、殺しだけでなく人々の殺戮本能を刺激しているかのようにだった。セツナは以前そんな内容の小説を読んだ気がした。人間が持つ虐殺の本能を刺激し、世界中を内戦やテロといった混沌の坩堝に放り込もうとする物語を。あの小説のタイトルは何といつたか、現実世界で確認する術がない今となっては分からない。

今年に入ってから半年、《ラフィン・コフィン笑う棺桶》による被害者は80近くになつていった。オレンジギルド全体で見ると、数は倍近くにまで膨れ上がるかもしれない。セツナがオレンジギルドを潰し回つても、今のところ成果が出ているとは言い難い。犯罪者狩りをしているプレイヤーの噂は有名だそうだが、その噂は犯罪防止の抑止力とまではいっていないらしい。

セツナも何度か任務で《ラフィン・コフィン笑う棺桶》のメンバーを始末しているが、どれもギルドに形だけ所属しているだけの通り魔のような者ばかりだった。麻痺毒で捕縛に成功したメンバーを拷問してもギルドの有力な情報が得られず、肩を落としながら殺したのは記憶に新しい。

鼻根にしている情報屋すら連中の情報を得ることができず、《ラフィン・コフィン笑う棺桶》は見つけたら取り敢えず始末するという仕事が続いている。

そんなわけで、簡単な任務で注意すべきは目標が《ラフィン・コフィン笑う棺桶》のメンバーであること。セツナが注意を向けていたことはそれだけで、自分たちの庭に侵入を許したばかりか放置している《軍》を警戒する必要はないと思っていた。

セツナは《軍》を甘く見ていた。彼等がただの烏合の衆に成り果てたと油断していた。

それが、あの《トラビアの悲劇》を招いた。

？

◆ 目標を発見したのは、セツナが第4層の主街区から遠く離れた北の森に入っただけだった。

オレンジカーソルにフード付きのポンチョ。手甲に施されたマーク。これほど分かりやすい特徴もない。

セツナはしばらく木々の中で身を潜めながら、目標を追跡した。どうやら同行している仲間はなく、1人で行動しているらしい。

それにしても、なぜ《笑う棺桶》のメンバーがこんな下層の森をうろついているのか。気になる点はあるが、それに思考を巡らせるのは必要だろう。ただ仕事を片付ければいい。

セツナは剣を抜き、一気に目標へとダッシュして奇襲をかけた。目標は身の危険を察知してダガーで応戦してきたが、セツナにとっては雑魚そのものだった。

いくら悪名高い《笑う棺桶》でも、全員が戦闘に秀でているわけではない。連中の目的は「PK」と「PK手段の開発」であり、戦闘でのPKに飽きて他の手口を模索することもある。だから戦闘に長けた者もいるが、雑魚もいる。

セツナの《月弧刃》で首を落とされた目標は、呆気なくガラス片のようなポリゴンを散らして消滅した。任務完了だ。

相手がオレンジカーソルだったから、セツナのカーソルはグリーンのまま主街区に戻る。セツナが剣を鞘に収め、帰路にしようと歩き出した時だった。

木々の間に、一瞬だが金属の反射光が見えた。セツナが地面を蹴ると同時に、森の暗闇から短剣が飛んできた。短剣は紙一重に、セツナのすぐ脇を通り過ぎて森の中へ消えていく。セツナは剣を抜いた。短剣が飛んできた方向へと走り出すが、右手からも短剣が飛んできく。セツナはそれを剣で弾くも、また別方向から短剣が次々と飛んできた。

明らかに1人ではない。

いくら短剣を弾いても止む気配がない。セツナの周囲に大量の短剣が散らばっていった。

腰に衝撃が走った。避けきれずに1本食らってしまったのだ。しかしHPは数ミリ減っただけ。その攻撃力の低さに直感的な危機を感じた。セツナの直感も当たってしまった。全身の力が抜け、受け身も取れないまま地面に倒れる。倒れるまでに、もう2本短剣をくらった。HPバーが点滅するグリーンの枠に囲まれているのが見える。

葉が擦れる音がする。セツナは重い頭を上げ、周囲に視線を這わせた。ざっと4人の男が、セツナを囲んでいた。全員が濃緑の服に金属鎧を装備している。この統一された装備は主街区で見たことがある。《アインクラッド解放軍》だ。

「しぶてえ野郎だな。こんなにダガー使ったのは初めてだぞ」
「急がねえと麻痺毒が切れる。さっさと運ぶぞ」

1人がセツナのポケットやポーチに手を入れ、中に入っている結晶アイテムを取り出し自分のストレージに納めた。

《軍》の集団はセツナを担架に乗せて森の中を歩いた。途中で麻痺毒が切れる頃合いを見計らい、担架を持つ1人が麻痺毒を塗った短剣をセツナに突き刺しながら。モンスターと何度か出くわしたが、彼等はその度にセツナを担架ごと放り出し戦闘に臨んだ。戦闘中でも、麻痺毒が切れないようセツナに短剣を刺すのを忘れなかった。

何度も短剣で刺され、セツナのHPが8分の1だけ減ったところで村に辿り着いた。小さい村だった。セツナに攻撃したことでカーソルがオレンジになっている彼等が入れるということは、圏外の村なのだろう。

のどかな田舎。と形容するには語弊がある。セツナを運ぶ集団と入れ違いに、長槍を持った軍人を先頭に一列に並んで歩く集団がいた。《軍》の所属というには装備が粗末だった。革製の胸当てに飾り気のない片手剣と、はじまりの街で買えるような安物ばかりだ。

狭い路地に目を向けると、男が女にのしかかっているのが見えた。女は何も身に着けていない。四肢をだらりと投げ出した裸の女に、男が何度も突き入っていた。男の顔は見えないが、女の苦悶に満ちた表情が見えた。路地の近くを通りかかった軍人はそれに気付いていないのか、すぐ傍の情事を一瞥もせず通り過ぎていく。

セツナは村の民家に連れ込まれた。居間の椅子に座らせてもらえることはなく、家の物置らしき狭い部屋に押し込まれた。

「まず所属だ。ギルドに入っていたら居場所がばれる」

《軍》の1人が麻痺毒で横たわるセツナの指を手に取り、ウィンドウを呼び出すアクションを無理矢理起こさせた。セツナのメインメニュー、アイテム欄、ステータス欄を見ると、その軍人は目を見開いて「おい」と背後にいる仲間に呼びかけた。

「こいつ《K O B》だ。レベルも76までいってやがる。スキルだって結構な数マスターしてるぞ」

後ろにいる3人もセツナのウィンドウを覗き込んだ。アインクラッドにおけるセツナの情報が次々と開示されていく。

「俺をどうするつもりだ」

微かに怒気を込めて、静かにセツナは問う。その剣幕に《軍》の面々は一瞬だけ怯えた表情を見せたが、セツナのウィンドウを出した1人が脇腹を蹴り上げてきた。「うっ」と上ずった声を出し、アバターの体なのに腹から胃液と吐瀉物がこみ上げてくるようだった。

「立場をわきまえろよ。我々はいつでもお前を殺せるということを忘れるな」

セツナは軍人の顔に焦点を合わせる。その頭上には犯罪者であることを示すオレンジのカーソルが浮かんでいる。

「お前の処遇は我らの上官に決めてもらう。明日に上官が戻るまで、変な気を起こすなよ」

セツナはもう一度麻痺毒をかけられ、無理矢理ウィンドウを操作させられてアイテムと武器を軍人に譲渡した。貴重な結晶アイテムも、愛用していた《リーパーズエツジ》も《軍》のギルド倉庫に納められてしまった。ギルドからも脱退した今、ヒースクリフはセツナの居場所を知ることができない。セツナがこの状況に置かれていることを悟っても、彼が助けを寄越してくれるとは思えないが。

麻痺毒が切れてもセツナは部屋から出ようとは思わなかった。部屋の外にはドアの前で2人の軍人が見張っている上、使える武器を奪われて体術スキルのみで乗り越えるのは無理がある。しかもドアは

開け放たれていて、セツナがウィンドウを開けば効果音で気付かれる。

セツナは部屋の固い床に寝そべり横になった。だが眠ろうとはせず、天井の染みを数えて時間を潰した。SAOは細かいディテールがよく出来ている。

「何だ？」

不意に、ドアの奥から軍人の声が聞こえた。声はどうやらセツナではなく、ドアの前に立っている女に向けられているようだ。

「食事、彼にも思ってる」

女がセツナに視線を向けながらか細い声で言った。音量は小さいが、よく通る声だった。耳孔にするすると、まるで蛇のように入り込んでくる。

「まあ、食事くらいならいいだろう」

軍人の許可を得た女が部屋に入って来る。なかなかの美人だ。男女比に偏りがあるアインクラッドどころか、現実でもこんな恵まれた容姿の女に出会うことはそうあるまい。だが整った顔よりも視線が行くのは、その身に纏っているぼろきれの方だ。女はどうやら糸の綻びと穴だらけの布しか装備していないようだった。歩く度に、布の隙間から下着すら身に着けていない腰から足の付け根までの曲線が見え隠れしている。

「食事、持ってきたわ」

女はそう言って大振りなパンをオブジェクト化させた。NPCショップで売っている固焼きパンだ。

「あんたは」

「エステル。あなた私を見て驚かないのね」

「驚いている。まるでスラムの娼婦だ」

「そうね」と言いながらエステルはしゃがみ込んでセツナにパンを差し出した。しかしセツナはパンに目もくれない。その視線はエステルの目に向いている。2人の視線が交差していた。

「食べないの？」

「毒が入っているかもしれない」

「無いわ、そんなの」

エステルの手に乗ったごつごつとした生地 of 表面には僅かな焦げ目がついている。口にしたことがあるだけに、その発泡スチロールをかじっているような食感は思い出すだけで食欲が失せる。以前は空腹に耐えきれず仕方なく食べていたが、まともな食事にありつける今となってはそれを食べ物と認識することは難しい。

セツナは自分のストレージから干し肉をオブジェクト化させ、それをかじった。燻製の香ばしい香りも塩気もない。筋張った肉を噛み咀嚼する。

「強情ね」

肉の繊維を噛み千切るセツナを見てエステルが微笑した。

「この村は何だ」

「ここは、クエストのフラグを立てるトラビアの村。今はドナシアンの村よ」

「ドナシアン。《軍》のメンバーなのか」

「あなたは明日会うわ」

エステルはそれだけ言うと、パンをストレージに納めて部屋を出ていった。

？

◆

茶色い屋根が大半を占めている村の家々に、ひとつだけ屋根が赤い物件がある。遠目から見れば隣家の色に紛れて違いは分かり辛いが、近くで見るとそれはNPCが済むには造形が凝り過ぎているのが見て取れた。

朝、一睡もしなかったセツナの手に軍人たちは縄をかけた。本来ならモンスター捕獲に使用するものだが、プレイヤーにも使えるらしい。

赤い屋根の家の前で門番を務める軍人に、セツナを連れた軍人が敬礼する。向こうも敬礼を返すと、木製のドアを開けて中へと促してくる。

「入れ」

軍人に言われるまま、セツナは家の中へと入った。渋つても縄を引かれて無理矢理入らされただろう。ここで逆らつても仕方ない。

セツナには知るべきことがある。この村に駐在している《軍》は何かなのか。場合によっては、セツナの仕事の範疇にあるかもしれない。家はどうかやらプレイヤーホームとして用意された物件らしい。《軍》の資金なら家くらい買えるだろうが、ただ生活の場としてはなく、まるで軍隊の司令部といった様相だ。リビングではソファに腰かける3人の軍人がせわしなく指を動かしてウィンドウを操作している。セツナを連れられた軍人が、垂れ幕がかかったドアをノックした。垂れ幕にはアインクラッドをモチーフにした、《アインクラッド解放軍》のシンボルマークが施されている。

「何？」

ドアの奥から声が聞こえた。

「ドナシアン大佐、昨日捕獲した捕虜を連れてまいりました！」

家の中だというのに、不必要なほどに大きな声で軍人が言った。ほどなくしてドアから「うん、入って」と返ってくる。軍人は「失礼します！」とまた大声でドアを開け中へ入り、セツナもそれに続いた。そこは司令室のような部屋だ。ようなという言い方はおかしいが、その部屋で行われているものは部屋の本来の用途と随分異なっている気がする。

部屋の様相だけ見れば、紛れもなく司令室であると分かる。応接用のソファと司令官が執務をこなすための机と椅子のみが置かれている。椅子には濃緑の戦闘服を着た青年が腰かけている。

そこまでは何も違和感が無かった。

セツナは椅子に座る司令官の、その机の右へと視線を移す。

床で裸の男女が情事にふけている。昨日外で見たときと同じで、夢中で腰を振る男に女は抵抗しない。いや、抵抗できないが正しいか。愉悦に浸る男を女は恨めしそうに睨んでいる。男はその顔に拳をおみまいする。

左にも同じ光景があった。まるで右側を鏡で映したようだ。違いは男が服を着ているという点だけだ。

まるでパゾリーニの「ソドムの市」みたいだと、セツナは思った。あまりのグロテスクさに半分も観られなかった映画だが、ここはあの映像の中で繰り広げられていた快樂と背徳の地獄絵図によく似ている。

「セツナ君っていったかな？」

青年の呼びかけに、セツナは視線を戻す。セツナの両脇に構えている軍人が「図が高い」と頭を押さえつけ、無理矢理跪かせた。

「俺はアインクラッド解放軍のドナシアン。階級は大佐です」

随分と大層な階級だなど、セツナはつい笑ってしまう。《軍》なんてものは揶揄だというのに、とうとう自分達で名乗るとは。セツナの態度に腹を立てた軍人が2人がかりで蹴りを入れてきた。HPは殆ど減っていないが、衝撃で床に伏した。

「やめな」

ドナシアンの言葉で2人の部下はセツナへの暴行を止めた。上体を起こしたセツナはドナシアンの顔を凝視する。頭上のカーソルはグリーンだ。セツナと視線が交わると、ドナシアンはにこやかな笑みを浮かべた。

オレンジだったとしても、この青年に犯罪者の烙印は似合わない。少年らしさを残した笑顔が似合う、まさに好青年だ。目を細めてほしい線が出る笑顔は印象が良く見える。この青年の笑顔と、両脇で引き起こされている光景はまるで別世界だ。コラージュ写真のような歪さがある。

「メシアスをPKしたのは彼なのかな？」

「は！ 確かにPKする所を目撃しました！」

「ふうん、レベルが70超えるとそんなに強いんだあ」

ドナシアンはセツナを興味津々に見つめる。さながらセミの羽化を観察する少年のように。

「メシアスとは、俺が殺した笑う棺桶ラフィン・コフィンのメンバーか」

セツナの問いにドナシアンは「そうだよ」と笑みを見せながら答える。

「彼にはね、色んな事を教わったよ。麻痺毒とか、君を縛っている縄ア

アイテムの存在とかね。彼に死なれたのは痛かったなあ」

犯罪者狩りを行っている《軍》が、最凶最悪の殺人集団と関係を持っていた。これが一般プレイヤーに知られたら、アインクラッドの新聞には連日このスキヤンダルが掲載されることだろう。だがそんなことは現時点では問題にならないだろう。この村の《軍》がそう簡単に外部へ情報を漏らすとは思えない。

「で、メシアスを殺した君こそが、犯罪者狩りをしている死神と呼ばれるプレイヤーというわけだ」

死神。

セツナはアインクラッドの裏社会でそう呼ばれるようになったらしい。オレンジギルドへの潜入を繰り返すにつれて、オレンジプレイヤーの間で語り継がれているセツナの噂は次々と出てきた。

《死神》はオレンジプレイヤーを殺しまわっている。

《死神》によっていくつものオレンジギルドが壊滅した。

《死神》を見たら生きて帰れない。

《死神》は複数人いる。

《死神》は犯罪者狩りを生業とするギルドのメンバーだ。

《死神》は犯罪防止のNPCだ。

大体はこんな認識だ。もっぱらジョークとして話題に上るのみで、本気で信じている者は少なかった。

「所属が《KOB》ってことは、まさか聖剣士様が犯罪者狩りなんてビジネスを始めたのか。あの人は熱心だね」

「リークしたところで無駄だ。俺はギルドを抜けた。デマだと聞き流される」

《死神》の正体はセツナ。セツナを動かしていたのは血盟騎士団のリーダー、ヒースクリフだ。

そんな情報は《軍》がオレンジギルドと繋がっていたこと、スキヤンダルに埋もれてしまいそう。セツナがギルドにいたことを知らないメンバー達は、セツナの顔を見ても「誰だこいつ」と吐き捨ててしまうだろう。

セツナの最優先事項は目立たないことだ。そのために、セツナは今

まで攻略に参加せず無名を通してきた。誰からも認識されることなく、中層の街を歩く者達はすれ違ったセツナが自分達よりもレベルが倍近く高いことに気付かない。そうすることで、セツナはヒースクリフのカリスマ性を守ってきた。

「まあ、そんな騒ぎを不用意に起こすほど、俺は子供じゃないよ。若く見られるけど、俺はアラサーなんだ。どう、俺って若い？」

「この村は何だ。なぜ《軍》はこんなことをしている」

「ああ無視するのね。こんなことってというのは、これのこと？」

ドナシアンが右の情事を一瞥した。

「軍っていうのはね、一般プレイヤーを守るのが役目なんだよ。彼等が圏内で平和に暮らしているのに、俺達は命がけてモンスターやボスを戦ってるよね。だから彼等が俺達に見返りを払うのは、当然のことなんだよ。セツナ君もそう思わない？」

「思わないな。税金にしては重すぎる」

「そうかあ」とドナシアンはため息をつく。何ともわざとらしい落胆だ。それがむしろ演技に見える。

「まあ何にしても、メシアスの代わりに君という戦力を俺達は手に入れることができた」

「俺を戦闘の最前線に立たせるつもりか」

《血盟騎士団》所属、レベル70超えの攻略組。アインクラッドでは高いステータスを備えた者が価値を見出される。

戦いのみでしか道を切り開くことができず、戦いのみでしか脱出することができない世界。

ドナシアンはそうだとするようなように手を叩き、セツナを指差した。

「さすが、察しがいいね！ 君がいれば、レアアイテム入手のクエスト攻略も夢じゃない」

ドナシアンの目に邪なものは感じない。その少年のような無垢さがむしろ醜悪で恐怖を煽る。

凶悪な犯罪者はしばしば「悪魔」と揶揄されるが、それはまさにこのドナシアンという青年に相応しい言葉とセツナは思う。

地獄で生まれ育った悪魔にとって、自分がいる地獄こそが正しく、

地獄こそが美しい。

だから悪魔は自分が現世と天国で悪者として扱われ忌避されることを知らない。自分が醜く汚れた存在であることを知らない。

悪魔は自分が悪魔であることに気付かない。

？

◆

ドナシアンの家から民家に戻って2時間、縄から解放されたセツナは床にゴザを敷いただけの簡素な寝床に横になっていた。さつきと同じ部屋ではなく、セツナの他にも十数人のプレイヤーが押し込まれたりビングだ。この民家もまた、彼等の寝床として購入したプレイヤーホームらしい。

今夜、セツナの腕試しを兼ねたクエスト攻略に赴くという。ボスが手強くて今まで手を出せなかったクエストに、セツナをしんがりとして挑むことを、ドナシアン本人から聞いた。だからまだ昼間にも関わらず、奴隷にされたプレイヤー達は休息を許されている。

彼等に娯楽は与えられていないらしい。もつとも、泥のように眠る彼等に娯楽を楽しむ余裕はなさそうだ。

「あの……」

セツナの顔を覗き込むように、1人の軍人が話しかけてきた。

「あなた、《死神》なんですか？」

「ああ」

「あなたの武器、見させてもらいました。すごい業物ばかりですね」

この軍人、確かこの家に戻る途中に見た記憶がある。仲間から尻を槍で小突かれていた男だ。他の軍人が偉そうにふんぞり返っている中、この男の怯えた表情が珍しく思った。

「あんたは」

「ロットーです。階級は二等兵です」

別に階級なんてどうでもいい。そう思いながらセツナは上体を起こす。

「ここじゃ何ですし、上で話しませんか？」

2人は2階へと上がり、客間のソファに腰かけたロットーはコー

ヒーを出してくれた。

「砂糖いりますか？」

「いい」

セツナは腕を組んだまま、カップに手をつけようとしない。ロットーが麻痺毒を仕込むなんてことはできなさそうだが、一応警戒しておくに越したことはない。ロットーもそれを理解しているのか、全く催促してこなかった。

「この村、おかしいですよね」

「……………ああ」

「元は、この層のフィールド調査の拠点だったんです。でも、ドナシアン大佐が配属されてから、次々と一般プレイヤーの人達が送られてきて。大体の人が、はじまりの街で税を払わなかったり、犯罪を働いたりした人達です。男はフィールドでコルやアイテム稼ぎに使われて、女は俺達の相手をさせられています」

セツナはドナシアンの横で絶望に満ちた女を思い出した。顔を汗と涙と鼻水で濡らし、自分の中に侵入してくるものに抗うことができない苦痛。いや、もしかしたら快楽も混在しているのかもしれない。

「女には麻痺毒を使っているのか」

「ええ、麻痺毒で動けなくして、倫理コードを解除してるんです」

ロットーはカップを両手で握りしめていた。力を込めすぎて震えている。

不意にドアが開いた。肩を震わせたロットーは慌ててドアへと視線を移す。ドアを潜って入ってきたのはエステルだった。

「エステルさん……………」

「こんにちはロットーさん。それと……………」

エステルはセツナを見て首を傾げる。そういえば、昨晚セツナは名乗っていなかった。

「セツナ」

「昨晚ぶりね、セツナさん」

エステルはセツナの隣に座ると、「私にもコーヒーいいですか？」とロットーに尋ねた。

ロットーは喜んで彼女の分のコーヒーを淹れた。

「昨日とは随分と雰囲気が違うな」

純白のブラウスを着たエステルは、良いとこのお嬢様に見える。昨日のぼろきれを着た時から短時間で一攫千金の富を得たように。

「ドナシアンにこれを着るように言われたの」

「あんたも軍人の相手を」

「私を相手にしていいのはドナシアンだけよ」

エステルはそう言っただけでコーヒーを飲む。他の女たちは皆絶望に満ちた表情をしていた。でもこのエステルだけ、目に絶望を宿していない。

「それで、ロットーさんはセツナさんと何を話していたの？」

「……丁度、セツナさんにお願いしようとした所です」

ロットーはエステルを一瞥してから、セツナを真っ直ぐに見据えた。

「セツナさん、この村を解放してください」

第6話 支配には解放を

月明りに照らされたトロールの棍棒が、群がる数人を虫のように薙ぎ払った。吹き飛ぶ彼等の体にはダメージを示す赤いエフェクトが貼り付き、HPのバーが短くなつていく。

「下がれ」

セツナは彼等にそう告げると、支給されたロングソードを手に駆け出した。トロールが肉迫するセツナを捉えニタリと笑う。トロールが振りかざした棍棒を避け、動きが鈍いトロールに青いライトエフェクトを纏った刀身を叩きつけた。トロールがバランスを崩し、片足を浮かせて転ぶまいと体勢を整えている様は下手なタツプダンスを踊っているように見える。

セツナは剣を構えた。再び刀身がライトエフェクトを纏い、システムアシストに従つてその太鼓腹に片手剣技《シャープネイル》を放つた。

トロールが呻き声をあげながら倒れる。抉られた腹から血は流れず、そこに詰まっている内蔵も見えない。ただポリゴンの詰め物だけが、それが生物ではないことを主張している。

SAOにダイブしたことで、殺すことに抵抗を感じなくなった者は多いと思う。セツナもその1人だ。だがもし現実に帰還したとしても、この世界で培ってきた猟奇性は向こうに持っていきけるのだろうか。生物には血が流れ、その腹には内蔵が詰まっている。現実でもこのことのように殺し、空っぽではない生物の中身を知っても、それでも殺すことを止められないのだろうか。

トロールの体が砕け散る。セツナとパーティメンバー達の目の前に加算経験値の数字が浮かび上がる。「やった」とガッツポーズする者がいた。レベルが上がったらしい。経験値が最も多く割り振られたのはセツナだというのに。セツナにとっては雀の涙ほどの経験値だ。

「あんたすげーな!」

「やっぱり攻略組はちげーわ!」

興奮しているパーティーメンバー達に、指揮する軍人が怒声を浴びせて黙らせた。

「貴様ら、さっさと立て！ トラビアに戻るぞ！」

軍人の言葉に従い、奴隷達は疲れた体に鞭打って立ち上がる。HPバーが危険域の赤になっていている者と、全く減っていない者と極端だ。攻撃役と回復役に分かれているのだが、攻撃役でもあのトロールを撃破するには力不足であることを否めない。少し前まではじまりの街から一步も出なかつたとなれば、HPが高いだけで防御も敏捷度も大したことないトロールに苦戦してしまうのも無理はない。

「あまり大声を出すと見つかるぞ」

セツナがそう言うのと、軍人は口を噛みしめて槍を突き出してきた。顔の寸前で静止する槍が月明りに反射して鈍く光っている。ダメーヂを与えてオレンジ化してしまえば、転移門を使えなくなる。

「生意気な口を聞くなよ奴隷ふぜいが。貴様は我が軍の傘下にいることを忘れるな」

高圧的なその軍人は槍を降ろすと、未だに座っている奴隷の肩を掴んで無理矢理立たせた。

「ロットー！ ポーションを無駄遣いするな！」

軍人はHPが危険域の奴隷にポーションを飲ませているロットーに怒鳴った。ロットーは危うくポーションを手から落としそうになりながら「すみません」と謝罪する。

今にも泣きべそをかきそうな顔は、さっきとはまるで違って見えた。

？

◆ 「セツナさんがいれば、村の人達は自由になれますよ」

そんなことを口走ったのはロットーだ。村に連れ込んだプレイヤールレベルが伴っていないモンスターと戦わせ、女に慰安婦じみたことを強要する《軍》に所属するロットーが。

「いいのか。あんた達にとってここは楽園だろう」

「何が楽園ですか！」

ロットーはテーブルを叩いた。テーブルに置かれたカップがガチャリと音を立てた。

「軍は元々プレイヤーを守るために結成されたんです。それなのに、これじゃオレンジギルドと変わりませんよ！」

「ロットーさん。あなたの気持ちは嬉しいけど、それは無謀すぎるわ。セツナさんはともかく、他の人達は軍に逆らえないようにレベルを調整されているんだもの」

セツナは視線をドアへと向ける。奴隷用の家は住人に対して狭すぎる。リビングのみならず廊下で寝ている者もいた。唯一セツナ達がいる客間は軍人用の寝室として開けられているそうだが。

「彼等のレベルは平均してどれくらいだ」

「全員30にも達していないわ。殆どの人のはじまりの街から出なかつたんだもの」

「俺1人で軍を相手にするには分が悪い」

奴隷に言う事をきかせるために、軍人達は安全マジンを取っていることだろう。そう考えれば、軍人達の平均レベルは40といったところか。セツナのレベルなら取るに足らない相手だが、また物陰から麻痺毒のダガーを食らったら一気に戦況が瓦解してしまう。

「だいたい、他のギルドに頼もうとは考えなかつたのか」

「情報が外部に漏れたと知ったら、ドナシアン大佐は皆さんを殺します。あの人ならやりかねない」

「やっぱり無理だわロットーさん。確かにここは酷いけど、それでも生きていくだけまだ良い方よ。私達は衣食住が保証されているわけだし」

「あなたはそれで良いんですか!」

ロットーが再び怒鳴った。目は怒りではなく、悲しそうだ。エステルは臆せず、いつもの静かな口調で言う。

「いつかゲームがクリアされるかもしれないわ。私はその日まで生きていきたいの。他の人達だってそれは同じよ」

「でも、クリアされる前にこの村で死ぬかもしれないじゃないですか。俺は……」

ロットーの言葉が途切れ途切れになっていく。痰を絡めたように、声がかすれていく。

「俺は…、あなたに幸せに生きて欲しいんです……」

セツナはとうとう涙を流したロットーを見つめる。顔に焦点を合わせたことで、システムが働き頭上にグリーンのカースルとHPが表示されている。

正直なところ、今すぐにでも村を脱出してヒースクリフに報告をしたい。この村のプレイヤー達に死神の正体を知られてしまった以上、始末しなければならぬ。でも、それを許さない感情が自分の中に存在していることをセツナは自覚している。

この泣き虫の軍人と、隣にいるすまし顔の慰安婦は死ぬべきではない。

「この村で軍による殺人は行われたのか」

ロットーが「え？」と涙に濡れた顔をセツナに向ける。エステルも、この時ばかりは垂れ気味の目蓋を剥いていた。

「ええ、軍に逆らった人は広場でPKされたわ。他にも、憂さ晴らしのためにリンチされて死んだ人もいる」

「なら俺の仕事の範疇だ。アインクラッド解放軍はオレンジギルドとみなす」

何も正義の味方を気取るつもりはない。ただ、この決断が少しでも良い方向へ進めばいい。

これは任務ではない。セツナの勝手な私情だ。この2人に生きて欲しいというエゴでしかない。

「俺がドナシアンを殺す」

？

◆

暗闇の森を月明りが照らしている。その明かりを頼りに、セツナ達は戦闘を歩く軍人について歩いていく。この第36層は森の他に草原、丘があるのだが、見晴らしが良い所では他のプレイヤーに目撃される。だからこうして隠れやすい森を経由して主街区まで行かなければならない。

「あんだ、ついてないな」

セツナの後ろを歩く男が話しかけてきた。年は近そうだ。

「あんだ攻略組なんだろう？ トラビアに連れて来られたら、もう前線には戻れねえよ」

「あんだはどうしてあの村に連れて来られたんだ」

「はじまりの街で徴税を拒否したら、懲罰だ言われて拉致られたんだよ。俺は男で良かった。女だったら自殺してたかもな。実際何人か犯されるのが嫌で自殺したが」

「酷い村だ」

「ああ、ひでえよ」

先頭を歩く軍人がセツナ達に怒鳴った。

「そこ、黙って歩け！」

言われた通り、セツナと男は黙って歩いた。セツナは振り向き、最後尾にいるロットーに視線を向ける。ロットーはそれに気付き、僅かに頷いた。

トラビアの村に戻った一行は軍人曰く「宿舎」に押し込まれ、奴隷達は睡眠を取った。軍人は眠っている女を叩き起こし、麻痺毒をかけて倫理コードを解除させていた。ひどく物音を立てるせいで寝付けない者は多くいた。セツナもその例に漏れなかったが、目を閉じると押し寄せてくる睡魔に誘われ、眠ることができた。

次の日は朝早く起こされ、別の軍人の指揮によって第55層の氷雪地帯のクエスト攻略に赴いた。ろくに防寒装備を支給されず、皆齒がちがちと鳴らしながら雪山を歩いた。奴隷達のレベルでモンスターを相手にするのは危険すぎるため、戦闘の際にはセツナが最前線に立った。普段なら55層のモンスターに苦戦などしないが、支給された下層のNPCショップで買える安物の剣ではあまりダメージを与えることができず、何度もソードスキルを放つてようやく倒せるという有様だった。

ロットーはクエスト攻略には同行しなかった。ロットーは軍人と奴隷達の食糧調達を命じられ、街に行っていた。そのことを昨晚本人から聞いたセツナは、ロットーにいくらかのコルと武器屋のリストを

書いたメモを渡した。

「買った武器は間違ってもギルドのストレージに入れるな」

ロットーにそう言い聞かせ、自由に街を出歩けるグリーンカーソルの彼に武器の調達を頼んだ。

クエスト攻略から戻ったその日の晩、買い出しから戻ったロットーは宿舎で奴隷達に呼びかけた。

「明日、ドナシアン大佐に反乱を起こします」

こんな大声で言っていていいものかと思ってしまう。宿舎にいる軍人はロットーだけだが、聞き耳スキルが高い者がドアの傍にいれば外にも聞こえてしまう。ロットー曰く軍でそんなスキルを上げている者はいないそうだが。

そんな一抹の不安を感じながらも、セツナはロットーに続いて言った。

「ドナシアンが本部に行くために村を離れたところを、俺が殺す。あんた達は軍と戦い、主街区まで逃げろ」

奴隷達はざわつき、ロットーとセツナに訝しげな視線を向けていた。こいつは何を馬鹿なこと言っているんだと表情だけで反応が分かる。

「武器は全員分ロットーに用意してもらった」

セツナはロットーが人数分買ってきた剣をオブジェクト化させ、テーブルに並べた。第27層のNPCショップで売られている《フェンサーソード》だ。

「これならあんた達のレベルでも装備できる。数の優位さを活かせば、この村の軍人相手でも戦えるだろう」

「ちよつと待ってよー!」

奴隷達をかき分けて、女がセツナの前に出てきた。セツナが初めて村に来た時、軍人の相手をしていた女だった。

「軍に敵うわけじゃないじゃない。全員殺されるのがオチよ!」

「でも、このままトラビアにいたって、あなた達はいつ殺されるかも分かりませんよ」

ロットーが女の興奮を鎮めようとするが、セツナは構わず言った。

「あんた達では勝率は五分だ」

「じゃあー」

「怖いならこのまま軍に虐げられながら生きればいい。そうなれば俺1人で村を出るだけだ」

セツナの言葉で奴隷達の沸点が一気に臨界まで達した。一斉に罵詈雑言を喚き散らし、ロットーがなだめようとするも全く聞く耳を持たない。

1人の奴隷の男がセツナの胸倉を掴んできた。奴隷はセツナを殴ろうと拳を振るってきたが、セツナはその拳を掴んだ。奴隷は掴まれた拳を引き剥がそうとするが、セツナは更に力を込めて、手の中にある拳を握りつぶした。奴隷の手首から先がぶつりと途切れ、セツナの手の中でポリゴンの欠片を散らしていく。奴隷はなくなった手を抱いて絶叫した。その絶叫に他の奴隷達の声がかき消される。

奴隷達の視線が手を潰された仲間からセツナへと移った。

「これが、この世界の現実だ。レベルによってプレイヤーの優劣が決まり、HPが尽きれば跡形もなく消えてしまう。俺はそれを数えきれないほど見てきた」

手を潰された奴隷は息を荒げながら、怯えた表情をセツナに見せている。その手は既に再生していた。部分欠損は少ないがダメージが生じる。彼の手を潰したセツナのカーソルはオレンジに変わっていることだろう。圏外ではたとえプレイヤーホームでも、犯罪防止コードは適用されないらしい。

「俺は今まで多くの人間を殺してきた。大半がオレンジプレイヤーだが、グリーンでも証拠隠滅のために殺したこともある。俺はいつ死んでも仕方のない人間だ。でも俺はここで死ぬわけにはいかない。役目を終えたら始末されることになったとしても」

いつの間にか、奴隷達は黙ってセツナの言葉に耳を傾けていた。耳には目蓋がないと、誰かが言っていた。セツナの言葉は否応なく彼等の耳孔に入り込んでいく。

「罪を抱えた俺がのうのと生きようとしていて、何故罪のないあんた達は生きようとしらない」

セツナはテーブルに置いた《フェンサーソード》を手を取った。「どうせこの村にいたって、死ぬのが先延ばしになるだけだ。生きたくないのなら、今ここで俺が殺してやる。死にたい奴は前に出ろ」

奴隷達は黙ったまま、全員が数歩下がった。一番前にいる女が叫ぶように言った。

「生きたいわよ！ 生きて現実に戻りたいに決まってるじゃない！」

「なら生きるために戦え。生きることが望んでいるなら、意地でも生きてもらう」

黙って聞いていたロットーが奴隷達に言った。

「戦いましょう、皆さん！ 戦って生きるんです！」

空虚だった奴隷達の目に、力が宿っていくのが分かった。皆が口を真一文字に結び、1人、また1人とテーブルに置かれた剣を手を取っていく。

「勝つぞー！」

奴隷達のリーダー格らしい男が声を張り上げ、他の者もそれに続いた。

パズリーニの「ソドムの市」は、ネット掲示板で見た感想によると奴隷達は散々凌辱された挙句拷問されて殺されるらしい。彼等は反抗する意思すら奪われ、さながら物のように扱われ使い捨てられていった。

このトラビアの村には、あの映画の奴隷達と同じようなものを感じていた。確かにこの世界の物体は全てポリゴンだ。ポリゴンで構成されたアバターに血は流れず、その腹に内蔵は詰まっていない。

でもそれでも自分達は空っぽでないと、このアバターには現実世界の体から送られる意思があると、セツナは信じたい。

映画とは別の結末へと行けるのなら、そこに辿り着きたい。

？

◆

「名演説ね」

奴隷達が寝静まった頃、客間でエステルがセツナにそう言った。

「よしてくれ、ああいうのは慣れてない」

セツナとロットーが配った剣と防具を各々のストレージに納めた彼等は、その興奮が冷め止まなのまま床についている。明日は大事な日だ。俺達の運命が決まる。皆、気張っていけよ。奴隷達が口々にそう言っていた。

客間にロットーはいなかった。軍のミーティングに出席しなければならぬらしい。客間にはセツナとエステルの2人だけだった。トラビアがインクラッドの外周近くに位置しているため、層の天井から覗く月明りが部屋をおぼろげに照らしている。

エステルは窓辺に佇んでいる。月明りを受けている顔半分の白い肌が反射して、自ら光を放っているようだった。それを見て、セツナは素直に美しいと思う。

「あなたは、彼等にとつて英雄ね」

「その称号はロットーに与えるべきだ。俺はただ便乗していただけに過ぎない」

セツナはそう言って、貧相な料理スキルで淹れたコーヒーを飲む。苦いだけで豆の香りも深みもなかった。インスタントコーヒーの方がまだ美味しいと思える。

「あなたは、ずっと人を殺すために生きてきたのかもしれない。でも、今は人を救うために生きている。それは確かなことよ」

「成り行きだ。もしロットーが反乱を企てなかったら、俺はあんた達を見捨てて村から逃げるつもりだった。今回あんた達を救えたとしても、俺はまた人を殺すために生きる」

「悲しいのね」

窓を背にしたエステルの顔が全て影に覆われた。セツナの索敵スキル補正で視認することができその顔は、本当に悲しげだった。目蓋が瞳の半分を覆っている。その目を見るに耐えず、セツナはカップのコーヒーに視線を落とす。

エステルはセツナの横に座り、テーブルに置いてあるカップの中身を啜った。

「ねえ、何かお話ししてくれる?」

「何を」

「あなたが殺し屋になった理由とか」

「断る」

セツナは簡潔に言った。それは不可侵領域だ。誰にも話すつもりはない。誰かに吐露することで、思考を言葉として自らの耳に入れることが怖かった。言葉が音としてセツナ自身の耳に入ったとき、もしかしたら自分は迷ってしまいかもしれない。

セツナは迷うわけにはいかない。

セツナは立ち止まるわけにはいかない。

セツナは殺して殺して殺し続けなければならぬ。

エステルは「残念」とだけ言つて、再びコーヒーを飲んだ。こんな不味いものをよく顔色を変えることなく飲むものだ。

「じゃあ、私のお話を聞いてくれる？」

「ああ」

昔、ある所に1人の美しい女がいました。女は自分が美しいことに幼い頃から気付いていて、たくさんの人から愛される術を知っていました。

成長した女は、街で出会った見知らぬ人の勧めでファッションモデルの仕事を始めました。そんなに忙しくはなかったけれど、仕事はある程度貰えて女は充実した暮らしをしていました。

でも、同業の人達に女は嫌がらせを受けていました。化粧品を盗まれ、仕事を貰うために男と寝ていると、根も葉もない噂を周囲に吹き込まれていました。

女は別の顔になりたいと願いました。そして、女は別の顔で生きるために、仮想世界で全く違う顔になることを決めました。でも、仮想世界でも女は現実と同じ顔で生きることになりました。

男たちは女を守るために進んで魔物と戦い、女にプレゼントをくれるようになりました。それを面白く思わない同性の人達に、女は人気のない森の中へと連れ込まれ、リンチされました。女をリンチした人が言っていました。あんたの美しさは罪だと。

皮肉なことに、女をリンチしていた人達は魔物に襲われて影も形も残さず死にました。女は死んだ彼女達が落とした転移結晶で街に逃

げました。

女は今、罪を償って生きています。男の欲望に、自分の体を差し出しています。それが、美しい顔に生まれてしまった、女にできる贖罪です。

「お終い」

エステルの語る物語が終わった。長く話したエステルは、カップに残っているコーヒーを飲み干した。

言葉を差し込まなかったセツナは黙ったまま。空になったカップを見つめるエステルの、物憂げに目蓋が垂れた目を見ている。セツナは何も言わない。エステルの語る物語の意味を理解していても、語られた罪を掬い取る言葉を投げかけることができない。

たとえ言葉を向けることができたとしても、それは無責任な妄言でしかない。

セツナに誰かの罪を赦すことはできない。セツナも罪を抱えている。セツナに罪のない天使のように、誰かに「赦します」と判決を下す資格はない。

「そういえば、これロットーさんからあなたに渡すよう頼まれていたの」

エステルはウインドウを開き、選択したアイテムをオブジェクト化させた。テーブルの上に、細身の剣が現れた。

「さつき渡しそびれちゃったみたい」

セツナは指で宙を叩いた。剣の上にポップアップウインドウが浮かび上がり、剣の名前が表示されている。《ホロウブレイズ》と載っていた。

「ロットーさんが持てるだけのアイテムとお金で、鍛冶屋さんに頼んで作ってもらったんですって」

セツナはメインメニューを出し、剣を装備する。ソファから立ち上がると、剣を振って使い心地を確かめた。パラメータの数值は、奪われたリーパーズエツジより大きく劣っている。軽すぎるし、攻撃力もそれほどものではない。

「悪くない剣だ」

「良かった、ロットーさん喜ぶわ」

「あんたは、ロットーの気持ちに伝えてやらないのか」

エステルが垂れた目蓋を少しだけ上げた。

「あなたは、そういうことに興味が無いと思ってた」

「興味は無い。ただロットーが分かりやすいだけだ」

「確かに」とエステルは微笑む。

「女っていうのは、気持ちを知っていても言ってくれぬまで待つものなのよ。相手がそのことに気付いていない様子を笑いながらね」

「酷いな、女は」

「ええ、女は酷いわ。だから私も、彼の気持ちに応えるかどうかは、彼が自分から言ってくれぬまで待つつもり。その時まで、生きていたらだけどね」

エステルはソファから立ち上がった。その顔を再び月光が照らした。

「そろそろ行くわ。ドナシアンが待っているから。お話に付き合ってくれてありがとう」

エステルはドアへと歩き出し、ノブに手を掛けた所で止まった。ノブを捻ることなく、セツナへと振り向く。

「セツナさん、あなたは生きてね。あなたの力は人を殺すだけじゃなくて、救うこともできるはずだから」

エステルは寝ている奴隷達を起こさないよう、物音を立てずにドアを開け、その奥に広がる暗闇の中へと消えていった。

彼女は今夜も、罪を償いに行くのだ。

？

◆

風に揺れる草がセツナの頬をくすぐってくる。その細く痩せた葉に焦点を合わせれば、現実と遜色ない細かな造形をシステムが見せてくれる。葉に通っている筋も、葉に紛れている花のおしべに付着している花粉まで。

草原の中でうつ伏せになって身を隠していると、幼い頃友達とかくれんぼをしたのを思い出した。服が土と枯草にまみれながら草の群

れに隠れていたセツナは、鬼に追われる側だった。今、あの頃と同じ状況にいるセツナは逆に鬼の側へと立場を変えている。鬼に追われる立場の目標は、隠れることなく堂々と草原を歩いている。

今朝ドナシアンが外出してから30分後に、セツナは巡回している軍人の目を掻い潜ってトラビアの村を出た。消音スキルを上げていたおかげで簡単に出ることができた。主街区の近くまで行つたはいが、昨晚奴隷の手を握り潰したせいでカーソルがオレンジになったセツナは圏内に入ることができない。NPCの衛兵が出てこないギリギリの線で、セツナは草に隠れてドナシアンが街から出て来るのを待った。

トラビアに駐屯している《軍》の指揮を任されたドナシアンは、1日おきに第1層の本部へ報告をしに行くとしてロットーから聞いた。仕事熱心なことは感心する。その変わり映えしない報告を小まめに行っているから、《軍》の上層部メンバーはドナシアンを信頼するし、ドナシアンが指揮するトラビアの村が平和な村だと思っている。

本部での報告はすぐに終わったようだった。セツナが村を出てから1時間もしないうちに、ドナシアンは部下2人を引き連れて主街区から出てきた。

セツナがドナシアンを殺し、ギルドメンバーリストで彼の反応が消滅したことをロットーが確認したら、武装した奴隷達が反乱を起こし主街区まで逃げるといふ予定だ。ドナシアンを殺したら、セツナは転移結晶でトラビアに戻り奴隷達に加勢することになっている。

村にいる軍人はロットーを除いて8人。グリーンはドナシアンと、彼に同行している部下達の計3人のみで、後の村にいる者は皆オレンジだという。だとすれば村にいる軍人をPKしても、奴隷達はオレンジ化することなく圏内に入れる。

完璧な作戦とはお世辞にも言えない。村の奴隷達はセツナを除いて17人。内4人の女達は戦闘要員ではない。実質的な戦力が平均レベル30以下の13人で、恐らく10以上はレベルが高い軍人5人を相手にしなければならぬ。

だからセツナはドナシアンを殺したらすぐに村へ戻らなければな

らない。戦力に関してほぼセツナに依存した作戦だった。

ドナシアン一行が主街区から離れてしばらく、彼等の姿が草原の彼方へと消えた頃にセツナは草の群れから出た。フードを被り、追跡スキルによる補正で地面に浮き出た3人分の薄緑色の足跡を追った。

敏捷度にものを言わせた全力疾走で、すぐに一行に追いついた。消音スキルを発動させたセツナの足音は彼等の耳に届くことなく、ライトエフェクトを纏ったホロウブレイズで部下の腹を突いた。片手剣技の《ソニックストライク》は部下の体を吹き飛ばし、一気にHPをゼロにした。宙を飛ぶ部下の体が色彩を失い、地面に衝突したと同時に碎けた。

突然の出来事にドナシアンともう1人の部下が呆気に取られている内に、スキル発動後の硬直が切れた。セツナはすかさず跳躍し、《月弧刃》でもう1人の部下の首を落とす。

部下2人の消滅を見届けたドナシアンにセツナは剣を突き出した。ドナシアンは持っていた長槍で剣戟を受け止める。金属がぶつかり合い、2人の間に火花が散った。

「死神がとうとう軍に介入してきたか。これは君の仕事なのかな？」
「ボランティアだ」

ドナシアンは剣を弾き、長槍のリーチを活かした突きを放った。セツナは迫り来る先端の刃を剣で弾き軌道を逸らす。

「いいね！　そういう奉仕精神は持つべきだよ。社会に出たらサービス残業なんて当たり前だからね」

武器を交えれば分かる。ドナシアンは部下よりは強いが、セツナにとって取るに足らない相手だ。向こうもそれは分かっているはずだ。にも関わらず、ドナシアンは笑っていた。

「村の皆を解放して、英雄にでもなるつもり？」

「そんな賞賛はいらない。ただ彼等には生きてもらおう。それだけだ」

ドナシアンが長槍を突き出してくる。セツナは刃を蹴り落とし、それを踏み台にして跳躍するとドナシアンの胸に蹴りを入れた。攻撃のヒットでHPが減るも、ドナシアンは笑みを崩さなかった。

「分かっているのかな？　俺は寧ろ皆を生かすために努力してきたつも

りなんだよ。皆がしつかり働いてくれれば、俺は部下に殺すよう命令なんてしないさ」

「働かなければ殺すのか。随分と両極端な評価だ」

「俺達に生かしてもらってるのに、税も払わず攻略に協力もしないんだ。ただの穀潰しに生きてもらっても迷惑なだけだよ」

セツナはソードスキルの構えを取った。

「ここであんたと議論する気はない。あんたには死んでもらう」

「俺を殺したところで無駄さ。俺に逆らった時点で、皆死ぬことに変わりはないんだから」

「何」

セツナの体が逡巡する。システムアシストに逆らってしまったため、スキル発動後の硬直時間に移行してしまった。

ドナシアンは突き技が発動した。ライトエフェクトを纏った刃に抗うことができず、腹に直撃する。セツナの体は宙を舞い、草の上に落下した。HPはあまり減っていない。

ドナシアンは少年のような笑みを浮かべている。目を細めて、ほうれい線が出た屈託のない笑顔。セツナは背筋に悪寒が走るのを感じた。

幼い頃、虫の羽や脚を笑いながら千切っていた友人がいた。彼の目に悪意はなく、純粹に虫を痛めつけることを楽しんでた。彼の目と同じ光を、ドナシアンは宿している。子供が持つ無垢な残酷さを、ドナシアンは成長しても残していた。

セツナはポケットの中から転移結晶を取り出した。

「転移、トラビア」

セツナの視界が青白い光に覆われていく。セツナの視界から消えるその瞬間も、ドナシアンは笑っていた。

転移結晶を使った移動は、街や村の中央広場に転送される。草原にいたセツナのアバターは消滅し、トラビアの村の中央広場にて再構成される。

ダイヤモンドダストでも起こっているのだろうか。転移した直後の光景を見て、そう思った。

氷の結晶だと思ったそれはアバターを構成していたポリゴン片で、それが村のほぼ全域で撒き散らされていた。1人に軍人が数人がかりで槍や剣を刺し、反撃の隙も与えずHPを削っている。奴隷達の宿舎から、髪を掴まれた全裸の女が引きずり出され、その乳房に槍を刺されている。村には悲鳴と怒声が入り混じっていた。

《アインクラッド解放軍》の戦闘服を着た軍人は、ぎつと十数人はいた。既に何人が殺されたのか、地面にオブジェクト化されたフェンサーソードが何本も転がっている。

不謹慎に美しいと思ったセツナの視界に、横から人影が入り込んできた。艶のある髪を振り乱し、地面に倒れようとするその人影をセツナは抱き留める。

「エステル……」

腕の中にいる彼女の名前を呼んだ。エステルはフードの中にあるセツナの顔に、目蓋で半分隠れた瞳を向ける。そのHPバーは急速に短くなっていき、色が緑から黄色、赤へと変わり、消滅した。

自分の身に何が起こるのか知ってか知らずか、エステルは微笑んだ。穏やかに、物憂げさはなく、至上の幸せを享受しているかのよう

に。
エステルはゆっくりと目蓋を閉じた。その表情を固めたまま、色彩を失っていく。彼女の幸せそうな表情が消えた。腕の中の重みも消えた。この世界の、彼女の存在が消えた。

セツナは腕の中で起こったダイヤモンドダストを見つめていた。光になったエステルだったものの欠片が宙に霧散していく。

セツナは立ち上がり、ホロウブレイズを握る手に力を込めて走り出した。悲鳴と怒声、そして金属がぶつかり合う混沌の中へと突っ込んだ。

1人、2人。

セツナは砕いた3Dオブジェクトを数える。

腹を貫き、胸を貫き、目を貫き、口を貫く。

3人、4人。

腕を落とし、脚を落とし、首を落とし、上半身を落とす。

5人、6人。

途切れることなくソードスキルを繰り出し、剣だけでなく体術技も繰り出し、セツナはPKした人数を数えていた。

任務でPKする時は必ず数を覚えるようにしている。ギルド殲滅の際に、事前に調べたメンバーの数と殺した数を照らし合わせるためだ。

軍人達が何人いるのかは把握していない。数えたところで無意味だ。それでも数えずにはいられない。思考を働かせ、冷静になって沸き起こる衝動を鎮めなければならぬ。これは効果があつた。軍人達をPKしていくセツナは冷静だった。右手で剣を振り、左手には解毒結晶を常に握っておく。何度か麻痺毒のダガーを食らっても、すぐに回復して戦闘に復帰することができた。

15人。

それが、セツナが拘束されるまでに殺した人数だった。

持っていた解毒結晶を全て使い果たしたところで麻痺毒のダガーを食らい、手を縄で縛られた。フードがはだけ、地面に這いつくばるセツナを1人の軍人が抑えつけている。村に戻ったドナシアンがそんなセツナを見て無邪気な笑みを浮かべている。

ドナシアンとその部下1人とセツナ。村にいるプレイヤーはその3人だけだった。さつきまでの喧騒が嘘のようだ。ただ、村のあちこちで散らばっている剣と槍が、ここに多くの人間がいたことを示していた。

「ドナシアン大佐、こいつはどうします?」

セツナを抑えつける軍人がドナシアンに聞いた。この軍人は麻痺毒で動けないセツナを殺そうとしたが、その頃には村に戻っていたドナシアンに制止された。

「彼はこの村を襲撃した犯罪者だ。その罪状を大衆に知らせた上で処刑しよう」

ドナシアンは揚々と言う。楽しそうだ。新しく買ってもらったゲームをプレイする子供のように。

「彼は本部に連れていこう。上に報告しなきゃね。村を襲撃した賊の

一味として」

セツナは軍人に縄を引かれ立ち上がった。既に麻痺毒は切れていた。歩き始めるドナシアンに続き、セツナと軍人も足を踏み出す。

「ん？」

セツナの縄を引いていた軍人が、縄を握っていたはずの掌を見つめた。手の中の感触が消えて、代わりに光るポリゴン片が舞っている。軍人はセツナの手には視線を移す。腰のあたりで縛られていたはずのセツナの手には剣が握られていて、その周辺にもポリゴン片が舞っていた。

「なっ」

驚愕に満ちたその顔に、セツナは刃を滑らせた。

背後で起こった異変を察したドナシアンが振り向く。そこにはセツナ1人だけが佇んでいた。部下の消息を、セツナの隣で拡散していくポリゴンから理解する。

「何で……」

ようやく、ドナシアンの顔から笑みが消えた。

「アイテムには耐久値がある……」

拘束に使われた《リストリクシヨンロープ》は雑魚モンスターなら有効だが、30層以上のモンスターに使ってもすぐに耐久値が削られて拘束が解けてしまう。プレイヤーでも筋力パラメータを少し上げるだけで破壊できてしまうものだ。

セツナは装備フィギュアを操作して武器を切り替える。腰の鞘に収めたホロウブレイズが消滅し、小ぶりのダガーが現れた。

ドナシアンはポケットから青い転移結晶を取り出した。それを掲げようとしたところで、セツナは地面を蹴った。ほぼ一瞬と言ってもいいスピードでドナシアンの懐に飛び込み、黄色のライトエフェクトを纏った拳を腹に打つ。ドナシアンはぐぱあと奇妙な声を上げながら宙に飛び、地面を転がった。手から零れ落ちた転移結晶が近くに落ちている。

「お前」

睨むドナシアンの顔面を蹴飛ばす。何か言おうとしたようだが、知

らない振りをする。ドナシアンを肩を掴み無理矢理立たせて、その顔に何度も拳を打ち付けた。

ほぼ一方的で、それでいて最も原始的な暴力だった。剣で刺すわけでもなく、ソードスキルを使うわけでもなく、ただ拳で殴り、足で蹴るだけ。この剣の世界で、こんな野蛮な戦いは無粋というものだ。

ドナシアンは地面に転がる剣の1本を掴み反撃してきた。剣を振るよりも速く、セツナはドナシアンの口に肘打ちを決め込む。軽いジャブのつもりだったが、ドナシアンにとってはどの一撃も重かったようで、HPが残り4割まで減っていた。

いくら顔を殴っても、痣はできず唇は切れず歯も抜けない。だが腫れ上がっていないその顔は、見事な恐怖の表情を作ることができていた。

「良い顔になったじゃないか」

セツナはドナシアンの襟首を掴んで放り投げる。

地面に四肢を投げ出して衝突したドナシアンはすぐに立ち上がり、癩癩を起こした子供のようになり叫びながらセツナ目がけて走り出した。

「うあああああっ！」

セツナは装備した短剣を抜き、それを投げた。短剣は吸い込まれるように、ドナシアンの腹に突き刺さる。

ドナシアンの体がビクンと痙攣した。HPバーを囲むグリーンの枠が点滅している。ドナシアンは身の異変を悟り、目を剥いた。

セツナは多くのオレンジギルドに潜入してきた。そこで彼等の犯罪手段を見て学んできた。拘束用アイテムも、麻痺毒を仕込む技術も。

「あなたは十分楽園を楽しんだ。次は地獄を楽しんでこい」

セツナは走り出した。目標に達する直前で跳躍し宙で体を反転させ、麻痺毒で倒れようとするその胸に、閃光を帯びた右足を叩き込んだ。

体術脚技《ゴルドブレイク》はドナシアンの残りHPを一気にゼロにした。吹き飛んだドナシアンの体は地面に戻ることなく、宙で砕け飛散していった。

欠片が光の粒となり、蒸発するまで見届けたセツナは村を見渡した。

完全な静寂だった。セツナ以外誰一人いない。軍人たちはNPCすらもPKしたようだった。NPCはPKされても復活する。何事もなかったように、村を訪れたプレイヤーにクエストの依頼をするのだろう。システムに従って、村に与えられた役目をこれからも果たすのだろう。

猛烈な眠気と空腹が襲ってきた。レストランで食事をして、宿で眠りたい。そんな生理的欲求が思考の大半を占める。カーソルがオレンジだから、カルマを回復しなければならぬ。

面倒くさいと思いながら、セツナは静かな村を出ていった。

？

◆ あれから1ヶ月が経とうとしていた。

セツナはあの後、カルマを回復してすぐにグランザムの血盟騎士団本部へ行き、ヒースクリフに突然ギルドを抜けた理由を全て余すところなく説明した。

「生還者が君1人ならば、隠し通すに越したことはない」

それがヒースクリフの判断だった。

セツナがトラビアにいる間にもヒースクリフのもとにはたくさん の案件が飛び込み、休む間もなく再びギルドに入り仕事に戻った。

仕事はあまり上手いかなかった。ホロウブレイズは軽いが力不足が否めず、目標に止めを刺すに至らず取り逃すミスを連発した。おかげでたった1人の標的を仕留めるのに1週間も山籠もりする羽目になった。

《軍》はトラビアの件について公表した。その内容は連日インクラッドで発行されている新聞の一面を飾っていた。

トラビアの悲劇。

《軍》が駐屯していた村をオレンジギルドが襲撃。村に滞在していたプレイヤーは全員PKされ、鎮圧にあたった《軍》の部隊も甚大な被害を被った。結果的にオレンジギルドはメンバー全員が《軍》にP

Kされ、事態は収束した。

新聞に書かれていた記事はこんな内容だ。このことはプレイヤーの間にも話題となり、アインクラッド最大の悲劇と見る声もあるようだ。

セツナは久しぶりの非番の日。どこの層かは覚えていないが街に出ていた。そこで偶然、彼を見つけた。彼も街で群衆に紛れるセツナに気付いた。

「お久しぶりです、セツナさん」

「久しぶりだ、ロットー」

再会の挨拶は素っ気ないものだったが、セツナは内心驚いていた。ロットーはあの虐殺で死んだと思っていた。反乱がばれて《軍》に殺されたか、もしくはセツナがロットーだと気付かずに殺したか。

ロットーとセツナは街のベンチに腰かけた。ロットーはセツナにコーヒーを飲ませてくれた。とても香り高く美味だった。ロットーは《軍》で食糧調達だけでなく、給仕の仕事も請け負っていたらしい。料理スキルもそれなりに上げていたのだろう。

「その剣、使ってくれているんですね。どうですか？」

「悪くない」

「セツナさんは、まだ仕事を続けているんですか？」

「ああ」

「俺が生きているのを見て、腹が立ったでしょう？」

「いや、生きていて良かった」

セツナがそう言うと、ロットーは泣いた。街行く人の視線に晒されながらも、ロットーは泣き続けていた。うれし涙、というわけではないらしい。むしろ、セツナの言葉はロットーに痛みを与えてしまったようだった。

「俺…、実はあの日の夜、ミーティングでドナシアン大佐にばれたんです。拷問されて…、死ぬ寸前まで追い詰められて、全部話したんです。セツナさんが大佐を殺しに行くことも…、皆が反乱を起こすことも……」

セツナは黙って聞いていた。エステルの時と同じように、ロットー

の罪の話を。

「それでも……、エステルさんだけは助けたかつたんです。転移結晶で、2人で圏内に逃げようと思いました……。でも、エステルさんがセツナさんに抱かれて死ぬのを見て……。何もかもがどうでもよくなつて1人で逃げたんです。俺は裏切り者です……。結局自分のことしか、考えてなかった……。……」

ロットーは散々泣いた後、トレードウィンドウを開きアイテム取引を求めてきた。ロットーのアイテム欄に次々とアイテム名が表示されていく。

《スローター》、《ダンシングラム》、《タイタンイーター》、《リーパーズエッジ》。

「これは……」

「軍を辞める前に、ギルドストレージからかつぱらってきたんです。もしまた会えたら、返さなきゃと思って。本当に、また会えて良かったです」

ロットーの欄にはまだ新しいアイテム名が表示され続けている。どれも見覚えがある。セツナが奪われていたアイテムと武器だ。

「アイテムは受け取るが、武器はあんたが持っている。そろそろ新調するつもりだ」

「いいんです。これはセツナさんが持っているべきですよ」

「俺がストレージに放置するよりも、あんたが使ってくれる方がいい」
「俺には使いこなせません。お願いします、受け取ってください」

押し問答の末、折れたのはセツナの方だった。セツナがコルの金額もトレードするアイテムも選択しないまま、ロットーはウィンドウのOKボタンを押して取引を成立させてしまった。取引というより譲渡だが。

「エステルさんが言っていました。セツナさんは英雄って」

「俺は誰も救えなかった。そんな体たらくで何が英雄だ」

「でも、確かにあの時セツナさんは、俺達の英雄でした。セツナさんがいたから、皆戦おうとしていたんです」

「今更何を言おうと変わるものはない。彼等は結局死んだ」

懸命に笑顔を取り繕うとしているロットーに、その事実を述べることは追い打ちをかけるようなものだ。ロットーの顔から僅かばかりだった笑みが消え、2人の間に数瞬の沈黙が流れた。

「さて、それじゃ俺は行きます」

沈黙を破ったロットーはベンチから立ち上がった。セツナも立ち上がる。この後は予定もない。新しい剣を鍛えるために鍛冶屋を巡ろうかと考える。

「それじゃ」と素っ気ない挨拶を交わし、2人は互いに背を向けて歩き始めた。

「セツナさん!」

不意に背後からロットーの声が聞こえ、セツナは振り返る。

ロットーは笑っていた。同時にどこか悲しそうだった。セツナはこれから彼が何をしようとしているのか分かった。でもそれを止めようとは思わなかった。

ロットーは罪を抱えてしまった。あの月を物憂げに見ていたエステルと同じように。

罪を抱えた人間がどう自分を罰するのか。その一番手っ取り早い方法を、彼等と同じく罪を抱えているセツナは知っている。

「セツナさんは生きて下さいね! あなたはきつと、沢山の人を救えますから!」

それだけ言うと、ロットーは街の中へと消えていった。

◆ 翌日。アインクラッド外周部から男性プレイヤーが飛び降り自殺したことが、新聞に掲載された。

第7話 遺跡には伝説を

第49層の主街区は賑やかな街だ。雑貨屋が多く、ホームのインターネットにと多くのプレイヤー達が利用している。店の豊富さも魅力らしい。さながら街全域がショッピングモールのようなようだ。

セツナはあまり人混みが好きではないが、この街はそれなりに気に入っている。街の喧騒に紛れていれば、身を隠すことができる。街はカーソルがグリーンであれば受け入れてくれる。たとえさつきカルマを回復したばかりの元オレンジプレイヤーであっても。

仕事終わりに届いたメッセージで指定された広場のベンチに、そのプレイヤーは腰掛けていた。街の人混みに紛れ込み、どこにでもいるありきたりな人間を装って。何度も会っているためか、それとも小柄ながら妙な存在感を放っているせいか、セツナはすぐに見つけることができた。

「珍しいな。あんたの方から呼び出すなんて」

セツナが話しかけると、そのフードを被ったプレイヤーはニツと笑みを浮かべた。頬に描かれた髭のペイントが歪む。

「ああ、お前さんに見せたいものがあってナ」

「アルゴがそこまで言うつてことは、よほどのものか」

アルゴは一枚の紙をオブジェクト化し、セツナに手渡した。どうやら記録結晶で撮った写真のようだ。

そこに写るものを見て、セツナは逡巡した。一見動揺の気は感じないが、その目は僅かに見開き、写真を持つ手に力が入って写真にしわが入った。

「これは……」

「35層の迷いの森で撮られた写真だ。お前が探している奴と特徴が似ていたから、見せておくべきだと思っタ」

セツナは以前からアルゴにプレイヤーの情報提供を求めている。オレンジプレイヤーの情報提供を受けるよう取引はしているが、そのプレイヤーに関しては最優先として伝えるよう頼んだ。

アルゴは理由を聞かなかった。アルゴにそのプレイヤーの情報を

集める義務はない。ただ入ったら伝えるだけでいい。そのセツナの要求に彼女は了承してくれた。

「名前は分かるか」

「いや、そこまでは分からん。ただ、そいつの腕には《笑う棺桶》ラフィン・コラインのエンブレムがあつたらしい」

「笑う棺桶……」

セツナは写真の中の人物を凝視する。森の中で木々に隠れて撮影したのだろう。最大ズームのせいで画質は粗い。フードを被っていることも相まって顔は見えない。だがフードで隠し切れない頬にあるケロイド状の傷跡。それが確信への材料になる。

「オレっちに分かるのはそれくらいだ。新しい情報が入ったら教えてやるヨ。タダでナ」

「済まないな、アルゴ」

アルゴはかぶりを振る。

「約束したからナ。お前さんにはタダで情報を提供するつて。それに、お前さんからは金になるネタをたっぷり貰ってるサ」

ヒースクリフがセツナを使って行っている犯罪者狩り。それは情報屋にとってはかなり高額な取引ができる情報らしい。一度だけセツナの情報はどれくらいの高額を見積もるのか、聞いたことがあった。あまり安く見積もられて売られたらまったものではない。もし安ければ証拠隠滅としてこの小柄な情報屋も手になければならない。

「死神の情報を買うプレイヤーはいるのか」

「ん、たまにナ。でもしつかりとシラ切ってるヨ。知ってるなんて言ったらオレンジに狙われるからナ」

アルゴも自分が危険な領域に足を踏み込んでいるのは理解しているらしい。それくらい別のつかなければ情報屋なんて商売はできないだろうし、セツナも情報のやり取りをしようとは思わない。

セツナが写真を返そうとするとアルゴに「持っとケ」と断られ、自分のストレージに納める。アルゴはセツナの腰に提げたりーパーズエッジに視線を向けていた。

「剣、戻したんだナ」

「貸していた知り合いから返してもらった」

「そうカ、そいつは良かった。前のはお前さんが使うにはなまっちすぎたしナ」

「これでも厳しくなってきた」

「45層ボスが落とす魔剣も、今の前線じゃナマクラつてことカ」

「新しい剣が必要だ。奴と戦う時に備えるために」

現在セツナが愛用している剣《リーパーズエッジ》はドロップアイテムだ。とあるオレンジギルドに潜入していた時期、それなりの猛者が揃っていたギルドで第45層のボス攻略を執行することになったが、メンバーが次々と死にセツナー人が生き残った。手を汚さずにギルドを潰せたセツナは、死んでいったメンバーたちが見抜いたボスの弱点を突き、単独で撃破を成し遂げたのである。

そのボスが落とした剣がセツナの懐に収まり今まで使ってきたのだが、現在の最前線のモンスターでは苦戦することが多くなった。軽い上に攻撃力もそれなりにあるため、これ以上に使い勝手の良い剣が果たして存在するのか心配だ。

「俺の最高の剣を作れる鍛冶屋はいるか」

セツナは鞘から剣を抜いて、その刀身をアルゴに見せる。銀色の刀身は渋みがあつてなまくらのようなのだが、これでも定期的に整備を鍛冶屋に頼んでいる。その鍛冶屋に武器の作製を依頼してはみたが、セツナの要求に応えられる程のものは作れないと断られた。以前入っていたオレンジギルドの鍛冶職人なら作れたのかもしれないが、彼はもういない。

アルゴは顎に手を当てて数秒唸り、分かりやすく「そうダ」と人差し指を立てた。

「確か、48層で店をやってる鍛冶屋がいたナ。結構評判もいいし、あの《KOB》の副団長の剣を鍛えタ」

副団長の剣を作ったというだけで、十分信用に値するものだった。確か、48層の主街区はリンダースと叫ぶのか。

「行ってみるか、リンダースに」

?

完全にスランプだ。

椅子にうなだれながら、あたしは深くため息をついた。

ここ最近、全く仕事に身が入らない。ハンマーを握る手に気合が入らず、代わりに雑念ばかりが混じって集中できない。おかげでオーダーメイドの注文を受けても納得がいくような品ができないし、昨日は研磨作業で剣を砥石に強く押し付けたせいでポツキリ折ってしまった。店に飾る用でお客様から預かったものじゃなかったのが不幸中の幸いだ。

原因は分かっている。先月の出来事のせいだ。

あの無茶苦茶な黒い剣士に最高傑作を折られ、彼のために最高傑作の剣を作ったのが。数年分の熱を一気に燃やしたようなあたしの恋は始まり、そして終わった。いや、そもそも始まってすらいなかった。気持ちを伝える前に自分がピエロだったことに気付いてしまった。ずっとこの熱は燃やし続ける。

第2ラウンドする。

そう誓ったはずなのに、あたしの胸から熱はずっと引いてしまったようだ。我ながら情けない。店を構える職人として、自分の仕事に情熱を持ってないなんて。

これでは、彼の隣にいる資格が無いのも当然だ。

「やっぱり、アスナには敵わないな……」

その独り言が、お客様がいない店の中に消えていく。心無しか、店の空気が重い気がした。カウンターに立つ少女NPCは何の反応もしてくれない。

気晴らしにどこか行こう。

フィールドに出てモンスターと戦うか、どこかの街で買い物をするか。何でもいい、外で何かできればそれで。

そう思い立ったあたしは勢いよく地面に両足を叩き付けて立ち上がった。

「ちよっと出かけてくるね」

NPCにそう言ってあたしは店のドアを開け――

「うわあっ！」

丁度店に入ろうとしていた来客とぶつかった。あたしの体は店の中に押し戻され、フローリングの床に尻もちをつく。

親切なことに、来客はあたしを起こそうと手を差し伸べてくれた。恥ずかしさと嬉しさが混じりながら、あたしは俺を言おうと顔を上げた。

「…キリト！」

無意識にその名前を口に出したけど、その来客はキリトじゃなかった。逆光で顔が影に覆われた来客は表情を変えないが、多分困惑していることだろう。

「あ、あのすみません、その……」

あたしはどうか取り繕うとしたが、上手い言い訳が見つからず視線をあちこちに泳がせた。結局、あたしは恥ずかしさで俯きながら、差し伸べられた手を掴んで起き上がることができた。

「ありがとうございます。それと、いらつしやいませ」

精一杯の笑顔であたしはその男性プレイヤーの来客を出迎える。ゆっくりと靴音を立てて店に入るその姿を、あたしは接客なんて忘れてボーっと眺めていた。

あいつと似てる。

黒い髪に黒い瞳。足元ですっぽりと体を覆っている黒いコート。夜だと暗闇に完全に溶け込んでしまいそうなその妖しげな雰囲気、あの剣士と重なる。でも細かい所を見れば完全に別人だ。

身長は彼よりも一回り高いし、目尻が吊り上がって彼よりも険しい顔つきをしている。

何て言うか、この戦いばかりの世界でアバターが成長するのだとしたら、あいつはこんな感じになるのかなあと、そんな気がした。

来客は陳列ケースと壁に掛けられた武器を見ている。その表情は全く変わらない。さながら能面みたい。感情表現システムがフリーズしていて、無感情のまま表情が固定されているんじゃないかと思えてくる。

「この武器は……」

「は、はいっ！」

突然話しかけられ、驚いたあたしは上ずった声で反応してしまっ
た。

「全部あんたが作ったのか」

声に全く抑揚がないあまり、あたしは一瞬それが質問なのか分から
なかった。年齢はあまり変わらなそうだけど、声や仕草や表情が外見
と釣り合っていない。そういつた所まであいつと似ている。

「ええ、全部あたしが鍛えた武器です。気になるものがあれば、持って
みますか？」

いつもの調子を取り戻したあたしは、笑顔で来客に尋ねる。年齢よ
り幼く見られがちだけど、あたしのこの笑顔を見に来てくれるお客も
いる。

「一番性能の高い片手剣を見せて欲しい」

その来客の言葉に、あたしはムツと口をへの字に曲げた。あたしの
武器は、そこら辺のプレイヤーが手軽に扱えるような代物じゃない。
あたしが女で、しかも童顔だから見くびられているのだろうか。

あたしはこの澄まし顔の来客に一泡吹かせてやろうと、注文通り壁
に掛けてある一番性能の高い片手剣を外した。

最高傑作は一ヶ月半前にあいつが折ってしまったが、来客に渡した
剣も会心の出来だ。

来客は青みを帯びた刀身を眺め、軽く素振りする。反応を期待して
みたが、来客は表情を変えないまま。感心しているのか、物足りない
のか分からない。

ふと、あたしはデジャヴを覚えた。1ヶ月前に同じようなやり取り
をした。この素振りの後、もしかしてと思い咄嗟に剣を握る来客の手
を掴んだ。

「まさか、耐久力を試すとかいってあたしの剣をへし折ろうとはしな
いでしょうね!？」

「するわけないだろう」

来客は素っ気なくそう言った。あたしは安心して手を放す。そう

だよね、普通いきなり売り物の剣をへし折ろうとはしないわよね。

剣を返した来客は無表情だが、奇天烈なことを言ったあたしを変な奴だと思っっているかもしれない。これも、あたしがこんなことを言う原因を作ったあいつのせいだ。

「オーダーメイドを頼みたい」

「結構、高くつきますけど…」

「構わない」

来客はそう言うのと、腰から鞘ごと剣を外しカウンターの上に置いた。

「これよりも高性能の剣を鍛えて欲しい」

来客の目つきは、外見の年齢にそぐわない凄みがある。その目に少し恐怖を感じながらも、あたしは金属製の鞘から剣を抜いた。重さはそれほどでもない。指先でクリックしてポップアップメニューを表示させた。

カテゴリ《ロングソード／ワンハンド》、固有名《リーパーズエッジ》。製作者の銘、無し。

「これって、モンスタードロップ？」

来客は黙って首肯し、一枚の紙をオブジェクト化させてあたしに渡してきた。紙には、このリーパーズエッジのパラメータが事細かくメモされている。

紙に書かれている数値を見て、あたしは目を見開いて口をあんどりと開けた。要求筋力地は低めなのに、軽量さに対して攻撃力が不釣り合いなほど高い。あたしは親友のためにスピード重視の軽い剣をたくさん鍛えてきたけど、これほどのものは滅多に作れない。モンスタードロップでこの数値は、魔剣とはいかなくても名剣と言っている。

「他にも、武器見せてくれる？」

興奮したあたしはいつの間にか口調がぞんざいになっていた。でも来客は気にする様子もなく、「ああ」と次々と武器をオブジェクト化して、カウンターのの上に並べていった。

カテゴリ《短剣》、固有名《スローター》。製作者の銘、《スナツ

チャー》。

「攻撃力は期待できないから、牽制や投擲ぐらいしか使い道がない」

カテゴリ《ブーメラン》、固有名《ダンシングラム》、製作者の銘、《スナツチャー》。

「これは扱い辛くてほとんど使っていない。使ったのは奇襲をかけた時だけだ」

カテゴリ《大剣》、固有名《タイタンイーター》。製作者の銘、《スナツチャー》。

「攻撃力は高いが、重すぎて動きが鈍くなる。俺には向いていない武器だ」

どれも情報屋の名鑑に上級クラスとして載っている武器だ。それなのに、あたしはこのスナツチャーという職人を知らない。これだけの武器を鍛えたのなら、同業者の間で名を知られていないのは妙だ。

「このスナツチャーって人、どこに工房があるんですか？」

「32層を拠点にしていたが、死んだ」

セツナの口から出た事実には、あたしは黙って俯くことしかできなかった。同業者として、腕の良い職人が死ぬのは残念でならない。生きていたら、きっとあたし達の界限で名人として知られていただろう。

「作れそうか」

来客の問いかけに、あたしはカウンターに並ぶ刀身を眺めながら唸る。これらの武器はあたしに作れなくもない。高ランクだけど、同じ名前と姿の代物は他にも存在している。数は決して多くはないけれど。

それにしても物々しい名前ばかりだ。皆殺しスローターだの、踊る憤怒ダンシングラムだの、巨人喰らいタイタンイーターだの、死神の刃リバーズエッジだの……。

「多分、作れると思います」

どんなレア素材を使ったとしても、完成した武器のパラメータはラムダムに設定される。悔しいことに、あたしの仕事は良い業物ができるといふ保証がない。

でも、あたしはこの人の最高の剣を作ってみたいと思った。これ

は、マスターミス熟練鍛冶職人としてのプライドだ。

「でもうちにある金属じゃ、これを超えるものは……」
「なら取りに行ってくる」

来客はそう言うと、並べた剣をストレージに戻してリーパーズエツジを腰のホルダーに繋げた。

「行ってくるって、当てはあるんですか？」

「情報屋から仕入れる」

「あ、待って！」

あたしはドアを開けようとする来客の腕を掴んだ。そんな行動に出たのは無意識だ。あいつに似た背中を見て、あたしは胸にこみ上げられるものを抑えることができなかった。

「金属入手のクエストなら、あたしが知ってます。とっておきの」

「それは都合が良いな」

「でしょ。だからクエストのことを教える代わりに……」

自分でも何やってんだと思う。こんなのあたしらしくもない。それでも、あたしはその言葉を言わずにはいられなかった。

「あたしも、クエストに連れてって下さい！」
？



砂の地面。見渡す限りの砂。

そんなに体重を乗せていないのに、足が数センチ潜る地面を踏みしめながらあたしは歩いている。外周から差し込む日光を砂が反射して、ぎらぎらと熱を放っていた。

主街区を出てから2時間歩き続けて、今は午前11時。1日で最も気温が高い時間帯だ。

ここは年柄年中暑いけど、今は夏だからか余計に暑く感じる。まるで熱した鉄釜の上を歩かされているみたいだ。もともと、この60層の砂漠地帯を金属素材入手クエストの舞台として紹介したのはあつしなのだが。

あたしの数歩前を歩く彼は何も言わず、無言のまま砂の上をすたすたと歩いている。あんな暑苦しいコートを着て平気なのだろうか。

SAOでは汗をかかないけど、あたしは鉄製の防具を装備したせいか熱がこもっている。冷たいシャワーを浴びたいと思いつながら、あたしは前にいる背中を追いかけた。

「大丈夫か」

前を歩く彼が振り向いて、そんな言葉を投げかけてきた。

「ああ、大丈夫です。セツナさん」

あたしは精一杯の笑顔で返す。

セツナ。それが彼の名前だった。店でパーティを組む時、素っ気なく名乗った。パーティを組めばあたしの視界に彼のHPゲージと名前が表示されるから名乗らなくても分かる。セツナは口数が少ないから、自分から名乗ったのが意外だった。何となく、あまり自分のことを話すような性格じゃなさそうなのに。

まあ、他人に心を閉ざしていたあたしが言えることじゃないけど。「やっぱり、あんただけでも戻った方がいい。素材は俺が取ってくる」「いえ、この手のクエストはマスターミスがいないと駄目って噂がありますし」

「店はいいのか。まだ一度もクリアされていないからって、店を休むほどの代物でもないかもしれないぞ」

「いいんです。仕事は余裕ありますし、たまには外に出たかったんです」

外に出たかったのは本当だ。でも、まさか男と2人でクエストに行くとは思ってもみなかった。どうしてこの人に着いていこうと思っただらうと、あたしは理由を探す。

正直好印象とは言い難い。無愛想で何を考えているのか分からないし。

でも、その不明瞭さがあいつと重なる。あたしは今でも、あいつの背中を追いかけているのだろうか。あいつへの未練を、この人に向けているのだろうか。

いや、違う。一ヶ月前、あたしは自分の気持ちに区切りをつけた。あいつの傍にいいのはあたしじゃない。あたしができることは、あいつの剣の手入れをしてあげること。良い素材が手に入ったら、あ

いつのために剣を鍛えてあげること。それで片付いたはずだ。なのに、この人を見ると胸がざわつく。胸の中で何かが暴れているように。

「意味はないかもしれないが、飲んでおけ」

セツナは水の入った瓶をオブジェクト化させて手渡してくれた。あたしはそれを一気にラツパ飲みする。無味無臭の水だけど、それはあたしの渴いた喉を潤してくれた。

「ぶはっ、生き返るー!」

まるで風呂上りのビールを飲んだ中年親父みたいに、あたしは口元を手で拭った。そしてすぐ、隣にセツナがいたことを思い出して恥ずかしくなる。そのセツナは指でウインドウを操作していた。せめて何か言っただけほしい。尚更恥ずかしくなる。

そんなあたしの羞恥など知らない涼しい顔をしたセツナは、ワールドのマップデータを表示した。目的のフラグを立てる村まで結構ある。あたし達は、主街区から村までの距離をやっと半分進んだところだった。

「あとどれ位かかるんでしょうね」

「大体20分くらいだ」

「え?」

この人地図読めないの、と思った。半分進むのに2時間かかっているというのに。

突然、セツナはしゃがんだ。

「乗れ」

「え?」

「村まで走る」

「走らって砂漠を!」

「ああ」

セツナの体勢からすると、間違いなくあたしを背負って走ろうとしているのが分かる。おんぶってあたし年齢的に高校生だし。他にプレイヤーがいらないからってそれは恥ずかしい。

「早く乗れ」

「い、いいです歩きますって!」

「ここでへばってたら夜になっても着かないぞ」

「で、でも……」

痺れを切らしたセツナは立ち上がると、あたしを肩で背負った。あたしは反射的に「ぎゃーっ!」と叫んで手足をジタバタさせた。それでもセツナは放してくれない。

「大人しくしてろ。振り落とされるぞ」

セツナは身を屈めると、「行くぞ」と言っつて砂の地面をダツシユした。

風と舞い上がった砂があたしの顔を叩いてくる。体勢が悪い上に激しく揺れるものだから、あたしは吐き気を催した。嘔吐なんてしないだろうけど、戻すまいと口を固く閉じてセツナの首にしがみつく。

あたしはその乗り心地最悪のジェットコースターを、予告通り20分もの間耐える羽目になった。質の悪いことに、あたしの体感時間はそれよりも遙かに長く感じられた。

?

◆

砂漠のオアシスにある村に着いてすぐクエスト発生のNPCのもとへ。とはいかず、あたしは村についてからしばらくの間広場の地面で四つん這いのまま息を荒げていた。

「あんた…、無茶苦茶よ……」

「大丈夫か」

その素っ気ない言い方に、あたしの堪忍袋の緒が切れた。

「だ……」

あたしはすっと立ち上がり、セツナの胸倉を両手で掴んだ。

「大丈夫なもんですか! 女の子の体に気安く触るなんてどんな神経してんのよ! ハラスメントのOKボタン押して牢獄に送ってやるところよ!」

あいつにも触られたことないのに!

その言葉は寸でのところで踏みとどまることができた。

「…悪かった」

セツナは無表情のまま言った。言葉では謝罪しているが、表情のせいで悪びれているようには思えない。

「あー、もうっ」

あたしはセツナの服から手を放し、村の中をどかどかとブーツの踵を鳴らしながら歩いた。

「何ボサっとしてんのよ、行くわよー!」

突っ立っているセツナに向かって乱暴に言い放った。

いつの間にか、あたしはお客である彼にタメ口になっていることに気が付いた。でも訂正しようという気にはなれなかった。年はそんなに変わらなそうだし、あいつと同じで変に気を遣うことが馬鹿らしくなっていた。

あたし達は元山賊という設定の老人NPCを見つけてクエスト発生の話を聞くことができた。

幼い頃、両親を亡くした自分はなし崩しに山賊稼業に身を落とし、砂漠を彷徨っている旅人を襲ってきた。

とある旅人を襲ったとき、砂漠の中で忘れ去られた大昔の遺跡に、古代で精製された金属が眠っているという伝説を聞いた。

そして旅人の案内で遺跡に行ってみたが、遺跡に棲む魔物に旅人は殺され、自分も傷を負いながらも命からがら逃げてきた。

今は山賊から足を洗ったが、今でもあの遺跡の伝説は本当なのか、それだけが気掛かりだ。

話の内容は大体こんな感じだ。

あまり話が長くなかったのは幸いだ。NPCが設定された生い立ちや若い頃の苦労話を省略してくれたのは。

「お前さん達遺跡に行くつもりかね。遺跡まで歩いて行くのはさぞかし辛いだろう。これを使いなさい」

話の最後にNPCはそう言って、あたし達にラクダを2頭貸してくれた。

これにはあたしは大いに喜んでバンザイした。また乗り心地の悪いジエットコースターに乗るのはごめんだ。

村から出たあたし達は、ラクダの背に乗って再び砂漠へと繰り出し

た。ラクダの上はとても気持ちが悪かった。砂漠に吹く風が砂を撒き散らすけど、そんなことが気にならないほどに。目線が高くなつて、あたしは風に煽られ波打つ砂の地面に見とれていた。

「なんかいいなあ、こういうの！」

出店で買ったパンを頬張りながら、あたしは声高に言った。まるで映画「ハムナプトラ」みたいだ。ヒロイン役の女優がしていたように、あたしは早くも愛着が湧いてきたラクダの背を撫でる。

「ふふ、冒険してるって感じ。映画みたい」

「レイチエル・ワイズにでもなつたつもりか」

隣でラクダに揺られながらパンを食べているセツナが、そんな嫌味だったらしい事を言っても上機嫌なあたしは気にならなかった。でも困らせてやろうと、あたしはむくれた顔を見せてやる。

「あの映画知ってるの？ 結構古い映画だけど」

「名作は何年経っても名作だ」

まあ、確かにその通りだ。

ラクダの上での簡単な食事を済ませると、あたし達はラクダを全力疾走させた。1時間も経たずに、砂漠の中に佇む遺跡へと辿り着くことができた。

遺跡もまたダンジョンで、中は建造物としては不必要なほど入り組んでいた。あたし達はミイラ型モンスターとエンカウントしつつも、それをいなしながら遺跡の中を探索していった。

それなのに。

「全っ然見つからないっ」

日が暮れて暗闇が包む遺跡の安全地帯で、固い地面に座り込んだあたしは苛立ちを吐き出した。

遺跡のマップデータは既に公開されていたから、迷うことなく全域探したはずだ。最深部にある宝箱を開けようとしたら部屋に横たわっていたミイラ達が襲いかかるというホラーイベントにも遭遇して、全部倒して開けた宝箱の中身といえば《黄金のブレスレット》という装飾品。装備すれば防御力が20プラスされる。

あたしは唯一の収穫であるブレスレットを眺めてため息をつく。

赤や青といった宝石が埋め込まれていて綺麗だけど、正直成金趣味で好きになれない。クエストを受注すれば必ず手に入るアイテムだし。「それを武器として加工することはできないのか」

あたしの隣で干からびた腕をオブジェクト化させているセツナが、そう聞いてきた。茶色く細い腕は、ミイラ型モンスターのドロップアイテムだ。気味が悪いけど、あたしはあえてスルーして答えた。

「無理ね。試そうとした鍛冶屋がいたけどできなかった」

「そうか、一度もクリアされていないだけのことはあるな」

このクエストが発見されたのは半月前だ。遺跡探索というアドベンチャー感満載の内容にプレイヤー達はこぞって食いつき、遺跡の中を探索しまくったが、結局クエスト報酬である金属を見つけないまま現在に至る。

「で」

あたしは隣で練り広げられている意味不明な行為にとうとう我慢できなくなった。

「あんたは一体何してんのよ!」

セツナの目の前には、何本ものミイラの手足がオブジェクト化されていた。中には頭部も混じっている。

「火を起こす」

「はあ?」

セツナは火打石をオブジェクト化させた。小さい鋼のプレートをフリントに打ち付け、散った火花がミイラに巻かれた包帯に触れる。一瞬で炎が燃え上がり、それは積み上げられた手足全てに広がっていった。

「ミイラは乾燥しているから、よく燃える」

「こんな活用法があったとはね……」

人間の手足が燃えるのは気味が悪いけど、あたしはこれも冒険の醍醐味かなど、不思議と力が入っていた顔が緩んだ。

砂漠の夜は昼とは対照的に冷え込む。遺跡の中は昼でも暗くてひんやりするけど、外から入り込んでくる風が体を芯まで冷やしてくる。

火はあたしの体を温めてくれた。ふと横のセツナの顔へ視線を移す。火が揺らめくと、セツナの顔に落ちる影も揺らめいている。それがとても神秘的に見えて、あたしは不覚にも見とれてしまった。

考えてみれば、モンスターと戦っている時、セツナはあたしを守ることに重点を置いていた気がする。

当のあたしはメイスを振り回すことに精一杯だったけど、あたしがソードスキル発動に失敗して硬直してたら、セツナはすぐさまモンスターを切り倒した。

最深部で大量のミイラに襲われた時も、あたしはパニックになつて動けなかったのにセツナはミイラ達を薙ぎ倒していった。ろくに戦えなかったあたしをセツナは責めなかった。パーティーで足手まといはすぐ孤立させられるのに。

やることは無茶苦茶で意味不明だけど、悪い奴じゃないんだ。

セツナは串に通した魚をオブジェクト化させて、火に近付けた。魚の上に料理待ち時間のウィンドウが浮き上がる。魚の皮に焦げ目がつき始め、タイマーが消えると焼きあがった魚を差し出してきた。

「ほら」

「……ありがとう」

あたしはそれを受け取る。彼に対する口調が、少し柔らかくなった気がした。彼に対しては、お客として気を遣うか、変に気を張ってばかりいたから。

あたしは彼に対して、自分の心が水解していくのを自覚しながら焼き魚を頬張り――

「にっが！」

吐き出した。

「何これ……ものすごく苦い。それに生臭い。しかもウロコ取れてないし。あんた料理スキルいくつよ？」

「ゼロだ」

「ゼロ!? そんな貧相な腕でよく他人に料理振る舞おうと思えるわ！」

あたしは魚を放り投げて、セツナが自分用にと手に持っている魚を

ぶんどった。あたしは高くはないけど、それなりに料理スキルは上げている。工房に籠っている時に手軽に食べられる料理を作るために。あたしのスキルのお陰で幾分マシになった食事を終えた後、一難去ってまた一難なことに再び問題が起こった。夜も更けてきたからここで野営することになったのだが、それは大した問題ではない。問題はセツナが言った言葉だ。

「俺が見張っているから、あんたは寝ておけ」

それは即ち、あたしの寝顔がこの男に見られるということだ。それは嫌だ。絶対に嫌だ。

体を触られた上に寝顔を見られるなんて、必要な段階をいくつもすっ飛ばしている気がする。あたしとこの男は今日知り合ったばかりで、気心が知れている仲ではない。それどころか、この男は一緒にいればいるほど得体が知れない。

「いいよ、あんたが寝てよ」

「俺の方が索敵スキルは高い」

「あたしにも見張りぐらいでできるわよ!」

「寝不足は肌に悪いぞ」

「余計なお世話よ!」

妙な譲り合いの末、結局2人とも寝ずに夜を明かすことになった。

絶対にあんたが寝落ちするところを見てやる。

そう気張りながら火に照らされたセツナの顔を睨みつけていたけど、疲れていたあたしの意識は眠ることを求めてしまい、重くなった目蓋を閉じた。

「ふう……」

意識が眠りへと落ちる直前、そんな彼の吐息が聞こえた気がした。

第8話 冥王には冠を

ひゅー、とすき間を通り過ぎる風の音が聞こえる。その音にあたしの意識は徐々に覚醒して、目蓋を開けた。

割れた石造りの天井から、一筋の朝日が遺跡に差し込んでいた。焦点を合わせると、光に照らされた砂埃が舞っている。綺麗だな、とまだ寝ぼけているあたしは思った。

体を起こそうとした時に、あたしは自分の体が柔らかいベッドロールに収まっていることに気付いた。確か、寝床なんて用意していなかったはずなのに。

「起きたか」

そんな抑揚のない声が聞こえてくる。視線を巡らせると、影の中に紛れてしまう黒いコートを着たセツナが、あたしのすぐ傍に座っていた。

彼の姿を視認して、あたしはベッドロールで寝ていた理由を理解し、同時に眠気が吹っ飛んだ。

「ま、ま、まさか……。これ用意したのあんた!？」

「ああ」

飛び起きてベッドロールを指差すあたしに、セツナはあっけらかんと答えた。

「あたし自分からこれに入ったの!？」

「だとしたら寝相が悪すぎる」

またあっけらかんと、この男は答えた。

ということは、眠っていたあたしはこの男に抱えられてベッドロールに入れられたということだ。

「あ、あんたね……」

肩をわなわなと震わせるが、そんな自分が馬鹿らしくなってすぐに治まった。ポーチの中を確認すると、結晶アイテムはしっかり入ったままだった。

「……ありがとう」

せっかくの厚意なのだから、感謝すべきだよね。むしろ、寝ている

間あたしに何もしてこなかったんだからもつと信頼すべきだ。悪い人じゃないんだし。

「あんたは「睡もしなかつたの?」

「ああ」

「少し寝とく?」

「一日寝なくても問題ない」

「たくましいことで……」

感心、というより呆れながら、あたしの視線はセツナの前に置かれている飾り気のないティーセットに向いた。ランタンとポットとカップ。どうやらお茶していたらしい。というか、この男は料理スキルゼロのくせに自分でお茶を淹れたのだろうか。

「飲むか」

セツナはそう言ってももう一つカップをオブジェクト化させて、ポットから黄色という怪しい色をしたお茶を注いで手渡してきた。あたしは少し物怖じしてしまう。食材アイテムのランクが高ければそれなりの味になるけど、昨晚の苦くて生臭い焼き魚の味はまだ鮮明に覚えている。

どうかランクの高いお茶でありますようにと祈りながら、あたしはカップの中身を啜る。

「マズい……」

「料理スキルゼロだからな」

「こんなものよく飲めるわね」

はあ、とため息をついたあたしはカップを傾けて、中身を床にぶちまけた。ついでにポットに入っている残りも、セツナが持っているカップも取り上げてその中身も全部。床を濡らした液体はすぐにポリゴンの欠片になって砕けた。液体が砕けるなんて、おかしな演出だけだ。セツナは無表情のまま、右手がカップを持つ形のまま固まっている。

「どうした」

「水と茶葉出して。あたしが淹れる」

セツナは素直に水と小袋をオブジェクト化させた。小袋をクリツ

クすると、アイテム名を表示したウィンドウが浮かび上がる。

「《ドクダミアンの茶葉》って、こんなところで手に入るのよ？」

「アルゲードの怪しい店で譲ってもらった」

「……………もしかしてエギル？」

「あいつを知ってるのか」

「よく素材の仕入れに行くのよ」

どうせ在庫を抱えた不良品を押し付けられたんだと思いながら、あたしは茶葉と水をポットに入れた。あたしの料理スキルでも、お茶の怪しい黄色は変わらなかった。そして味も。あたしのスキルのせい、それとも茶葉本来の味なのか、湿布みたいな味がした。恐ろしいことに、さつきよりマシだと思えてしまう。

あたしはその香りに顔をしかめるけど、セツナは何食わぬ顔で飲んでいる。この男は味音痴だと、あたしは確信した。

「今日も遺跡を探すの？」

「いや。確か遺跡から村に戻る途中、虫型のモンスターとエンカウントするらしいが」

「そうだけど、不死属性がついてるから絶対に倒せないわよ。必ず出るみたいだけど、クエストのイベントでただ逃げるだけみたいだし」

「もしかしたらダメージを与えられる箇所があるのかもしれない。検証の余地はある」

「まあ、そうね」

正直、あたしはこのクエストで最後に訪れる虫型モンスターとのエンカウトだけがネックだった。モンスターは巨大な芋虫とのことで、あたしは虫が嫌いだから一目散に逃げたい。でも一応この男はお客だし、そもそもクエストに着いていきたくて言ったのはあたしだし、仕方ない。

「目的が決まったところで、朝食にするか」

「あなたは食材を出すだけにして。あたしが作るから」

？



「いやあああああつ!!」

絶叫しながら、あたしはラクダを走らせた。後ろには、まるで特撮怪獣みたいな巨大芋虫が砂の上を這って追いかけてくる。

朝早く遺跡を出たあたし達は、村まであと少しといった所で情報通り虫型モンスターとエンカウントすることになった。

でも――

「グロいつ、キモいいい!!」

うねうねと動く体、何個も並んだ目玉、不揃いな牙が生えた大きな口と、そいつは虫嫌いなあたしを恐怖させるのに十分な要素を持ち合わせていた。

あたしは愛着が湧いていたラクダの尻を鞭でがむしゃらに叩き、芋虫との距離を離そうとする。

突然、ラクダはがくと体勢を崩した。前のめりになったあたしはラクダの背中に顔をぶつけて、振り落された。あたしは地面に落ちて、砂が芋虫へと流れていることに気付いた。いつの間にか、砂漠には芋虫を中心としたすり鉢のようなくぼみができていた。

ラクダは砂の奔流から脱出しようと暴れているが、暴れるほど底なし沼のように体が沈んでいく。あたしの体も砂に沈み始めていた。

「いや……っ」

もがくあたしの視界に、砂の傾斜を凄まじい速度で走るセツナがいた。セツナは何を思ったのか、剣を抜いてあたし目掛けてソードスキルを放ってきた。でも光を纏った剣先はあたしに直撃することはなく、あたしを呑み込もうとする砂を撒き散らした。沈んでいたあたしの膝から下が姿を現す。

「掴まれ」

セツナは昨日と同じようにあたしを肩で背負い、砂の急斜面を駆けあがった。あたしは抵抗することなく、セツナの体にしがみついていた。

くぼみの淵へ到達すると、セツナはあたしを降ろした。

「ここにいろ」

それだけ言うと、セツナは猛ダッシュして離れていく。すり鉢の淵に沿って走るセツナの手から、一筋の閃光が飛んだのが見えた。多分

投擲用ピックだろう。ピックは真っ直ぐ芋虫へと飛ぶも、そのてらと光る芋虫の体に刺さることなく紫色の障壁に弾かれた。【Immortal Object】というシステムタグが視界に映る。

攻撃に気付いた芋虫は頭をセツナへと向けて、その大きな口から砂のブレスを吐き出した。セツナの体が砂の奔流に？み込まれる。

「セツナー！」

あたしは自分の下にあるセツナのHPゲージを見た。

「え……」

HPはほとんど減っていない。わずかに減少しても、すぐに回復している。あたしはそれが《バトルヒーリング》のスキルだとすぐ察することができた。あいつも同じスキルを持っていたから。

芋虫が吐き出す砂の奔流へ視線を向けると、その中に幾筋もの光が迸っているのが見えた。ブレスの中から、ライトエフェクトを纏ったセツナが脱出する。

あのブレスをあんな細い剣で防ぎ切れるほどのソードスキルなんてあったらどうか。あたしは2発目のピックを投げる彼に、彼と似た黒衣の剣士を重ね合わせた。

セツナの投げたピックは、今度は目玉に当たる寸前で紫色の障壁に阻まれた。セツナはくぼみの中へ飛び降り、その中心へと走り出す。

「まさか直接攻撃するつもり!?!」

強いからって無謀すぎる。あの芋虫は不死属性だから戦っても無駄と、まともに戦おうとするプレイヤーはいなかったのだから。

不意に、横から何かがあたしの頭を蹴った。突然の出来事に体勢を立て直す余裕もなかったあたしは、砂の流れるくぼみの中へと放り込まれた。景色が猛スピードで駆け抜けていく視界の中に、くぼみの淵へと上がるラクダがいた。砂に呑み込まれたと思っていたのに。もがいているあいつに蹴られたんだと、あたしは一瞬で悟った。

傾斜を転がるあたしは砂の流れに抗えないまま、芋虫へと向かっていく。芋虫は体を浮き上がらせて、その巨体を地面に打ち付けた。

周囲の砂が舞い上がり、その範囲にいたあたしの体も宙へ投げ出される。高く飛んだあたしの真下で、芋虫が大きく口を開けているのが

見えた。

また砂のブレスが来るんだと、あたしは不思議なほど冷静に考えていた。こんな宙で防げるようなスキルなど持ち合わせていないというのに。

それが覚悟なのか諦めなのかはつきりしないけど、あたしは四肢を投げ出した。

そんなあたしの右手が力強く掴まれた。

あたしは閉じかけていた目を見開く。コートをはためかせた、あいつとは別の黒い剣士が、あたしの手を握っていた。

「セツナー！」

セツナーはあたしの体を引き寄せると、一旦掴んだ手を放して抱きかかえてきた。

「掴まっつていろ」

静かにセツナーが言う。あたしは素直にセツナーの首に腕を回した。

あたし達の体は重力に身を任せたまま、芋虫の口の中へ、その奥に広がる闇の中へと落ちていった。

◆

見慣れたリンダースの、あたしの店だった。

あたしはいつものように工房に籠ってハンマーを振り、たまに店頭で馴染みのお客と談笑する。

夕暮れが街を茜色に染める頃、閉店した店にあいつが帰ってきて「ただいま」と言う。

あたしは「お帰り」と、あいつを迎える。

ああ、夢だ。すぐに分かった。

あいつがあたしの家に帰ってくるはずがない。あいつの隣にいないべきなのは、凛々しくて綺麗なあたしの親友の方なんだから。

幸せな夢なのに、あたしは早く覚めて欲しいと願う。意識はその願い通り、あたしを眠りから仮想の現実へと引き戻していった。目蓋を開ける。

「キリト……」

あたしの横に立っているその背中を見て、無意識に呟いてしまっ

た。キリトではないその男は振り向いて素っ気なく言う。

「大丈夫か」

セツナはポケットからハイパーシジョンを取り出して、体を起こしたあたしに渡した。見れば、あたしのHPは3割ほど減っていた。

「飲んでおけ」

「……うん」

あたしは甘酸っぱい液体を飲み干すとあたりを見渡した。セツナが持っているランタンがなければ、完全に暗闇だ。ランタンの光もそんなに強いものではなくて、あたし達の周囲を照らすだけが精一杯みたいだった。

セツナが壁を照らすと、濡れているのかランタンの光を反射した。心なしか、壁が動いているような気がする。

「ここは？」

「あの虫の腹の中、という設定のダンジョンみたいだ」

「あたし達、飲み込まれたってこと？」

「そういう事だな」

通りで倒せないわけだ。モンスター自体がダンジョンなんだから。ということは、この芋虫の体内はクエスト攻略に必要なダンジョンということだろうか。

今まで誰も掴めなかった新情報を手にしたというのに、あたしは嬉しいと思えなかった。コンティニューが存在しないSAOで、ダンジョンは見つけることよりも、脱出することの方が重要なことから。

「ここ、転移結晶で脱出できないの？」

「結晶無効エリアみたいだ。回復結晶は使えなかった」

「出口とかは？」

「口から出ようと走ってみたが、傾斜がきつい上に地面が滑って出られそうにない」

「まさか、またあたしを抱えて走ったの？」

「ああ」

「相変わらず無茶するわね」

あたしは不思議と腹が立たなかった。セツナはあたしに「持って

いてくれ」とランタンを渡し、剣を抜いて歩き出そうとする。その黒いコートの裾を、あたしは掴んだ。

「何だ」

「少し、休んでからにしよう」

「そんな暇はない」と言われてしまうんじゃないかと思ったけど、セツナは黙って剣を収めると、あたしの隣に座った。いつの間にか、あたしは笑みを浮かべていたみたいだ。

「何がおかしい」

「ごめん、ちよつと嬉しくて」

この朴念仁な男は、あたしの言葉の意味が分からないだろう。頭上のカーソルが？マークに思えてくる。

「セツナは……、何であたしを助けてくれたの？ あんたなら、1人で逃げることもできたでしょ？」

「あんたに死なれたら困る」

短く端的にセツナはそう答えた。相変わらず抑揚はないけど、迷いのない言葉なのだ。あたしは信じることができた。

こんな所まであいつに似ている。馬鹿正直で、ストレートで、温かい言葉をあたしにかけてくれる所も。

あの時、あいつとドラゴンの巣穴で野営した時と同じように、胸が締め付けられる。あの時は涙を抑えることができたけど、この時のあたしは抑えることなく泣いた。この世界に来て3度目の涙だった。

あたしは酷い女だと思う。

隣にいる人があいつだったらと思ってしまう。

この人の隣なら、あたしはいてもいいんじゃないかと思ってしまう。

こんな酷い女は世の中にそういない。セツナをあいつの代替品みたいに考えた自分に嫌悪感を覚えた。あたしなんて死んでしまえばいいと本気で思った。

あいつはあいつで、セツナはセツナなのに。

セツナの温かい言葉が、まるで炎を纏った剣のようにあたしの心を貫き、焼くようだった。素直に彼の言葉を喜べないことも、あたしの

自己嫌悪に拍車をかけた。

セツナは泣いているあたしに何も言葉をかけなかった。傍から見れば冷たい人だと思う。でも、これが彼の優しさなんだ。下手に慰めの言葉をかけるより、あたしに好きなだけ感情を吐き出させてくれる所が。

「ごめん……。もう大丈夫」

やっと涙が止まると、あたしは掠れ声で言った。

「気を悪くしたなら謝る」

「違うの。セツナが、あたしの好きだった人にそっくりでさ」

「キリトか」

「会ったことあるの？」

「いや。2度も名前を間違えられれば覚える」

「ああ、ごめん……」

あたしは抱えた膝に顔を埋める。今更だけど、とても恥ずかしくて顔を見られたくなかった。

「あんたが泣くほど、酷い男だったのか」

「ううん、その逆。あたし、この物も人もデータの世界の何もかもが偽物だと思ってて、それで本物の何かをずっと探してたんだ。キリトが、その本物をあたしにくれたの。セツナと同じ、人の温かさ。でも、あたしの親友もキリトのことが好きで、その娘ものすごく綺麗で強いから、あたしが出る幕は無いんだなって、諦めた。もう、あいつみたいな人は現れないと思ったから、セツナが言ってくれた言葉がとても嬉しかったんだ」

こんなこと、誰にも言わないと思っていた。胸の中に一生しまっておくんだなと思っていた。なのに、この人には話してもいいと思えた。

「あんたにとって、キリトのことは辛い記憶でしかないのか」

「え？」

「キリトがあんたにくれた本物は、今のあんたにとっては余計なものなのか。余計なものなら捨てればいい。そうすれば泣くほど辛くはないだろう」

セツナに返す言葉を、あたしはすぐに思いつかなかった。探す必要があったからだ。あたしがあいつを好きになった理由を。

ドラゴンから助けてくれたから？

いや、違う。そんなドラマチックなものじゃなかった。

キリトと交わした他愛もない会話。キリトと食べたホットドッグの味。キリトがくれた毛皮のマントの感触。キリトが食べさせてくれたスープの香り。キリトが握ってくれた手の温かさ。

それらの何気ない小さなものたちが、少しずつ、あたしの冷えた心を溶かしてくれたんだ。

あたしは胸の奥が、ぽつと温かくなった気がした。それはまるで、ろうそくに小さな火が灯ったような、そんなささやかなもの。

それを感じて、あたしは確信する。

あの熱は過去のものじゃない。まだあたしの中で燃え続けている。「ううん、余計なものなんかじゃない。キリトがくれた本物のおかげで、あたしはこの世界を生き抜こうって思える。あいつがあたしに、生きる勇気をくれた」

あたしはセツナを見つめる。その姿にキリトが重なる。まだ、あいつのことが好きなんだなあと、我ながら呆れた。

「なら……ここから脱出する方法を探す。あんたには意地でも生きてもらう」

セツナは立ち上がった。あたしも続いて立ち上がる。不思議と、いつもより足が軽く感じた。

「そうね、でもここまで来たら金属見つけようよ」

「ああ、あんたには俺の剣を作ってもらわないとな」

「あんたじゃなくて、いい加減名前前で呼んでよ」

「……ああ、リズベット」

セツナから出た自分の名前に、あたしは笑みを零した。名前を呼んでももらえるのは、やっぱり嬉しい。

歩こうとすると、セツナは「待て」と掌を出して止めた。

「足元を見て歩け。胃液に触れたらHPが減る」

足元にランタンを近付けると、そこら辺に水溜りのようなものが

あった。

セツナは暗い胃の中を進んでいく。足元の胃液を避けながら、周囲へと視線を巡らせていた。あたしにはランタンが照らしている所しか見えないけど、多分セツナは索敵スキルを鍛えているんだと思う。索敵スキルを上げれば、暗闇でも視覚が補正されて見えるようになるらしい。

どうやらこのダンジョンはモンスターが出ないらしく、あたし達は胃液にだけ注意を向けることができた。このダンジョンを発見できれば、それほど難易度は高くないのかもしれない。

「リズベット」

呼ばれたあたしは、セツナの視線の先へランタンを向ける。目の前に、白い壁が立ち塞がっていた。

「これって……」

「よく見てみる」

あたしはランタンを上下させ、その全貌を把握した。それは壁ではなく、あたし達の背を超えるほどの楕円形のオブジェクトだった。

「卵だ」

「この虫こんなものまで飲み込んだの？ とんだ食いしん坊ね」

まあ、ゲームだから「設定」なんだけど。

「これがどうかした？」

「胃液に溶かされていない」

あたしは何となく、セツナの意図が分かった。大抵、あたしにとっては酷なことだ。

「これに入るっての？」

「ああ」

セツナは剣で卵に小さく三角窓を開けた。人一人なら入れそうなサイズだ。剣を刺したら中から灰色のドロドロとした液体が流れ出たけど、セツナは気にしなかった。あたしは「ぎゃっ」と悲鳴をあげたが、多分中身は腐敗して溶けた、ということだろう。

「こんなのに入ってどうするのよ？」

「体内の異物というのは、生理現象で自然と外へ排出されるらしい」

「生理現象……」

その意味をあたしは理解する。

「まさか、こいつのお尻から出るってこと!？」

「その通りだ」

「無理無理無理！ 絶対ムリ!!」

前はドラゴンの排泄物を触らされて、今度は排泄物になるなんて御免だ。こんな所まであいつに似なくていいのに。

げんなりと肩を落とすあたしをよそに、セツナは暗闇の中を突き進んでいく。ピチャピチャという濡れた足音が止んだと思えば、今度はごそごそと小さい物音が聞こえた。

「セツナ？」

あたしはランタンを掲げてセツナへと近付く。セツナは剣で何かをつついていた。セツナの剣先へとランタンを近付けると、あたしの目の前に白い頭蓋骨が現れた。

「うわああっ」

大きく仰け反って、危うく胃液の水溜りに尻もちをつきそうになったけど、転ぶ寸前でセツナが手を取ってくれたおかげでそれは免れた。

あたしは深呼吸して、もう一度ランタンを近付ける。頭蓋は完全に白骨化しているわけではなく、まだ肉がこびりついていた。残った頭皮からは髪が伸びている。その白骨、というより消化されかけた死体は1つだけでないようだ。何人もの死体が胃液で溶かされた後にまた凝固して、1つの肉の塊になっていた。まるで魚の煮ごりみたい

に。

「これ……、何?」

「モンスターに飲み込まれた集団の死体みたいだ」
それがオブジェクトであることは理解できるけど、何てリアルなものを作ってくれたのか。余計なことに凝視すればシステム補正で更に生々しいディテールがもたらされる。

あたしは思わず吐きそうになって口に手を当てるけど、セツナの方は何食わぬ顔で剣をゼリーみたいにプルプル震える塊に突き刺して

いる。そしてあるうことか、セツナはその煮ごごりの中へ左手を突っ込んだ。

「な、何してんのよー!」

あたしの質問には答えず、セツナはグジュグジュと気持ち悪い音を立てながら中をかき回し、抜いた。その手に掴んでいるのは――

「金属素材!」

セツナの掌からはみ出す長方形の物体。あたしはそれを毎日見てきたから、すぐに分かった。ゼリー状になった死体の体液にまみれているけど。

セツナは手にはめたグローブで体液を拭き取ると、あたしへと差し出した。あたしは恐る恐る、指で僅かに朱色に輝く表面をクリツクする。ポップアップウィンドウに表示されたアイテム名は《ヒヒイロカネ・インゴット》。

「これって……、クエストの金属?」

「このモンスターがクエストで出現するのなら、そうだろうな」

「でも何でこんな所に……」

「あの遺跡でこれを手に入れた旅人の一団が、運悪くこいつに飲み込まれた。というクエストのシナリオだろう」

「随分と凝ったシナリオね……」

セツナは朱色の金属を自分のストレージに納める。

「後は脱出するだけだな」

「方法があればいいけどねえ……」

とりあえず方法を探して試すしかないか。と気の遠くなることを考えていたあたしに、胃の中を見渡したセツナが言った。

「リズベット、卵に入れ」

「え?」

「脱出する」

「ちよつと、あたしお尻から出るのは嫌よ」

「そうじゃない。いいから入れ」

あたしは渋々、セツナが明けた三角窓から卵の中へ入る。何だか、SF映画で見る宇宙船の脱出ポッドみたいだと思った。

「そこから出るな」

それだけ言って、セツナは卵から離れて剣を構える。あたしは彼が何をするつもりなのか、三角窓から見ている。

セツナの剣が青い光を帯びていく。するとセツナは猛ダツシユし、ピンク色をした粘膜の壁に剣を滑らせた。光の尾を引いてセツナはジャンプし、そしてまた剣を壁に振っていく。

ダンジョンの床や壁は破壊不能だ。そのはずなのに、セツナの剣は紫色の障壁に阻まれることはなく、「Immortal Object」のタグも浮かばない。セツナはその場から離れると、反対側の粘膜にもシステムに規定された剣技を放った。次々と胃の中に赤いエフェクトが刻まれていく。

突然、地面が震えた。ゴゴゴという轟音が響き渡り、あたしはバランスを崩して卵の中で転んだ。

セツナがするっと三角窓から入ってくる。その衝撃で卵が倒れたのか、上下が逆転してあたしの体は卵の中を転がって何度もセツナとぶつかった。

「ちよつと、狭い！」

「我慢しろ」

揺れが激しくなっているのが分かった。卵が揺れているのか、胃が揺れているのかは分からない。卵の中でピンボールみたいに跳ね回っているあたしの三半規管は完全に混乱しているみたいだった。

揺れの中で確かに感じることはできるのは、セツナの声だけだった。

「出るぞ」

散々揺れた後、今度はふわりと重力を感じなくなった。その数瞬後、次は凄まじい衝撃が。あたしの体は反対方向へと跳ねて背中が卵の殻に打ち付けられる。そして、卵がポリゴン片になって碎けた。あたしのぐるぐる回る視界に、アインクラッドの天井と砂の地面が映った。卵の狭さから解放された後も、あたしはしばらく砂の上を転がって、止まった。

ようやく焦点が合うようになったあたしの視界に、真っ黒い革の生

地が映り込んだ。生地からはみ出た黄白色の肌に浮き出ている鎖骨。その先には僅かに隆起した喉仏があつて、更にその先には長い前髪から覗く黒い瞳が――

「リズベット……」

吐息に似た声で、セツナがあたしの名前を呼んだ。どうやら、あたし達はいつの間にか抱き合っていたらしい。どちらかというところ、あたしがセツナにしがみついていたという方が正しいと、彼の服を両手で掴む自分の手を見て思った。

「は、はい……」

あたしは少し上ずった声で返事をする。

「降りてくれ……」

そんなセツナの掠れた声で、あたしは彼に覆い被さっている自分の体勢に気付いた。

「ご、ごめん……」

あたしは素早くセツナの体から降りる。砂漠を見渡すと、遠い所に気持ち悪い巨大芋虫が去っていくのが見えた。

「あたし達、どうやって出たの?」

「俺が腹の中で暴れ回って、あいつが気持ち悪くなつて吐き出された」
「何だか一寸法師みたいね……」

セツナはゆっくりと状態を起こす。シエルターとして卵に入っていたおかげか、あたし達のHPは減っていないかった。

「どうして、口から出られるって思ったの?」

「死体をつついた時、剣が地面に刺さつても不死属性のタグが出なかった。もしかしたら、中はダメージを与えられると思った」

「それなら先に言いなさいよ。あたしも手伝ったのに」

「リズベットが卵に乗り遅れたら困る」

「なによそれ」

相変わらず無茶苦茶な人。そう思ってあたしは笑ってしまう。

「帰るか」

立ち上がったセツナが言った。

「うん」

「走っていかか」

「それは止めて。歩くわよ」

あたしは足を砂の上に踏み出す。しゃがもうとしていたセツナは、黙ってあたしの後に続く。今日も砂漠はとても暑い。

でも、それも悪くないと思った。

◆

カン、カんと、あたしはハンマーでインゴットを叩く。

《ヒヒイロカネ・インゴット》は特殊な金属だった。通常、武器作成は1本鍛えるのに1種類の金属で事足りるけど、この朱色の金属をいざハンマーで叩こうとメニユーを設定した時、システムはもう1種類の金属と一緒に叩くことを要求してきた。つまり、この金属は合金でなければ武器にならないということだ。鍛冶屋として沢山の武器を鍛えてきたけど、こんなことは初めてだった。

あたしはもう1つの金属に、武器作成としてはメジャーな《アイアン・インゴット》を選択し、それと共に朱色の金属を再び炉に入れて、真つ赤に焼けた2つの金属を叩いた。

工房で作業を見守るセツナを、あたしはちらりと一瞥する。セツナの注文は片手用細剣。

あたしはハンマーに更に力を込めて叩く。2つの金属は潰され、くつついて1つになっていく。あたしは休むことなくハンマーを振った。無の境地とまでは至っていない。あたしの頭の中でセツナとの冒険の時間が駆け巡り、そしてあの黒い剣士の顔が現れて離れない。この一ヶ月は思い出す度に辛かったのに、今は不思議と胸が温くなる。

これだ。この感覚だ。

あいつの剣を鍛えた時と、同じ熱が戻っている。今のあたしの中に
ある熱はあいつだけじゃない。横にいるセツナがくれた分も確かに
存在している。

だから、この人の最高の剣を鍛えてあげたい。どうか、この人の唯一無二の相棒となる剣になってほしいと、あたしは叩く金属に願う。
あいつがくれた心の温度は恋だ。

そしてセツナは、あたしが失いかけていたその温度を取り戻させてくれた。このもう一人の黒の剣士のために鍛えた剣の出来上がり次第で、それを証明できる気がする。

セツナがくれた心の温度。

それはキリトを好きになつた鍛冶屋リズベットの、同時に篠崎里香の誇りだ。

繰り返される槌音の後、インゴットが光を放ちながらその姿を変えた。あたしは期待と不安を胸に、全く表情を変えなかつたセツナが目を僅かに見開いて、その様子を見届ける。

前後に薄く伸び、剣の姿へとオブジェクトの生成が完了すると同時に、光は治まつた。

「……………」

姿を現したその剣に、どんな感想を述べればいいのか、あたしは分からなかつた。

一言で言い表すなら、奇妙な剣だ。注文通りの細剣で、レイピアにしては刀身に厚みがある。片刃の刃は日本刀に見えるけど、反りが入っていない直剣だ。何より一番奇妙なのは、刀身が全く輝きを放っていないことだ。インゴットの朱色はどうやら一緒に鍛えた鉄に覆われたようで、灰色の刃はどれだけ研磨しても光りそうにない。

あたしは震える指で剣をクリックした。浮かび上がったポップウインドウに表示された剣の名前を読み上げる。

「カテゴリ 《サーベル》、固有名《ハーデイスクラウン》……」

初めて見る名前だ。あたしは頻繁に情報屋の名鑑をチェックしているから、多分今の所アインクラッドに一本だけの代物だろう。

「試してみて」

あたしは剣を持ってセツナに手渡す。すごく軽い剣だった。アスナの《ランベントライト》ほどではないけど、下手に振り回したら手からすっぽ抜けてしまいそうだ。

セツナは剣の柄を握って、メインメニューを開いて装備する。セツナはウインドウに表示されているパラメータを確認すると、メニューを消して剣を素振りし、慣れた手つきで剣を回転させる。

「軽い……。良い剣だ」

「やった!!」

あたしはあいつの時と同じようにガッツポーズする。

「鞘はどうする？ 用意しようか？」

「鞘はいい」

「え？」

セツナは再びウィンドウを出して、目当てのものを選択すると、それは彼の手の中で実体化した。

一瞬、短い槍だと思った。灰色の柄に先端で輝くシルバーの刃。セツナはその柄に、カチンと金属が鳴る音を立てて剣を収めた。

「その鞘って……」

「知り合いに作ってもらった」

帯刀のスキルだろうか。でも、そんなスキルは確認されていない。いくら鞘に刃が付いているからといって、武器の性能を発揮できないスキルがあったとしても使うプレイヤーがいるのだろうか。何にせよ、このセツナが計り知れないプレイヤーであることは確かだ。

「秘密なの？」

「ああ」

「そ、なら聞かない」

セツナは腰に差していた剣をストレージに納めて、代わりに《ハーデイスクラウン》をホルダーに差した。

それにしても《冥王の冠》ハーデイスクラウンなんて、またも物々しい名前だ。ここまて来ると、この剣はセツナが持つために完成した剣で、同じ金属を手に入れたとしても2つは作れないと思う。さぞかし、彼の手で存分に暴れてくれることだろう。

「こいつの代金は幾らだ」

「そうね……。暑い砂漠に放り込まれて芋虫の中に閉じ込められて、ついでにあたしに散々触ったところから見積もって……」

「まあ、値は張るか……」

「1000コルってどこね」

あたしの提示した金額に、セツナはポーカーフェイスを崩さず、で

も数秒間沈黙していた。やった。あのセツナを驚かせたと、あたしは右手を握って小さくガッツポーズする。

「安すぎないか。確かに見た目はなまくらだが、性能は《リーパーズエッジ》よりも高い」

「いいのよ、10000コルで」

あたしは笑いながらそう言う。セツナは10000コル硬貨10枚をあたしに手渡す。あたしは満面の笑みで「まいど」と清算させた。

「安くした代わりに、しっかりメンテに来ること！」

「ああ」

「もし折ったりしたら罰金取るから」

「ああ」

「よし！」

2人で工房から出ると、あたしの胃は空腹を訴えてきた。時刻は12時27分を表示している。

「ねえ、乾杯がてらご飯食べに行こうよ」

「ああ、折角だから奢る」

「お！ 太っ腹ねえ。じゃあ美味しいお店連れてってよ」

「35層のプレイヤーが経営しているレストランにするか」

「うん！」

あたしが店のドアを開けて、外へ出た時だった。

「リズ!!」

その声が聞こえたと同時に、揺れる栗色の長い髪が視界に入った。

「アスナ!？」

パタパタと走るアスナは、その勢いのままあたしに抱きついてきた。宙を舞っている髪を見て、相変わらず綺麗な髪だなあと思った。ナタリー・ポートマンよりも綺麗だ。

「剣の手入れ頼もうと思ったからお店にいないし、先月みたいに連絡つかないから心配したんだから……」

「ああ、ごめんね。またダンジョンで足止め食っちゃってさ……」

「まさか、またキリト君!？」

「ううん、この人と……」

自然と、アスナの視線はあたしの後ろに立っているセツナに向いた。その姿を捉えると、アスナはきつとまなじりを吊り上げる。その目は、あたしと知り合った頃の「狂戦士」、「攻略の鬼」と呼ばれていたアスナに戻ったようだった。

「あなた……」

あたしはこれが、喜ばしい再会ではないだろうなどと、雰囲気ですわった。

第9話 迷宮には相棒を

「あなた……」

副団長はセツナに険しい瞳を向けた。一応同じギルドの仲間なのだが、まるで「敵」に向ける闘志を込めた眼差しだ。副団長はリズベツトから手を放し、つかつかとセツナに歩み寄る。

「久し振りね。あれからも攻略と定例会議の場で姿を見なかったけど、もしかしてギルドを抜けたの？」

「いや、まだ所属している」

「へえ、なら別任務？ それともずっと油売ってたの？ リズを振り回したみたい」

所在なさげに立っていたリズベツトが、副団長とセツナの間に割って入った。

「アスナ、セツナはあたしを助けて……」

「へえ、あなたセツナっていうの。ごめんねリズ、これはわたし達ギルドの問題なの」

副団長はそう言ってリズベツトをそっと押しつける。随分親しい仲のようだが、リズベツトは副団長の気迫に圧倒されて何も言えないようだった。

「リズとは名前を知っている仲なのに、ギルドの副団長であるわたしがあなたの名前を知らないってどういうこと？」

「……………」

面倒なことになったなど、セツナは喉元まで出そうなため息を押し殺した。そんな態度を見せたら、この副団長の神経を逆撫でするだけなのは目に見えている。

「理由はどうあれ、ギルドの一員である以上あなたにも攻略に出てもらいます。丁度これからやることがあるし、一緒に来て」

副団長はセツナの腕を掴んで引こうとするが、セツナはそれを払いのけた。副団長の目がより険しくなった。現実だったら眉間にしわが寄りそうだ。

「何のつもり？」

「これからリズベットと食事をする予定が入っている」

セツナがそう言うのと、副団長はさつきとは打って変わって口を半開きにした間の抜けた顔をした。隣にいるリズベットも頬を紅く染めている。

「セ、セツナ……。その言い方は……」

リズベットは口をまごつかせている。その狼狽が何かセツナには見当がつかず、続きの言葉を待った。しかしその先に言おうとしたであろう事を、副団長の方が言った。

「あなた……。リズとそういう仲だったの？」

副団長の言葉で、リズベットの様子に合点がいった。どうやら妙な勘違いをされていたらしい。

「違う」

誤解を解くために、セツナは即答で否定した。

「新しい剣の完成祝いだ」

そう言っただけで先ほど完成したばかりの《ハーデイスクラウン》を腰から抜き出す。副団長はその鞘に刃が付いた剣を訝しげに見ている。だがさして興味は無いようで、すぐにセツナの顔へと視線を戻した。「そう、ならわたしも行くわ。わたしもお昼まだだし、口実を作って逃げられたらいけないから。リズ、いいかな？」

「あ、うん。あたしはいいけど……」

「なら決まりね。さつきと食べに行きましょう」

副団長はリズベットを連れて外へと出ていく。セツナもそれに続くようにしたら、ドアの手前で副団長に「待って」と止められた。

「あなたはこれからギルドの一員として行動するんだから、ちゃんと団服を着て。持っているでしょ」

そう言うのと副団長は大きな音を立ててドアを閉めた。

別に着替えを見られても恥ずかしくはないが、と思いつつもセツナはウィンドウを開き、装備フィギュアを操作する。ストレージから装備を探していると、ドアの向こうから声が聞こえた。本来なら聞こえるはずないのだが、聞き耳スキルのせいでセツナには会話が筒抜けになってしまう。

「アスナ、あの言い方はきつ過ぎない？ セツナは良い人だよ」

「ギルドにいる以上、攻略をサボっているのは見過ごせないわ。うちはそのなにも規模が大きくないから、尚更よ」

「でもまあ、セツナの方もあの態度は悪いかもねえ。副団長様にタメ口なんて」

「前に会った時に、わたしの方からタメ口で良いって言ったのよ。でも、反省の色は無さそうだし、敬語使うように言っておこうかな」

随分と悪い印象を持たれているものだな。

グランザムの本部へ行く時の白コートに身を包みながら、セツナは思った。ついでにズボンと靴も同じ色にまとめることにする。まだドア越しの会話は続いているから、丁度いいだろう。

「それにリズをダンジョンに連れ回して……」

「それは、あたしの方から着いていったのよ」

「リズが？ 珍しいじゃない。男の人と行くなんて」

「そうなんだけど、何て言うか……。セツナって似てるじゃない、キリトと」

「あの人か？ 服だけじゃないの」

「ほほう、やっぱりよく見てる人は違うねえ」

「もう、リズ！」

着替えはもう済んでいるが、セツナはどうにもドアを開けることを躊躇してしまう。会話がひと段落すれば出ようと思ったのだが、どうも女同士の会話は長引くものらしい。だからタイミングなど考えず、セツナはドアを開けることにした。

「待たせた」

ドアを開けた先に薄ら笑いを浮かべるリズベットと、頬を紅く染めた副団長がいたのだが、副団長はすぐに顔をさっきの険のこもった表情へ戻した。

「本当に《KOB》メンバーなんだ。それにしても、あんた白似合わないわねえ」

リズベットがそんな軽口を叩いてきた。自覚しているから特に腹が立つこともない。

「それじゃあ、行きましようか。どこのお店で食べるの?」

「35層の主街区にあるトラットリア・オットという店だ」

転移門広場まで行く道中、副団長はリズベットとの談笑に花を咲かせていたのだが、時々一歩後ろを歩くセツナを何度か一瞥していた。

シリカといい、リズベットといい、そしてこの副団長といい。そんなに自分はキリトに似ているのだろうか。似ているのなら、一度会ってみたいなど、セツナはキリトというプレイヤーの顔を想像してみる。

でも、その顔は思い浮かばなかった。セツナが街の群衆や森の木々、ダンジョンの暗闇に隠れながら暮らしているのと同じように、彼の顔もまたおぼろげで、そのイメージがはつきりしなかった。

◆
第35層ミーシエの街に転移してから、中層プレイヤーが多く利用している街の喧騒は増していた。

セツナ達3人が転移門から現れたその瞬間から、周囲にいたプレイヤー達がこぞってセツナ達に視線を向けていた。白亜に赤のラインが入った服はただでさえ目立つのだが、この騒ぎは異常とも言っていない。

「相変わらず有名人ね」

副団長の隣を歩くリズベットが冷やかす。副団長のため息が、彼女らの前を歩き、店までの案内を務めるセツナにも聞こえた。

「リズダンスでもちよつとした騒ぎになって、握手とかサインとかねだられて大変だったのよ」

「ああ、だからセツナに団服着せたんだ。護衛代わりに」

そういうことかと、セツナは納得する。確かに、護衛でも付けておけばトラブルは回避できる。転移してすぐ副団長に話しかけようとした男がいたが、彼はセツナの顔を見てすぐに群衆の中へ消えていった。目つきの悪さは自覚しているが、不用意に他人を近付けさせないことに越したことはない。それに、強面具合なら馴染みの故買屋の店主の方が上手だろう。

最近知ったことだが、セツナの上司である副団長はかなりの有名人

らしい。攻略組ギルドである血盟騎士団を实质率いているという強さもあるが、その厳つい肩書きに反して女性というアイコンクラッドでの稀少性に整った容姿というギャップで、更に拍車が掛かった人気を持っていた。下層の街で彼女のブロマイドを売っている商人を見かけたことがある。

確かに彼女の強さに憧憬の念を持たずにはいられず、同時に光を放射するほどに白い肌に儂さを持っている。顔の部位1つ1つの大きさと配置の組み合わせは完璧と言っている。そんな彼女のご尊顔をみるため、わざわざ血盟騎士団の門を叩いて門前払いを食らう者は多いそうだ。

美人であることは認めざるを得ないが、セツナにはどうもこの副団長の強さを疑ってしまう。以前会った時、彼女にこの世界で強さを判断するのは外見でないことを言ったのはセツナだが。彼女が「バイオハザード」の泥臭く血生臭い戦いを演じたミラ・ジョヴオヴィツチのようにはどうしても見えなかった。でも、彼女の戦いを見たことが無いセツナが、この場で彼女に対するイメージを固めるのは早計だろう。いざ戦いの場に立てば豹変するのかもしれない。何しろ彼女は「閃光」の他に、「狂戦士」なんていう異名を持つくらいだ。

トラットリア・オットに着いて騒ぎは少し収まったが、それでも他の客が副団長をチラ見してこそこそと話すのは一向に鎮まる気配がなかった。店に入った時、店主も副団長を見て驚いていた。

「アスナには憧れるけど、さすがにここまで注目されるのは勘弁してほしいかな」

注文した料理を待つ間、リズベットがそう言っていた。

料理が運ばれてきて、リズベットはスプーンでドリアを口に入れると同時に目を見開いた。

「美味しいわね！ セツナってこんなお店知ってたんだ。いつつもあんな不味いもの食べてると思ってるわよ」

「俺にも人並みの味覚はある」

リズベットの隣でカルボナーラをフォークで巻く副団長が、その手を止めてセツナに険しい視線を向けた。

「あんな不味いもの？ あなたリズに何食べさせたの？」

「変なものを食わせた覚えはない」

「苦くて生臭い焼き魚と湿布みたいな味のお茶を飲まされたわよ」

笑いながら言うリズベットに反して、副団長の顔がより一層険しくなっていく。

「あなたねえ……」

「料理スキルを上げていないからな。味が悪いのは仕方ない」

「いや、魚はともかくお茶は無理よ」

副団長は何か言いたげだったが、結局何も言わずフォークに巻いたパスタを口に運んだ。

「……美味しい」

「アスナが認めるほどの味ってことは相当ね。アスナはそろそろスキルもコンプするんじゃない？」

「あと少しってとこかな。このシェフはもう完全習得してるのかしら？」

副団長の興味がレストランのシェフに移ったところで、セツナは安心して食事でありつくことができた。目の前でリズベットと談笑する副団長にさっきの険しい面影はなく、セツナとそう変わらない年齢の少女の顔だった。

ミラ・ジョヴオヴィッチが演じた「バイオハザード」のアリスも、映画の中で平和に生きていたら、こんな顔をするのだろうか。そう思いながら、セツナは注文したマルゲリータを食べた。

リズベットに奢るといった手前、3人分の代金はセツナが払うつもりだったのだが、副団長は自分が注文した分は自分で払った。どうやら他人に貸しを作るのが嫌いな性分らしい。

「それで、これから俺はあんたと何をすればいい」

転移門広場へ行く道中、セツナは副団長に聞いた。

「あなたがギルドの一員として足る実力か、その査定をさせてもらうわ。詳しいことは転移先で話す」

「この観衆だと、盗み聞きされかねないからな」

転移門広場で、午後の仕事があるリズベットと別れることになっ

た。転移門の前で、リズベットはセツナと副団長に手を振っていた。「じゃあねアスナ！ それとセツナ、ご馳走さま。しつかり剣のメンテに来るのよ！」

リズベットが湾曲する転移空間へ消えると、「行くわよ」と副団長も転移門へと歩き始めた。

「どこの層へ行く」

「とりあえず65層ね。あなたの实力を見ておきたいし、少し調べたいこともあるから」

「調べたいこと」

「詳しいことは後で話すわ。それに、主な目的はあなたの査定よ」

転移門の前で立ち止まった副団長はそう言うと、手を差し出してくる。セツナはその意味が分からずその白く透き通った手を凝視する。

「不本意だけど、逃げられでもしたら困るから一緒に転移するわ」

「俺はそんなに信用できないか」

「できないわよ。ギルドの攻略サボる人なんて。ほら、早く手握りなさいよ」

照れるぐらいなら強がる必要はないと思うが。その言葉は思考するに留めて、セツナは副団長の手を握った？

◆

寺院が立ち並ぶ東南アジア風の主街区を抜け、セツナは副団長と湿原が広がる第65層のフィールドへ出た。現在の最前線は次の第6層なのだが、副団長の査定プランは迷宮区から66層主街区まで踏破というものだった。この主街区から次層までの主街区というルートは、ギルドの入団試験として採用されているものらしい。もつとも、試験の際は4、5人のパーティを組んでチームプレイを見るらしい。

一応ギルドメンバーに名前を連ねている名目上、セツナも入団時には試験を受けた。当時はフィールドボス攻略で、パーティメンバー兼試験管としてゴドフリーという癖毛が印象的な男が同伴していた。試験は当時の最前線で行われたが、その頃にはそれなりのレベルに達していたセツナは楽々試験に合格し、血盟騎士団に入った。

思えば、まともなギルドメンバーと一緒に行動したのは、あの時が最初で最後だった。セツナは仕事上攻略には滅多に参加せず、本部へ行ったのも片手で数えられるほど少ない。ギルドの内情がどうなっているのか、どんなプレイヤーが所属しているのもろくに知らない。何度かモンスターとエンカウントしながら柔らかい足場を進み、次層へと続く迷宮区へと入った。

戦闘に関しては、交代無しでセツナが前衛を務めることになった。ただの攻略ではなく査定だから当然ではある。副団長はセツナが攻撃を受けそうになるか、ソードスキル後の硬直時間に手助けする程度に介入してきた。だがそれも2、3度のこと、殆どセツナが単独でモンスターを撃破した。リズベツトが鍛えてくれた《ハーディスクラウン》は、文句なしの性能を見せてくれた。新しい相棒として心強い。「セツナ君十分強いじゃない」

薄暗い通路を進みながら、副団長がセツナの肩を叩きながら言った。

「これなら前線で通用するわよ。わたしとデュエルしたら結構いい線いくかも」

「期待に応えられたようで何よりだ」

「あなた」ではなく名前と呼ぶあたりで、副団長が多少なりともセツナに対する認識を改めてくれたのが分かった。表情も幾分柔らかくなった気がする。しっかりレベル上げに邁進していたことを分かってくれて良かった。

セツナは、自分の実力が隣で肩を並べて歩く副団長と同等か、それ以上だと自分で評価していた。過大でも過小でもなく、客観的な評価だ。

血盟騎士団のような強豪ギルドと攻略組が合同で行うボス攻略を、セツナは単独で行いボスを撃破したことが2回ある。

1回目はかつて愛用していた《リーパーズエッジ》を手に入れた第45層。2回目は第64層だ。新しく習得したソードスキルがどこまで通用するか試すために、単独で迷宮区のマッピングを行い、そのまま情報ゼロでボスの間へ赴き、新しく習得したスキルで撃破したの

だ。

もつとも、2回とも次の層の転移門を解放せずに放置したため、綿密な対策会議を経て攻略に挑んだプレイヤーたちが空になったボスの間に来るまで既に攻略済みであることは知られなかったが。45層はセツナが攻略してから3日後にフロア解放の知らせが届き、64層に至っては2週間も後になってからだった。

話題は誰がボスを撃破したのかということになり、名の知れた攻略組の名前が次々と挙げられた。結局最後までセツナがやったことは誰にも知られることなく、システムにバグが生じた、初めからボスがない層だった、ダンジョンで遭遇した雑魚モンスターが実はボスだった等の憶測が独り歩きし、ちよつとしたオカルトチックな要素を含む噂まで飛び交った。

自分がやったと見栄を張る者がいなかったのは意外に思ったが、考えてみればボスを単独撃破したとなれば、次のボス攻略で必ず最前線に押し出されるのは容易に想像できる。そんな自ら死ぬ危険性を上げる間抜けなプレイヤーはいなかつというだけの話だ。

「それにしても……」

副団長は顎に手を添えてセツナを観察するように見ている。

「それだけ強いのに、何で攻略には参加しないの？ セツナ君の任務って何？」

「クエストの調査と、未踏のフィールドマップ핑を団長から任せられている。モンスターが落とすアイテムやクエストの報酬が、攻略に役立つかもしれない」

この理由は、事前にヒースクリフとの間で決めていたセツナの表面上の役割だ。ギルドの仲間に攻略に出ない理由を聞かれたら、こう言おうと話し合っていた。

「まあそうだけど。それなら他の人に任せて、セツナ君は攻略に出てもらった方がいいわよ。あなたがいると心強いし」

「それについては団長を通して欲しい。それより、調べたい事とは」

まだ目的地の主街区までには達していないが、副団長が満足したところでもう査定はいいだろう。

「そうね。セツナ君の強さなら、協力してもらって問題ないわね。最近、この迷宮区でオレンジプレイヤーの目撃情報が出ているの。それを調べようと思って」

もしやとは思っていたが、やはりそのことだったか。

そのことはセツナもヒースクリフから聞いている。近いうちに片付けてしまおうと思っていた案件だ。前線に近いということもあって、しかもその頃は使える武器をトラビアで《軍》に奪われたままだったから先延ばしにしてしまった。こんな厄介になることなら、早くリズベットの店に行つて新しい剣を作ってもらうべきだった。

「前線近くでそんな人達がいて襲撃でもされたら、攻略の大きな妨げになるわ。ラフィン・コフィンにギルドの人が何人も殺されているし、トラビアの悲劇だつて起こっているんだもの。団長に調査を提案したら、必要ないって言われちゃった」

当然だ。それはセツナの仕事なのだから。

「だからといって、調査するにも俺達2人では心許ない。あんたの護衛を何人が連れて来るべきじゃないのか」

「あの人達は、わたしに危ない所に行くなって口うるさいから反対されるわよ。だからこうしてオフの日に調査するの」

「実際危険だ。非常時に備えて転移結晶は持つておくべきだ」

「分かってるわよ。何もその場で捕縛しようだなんて思わないわ。見つけたら団長に報告して、討伐隊を組んでもらうんだから」

尚更面倒なことになったと、セツナはため息を押し殺すのに必死だった。もし見つかつて逃げられたらたまったものではない。だからといって、ここで副団長を説得する言葉が見つからない。自分の口下手さとうんざりするのには少し振りだった。

「了解した。ただし危険が及ぶと俺が判断したらすぐに転移する。それでいいな、副団長」

「あなたも護衛と似たような事言うのねえ。別にいいけど……」

副団長は「んー」と視線を上げて考え込む仕草を見ると、含みのある笑みを零した。

「じゃあ条件ね」

「条件、何だ」

「副団長じゃなくて、わたしのことは名前ですぐ呼ぶこと。セツナ君、そんな他人行儀で友達いるの?」

「余計なお世話だ」

セツナがそう言うと、副団長はセツナの顔を見て吹き出した。セツナの顔に何か面白さを見出したようだが、それが何なのか全く理解できない。

「あはは、リズの言う通りね。セツナ君、わたしの知り合いにそっくり!」

またキリトか。何度も出てくるその名前が少し気味悪く感じる。キリトはセツナの行く先々で名前だけ現れる。そういえば、エギルからも彼の名前を聞いた。

「うちの常連にキリトって奴がいるんだがな。そいつがセツナに似てるんだよ。顔とかじゃくて、雰囲気かな」

キリトの方も、エギルからセツナのことを聞いているのだろうか。セツナがこうしてキリトの影を感じているように、キリトもどこかでセツナの影を感じているのだろうか。

「今度紹介するね。彼、セツナ君と気が合うと思うから」

「それはどうだろうな」

足を速めるセツナの手を、副団長は掴んだ。

「待って、まず練習。わたしの名前呼んでみて。知らなくても、視界にわたしのHPと名前見えるでしょ?」

「……………アスナ」

「はい、よくできました」

まるで保育士と園児だ。でも不思議と気分は悪くなかった。セツナに満面の笑みを向ける副団長、もといアスナの顔を見ると、少し気持ちが和らいだ。

「それじゃ、調査といきますか。セツナ君」

「……………ああ」

調査なんて言い出すものだから、アスナは隠密スキルを上げているものだと思っていた。だが彼女は直接戦闘に関係するスキルばかり

を上げていて、隠密にはあまり割り振っていないかったらしい。リズベットとの会話から料理スキルを上げているようだが、そんなものよりも戦闘の足しになるスロットにスキルポイントを割り振ってほしい。

かといつて、スキルをもうすぐ完全習得しそうなセツナも、目立つ団服を着ているせいでスキル発動ができない状態にある。

「ねえ、セツナ君」

結局「あまり物音を立てず行動」などと原始的な形で調査することになり、あまり喋らないようにと言ったアスナ本人からセツナに話しかけてきた。

声量は抑えているが、聞き耳スキルを上げている者の範囲内に入っ
てしまえば丸聞こえだ。オレンジプレイヤーはそういうスキルを鍛
えている者が多い。この攻略に熱心な副団長は、連中のやり口に無知
すぎる。もし一人で調査していたら、確実に連中の餌食になっている
ところだ。

「何だ」

触れそうなほど顔を近付け、それでも聞こえるかギリギリな声で答
えた。アスナは一瞬引き気味になったが、セツナの意図を察してくれ
て耳に口を近付けた。

「死神って、聞いたことある?」

「いや、無いな。何だそれは」

「わたしも最近聞いたんだけど、犯罪者狩りをしているプレイヤーが
いるらしいわ。その人が死神って呼ばれているらしいの」

どうやら一般プレイヤーにも噂が飛び交い始めたらしい。情報収
集に熱心な攻略組であるアスナが最近知ったということは、中層以下
のプレイヤーの間ではまだ広まっていないのだろうか。いや、その
手のゴシップはむしろ中層にいる彼等の方がよく知っている。攻略
組は攻略に関係ない情報なんて欲しがらない。

「そいつが本当にいるなら、この辺にいるオレンジプレイヤーも片付
けてくれそうだ」

「悠長なこと言ってられないわよ。その人、カーソルがオレンジなら

問答無用でPKするって噂なんだから」

「……そいつが気に入らないか」

「だって、いくら相手が犯罪者でもやっていることは同じだわ。正義の味方ぶった偽善者よ」

「少し落ち着いてくれ。声が大きくなっている」

アスナはまだ言い足りないようだったが、黙って通路を進んだ。迷宮区のマップデータは既に公開されているから迷うことはなかった。だがモンスターとのエンカウントを避けながら、数時間探索しても結局目的であるオレンジプレイヤーは見つけることができず、引き揚げることになった。

見つけることができなかつたというより、敢えて見つけなかつた。索敵スキルを既に完全習得していたセツナがプレイヤー反応を見つけると、近付かないようアスナを誘導していたのだ。アスナもある程度は索敵スキルを上げているようだが、モンスター察知のために使っているものでセツナより索敵範囲が狭い。

迷宮区から出る頃には、既に外周から覗く陽光が層全体を茜色に染めていた。

「結局収穫無しかあ。せつかくお休みを潰したのに」

「もう他の層へ移動したのかもしれない。連中の取り締まりは《軍》に任せて、あんたは攻略に集中すればいい」

「もう、小言みたいなこと言わないでよ。それじゃあ、わたし行くね。リズに剣のメンテしてもらうつもりだったし」

「ああ」

セツナは栗色の髪を揺らしながら街の中へ消えていくアスナを見送った。その目立つ姿が街へ完全に溶け込む前に、アスナは振り向いた。

「次の攻略には出てね！ わたしの方から団長にお願いしてみるから」

セツナが了解の意として右手を挙げると、彼女は笑っていた。美しい笑顔だ。セツナはその顔を見て、奇妙な魅力を持った女だなと思った。

たまに見せる物憂げな表情は運命フナム・フアートルの女的なのだが、笑っている彼女は生き生きした女フナム・ヴァイタールそのものだった。アスナはその両方の魅力を併せ持つている。だが同時に、彼女はどちらにもなり切れていない。できることなら、セツナの前ではどちらか一方であって欲しいと思つた。

◆ 夕闇が、迷宮区の暗闇をより一層深くしていた。昼とは真逆の黒コートを着てフードを被つたセツナは、暗視モードに切り替わっている視界で暗い通路を進んでいく。

アスナと別れた後、セツナは家に戻らず65層で早めの夕食を摂り宿で睡眠を取つた。徹夜明けだったためか、まだ陽が落ち切つていないうちに眠ることができた。そう長くは眠らず3時間後に目覚め、いつもの服に着替えて再び迷宮区へと戻つてきた。

昼間にアスナと調査した時、セツナの索敵スキルはオレンジプレイヤーの存在を察知していた。迷宮区の暗闇の奥に、姿は見えなくてもセツナの視界はオレンジのカーソルを3つ捉えた。当然そこへ繋がる通路は避けた。

発見したら早いうちに片付けた方がいい。そう思つて奴らの始末を今夜決行することにしたが、奴らも索敵スキルでセツナを捉えて既に別の場所へ逃げているかもしれない。前線に近い層にいるのだ。その可能性は十分ある。

だが、セツナの一抔の不安は杞憂で済ませることができた。さすがに昼間と同じ場所にはいなかったが、奴らはまだ迷宮区の中にいた。セツナは通路の影から観察する。数は昼と変わらず3人。セツナのコートは隠蔽ボーナスが高いため、たとえ上位の索敵スキルを向こうが習得していたとしてもそう簡単には見つからない。

一応、下調べはしておいた。アルゴにメツセージで情報提供を求め、すぐに返信されたメツセージによると、上層を活動範囲としているオレンジギルドの情報は無いらしい。

2人は初めて見る顔だった。1人だけ、セツナの知っているシルエツトだった。ぼろきれのようなポンチョを着て、フードを被つてい

るから顔は見えない。だが奴の中華包丁のような武器と、それを握る手のグローブにあしらわれたギルドマークから身元の判別ができた。

《ラフィン・コライン笑う棺桶》リーダー、P.O.H。

初めてその名前を聞いた時は、何てふざけたキャラネームだと思った。でも、同時に《ラフィン・コライン笑う棺桶》なんてポップな語呂のギルドネームを考案する感性を持つのも、納得がいく名前だ。

彼を表すのに、殺人鬼なんて言葉では足りない。彼はただPKするだけでなく、その方法を他人にも吹き込み、殺戮本能を刺激しPKへと走らせていった。

イツツ・シヨウ・タイム！

今年の元旦、ギルド結成を宣言した際の彼の言葉は、まさに波だった。彼を中心として生じた波紋に触れると、周囲の人間は否応なく狂化していく。そう思ってしまうほどだった。

以前始末した《ラフィン・コライン笑う棺桶》メンバーの女は、彼に対してリーダー以上の感情を抱いていた。その女は彼の名前を口にするだけで愉悦に浸り、彼に倫理コードを解除して抱かれることを望んでいた。

ただの殺人鬼には留まらない。彼を表すとしたら、悪のカリスマとすべきか。「ハリー・ポッター」で手下に怖れられながらも妄信的に敬愛されていたヴォルデモートのように。

セツナは静かに剣を抜く。構えを取り、地面を蹴った。

一瞬で距離を詰められた敵は状況を理解する間もなく、プレイヤーのクリティカルポイントである心臓を貫かれてポリゴンの欠片になった。もう1人の方も、頭から体を真っ二つにされて砕け散った。

セツナは、自分と同じようにフードで顔を隠したP.O.Hを見やる。一瞬の沈黙の後、セツナとP.O.Hの間に金属がぶつかり合う際の火花が散った。

P.O.Hは純粹にプレイヤーとして実力者であることも有名だ。下手に出し惜しみしている余裕は無い。だが、セツナはヒースクリフから厄介な指示を受けている。

「もしP.O.Hを発見したら、PKはせず捕縛してくれたまえ」

アインクラッド最悪の犯罪者をプレイヤー達の目に晒し、アインク

ラッドの平穩を確実なものとするため。ヒースクリフはこの悪の力
リスマをだしに、自分のカリスマ性を絶対的なものにしようとしてい
る。何てセコイやり方だと思う。でも、セツナもP.O.Hの捕縛には賛
同した。

《笑う棺桶》を率いるP.O.Hには聞かなければならないことがある。
先日アルゴから渡された写真に写る、頬にケロイドの傷跡がある
男。P.O.Hなら知っているかもしれない。

P.O.Hはセツナの剣を弾き距離を取った。フードから覗く口元が
笑みを浮かべている。

「……死神か？」

「ああ」

P.O.Hの口が歪んだ。不気味なことに、笑っているように見える。
突如、横から一筋の閃光が走った。P.O.Hの体が大きく吹き飛ばさ
れる。さっきまでP.O.Hがいたその場所に、彼女は立っていた。

揺れる長い栗色の髪。

白地に赤い十字模様の戦闘服。

透き通るような銀色に輝く細剣。

「待ちなさい!!」

呆気にとられていたセツナは、アスナが走り出した方向に視線を向
けた。P.O.Hがいるはずのそこには、転移結晶使用時に放たれる光が
残照を散らしているだけだった。P.O.Hのカーソルはオレンジだか
ら、転移できたとしても圏外の村だろう。だが宣言したはずの転移先
を聞いていない。完全に取り逃がした。

それはアスナも同じだったようで、彼女は剣を鞘に納めた。そし
て、その視線がセツナの方へ向いた。

フードを被ったセツナを見るアスナは、敵に向ける目をしていな
かった。

この時、表情に憂いを纏っている彼女は紛れもなく運命の女だっ
た。

「あなた……、セツナ君なの？」

第10話 罪には覚悟を

アスナはリズベットの店で用事を済ませた後、夕食にセツナを誘うつもりだったらしい。マップ追跡したら昼間行つたばかりの迷宮区へ入るところで反応が消えたため、心配になって探しに来たようだ。

PoHと戦っている時に来てくれれば誤魔化せる範疇だったのだが、間の悪いことにアスナはセツナが2人目をPKするところを見たらしい。

アスナはセツナの腕を掴んで、フードを取った。露になったセツナの顔を見たアスナは、その表情にある憂いをより一層深めていた。

「一緒に来て」

アスナが言ったのはその一言だけだった。セツナは抵抗することなくアスナに着いていった。

顔を見られる前に、PoHと同じように転移結晶で逃げれば良かったのかもしれない。でもアスナはすぐセツナを見つけ出して、真実を問いただしてくるような気がした。ギルドを抜けてマップ追跡できないようにしても、アスナなら解放された層全てを回つてもセツナを探すだろう。そんな気がした。

移動中、アスナは何も言わなかった。代わりにウィンドウを開き、誰かにメッセージを送っていた。多分ヒースクリフだろう。

無言のまま2人はグランザムの血盟騎士団本部へ行つた。夜になると門番はいなかったが、塔の扉は開け放たれていた。照明が落とされた会議室で、ヒースクリフ1人だけが中央の椅子に腰かけていた。背景にあるガラス張りの窓から差し込む街灯を浴びて、顔が影に覆われてもその存在感は変わらなかった。

暗視モードで確認できるヒースクリフの目には、怒りも悲しみも宿っていなかった。ただいつもの無機質な真鍮色の瞳を、セツナに向けていた。

「団長。きつき、彼がオレンジプレイヤーをPKするところを見ました」

「……そうか」

「団長は知っていたんですか？　彼が《死神》と呼ばれるプレイヤーだと」

「ああ、知っていた」

ヒースクリフはいつもの声色で答えた。そして続けた。

「彼にオレンジプレイヤー暗殺の任を与えたのは、他でもない私だ」

ヒースクリフの言葉に、セツナは内心驚いていた。彼なら「知らない」と切り捨てるだろうと思っていた。セツナの驚愕など知らないまま、アスナはその怒りに満ちた目をヒースクリフに向けている。

「どうして、彼にそんなことをさせたんですか！」

「我がギルドのメンバーがオレンジプレイヤーの被害に遭っていることは、アスナ君も知っているだろう。《軍》の取り締まりは限界がある上に、上層までには及んでいない。攻略組の安全のために、オレンジプレイヤーは排除されなければならない」

「だからといって、彼にやらせている事を分かっているんですか！　殺人ですよ！」

「ああ、彼のしている事は許される事ではない。無論、彼に命令していた私もそうだ。しかし必要なことだ。アスナ君、彼がこれまでこなしてきた仕事がどれほどか知っているかね？」

「……………彼は何人殺したんですか？」

「200を越えている。私の指令にない人数を含めれば、もつといるだろう」

「そんなに……………！」

アスナは言葉を詰まらせて、口に手を当てた。彼女は視線をセツナへと移した。さっきまで怒りを浮かべていたその顔は驚愕へと変わっているが、絶望を含んでいるようにも見えた。

「この数がどういふことか分かるかね。このアインクラッドには、それ程に悪意に満ちたプレイヤーがいるという事だ。それは留まることを知らない。今後も犯罪を働く者は現れるだろう」

この「必要悪」の議論は、この場では終わらないだろうな。憤るアスナといつもの調子を崩さないヒースクリフを見て、セツナはそう思っていた。

この議論に決着がつかないのは、どちらの主張も結局は「正しい」からだ。ヒースクリフがセツナに暗殺をさせていたのは、ギルドの仲間と攻略組を守らなければならぬから。アスナがセツナとヒースクリフを許せないのは、殺人が最も重い罪だから。どちらも正しいのだ。

アスナの言い分は10人中10人が正しいと言うだろう。ヒースクリフの言い分は両論賛否だ。でもだからといって、多数決で済まされるほど単純な問題ではない。必要悪というのは、必要だから存在するのだ。「ロード・オブ・ウォー」で商才があるというだけで、主人公が殺人に使われる武器を売っていたように。正義とか悪とか、そんな倫理観を超越するほどの需要があるから。

セツナの予想通り、この場の議論は泥沼のまま終わった。どちらも自分の主張を曲げることなく。

「明日、ギルドで例会を開きます。そこで彼のことを報告します」
「ああ、構わない。私も、やってきたことの責任は取るつもりだ。君が望むのなら、私はギルドを去ることも辞さない。だが私は悔いていない。彼のおかげで、攻略組を守ることができたのだからね」

「……………」
アスナは唇を噛んだ。現実なら、血が滲んでいることだろう。

「今晚、彼はわたしが預かります」

ヒースクリフは頷き、了承する。

「セツナ君、聞いた通りだ。今夜は彼女と一緒にいて欲しい」

「……………了解」

アスナは「行くよ」とセツナの手を引いて会議室から出た。

会議室の扉が閉じるその瞬間まで、ヒースクリフはいつもの無機質な表情をしたままだった。

◆
?

第61層主街区のセルムブルグは、まるでフランスのモン・サンミシエルとギリシャのサントリーニ島を掛け合わせたような街だった。その街並みの美しさに街開きの際には、多くのプレイヤーがこつ

た返してすし詰め状態になったらしい。危うく層の大半を占めている湖に落ちかけたという笑い話も聞いた。

街に並ぶ白亜に統一された花崗岩の建物は、街灯と窓から漏れる光を浴びて淡い黄色に染まっている。その様はまるで長い年月が経った遺跡のようで、街に哀愁と深みを彩っていた。

ここに来たのが夜で良かったとセツナは思う。昼だと建物と揺らめく湖面が陽光を反射して、層全体が真っ白に輝いていることだろう。黒ずくめの装束を着たセツナには場違いだ。白の団服を着たとしても、5分と街の空気に耐えられないかもしれない。

時間帯のせいか、人通りは少なかった。湖畔には外周部から覗く月を映す湖面を鑑賞している粹な男女が1組だけだ。男女が腰かけている傍に、白い小舟が浮いていた。「旅するジーンズと16歳の夏」で、4人いるヒロインの1人が海へと飛び込む場面を思い出した。「セツナ君……」

前を歩くアスナの声には覇気を感じなかった。昼間はあれほど気力に満ちていたというのに。前を向いたままの彼女の髪は影を帯びているが、それは僅かな湖の光を反射していた。歩く度に、その髪が艶やかになびいている。

「団長の命令だから、やっていたの？」

「ああ。だが合意の上だ」

「自分のしてきた事を分かっているの？　あなたのできた事は殺人なのよ？」

「分かった上でやっていた。それで、あんたは明日の例会でどうするつもりだ。俺を牢獄にでも送るつもりか」

「それを明日幹部で話し合うのよ」

「だとしたら、俺は問答無用で牢獄送りだろうな。最悪の場合処刑だ」アスナは立ち止まり、セツナがいる後ろを向いた。その影を帯びた顔を見て、トラビアの村で会ったエステルを思い出した。

「さつきから他人事みたいに！　あなたの事なのよ？」

「あんたこそ、俺の事を晒せばどういう事になるか分かっているのか。血盟騎士団の信用は一気に落ちる。攻略にも支障が出かねないぞ」

「だから黙っているってどういうの？　あなたはわたし達を守っているつもり？」

「ヒースクリフも言っただろう。俺は少なくとも200人のオレンジプレイヤーを始末した。始末した連中の活動圏にいるプレイヤーは守られた」

「あなたは、それが正義だとも？」

「俺のしていることが正義だとは思わない。でも、俺のしていることが結果としてあんた達を守っていることは事実だ」

「だとしても受け入れられないわよ！　あなたの起こした悲しみでこの世界が成り立っているなんて！」

アスナの目尻には涙が浮かんでいた。セツナには、なぜ彼女がそこまでセツナに思い入れているのか分からない。でも、彼女の悲しみは受け止めなければならなかった。

「わたしだって、犯罪者は許せないわよ！　でも、いくら犯罪者でも命は命よ！」

命は命。

結局、殺人の是非はその一言で否定されてしまうのだ。セツナがいくら、アインクラッドが地獄の上に浮かんでいる事実を述べたところで、彼女のその一言で片付いてしまう。そんな真っ直ぐな正義感を持つてゐることは尊敬するし、変わらないでいて欲しい。

でも、事実は事実だ。事実というものに、人はどうしても反発したくなる。だから別の可能性を探り、別の答えを望む。しかし結果として表れてしまったものは変えようがない。

「いい加減現実を見ろ。俺という存在がいるから、あんた達は平和に攻略を続けられる。俺がいなければ、連中の犠牲者は増え続けるんだぞ」

「でも、だからって殺していいはずがない!!」

「殺さなければ、俺が殺した数よりも多くの人間が死ぬ。ゲームではなく、人の手で」

セツナはアスナの顔を見つめる。瞳にはもう迷いが無かった。自分が見べきことを見つけた眼差しだった。

アスナはウインドウを出し、素早く操作した。すぐにセツナの視界にシステムメツセージが表示される。

「アスナから1V s 1のデュエルを申し込まれました。受諾しますか？」

「わたしには、これ以外にあなたを止める方法を思いつかない」

「ああ、ここで議論しても無駄だ。俺達の言い分は両方とも間違っているではない」

アイコンクラッドは剣の世界だ。剣で全てを決することが一番良い選択だ。こんな思考をすると、すっかりこの世界の住人になったなと思う。まだデスゲームが始まって2年近くだが、人間の適応力はたくましい。

「俺をこの場で殺すのか」

「あなたと同類になるのは嫌。《初撃決着モード》にして」

セツナはYesボタンに触れて、オプションの中から《初撃決着モード》を選択した。メツセージが変化する。

「アスナとの1V s 1デュエルを受諾しました」

メツセージの中で60秒のカウントダウンが開始される。アスナの方にも表示されているようで、彼女は腰の鞘から剣を抜いた。

セツナも剣を抜き、アスナの目を見据える。さすがは「狂戦士」と呼ばれるだけある。一切の迷いを感じない。セツナはその目に宿る闘志に応えなければならぬ。セツナは「死神」ではなく、セツナとして彼女と剣を交えなければならない。

カウントは一桁まで減っていた。

5、4、3、2、1。

【DUEL!!】

同時に、2人は地面を蹴った。アスナの青い光を纏った剣が迫ってくる。細剣基本技の《リニア》だ。基本技だが、敏捷度が高いアスナはそれを視認できないほどのスピードで繰り出してきた。HPを半減させる他に、最初の強攻撃をヒットさせれば勝利する《初撃決着モード》に最適な技だ。

単純なスピード勝負ならアスナの攻撃はヒットするはずだが、セツ

ナの剣はそれを受け止めた。触れ合った刀身同士が火花を散らしながら滑り、アスナの剣はセツナの顔から僅か数センチ右へと軌道が逸れた。

アスナの顔は驚愕を浮かべていた。よほど自分のスピードに自信があつたようだ。確かに「閃光」と呼ばれるだけのスピードだ。だがアスナは地面を蹴る直前、一瞬だけセツナの胸へと視線を僅かに落とした。それでおのずと狙ってくる位置は読める。

一般プレイヤーが主に相手をするのは、アルゴリズムで行動を設定されたモンスターだ。セツナはアルゴリズムなんてものもよりも複雑な回路を持つ人間を相手にしてきた。モンスターとの戦いでは彼女が上だろうが、対人戦闘に関してセツナには培ってきた場数がある。

アスナは再び剣を突き出してきた。どれも素早い突きだ。でも全てセツナはいなした。アスナが上段から振り下ろした剣を受け止め、鏢迫り合いへと持ち込んでくる。拮抗しているが、筋力パラメータを熱心に上げていないセツナには長丁場になると不利になる。

セツナは右足で強く地面を踏み込んだ。そしてアシストに従って、黄色のエフェクトを纏った右足をアスナの腹へと叩き込んだ。

アスナの体が大きく吹き飛ぶ。HPは数センチ減っただけだ。石畳の地面に倒れる直前で、アスナはステップを踏み体勢を立て直した。だがその間に、セツナはアスナへと肉迫していた。セツナの剣がアスナの髪や腰から垂れたローブを掠めていく。さっきとは打って変わり、アスナは防戦へと転じていた。

セツナは剣を振りながら、アスナの視線へと注意を向ける。左右上下から迫って来るセツナの剣を追うため視線を走らせる彼女を見て、セツナは勝利を確信した。

セツナが横薙ぎに振った剣を、アスナが防いだ時だった。セツナの黄色い光を放った左拳が、アスナの頬をしたたかに打ち付けた。体が衝撃と同じ方向へと倒れ、慣性によってその長い髪は反対方向へ舞った。

アスナは受け身を取ることもなく、固い地面に身を伏した。その近くを、彼女の剣が甲高い音を立てて転がった。まだ彼女のHPは2割

しか減っていない。デュエルはまだ続いている。でも、彼女は立ち上がろうとする気配がなかった。

このまま動かない彼女に中堅クラスのソードスキルで攻撃すれば、HPは半分を切ってセツナは勝利するだろう。でも、セツナはそれをする気が起きなかった。今まで命乞いをする標的も、眠っている最中にセツナがウインドウを操作していることに気付かない標的も、容赦なく斬り捨ててきたというのに。

「降参」

セツナがそう呟くと、システムメッセージがデュエル終了を告げた。メッセージの中に勝者であるアスナの名前が表示されている。

「二度と俺の邪魔をするな」

セツナはうづくまっただまのアスナにそう言い放ち、コートを翻して歩き出した。だが、すぐに背後からコートの裾を引かれ足を止めた。振り返った先に、顔を俯かせたアスナがいた。

「待って……………」

震える声のアスナは両手でセツナのコートを掴んでいる。少し離れた所に、彼女の剣が地面に放置されていた。

アスナがゆっくりと顔を上げる。今にも涙を流しそうな目をしていた。でも彼女は涙を流さなかった。女であることを利用することに抵抗しているように見えた。

「お願い……………お願いだから……………、行かないで……………」

彼女はもう、ファム・ファタールの女でもファム・ヴァイタールの女でもなかった。セツナの目の前にいるのは、ただの少女でしかなかった。

「……………分かった」

口からなぜその言葉が出たのか、セツナ自身にも分からなかった。いや、分かってしまう事が怖かった。彼女を見て感じたことを自覚する事が、これまでのセツナの生き方に迷いを持つてしまうような気がした。

黙ってアスナの部屋まで着いていく間、セツナは自分の中で湧いてくる疑問を打ち消すことに必死だった。

これは気まぐれだ。

ヒースクリフから彼女と一緒にいろと命令されたからだ。

たまには、リゾート地でゆっくり休みたいからだ。

セルムブルグの街並みに違わず、アスナの部屋も豪華に整えられていた。家具の造形の細かさは、NPCショップで買える代物ではない。職人プレイヤーが自身の最高のスキルを駆使してしつらえたのだろう。

「ご飯、作るね。適当に座ってて」

沈んだ声色のアスナに促されるまま、セツナはダイニングの椅子に座る。リビングの奥の部屋に入り、すぐに出てきたアスナは装いを変えていた。簡素なチュニツクとスカートは、彼女がまだ年端もいかな少女であることを主張しているようだった。

キッチンで食材をオブジェクト化しているアスナの顔を眺める。キッチンに置かれた器具から、彼女が料理を趣味としていることは分かるが、その顔は趣味を楽しんでいるとはとても言い難い。アスナはずっと、伏し目がちな表情を変えなかった。しばらくして、キッチンから漂う匂いが、セツナの鼻腔に届いた。さつき迷宮区に入る前に夕食を済ませたというのに、その匂いはセツナの食欲を刺激した。

「どうぞ……」

セツナの前に、ソースがかかったステーキが置かれた。焼けた色合いからして、牛型モンスター肉のようだ。セツナはフォークで肉を口に運ぶ。この世界に来て、一番美味いと素直に思った。脳にただ信号が送られるだけと、今までは味なんて追及しなかったというのに。匂いからもしやと思っただが、ソースは醤油に似た味だった。アスナはまだ料理スキルを完全習得していないようだが、極めれば完全に醤油を再現できるかもしれない。

夕食の後、2人はテーブルで向かい合いながら、ハーブティーに似た香りのお茶を飲んでいった。食事の間からずっと無言だった。やがて、アスナが沈黙を破った。何の前置きもなく、唐突で、率直に。

「どうして、セツナ君は犯罪者を殺すの？」

「理由を言って片付くものじゃない。言えば、あんたは俺に仕事を続けさせてくれるのか」

「絶対に止める」

アスナは断言する。

「でも、わたしにも何かできるかもしれない」

この女に話したところで、セツナが変わることはない。それは確信できる。トラビアでエステルに聞かれた時は断った。でも、今は他者にセツナの根本を開示すべきという声が、セツナの思考を占めようとしている。

誰でもいいというわけではない。アスナだからこそ、話してもいいと思える。

彼女と過ごして感じてきたもの。その言葉で言い表すことのできない事をはつきりと言葉にするため、セツナは結んだ口を開いた。

それは告白と呼ぶべきか、懺悔と呼ぶべきか、セツナ自身にも曖昧なものだった。

◆
？

アインクラッドで現実世界の話を持ち込むのは、最大のタブーだ。現実とは別の人生を生きたくて、SAOにログインした。

オンラインゲームでは、現実での生い立ちや社会的立場など関係ない。その人の人柄だけを見るべきだ。

デスゲームのこの世界で、現実の事など話しても無意味。今の自分達はゲームの世界の住人なのだから。

SAOプレイヤーの大半は、発売と同時に即完売したソフトを手に入れた筋金入りのゲーマーだ。SAOがデスゲームになってから2年近く経つ現在でも、その暗黙のルールは厳守されている。

実際、たとえ現実の事を話しても意味は無い。攻略組のとあるプレイヤーが現実では職にも就かず親の庇護の下暮らしている人間だったとしても、アインクラッドではデスゲームをクリアへと導いてくれる希望なのだ。

ゲームでは現実の事を置いていくべき。それがネットの海で展開されるMMOをプレイする上での最大のルール。

でも俺は、そのルールを破った。

俺はこのアインクラッドに、現実を持ち込んでやってきた。

だから俺の話は、現実世界で生きていた頃にまで遡る。

暑い日だった。

8月の真っ只中、既に陽は傾きかけているのに気温は下がらないまま、俺は帰路についていた。いくら制汗スプレーを吹きかけても汗は止まらなかった。でも、その汗すらも俺は心地良いと思った。

その日俺は、サッカーの大会で優勝したばかりで、勝利の余韻に浸っていた。父親の教育方針として小学生の頃から続けていたサッカー人生の中で、その日の試合はこれまでの練習で培ったもの全てをぶつけた。結果として、フォワードを務める俺は得点を決めた。

決勝試合が終了すると、俺はチームメイトと共に観戦していた父兄達の歓声に迎えられた。いつも厳しい監督も、俺のプレーには賛辞を述べてくれた。

会場のグラウンドから優勝カップを土産に学校へ戻り、そこでも校長からの祝いの言葉を受け取った。学校で解散した後、俺はチームメイト達と一緒に汗臭いままファミレスで軽い打ち上げをした。父兄も交えた祝勝会は後の期日だったが、俺達は待ちきれなかった。

ユニフォームに大量の汗を染み込ませながら、帰路で俺は試合を振り返った。その日の試合は、まさにチームが1つになっていた気がした。1人1人が自分に与えられたポジションの役目を果たし、ゴールまで最前線にいる俺に上手くボールを回してくれた。

帰り道で試合を自画自賛していた俺は、自分が歩いている住宅街で音が響いていることに気付いた。明らかに、どこかの店から漏れたBGMではなかった。よく通る道だし、新しく店ができた話なんて聞いていない。それに、この音はとても店で流す程ポップな雰囲気ではなかった。

この音はバイオリンだろうか。誘われるように音源を探して歩いた。俺は音楽にはあまり興味は無い。スマートフォンに入れているお気に入りの曲は10も無いし、ギターとベースの違いも分かっていない。楽器なんて音楽の授業でリコーダーを吹く程度だ。

でもあの音には、どこか惹かれるものがあつた。音楽は心を強姦す

ると、いつか小説で読んだことがある。よく出来た言葉だと思う。強姦なんて言い回しに少し抵抗はあるが。

そして俺は、その音源を見つけることができた。場所は小さい頃よく遊んだ公園だった。平日の夕方の、人気のない公園。その真ん中で、彼女はいた。

年は俺と近そうな少女。着ているのは学校の制服のようだが、俺の中学とスカートの色が違う。額から汗を滴らせながら、彼女はバイオリンを弾いていた。

公園に入った俺は、その演奏を突っ立ったまま聴いていた。曲の名前は何なのか分からなかったけど、彼女の奏でる音をもっと聴きたいと思った。結構長く聴いていたが、彼女は弦に集中しているのか俺には気付いていないようだった。

やがて、演奏が終わった。そこでようやく、彼女は俺に気付いた。彼女の琥珀色の瞳は見つめるとその中へ吸い込まれてしまいそうだった。演奏を見られたことの羞恥は感じていないみたいだ。恥ずかしいなら、公園のど真ん中でバイオリンなんて弾かないだろう。

彼女は俺と短く視線を交わすと、バイオリンを近くのベンチに置いてあるケースにしまった。そのまま、俺が入ってきた所と反対方向へと歩き出した。

「あ、なあー！」

咄嗟に、俺の口から声は出た。何だかナンパみたいで抵抗はあったけど、声をかけずにいられなかった。俺は彼女の前へと回り込んだ。

「何でここでバイオリンなんか弾いてるんだよ？」

「……たまには、外で弾いてみたかったから」

彼女はそう呟くように言った。一切の曇りのない、澄んだ声だった。

「バイオリンで外で弾かないの？」

「普通は屋内よ。夏だと特に湿気がひどいから」

その少ないやり取りで、この女は苦手な部類の女だと思った。

俺は女慣れしているとまでは言わなくても、気心知れた女友達が何人もいる。俺が気兼ねなく話せる彼女達は、平気でがに股で歩き、

荒っぽい言葉を使うことが多い。だからこそ女だからといって変に気を遣うことなく接することができるのだが、目の前にいる彼女は俺の女友達とは全く異質の存在だった。

艶のあるストレートの長い髪。アイロンがしつかりと掛けられているブラウスとリボン。折り目が揃えられたプリーツスカート。俺の学校の女子と同じ出で立ちなのに、彼女達よりも気品がある。着るものが同じでも、手入れをするだけでここまで違うのかと思った。ブラウスに施された校章の刺繍は、偏差値の高いことで有名な学校のものだ。義務教育なのに、中等部に入るには難関な試験をパスしなければならぬ。しかも学費が高いことでも有名だ。

だとしたら、彼女は裕福な家のお嬢様だろうか。雰囲気で何となくそんな気がする。楽器だって、決して安くはないことはバンド活動をしている友人から聞いている。

「いつも、ここで弾いてるのか?」

「ううん、今日はたまたま。練習をサボっている間の暇つぶし」

「練習サボるのはよくないぞ。サボった分は3倍練習しないと取り戻せないし」

「……何だか押し売りみたいね」

「なっ……」

俺は何も言い返せなかった。実際、部活で監督から言われたことをそのまま言ったからだ。

「人に何か教えたいなら、自分の言葉で話すべきよ」

彼女は素っ気なく言うのと、そのまま俺の横を通り過ぎて行こうとする。何て無愛想な女だ。顔立ちが整っているせいか、余計に腹が立つ。

でも、彼女の音には確かに惹かれるものがった。同時に、何か引つかかるものがあつた。俺はそれを知りたくなつた。

「あ、ちよつと待てよ!」

彼女は立ち止まり、振り向いた。

「また、バイオリン聴かせてくれないか?」

「あなたクラシック聴くの?」

「聴かないけど、お前のバイオリンがまた聴きたいんだよ」

「ナンパする癖に口説き文句が下手ね」

「ナンパじゃない!」

言い方がつくづくキツイ女だ。こいつ友達いないんじゃないかと思える。

「……分かった。弾いてあげる」

俺が上手い理由を考えている間に、彼女はそう言った。

「でも平日は練習と塾があるから。日曜日のこの時間、この公園で休日なら、あなたも部活無いでしょ?」

「あ……、うん」

一瞬、何で俺が部活していることを知っているんだと思ったけど、その疑問の後、俺は自分が汗まみれのユニフォームを着ていることを思い出した。動揺を誤魔化すために、俺は咳払いする。

「早速刹那だ」

「せつな……。ふっ」

俺の名前を聞いた彼女は、控え目な笑みを零した。

「何その名前、女の子みたい」

「言うなよ、俺だって気にしてんだ!」

1学期初めのホームルームや、部活に入った時。自己紹介の場で名前を言う度に恥ずかしくなる。この名前で15年間暮らしてきたというのに、未だに俺は自分の名前にある違和感を拭えない。必ず「キラネーム」とか「女の名前」とか言われるのだ。

一度、この名前を付けた父親に文句を言ったことがある。何でもつと男らしい名前にしてくれなかったのかと。父親曰く、姉の次に生まれる子供は男女関係なく「刹那」という名前にすると決めていたらしい。一応仏教用語で、読み方も当て字ではないから不自然な名前ではないと言われた。だとしても、男で刹那とは如何なものかと思う。出生届を出すとき、受理した区役所の職員は真面目に仕事をしているのだろうか。

「人の名前を笑うな! そういうお前の名前は?」

俺は恥ずかしさを消すように、語気を強めて尋ねた。控え目ながら

ひとしきり笑った彼女は、笑みを浮かべたまま名乗った。

その顔を見て、不覚にも可愛いなと思った。
まひろなみえ
「真広波絵」

第11話 弦には弓を

俺は洗面所にある鏡の前で、自分の格好を確認した。正直、ファッションに興味は無いから服をあまり持っていない。だから、鏡に映る自分の格好がおかしくないか分からなかった。

普段は学校の制服か部活のユニフォームで事足りるし、部屋着なんて古い練習着を着回している有様だ。夏休みで授業がなくても部活はある。たまに友人達と遊びにはいくが、その時はクローゼットから目についたものを適当に着ていく。

「あんた何してんの？」

姉が洗面所から顔を覗かせてきた。一番見られたくない人間に見られてしまった。両親が共働きだから、小さい頃から年が10近く離れた姉に面倒を見てもらってきたが、だからといって何を見せても恥ずかしくない関係ではない。むしろ、母親に隠していたグラビア雑誌を発見されたのと同じくらい気まずい。

「姉ちゃん、ちよつと出掛けて来る」

「今から？」

「ちよつとそこまで。晩飯までには帰るよ」

何か言われる前に、俺は姉の横を通り過ぎてそのまま玄関に向かう。

「刹那」

「何だよ急いでるのに」

姉は俺の頭を無造作に掴み、何かのスプレーを髪に吹きかけてきた。

「何すんだよー！」

「じつとしてー！」

俺は姉の言葉に従って、抵抗していた手を引っ込めた。俺はもう姉の身長を追い越していたから、姉の目線に合わせて屈む体勢は少し辛かった。

「デートに行くなら、髪ぐらい整えなさい。寝癖だらけじゃないの」「デートじゃねえー！」

「ほら動かない。まあ服はそれで仕方ないとして、清潔感ない男は嫌われるわよ」

「そういうのじゃねっての!」

俺は吐き捨てるように言っつて、家を出た。夕日が街を茜色に染めていた。

公園に着くと、波絵は既にいた。白いワンピースを着た彼女は日陰にあるベンチに座り、スマートフォンをいじることもなくブランコを眺めていた。その日も公園には他に誰もいなかった。

「よお」

「ごめん、待った?」なんて言うとは本当にデートみたいになっつてしまふ。俺は照れを隠しながら波絵に素っ気なく声をかけた。

「ええ」

波絵も素っ気なく返すと、ケースからバイオリンを出して、ベンチの目の前に立った。日陰から出ると、彼女の黒かった髪が夕日を浴びて赤みを帯びた茶色に輝いていた。

俺はベンチに座り、彼女の演奏を待つ。波絵はバイオリンに顎を当てると、弦に弓を当てて、音を奏で始めた。

とても静かで穏やかな音色から始まった。その穏やかさが心地良くて眠ってしまいそうだが、唐突に曲調が激しくなった。俺はびっくりして飛び上がりそうになった。この女は、俺が寝そうになったから別の曲へと変えたんだと思った。

曲は激しくなったと思えば穏やかになり、また激しくなっつては穏やかにを繰り返した。やがて、激しさが最高潮に達した所で、曲は終わった。

俺はささやかな拍手で、波絵の演奏に賛辞を贈る。波絵はこのコンサート唯一の観客である俺に礼をした。

「それ、何て曲?」

「ヴィヴァルディの協奏曲第2番、ト短調『夏』よ」

やけに長い曲名だな。そのくせ最後の部分だけシンプルだ。というか、曲調がコロコロ変わるのにずっと同じ曲を弾いていたのか。

「ピンと来ないって顔ね」

「まあ、知らない曲だし」

「結構メジャーな曲よ」

「何だか、クラシックなのに落ち着きが無い曲だなと思って。ヴィヴァルディって人は夏が好きだったのか嫌いだったのか、よく分からないな」

俺がそう言うと、波絵は前に会った時と同じように控え目に笑った。目を細めて口に手を添える仕草を見ると、俺は少し照れ臭くなって顔を背けた。少し見とれたなんて言えない。

「好きでも嫌いでもなかったから、先入観なく作曲できたんだと思うけど」

俺達はそのやり取りの後、何をするわけでもなく公園で別れて互いの帰路についた。電話番号もメールアドレスも、SNSのIDも交換しなかった。SNSくらいならと、多くの人間が思うかもしれない。でも、俺はSNSのアカウントを作っていないかった。俺の日常といえば、平日は学校と部活。休日は家で映画鑑賞と読書。たまにスタジアムでサッカーの試合を観戦するだけで、ネットに投稿するほどのものでもなかった。夏休みの間は授業が無くても、その分の時間は全て部活に費やされる。

周囲の連中によると、そんな考えを持つ俺は「変わり者」らしい。俺からしてみれば、皆の方が変わっている。ただでさえ部活で疲れるというのに、ネットで呟く程度の出来事を探すなんてもっと疲れる。

次の日曜日も、その次の日曜日も。俺は毎週波絵のバイオリンを聴きに公園へ通った。そして波絵から弾いた曲について教わり、現地で解散する。

俺はその期間に夏の全国大会に進み、惜しくも優勝を逃し準優勝に収まった。表彰式の間、チームメイト達は優勝できなかったことを悔やみ涙する奴までいた。それなのに、エースストライカーとして他校から一目置かれている俺は結果なんてどうでもよくて、早く日曜にならないかなと思っていた。試合の間は集中できて何回か得点を決めたから、俺の雑念に気付く奴は1人もいなかった。

夏休みが終わっても、俺達は会い続けた。9月の残暑が厳しい中、

波絵は汗を滴らせながら俺のためにバイオリンを弾いてくれた。会う回数を重ねる内に、少しずつ公園に遊びに来ていた子供達も波絵の観客に加わるようになった。近所でも、波絵の演奏はちよつとしたイベント事になった。

◆ 「なあ利那」

学校の休み時間、いつものように読書をしている俺に部活仲間が話しかけてきた。こいつはいつも俺の読書を邪魔してくる。電子書籍が主流のご時世に紙の本をめくる俺をよくからかうのが定番だ。でも、この日はいつもとは違った。

「お前、日曜に女と会ってるだろ?」

「はあ? 誰から聞いたんだよ?」

「坂本からだよ。お前と家近いじゃん。何だよデートか? どのクラスの娘だよ?」

「違う学校の奴だよ」

「会ってるのは本当かよ! いいよなあ推薦組は。勉強しなくていいからデートする余裕があつて」

「デートじゃねえ!」

うちの中学の学区で会っていたことを後悔した。異性に興味津々の年頃である彼等にとつて、女に会う事すなわち交際という発想はどうしても弁解することができず、俺に彼女がいるなんてデマがクラス中に広まった。

しかも質の悪いことに監督にまで噂が伝わってしまい、職員室まで呼ばれて説教を食らう羽目になった。男女交際禁止なんて前時代的な校則を敷く学校なんて今の時代日本には無いけど、俺はサッカー部の強豪校への推薦入学を狙う身だ。3年生が部活を引退しても、俺は実技試験に向けて練習を続けなければならない。

「恋愛するなどは言わないし、お前が現を抜かすような奴だとは思っていない。でもな、少し気を引き締めろ」

俺は波絵が彼女ではないことを説明しようと思わなかった。全国大会まで連れていってくれた監督に口答えなどできない。俺は素直

に気をつけますとだけ答えた。

波絵と過ごす時間を気に入っていることは認める。でもそれは恋愛感情じゃない。

思春期だから、異性に対する興味もあるかもしれない。確かに波絵は容姿が整っている部類だ。でも俺はただ、彼女が奏でるバイオリンの音が好きなだけ。それだけだ。

ある日、俺はクラスで吹奏楽部の女子に声をかけた。あまり話した事がなく、しかも彼女がいると噂の俺に話しかけられたことで驚かれ警戒もされた。もう冷やかしとやつかみばかりを向けられた俺は、そのリアクションも慣れたものだった。

「吹奏楽部に、バイオリン弾ける人っていないか？」

都合の良いことに、その女子はバイオリンの経験があり、聴かせてくれる事になった。部活での担当はトランペットだが、今でもたまに弾くことがあるらしい。その日のうちに約束を取り付け、部活を早めに上がった俺は吹奏楽部が部活を終えた音楽室にお邪魔した。

「誰も弾かないけど、前の顧問が置いてったんだって」

「吹奏楽って、バイオリン弾く人はいないの？」

「バイオリンとかの弦楽器は、上達するのに時間がかかるからね。中学とか高校とかの3年じゃ、ものにならないよ」

そうなのかと俺が感心している間に、彼女は演奏を始めた。とても明るい曲調だった。波絵の弾く曲とは正反対だ。指をせわしく動かす彼女は演奏を楽しんでいるように笑っていた。音に彼女自身の楽しさに乗せているようだ。

そして、演奏が終わった。俺は拍手を贈る。

「彼女さんもバイオリン弾くの？」

「彼女じゃないって。ただ演奏聴かせてもらってるだけだよ」

俺は笑っている彼女を見て、波絵との違いを探す。彼女は音を奏でる時に笑っている。彼女の奏でる音も笑っているように思える。

なら波絵はどうだろう。今まで波絵が弾いた曲は、どれも悲しげな曲ばかりだった。演奏している波絵も、楽しそうに弾いているとは言い難い。いつも無表情で弾いていた。

「早速君が興味持つなんて、さぞかし美人さんなんだろうね」
「だからそんなんじゃないって。それに、俺が人に興味持つのがそんなに珍しいか？」

「早速君を好きな子は沢山いるから。うちの後輩も、窓からグラウンドにいる早速君を見てる子とか結構いたよ」

「え、そうなの？」

「鈍感だね早速君って」

俺はさぞかし間拔けな顔をしていたのだろう。彼女は俺の顔を見てまた笑っていた。

確かに、俺が他人に興味を持つことは珍しいのかもしれない。俺はサッカーをしていなかったら、学校以外は外に出ない完全なインドア派だっただろう。俺の悩みや心配事といえば、今は受験だが、それを除けば次はどの本を読みどの映画を観るかだった。

俺が読書や映画に傾倒するようになったのは、父親の影響だ。大学の文学部卒の父親は、学生時代に有り余っていた暇を潰すために読書や映画を嗜み、中毒と言えるほどにどっぷりと浸かっていったという。そんな父親が若い頃から収集している、紙に印刷された本とDVDという古いディスクに記録された映画が、俺の家にはぎっしりと詰め込まれている。俺が家にあつたそれらのコンテンツに手を出すことは、自然な事だったのかもしれない。

そうになると、俺は父親に似たのだろう。姉は話題になったベストセラーを電子書籍にダウンロードして読む程度だったし、父親のコレクションが詰まった書斎兼シアタールームはかび臭いと近付こうとしなかった。

俺の一番古い記憶は、シアタールームに改装された客間で父親の膝に座って観た「スター・ウォーズ」だった。ダース・ベイターにライトセーバーで右手を斬り落とされたルーク・スカイウォーカーを見て、俺はあまりのショッキングさに泣いた。それでも俺は、父親と2人で映画を観る時間が好きだった。今は1人で鑑賞するようになったが、たまに父親と映画を通じて親子の時間を楽しんでいる。

そんなサッカーを除けば純粋な文学少年になっていたであろう俺

が、波絵に興味を持つ理由はいまひとつ釈然としないものがある。初恋の相手も「ハムナプトラ」でヒロインを演じたレイチェル・ワイズで、画面の外にいる人間に興味を示さなかったというのに。

波絵以外の人が奏でるバイオリンの音を聴いたその日、俺は家で「レッド・バイオリン」を観た。赤いバイオリンに魅せられ破滅していく登場人物達のように、俺も波絵に惹かれているのだろうか。不気味に赤い艶を出すバイオリンに、日陰では黒いのに陽を浴びると赤褐色に輝く波絵の髪が重なる。俺はあの髪と、琥珀色の瞳にいつの間にか吸い寄せられているのだろうか。

彼女は、俺を自覚させないまま破滅へと導くファミリア・ファタール運命の女なのだろうか。

◆
俺は次の日曜日に、またいつものように波絵と会った。波絵が公園に来ると、「あ、いつものお姉ちゃんだ」と遊んでいた子供達が集まってきた。

「なあ、波絵」

「何?」

「今日は、俺がリクエストしてもいいか?」

「いいわよ、何の曲?」

「いや。曲とかじゃなくて、明るい曲を聴きたいんだよ」

俺のリクエストに、波絵は少しだけ目蓋を落とした。困っているのか微妙な所だ。いつも無表情で人形みたいだから、何を考えているのか分からない。

「いいわよ」

でも波絵は俺のリクエストに伝えてくれた。俺はいつものように、ベンチに座って波絵の奏でる音を聴いた。

リクエスト通り、明るい曲調だった。でも、波絵は楽しそうじゃなかった。いつものように無表情で、淡泊で。音楽室で弾いてくれた彼女と違って、波絵は自分の感情をバイオリンの音に乗せていなかった。明るい曲なのに、何故か俺は悲しい曲だなと思った。

クラシック通を気取っているだけかもしれない。俺には波絵の演

奏の良し悪しなんて分からない。でも俺は、波絵の奏でる音から滲み出る悲しみを知りたいと思った。

演奏が終わると、子供達は力いっぱい拍手した。俺の拍手がかき消されてしまう程の大きな拍手だった。

「波絵」

俺はケースにバイオリンをしまう彼女に言った。正直、とても勇気が必要だった。

「この後、どこか行かないか？」

絶対に断られるだろうなと思った。でも、波絵の答えは意外だった。

「……ええ、どこに行くの？」

俺は自分から提案したにも関わらず、「え？」と聞き返してしまった。それを見て、波絵はくすりと微笑んだ。

「自分から言ったのに」

俺は頭をぼりぼりと搔いて、照れた顔を見せなくなかったから顔を背けた。

「いや、何ていうか……。意外だったからさ」

「いつも私が弾いてあげてるんだから、お礼くらいはいいでしょ？」

「ああ、そうだな……」

俺にはそんな陳腐な言葉しか出なかった。友人や姉に冷やかされる度に否定してきたが、これじゃ完全にデートと言われても仕方ない。

いや、デートじゃない。俺と波絵は男女の仲じゃない。

波絵と駅の改札を潜る途中、俺はそう自分に言い聞かせた。

「親に連絡してもいい？」

「ん、ああ……」

見るからに育ちの良さが出ている波絵の親が、娘を過保護なほど大事にするのは何となく予想できた。ホームで電車を待つ間、俺も親に夕食はいらないとメールを打った。

電車に乗っている間も、波絵に対する謎は深まるばかりだった。吊り革を掴む彼女は窓に広がる景色を眺めるばかりで、俺の女友達のよ

うに携帯ゲームに興じることはしなかった。学校の休み時間、殆どのクラスメートが携帯でゲームをするかSNSをチェックするかで時間を潰すというのに。まあ、その時間は紙の本を読んでいる俺も、変わり者扱いされているが。

俺が波絵へのお礼として選択したのは、映画だった。我ながら捻りが無い。でもこれはデートではないし、行き先は任されているのだから良いだろう。

2020年を過ぎても、映画というコンテンツは廃れることがない。Vシネマのような劇場公開せず観たい人にだけ売るといふ形の作品は増えたが、それでも劇場まで足を運んで一度きりの鑑賞に金を払う人は後を絶たない。

俺は、家よりも映画館で観る映画の方が好きだった。広い劇場の、外部からの音と光の一切が遮断された空間。映画と観客だけの世界が好きだった。ヘッドマウントディスプレイでも同じ空間は作り出せるが、肌で感じる劇場の冷たい空気までは再現できない。要は、映画館という場所が好きなのだ。

俺達が観たのは、海外文学が原作のファンタジー映画だった。CGが凝っているが、正直な所退屈だった。俺は20世紀と21世紀の境目にある、CGを取り入れ始めた頃の映画が好きだった。当時はCG技術はまだ手探りで、それを補うために特撮技術の嗜好を凝らした演出が好きだった。「ジュラシック・パーク」のCGで作られたティラノサウルスは7分だけだったが、CG以外でも作り込まれたティラノサウルスは本当に生きているようで、観ていて寒気がしたほどだ。「ターミネーター」シリーズでシユワルツエネツガーの顔面が剥げて金属骨格が剥き出しになるシーンも、CGよりも1作目と2作目の特殊メイクの方が生々しい。

映画を観た後、俺達はファミレスで夕食を食べた。俺はカルボナーラを食べる波絵に尋ねた。

「俺の方から誘ってなんだけど、良かったのか？」

「連絡はしたんだし、問題ないわ」

「もしかして、本当は親の許可貰ってないってことじゃないのか？」

「いいのよ、たまには外で食べたいし」

俺はとんでもないことをしているのではないかと、今更ながらに気付いた。親が子を想うのは自然なことでも、上流階級の親というのは娘に対する思い入れも尋常じゃないのかもしれない。俺は自分が注文したマルゲリータの味が分からなくなるほどの罪悪感に捕われた。

「家まで送ってくよ。それで一緒に親に謝る」

「それは止めて」

波絵はきつぱりと断った。これまでの彼女からは想像できないほど、はつきりとした口調だった。

「女の子の友達と行くって嘘ついたのに。男の子と一緒にいたなんて知ったら父は卒倒するわよ」

「ああ、ごめん……」

「謝らなくていいわ。それよりも、来週はどこに行くの?」
「え?」

危うく食べたピザを喉に詰まらせそうになった。波絵はそんな俺を見てまた笑った。

「あなたといると面白いんだもの」

「お前……、性格悪すぎだろ」

「うん、私は良い子じゃないもの」

俺達は食事を終えた後、店の前で別れた。今度は、電話番号とメールアドレスを交換した。

その次の週から、俺と波絵は公園以外にも出掛けるようになった。日曜日だけでなく、土曜日にも会うようになった。俺は土曜日の部活は午前だけで終わるし、波絵も塾は午前だけらしい。

俺達は映画を観て、カフェでお茶を飲んで、ショッピングモールで買い物をした。もう俺は、それがデートと呼んでもいいと思っていた。約束を取り付ける度に俺はコンビニでファッション雑誌を立ち読みし、そのまま服を買いに行った。服に小遣いを使うなんて初めてのことだった。小遣いなんて新しいスパイクや試合のチケットにしか使わないし、服なんていつも姉が量販店で安物を適当に何着か買ってくるだけだ。

姉は俺の変化に気付いたみたいだった。当然かもしれない。休日になると弟が精一杯のお洒落をして出掛けていくのだから。

「ねえ、剎那」

洗面所の鏡の前で髪を整えている俺に、姉は話しかけた。

「あんな、彼女でもできた？」

「彼女じゃないよ」

「はあ!？」

姉はわざとらしいと思う程、声に険を込めていた。その迫力には俺は少し怖気づいてしまう。

「あんな友達と出掛けるとき、いつも野暮つたい格好だったじゃない。それがお洒落するなんて完全にデートでしょ？」

「デートっていうか、ちよつと出掛けるだけだよ」

「それをデートっていうのよ。相手は女の子なんでしょ？」

「まあ、そうだけど……」

「はあ、情けないわ……」

姉は額に手を当ててため息を吐いた。

「何度もデートするって事は、そういう仲じゃないの」

「そう……、なのか？」

「そうよ。好きでもない相手と何回もデートするわけないじゃない。完全にあんたが告るの待ってるわよ、その子」

それは期待のしすぎじゃないかと、俺は思った。俺は波絵のバイオリンじゃなくて、波絵に興味があることは認める。でも、その興味が恋愛へと飛躍するかは話が別だ。そもそも、俺達は好意を持つほど互いのことを知らない。俺は波絵がどんな環境で育ち、どんな気持ちを抱きながら生きてきたのか、全く知らない。

「誰もかれもが、姉ちゃんみたいにながつくわけじゃないんだよ!」

俺はそう言って、家を出た。

その日俺と波絵が出掛けたのは、電車とバスを乗り継いで2時間程の湖だった。幼い頃、俺が父親に連れられてキャンプに行った所だ。穴場的な絶景スポットで、しかも9月の半ばでレジャーシーズンが過ぎたこともあってあまり人影は無い。まだ残暑はあるが、ひんやりと

して肌寒かった。

「ねえ、刹那がサッカーしている時って、どんな感じ？」

湖畔のベンチに座ると、波絵はそう尋ねてきた。こんな事を聞かれるのは初めてだ。俺達の会話といえば、もっぱら映画や本の事だった。俺が好きなのは映画の演出や監督について話し、波絵は自分が好きな小説について話す。波絵は海外文学が好きだった。「ハリー・ポッター」や「指輪物語」のシリーズは全て読破していた。

俺はスマートフォンに記録してある写真と、監督から送られた試合のビデオを波絵に見せた。彼女に見られたことのない自分の姿を見せるのは、結構恥ずかしかった。

俺は画面の中で、ユニフォームを着ている自分と写真を撮った時の状況を説明した。俺が中学に入って初めて試合に出た時の写真。大会で優勝した時の集合写真。合宿の夜に部員全員で夕食を食べている写真。続けて実際に俺がプレイしている動画を見せる。

「楽しそうね、刹那」

画面の中でボールを運ぶ俺を見て、波絵は言った。

「ああ、楽しいよ。サッカーしてる時は」

「良い事ね」

「波絵は楽しくないのか？ バイオリン弾いてる時」

「楽しくない」

波絵はファミレスで食事をした時と同じようにきっぱりと言った。あまり快活ではないが、波絵は物事をはっきりと言う質らしい。

俺はその理由が知りたくなかった。俺はサッカーが楽しくなかったら、当然続けていない。なのに、なぜ波絵は楽しくないバイオリンを続けているのだろう。俺にバイオリンを弾いてくれた学校の女子は、弦楽器は上達するのに時間がかかると言っていた。だとしたら、波絵は何年もバイオリンを弾いてきたはずだ。

彼女の中では踏み込んでほしくない事なのかもしれない。でも、俺は聞かずにはいられなかった。

「楽しくないなら、何でバイオリン弾いてるんだよ？」

楽しくないからといって、何事も辞めていいなんて世の中甘くはな

いだろう。

楽しくなくても、教師からの叱責を怖れて課題をこなす俺の同級生。

楽しくなくても、学費を稼ぐために飲食店でアルバイトをしている大学生。

楽しくなくても、上司の命令に逆らえず残業するサラリーマン。

楽しい楽しくないではなく、義務があるからやらなければならぬことは多い。でも俺達はまだ、自分のやりたいことを存分にやることが許される年齢はずだ。だから、自分を押し殺してまで続けている波絵の事を知りたかった。

「ただ、私がバイオリンを弾けるから……、かな」

俺はその先を黙って聞く事にした。余計な口を挟んで、波絵の言葉を途切れさせてはいけないと思った。

「私、小さい頃から色んな習い事してきたの。お茶とかバレエとか英会話とか。その中で、一番上手くできたのがバイオリンだった。教室の先生にセンスが良いって褒められたの。そうしたら、お母さんから他の習い事を全部辞めさせられて、バイオリンだけ続けてきた。正直、お茶の教室の方が楽しかった。美味しいお菓子とか食べられるし。バイオリンなんて、指が痛くなって耳がおかしくなるもの。至近距離であんな甲高い音が出るのよ。下手だと難聴になるわ」

波絵の口から出る、波絵の過去。それを語る波絵の口調は、俺が聴く度に感じてきた彼女のバイオリンと同じく悲しみを乗せているように思えた。

「でも、お父さんとお母さんに反発する気にはなれなかった。私がコンクールで優勝すると2人はとても喜んで、社交界で私に演奏させて自慢していたんだもの。教室の先生も、私が少しでも楽譜と違う音を出したら凄く怒った。私に要求されるのは、楽譜に込められた作曲家の人物像を再現することだけ。私の意思や感情を出すことは許されなかった。教室では先生の厳しさで、家では両親の優しさで絞め殺されそうになる」

波絵の奏でる音に込められた悲しみ。それを完全に理解したと、俺

は確信できなかった。両親と、教室の講師が求めた波絵への要求。彼等からすれば、波絵の才能を引き出した功績と見るべきかもしれない。でも、それを引き出された波絵は、それ以外に何かをする自由を奪われた。そんなものなのだろうか。

俺はその場で、波絵にかける言葉を見つけないことができなかった。同年代の子供より多く本を読み、多く言葉を知っていると思いついていったというのに。その自信を失った。

「波絵。次の土曜に、いつもの公園に来てくれ。今は何も言えないけど、その日までには考えとく」

「……うん、待ってる」

俺達の間には流れた煩悶とした雰囲気反して、湖面は日光を受けてきらきらと輝いていた。

波絵は周囲の要求と期待に伝えるために生きてきた。拒むことを、無言の圧力で許されなのまま。親というのは、子に無意識のうちに期待してしまうのだろうか。それが子を苦しめる事になっても、子のためと苦しみ続けるのだろうか。少なくとも俺の中で、会った事のない波絵の両親とバイオリン講師は彼女を苦しめている。それが彼女の輝かしい未来のためであつてもだ。

なら俺はどうだ。

俺は両親から、これまで何かを要求されたことも、期待されたこともない。俺が本と映画に手を出したのは自分の意思。サッカーは父親の勧めだったが、最終的にクラブチームに入るかの決断は俺の意思を尊重した。

俺が両親から要求されたのは、自分の「刹那^{せつな}」という名前だけだ。

俺にこの名前を付けた父親は、俺にどんな要求と期待を込めたのだろうか。

◆ 波絵と会う約束をした土曜日の午前中、珍しく部活が無いので、俺は家にいた。普段なら一人で観る映画に、仕事が休みの父親を誘った。息子からの誘いが嬉しかったのか、父親は上機嫌でシアタールームに入った。

俺と父親が親子の会話をするのは、もっぱら映画を観ながらだ。作品の選別は父親に任せた。正直あまり期待はできない。父親はいつも俺が驚くような映画を観させる。良い意味でも悪い意味でも。小学5年の頃に「ソドムの市」を観た時は途中で抜け出し、3週間くらい口をきかなかつた。思えば、あれが反抗期の始まりだったのかもしれない。

俺の不安とは裏腹に、父親のチョイスは「ジングル・オール・ザ・ウェイ」だった。安心して観られる作品だ。俺達はソファにだらだらと座り、スクリーンに映写された映像を眺める。

「父さん」

「ん？」

シユワルツェネツガーがデパートで抽選ボールの取り合いに参加しているシーンで、俺は父親に尋ねた。

「前に俺が名前のことで文句言ったの、覚えてる？」

「ん、あつたかそんなの？」

「つたく……。まあいいや、あつたんだよ。そんな時父さんは姉ちゃんのために生まれる子供は、男でも女でも『刹那』にするよう決めてたつて言ったけどさ、何で『刹那』にしたわけ？」

父親は「あー」と天井を見上げ、缶ビールを一口飲んだ。意外な光景だった。父親は昼間から酒を飲む人間ではなかったからだ。多分、父親も俺と同じで久し振りの親子の時間が照れ臭かったのかもしれない。酒の力に頼らなければ、息子に偉そうな口をきけなかったのかもしれない。

「俺は若い頃、自分の人生がとてつもなく長く感じてなあ。でも母さんと出会って、麻沙美が生まれてから一気に短く感じるようになった。2人目の子供ができたら、もっと短くなるような気がしてな。それで『刹那』って名前に決めたんだけ。『刹那』ってのは、仏教用語で1秒よりも短い時間のことらしい。刹那、ちよつと立ってみろ」

俺は言われた通りソファから立ち上がる。遮光カーテンで日光は差し込まず、スクリーンが反射する光だけが、俺達親子を照らしている。おぼろげな光の中で、俺より僅かに背の高い父親は俺の頭に優し

く手を乗せた。

「あんなに小さかったのに、こんなにでっかくなってなあ。俺はもうすぐ越されそうだ。お前と麻沙美を育てるために必死こいて働いて、もう45だ。人生の折り返しだな。お前もいつか、毎日とても早く過ぎていくように感じる時が来るだろう。その短く感じる日々を大事に生きていつて欲しくて、『刹那』にしようと思った。まあ、確かに男に付ける名前じゃないかもなあ」

父親はぼつが悪そうに笑って頭をぽりぽりと掻いた。

「何で、俺にサッカーをさせようと思ったの？」

「俺は色んな価値観を映画や本で学んできた。でも、そういうのは直に人と話して培っていかなきゃ身に着かん。俺や母さん、麻沙美だけがいる環境にお前を閉じ込めるわけにはいかないからな。色んな人と出会って、その分の価値観を学んでいつて欲しかった。それで、お前が人生で何かを選択する時、そうやって学んできた沢山の価値観の中から、お前自身の答えを出せるようになって欲しいと思った」

父親は再びソファに座った。俺もソファに腰を落ち着ける。

「親って、大変だな」

「ああ大変だ。赤ん坊の頃のお前を『可愛い』なんて言ってる暇もなかったな」

俺達はその後、特に会話もなく映画を最後まで鑑賞した。

人は誰しも、親からの願いや祈りを背負っている。波絵はバイオリン。俺は「刹那」という名前。俺は少なくとも、自分の名前に込められた意味に反発心を抱いていない。

これから自分の名前を名乗る時、名前を呼ばれる時、恥ずかしさは少しだけ無くなりそうだ。

その日の夕方、俺は公園で波絵と会った。波絵はバイオリンを持ってきていた。彼女にとって呪いのようなその楽器を。

「……弾いてほしい？」

「ああ。でも、その前に言っておきたい」

「……うん」

俺はしっかりと波絵の目を見据える。その琥珀色の瞳。無感情の

中に悲しみを宿した瞳に。

「楽しくないならバイオリンやめろとか、そんな無責任なことは言えない。やっぱり、俺はお前のバイオリンが聴きたい。でも、俺に聴かせる時は、好きなように弾けよ。楽譜なんて気にしなくていい。俺は音楽分かんないし。俺はお前にあれこれ言ったりしないからさ」

これが、俺の出した答えだ。俺が15年という短い人生の中で学んできた多くの価値観の中から選び出した、最善のもの。

波絵は何も言わなかった。代わりに、これまでの中で最上級の笑顔で応えてくれた。細めた目から、今にも涙が零れそうだった。

俺は確信する。俺は波絵に惹かれていると。

彼女の奏でる音から、悲しみを取り除きたい。もつと彼女の音を聴きたい。俺だけのために、バイオリンを弾いてほしい。

波絵は無言のまま、ケースからバイオリンを出した。俺はいつものように、ベンチに座る。この日は公園で遊ぶ子供達はいなかった。俺達2人だけ、観客が俺だけのコンサートが始まった。

波絵の音に変化が訪れたことを、俺は直感的に感じ取った。最初はとても激しくて、悲しい。でもその後には流れたのは、とても優しい音だった。穏やかで、心地良い。

俺が目を閉じると、波絵は金切り声のような音を出した。俺が驚いて目を開けると、波絵は意地の悪い笑みを浮かべる。そして演奏を再開する。

多分、波絵は助けを求めていたんだと思う。鬱屈した自分の感情を誰かに知って欲しかったのかもしれない。

私は苦しんでいます。

私は両親と先生に押し潰されそうです。

私の今の音を聴いて下さい。

そして私を助けて下さい。

その波絵の助けに引き寄せられたのが、たまたま俺だったのだ。偶然か運命か。俺は合理主義で神なんて信じていないけど、どうか運命であって欲しい。

「ありがとう、刹那」

演奏が終わると、波絵は笑顔でそう言った。俺に誰かを助ける力があるだなんて思っていない。でも、彼女が演奏を通じて気持ちを吐き出すことができるのなら、それを受け止めたいと思った。たとえ彼女が嫌悪する汚い感情でも、俺は幻滅なんてしない。

これからも、彼女の音を聴きたい。純粹にそれだけだった。

でもそれは、唐突に終わる事になった。

前触れも、前兆もなく。

第12話 求める者には楽園を

青天の霹靂^{へきれき}。

それを言い表すとしたら、その言葉が最も適切なのかもしれない。9月もいよいよ終わろうとしている時期、俺の家に電話が入った。仕事で家にいなかった親に代わって、姉が対応した。その時リビングでテレビを観ていた俺は、姉の戸惑いを隠しきれない途切れ途切れな声を聞いていた。

「刹那、明日は部活休みなさい」

電話を切った後、姉はそれだけ言った。

「何で？」

「人と会うのよ。ちゃんと制服着ておきなさいよ」

俺はそれ以上聞こうとしなかった。姉の剣幕で、只事ではないということが何となくが分かった。姉はその日の夜、俺の制服のシャツにアイロンをかけ、ズボンをプレスした。

俺は次の日、監督に部活を休むことを伝えた。試験日が近いが、監督は何も言わずに了承してくれた。一昔前は「休むことは悪」だなんて理屈で冠婚葬祭でも休みをくれなかったらしいが、今はその態勢が見直されている。理由を言えば、特にお咎めはなく休暇を貰えるのだ。

放課後、制服を着て校門の前に立っていると、姉が車で迎えに来た。姉はまだ学生だが、来年の就職先が決まった祝いとして最近車を買ってもらった。慣れない手つきでハンドルを握る姉は、入社式用に買ったもらったスーツを着ていた。まだ糊のきいたスーツも、こんなに早く出番が来るとは思ってもみなかっただろう。

俺と姉が来たのは、随分と洒落た喫茶店だった。店の内装が凝っていて、客も高そうなスーツに身を包んで髪を綺麗に整えたビジネスマンばかりだった。若年層は俺達だけで、客の平均年齢は少なくとも40は越えているだろう。

姉は席を予約していたらしく、店員に予約した際の名前を言った。姉が店員に伝えた名前は、俺達の苗字である「早速」ではなかった。そ

の名前は俺の知っている苗字。俺はそれを聞いた瞬間、戦慄が走るのを感じた。試合の時、ドリブルの最中に横から相手チームの選手がスライディングをしてきて、体に触れられることなくボールを奪われた時のような戦慄。

俺達が席に座ってしばらくすると、先方がやってきた。俺の母親と年が近そうな中年の女性。上質そうな生地のスーツを着込んだ凛々しい姿の隣に、彼女はいた。

「波絵……」

気付けば、俺は姉に腕を引かれて立たされていた。姉に釣られて、俺は波絵と、母親であろう女性に頭を下げる。向こうも軽く会釈し、椅子に座った。

「初めまして、波絵の母の真広直子です」

「早速刹那の姉の、早速麻沙美です。両親が来るべき所を、私で失礼いたします」

「いえ、こちらも主人が来るべきですが、仕事が忙しいもので」

その短い会話で、俺はこの母親がとてつもなく恐ろしい人間であることを、動物的な直感で悟った。波絵にバイオリンという呪いをかけている張本人。女性らしく柔らかな物腰に反する、聴くと全身が圧迫されるような声。

「お姉さんは、学生かしら？」

「ええ、はい。来年には内定先の会社に入社予定です」

「そう。電話で話した時にも思ったけど、しつかりなさっているわね。ご両親は立派な方だと分かるわ」

「いえ、そんな……」

姉と母親が話している間、俺と波絵は黙っていた。ウェイターが運んだコーヒーに手を付けることなく、俺はテーブル越しに波絵を見つめる。波絵は俺と視線が合うも、すぐに俯いて俺の顔を自分の視界から追い出した。波絵もコーヒーに手を付けなかった。黒い水面から立ち昇る湯気はなく、すっかり冷めているのが分かった。

波絵はコーヒーが好きじゃない。波絵は砂糖とミルクを大量に入れた甘ったるい紅茶が好きなんです。あなたはそれを知らないので

すか。俺は波絵の母親に視線で訴える。先方は俺の視線には気付かず、姉との会話を楽しんでいる。

「刹那君」

俺は反射的に「はい」と返事をした。そうしなければ、すぐに処刑台に送られるような錯覚すらあった。波絵の母親と視線が合う。波絵と似た琥珀色の瞳に射抜かれた瞬間、背骨に針金を入れられたかのように、背筋が伸びた。波絵も将来、こんな淑女になるのだろうか。「波絵と仲良くしてくれたようね」

「は、はい……」

「娘にお友達ができることは嬉しいわ。この子は引っ込み思案な所があるから、私も主人も心配していたの」

そうですか、ならこうしてご馳走して頂けるのは当然の報酬ですね。

軽いノリのハリウッド映画なら、こんな切り返しをするものだろう。フィクションだけど、俺は画面の中の彼等を尊敬する。こんな威圧たつぷりの人間の前で、自分のペースを崩さずにいられるのは、余程の修羅場を潜ってきた者だけだ。

「全国大会準優勝おめでとう。輝かしい功績よ。でもね、だからといって女の子と遊び呆けていては駄目。高校受験を控えているのでしよう?」

「ええ、まあ……」

「波絵も大切な時期なの。この子の学校は中高一貫だけど、音大附属の高校に進学させるつもりよ」

俺はその言葉で、初めて波絵が同い年であることを知った。俺達の間、年齢なんてものは特に注意するべきことじゃなかった。

「だから、どうか波絵と会う事は控えて欲しいの。これは、お互いのためよ」

波絵の母親は、決して命令するような口調ではなかった。幼子を諭すように、柔らかく、穏やかな口調だった。

俺はその口調から語られる要求を拒みたかった。ふざけるなど、テーブルを叩きたかった。

波絵はあんたのせいで、楽しくもないバイオリンを続ける羽目になっただぞ！

あんたは波絵の意思を尊重したことはあるのか！

そうやって今まで、波絵を自分の思い通りにしてきたのか！

あんたはこれからも、波絵にあれこれと要求するのか！

あんたが年老いて死ぬまで、波絵は呪われたままなのか！

俺の脳裏に、怒りの言葉が矢継ぎ早に浮かんでくる。後はそれを口に出すだけなのに、俺は言えなかった。ただ黙って、冷めきったコーヒーに映る自分の顔を見る事しかできなかった。

「弟には、私と両親が言い聞かせます。ご迷惑をおかけして、申し訳ございませんでした」

俯く俺の耳孔には、姉のそんな言葉しか聞こえなかった。

店を出る時、母親と街の中へ消えていく波絵は、一度だけ俺の方を振り向いた。何も言わない波絵は人形のようにだった。何か言いたくても押し殺すよう強要され、口の代わりに目で自分の意思を訴えるのは、彼女なりの精一杯の抵抗だったのかもしれない。街の人混みに消えても、波絵の瞳は俺の脳裏に焼き付いて離れなかった。

「姉ちゃん、ごめん」

俺は帰りの車の中で、姉に謝罪した。そうすることしかできなかった。

「謝んなくていいわよ。お父さんとお母さんには、私の方から説明しとく。あんたは運が悪かっただけよ。お嬢様なんて、あたし達とは住む世界が違うもの」

いつもは憎まれ口を叩く姉は、その時だけ優しくかった。俺はひどく疲れていた。一日中練習した日よりも。シートに背を預けて目を閉じても、倦怠感に反して眠ることはできなかった。

◆ 俺は元の日常に戻った。

平日は授業が終われば、遅くまで部活。暇な土曜日の午後と日曜日は、自室で本を読むかシアタールームで映画を観る。1ヶ月半前までと全く同じ日常。

でも、俺は空っぽになった。俺の空虚は、どんな名作も埋めてくれなかった。

あの日から、波絵と連絡を取らなくなった。一度電話を掛けようとしたが、既に波絵は電話番号を変えたらしく、『お掛けになった電話番号は、現在使われておりません』という無機質なアナウンスを告げられた。

事の顛末を両親も知っているはずだが、両親は何も言わなかった。決して子に関心が無いわけではないけど、2人も俺の空虚を埋める方法を見出せずにいたらしい。

学校の休み時間、いつものように紙の本を読むが、全くページが進まなかった。内容が頭に入らず、文章の情景や登場人物の心情が全く読み取れなくなった。そんな俺の耳には、自然とクラスメートの話題が入り込んでくるようになった。

何でも、「ソードアート・オンライン」というゲームが話題になっているらしい。今月末に発売予定のそのオンラインゲームは、かなり世間での期待が高まっているようだ。

「今度のは、ナーヴギアの性能をフルに活かしてくれるんだってきー！」

「ゲームの世界に入るって、すげえよな！」

「その言い方古いつて。今は《完全ダイブ》って言うんだよ」

ゲームの世界に入る。

ゲームに全く興味が無かった俺に、その言葉は一筋の光のように射し込んできた。

「なあ、そのゲームってどんなの？」

俺はゲーム雑誌を広げて盛り上がっている集団に声をかけて、「ソードアート・オンライン」、略してSAOの特集が組まれた雑誌を読ませてもらった。俺が熱心に雑誌のページをめくっている姿を、クラスメートは物珍しそうに見ていた。それもそうだろう。俺は今まで携帯ゲームすらした事がない。それを、ゲーマーのバイブルのような雑誌を読んでいるのだから。

VR技術搭載のマンマシン・インタフェース、《ナーヴギア》。

ヘッドギア型ハードに埋め込まれた無数の信号素子による多重電

界が実現させる、脳への直接接続。

誌面に散りばめられた専門用語はよく分からないものばかりだったが、要はそのヘルメットを被れば脳に直接信号が送られ五感情報を与えられる。そして、完全と現実から隔離され、生成されたデジタルの仮想空間で与えられたアバターという自分の分身を動かすことができるというものらしい。

何だか「マトリックス」みたいだなと思った。

そんな風にフィクションを思い浮かべてしまう程に、そこに書いてあることは現実味が薄かった。VR技術の事は知っていた。俺が1人で映画を観るときに使うヘッドマウントディスプレイも、VR技術の賜物だからだ。

コントローラーもキーボードも必要とせず、ただ現実と同じようにアバターを動かせばいい。現代の科学はそれを可能とした。

本当にそんな事が可能なのだろうか。フィクションの中でしか存在しなかったシミュレーション仮説が、本当に実現してしまったのだろうか。恐怖すら覚える。シミュレーション仮説を題材とした作品はどれもディストピアを舞台としていたからだ。「マトリックス」も、「トータル・リコール」も、「ニューロマンサー」も。

でも誌面に書かれていた事は、俺の空虚を埋めてくれた。ぴたりと、そこに収まるべくして収まったように。

ゲームの世界でなら、波絵に会える。

俺がいるこの現実世界では、もう波絵に会う事は許されない。なら、ネットの仮想世界で会うしかない。

俺はすぐに行動を開始した。

夏に全国大会で準優勝した時、父親は「お祝いに好きなものを何でも買ってやる」と言っていた。その時俺は欲しいものなんて何もなかったから、その褒美は持ち越していた。

夜遅く。仕事から帰ってきた父親に、俺は準優勝祝いの褒美の話を持ち出した。俺の「欲しいもの」に、父親はひどく驚いた。当然だと思ふ。ナーヴギアはSAO同梱版で12万8千円もするのだ。ソフトだけでも4万円近くする。でも、父親は俺の要求を呑んでくれた。

「お前は頑張ったからな」

正直、申し訳ないという気持ちはある。でも、俺は立ち止まること
ができなかった。

波絵に会いたい。

もう一度波絵の声が聞きたい。

波絵に俺の気持ちを伝えたい。

推薦入試の試験日が近いというのに、俺の思考は大半が波絵のこと
で占められていた。

ネットの通販サイトにアクセスしたが、どこも初回入荷分は予約が
軒並み定員に達していた。聞けば、大手の通販サイトでは予約開始か
ら数秒で完売したらしい。オークションサイトでは予約の整理券を
100万円越えで取引しようとする輩までいた。質の悪いことに、そ
の出品された整理券は120万円で落札されていた。

店頭販売という、ネット通販が普及した時代では原始的とも言える
方法で入手するしか他に手は無かった。俺はすぐにSAO初回入荷
分を販売する店のリサーチに取り掛かった。

買う店を決めると、最後であり最大の難関に直面することになっ
た。

どうやって、波絵にSAOの事を伝えるか。

新しい電話番号もメールアドレスも知らない。波絵はSNSを
やっていないからダイレクトメールのやり取りもできない。俺に残
された方法は、SAOの入手と同じく原始的とも言えるものだった。

再び、波絵に直接会う。

俺は決行を決めた次の日、学校をサボった。途中で警察に補導され
ないよう、駅のトイレで私服に着替えて、電車を乗り継いだ。

波絵の中学はすぐに見つけることができた。ネットの学校ホーム
ページに載っている住所に近付くにつれて、登校している生徒達を見
つけることができた。彼等の制服には、初めて会った時、波絵が着て
いた夏物の制服と同じ校章があしらわれていた。

俺は波絵を探した。もう校舎に入ってしまったのかもしれない。
それなら、放課後にまた張り込むだけだ。

傍から見ればストーカーだなど、俺は自嘲した。

ストーカーと言われようと構わない。俺は波絵に会えればそれでいい。波絵に会えるのなら何でもする。高校の推薦を取り消されても知った事か。

衣替えしたばかりで、冬服のブレザーを暑苦しそうに着込む生徒の中から、俺は波絵を見つけることができた。バイオリンケースを持ち、陽を浴びて赤褐色に変わる髪を揺らす彼女を。

友人と歩いていた波絵も俺に気付いたらしく、俺達は路上で視線を交わした。波絵は随分と驚いたらしく、危うく足を踏み外しそうになった。心配する友人に笑顔を取り繕い、波絵は同じ制服の群れから抜け出して俺の方に走ってきた。友人達がこちらに気付く前に、俺は路地裏に隠れた。すぐに、息を切らした波絵が来た。

「刹那……」

波絵に名前を呼ばれて、俺は彼女を抱きしめたい衝動に駆られた。それを必死に抑えつながら、俺は波絵に一枚のメモを手渡した。メモにはSAOの事、必要な機器、会う時間と場所を書いておいた。メモを渡すと、俺はその場から逃げるように走った。

走りながら、俺は後方から波絵が呼び止めてくれることを期待していた。でもそんなドラマみたいな事にはならず、俺は真っ直ぐ駅まで走った。

その日は映画館で、一日中映画を観て過ごした。4本は観たが、全く映画に集中できず内容が頭に入らなかった。家に帰ったら学校から無断欠席の連絡があったらしく、姉にひどく叱られた。姉の説教を受けている間も、俺の気分は昂っていた。

SAOの発売日は今月の31日。後は店頭でソフトを買うだけだ。期待と同時に、不安も拭えなかった。波絵はSAOを買ってくれるだろうか。俺に会いたくないと、思っていないだろうか。

SAO発売日の10月31日。

その日の朝、俺は事前にリサーチしておいたゲームショップの前で並んでいた。長蛇の列とはまさにこの事で、最後尾では店員がSAO発売のプラカードを持って客を誘導していた。

俺は金曜の夜、家で夕食を済ませた後に寝袋と食料を持って店に向かった。店に着いた時には既に10人以上が並んでいて、俺はその最後尾についた。もう季節はすっかり秋へと変わっていて、夜は冷えた。厚手のジャンパーを着込んで寝袋に入っても、寒さに加えてアスファルトの硬さが堪えて寝付けなかった。

土曜日も日曜日も、俺はコンビニのトイレで用を足す時以外は店の前から動かなかった。部活は監督に亡くなった祖父の葬式があると嘘をついた。不思議と罪悪感は無かった。

俺はそこで小説を読んで過ごし、腹が減ったら持参した食糧を食べた。寒い外に冷たい食べ物で歯をがちがち鳴らすほど震えて、体を温めるためにその場でスクワットをした。時間が経つにつれて、俺が並ぶ列は長くなっていった。

発売日当日。月曜日だが、試験に近い俺は自由登校になっているから、欠席の連絡はせず心置きなく休むことができる。同じ推薦組の中で、俺の他にこうしてSAOを求めて勉強もせず列に並んでいる奴はいるだろうか。多分いないだろう。SAOの期待度が高いことは列の長さを見れば分かるが、だからといって人生の分岐点である受験を放り出すような間抜けはいない。

店が開店すると同時に、ソフトの販売が始まった。先頭に近かった俺はナーヴギアと、SAOのソフトを買うことができた。俺はそれを決して落とすまいと抱えて家に帰った。帰ってすぐにゲームをプレイしたかったが、正式サービスが始まっていないからナーヴギアにソフトを入れても仮想世界に入ることにはできない。はやる気持ちを抑えながら、俺はその日の夕方に部活へ顔を出した。

正式サービスが始まるまでの間に、俺は推薦入試の実技試験と面接を受けた。

正に絶好調だった。実技でのミニゲームは振り分けられたチームを勝利へと導き、面接では事前に受けた面接演習の通りに受け答えた。笑顔で自分の事を話した俺は、さぞかし面接官に好印象を与えることができただろう。笑顔の理由は、正直なところ高校に入る事ではなくSAOが楽しみだった事にあるのだが。

11月6日まで、俺は落ち着く時が全く無かった。早くSAOをプレイしたい。波絵に会いたい。

俺の落ち着きの無さは家族も察していた。試験の結果が待ち遠しいと勘違いしていたようだが、俺はそれに口裏を合わせた。

そして、その日はやってきた。

11月6日。日曜日。

前日は興奮のあまり一睡もできなかった。

「あんた、髪伸びてきたわね」

朝食の時、姉はそう言っていた。最後に切ったのは夏の大会の前日だっただろうか。確かに、前髪が目には掛かって鬱陶しくなってきた。でも俺は、そんな事はどうでも良かった。

正式サービス開始は午後の1時からだが、俺は12時半に昼食を終えてすぐ自室でナーヴギアの電源を入れて被った。何でも、キャリブレーションというものをしなければならぬらしい。装着者の体表面感覚を再現するための基準値を測り、フルダイブ時の動作に反映させる。これをしなければ、距離感が上手く掴めずに歩くことも、物を持つこともままならないのだろう。

俺は体中に触れた。自分の手、肩、胸、腹、脚、足裏。背中では手が届く範囲まで。股間は抵抗があつたが、致し方ない。俺の手から受信した情報は、ナーヴギアへと記録されていくという。本当にそんな事が可能なのか半信半疑だが、恐らくは可能なのだろう。

俺は一旦脱いだナーヴギアのスロットにソフトのROMカードを挿入し、コードをルーターに繋げる。ベッドに座り、眼前に掲げる濃紺のヘッドギアを眺めた。

この先に楽園がある。

波絵と会い、彼女とどこへでも行くことができる楽園が。

俺はナーヴギアを被り、顎の下でハーネスをロックする。降ろしたシールドの右上には、デジタル時計が表示されていた。

現在の時刻は12時57分。

ベッドで横になると、速く脈打つ心臓の音が聞こえた。俺は瞬きせず、13時になる瞬間を待つ。

そしてデジタル表記が13時へと変わった瞬間、俺は目を閉じて声高に言った。

「リンク・スタート！」

閉じた目蓋が透かしていたおぼろげな光が消えた。人間が死ぬ時、こんな感じなのだろうかと思った。でも俺の暗闇はすぐに消え去り、視界一面に虹色の光が弾けていく。やがてナーヴギアのロゴマークが現れ、視覚接続OKのメッセージが表示される。

続けて聴覚や体表面感覚、重力感覚へと、俺の五感は次々とナーヴギアに回収されていった。ヘッドギアが髪を擦る音も、ベッドの感触と体の重さも消えていった。

俺は白い空間にいた。見えない床の上に立つ感覚がある。いつの間にか、フルダライブは始まっているらしい。でも視線を降ろしても、そこにある俺の胸から下は全て黒一色だった。

《Language》というロゴの下にある複数のアルファベット表記の言語から、俺は《Japanese》をタップする。やがて、日本語の女性の声でウエルカムメッセージが流れた。

胸の高さにある青白いキーボードで、合成音声のアナウンスに従って設定したばかりのIDとパスワードを入力する。

アカウント登録の次はキャラクターの作成。俺は名前の欄に《Setsuna》と入力する。ネットでの名前では本名を使うのはナンセンスだが、漫画やアニメでもよく見る名前だから違和感は無いだろう。それに、俺はSAOのキャラクターとして波絵に会いに行くんじゃない。俺は俺として、早速刹那として彼女に会いに行く。

性別を男に設定したら、いよいよキャラクターの外見を作成する。シークエンスに入った。髪型や目といったパーツでも、かなりのパターンがあった。1つのパーツでも50通りは存在する。それらを組み合わせで完成させたアバターのパターンは万単位へと昇るかもしれない。正に千差万別。作り上げたアバターは自分だけのものだろう。

俺は事前にスマートフォンで撮影し、ナーヴギアのローカルメモリにコピーしておいた自分の顔を選択した。キャラメイクに迷った時、

現実での顔を基に作成することができらしい。これは便利な機能だ。自分そっくりの顔をパターンから選び出すのは時間が掛かる。声も同じように、録音した自分の声にした。体型も細身だが筋肉が付いたタイプ。身長は、少しだけ現実よりも上乘せした。

全ての初期設定をクリアし、《Welcome to Sword Art Online》というメッセージが浮かんだ。

メッセージが消失し、視界が光の渦へ飲み込まれていく。

いよいよという瞬間、俺は激しい不安に襲われた。

もし波絵がSAOを入手していなかったら。

今まで浮かんでは無理矢理押し退けてきた不安が、一気に来たのだ。

俺はただ祈った。この先にある仮想の世界で、どうか彼女に会えませうようにと。

俺の意識は祈りと共に、ソードアート・オンラインへと落ちていった。

◆

俺はゆっくりと目を開ける。最初に視界に映ったのは、広大な石畳だった。周囲に視線を巡らせると、中世ヨーロッパ風の街並みと立ち並ぶ街路樹。遠くには、黒光りする巨大な宮殿。

俺は自分の手を見つめる。薄手のグローブをはめた手を握り、開く。

「すげえ……」

俺はそう呟いていた。想像以上だった。

そこには街があつて、人があつて、音があつて、空気があつた。街路樹の近くで深呼吸すると、緑の匂いがあつた。視界に映る自分のHPバーとデジタル時計が無ければ、完全に現実と錯覚していた事だろう。

俺が現れた場所、《はじまりの街》の中央広場には、美男美女のプレイヤー達で埋まっていた。正式サービス初日で、しかも開始してまだ数分しか経っていないのだから当然だ。

見上げた視線の先に空は無く、薄紫色の天井が覆っている。通り

で、曇り空のように日光が射し込んでこないわけだ。

SAOの舞台になるのは《アインクラッド》という空飛ぶ城で、プレイヤー達は100階層の城を登っていくことを目標とするらしい。そんな塔の螺旋階段をただ上がるような生温いものでもなく、1層毎にある迷宮の先にいるボスを倒すことで、次の階層へと進む。

次々と光に包まれて現れるプレイヤー達の多くは中央広場に長居することなく、意気揚々と街の外へと向かっていく。中には攻略のパートナーにと勧誘する者もいて、美人な女性プレイヤーに話しかける者もいた。

俺は広場の中央にある時計の下で、波絵を待った。待っている間、メニューウィンドウを呼び出すアクションの練習をした。右手の人差し指と中指を揃え、真下へ振る。1度目と2度目は失敗し、3度目になってようやく、鈴のような効果音と共に発光する半透明の窓が現れた。俺はウィンドウの右側にある人型のフィギュアで、自分の装備状況を確認する。

装備もまた多かった。ゲームの装備なんて武器と鎧と盾ぐらいだと思っていたが、SAOの装備は現実で着る衣服と同じ量が必要とされていた。靴下や下着まで。

俺の初期装備は、上半身は布製のシャツとグローブと革製の胸当て。下半身はトランクスの上に布製のズボン、黒い靴下の上に革製のブーツ。

武器を装備していなかったから、俺はアイテム欄から《スチールブレード》を選択した。他の武器は《カトラス》という曲刀しか無かった。ゲームは素人だから、なるべく癖のない方がいい。

腰のベルトに、光と共に革製の鞘に包まれた剣が出現した。俺は柄を掴み、剣を抜く。銀色の刃にはずっしりとした重みがあった。

「あの、パーティ組みませんか？」

ウィンドウのコマンド全てに目を通した所で、整った顔立ちの女性から声を掛けられた。童顔だが、スタイルは不釣り合いなほどグラマラスだった。

「すみません。人を待っているんです」

分かりやすくむくれた女性は、そそくさと去っていった。

俺は広場に現れるプレイヤーの中から、波絵を探した。次々と美男美女のプレイヤーが現れて、彼等が去るとまたプレイヤーが現れる。その繰り返しだ。このプレイヤーの奔流は、正式サービス初日だからだろうか。

「刹那」

不意に、横から声が聞こえた。透き通った、曇りのない声。俺は横を向く。そこに、彼女はいた。焦点を合わせると、その顔の鮮明さが増した。これはシステムによる補正らしい。

黒いが茶褐色を帯びた髪。琥珀色の瞳。顔の造形は細かい所は違うが、俺には分かった。

「……波絵？」

その名前を呼ぶと、彼女は笑った。最後にバイオリンを弾いてくれた時と同じ、最上級の笑顔。俺は確信する。

気付けば、俺達は抱き合っていた。「熱いねー」と野次が聞こえたが、構わなかった。彼女の体がデータで作られたものだという事は理解していた。でも俺にとっては目の前にいる彼女は、紛れもなく波絵だった。

俺は視界がぼやけていることに気付いた。ナーヴギアと脳の視覚野の接続に障害が発生したのかと思ったが、それは目から頬を伝っている涙のせいだった。驚くことに、この世界は涙も流せるらしい。

「遅いぞ」

「顔を作るのに、時間掛かっちゃった」

「自撮りの画像をナーヴギアに入れとけば、それで作れるって知ってたか？」

「え？ 本当？」

波絵の驚いた顔に、俺も笑ってしまう。彼女のこんな顔を見たのは初めてだった。

「まさか声もピッチを上げ下げして設定したとか？」

「……うん」

照れ臭そうに波絵は笑った。俺はその顔が愛おしかった。俺は拳

を握りしめ、波絵の目を見据えた。

「波絵。俺、波絵のことが好きだ。現実では会えなくても、ここで俺と一緒にいてくれ」

拒絶されたらという不安は無かった。波絵がここに来てくれた時点で、彼女の答えは決まっていたのだろう。でも俺はしつかりと言葉で伝えて、言葉で返事をして欲しかった。

波絵はゆっくりと頷いた。目から溢れる涙が、紅く染まった頬を伝っていた。

俺は彼女の涙を指で掬い、もう一度抱きしめた。

◆

俺が本名をキャラクターネームにしたように、波絵も本名でアバターを作ったらしい。パーティを組むと、俺のHPの下に彼女の《Name》という名前とHPバーが表示された。俺達は2人ともMMO、それどころかゲーム初心者だったから、パーティを組むためのコマンドを探すのに一苦労する有様だった。

俺達はフィールドへ飛び出した。草原でモンスターを狩って、経験値を積んでいく。経験値を積みレベルを上げていくというRPGの常識を、俺はSAOの事を調べるまで知らなかった。

俺は仮想世界の体を動かすのに四苦八苦した。現実と同じように動けると聞いたが、走るスピードは遅いし、イノシシモンスターの攻撃を避けようとしても動作が鈍く感じる。脳とナーヴギアの通信が上手くいっていないのではないかと思ったが、ナミエはそんな苦労は感じていなかった。むしろ、現実よりも俊敏に動けるとはしゃいでいた。彼女が歳相応の顔を見せたのも初めてだった。

「セツナは現実じゃスポーツマンだもん。これが普通の人の感覚だよ」

日頃から常に練習とトレーニングを怠らなかつた俺は、確かに帰宅部の同級生達よりも体力はあると自負していた。でもだからといって、俺の身体能力はそんなに一般人の基準とかけ離れているものなのだろうか。サッカーはただ体力があつて足が速ければ勝てるほど単純じゃない。フォーメーションやリアルタイムに変化していくピツ

チを見てどう動くかの判断力も必要なのだ。

俺がそれを説明しても、ナミエは首を傾げるばかりだった。げんなりと肩を降ろす俺を見て、ナミエは面白そうに笑った。

俺達は草原で何時間もモンスターを狩り、SAOのコツを掴んできた。まだソードスキルは上手く使えないが、反復していく内にできるよくなるだろう。

アインクラッドの時刻は現実と同じグリニッジ標準時だ。ログアウトして現実に戻った時に時差ぼけを起こさないための措置だろう。既に夕方になっていた。アインクラッドの天井から覗く夕陽が、俺達のある第1層全域を茜色に染めていた。全域と言えば広大だが、実際の所第1層の直径は10km程度らしい。

「どうやってソフトとナーヴギアを買ったんだ？」

「お父さんの知り合いにメーカーの関係者がいてね、その人の伝手で買ってもらったんだ。丁度先月は誕生日だったし」

「メーカーの関係者って、すごい特権だな……。俺なんて発売の3日前から店の前で並んでたのに」

「ふふ、よく頑張りました」

ナミエはそう言って俺の頭を撫でた。俺はそれを振り払うも、不快感は無かった。表情に出ていたのか、俺達は2人揃って笑った。

「この世界にバイオリンは持ち込めないね」

「一応、音楽スキルってのがあるみたいだ。システムがアップデートされたら、ここでもバイオリンが弾けるようになるかも」

「じゃあ、私の上げるスキルは音楽一択ね」

「戦闘に役立つのも上げてくれよ。まさかずっと俺に戦わせるつもり？」

「セツナこそ、女の子を戦わせるつもり？ それとも、私のバイオリン聴きたくないの？」

「聴きたいさ。でもスキルポイントの配分は考えろよ」

ふふんと、わざとらしく高飛車に笑うナミエの髪は、夕陽を浴びて赤褐色に輝いていた。現実で、いつもの公園で見る時と全く同じように。これを再現してくれて本当に良かったと思う。

俺にとって、この世界は楽園だった。外周に広がる茜色の空を眺めながら、俺はこの世界と現実との境界の曖昧さを感じていた。

鐘の音が層全域に響き渡ったのは、それから数分後の事だった。

その日、ソードアート・オンラインはデスゲームになった。

第13話 誓いには口づけを

「これは、ゲームであっても遊びではない」

クラスメートから読ませてもらったゲーム雑誌のインタビュー記事で、このSAOの開発ディレクターがそう言っていた。

茅場昌彦かやばあきひこによるSAOの「本当のチュートリアル」が終わった後、俺はナミエを連れて街の中央広場の群衆から抜け出した。

はじまりの街に集められた約1万人のプレイヤー達はひどい有様だった。阿鼻叫喚とは正にこの事で、広場は悲憤に包まれていた。彼等の悲鳴や絶叫は街のBGMをかき消した。パニック状態の彼等が何をしでかすが分かったものじゃなかったから、俺は一刻も早くナミエをあの場から引き離さなければと思った。

あの赤いローブを着たゲームマスターから与えられた《手鏡》で、美美女の勢揃いだったプレイヤー全員が現実と同じ容姿に変えられた。ゲームの中で性別を偽っていた者もいたらしく、痩身の骨ばった顔の男がスカートを履いているのを見て、不謹慎なことに笑いそうになった。しかも1人や2人だけではなかったらしい。プレイヤーの男女比は大きく偏っていた。女も小学生くらいの子供もいたが、大半が中学生以上の男だった。

現実に合わせてアバターを作った俺達も例に漏れなかった。広場から放射状に伸びる路地の1本を途中まで走ったところで、俺は持ったままの《手鏡》を覗き込む。

自撮りした写真を元に作った顔よりも、現実の俺が精巧に作り込まれていた。やや面長で実年齢よりも上に見られる顔立ちも、整えてもあちこちにはねる癖毛の髪も。上積みした身長も現実と同じになったように、少し目線が下がっている。

ナミエの顔もだった。低めの鼻に細い眉。伏し目がちな大きな瞳をした顔立ちは、真広波まひろなみえ絵を忠実に再現していた。

「セツナ……」

俺は彼女の口から出るであろう罵詈雑言を受け入れるつもりだった。当然だ。この世界に誘ったのは俺なのだから。

自発的なログアウトは不可能。
ゲームで死ねば現実でも死ぬ。

「でたらめ」だと多くの者が叫んだ茅場昌彦の言葉を、俺は信じるこ
とができた。彼が呼び出した無数のウインドウ、現実世界での様子を
映した窓には、既に213人の死亡を告げるマスコミの報道が表示さ
れていた。

原稿を読むアウンサー。

民家の前に停まる救急車。

悲観に暮れる遺族達。

犠牲者達の顔写真。

その写真の中に、俺にゲーム雑誌を見せてくれたクラスメートの顔
があつたのだ。

本当にでたらめなのかもしれない。家族がナーヴギアを外してく
れば、俺は現実へ戻り、両親と姉に迎えられるのかもしれない。

でも、現時点でそれは起こっていない。現実では大騒ぎになり、プ
レイヤーを解放する手段が次々と挙げられているに違いないのに、誰
も実行に移していない。

恐らく、あのクラスメートは本当に死んだ。

楽しみに胸を躍らせて被つたであろう、ナーヴギアに脳を焼かれ
て。

あの世界には帰れない。

もう家族にも、友達にも、部活の後輩達にも、監督にも会えない。
シヨックは勿論ある。今にも理性が飛びそうだ。多分、ナミエが俺
に恨みの言葉を次々と吐き出せば、それが止めとなつて一気に俺を絶
望の淵へと突き落とす。

でもナミエの口から出たのは、俺の予想とは大きく外れたものだっ
た。

「帰らなくて、いいみたいだね」

「……………え?」

「私達、ずっとここにいていいのよ。ずっと一緒にいられるの。願っ
たり叶ったりじゃない」

俺には、ナミエが無理をしてそんな前向きな事を言っているようには見えなかった。彼女は泣き叫ぶべきこの状況を本気で喜んでいると、俺は彼女の笑顔から読み取った。

そんなナミエを見て、俺も徐々に落ち着いていった。脈打つ心臓の音が小さくなっていくのを感じていた。この体に心臓は無いはずなのに。今の俺の左胸には確かに心臓があつて、体中に血が流れて、体を動かしていると本気で思えた。

そうだ、これは俺が願っていた事だ。

波絵と日々を過ごし、心を通わせ、やがて結ばれる事が。

現実に行ったら、俺達は永遠に会えないまま、すれ違わないままそれぞれの人生を送っていただろう。

それがどうだ。俺達の運命の歯車が噛み合った。

邪魔をする者は誰もいない。俺達はずっと一緒にいる事ができる。この世界は俺達が求めていた樂園なのだ。

「行くこう」

今度はナミエが俺の手を引いて走り出した。路地を抜け、門を潜ってフィールドの草原へ出た。

さつきは天井から覗いていた夕陽が、今は地平に沈みかけていた。ナミエの長い髪を追いかける俺の視線に、オオカミのモンスターに光を帯びた剣撃を放つ少年が映った。少女にも見える。年は俺よりも下だろうか。

俺達は、層全体が見渡せる丘の頂に立った。手を繋ぎ、肩を並べて。

「現実むじょうは良い事なんて無かった。学校でも家でも、周りは私に勝手に期待してきて、自分達の理想を押し付けて、そこに私の意思なんてこれっぽっちも無かった。セツナという時だけ、私は私でいることができたの」

「……ナミエ、怖くないのか？　ここで死んだら、現実でも死ぬんだぞ」

「現実だって、いつ死ぬか分からないじゃない。この世界も現実むじょうも同じ。それに……」

ナミエは俺の方を向いた。現実と同じになった彼女の琥珀色の瞳

は、さつきよりも鮮やかになっていた。

「セツナがいてくれるもの」

笑顔を向けてくれるナミエを、俺は抱きしめた。抵抗されたらハラメント防止コードというものに抵触するらしいが、彼女は俺の背中に手を回し、受け入れてくれた。

もう俺の中で、現実への未練は無かった。唐突に別れが訪れた両親、姉、学校の友人、一緒に全国大会に行ったチームメイト、全国大会へ連れていってくれた監督、慕ってくれた後輩。

何も言わずに別れてしまった彼等には申し訳ないと思う。でも俺は全てを犠牲にしても、ナミエがいてくれればそれでいい。彼女が俺という事を望んでくれたように。

ナミエの柔らかな髪に顔を埋めながら、俺は誓った。

必ず守る。

この楽園で、俺達は生きていく。

◆

デスゲームが始まってからしばらくの間、俺とナミエは宿屋に籠っていた。外は危険だったからだ。街には《アンチクリミナルコード》というものが機能していて、HPは減らず毒といったステータス異常も起こらないらしいが、俺が警戒していたのはモンスターではなくプレイヤーだった。

彼等は完全に暴徒と化していた。喚き、泣き叫び、ゲーム世界を破壊すると剣や斧を街の石畳に叩き付けていた。建造物は破壊不能らしく、破壊されたのは彼等の武器の方だった。

鎮圧する警察も軍隊もないパニックが治まるのに数日を要した。とは言っても、その後もプレイヤー達が絶望していた事には変わり無かったのだが。現状を受け入れた彼等は、この世界から脱出するべく今後の方針を考え始めた。脱出する方法は勿論、このアインクラッドの100層全てを攻略し、最上層にいる最終ボスを倒す一択しかない。

腕に自信のあるプレイヤーは攻略を進めるためにはじまりの街を出ていたが、大多数の者は街に留まった。世界初のフルダイブを実現

させたSAO、その1万本限定の初回入荷ソフトを入手した彼等はコアなゲーマーなのだが、だからといって皆が戦闘に秀でていうわけではなく、モンスターに殺されて死ぬよりも外部からの助けに僅かな希望を託したのだ。食事や睡眠も可能とするSAOは文字通りゲームの中で「生活」することができるから、その仕様に惹かれてこの世界へ降り立った者も多かった。

ゲーム内の生活を目的にダイブした者達にとって、容姿も自由に作ることができるこの世界は別の人生を送るための場として魅力的だったのだろう。そういう点では、俺とナミエのようなケースは珍しい事ではないのかもしれない。

俺は数日間、食料を買いに出掛ける時はナミエを宿屋に置いていった。パニックが収束したとはいえ、まだプレイヤー達は混乱していたからだ。

ゲーム内でも食事ができる事は知っていたが、空腹感まで驚いた。最新の科学は疑似的な空腹感を脳に信号として送ることができるらしい。どういう仕組みなのか専門家ではない俺には分からないが、その空腹感は食べ物咀嚼し飲み込むと消えた。本当にこの世界は現実なのではないかと錯覚してしまう。

でも俺がこの世界で食べたパンや肉はただのデータでしかない。いくら空腹感が消えたとはいえ、現実での俺の胃は空っぽだ。現実での栄養補給は、恐らく点滴で胃を介さず直接血液へと送られていることだろう。

俺がそんな事を自覚したのは、プレイヤー達が落ち着き始めた頃に起こった回線切断のせいだった。突如視界に《Disconnect ion》というロゴが現れ、周囲の景色が静止し身動きが取れない状態が1時間近く続いたのだ。茅場昌彦かやばあきひこは、ネットワークの回線切断が2時間続けばナーヴギアが脳を破壊すると言っていた。だとしたら現実でベッドに寝ていた俺の体はどこかの病院へと運ばれ、その間はネットワーク回線を切られていたのだろう。さぞかし現場は大慌てだったに違いない。受け入れ先の病院を探し回っている間に2時間経てば、ナーヴギアを被ったまま救急車に乗った俺はその場で死んで

しまうのだから。俺はその約1時間の間、ずっと警告メッセージを見ながら怯えていた。それでも呑気なことに、「グリーンマイル」で電気椅子に掛けられた囚人達も、電流を流されるまでこんな気分だったのだろかと思っただ。

他のプレイヤー達にも同じ事が起こったらしい。街中で突如彼等の動きが止まり、しばらくすると転移時の光もなく消えてしまった。彼等もまた、1時間近く経って戻ってきた。

俺は自分の回線が復旧してすぐ宿に戻った。客室にナミエの姿はなく、俺は彼女が戻ってきてくれるよう祈る事しかできなかった。ナミエが俺の前に再び現れた時、彼女は泣きながら俺に抱きついてきた。俺も彼女の頭を撫でながら泣いた。

デスゲーム開始直後ではなく数日後というのも、冷静になってみれば合点がいく。1万人近くを国中の病院が受け入れなければならぬのだ。数日の間に全員が収容できるよう、SAOの運営企業であるアーガスが政府が手配していたのだろう。現実での状況を知る手段がないため、これは推測でしかない。でもこの推測を誰かが提示してくれたおかげで、ぶり返したパニックはすぐに治まった。

街に留まったプレイヤーの多くが、街を出ていった者達に恨みを抱いていた。街を出て攻略に臨んだ者はβテスト、正式サービス開始前の宣伝を兼ねた試用版に参加していた者らしい。2ヶ月の期間中に第6層までを攻略した彼等は、テスト中に培った知識と経験で利己的な自己強化に走ったようだ。死を怖れて街に籠る俺達のことなど顧みることなく。

でも俺は、βテスト達にあまり悪い印象を持っていなかった。買出しの道中で、プレイヤーが通行人に本を配っているのを見かけた。俺も貰ったそれは、SAOの仕様やスキルの種類、層ごとに入手できるアイテムとモンスターの動作パターンなどが事細かに書かれた攻略本だった。

彼等は街から出られずにいる俺達も安全に攻略を進められるよう、自分達の持てるだけの情報を提供してくれていた。俺は宿に帰ってからナミエと攻略本を熟読し、必要な回復アイテムを揃えてフィール

ドに出てレベル上げに精を出した。攻略に参加する気なんて無かったが、この世界で生き抜くにはある程度強くなければいけないと、初心者でも理解できた。

善良なβテストのおかげで攻略に挑むようになった者は多かったようだが、浮かばれないことに第1層のフロアボスが倒されるまでの1ヶ月間で、多くのβテストが死んだらしい。ボス戦で犠牲になったリーダーも、βテストだったと聞いた。

2000人の犠牲を経てようやく果たされた第1層の攻略から、10日後に第2層が攻略された。その頃には攻略に必要な情報がプレイヤー間に行き渡るようになり、死者の数は減っていった。その後も順調、といっても多少の犠牲者は出つつも攻略は進められている。

プレイヤー達は慣れたのだ。この世界で剣を取り戦っていく事に。それを受け入れた者から、フィールドに出て攻略を目指していった。

俺は攻略に興味は無かったから、レベル上げよりも金を稼ぐことを主な目的としてフィールドでモンスターを狩っていた。初期分配された額もいずれば底を尽いてしまう。それに、俺は第3層主街区のNPCショップで見つけたアイテムをナミエに買ってやりたかった。

俺が見つけたのはバイオリンだった。NPCの楽団が多かったその街は楽器を売っているという事から、多くのプレイヤーがそれを買った。音楽スキルなんて戦闘に不必要なものを上げているプレイヤーは少なかったが、娯楽が少ないインクラッドで音楽はプレイヤー達の貴重な癒しになっていた。

バイオリンはとにかく値が張ったから、俺は自分のレベルに釣り合わない迷宮区にまで足を運ぼうとした。それはナミエの必死の説得で留まり、大人しく街の近くでモンスターを狩った。朝から晩までひたすらモンスターを狩り、クエスト攻略にも挑んでようやくバイオリンを買う金を得た。

バイオリンを手にしたナミエは懐かしそうに弓を引き、弦を指で押さえた。でも現実と同じような音を奏でることはできなかった。スキルを上げないと、上手くはならないらしい。

「弾きまくればスキルも上がるさ」

俺がそう言うと、ナミエは毎日バイオリンを弾いた。最初は金切り声みたいな音ばかり出していたが、毎日弾いていく内にまともな音を出せるようになっていった。

「何だか、自分で指を動かしている感じがしない」

弾く度に、ナミエは不満そうに言っていた。俺がソードスキルを放つ時のように、楽器の演奏もシステムが体を動かしてくれるようだった。ナミエとしては物足りなさがあるのかもしれない。いくら楽譜通りでも、自分で指を動かさし思い描く音を出せないというのは、音楽家としては気持ちの悪いものではないらしい。

でも俺は、それでもナミエがバイオリンを弾いてくれるだけで十分だった。彼女が俺のために音を奏でてくれることが。

新しい情報が入る度に配布された攻略本の最新版で、俺は《結婚》というシステムがあることを知った。特典としては、配偶者のステータスを自由に見られる事とアイテムの共有化。結婚する方法は至って簡単なもので、男女のどちらかが相手にプロポーズメッセージを送り受諾される事。婚姻届の提出も挙式も必要無いらしい。

俺はそのシステムをナミエには言わなかった。どうせなら、驚かせてやりたかった。数日後にクリスマスというタイミングで知ったから、その日にプロポーズすることにした。

この世界に来て初めてのクリスマススイブの夜。俺とナミエはせつかくだからと、2人の経済状況では少し高めのNPCレストランで食事をした。第5層主街区はクリスマスモードのBGMとイルミネーションに彩られていて、宿の窓から雪が積もった街並みをナミエと眺めていた俺は、意を決して彼女にプロポーズメッセージを送った。

文面はシンプルに、『俺と結婚して下さい』だった。

我ながら何て稚拙なプロポーズだと思う。でも俺は下手に取り繕いたくなかった。簡潔に、ストレートに、彼女に俺の気持ちを伝えたかった。

ナミエは送られてきた文面を見て、涙を浮かべながら笑顔で頷いてくれた。そして彼女の受諾を得ると、俺の視界に「ナミエとの結婚が成立しました」というメッセージが浮かび、ファンファーレが鳴った。

俺達は晴れて夫婦になった。

俺は幸せだった。

ナミエも幸せだったと信じたい。

?

ナミエとの新婚生活を満喫する暇も無く、俺はフィールドでモンスターと宝箱を狩りまくる生活に戻った。攻略本に載っていた効率の良い狩場へと行き、板についてきた剣捌きでモンスターを屠っていた。ナミエも街や村でお使い程度のクエストで金を稼いだ。

結婚した俺達の新居を買うためだった。一軒家を購入するのに、俺達の財布は寂しすぎた。

各層の街を渡り歩き、宿を転々とする生活も飽きはしないが、やっぱりどこかの場所に落ち着きたかった。

意外な事に、ナミエには恐妻の素質があった。

マップ追跡で俺が迷宮区に入ったと知れば叱られて、バイオリンのスキル修行に一晩中付き合わされた。

朝は圈内だから大丈夫と俺にソードスキルを食らわせて無理矢理起こされた。アラームではなく攻撃時の音とノックバックが俺の目覚ましになった。

完全に尻に敷かれると思った俺も、街でバイオリンの路上ライブで金を稼ぐ彼女を見つけたら「ナンパでもされたらどうすんだ!」と叱りつけた。でも俺が叱ったのは一度だけだった。叱られたナミエは拗ねてバイオリンを聴かせてくれなかった。俺はそれに耐えかねて謝った。

「ごめんナミエ、俺が悪かった。頼むから許してくれよ」

「じゃあ、もつと良いバイオリン買って」

「ああ買ってやるよ。でもその前に家な」

機嫌を直してバイオリンを弾く彼女を見て、俺は亭主関白にはなれないなと思った。

2ヶ月間必死になって戦い働いて、ようやく俺達は目標金額を得ることができた。モンスターとクエスト報酬から得た額では足りず、手

持ちのアイテムの殆どを売り払った。道具屋のNPCでは相場が低いため、プレイヤーを相手にできるだけ高く買い取ってもらうために交渉を重ねた。職人プレイヤーに強化してもらった剣も、強化にかかった額よりも高く売ることができた。

買う家は既に決めていたが、急遽変更することになった。2月上旬に解放されたばかりの第2層をナミエはとても気に入った。常緑樹の森林に湖が点在するフロアの南西エリアに小さな村があり、そこでいくつかのログハウスが売りに出されていた。金額が足りていた事もあって、俺達はその小さな2階建てログハウスを購入した。

ほぼ全財産をつぎ込んだせいもあって家具は必要最低限のものしか揃えられなかったが、俺はようやく定住地を見つけた事に満足していた。正直、ナミエと一緒にどこでも良かったのだが。

俺達は引越してから3日間、モンスターが出ないそのフロアを散歩して過ごした。

ようやく生活が落ち着いたので、その頃から俺はとある不安にとり憑かれた。

このままで良いのだろうかという、誰もが根拠もなく抱くであろう不安。

俺はナミエと夫婦になって、家を買って、伸び伸びと暮らせばいい。何も不安な事は無いはずだった。

でも俺は漠然と感じていた。
この世界は、いつか終わってしまうと。

ひたむきに攻略を目指すプレイヤー達によって、何年経つかは分からないが最終ボスが倒され、俺達は現実へと引き戻される。

引越してから、ナミエはよく窓から外周から開けた空を眺めるようになった。空の雲間から覗く太陽や月、それを物憂げに目蓋を垂らして見つめていた。

ある日の夕方、俺は気に入った葉のお茶を飲みながら、ナミエと夕陽を眺めていた。いつもはナミエのバイオリンを聴いている時間だが、何日か過ぎすうちにこうしてソファで2人ぼんやりとしている事が多くなった。

「ナミエ。お前、現実に帰りたいたいんだろ？」

俺がそう聞くと、ナミエは黙って頷いた。

「こうしてセツナといると幸せ。それは本当なの。でも、何だか虚しくなっちゃって……。ごめん。セツナは私のためにこの世界に連れてきてくれたのに」

「いいんだよ。俺も、同じ事思ってた……」

この世界の俺達の体は成長しない。ゲームクリアが断念されて、何年何十年経っても、俺達はずっと15歳の子供の姿のまま。いくら年を重ねても老いる事無く、いくら体を重ねても子供を産む事はできない。時間が止まったまま、このネバーランドでピーター・パンのように過ごしていく。

それは幸せな事なのかもしれない。若い姿のまま、お互い人生でも美しい姿のまま愛し合えるという事は。

「現実に戻るのは怖い。でも、私はセツナと本当に結婚して、セツナの子供を産んで、セツナと一緒に年を取っていきたい……」

「ああ、俺もだよ……」

俺は想像してみる。

現実で大人になった俺は教会で美しい女性に成長し、純白のウェディングドレスを着た彼女を迎え入れる。2人は小さい家で暮らし、そこで新しい家族の誕生を祝い、家が狭いと言いながらも笑い合って幸せな毎日を過ごしていく。

「俺達に子供ができたら、どんな子になるかな」

「気が早いよ。現実に戻ったら、今度こそ私達会えなくなるかも」

「ああ。でも、俺は絶対にナミエを迎えに行く。両親を説得して、皆に祝福されて、結婚式を挙げよう。現実じゃこんな小さな家じゃない。もつとでっかい、豪邸を建てて暮らそう」

「無駄に広い家なんて嫌よ。私は小さい方が良いな」

俺は苦笑する。ナミエも俺の顔を見て微笑んだ。

「約束する。俺は現実でも、絶対にナミエに会いに行く。ずっとお前の傍にいる」

俺達はソファの上で寄り添い、唇を重ねた。

俺はデスゲームが始まったあの日と同じように、誓いを立てた。このキスは、誓いの証だ。

この彼女の感触を、妄想だけで終わらせない。

「ゲームを、クリアしてみせる」

◆

?

俺は誓いを立てた翌日に動き出した。

2月も半ばになったその頃の最前線は第27層。俺は金を稼ぐついでに経験値も稼ぎそれなりのレベルに達していたが、それでも安全マージンを取れるに至っていない。しかも、家を買うために攻撃力の高い剣も売りに出してしまった。

それでも俺は、やると決めたらじつとしていられない質だった。一刻も早く、攻略組の仲間入りをしたかった。

俺達のレベルで最前線に挑むのは無謀だが、その分得られる経験値はポーナス級に高い。俺達は最新版の攻略本をしっかりと暗記し、買えるだけの武器と回復アイテムを揃えてフィールドに出た。

第27層のフィールドはうっそうとした森林が広がっていて、モンスターも手強かった。俺はナミエに回復を任せて、モンスターと戦った。危うくHPが半分以上減ることもあったが、モンスターの動作を予習しておいたおかげで何とかエンカウントを乗り越えることができた。たった1時間で、俺達のレベルは1つ上がった。

「この調子なら、迷宮区に行く日も近いな」

俺は意気揚々と、しかし警戒しながらナミエと森の北東を向けて歩いた。何度目かのエンカウントを経て、まだポーションの数に余裕があった俺達は外周まで進んでいた。

そこは、攻略本の地図には載っていない場所だった。森を抜けたそのエリアは花が咲き乱れ、中央には開けた空を背景に1本の樹が立っていた。

「きれい……」

風に乗って外周から空へ飛んでいく花卉を見て、ナミエはそう呟いていた。俺も、この世界でこんなに美しい景色は初めて見た。

俺達はその秘境とも言える花畑を、モンスターへの警戒なんて忘れて眺めていた。

ナミエが深緑の葉を広げる樹の幹に触れた時だった。

唐突に、俺の体は草花が生い茂る地面に吹き飛ばされた。HPが一気に4割削られた。俺は咄嗟に周囲を見渡した。いつの間にか、複数のプレイヤーに囲まれていた。

彼等のカーソルを見て、俺は一瞬モンスターなのではないかと思った。彼等のカーソルは俺が見慣れたグリーンではなく、オレンジだったからだ。彼等がプレイヤーを狙う《オレンジプレイヤー》という犯罪集団だと悟ったのは、ナミエが樹の影から出てきた男に突き飛ばされた時だった。

俺はポーシヨンも飲まずに、剣を抜いて走った。ナミエを突き飛ばした男は俺との距離を一気に詰めて、腹に短剣を突き刺した。ダメージは少なかったが、短剣には麻痺毒が仕込まれていた。モンスターから麻痺毒を食らったことは何度か経験したが、プレイヤーも武器に毒を仕込めることを後になって知った。

地面に突っ伏した俺の前に、その男はしゃがんで顔を覗き込んできた。髪を掴まれて頭を持ち上げられた俺も、そいつの顔を見た。フードを被っているせいで上半分は見えなかったが、俺は奴の頬にあるケロイドの傷を視界に収めた。奴はにたりと笑った。

「これから起こる事を、よく見ておけ」

奴は俺と同じように麻痺毒で動けなくなったナミエの首根っこを掴んで無造作に放り投げた。力なく、ナミエは俺の前で地面に伏した。

ナミエは俺に手を伸ばした。俺も重い腕を伸ばし、彼女の手を掴もうとした。

そして、俺達の手が触れようとした瞬間――

「ゲームオーバー」

いつの間にか装備を変えていたケロイドの男が、赤い光を纏った直剣をナミエの背中に突き立てた。俺の視界に映るナミエのHPバーが縮んでいき、消滅した。

琥珀色をしたナミエの瞳から、一粒の涙が落ちた。

その瞳が色彩を失った。彼女は俺の目の前で一瞬だけ眩い光を放ち、無数のガラスのようなポリゴン片となって飛散した。欠片は花畑に散る花弁と共に舞い上がり、蒸発していく。

俺の手が掴んだ彼女の欠片も、光の粒子になって消えていった。

第14話 渇きには水を

暗いどこかの層の迷宮区。床と壁と天井が、俺の悲鳴を反響させていた。

あの花畑でナミエが消えてからの記憶は無く、俺はいつの間にかそこに運ばれていた。どれくらいの間、俺はその迷宮区にいたのか分からなかった。

麻痺毒で動けず、手足を拘束用ロープで縛られ、完全に自由を奪われた様をカーソルがオレンジの奴らは嘲笑った。

目を刺され、耳を削がれ、鼻を削がれ、手足を斬り落とされ、胸と腹に数十本もの杭を打たれ、その度に恐怖が全身を貫き絶叫した。叫ぶ度に「黙つてろ」と、頬と腹を殴られた。

痛みが無いのが、むしろ恐怖を煽った。自分の膝から下を斬られても血が流れず、しばらくすると生えてくる様子を見て、俺は人間間ではないという錯覚に陥った。

殺してと何度も叫び、そのせいかシステムなのか喉がからからに渇き、空腹に襲われた。

それでも俺は死ねなかった。奴らは痛めつける方法を熟知しているようだった。頭部や左胸といったウィークポイントは下手に攻撃するとHPが一気に減る。そうならないよう、奴らは胸を刺す時は浅く、顔は表面だけを削ぐよう手加減していた。ゆっくり、ずぶずぶと俺の左目に投擲用ピックを刺す奴の頬にあるケロイドを、残された右目で見ていた。

連中は俺のHPが尽きそうになると無理矢理ポーションを飲ませて回復させ、失った手足と顔のパーツが再生すると拷問を再開した。

俺はそのうち考えることを放棄した。このまま命が尽きるのを静かに待つことにした。そうすることができればどれほど楽で安らかなことだろう。生きたまま肉体を離れようとする魂を引き戻すように、奴らは再生した俺の目に笑いながらピックを刺した。

どうしてこんなことになってしまったのか。

どうしてこんな目に遭わなければいけないのか。

そんな問いが俺の中で浮遊し、恐怖で絶叫する度にかき消され、時間が経つと再び浮上した。

もとは、このSAOの世界に来てしまったから。

俺がナミエを連れて、この世界に来たから。

そしてナミエは死んでしまった。

すぐナミエのもとへ逝きたい。

でも逝かせてくれない。

どうして？

何が間違ってしまったんだ？

ナミエの母親から言われた事に従っていれば、こうはならなかったのか？

俺のせいなのか？

全部、俺が悪いのか？

俺の意識は無になった。

俺を傷付ける連中の顔も、声も分からなくなった。

何色もの絵の具を何重にも塗り潰した汚泥のような闇が、俺の意識を沈めていった。

暗闇の中でふわりと一瞬だけ聞こえたのは、ナミエが奏でるバイオリンの音だった。

違う。

俺はただ、好きな女の子と一緒にいたかっただけだ。

彼女と話して、彼女の音を聴いて、彼女の笑顔を見たかっただけだ。

どうしてナミエが死ななければならない。

どうして俺がこんな目に遭わなければならない。

どうして俺を傷付けているこいつらが、笑っているのを見なければならぬ。

俺は悪くない。

俺は何も間違っていない。

間違っているのは――

「コノセカイダ!!」

そう叫んだ俺は、何かが砕ける音を聞いた。それは俺を縛りつけて

いたロープの耐久値が尽きて消滅する音だった。でも俺は、その音が自分の中で壊れてはいけない何か壊れた音のように感じた。

それは、理性の結晶といふべきものだったのかもしれない。正気と狂気の境を彷徨って叩きのめされたそれが、とうとう砕け散った。

俺は腕に力を込め、俺の腕を斬ろうとしたオレンジの顔面に拳を打ちつけた。奴が身をよじらせた隙に、剣を装備しその片腕を斬り落とす。奴が俺と似たような叫び声をあげた。俺は残りの手足を斬りおとし、耳と鼻を削ぎ、腹と胸に何度も剣を刺した。

奴の腕が再生しようとするれば、その部分を再び斬りおとし、片方の目に時間をかけてゆっくりと剣を潜らせた。

奴は開いたもう片方の目で泣いた。許してくれと懇願した。俺は目に刺した剣を抜き奴に静かに言い放った。

「死ねよ、お前」

その言葉で絶望と恐怖に満ちた奴の顔を、剣で消滅させた。

その場にいた全員を殺して迷宮区を出た時、視界に表示された日付を見ると次の月になっていた。俺はあの暗い迷宮区に1ヶ月もいらしい。

俺が連中を殺した時、あのケロイドの男はいなかった。

俺は何日もの間、あてもなく森を歩き続けた。長く叫んだせいか、ひどく喉が渴いていた。

剣をずると引きずりながら歩き、何度かモンスターと戦った末に街へと辿り着いた。俺はまずNPCレストランで食事を摂り、水を大量に飲んだ。どれだけ飲んでも喉の渴きが消えることはなかった。10杯目を飲み干したところで諦めて店を出た。

俺は道具屋に寄ることもなく、再びフィールドに出た。何も考えていなかった。頭蓋骨の中から脳が取り除かれたみたいに頭が軽かった。ただ「喉が渴いた」という生理的欲求が俺の思考を支配した。

森の中を彷徨っていた時、俺はプレイヤー同士が戦っているのを見た。1人のプレイヤーが2人を相手に剣を振り回していた。その層に潜伏していたオレンジプレイヤーが、アイテムと金を持った獲物を見つけて襲いかかったのだろう。

レベルが直角であるなら、分は2人の方にある。案の定、1人で勇敢に戦ったプレイヤーは敗れ、色彩を失ったアバターが砕け散った。うっかり殺しちまったと片方はバツが悪そうに言った。その様子を見ていた俺は剣を抜き、2人のもとへ走った。

殺されたプレイヤーが知り合いだったというわけじゃなかった。ただ俺の中で、血が沸騰しそうなほど熱い衝動が沸き上がった。俺はそれに従い、ポリゴンの肉体を動かした。

不意打ちに驚いているプレイヤーの片方の腹を裂き、更にライトエフェクトを帯びた剣をシステムアシストのままに胸へと突き刺し、そのHPを0にした。

生き残ったもう片方は仲間の死に一瞬うろたえたが、すぐに我に返り俺の腹を大振りの大剣で貫いた。俺のHPが半分を切り、更にそのバーは間隔を短くしていった。

俺は迫って来る死に恐怖することなく、冷静に剣を構え、光る刀身を相手の顔面に叩きつけた。

ポリゴンが静止し、砕けた。その瞬間、俺の口の中に鉄臭い味が広がった。それは現実で読書をしていた時、うっかり紙で切った指を舐めた時の味。

血の味だった。

それが俺の渴いた喉を潤し、食道を伝っていった。

血の味は何日もの間、俺の口の中に残った。初めは不快に思っていたが、それが消えると再び喉の渴きに襲われた。

俺は他の層へ行き、山賊まがいの強盗を働いているプレイヤーの噂を聞きつけてはその場所へ赴き、そいつを殺して口を血の味で満たした。

俺は復讐することにした。

ナミエを殺したケロイドの男に。奴以外にも人を殺すオレンジプレイヤー達に。

その憎悪が、空っぽだった俺を満たした。

俺は家を買った。苦勞して揃えた少ない家具も全て。値打ちが無いものは捨てた。でもナミエのバイオリンと、写真屋を営むプレイ

ヤーに撮ってもらった写真は捨てる事ができなかった。

俺は工面した金で装備を整えた。難易度の高いクエストに挑んで素材を手に入れて、職人プレイヤーに武器と防具を作らせた。

宿を転々として、1時間だけ眠って昼夜問わずレベル上げに時間を費やした。連中を根絶やしにするために、俺は力を渴望した。

そうして賊狩りを続けているうちにヒースクリフと出会ったのは、第13層の迷宮区だった。そこを拠点にしていたオレンジギルドを潰した直後だった。

俺は奴もオレンジギルドの一員と勘違いして殺そうとした。でも、俺はあっけなく負けた。HPがレッドゾーンにまで減らされた俺に、彼はいつでも止めを刺せると俺の眼前に剣先を静止させていた。

「君には2つの選択肢がある。ひとつはこのまま私にPKされる選択」

「……………もうひとつは」

「もうひとつは、私のギルドに入る選択だ」

「2つめを選んで、俺に何の得がある」

彼は剣を収めて、指でウィンドウを操作し始めた。俺は攻撃しようと思わなかった。俺の攻撃は全て防がれた事で、彼との絶対的な力の差を思い知らされていた。

彼はひとつのアイテムをオブジェクト化させて、俺に差し出してきた。右手だけの肘まである長い真紅のグローブだった。グローブや手甲系の防具は必ず左右セットで手に入るはずなのに。

「ギルドに入れば、これを君に授けよう。説明を見たまえ」

俺は言われた通り、グローブをクリックして、表示された説明を読んだ。アイテム名は《ソウルバイカー魂を噛む者》。

「このアイテムを装備した状態でPKすると、PK対象の総経験値の内10%を自らの経験値として獲得できる」

「それがあれば、君はオレンジプレイヤーをPKする度にレベルを上げる事ができる。他にも、私が持っているオレンジプレイヤーの情報を君に提供しよう。どうだね、君にとっても悪い話ではないはずだ。代わりとして、必要な時には君にも我がギルドの一員として攻略に参

加してもらおう」

「……なぜ俺にそこまでする。あんたの目的は何だ」

「私は、ギルドの仲間を魔の手から守りたいのだよ。それに、君の力は攻略でも存分に発揮できる」

「拒否したら」

「この場で君を殺す」

彼は迷いなく、その真鍮色の瞳を向けて言い放った。

「君がいくらオレンジプレイヤーを殺そうとも、危険な存在である事は彼等と変わらない」

俺がなぜ賊狩りをするのか、その理由を彼は聞かなかった。彼にとって、俺の復讐はどうでもいいのかもしれない。俺も、彼のギルドに対する思い入れなんてどうでもよかった。

ただ利害が一致する。この男につけば、オレンジプレイヤーを見つけやすくなる。

俺は、彼の手の中にあるグローブを受け取った。彼は笑っていた。でも、その瞳から感情は読み取れなかった。

「血盟騎士団へようこそ」

そうして俺は、血盟騎士団に入った。形式だけの入団テストを経て、ヒースクリフの命令に従ってあらゆる層を渡り歩き、オレンジプレイヤーを殺してきた。

殺す度に、俺の口には血の味が現れた。消えると喉の渇きに耐えられなくなつて、また殺した。

時々、俺は自分が何のために犯罪者狩りをしているのか分からなくなつてくる。

ナミエのためなのか。

喉の渇きを血の味で消すためなのか。

そんな疑問も、口の中を血の味で満たす度に消えていった。分かっている。俺も、俺が殺している連中と同類だ。自分の苦痛を消すために罪を重ねている。

多分、全てのオレンジプレイヤーが死んだ時、最後のオレンジプレイヤーとして俺はヒースクリフに始末されるだろう。

彼は俺を知らないと装いながら捕えて、ギルドの参謀職達に突き出して、然るべき裁きとして俺を殺す。

俺はそれで構わない。あのケロイドの男を殺して、オレンジプレイヤー達を根絶やしにすれば、この世界は楽園になる。楽園になった世界で死ぬるなら本望だ。

神は死んだと、19世紀の時点でニーチェは言っていた。

死んで結構だ。全人類の罪を神が背負って赦すなんてごめんだ。

ナミエを殺したのは奴の罪。俺の罪は俺の罪。

それを無責任に「赦します」なんて神が言ったら、俺は神を殺す。

◆ 「これが理由だ」

最後にそう言つて、セツナは自分の物語を締め括った。テーブルを挟んで聞いていたアスナは、途中からずっと泣いていた。

自分の口から語られる物語を自分の耳に入れて、セツナは漠然としていたものが実体を得たような気がした。そしてセツナは確信へと至る。

自分はナミエを愛していると。

死んでしまつても。変わらず、彼女と一緒にいた時のように、一編の迷いも狂いもなく。

セツナは左手のグローブを外した。薬指にはめられた銀色の指輪が、部屋の照明に反射して輝いた。ずっとグローブを外していなかったから、久々の輝きだ。

「それは……………」

涙を拭いたアスナが、指輪に視線を向けた。

「ナミエとの結婚指輪だ。店で一番安かったものだが、どうしても記念が欲しかった」

銀色に光る指輪を見て、セツナは自分の中で何も変化が起こっていない事に安心する。良かった。俺はまだナミエを愛していると。彼女の声と笑顔。そして彼女が奏でる音を求めている。

「ナミエさんは、復讐を望んでいると思うの？」

「さあな。彼女が何を望んでいたのか、本当に現実に戻りたがって

たのか、俺にも分からない」

「じゃあ、どうして……？」

「俺がナミエを愛していると、証明するためだ」

「そのためにたくさん殺して、最後には自分も殺されていいなんて……。本当にそれでいいの？」

「俺の命なんて軽い」

「軽くない!!」

アスナは立ち上がり、テーブルに沿って歩いた。セツナの前で止まると、両手でセツナの顔を包み込む。決して彼が顔を逸らさないように。

「リズから聞いたわ。モンスターに飲み込まれたリズを助けてくれたって。この前だって、ビーストテイマーの女の子があなたにお礼を言いたって本部に来た。あなたには、人の命を大切にやる心があるじゃない。あなたが死んだら、あの子達は悲しむ。それこそわたしの罪よ」

「リズベットは俺の剣を作ってもらったために、シリカは任務だから死なせなかっただけだ」

「それでも、あなたに生きて欲しいって願う人もいるのよ。わたしだって、あなたには生きて欲しい。あなたには幸せになって欲しい」

アスナの目尻に再び涙が浮かんだ。彼女はそれを落とすまいと、口を真一文字に結んだ。だが、涙は零れて頬を伝った。セツナはそれを指で掬い取る。はじまりの街でナミエと再会した時、彼女の涙を掬ったように。

「あんたには辛い話を聞かせてしまった。そのせいで、あんたに余計な重荷を背負わせる事になったな。済まない」

「謝らないで……。あなたに…、これ以上罪を背負ってほしくない」

彼女の涙は止まる気配が無かった。泣きじやくったせいで、感情表現システムに従って目元と鼻が赤く腫れている。セツナのために彼女は泣いている。セツナの悲しみが、まるで自分のものであるかのよう。

「もう十分すぎるほど背負った。俺の罪は、もう償い切れるものじゃ

ない。だからといって、あんたに赦せるものでもない。だから泣かないでくれ。この罪は俺一人に背負わせてくれ」

彼女の目、鼻、口、栗色の髪。それらがセツナにひとつの答えを導き出した。ナミエを愛しているという確信の他にある、もうひとつの確信だった。

「ずっと、あんたの事が気になって仕方なかった。その理由が今分かった」

「……………何？」

「あんたはナミエに似ている。笑った顔が」

顔立ちが似ているというわけでは無い。目を細めて、控え目に口角を上げる彼女の笑顔。その笑い方がナミエに似ていた。セツナが思い出す度に罪悪感で潰れそうになる、ファミリアタワー 運命の女と生き生きした女が共存した笑顔だった。

「俺にはあんたに要求する資格は無いが、幸せになってくれ。この世界で死んだ者の分まで」

セツナは両頬にあるアスナの手を退けて、立ち上がった。右手にグローブをはめて、そのまま泣いているアスナの横を通り過ぎて、ドアへと向かう。

ドアノブに手を掛けようとした時、アスナが目の前に立ち塞がった。もう涙は流れていなかった。アスナは壁に触れて操作メニューを出し、部屋の照明を全て消した。

「何のつもー」

セツナが最後まで言い切る前に、胸目掛けて閃光が暗闇に迸った。索敵スキル補正によって視界が暗視モードに切り替わる前で、それがアスナの拳である事に気付かなかった。

圏内であるため紫色の障壁に阻まれたが、アスナのパラメータが高すぎる故にセツナの体はノックバックで部屋の反対側へと大きく吹き飛び、窓に激突した。

セツナは顔を上げる。大音響だったが、部屋の中は綺麗に整頓されたままだった。ソファやテーブルや棚の花瓶も、ぶつかった際にシステムの障壁に守られていた。

ひたりと、裸足で歩くアスナが見える。暗闇の中で、彼女の肌は窓から入り込む街灯の僅かな光を反射して白く輝いていた。彼女はいつの間にか服を脱いでいた。下着の色が肌に同化しそうな純白だったため、一瞬全裸と思った。

とても美しかった。すらりとした手足に滑らかな腰と胸の曲線。その完璧な美しさは非人間的でもある。現実ではなく3Dオブジェクトであるから、それは当たっているのかもしれない。「未来のイヴ」のハダリーは、きつとこんな美しさだったに違いない。

「お願い……。わたしを好きにしていから、もう止めて……………」

アスナはセツナに抱き付いた。彼女の柔らかい感触が伝わってくる。アスナはセツナの首に手を回し、その桜色の唇をセツナの唇に近づけていく。

触れ合う寸前に、セツナはアスナの唇に人差し指を押し当てた。空いたもう片方の手で彼女の肩を掴み退ける。

「…………ナミエを裏切る事はできない」

セツナは立ち上がり、歩き出す。

「待って！」

追ってくるアスナに、セツナは黄色いライトエフェクトを纏った裏拳を見舞った。彼女の前に現れた半透明の障壁に火花が散り、ノックバックで体が仰け反る。

「俺が出たら、ロックを掛けておけ」

それだけ言って、セツナはドアの奥へと消えていった。

ドアを閉める際、床に崩れ落ちるアスナの目元から、光を反射した涙が落ちていった。

◆

？

「驚いたよ。まさか何も言わないとはね」

ヒースクリフはそう言いながら苦笑した。朝一番に行われたギルドの定例会議は、いつも通り滞りなく進められた。

攻略する迷宮区に出現するモンスターの動作パターンとその弱点。ダンジョンに設けられた安全地帯の位置と結晶無効エリアの部屋。

それらの情報を団員達に伝え、会議は終わった。

白と赤に統一された装備を身に纏った団員達はいつも通り、攻略へと向かった。結局、アスナはセツナの事を伝えなかった。当然、会議の場にセツナはいなかった。

会議が終わった後、アスナはヒースクリフとの打ち合わせと適当に理由を付けて、彼と共に会議室に残った。

「……彼から聞きました。団長が彼をギルドに入れたそうですね」

「ああ、そうだ。確か1年近く前だった。彼を見つけたのは」

「……彼を止めようとは、思わなかったんですか？」

「私も、できる事なら止めたかった。だが、PK以外に彼を止める方法はない。だからせめて、彼が必要以上に殺人を犯さないよう、私の監視下に置くしかなかった」

「それで……、彼は救われるんですか？」

ヒースクリフは少しだけ俯く。彼なりに罪の意識を持っているかのように。

「いや、救う事はできないだろう」

「ならー」

「君は勘違いをしている」

アスナの言葉をヒースクリフは遮る。アスナは彼の目に逡巡し、続きの言葉を紡ぐことができなかった。

「当の彼は救われる事を望んではいない。君は正しいが、それは無責任な同情だ」

ヒースクリフは真顔だった。開き直りとは違う。無機質な印象だが覚悟を秘めた瞳。ゲームクリアを果たすと決意したギルドの仲間達と同じものを瞳に宿していた。

「私は彼と出会った時、剣を交えた。私にとっては取るに足らなかったが、その執念には私も怖気づいたよ。彼のオレンジプレイヤーに対する憎しみは尋常ではない。たとえギルドから除名したとしても、彼は犯罪者狩りを続けるだろう。彼に何が起こったのかは聞いていないが、彼が奪われた者であることは分かる」

セツナ自身の口から聞いた、彼の過去。アスナはヒースクリフより

も、彼の抱えているものを鮮明に感じ取る事ができる。

昨晚、セツナが出ていった後アスナはずっと泣いていた。

懺悔の涙だった。理由を聞けば、彼に何かしてあげられるかもしれない。彼を救えるかもしれない。そう思い上がった自分の傲慢さを恥じた。

途中から物語を淡々と話すセツナを見るに堪えず目を閉じた。それでもセツナの口から語られた彼の慟哭と罪の話は、アスナの目蓋の無い耳に否応なく入り込んできた。

アスナは想像してみる。もしアスナが大切に思っている者が、目の前で命を奪われたら。

想像したくもない。きっとアスナは耐えられない。セツナのように復讐に身を委ねる気力も失い、心が内側から腐っていくのを虚しく眺めていることだろう。

「誰も彼を救う事はできない。君にも、勿論私にもだ」

ヒースクリフの言葉に、アスナは反論する事ができなかった。

本部の扉を潜る時、門番が敬礼するのに気付かないまま、アスナはグランザムの街へと歩いた。ヒースクリフから「今日はゆっくりと休んだ方が良い」と、休暇を与えられた。

迷宮区の攻略に参加した方がまじだった。モンスターと戦っている間だけは、何もかも忘れられる。

アスナは無意識のうちに、リンダースのリズベット武具店に足を運んでいた。昨日剣の手入れしてもらったばかりだったが、丁度良いかもしれない。親友と他愛もない話に華を咲かせていれば、気分も晴れるかもしれない。

工房に入ると、リズベットはアスナの来訪に驚いた。アスナは精一杯、いつも通りの笑顔を取り繕った。

「どうしたのアスナ。剣は昨日研磨したばかりじゃない」「ごめんね。今日はオフだから、ちょっと顔出そうかなと思って。仕事の邪魔はしないから、いさせてくれないかな?」

リズベットは不安そうにアスナを見つめたが、すぐに笑顔で「いいわよ」と言ってくれた。気を遣わせてしまって申し訳ないと思う。

真剣な顔でハンマーを振るリズベットと、彼女のハンマーに叩かれている真つ赤に焼けた金属を見つめる。

あの金属に意思があつたら、何を思うのだろうかと思つた。

炉で真つ赤になるまで焼かれて、何度も叩かれ、打ちのめされてと変わるのだろうか。

勿論、リズベットは悪意を持って金属を叩いているんじゃない。アスナの親友は、ただ良い武器を作りたい。その純粹な願いだけでハンマーを振っている。アスナの《ランベントライト》も、彼女の願いで生まれたはずだ。

あの金属になりたいと、アスナは思つた。

何の悪意もなく叩かれて、ペしゃんこになるまで打ちのめされたかつた。

そうすれば、闇の中へと消えていった彼の背中を追う資格を得るような気がした。

ふと、アスナは視界の隅でメッセージアイコンが点滅している事に気付いた。ギルドメンバーからの連絡だろうか。そう思い、何気なくアイコンをタッチしてメッセージを開いた。

「っ！」

アスナは垂れた目蓋を剥いた。宛先はセツナだった。メッセージの文面は短く一瞬で内容を理解できる程度だったが、その一瞬が永遠と思えるほどに長く感じた。

『昨日食わせてくれたステーキは美味かつた。次は、あんたの大切な奴に食わせてやってほしい』

アスナはギルドメンバーリストを表示した。最後までスクロールしても、探している名前は無かつた。

体中から力が抜けていく。工房の床に両手をついた。暑い時期なのに、床は冷たかつた。冷たい床に、温かい雫が何滴も落ちていく。

「アスナー！」

異変に気付いたりズベットが、ハンマーを放つてアスナに寄り添つた。

「どうしたの、大丈夫？」

「……………さっし」

「え？」

「ごめんなさい……………」

リスベットの声は聞こえなかった。声どころか、隣にいる彼女の顔もまともに見えず、視界が涙で霞んでいった。

このまま全てが霞んで消えてほしかった。

この気持ちも自分の存在も、仮想であってほしいと思った。

自分の人生を呪いたくなかったのは、デスゲームが始まって宿に籠っていた頃以来だった。

アスナは無になりたかった。

体も、心も。何もかも消してしまいたかった。

そうすれば何も感じなくて済む。

こうして涙を流さずに済む。

ヒースクリフの言う通り、誰も彼を救う事はできない。

彼自身も、自分を救う事ができない。

彼の戦いを止める事は、彼を二度と這い上がる事のできない奈落の底へと突き落とす行為だと、アスナは気付いた。

傲慢だった。改めて思う。

血盟騎士団の副団長になったから。

《閃光》なんて呼ばれるようになったから。

強さに加えて容姿で注目されるようになったから。

この世界で、ハイレベルプレイヤーに名を連ねる自分なら何もできない事は無いと思いがかった。

この気持ちは罰だ。

彼のメツセージにある優しさを感じさせる言葉が、アスナに罰を与えた。

「ごめんなさい……………。ごめんなさい……………。ごめんなさい……………」

アスナは涙を流しながら懺悔した。

いくら涙が流れても、アスナの中にある罪の意識は流れなかった。

第15話 死者には棺桶を

「殺風景な部屋だな。本当にここに住んでるのか？」

ベッドと椅子と小さい丸テーブルしか置かれていない部屋を見渡して、アルゴは皮肉る。普段は置かないテーブルと椅子をわざわざ買ってきたのだから、これでも少しは生活感があると、住人であるセツナは思う。買ってきたと言っても、エギルから在庫を抱えたものを格安で譲ってもらったのだが。

「ああ」

素っ気なく答えながら、セツナはコーヒーを注いだカップを彼女の前に置いた。アルゴはカップを啜り、顔をしかめる。

「こんなマズいものよく飲めるな。上位ランクの豆が手に入るクエストでも教えてやろうか？」

「遠慮しておく。不味いなら水を飲め」

セツナはオブジェクト化させた《クリスタル氷山の雪解け水》をテーブルに置いた。

「さて、本題に入らせてもらおう」

その声に従って、セツナとアルゴはその男に視線を向けた。灰色のローブは、いつも赤い服を着た彼に似合っているとは思えない。

「団長がここに来るといふ事は、余程の事なんだろう」

「おや、まだ団長と呼んでくれるのか。君はギルドを抜けたというのに」

彼は感慨深そうに言った。その妙な貫禄のある声は、まるで数十年来の友人と話すような声色だった。

「俺のミスが招いた事だ。それに、ギルドに入っていたのも形だけだったからな」

先月の出来事から、セツナは血盟騎士団を除名された。彼女の追跡から逃れるためだった。晴れて自由の身となったわけだが、何も変化は起こっていない。任務の内容は、フレンド登録したヒースクリフから受け取っている。

「違いない。だがやはり不便はあるな。こうして重要な話をする時、

君を本部に呼べないというのは」

彼は苦笑する。落ち着きのある笑みだ。最強の剣士と謳われるプレイヤーとは思えないほどに、荒々しさというものが感じられない。だが彼を見ると理解できる。荒々しさと覇気というものは全くの別物であると。

「おいオイ、その重要な場にオレっちを忘れてもらっちゃ困ル。本題に入れてないゾ」

瓶の水をカップに注いだアルゴが口を尖らせた。

「話が逸れてしまったな、済まないアルゴ君」

「で、話したのは何ダ？ まさかセツナの家でお茶しようってわけじゃないだ口、ヒースクリフ」

「ああ、とても重要な話だ。《笑う棺桶》ラフィン・コフィンの拠点が分かった」

カップを持つセツナの手が止まる。セツナはヒースクリフの顔を凝視した。相変わらず、目に宿しているものが読み取れない。

「情報はどこから入った」

「それが、はつきりとしていない。私が聞いたのはギルドの仲間からだが、その仲間も人づてに聞いたらしい。攻略組の間で噂が蔓延していた故に、出所は特定できずにいる」

「それは信用できるのか」

「確かに信用に値するものではない。アルゴ君にも確認を取ったが、彼女の持つ情報も同じ内容だった」

「アルゴなら、信用できるか」

コップの水を飲み干したアルゴはかぶりを振る。

「オレっちも攻略組から聞いた。確かめるにも危なっかしいからナ。確かとは言えない」

「情報の真偽を確かめるのも兼ねて、先日拠点とされる場所にメッセンジャーを送り対話による解決を図った」

こうしてセツナの家に集まっている時点で結果は予想できるが、一応聞いておくべきか。そう思いセツナは尋ねる。

「そのメッセンジャーは」

「死んだ。黒鉄宮で、死因がPKである事も確認している」

当然だな。そう思いセツナはコーヒーを啜る。話に通じる相手なら、セツナを動かす必要はない。ヒースクリフもそれは分かっているはずだ。それでも対話を図ったのは、ギルドの参謀職達がそう提言したからだろう。

あの命を尊ぶ副団長も、「場所が分かっていたのならすぐに襲撃しましょう」なんて物騒な事を言うはずがない。

「だがそれで、情報が確かであると分かった」

「その通りだ」

ギルド結成が宣言されて8ヶ月。《笑う棺桶》による犠牲者は100の大台を超えた。連中は次々と新しいPK手口を開発し、プレイヤー達を手に掛けてきた。

身勝手な犯罪集団らしく、連中の殺し方には取りまとめが無い。新しいPKを試す者もいれば、その辺のオレンジギルドと同じようにレアアイテムを狙った強盗を働く者もいる。

傍から見れば狂信者の集団だ。だがセツナは思う。彼等もまた自分達と同じ人間であると。彼等の仲間と接触し、始末してきたセツナだからこそ分かる。

彼等にも願いがあつた。

彼等にも苦悩があつた。

彼等にもエゴがあつた。

そして彼等にも罪があつた。

「明日、我が血盟騎士団と聖竜連合を初めとして、攻略組による討伐隊を組む。目的は《笑う棺桶》ラフィン・コラインメンバー及びリーダーであるPOHの捕縛だ」

「討伐隊の人数は」

「計50人だ。ボス攻略に臨む戦力で、我々は殺人ギルドを壊滅させる」

「アルゴ君」と、ヒースクリフは頬杖をついているアルゴへと視線を向けた。

「君は《笑う棺桶》に関する情報を持っているかな？」

「ああ、持っている。前からセツナに頼まれていたからナ」

「その情報を、私に譲って欲しい。準備はできるだけしておきたい」
「そのためにオレっちを呼んだわけか。でもタダでやるわけにはいかない。こちらも商売なんでネ」

ヒースクリフは苦笑する。ちらりとセツナを横目で見る彼の意図を汲み取って、セツナはアルゴに告げる。

「アルゴ、俺にギルドの情報を渡してくれ」

アルゴは恨めしそうにヒースクリフを睨むが、オブジェクト化させた紙の束をセツナに渡してくれた。

「あんたがここにいる時点で、金を取るところだゾ」

「済まないね。感謝するよ、アルゴ君」

セツナは紙束をめくる。《笑う棺桶》ラフィン・コフィンメンバーの名前と特徴、記録結晶で撮った写真。写真が無い者は似顔絵。軽く目を通し、セツナは紙束をヒースクリフに渡した。

「それで、その討伐作戦には俺も参加するのか」

「そうだ。だがセツナ君には、しんがりを務めてもらいたい」

「まさか、俺が隊を率いるのか」

「いや、そうではない。隊が拠点に向かうよりも一足先に、君には拠点を襲撃してもらおう」

「俺一人で、奴らの戦力をできるだけ多く削いでおけと」

ヒースクリフは首肯した。セツナの技量を認めているからこそ、その特攻じみた命令をする事ができる。セツナなら一人でギルドを襲撃し、生還できると。

「あのギルドがどれほどの規模か分かっていない。討伐隊よりも数が多ければ、我々にとっても分が悪い」

彼の言葉を聞いたアルゴが口を挟んだ。

「《笑う棺桶》で手練れはP.O.Hだけだと思ってるのか？ 赤眼のザザにジョニー・ブラック。他にもハイレベルのプレイヤーがいるんだゾ」

「彼ならできると、私は信じている」

「あんたの口から、そんな非合理的な言葉が出るなんてナ」

「私だって、何かを信じたいと思うさ。私達が勝てる事も、このデス

ゲームが終わる事もね」

ヒースクリフはセツナが淹れたコーヒーを飲む。その不味さに顔をしかめる事はなく、ひと時の安らぎを感じているかのようになり、ふつとため息を吐いた。

「さて、私はそろそろ行かせてもらおうよ。これから討伐作戦の会議で、この資料を皆に配らなければならないのでね。セツナ君、場所と時刻は追って連絡する。今日はゆっくりと休んで、明日に備えてくれたまえ」

椅子から立ち上がったヒースクリフは、フードを深々と被りドアの奥へと消えていく。有名人である彼が街を出歩くには、ああして顔を隠さなければならぬ。裏で死神と呼ばれるセツナと通じている事を隠すために。

窓から見える灰色のローブを着たヒースクリフは、他の人々よりも圧倒的な緊張を感じさせる雰囲気を感じていた。

「まったく聖騎士様メ。搾り取るだけ搾り取られタ……」

「で、あんたはいつ出ていくんだ」

「せっかく来てやったの二、それは無いだ口。酒だサケ、酒でも飲まにややってらんない」

テーブルにうなだれるアルゴの前に、セツナは紅い液体が入った瓶をオブジェクト化させる。

「おオ！ これは上物じゃないカ。お前さんこんなモン持っておきなから飲まないとは勿体ない」

「あんた、酒を飲むような年なのか」

「少なくとも、オレっちはお前さんよりもオネーサンだゾ」

「そうか」

とても成人、それどころか17歳になったセツナよりも年上には見えない彼女の笑みを無視して、セツナはオブジェクト化したグラスに赤ワインを注ぐ。

「お前さんこそ酒を飲む年じゃないだ口。それとも若作りカ？」

「本当にアルコールが入っているわけじゃない」

セツナは自分のワインを注いで、アルゴとグラスを合わせる。小さ

な音と共に、中身が振動で僅かに揺れた。

「明日の勝利を祈つて」

アルゴはそう言うのと、グラスの中身を一気に煽った。ワインとはそういう飲み方をするものだろうか、まだ酒の事を知らないセツナは思う。

セツナは自分のグラスの中で揺れるワインを見つめる。その真紅の色はこの世界で流れない血によく似ている。一口だけ飲んでも、口の中には苦味が広がっていくばかりで、血の味はしなかった。

喉が渴いたなど、セツナは思った。

◆ 「セツナじゃねえか！」

頭にバンダナを巻いた男に話しかけられたのは、第50層アルゲードの街を散歩していた時だった。

アルゴとワインを1本開けた後、明日まで持て余した時間を潰す事にした。明日に備えてフィールドでレベル上げをするのもいいが、昨日鍛冶屋に研磨してもらった剣の切れ味は明日存分に発揮してもらいたい。

「久しぶりだなあ。元気してたか？」

凶々しく、武士然とした格好の男は自分より背が低いセツナの肩を叩く。

「あんたは……、クライン」

「おお、覚えててくれたか！ あれから俺達も死に物狂いで戦って生き残ったぜ！」

クラインの周囲を、彼と同じく戦国武将のような装備を整えたプレイヤーが囲っている。このファンタジー調の世界で、彼等のような出で立ちはアルゲードの猥雑な街でも目立つ。

このような異彩を放つ装備はNPCショップで買えるような代物ではない。この世界で華美な装飾や個性豊かな装備品はプレイヤーメイドの証であり、それを持つ者はハイレベルである事を無言のまま主張している。

「なあ、これからメシ行かねえか？ 前に助けてもらった礼によ」

以前のように即断ろうと思ったが、セツナは「ああ」と、和風の集団に着いていった。暇潰しには丁度良い。それだけだった。

中華風の店で、クライン達のギルド《風林火山》のメンバー達は運ばれてきた料理を貪り食った。次々と料理を注文し、まるで最後の晚餐を言わんばかりに無いはずの胃袋に納めていく。この世界ではいくら食べても嘔吐しないが、だからといって食べ過ぎというのはやはりよくないとセツナは思う。パン1個でも食べれば空腹は消えるのだから、食費を削って装備代に当てるのがベストだ。

「少しは落ち着いて食ったらどうだ」

炒飯、に似た料理をレンジで掬いながら、セツナはクラインに言った。クラインは口に肉まんらしき食べ物を入れたまま、もごもごと答える。

「何か、食わねえといけねえって思っちゃまうんだよ。データを食ってらって分かつちやいるけどな」

食べても胃が満たされるわけじゃないと分かっているけど、やはり味覚まで再現されたS A Oで食事は数少ない娯楽でもある。いくら環境に慣れたとはいえ、やはり誰しも娯楽は欲しいのだ。

「ぶはー、食った食ったー」

腹をさすりながら、《風林火山》の面々は満足した顔でお茶を飲む。

「いつもこんなに食っているのか」

「いや、今日は特別だ。明日でかい戦いがあるんでな、願掛けにたらくく食つとこうってこった」

でかい戦い。

そのクラインの言葉の意味を、セツナは汲み取った。ボス攻略をするなんて話は聞いていないし、クエスト攻略にわざわざ願掛けをする者もいない。

《風林火山》も、明日の討伐戦に参加するのだ。

メンバー6人の小規模ギルドだ。1人でも欠けてしまったら大きな痛手だろう。

「何かこういうのって、死亡フラグっぽいっすよ」

メンバーの1人がクラインを茶化す。

「うつせ！ 死んでたまるかってんだ。誰も死なせやしねえさ」

他愛もないやり取りだが、クラインの顔は真剣そのものだった。

「俺たちやあこの地獄みてえな世界で、ここまで生き残ってきてんだ。1人でも、死んだら許さねえ」

無精髭を生やした野武士のような顔つきを引き締め、クラインはメンバー全員に告げた。メンバー達も黙って頷く。この男は、今まで仲間を必死の思いで守り続けてきたのだろう。その強さをセツナは素直に尊敬する。セツナは守り抜くと誓った人1人すら守れなかったのだから。

「そーいやエギルから聞いたんだけどよ。セツナ、お前エ血盟騎士団なんだってな」

「いや、ギルドは抜けた。今はソロだ」

クラインはばつが悪そうに顔をしかめた。このデスゲームで属した集団を抜けるのは自殺行為に等しい。仲間もなく、孤独に死線を潜っていく事を強いられる。無論好き好んでギルドを抜けるような物好きはいない。ギルドを抜けるのは余程の理由だ。実際、セツナは余程の理由があつて除名された。

「これからソロでいくつもりか？」

「ああ」

クラインは物苦しそうな視線をセツナに向ける。

「ソロプレイヤーは利己的だと、あんたは思うのか」

「いや、思わねえよ。1人でいける奴は1人でいけばいいさ。でもよ、どうしても見てらんねえんだよ。そういう奴は」

「ソロの知り合いがいるのか」

「ああ、キリトって奴なんだがよ」

またキリトか。何となくだが、彼の名前が出てくるような気がした。

「無茶ばつかする奴だよ。まるで自分を罰してるみてえに、危ねえとこにホイホイ行きやがる」

「あんたのギルドに入れようとは思わなかったのか」

「思ったさ。思ったけどよ、あいつあ1人で全部抱え込むって決めた

んだ。1人で強くなって、ゲームをクリアさせるってな。男の決めた事に口を出しちやいけねえ」

随分と古風な考えの持ち主だと思った。女性の社会進出が進んだ現代で、男の美学というものが嘲笑されるようになったのはいつからだろうか。だが、この男の決断をあざ笑うことは誰にもできはしない。苦悩の末の決断なのだろう。

「攻略組が強さを求める理由はそれぞれだろうよ。現実に戻りてえとか、最強って名声が欲しいとか。俺だって、女の子にチャホヤされてえ。でも俺は思うんだよ。攻略組の皆がゲームをクリアさせてえのは、この世界にいる皆を解放させてやりてえっていう善意だってよ」「善意か……」

「ああ、俺もこいつらを守りてえ。家に帰ってアツアツのピザを食いまくりてえよ。俺はそのために戦ってる」

そして、クラインは眉間に刻んだしわをより一層深くした。

「だから俺は、オレンジプレイヤー共は許せねえ。攻略の邪魔をして、人の命を軽く見る連中をな」

攻略を目指す根源は善意。

そう説くクラインは、紛れもなく善意に突き動かされているに違いない。だからこそ、メンバー達は彼に着いていけるのだろう。

以前読んだ小説に、人間は善い行いをするために生まれると書いてあった。

人間のみに限らず、生物とは利他的な行為を取るものである。

他の生物の死骸を分解し、巣へ列を成して帰るアリ。

巣を敵から守るために、毒針を刺して自らの生存を放棄するハチ。

個のレベルを超えて、群れに貢献する昆虫の種は多い。人間ほど複雑な思考を持たない昆虫にとって、群れを守る事は純粋に主全体を守る事。

人間の社会で利他行動を取る事は良い事。小学校の頃、学校で良い行いをしましょうと教わった。担任はなぜなのか理由を言わない。幼い生徒からしつこく問われれば、少しだけ悩んだ末に「相手が喜ぶから」と無理矢理に納得させて。

自分達はその教えを本能として脳に組み込まれている。それに疑問を持つことなく、自分が損をする事になっても他者のために行動する事に喜びを感じ、幸福を感じる。

それは、人間社会ではそうしなければ生きていけないから。

純粹に自分のためだけに生きていければ、個の利益は膨らんでいく。だが数が増えてコミュニティが形成されれば、そこに属し自己を犠牲にした方が安定性を得られる。

コミュニティは、利他行動は、善とは、生物の進化における適応の産物。

なら、それを妨げる利己的行動はどうだろうか。

自己のために他者を蹴落とし、殺すというのは、集団においては自分の立場を悪くして孤立する事。生物においては最も原始的で野蛮な本能だ。

でも、その残虐性は確かに必要だった。いつの時代かは分からないが。

膨れ上がった集団を維持するだけの食糧や資源を維持できなくなった時、種が生き残っていくには同族を殺して数を減らさなければならぬ。

人間の古い機能は、人類がまだ食糧生産をコントロールできなかつた時代の名残。

利己的行動、暴力、強姦、殺人、虐殺。それらもまた、進化における適応の産物。

コミュニティを、社会を形成し、維持し続けるために抑圧された本能。

POHは、仲間達の古い本能を刺激していたのだろうか。

奪わなければ生きていけない。

殺さなければ生きていけない。

女を強姦して孕ませなければ、種は存続できない。

人間の脳には、善と悪の両方が組み込まれている。

一見矛盾しているその2つの本能は、どちらも生きていくため。種を存続させていくため。

男女が愛し合って体を重ねても、男が嫌がる女を無理矢理犯しても、子供は生まれる。

愛も、暴力も、本能に規定されているのだろうか。

目の前にいるクラインの言葉は、本能によって規定されているのだろうか。

だとしたら、自分はどちらの本能が表層に現れているのか。セツナは思考を巡らせる。

俺が犯罪者を殺すのは、ナミエの無念を晴らすため。ナミエを愛しているから。

ナミエを愛したのは、種を存続させたいという本能だったのか。

俺はたくさんの物語を観て読んできたが、どうしても恋愛というジャンルだけは好きになれなかった。

恋愛感情とは性欲によってもたらされるもので、画面や文字の中にある登場人物達が本能に支配されていると思ってしまったから。

俺はまだナミエを愛している。それは断言できる。

でもそれは、決して本能だけで収まるものではないはずだ。俺が本能に突き動かされていたのなら、相手がナミエじゃなくても良かったはず。純粹に種を存続させたいと願うなら、その辺にいる女に見境なく欲情しているに違いない。

ナミエじゃなくてはならなかったのだ。俺が愛という本能を向けるのは。

でも、そのナミエはもういない。俺にはもう、殺戮の本能しか無いのだろうか。

俺達は他者を慈しみ、愛するよう遺伝子にプログラミングされている。

同時に、俺達は他者を傷付け、殺すようにも遺伝子にプログラミングされている。

古い器官でも、現代では必要なくなっても、確かにそれは俺の中に存在している。

◆ 血の味は、その本能の現れなのだろうか。

並べられた指輪。宝石が付いた豪華なものから飾り気のないシンブルなものまで。

「兄ちゃん、人生で一番大事な買い物だ。いつそのこと一番高いの買っちゃまいな」

中年の露天商は大粒のダイヤモンドのような指輪を眼前に突き付けてくる。

「そんな金ありませんよ」

背後から、彼女は呆れた声色で呟く。

「指輪なんていいのに……」

「いいや、買う！ 絶対に！」

半ば意地になって、テーブルの上に並べられた指輪の値札を吟味する。露天商はため息をつき、銀色の光沢を放つ飾り気のないペアリングを差し出す。

「新婚さんに意地悪はできねえや。一番安いもんだが、これでどうだ？」

「値段は？」

「ペアで5000コルな」

「か、買います！ それ！」

「お幸せに」という露天商の声が、路地の向こうから聞こえた。

宿屋に戻ると、彼女が差し出す左手を持ち、その細い薬指に指輪をそっとはめる。

彼女はそれを大事そうに、右手で包み込む。

「安物で、ごめんな」

「ううん、嬉しい」

彼女はそう言って笑顔を向ける。

俺はこの笑顔を忘れない。

絶対に、忘れてなるものか。

「ありがとう、セツナ」

◆

こつ、こつ、こつとブーツが湿った床を小さく鳴らす。底が見えない迷宮区に浮いた床を、セツナは歩く。

底の見えない奈落へと伸びる柱が、内側からおぼろげな光を放っている。浮遊する床をタイムミングに注意しながらジャンプして渡り、マップデータを頼りに進んでいく。

セツナのスキルで索敵できる範囲に、今の所プレイヤーの反応は無い。万が一のために用意した結晶アイテムが入っているか、ポケットの中を探る。固い感触が指に伝わってきた。

アルゴの情報によれば、あのケロイドの男は殺人ギルドに属している。だからといって、果たしてこの先に奴がいるという確証は無い。これは決戦だ。

セツナとオレンジプレイヤー。その中で凶悪であると自称するレッドプレイヤー達との。

望んでいた事のはずなのに、セツナの気分が高揚する事は無かった。今朝はいつも通りの時間に起床し、いつも通りのレストランで朝食を食べ、いつも通りの黒コートを着て、ヒースクリフからのメッセージに書かれていた層の迷宮区へと足を運んだ。

ヒースクリフは今日の作戦には参加しないらしい。彼がいれば百人力だが、万が一という事もある。最強ギルドのリーダーでありプレイヤー達の希望であるヒースクリフが、薄汚い犯罪者に殺されるなんて事はあってはならない。

セツナは至って冷静だ。冷静に目標を殺す事を思索し、そこに喜びも悲しみも介在していない。完全に普段通りだ。

多分、この任務が最後とは思えないからだ。最凶最悪のレッドギルドを潰したとしても、セツナの仕事はこれからも続く。全てのオレンジプレイヤーを殺すまで、セツナの仕事は終わらない。

この気持ちを形容するとしたら、どんな言葉が相応しいか。これまで観てきたどの映画のシーンに似ているか、セツナは見つけ出す事ができない。

記憶を探っているうちに、目的地へと着いてしまった。迷宮区の最深部、ボスの間に。

フロアボスは一度しか現れない。ボスが倒された後の部屋は寄る

価値なしと放置される。

情報通り、そこには数十人規模のプレイヤー達がいた。ある者はウィンドウを操作し、ある者はソードスキルを反復練習し、またある者は何もせず薄ら笑いを浮かべている。

セツナは彼等の装備を見やる。殆どの者がフード付きのポンチョを身に着け、フードで顔を覆い、中には仮面や布袋を被る者もいる。それがホラー映画の真似事のように思えて仕方ない。

布袋を被ったジョニー・ブラックは「13日の金曜日」の2作目でのジェイソンに見えるし、骸骨の仮面から赤い眼を覗かせる赤目のザザは「ターミネーター」のT-800に見える。

ホームレスでもまだ清潔に思える彼等の手甲や靴に、笑みを浮かべる棺桶のエンブレムが見える。

今年に入って8ヶ月で100人以上をPKした殺人ギルド。

オレンジプレイヤーの中でも凶悪であると自称するレッドプレイ

ヤー集団。

ラフィン・コフィン
笑う棺桶。

彼等は自分達の縄張りに入ってきたセツナに気付いた。

「なあ、こいつどうやって殺す?」

「この前のさあ、新しく見つけた技、あれ使おうよお!」

セツナは広いボスの間にいる彼等をざっと見渡す。少なくとも50人以上はいる。全員のカーソルがオレンジのようだ。グリーンは見当たらない。

「聞きたい事がある」

セツナの声がボスの間の壁に反響し響き渡る。この中にいるかもしれない、ケロイドの男に向けてセツナは問う。

「去年の2月、27層で少女を殺した事を覚えているか」

訳が分からない。何を言っているんだ。無言のまま、彼等はそう言っているように見える。やがて、群衆の中から「知らねえよ!」という声が聞こえた。

そうか、知らないか。

セツナは震える。ボスの間に笑い声が響いた。《ラフィン・コフィン笑う棺桶》の面々

はその音源に視線を向ける。困惑の視線なのか、軽蔑の視線なのか、それとも好奇の視線なのか。セツナにはどうでもいい。

セツナは笑った。天井を仰ぎ、両手を広げ、喉が焼けそうな程に声を張り上げて。口が裂けそうな程に大きく開けて。笑い過ぎて吐き気がしたが、それでも笑い続けた。

ナミエ、聞いたか。

こいつらは、俺達の苦しみを知らないそうさ。

そうだろうな。こいつらにとって、お前は100人以上殺した人間の1人なんだからな。

俺が罪を自覚しているのに、こいつらは罪を自覚していないんだ。滑稽だろう。

自分で勝手に背負っている俺が馬鹿馬鹿しいだろう。

ああ、喉が渴いた。

渴いて渴いて渴いて仕方ない。

込み上げてくる笑いを空っぽになるまで吐き出して、セツナは頭を垂れる。そして、上目遣いに殺人鬼達に視線を向けて呟く。

「それでいい……」

群衆の中から1人が剣を抜いて歩いてくる。それを視界に収めながら、セツナはフードを被る。対峙する彼等と同じように。

「それでこそ、俺は心おきなくお前達を殺せる……」

「何をゴチャゴチャ言ってるんだ!」

近付いてくる1人が、刃こぼれした剣を振り下ろしてくる。圏内に行けないから、殆ど手入れされていないのだろう。

セツナはハーディスクラウンの柄を握り、目の前にいるポリゴン体の首に抜いた刀身を滑らせる。体から離れた顔が、「え?」と呟くのが聞こえた。一呼吸置いて、体と頭が砕け散る。

ごくり。

セツナは唾を飲み込む。口の中に広がる血の味が、喉を伝っていく。

まだ足りない。まだ渴く。

セツナは剣を左手に持ち替え、右手で鞘をホルダーから抜いた。鞘

の先端に付いた刃が、ボスの間の松明の炎を反射して妖しげな光を放つ。

右手に剣を、左手に鞘を。

擬似的な二刀による剣技。

エクストラスキル、《疑似ぎしにとりゆう二刀流》。

「イツツ・ショーウ・タアーイム！」

艶やかな美声が、オレンジカーソルの群れから聞こえてくる。

それを開戦の合図とするように、《笑う棺桶ラフィン・コフィン》達は一斉に駆け出した。

迫る剣。迫る斧。迫る槍。それらの目標はセツナ1人だけ。

彼等の得物がセツナの体突き刺す時、そこにセツナはいなかった。周囲を見渡す彼等に影が落ちる。

「上だ！」

そう叫んだ男の口に、落下と共にセツナはふたつの刃を突き刺す。刃に両目から体を串刺しにされた男の絶叫が耳孔を震わせる。男がポリゴンを散らす前に、セツナは次の標的に向けて跳躍する。

13、14、15。

ボスの間にダイヤモンドダストが煌めく。セツナを中心として。

消滅させた数を数えながら、セツナは彼等の顔を1人毎に見る。剣を折られた男の驚愕した顔に、鞘の刃を突き刺し腹まで捌く。

違う。

背後から迫るノコギリのような武器を鞘で防ぎ、がら空きになった胴に剣を一閃する。腹から内蔵が零れるわけでもなく、血の代わりに赤い光点が散る。その腹に、追撃として光を纏った蹴りを入れる。

違う！

目の前に現れる者を消していきながら、傷跡を持つ者を探す。

メイス使いを消した時、背中に衝撃が走った。視界のHPバーが僅かに間隔を狭めていく。

背後にいる大剣使いの得物を腕ごと斬り落とし、その顔を踏み台として跳躍した。筋力パラメータの補正によって高く飛び上がり、壁に着地しそのまま駆けていく。

「ヒール」

壁を走りながら、回復結晶を使いHPバーの長さを戻す。走りながら敵の群衆を見ると、扉へと彼等が雪崩れ込んでいるのが見えた。

セツナは壁を蹴り、落下の勢いに抵抗しながら剣を構える。着地と共に体をスピンさせ、赤いライトエフェクトを纏った2振りの刃を横薙ぎに振った。

擬似二刀流剣技《クリムゾンサークル》が描いた紅色の円形模様に触れた者達が消滅する。持ちこたえた重装備の斧使いには片手剣技《斬鉄剣》で消滅させた。

半分以上は逃げられてしまったが、それは討伐隊が相手をしてくれるだろう。

開け放たれた扉の前に立つ。退路を断たれた殺人鬼達の殺意を一斉に浴びながら、セツナは宣言した。彼等のリーダーと同じように。

「シヨータムだ」

ボスの間には、その後も悲鳴と咆哮と、時に哄笑が響いていた。それらが止んだのは、セツナが最後の1人に15連撃のソードスキルを放った時だった。

飛散するポリゴンがひとつ残らず消えていく様子を見届ける。結局、殺した中にケロイドの男は見つからなかった。

こつ、と靴が床を叩く音が聞こえた。セツナは音が聞こえた扉を見やる。通路の光を背景に、コートをなびかせた男が立っていた。

カーソルはグリーン。それ以上に、男の出で立ちの方に視線が向いてしまう。

黒い髪。黒い瞳。体のシルエットを隠す黒いコート。右手で握られた黒い剣。

「お前……」

男、というより少年というべきそのプレイヤーは、セツナの両手に握られた刃に驚愕の視線を向けている。

「ラフコフのメンバーか？」

少年の問いにセツナは答えない。セツナもまた、少年に困惑を抑える事ができなかつた。まるで鏡でも見ているようだった。

街で見る建物の窓、湖の水面、結晶アイテムの表面。それらに映る自分の顔を見ているようだった。顔立ちは似ても似つかない。少女と言っても通じる。だが彼の纏う雰囲気。暗闇を求めようとするその妖しさが、セツナに通じるものがある。セツナが犯罪者狩り続けていくうちに身に着けていったものを、少年も身に着けていた。

少年はウィンドウを素早く操作し、閉じると同時に走り出した。敏捷度が高いようで、離れていた距離を瞬く間に詰めていく。

少年が振り上げた剣を、セツナは剣と鞘を交差させて防いだ。2人の中に火花が散り、黒光りする剣の奥に少年の闘志を宿した瞳が見える。その瞳を長く見る間もなく、追撃が来た。右手の剣で鏝迫り合いをしたまま、少年は左手で白亜の剣を振り下ろしてきた。

戦慄が走ると同時に、咄嗟にセツナは少年の黒い剣を弾き、バックステップを踏んだ。少年の白い剣が空を切り、地面を叩く。

地面を蹴った少年の二刀が迫り、接触する寸前でセツナは跳躍した。空振りした少年の背後に着地し、ハーディスクラウンの刃と鞘を振るも防がれる。その衝撃で、セツナのフードがはだけた。少年はセツナの露になった顔を見て目を剥く。相手をしているセツナが思いのほか若いからか。それともセツナと同じものを彼も感じたのか。

数瞬の均衡の後、互いの剣を弾いた両者は剣をぶつけ合った。正に一進一退で、両者とも互いに攻撃をヒットさせる事ができない。

防御と攻撃を繰り返しながら、セツナは混乱を押し殺そうと少年の剣戟に集中する。

《疑似二刀流》の出現条件は分かっていない。今年の4月、何気なくスキルウィンドウを見ていたら何故かあったのだ。その頃には片手剣系統のスキルをほぼ完全習得していたため、どのスキルを修行すれば習得できるのか分からなかった。

セツナ以外このスキルを持つプレイヤーは、今のところ現れていない。だとしたらこのスキルは《ユニークスキル》と呼ばれるものだ。習得者が1人しかいない、全プレイヤーの注目集めるスキル。

下手に注目を集めるわけにもいかず、スキル修行は人目のない所で

行ってきた。まだ完全習得には至っていないが、実戦で使いこなせるようになっても危機的状况に陥るまでは使わなかった。

疑似と名前に付くのだから、もしかしたら本物の《二刀流》を持つ者がいるのではないかと予想はしていた。

その本物を相手にして、自分の剣技の弱点が浮き彫りになっていく。

《疑似二刀流》ぎじにとりゅうはあくまで疑似的なものだ。《二刀流》を形だけで再現しているに過ぎない。革製の鞘は勿論武器として使えない。スキル発動に使える鞘は木製か金属製に限られる。しかも、鞘自体の攻撃力なんて《ひのきの棒》程度で、実際の使い道は防御くらいだ。ハーディスクラウン専用に作った鞘は武器カテゴリでは槍に属すようで、刃が無いよりはましだが扱い方に難がある。使いこなせるまでかなり労力を使った。

「うおおおっ!!」

雄叫びと共に振り下ろされた少年の重い一撃を受け止める。少年は攻撃重視のようで、一撃だけでも食らえば並のダメージでは済まない。防御できたとしても、剣と鞘の耐久値が削られていくのが分かる。先に悲鳴をあげたのは鞘の方で、何度も刃をぶつけて刃こぼれを起こし始めた。

長期戦に持ち込まれると負ける。

少年の剣を弾き、間合いをとったセツナはソードスキルの構えに入る。少年も両の剣を左右に広げる。

計4本の刃が光を纏い、セツナと少年はシステムに体を委ねて駆け出した。

「キリト君ー」

その声がボスの間に届いた瞬間、両者の動きが止まった。システムに抗ったせいで動けなくなる。数秒の硬直時間が解けた瞬間、セツナは少年の腹めがけて右足を叩き込む。剣で防がれたが、衝撃までは防ぎ切れなかったようで少年の華奢な体が突き飛ばされた。

数瞬だけ宙を舞い、本物の《二刀流》使いは咳き込みながら床に倒れる。

キリト。

聞き覚えのある声から出た名前。

名前だけ俺の前に現れて、ずっとその影を感じていたプレイヤー。

そうか、お前がキリトか。

確かに、似ていると言われるのも納得できる。お前も罪を抱え、光を拒絶している身だろう。

でも、お前は俺とは違う。剣を交えたからこそ分かる。

お前はまだ希望を捨てていない。

拒絶していても、お前は光を求めている。

それを得るために、闇を斬り拓こうともがいている。

声と共に聞こえた小刻みな足音が徐々に大きくなり、やがて扉に人影が現れた。

セツナは剣を鞘に納めてホルダーに差すと、転移結晶をポケットから出して呟いた。

「転移、モレノ」

視界が光に覆われる直前、セツナの目には栗色の髪をなびかせた少女の姿が映っていた。

◆

アスナは地面に伏したキリトに駆け寄る。HPは減っていないようだ。何やらウィンドウを操作していたようだが、そんな事はどうでもいい。

「キリト君、大丈夫？」

「ああ……………」

鈍い動作で立ち上がるキリトはひどく疲れているように見えた。当然だ。さつきまで凄惨な戦いに明け暮れていたのだから。

討伐隊が《ラフィン・コフィン笑う棺桶》の拠点に向かう途中、アスナ達を取り囲むように彼等は現れた。まるでアスナ達が来る事を知っていたかのよう。彼等は問答無用で討伐隊に襲いかかり、その場で乱戦になった。

一体何があったのか、彼等は半狂乱のようだった。がむしやらに武器を振り回し、その気迫に押されて多くの仲間が犠牲になった。アスナも必死で戦った。仲間を気遣う余裕もなく、自分の身を守る事に精

一杯だった。《笑う棺桶》ラフィン・コライン側も討伐隊以上の犠牲を出し、その末に生き残ったメンバーを捕縛し戦いは終わった。

捕縛が完了してすぐ、キリトが「悲鳴が聞こえる」とボスの間へと走り出したのだ。すぐに戻ると言っていたから待っていたのだが、やはり心配になって様子を見に来た。

走っている間、アスナは妙な胸騒ぎを感じた。いや、この作戦が始まってからずっとだ。討伐隊の中に、彼の姿が無かったのだ。

それは当然な事。彼はもう血盟騎士団のメンバーではない。ソロプレイヤーに転向したとしても無名だ。

ただし、それは表向きでの事だ。

彼は必ず現れる。殺人集団を壊滅させるために、この迷宮区に来るはずだと、アスナは確信していた。

戦っている間、彼の姿が一瞬も無かったのがむしろ不安を煽った。《笑う棺桶》ラフィン・コライン達のあの狂乱ぶり。まるで恐ろしい目に遭ったかのように、怯えている者もいた。

「キリト君、あの人と戦ったの?」

キリトは剣を背中の鞘に納めながら答える。

「ああ、ラフコフのメンバーだと思ったけど、違うみたいだ」

「違うって?」

「多分、あいつはここでラフコフと戦っていた。あいつは……、死神だ」

アスナは口を固く結んだ。開けば、嗚咽と涙が溢れそうだった。

また、止められなかった。

怖れていた事が起こってしまった。

彼はまた、罪を重ねてしまったのだ。

「戦って、どうだった?」

悲哀を悟られないよう、アスナは尋ねる。キリトは「うーん」と頭をかきながら、釈然としない様子で言った。

「強かったよ、とても。でも……」

「……でもっ!」

「悲しいなって、思った」

第16話 因縁には決着を

11月に入り、デスゲームが始まってから2年が経とうとしていた。

アインクラッドで解放されている層全てに寒気が訪れ始め、もう夜は凍えそうな季節だ。そのせいか、プレイヤー達の熱も冷めつつあるように感じる。いや、あの頃は皆熱狂していた。

アインクラッド中に広まったニユースで、どこの主街区もお祭り騒ぎになり路上にはエールビールの樽が散乱していた。

《ラフィン・コフィン笑う棺桶》壊滅。

討伐隊が拠点から帰還したその日のうちに、作戦の成果を聞いたプレイヤー達が層を渡って全プレイヤーに知らせた。その知らせは数日もの間新聞の一面を飾ったそう。

皆が殺人集団の壊滅を喜んだが、討伐に参戦した攻略組の間に流れる警戒の意識は消える事が無かった。

ギルドリーダーのP.O.Hは行方不明。

他にも数人を取り逃がした事が確認されている。あのケロイドの男も討伐隊にやられてしまったのか、それとも逃げてしまったのか。分からないまま。

捕縛された《ラフィン・コフィン笑う棺桶》メンバーの処遇は、作戦前から決められていた黒鉄宮の牢獄エリアへの投獄で満場一致した。中には仲間を殺された恨みから処刑という意見もあったが、それを提言したプレイヤーは血盟騎士団副団長の叱責を受けたらしい。

あれから3ヶ月近く。

プレイヤー達はいつもの暮らしにすっかり戻っていた。はじまりの街に留まる者は慎ましく、中層に留まる者達はゲームでの生活を営み、前線に立つ攻略組は迷宮区のマップピングとボス攻略の対策を練る日々を送っている。

セツナもまた、いつも通りの生活に戻った。

いつも通りヒースクリフからオレンジプレイヤー暗殺の命令を受け、アルゴから暗殺目標の情報を仕入れ、現場へ赴き目標を殺す。

元の日常を取り戻したわけだが、変化はあった。仕事の量が目に見えて減ったのだ。以前は毎日のように仕事に明け暮れていたというのに。今は週に1度のペースで、セツナは暗殺をこなしている。暇な日は、フィールドでレベルアップのためにモンスターと戦う事が多くなった。

《笑う棺桶》^{ラフィン・コフィン}壊滅後、オレンジプレイヤー達は改心すると決めたように思えた。P.O.Hが広げた殺戮の波は引き、再び押し寄せるような事は現時点では起こっていない。

《笑う棺桶》^{ラフィン・コフィン}はカリスマだったのだ。オレンジプレイヤー達にとって。攻略組が下層に留まるプレイヤー達のカリスマであるように。連中は悪の先駆者、新時代の救世主、邪神の預言者だった。

セツナのここ3ヶ月近くの仕事は、もっぱら《笑う棺桶》^{ラフィン・コフィン}残党の始末が大半を占めていた。まるで戦後処理だ。ジェダイとシスの戦いの。

仕事が減るのは有難い。前は忙しすぎたくらいだ。だが、それと引き換えにセツナは仕事まで喉の渇きに何日も苦しむようになった。

血の味は数日の間セツナの口に残る。突然消えるわけではなく、ゆっくりとセツナの喉は渇いていく。大体、5日経てば完全に血の味は消える。渴けば、いくら飲み物を飲んでも喉が潤う事はない。

水を飲んでも、お茶を飲んでも、ジュースを飲んでも、酒を飲んでも、ポーシオンを飲んでも、モンスターが落とした体液を飲んでも、NPCならどうかと、圏外をうろついているNPCをPKした事がある。でも、血の味は感じなかった。人間であるプレイヤーを殺さなければ、血の味は出てこないらしい。

殺したという事実を認識する事で現れるのではないかと思い、試しに目標を殺す際に目をつぶった。でも血の味は現れた。彼等は死に際に、恐怖や慟哭や困惑の声を漏らして消えていく。彼等の声がセツナの目蓋のない耳へと入り込み、殺したという実感を持たせていた。

1人殺して数日というわけではない。1人殺しても、10人殺しても、血の味が上乘せされる事はない。喉が潤えば数日間。そこに殺した数は介在しない。

セツナはどうやら、フルダイブ不適合者という者らしい。全ての人間がシステムに適合できるわけではなく、脳との通信に微妙な傷害が発生し、五感の一部が正常に機能しない例が少数ながら存在するらしいのだ。セツナはあの時まで、五感は正常に機能していた。喉の渇きは水を飲めば収まり、血の味なんて感じなかった。

恐らく血の味は心因性のものだろう。どうすれば血の味を感じなくなるのか、セツナには3つしか解決法が思いつかない。

ひとつはナミエが生き返る事。

それはもはや不可能だ。SAOで蘇生アイテムは殆ど存在しない。去年のクリスマススイベントとして、蘇生アイテムを落とすボスの噂を聞いた事がある。でもそのボスは、1人のソロプレイヤーによって入手されたらしい。セツナが知るこの世界のプレイヤー蘇生法はそのアイテムだけ。アイテムがもう使われたのか、その行方は分からない。

ふたつはセツナが死ぬ事。

そうすれば全てから解放される。でもそれはできない。ナミエの仇を討つまで死ぬわけにはいかない。仇を討つ事が、セツナがナミエを愛していた事を証明してくれる。そうなれば、セツナはみつつ目を選択せざるを得ない。

あのケロイドの男を殺す。

そうしなければセツナはこの世界でずっと、たとえ現実に帰還したとしても喉の渇きに苦しむ羽目になる。

だからセツナは人を殺さなければならぬ。あの男をこの手で殺さなければならぬ。

◆

その商人用プレイヤーホームは、相場よりも安く購入できたらしい。アルゲードで売りに出されている物件は多いが、街の雰囲気にならず庶民的な粗末さが否めない。何とかリフォームを試みて一級品の家具を揃える者もいるそうだが、この街で豪華な部屋にするくらいなら別の層で家を買った方がよい。

そんな他愛もない話を聞きながら、セツナは不要なアイテムを売り

に足を運んだ雑貨屋の2階に案内された。1階はオブジェクト化された商品が所狭しと陳列されているのに対して、2階の寝室兼客間は粗末なベッドと年季の入った丸テーブルに椅子が数脚置かれただけだ。

「なかなかの代物だぜ」

いたずらに笑いながら、エギルは椅子に座ったセツナにお茶の入ったカップを渡す。

セツナの久々の来店を喜んだエギルは、「上で茶でもどうだ？」と誘ってきた。特に予定も無いため、セツナはそれを了承した。テーブルと椅子が並べられているあたり、よく知り合いをここに案内して談笑でもしているのだろう。

セツナはカップの中で揺れる青紫色の液体を眺める。

「エギル、これは何なんだ」

「いいから飲んでみる。ほれ、ぐいっと」

促されるままに、セツナはその毒々しい液体を少量だけ口に含む。飯に毒だったとしても、圈内だから効く事はないだろう。見た目に違わず、味も香りも怪しいものだった。でも、この味はどこか懐かしいと思える。

「……これは、コーラか」

「その通り」とでも言うように、エギルは笑った。

「どうだすげーだろ。この世界にコーラがあるんだぜ」

「匂いは似ているが、味は酷い」

「それなら改良すりゃあいいさ」

一体どれほどの茶葉を組み合わせたのか。酸味と苦味と甘味が混ざり合っておかしな味を醸し出している。エギルはポットからホットコーラと称するお茶をカップに注いでいる。

「いいのか、店は」

「ああ、しばらく店は休むことにした」

一体どうしたのか。店の売り上げばかりを気にしていたエギルが休業するなんて。

「何かあるのか」

「ああ。近々75層のボス攻略があつてな、それに参加する事になつた。久々に圏外に出るからな、勘を取り戻そうつてわけだ」

「あんたが呼ばれるって事は、余程の強敵か」

「クオーター・ポイントだからな。猫の手も借りたいんだろうよ」

「あんたは猫か」

「言いたいことは分かるぜ」

エギルは凄みのある、しかしどこか愛嬌のある笑みを浮かべながらホットコーラを飲んだ。

「確かに不味いな……」

「まさか飲んだのは今が初めてか」

セツナがそう言うと、エギルはまた笑みを零す。短いため息をついて、セツナはカップの中身を飲み干しておかわりを要求する。エギルは「癖になつたか?」と言いながら、カップに青紫色のお茶を注いだ。
「なあセツナ」

カップを置いてから、エギルは真剣な視線を向けた。

「クラインから聞いた。血盟騎士団を抜けたんだつてな」

「ああ」

「ギルドを抜けたお前は、ボス攻略に参加しないのか?」

「いや、団長から参加するよう言われた。ソロとして」

「そうか。お前がどれほど強いかは知らんが、あの強豪ギルドにいたんだ。心強いぜ」

ボス攻略において、第25・50・75層は《クオーター・ポイント》と大きな節目として捉えられている。フロアボスは階層を上る毎に強くなっていくが、《クオーター・ポイント》のボスは別格の強さを誇っている。第25層では《軍》が攻略から脱落する程の損害を受け、第50層ではヒースクリフが援軍を率いてこなければ危うく全滅する所まで追い込まれた。セツナもヒースクリフの援軍として、第50層ボス攻略に参加した。

そういえば、あの戦いにはキリトもいたらしい。戦いに集中していたせいで気付かなかつたが。

第75層のボスも強力であると予想されている。無論、ヒースクリ

フはセツナに攻略に参加するよう要請してきた。

「怖いのか」

「ああ」とエギルは消え入りそうに呟き、視線を落とす。

「俺だって、死ぬのは怖いさ。でもな、やらなきゃならねえんだ。ボスを倒さなきゃ、このゲームは終わらねえ。そのためなら、俺だって戦うさ。まあ、そう思ったのも最近だがな。この世界でも、幸せに生きようとしてる奴の顔見ると、何とかしてやんねえとって思っっちゃうんだ」

「あんたららしいな」

「そいつあどうかね」

エギルはホットコーラを飲むと視線を上げた。顔から真剣な表情は消えて、いつもの笑みを浮かべる。

「辛気臭くなっちゃったな。すまねえ」

「気にしていない」

「最近キリトも来なくなったからなあ。こうして茶を飲ます相手がいねえと、張り合いがねえや」

「俺は毒味役か」

キリトの近況は、セツナの耳にも入っていた。第74層のボスを《二刀流》で単独撃破し、アインクラッド中がその未発見だったスキルの話で盛り上がったものだ。2週間程前、盛大に行われたヒースクリフとのデュエルで敗北し血盟騎士団に入った事も聞いている。恐らく、セツナの欠員を埋める目的もあったのだろう。

だが妙な事に、彼のギルド入団からその近況は分からない。全プレイヤーの注目を集め、街を歩けば野次馬が集まりそうだというに、ここ最近はどここの街に現れたのか聞いていない。どこかに隠れているというのか。

「まあ良いじゃねえか。それより見ろよ」

エギルはオブジェクト化させた新聞をテーブルに広げる。今日の朝刊らしい。《アインクラッド解放軍》の解散が一面を飾っていた。

「《軍》は解散したのか」

「ああ、これで少しは下層も行きやすくなるだろ」

何気なく、セツナは記事の見出しだけに視線を這わせていく。その視線が、隅にある小さな記事で止まった。

「エギル、これは」

セツナは記事を指差した。

《死神に果たし状》11月4日、はじまりの街の中央広場で一枚のメモが発見された。メモには『死神くんへ 11月7日14時、約束の場所にて待つ』と書かれていた。現在、情報屋を営むプレイヤーを中心に死神に関する調査が進められている。

記事にはそれだけ書かれていた。エギルは思い出したように言う。

「ああ、果たし状が昨日見つかったらしいな。にしても、死神なんて本当にいるのかね。セツナもこういう都市伝説が好きなのか？」

エギルは興味なさげに、新しいお茶を淹れ始めていた。セツナは「口直しだ」と、エギルお勧めの上位ランクのお茶を飲んだ。

喉の渇きは消えなかった。

◆ 「全く、すっかりメンテに来るよう言ったのに」

不機嫌そうに、リズベットは刃の付いた鞘を手渡す。刃はメタリツクグレーの輝きを取り戻していた。

「済まないな。色々と立て込んでいた」

「もう、あんたの剣はへばり具合が分かり辛いんだから、こまめにメンテしないと折れちゃうわよ」

確かに、リズベット武具店に来るのはハーディスクラウンを作ってもらった日以来だ。完成直後に起こった出来事のせいで、彼女と鉢合わせし易いこの店から足を遠ざける必要があったのだ。仕方なく、剣の手入れは他の鍛冶屋に頼んでいた。

「うわ……、少し錆びついてるじゃない。どんだけ無茶な戦いしてたのよ」

ぶつくさ言いながら、リズベットは金床に置かれた鈍色のハーディスクラウンを掴んだ。

「本当に軽い剣ね」

その軽さに感心しながら、回転する砥石に刀身を滑らせていく。こ

の手の作業にテクニクは必要ないそうだが、リズベットは丁寧にゆっくりと研磨作業をこなしている。セツナが知る鍛冶屋の中で、リズベットは最も丁寧に武器を扱ってくれる職人だ。見た目は幼いが、火花を散らす刀身に向けているその眼差しは熟練の貫禄が出ているような気がする。

そんな事を言ったら怒りそうだなと、セツナは密かに思った。

研磨が完了した剣をリズベットは口を半開きにしながら眺めた。

「何か、赤みが出てるわね」

セツナは手渡された剣の柄を掴み掲げてみる。照明の光に当てると、刀身が微かに紅色の輝きを放っている。

「見れば見るほど妙な剣よね」

「ああ」

セツナは剣を鞘に納め、リズベットに1000コル通貨を2枚手渡した。

「ありがとう、リズベット」

「うん、最低でも10日に1度は来るのよ」

「ああ」

セツナの素っ気ない受け答えでも、リズベットは笑った。どうせなら剣を作った彼女に手入れしてもらいたいと思いい店を訪れたのだが、その笑顔は彼女に対する罪悪感をより強めた。

済まない、リズベット。

あんたが丹精込めて作った剣で、俺は人を殺していた。

これからも殺すんだ。

あんたの作った剣は、殺人のための凶器なんだ。

こんな気持ちを抱く権利は、セツナには無い。

彼女に対する罪よりも、遥かに重い罪をセツナは背負っている。

ここに来るのはこれが最後だろうなと思いつながら、セツナは工房を見渡す。ふと、壁に掛けられた写真が視界に映った。写真の中でリズベットとアスナ、そしてキリトが笑っている。

「あれは」

セツナの視線に気付いたリズベットは、「ああ」と感慨深そうに写真

に目を向けた。

「アスナとキリトが結婚の報告しに来た時に撮ったのよ。もう半月くらい前かな」

「結婚……………」

「あれ、セツナ知らなかったの？ まあ確かに、アスナが結婚したなんて知られたら大騒ぎよねえ。あ、それともショック受けてる？」

「いや、嬉しいさ」

素直にそう思った。彼女にはセツナの事など忘れて、幸せになって欲しいと願っていた。

「やっぱり嬉しいもんよね。親友が幸せになるって」

「ああ」

写真の中で、キリトはアスナの隣で所在なさげに苦笑いを浮かべている。きつと、普段はナイーブな少年なのだろう。

下手くそな笑顔だな。

俺でも前は笑顔くらいできたぞ。

せつかく掴んだ幸せだ。

必ず守り抜いてくれ。

◆

窓から見える外周から、月が覗いていた。月光に反射した彼女の体が白く光る。

「寒くないか？」

「少し…………、寒いかも」

俺はベッドで横になった彼女にシーツを掛けてやる。彼女は俺の腕をそっと掴んだ。俺は彼女に寄り添い、その細い体を優しく抱きしめる。

初めての事でかなり緊張したが、それは彼女も同じだった。俺は怯える彼女を安心させようと、ずっと手を握っていた。

「温かい」

互いの目を見つめ合った俺達は照れ笑いした。俺は彼女の唇にキスをする。

「今まで、誰かのためにバイオリンを弾くのが嫌だった」

彼女は毎晩、自分の話をしてくれた。食後のお茶を飲んでいる時や、ベッドで床に就く時に。

「小学校の頃、他の学校との交流会でバイオリンを弾く事になったの。その時はまだそんなに上手く弾けなくて、交流先の男の子が怒って消しゴム投げられちゃった」

「酷いな、そいつ」

「うん、私も泣いちゃった。それがあって、次の年から交流会はなくなったの。新しい友達ができて、皆楽しみにしてた行事だから、私がそれを壊しちゃった」

「ナミエのせいじゃないさ」

「ありがとう。でも私はずっと人前で演奏する度にその事思い出しちゃって。私の演奏で喜ぶ人がいるのになって、怖くなる」

「俺がいるじゃないか。俺はナミエのバイオリンが好きだよ」

俺がそう言うと、彼女ははにかんだ。

「セツナが聴いてくれるようになってからかな。演奏するのが好きになったの。今なら、バイオリンが好きって言える。セツナのために、もっと上手くなりたい」

彼女は俺の首に腕を回した。

「眠くなっちゃった。このまま、寝ちゃってもいい？」

彼女の髪を撫でながら、俺は優しく言う。

「ああ、おやすみ」

彼女は笑いながら、そっと目蓋を閉じた。

◆

森の木々はすっかり丸裸になっていた。地面に敷き詰められた枯れ葉を踏みながら、セツナは森を進んでいく。時折地図を広げて、自分のいる位置を確認する。あの場所は既にマッピングされていた。発見当初は秘境として多くのプレイヤーが訪れたようだが、主街区から離れている事と、《フラワーガーデン》と呼ばれる第47層が解放されてから殆どプレイヤーは寄り付かなくなったらしい。

3日前、エギルの店を出てすぐセツナはアルゴにメッセージを送った。返信はすぐに届いた。

『果たし状を置いた奴の目撃情報はない』

メツセージには短くそう書かれていた。ヒースクリフにも果たし状についてのメツセージを送った。返信が届いたのは、その日の夕方になってからだった。

『指定された日はボス攻略へ挑む。君は貴重な戦力だ。その果たし状の真偽を確かめに行く事は許可できない』

当然の返答だろう。普段は参加しないエギルでさえも駆り出される戦いなのだ。何でもボスの間は一度入ったら出られず、最悪な事に結晶無効エリアらしい。だからといって、確かめずにはいられなかった。

セツナは新聞の発行元のプレイヤーを情報屋と偽って訪ねた。現実では新聞記者だったというその中年男性は、はじまりの街で見つかった果たし状を所持していた。彼はそれをセツナに見せてくれた。直にそれを目にした時、セツナは差出人があつた男であると悟った。殆ど直感的だが、根拠はある。果たし状の紙には大きな染みが付いていた。その染みは、セツナの目に焼き付いたケロイドの形とよく似ていた。

奴は生きていた。

どこかで息を潜め、セツナと会うことを望んだ。

願ったり叶ったりだ。向こうから会ってくれらるというのなら、会ってやろうじゃないか。

そして殺す。

主街区に転移してきた頃に、ヒースクリフからボス攻略の集合場所と時間を指定するメツセージが届いた。でも、セツナはそれを無視した。集合時間をとうに過ぎてもメツセージが来ないあたり、ヒースクリフは理解してくれたらしい。諦めの方なのかもしれないが。

いくら強敵でも、あの最強の聖騎士がいれば勝てるだろう。それに、多分キリトとアスナの夫婦も参加する。ユニークスキル使いが2人もいるのだ。これで勝てなければゲームクリアなどできない。

木々を縫うように歩きながら、セツナは水を飲んだ。水が喉を伝っていくのが分かる。でも、喉の渇きは消えない。我慢できず、スト

レージにある飲み物を手あたり次第にオブジェクト化して飲み干していく。

樹の影からモンスターが出現した。森に棲む蛇型モンスター《モシー・サーベント苔むしの毒蛇》。セツナは飲み干したエールビールの瓶を投げ捨て剣を抜いた。

蛇の頭を落とし、再び歩き出す。背後で聞き慣れた破碎音が聞こえて、視界に獲得した経験値とコル、ドロップアイテムが表示された。その後も何度かモンスターとエンカウントしたが、全てノーダメージで乗り越えた。前に来た時はモンスターも強敵だったが、今となつては雑魚だ。

歩く毎に、喉の渇きが強くなってくる。とにかく血の味を感じたいという衝動を抑えつけるために、セツナはナミエの顔を思い浮かべる。

ナミエの赤褐色に輝く髪、琥珀色の瞳、細い手足、月光を反射する白い肌。

そして、彼女の奏でるバイオリンの音。

これからの戦いは、ただ喉を潤すという欲求を満たすために臨んではいけない。

ナミエの無念を晴らすために、これから奴を殺さなければならぬ。

奴をどうやって殺してやろうか。

麻痺毒で動けなくして、ナミエにしたのと同じように背中に剣を突き刺してやろうか。

それとも、セツナにしたのと同じように1ヶ月間拷問してやろうか。

木々の間から漏れる光が見えた。「約束の場所」は近い。

セツナはマップウィンドウを呼び出す。マップには1人の反応しか映っていない。ゆっくりと1歩1歩を踏みしめながら、森を突き進む。

そして、森が終わった。

あの時と同じく、唐突に。

季節は秋だというのに、そこは変わらず花が咲き乱れていた。あの時と同じように、色とりどりの花卉が外周から空へと舞っていく。

中央に1本だけ生えた樹の前に、奴は立っていた。

ぼろきれのようなポンチョ、金属製の手甲。あの襲撃時に見た、ラフィン・コライン《笑う棺桶》メンバーの多くが身に纏っていた装備品。彼等の中には完全に溶け込んで、見つけ出す事はできない。

その顔もまた、ごくありふれた顔だった。短く刈られた黒髪、程よく日焼けした健康的な肌。鋭角的な顔立ちに浮かぶ笑み。

よく見る顔だが、ひとつだけ強烈な個性がある。右頬の盛り上がった皮膚。色が濃く、まるで粘土をこねて貼り付けたようなケロイドの傷跡。

「やあ、死神くん。いや、セツナ君と呼んだ方がいいかな？」

彼は友人とでも会うようにセツナを歓迎する。黙って睨むセツナを見て、彼は肩をすくめた。

「僕の名前はゾディアーク。君なら来てくれると思っていたよ」
ゾディアーク。

その名前を聞いて浮かんだのは、実際に起こった事件を基に制作された「ゾディアック」だった。

「俺が死神と知った上で呼び出したのか」

「勿論さ。ギルドの拠点が襲撃された時、僕にはすぐに分かった。あの時の子だとね。嬉しかったよ。あんなに弱かった子が強くなって」
「ならなぜ逃げ出した。あの場で戦っても良かっただろう」

「どさくさに紛れて君を殺したって、つまらないだけさ。それに僕はまだまだ強くなる。鍛えて、君と渡り合うだけの実力を身に付けてから1体1で戦いたかった」

話せば話す程、この男の考えている事が分からない。

「あんたは殺人鬼なのか。それとも、好敵手ライバルを求める狂戦士か」

風に吹かれた花卉が、ゾディアークの周囲に舞った。花に包まれながら、彼は答える。

「どちらかというと、後者かな。この世界で殺しは、その手段に過ぎなかった」

ゾディアークは天井を仰ぐ。自分達を閉じ込める世界の蓋を。

「僕がなぜ、こんなにも戦いを求めているのかは分からない。僕は普通の家庭で生まれ育った。温かい両親に育てられ、温かい食事と寢床が用意された生活を送っていた。でもね、僕は他人を傷付けたいという衝動を抑えられなかった。それでも僕は善良だったと思うよ。両親が心配しないよう、慎重に傷付ける相手と場所を選んでいたし、自分の衝動を発揮できるように格闘家の道を選んだ」

彼は右頬の傷跡をさする。

「この傷は、格闘家だった頃に対戦相手に付けられた傷だ。僕にとっては名誉の負傷だよ」

彼はため息をついた。落胆の感情が分かりやすく、眉を潜め、口角を下げて。

「なのに、業界は僕を追放した。戦いとは命のやり取りだ。観客はそれを楽しみにしているはずなのに、誰もがやりすぎだと責め立てたよ。対戦相手を下半身不随にさせたくらいで。死ななかつただけでも僕は優しいくらいなのにね」

セツナの脳裏に浮かんだのは、あの小説だった。人間には虐殺のプログラムが存在していると説き、それを文法によつて呼び覚ます物語。

「人間に組み込まれた虐殺の本能が、あんたにはあるというのか。人類がまだ食糧生産をコントロールできなかった時代の古い機能を」

セツナがそう言うと、彼は嬉しそうに目を見開く。

「おお、『虐殺器官』か。あの作品は僕も大好きだよ。映画も観た。あの本で、僕は自分の性が正しいと証明された気がした。伊藤計劃が既に亡くなっていたと知った時は落胆したよ。人類は本当に惜しい人を失った」

そうだと、セツナは思い出す。あの小説のタイトルは「虐殺器官」だ。生々しい描写は当時中学に入ったばかりのセツナにとって刺激的だったが、その内容に惹かれてページを進めていた。

「SAOなら、僕の性を存分に解放できると思った。結果デスゲームにはなつたけど、僕はそれがむしろ嬉しかったよ。死ぬ気になれば、

人はどんどん強くなる。僕を楽しませてくれる人が増えるからね」

セツナは思い出した。デスゲームになった日、絶望する他のプレイヤー達を尻目にこの世界を受け入れた事を。

吐き気がする。同じ日、この男と似た感情を抱いていたなんて。

「でもすぐに失望したよ。この世界ではレベルが上がるだけで簡単に強くなってしまふ。攻略組にデュエルを申し込んだ事もあつたけど、誰も完全決着モードで相手してくれなかった。だから僕は思ったんだよ。相手に僕と戦いたいと思わせればいいって」

「そのために、ナミエを殺して俺を生かしたのか」

「君だけじゃないよ。カップルのプレイヤーは片方だけ殺して、生かしたもう片方は拷問した。君と同じようにね。それくらいして僕に殺意を抱かせないと、楽しめないよ」

「あんたの自分勝手な娯楽のために、何人殺したのか覚えているのか」
「自分勝手なのは君も同じじゃないか。僕を恨んでいるなら僕1人を殺せばいい。なのに君は死神としてたくさん殺してきた。それは、君の自分勝手なエゴじゃないかな？」

ゾディアークの言葉は的を射ている。認めてしまうのは癪だが、肯定すべきだ。セツナ自身、それを認めていたのだから。

「ああ、そうだな。俺にあんたを責める資格はない」

「いやいや責めてよ。君が僕を恨んでくれないと楽しめないんだからさ。僕は今日を楽しみにしてたんだよ。大体の人が泣き寝入りするか自殺するかだったのに、君は強くなったじゃないか。それは誇るべきだよ」

「望んで得た力じゃない。それに、あんたは俺を恨んでいないのか。ギルドを襲った俺を」

「ラフコフは新しい拷問を学ぶために入れてもらっただけさ。君達を襲った時の僕は小さなギルドのリーダーだったんだよ」

ゾディアークは深呼吸する。この世界を思う存分味わうように、口からゆっくりと息を吐き出した。

「この世界に来て良かった。君と出会えたんだから。彼女を殺した意味は確かにあつたよ」

セツナは爽やかに笑うゾディアークへの怒りを見つけ出す。頭に血が上っているのが分かる。現実では、きつと血圧上昇で機械が警告を鳴らしているだろう。喉の渴きが臨界点を越えた。

「そうか……」

乾いた声と共に、セツナはホルダーから、ハーデイスクラウンを鞘ごと引き抜く。鞘の先端に付いた刃を地面に突き刺す。

「なら楽しませてやる……。そしてあんたを殺してやる」

突き立てた鞘から抜いた刀身が、セツナの顔を映した。鬼、悪魔。それらの言葉が最も似合う形相の自分が、そこに映る。

右手で剣を抜き、左手で鞘を地面から抜く。

ゾディアークは「いいねえ！」と言って戯笑する。頬のケロイドが歪んでいる。彼は腰に提げたナタを抜いた。銀色の刀身が鋭く光る。

「君は最高だ！ さあ楽しもう、ショータイムだ!!」

セツナは憎悪を。

ゾディアークは愉悅を。

◆ それぞれの感情を剥き出し、両者は互いを目掛けて走り出した。

キリトは剣と盾を携えた聖騎士を見据える。

「他人のやってるRPGを傍から眺めるほど詰まらないことはない」

紅衣の聖騎士は無表情のまま、キリトに視線を向けている。その続きの言葉を待っているかのように。

そしてキリトは告げる。

「……そうだろう、茅場昌彦」

編 完

前

番外編

2023年11月

森の葉が落ちた木々を吹き抜ける風が髪を揺らす。夜になると寒さが厳しくなってきた。ふっと息を吐き出すと、吐息も白みはじめる。

白い息まで再現するとは。何気ない行為も、ゲームの世界での動作と考えると驚くべき再現度だ。

「フライデー、ビール持つてるか？」

フライデーと呼ばれた少年が、隣を歩く男にオブジェクト化した瓶を投げ渡す。「おっと」と危うい手つきで掴み、にたりと趣味の悪い笑みを向けてくる。

「お前酒を飲む年なのか？」

「ここではな」

「ほう、ここでは」

男は上機嫌に栓を、抜き瓶をあおる。口の端から黄金の液体が漏れて不潔な無精髭の生えた顎を伝い零れていく。現実では何かあると酒を飲む習慣があったのかもしれない。

「じゃあ俺はワイン開けるぜ」

「おい、そりや上物のやつじゃねえか！」

「いいじゃねえかタダで手に入ったんだからよ」

前を歩く3人がルビー色の液体が詰まった瓶を取り合い、それを見る無精髭の男は喉を鳴らしてビールを飲んでいる。屁のように汚いげっぷをして、中身が残り僅かになった瓶をフライデーに寄越した。「お前も飲めよ」

抵抗は見せず素直にフライデーは残りの液体を全て飲み干した。

「ようしもう一本！」

アイテムストレージをスクロールしてお目当てのものを探している間に、フライデーは空になった瓶を後ろへと投げ捨てる。かさりと、落ち葉の上に着地する音が小さく聞こえた。

かさり、かさり。

男の手から実体を得たばかりの瓶が滑り落ちる。栓が抜かれた瓶が中身をぶちまけ、落ちた先の土を濡らす。男の意識は早くもお陀仏になった瓶ではなく、自分の顔の真下——喉元から突き出した鈍色の刃へと向けられている。

男は何か言いたげだ。恐怖なのか。文句なのか。自分の喉から出てきた刃を虚ろに見つめ、さっきはビールを垂らしていた口の端から唾液を垂らしている。

刃は男の首の中で捻り、外側へと切り裂く。研ぎ澄まされた切れ味で素早く。頸動脈を切断されたから血が勢いよく吹き出るはずだが、生憎仮想世界で血は流れない。代わりに申し訳程度の赤いライトエフェクトを撒き散らしている。

現実なら死んでいるはずの傷だが、それでも男は生きていた。この世界で生死の境を決めるのは出血量でも酸素量でもなく、緑色のHPバーだ。ゾンビみたいなグロテスクさを醸しながら、男はバランスを失った頭を産まれて間もない赤子のように揺らしている。

首と頭をかるうじて繋ぎとめていた皮がダガーで切断された。今度はとどめのように、男のHPが完全に消滅し、体が砕け散る。

視線を背後へ移すと、取り合っていたワインの瓶を放り出した3人が剣を取り戦っている。相手はモンスターではなく人間。突然現れた襲撃者に動揺しながらも、彼等は剣を必死に振っている。まず1人、突然現れた両手剣士の3連撃ソードスキルによって消滅する。コンマ1秒遅れて、もう1人が大柄なメイス使いのモーニングスターによって足を潰される。身動きが取れず必死の抵抗とばかりにあげた悲鳴を、メイス使いは叩き潰した。

「ワン！ 標的Cが逃げる」

ダガー使いが叫ぶ。フライデーは腰に提げた剣を抜く。木々を縫うように走り出した男に焦点を合わせ、構えを取る。

月光も射し込んでこない宵闇の中で、一筋の閃光が森を貫くように走った。閃光が掠った木々には「Immortal Object」のメツセージが表示される。片手剣技《シャープネイル》が背中に命

中した男は前のめりに倒れ、地面に衝突すると同時に砕けた。

襲撃者達は被っていたフードを脱ぐ。PKという犯罪コードに抵触する行為を行ったにも関わらず、全員カーソルはグリーンを保っている。殺した全員がオレンジカーソルの犯罪者だったから、PKしても犯罪者の烙印を付けられることはない。

「誘導ご苦労さん、セツナ」

「まだ作戦行動中だ、トウ」

セツナと呼ばれたフライデーは両手剣士を嗜める。まだ顔立ちに幼さが残る両手剣士は「はいはい」と肩をすくめる。

「番号で呼ぶって何かださくね？ もっと良いコードネームあっただらうよ」

「長つたらしいと伝達に支障をきたす」

屈強なメイス使いがぶつきらぼうに言う。トウは少し離れた所に立つ小柄なダガー使いの少年に助け舟の視線を送る。

「ワンとスリーの言う通りだよ」

「二……、フォウまでかよ。良いのかこんな味気ねえコードで」

もはや疲れたというように、スライとフォウは自分の武器を納めている。トウはお手上げと両手を振り上げた。雑談が終わったところで、フライデー改めワンは指示をする。

「街に戻るぞ」

各々がポーチから転移結晶を取り出し、一斉に掲げた。

◆

『ピースウォーカー、殲滅完了』

メッセージの送信ボタンを押すとウィンドウが上へと飛んでいく。長方形の窓は層を覆う天井へと昇っていき、小さくなって見えなくなる。視覚的な演出だが、無事に宛先へと届けてくれるだろうと安心できる。

「なあ、街に着いたら作戦終了だよな？」

「ああ」

トウ改めリーランドは「いよし！」とウィンドウを出し操作する。羽織っていた黒いマントが消滅し、剣士然とした金属製の鎧が露にな

る。

「このマントだせえから嫌だったんだよなあ」

「必要なものだ」

「セツナは普段からそんな地味なもん着てつからいいけどさあ、俺はどうも受け付けねえや。お前らも脱げよ。街じやかえって目立つぜ」

スリイとフォウがセツナに視線を送ってくる。ワン改めセツナは無言で頷き、2人もリーランドにならないマントを装備から外した。

レンガ造りの建物が並ぶ街にはまだ人々が行き交っている。もう深夜だというのに、ランプは夜の闇に抵抗するように太陽の真似事をしている。

「この街で俺らみたいなのは何人いるのかねえ」

リーランドがすれ違うプレイヤー達を見ながら感慨深そうに言う。誰も答える者はなく、悪戯に「なあ、ニコライ」と指名を付け加える。

「さあね」

フォウ改めニコライはそう短く言う。

「おいおい、会話を無理矢理終わらすなよ。オスカーは？」

スリイ改めオスカーはため息の後に「何が言いたい？」と質問を返す。

「この世界の犯罪防止は穴だらけってことだ。俺らも犯罪者だったのに、カーソルはグリーンのまま堂々と圏内に入れる。これはどういうこった」

リーランドの視線はオスカーへ。オスカーの視線はセツナへ。何とかしてくれというオスカーの助けを請う声がテレパシーのように感じ取れる。年長なんだから自分で何とかしてくれ。そう視線を送り返してみるが、オスカーにセツナの心意を読み取る超能力はないように気付くことはない。

「正当防衛だ」

仕方なくオスカーの代わりに答える。

「システム上、オレンジは襲う側。俺達グリーンは襲われる側だった」
「襲ったのは俺らだったぜ。お前が人気のないところへ誘導して、待ち伏せていた俺らが襲って一方的に殺した。俺らの方が連中よりも

「極悪だと思わね？」

「ああ。だがそれは現実むじょうでの基準だ。この世界の善悪基準は全てシステムで規定される。こうして圏内に入出力できるということは、俺達が善だという証拠だ」

「システムねえ、そういうのは区別がはつきりしてるからつまんねえや」

リーランドはまだ髭が生えない顎をさする。

「区別がはつきりしねえからこそ面白いってのに」

不意打ちをかける言葉に、セツナはどう返すか逡巡する。だがいくら思考を巡らせても見出せず言葉を紡ぐことを諦める。

リーランドはよく思索的なことを述べて意見を求めてくる。それは全て無為だ。何を知り、何を悟ってもセツナ達のやることは変わらない。

「哲学者を気取るのは程々にしておけ」

会話に疲れたオスカアの決まり文句だ。わざとリーランドが不貞腐れることを言わなければ、際限なく続く会話は終わらない。

でもセツナはリーランドをただの哲学者を気取る思春期少年と笑い飛ばすことができずにいる。セツナもあれこれと考えずにいられない性分だ。口数は正反対だが、もしかしたら似た者同士なのかもしれない。現実で出会えたら良い友人になっていただろう。

転移門広場からNPCの商店が並ぶ大通りから東に外れた閑静な住宅街。その一角に建つ一軒家が4人の拠点だ。若者たちのシェアハウス。家の中では住人達と同じ釜の飯を食い、遅くまで騒ぎ、夢を語り合う。

一見そう見えるのだが、そんなジュブナイルめいた要素は一切絡まない。システムの穴を突いて暮らし、ついさつき殺人を犯したセツナ達は善人を気取ってドアを開けて帰宅する。

「それじゃ、任務の成功を祝って」

リーランドの音頭でグラスを鳴らし、セツナ達は食卓に並べられた料理を食べる。テイクアウト可能なNPCショップの料理に感動は覚えない。もう食べ慣れた味だし、むしろ飽きてすらいる。

「団長から報酬が届いている」

セツナ達のために作られた専用のアイテムストレージから、新しく追加されていたアイテムをオブジェクト化させる。硬貨が入った小ぶりな布袋と、結晶アイテム数個。

青の転移結晶を手にとったリーランドは、反射するキューブの面を眺めて無造作にテーブルへと投げる。

「相変わらずわびしいのばかりだな」

「必須アイテムだ」

「こういうのは報酬じゃなくて支給品で呼ぶべきじゃねえか？ 転移結晶は数が人数分足りてねえし、回廊結晶に至っちゃ1個だけだぜ。しかも切らさなきゃ補充されねえ」

「よさんか」とオスカーが嗜めるも、それでもリーランドは止まらない。

「お前らはいいのかよ。俺らは危ねえ任務をこなしてるってのに、割りに合わねえじゃん」

「この家を与えられただろう」

レンガ造りの2階建て。1階はリビングとダイニング。2階は4人それぞれの寝室。プレイヤーホームとしては広く値段もかなりの額なため、この家に住むというだけでもかなりのステータスになる。

「この家は当然の対価だ。それどころか足りねえくらいだぜ。俺らはヒースクリフに逆らえねえよう縛られてんだよ」

「当然だ。俺達は暗部なのだから」

血盟騎士団オレンジプレイヤー暗殺部門。

正式名称は決められていないが、便宜上4人は自分達の所属をそう形容している。ヒースクリフによって集められ、極秘裏にオレンジプレイヤーを排除する暗殺部隊。とはいえ、そんな長つたらしい所属名を暗殺対象に名乗るなんてことはしないし、自分達でも「暗部」と省略して呼称している。

「俺達のごとは外部に漏れてはならない。団長が俺達に首輪を付けることは理に叶っている。お前はそれを分かかっていない」

「ああ？」とリーランドは語尾を上げてオスカーを睨む。

「ご立派なもんだなあ。さすが元正規団員様だ。自分の立場をわきまえてらっしゃる。騎士として聖騎士様への忠誠は変わらねえってか」
乱暴さと丁寧さが混在した口調はリーランドが激昂している証拠だ。思春期真っ只中だから、年上のオスカーに対して反感を抱くのも共感できないわけではない。

オスカーもかつては正規の団員として攻略に励んでいたが、今は前線を離れて暗部として汚れ仕事をこなしている。ヒースクリフの下で働いている期間は4人のなかで最も長いのだが、暗部として加入したのはリーランドの次で後輩だ。リーランドはどうやら後輩に説教されているのが気に入らないらしい。

「よせリーランド。オスカーもだ」

流石に止めなければなるまいと、やり取りを傍観していたセツナは2人が口論になる前に制す。ニコライは関係なしとばかりに不干渉を貫きワインを味わっている。

リーランドの矛先はオスカーからセツナへと移る。

「セツナ、お前はいいのかよ？ PKじゃ経験値は手に入らねえ。任務が終われば次の任務でレベリングしてる暇もねえんだぞ」

PKで経験値を得られる《魂を噛む者》ソウルバイカーを支給されたのはセツナだけらしい。片手だけの赤グローブを打ち明けるのは止めたほうが良さそうだ。

「現時点でマージンは十分取れている」

「でも——」

「命令だ」

命令。その便利で姑息な一言でリーランドを黙らせる。

セツナ。リーランド。オスカー。ニコライ。この順でメンバー達は暗部に参加し、最古参であるセツナが必然的にリーダーとして3人の指揮をヒースクリフから任されている。

リーランドは上下関係を重んじる律儀な面もあるため、この「命令」という言葉には従う。暗部に入る以前はパーティを組んでいたらしいから、仲間意識はそこで培われていたのかもしれない。だがゲームとしてSAOを楽しんでいた側面もあり、強化へのこだわりと報酬に

に対する不満という弊害を生んでいた。

「明日の任務に備えて、今日はもう休むぞ」

◆
?

自分にしか聞こえないアラームの音で、セツナは目を覚ます。外周から離れたところに街があるせいか、窓から射し込む朝日は弱い。

階段を下りた先のリビングで、オスカーはソファにくつろぎコーヒーを飲みながら本を読んでいる。現実で大層な読書家だったというプレイヤーが一字一句記憶しているという、「恐怖の四季」の写本。セツナは映画版の「スタンド・バイ・ミー」は見たことはあるが、原作は未読のままだ。

「起きましたか、隊長」

オスカーの上下関係を重んじる律儀さはリーランド以上だ。元正規団員としての名残か、見た目が年下にも関わらずセツナを「隊長」と呼び敬語を使う。

「俺にもコーヒーを貰えるか」

「ええ」とオスカーはもうひとつカップをオブジェクト化し、それにポットの黒い液体を注ぐ。オスカーの料理スキルは決して高いとは言えないが、セツナの貧相なスキルよりは美味しいコーヒーを淹れることができる。

「リーランドとニコライは」

そう尋ねてセツナはコーヒーを啜る。

「リーランドが早く片付けたいと、1時間ほど前に出ていきました。さつき任務が終わったと連絡が届いています」

寝ぼけているせいか気付かなかった視界のアイコンをタッチする。短く『任務完了』というニコライからのメッセージが届いている。

「俺達の担当は32層でしたね？」

「ああ。俺達も向かう」

「朝食はどうします？」

「腹は減っていない」

口数が少ない者同士の会話がそう長く続くことはなく、セツナが

コーヒーを飲み干したところで装備を整え出発する。

「この世界に銃があれば、少しは楽なんですがね」

第32層の転移門広場へ降り立ったところで、オスカーは珍しく愚痴をこぼす。一応短剣やピックといった遠距離攻撃用の武器やスキルは存在するが、ウィークポイントに命中しない限り大したダメージは期待できない。確実に殺すには、互いの体が触れ合うほどに接近し、剣で斬り刻むかハンマーで叩き潰すか。そうやって殺す感触を確かめることが必然になっていく。仕事熱心なオスカーも暗部入りして3週間が経つが、未だに対人戦に慣れているとは言い難い。

血盟騎士団に暗殺部門が結成されたのは3ヶ月ほど前だ。部門といっても結成時のメンバーはヒースクリフに拾われてギルドに入ったセツナだけだった。それが結成から2ヶ月経つと、組んでいたパーティをオレンジプレイヤー集団に壊滅させられた元攻略組のリーダーが加わり、しばらくすると正規団員だったオスカーが、そして最近になって中層を拠点としていたニコライが加わり部門と呼べるようになった。

夜、暗闇に潜み目標を音もなく正確で華麗な技で殺すプロフェツシヨナル集団。まだ4人になって間もない暗部はそんなスマートな集団とは言えず、未だに4人での暗殺はつたない。ヒースクリフから受け取る目標が昼を主に活動していれば白昼堂々殺しに行くし、実際に戦闘となれば武器の衝突音や目標がポリゴン片になる瞬間の破砕音もある。ジョブシステムが存在しないSAOで暗殺者^{アサシン}なんて仕事もなく、戦闘となるとどうしても泥臭くなりがちだ。

所詮は殺し屋のままごと。暗殺者という役目を与えられても、ゴルゴ13の気持ち分かるなんて傲慢さは持ち得ない。

元々ギルドメンバーの保護を目的とした暗部は、団員達が主に活動している上層のみならず下層や中層にも暗殺の範囲を広めている。まだフリーランスだった頃のセツナは中層を主に活動していたから、その辺のフィールドはもう庭のようなものだったし、ヒースクリフから指令を受け取れば情報屋から目標の顔や名前、活動拠点をまとめた人物像^{プロフィール}を仕入れるから、まだ任務での失敗はない。それでも不確定要

素はつきものだ。セツナが仕事上の仲間を得てから手掛けた任務15件の内スムーズに成功したのは2, 3件程度で、事前情報にあつた層で目標を見つけられずに何日もフィールドを彷徨う羽目にもなつたし、善良な通行人に目撃されて止む無く殺すなんて事態も発生した。

「団長様はどうやって情報を集めてるんだろなあ」

リーランドと初めて任務を共にしたとき、彼がそう言っていた。

確かに不思議なことだ。消極的とはいえギルド運営に忙しいヒースクリフに、どうやって中層を拠点にすることが多いオレンジプレイヤーの情報が入ってくるのか。しかし情報というものは拡散するものだ。デスゲーム開始当初で約1万人という人数は確かに多いが、国どころか市としても少ない人口といえる。しかも人数が減つても増えることのない世間は狭いもので、ニュースが入ればすぐに広まってしまう。時折街には懸賞金付きの手配書が掲示されることも、仲間をオレンジプレイヤーに殺されたという者が復讐代行を募っている光景も見かける。

仲間にゴシップ好きな者がいれば、そうした散見される情報を耳にすることは可能であり、後は情報屋に真偽を確かめれば誰だつて諜報員じみたことができる。情報収集自体は決して難しいことではない。それを気付かれないよう行うことに諜報の質が問われる。

あくまで憶測でしかないが、暗部はそういう理屈でヒースクリフがオレンジプレイヤーの情報を集めていると結論付けている。

そういつた事情でその日も、不幸な目撃者を殺す事態が生じながらも任務を終わらせた帰り。既にリーランドとの任務を終えたニコライからメッセージが届いたのは、目撃者を殺してオレンジ化したオスカーがカルマ回復クエストを終えた頃だった。

『リーランドが消息を絶った』

クエストに付き合っていたセツナがウィンドウをオスカーに見せる。オスカーは顔色を変えることなく冷静に言う。

「リストに名前は？」

所属ギルドのページを開き、表示されるメンバーの名前をスクロー

ルしていく。

「消えている。黒鉄宮に行くぞ」

行方不明者が発生した場合、まずやることは黒鉄宮の生命の碑で生存を確認するというのがお決まりになっている。

宮殿のロビーにそびえ立つ生命の碑に視線を這わせ、羅列された文字列の中から無慈悲な横線が引かれた《Real land》という名前を見つけ出す。死亡日時は11月2日7時25分。死因はPK。

実際に死の瞬間を見ていないセツナとオスカーに知ることができるのはこれだけだ。

『リーランドが死亡。日時は今日の7時25分。死因はPKであることを黒鉄宮で確認した』

ヒースクリフに報告のメッセージを送り、2人は家に戻った。家にはニコライがソファで待機していた。

「黒鉄宮でリーランドの死亡を確認してきた」

「そう……」

セツナの報告に、ニコライは落ち込んだように頭を垂れる。いつも何事も興味なさげに佇んでいる彼のこんな面を見るのは初めてだ。

「リーランドと最後に会ったのは」

「目標の暗殺に成功した直後」

ニコライは少し困惑気味に答える。ひと呼吸おいてニコライは続ける。

「セツナとオスカーに報告メッセージ送った後、リーランドはレベル上げをしたって前線に向かった。僕はここに戻ってセツナ達の帰りを待っていて、次の任務の話をしようとしてリーランドにメッセージを送ろうとしたんだけど、送れなかったんだ。一応確認はしておこうとリストを見たら、名前が消えてた」

元攻略組のリーランドは、任務が早く終わると最前線で経験値を積みに行く習慣があった。HPがイエローゾーンになるまで戦い、貴重な転移結晶を消費されることも多かった。

「任務での目撃者は」

「近くにプレイヤーはいなかった。索敵したから間違いないよ」

「そうか」

正直なところ、重要なのはリーランドに単独行動を取らせたことではなく、任務時に目撃者がいたかどうかだ。目撃者は善良なグリーンでも、次の任務での暗殺対象になる。

「隠密スキルを上げている者が、2人を目撃したとでも?」

オスカーがそう尋ねる。

「ニコライ、索敵スキルの熟練度は」

「845」

自分のステータス数値をさらりとニコライは言つてのける。

「ニコライの索敵を掻い潜るプレイヤーがいるとは考えにくい」

そこでセツナの思考は止まってしまう。思考しようにも、情報が足りなさすぎる。現時点でリーランドの死については、今日死んだこと、PKされたこと。加えて確実とは言えないが、ニコライと別れた後は前線に行ったことしか分かっていない。

ふと、視界にあるメッセージアイコンが点滅していることに気付く。セツナはそれをタッチしてウインドウを呼び出す。

「団長からだ」

セツナは文面を読み上げる。

『リーランドの死の捜査と、彼をPKしたプレイヤーの暗殺を命じる。尚、この任務は最優先事項とする』

◆
「まるで探偵だな」

事の顛末を一通り聞いて、アルゴはそんな感想を漏らす。

「んデ、オレっちに推理を手伝えって力? そりやお断りだね。こちら情報取引だけで手一杯なんだ」

「あんたに探偵ごっこをさせるつもりはない」

そう言い放ち、セツナは壁に背を預ける。

「32層を拠点にしていたワビノスケというプレイヤーは、本当に1人で活動していたのか」

「本当ダ。ワビノスケは4日前から32層の西エリアで強盗を働いてタ。1人だけって目撃情報がいくつもある」

ベンチに腰掛けるアルゴは、フードから覗く視線をセツナに向けてくる。

「奴に仲間がいテ、そいつがお前さんのお仲間を殺したと思ってるのか？」

「的外れだというのか」

「まあ、情報が少ないから仕方ないサ」

アルゴは悪戯に笑う。だがすぐに笑みは消えて、逡巡の後に言った。

「セツナ。2週間くらい前に来た客に、お前さん達の情報を売つタ」「何っ……」

セツナは険を込めてアルゴを睨む。アルゴはどうどうと両手を振る。

「慌てなさんナ。お前さんのお仲間だヨ。KOBの暗部を名乗つてタ。自分達の仕事内容を代金にしてたナ。まあ大体お前さんから聞いたネタばかりだったから金にはならんガ、一応初めて聞いた体にしたヨ。オレっちとお前さんの仲だからネ」

アルゴは人差し指を自分の唇に当てる。アルゴの協力を得ているのは他のメンバー達には秘密にしているから、こういった配慮は有難い。欲を言えば黙っていてほしかったが。

「そうか、助かる。それで、どんな情報を売つた」

「KOBメンバーの経歴をまとめた名簿を作るよう頼まれタ。噂とか憶測とかでも構わないってナ。結構作るの苦労したヨ」

「それには俺達の情報も入っているのか」

「ああ、入れタ」

あっさりと言い放つ。流石は鼠のアルゴだ。自分のステータスすら売るといふ噂は伊達じゃない。

「でも一応、暗部のことは伏せといタ。オレっちにもヤバいつて分かるからナ」

「その名簿を買った奴の名前は」

「名前は名乗らなかつたナア。暗部のネタだけで団員名簿なんて割に会わなかつた力。しくじつタ」

「そいつが買った名簿、俺にも貰えるか」

「いいヨ。何冊か増刷しといタ」

アルゴはオブジェクト化させた本をセツナに手渡す。茶色の表紙にタイトルは書かれていない。

セツナはページを捲る。まず最初に目を通すのは自分の経歴。今までの商売で集めた乱雑な情報の中からピックアップした苦勞が窺える。

《セツナ》

2023年8月、KOBに入団。ギルド入団以前の経歴は不明。

傍から見れば、セツナの経歴はこの短い文章で成り立ってしまうことになる。我ながら随分と素っ気ないと思うが、現実でも1人物の人生なんて生没年と学歴と職歴だけなのだからこれでも彩りがあるほうだろう。それに余計なことを書かれるよりはずっといい。

「今回の事とは無関係かもしれないガ、一応伝えとク」

それだけ言つて、アルゴは街中へと消えていった。

ホームに戻つても、セツナはオスカーとニコライに名簿のことを黙っていた。この2人——既に亡きリーランドかもしれないが、暗部のことを嗅ぎ回っている者が内部にいるかもしれないのだ。ただでさえリーランドのことで仕事に滞っているというのに、内部でのいざこざに振り回されるのは勘弁願いたい。

「そういうえば、ストレージの結晶アイテム切らしてたよね」

ソファでウインドウをスクロールしていたニコライが、戻ってきたセツナに言った。

「ああ、団長に補充を頼んでおく。進展はあったか」

「何もないよ」

「オスカーは」

「ニコライと同じです」

「そうか。俺はもう休む」

「お休みなさい」と、野太くも丁寧なオスカーの声を聞きながらセツナは階段を上る。コートを装備から外し、ベッドで横になるとアルゴから受け取った名簿を開く。

《リーランド》

2023年10月、KOBに入団。ギルド入団以前は前線で友人4人とパーティを組んでいたが、オレンジプレイヤー集団に襲撃され1人生き残る。

《オスカー》

2023年5月、KOBに入団。入団以前はソロプレイヤーとして活動。

《ニコライ》

2023年10月、KOBに入団。第9層を拠点としていたオレンジルド《オルペウスの琴》のメンバー。2023年8〜9月の間に《オルペウスの琴》がフラグMob戦で全滅し1人生き残る。



「一応、現場検証はしておきましょう」

翌朝、朝食の席でオスカーがそう提案してきた。

ニコライによるとリーランドは最前線の第46層へ行くと行っていたようで、現場と思われる迷宮区へと足を運んだ。

「リーランドの剣でも回収できればいいのですが」

オスカーはそんな期待を口にするが、アイテム目的のオレンジプレイヤーならPK時にドロップしたものは全てその場で回収する。運良く回収を逃れたとしても、最前線の第46層に足を運ぶ攻略組はステータス向上に邁進するもので、業物と自慢していたリーランドの剣はラッキーな落し物として別の手に渡っているに違いない。

「妙だよな、最前線で死因がモンスターじゃなくてPKなんて」

何度目かのエンカントの後、ニコライが獲得経験値を確認しながら言った。

「何故そう思う」

セツナが聞くと、ニコライは「分かってるくせに」と言いたげに半ば呆れた表情を見せる。

「オレンジプレイヤーは大体中層にいるよ。モンスター相手じゃ敵わないからプレイヤーを狙うのさ」

「詳しいんだな」

「何、僕を疑ってるわけ?」

薄暗い迷宮区の松明が、ニコライの眉根を寄せた表情をおぼろげに照らす。

「いや、疑っていない。多分、リーランドが死んだのはここじゃない」「どういうこと?」

オスカーとニコライの視線がセツナに集中する。

「確認したいことがある。リーランドが死んだ日の結晶分配はどうなっていた」

「転移結晶が3個しかなかったから、リーランドには代わりに回廊結晶を渡した」

ニコライの言葉でセツナは確信する。

「リーランドはレベリングの途中で窮地に陥り、回廊結晶を使って脱出した。その転移先で殺された」

「しかし隊長」とオスカーが口を挟む。

「回廊結晶の出口にはタフトを指定していたはずです。圏内でどうやってPKをするのですか?」

「オスカー、32層での任務で目撃者を殺したな」

突然の切り替えに戸惑いながらも、「ええ」とオスカーは頷く。

「あの目撃者はリーランドだ」

オスカーは拍子抜けして口を半開きにする。何か言いたげだが、言葉が詰まっているようだ。

「あんたは分かった上で殺したんだろ」

こればかりはニコライも驚いているようで、オスカーを凝視している。当のオスカーは「違う」とうわ言のように呟いている。

「リーランドは暇さえあればレベリングに行く習慣があった。いつもギリギリまでダンジョンにこもって結晶で脱出するのを利用して、出口を俺達のいる迷宮区に指定した回廊結晶を渡した」

第32層の任務でセツナはオスカーが目撃者を殺す現場を直接見ではない。目標と交戦した際、オスカーが「見られました」と目撃者の追跡へと向かった。目標を暗殺し、オスカーを追いかけたら既に彼は目撃者を殺害していたのだ。

「リーランドが転移した迷宮区で、あんたは指定しておいた転移地点に行つてあいつを目撃者として殺した。レアアイテムにがめついいつのことだ。分配のときに貴重な回廊結晶を喜んで受け取つただろう」

「真実なのかそうでないのか。さつきまで動揺を演じていたオスカーは焦りも絶望も見せず無表情になる。数秒の沈黙。それが途方もなく長く感じる。オスカーはその沈黙を静かに破る。

「ええ、隊長の仰る通りです。なぜ分かつたんです？」

「消去法だ。ニコライも疑つていたが、確証はこれだ」

セツナはポケットから1冊の本を取り出す。アルゴから受け取つた血盟騎士団の名簿。

「鼠のアルゴから、暗部の誰かがギルドメンバーの情報を買ったという情報を俺も買った。6月と7月に、リーランドと同じようにレベリング中に死んだ団員が3人いる。あんたは、これが初めてのPKじゃないだろう」

「ええ、全て正しいです。まさか隊長が鼠と取引をする仲だったとは」「この名簿を作成するよう依頼したのはあんたか」

オスカーは答えず、代わりにストレージからセツナと同じ本をオブジェクト化する。

「なぜ殺した」

セツナは問う。状況でオスカーが容疑者として浮かび上がったはいたが、その動機については全く思い当たる節がなかった。リーランドの死の前夜、彼と口論を繰り返してはいたが、それを理由に殺すほどオスカーは子供ではない。

オスカーはゆっくりと回廊を歩きながら言った。セツナとニコライは後に続く。

「俺は暗部に入るとき、ヒースクリフ団長から監視の命を承りました。もし暗部が反旗を翻す兆しを見つけたら、芽を摘み取るようにと。血盟騎士団は攻略組で最も強く、そして最も誇り高きギルドでなければなりません。それは汚れ仕事の暗部でも変わりません。それなのに……」

オスカーの声から感じる雰囲気にはセツナは奇妙な緊張を見出す。これまでセツナ達が殺してきたオレンジ達が醸し出す愉悦も狂気も、オスカーからは感じ取れない。

「リーランドは日頃から団長への不満を漏らしていました。隊長は知っていましたか？ リーランドがギルドを抜けて、新しいギルドを作ろうとしていたことを」

「いや、知らなかった」

「重大な背信行為です。暗部に入る前に殺した3人もそうでした。皆、団長への忠誠を持たずギルドに所属しているだけで満足する連中です。俺達は下層にいるプレイヤーの希望でなければならぬのに」
回廊の行き止まりで足を止めたオスカーは天井を仰ぐ。横から見たその顔は悲しげに正気を保っている。

義務感。それがオスカーの肅清を働いていた理由だとセツナは思い至る。このメイス使いは血盟騎士団に誇りとし、ヒースクリフに忠誠を誓い、そのためにギルドに相応しくない団員達を殺した。そこに愉悦も狂気も介在せず、オスカーは罪の意識を背負いながら更に罪を重ねていた。

「悲しいですね。志を共にした仲間を葬らなければならないというのは」

わざわざ殺さなくてもよかつたのでは。善良な者ならそう言うのかもかもしれない。でもセツナにその言葉を述べる権限は持っていない。そっくりそのまま跳ね返ってくる無責任な言葉だ。それはニコライも同じで、彼はダガーを腰から抜く。セツナも剣を抜いた。

「オスカー。あんたをリーランド殺害の犯人としてこの場で殺す。これは団長からの命令だ」

「ええ、俺も罰は受けるつもりです。しかし、最期にこれだけは、やっておかなければなりません」

オスカーは壁を背にして設置されている宝箱を開ける。直後に、光源が分からない赤の照明が回廊を照らした。同時にファンタジー世界観には不自然な電子的アラーム音。

「隊長も名簿を見たのなら、ニコライが元オレンジプレイヤーと知っ

ているはずです。彼も排除しなければならぬ」

滅多に近付かないから忘れていた。迷宮区のトラップ空間。転移結晶を取り出すニコライに向けて言う。

「結晶無効化エリアだ」

走ってトラップ範囲から抜け出そうとするが、天井から厚い石壁が下りて回廊を塞ぐ。周囲に光の柱が無数に現れ、その中から岩で形成された人型のゴーレムが佇む。

「フオウ、モンスターは俺がやる。お前はオスカーを」

コードネームで呼ばれたニコライは軽く頷く。セツナは先行して阻むゴーレム達を切り倒し、ニコライはゴーレムにメイスを叩きつけるオスカーへと走り出す。

ニコライがオスカーとの戦いに集中できるように。そのためにモンスターの始末を買って出たのだが、思いのほかモンスターはすし詰めと言つていいほど多く、ニコライとオスカーに目を向ける余裕もなく剣を振った。ゴーレム1体の強さはそれほどでないにしても、油断すれば数の暴力が押し寄せてくる。

目に映るもの全て。長期戦で吹き飛びそうになる冷静さを、倒したゴーレムを数えることで留める。もし目の前にニコライが現れたらうっかり殺してしまいそうで、しっかりと剣を振る対象を見据えながら斬り捨てる。

赤い照明とアラームが消え、元の暗い迷宮に戻る。それでも新手が出てくるのではと、警戒は緩めなかった。離れたところで衝撃音が聞こえる。ニコライとオスカーは泥臭く、武器を打ち合う戦闘を続けていた。だがすぐに、オスカーのメイスがニコライの脇腹に食い込んだ。ニコライが奇声に似た叫びをあげ、数瞬置いて砕け散る。

オスカーはその場で膝をついた。体力的な疲労なんて感じないはずなのに。焦点を当てるとオレンジに変わったカーソルと残り3割を切ったHPが表示される。セツナはゆっくりと歩き出す。

「隊長、ずっと不思議に思っていました……。あなたは任務で積極的に殺しを引き受けるのに……。殺すときは辛そうな顔をしている……。何故です……。何故隊長は殺すのですか……………」

どうやらニコライは、死の直前に麻痺毒を込めた一撃をオスカーに見舞ってくれたらしい。《オルペウスの琴》にいた頃に教わったのかもしれない。惜しいことをした。もっと早く知っていたら、彼から暗殺に適したその技術を教わることができたのに。

「隊長……、教えてください。冥土の土産に……」

こんな状況でも、オスカーから狂気は感じない。この男はどこまでも真面目で律儀で正気だ。笑いもせず、怖れもせず、ただ疑問を解消するために質問を繰り返してくる。

セツナの振りかざした剣が赤い光を纏う。光の尾を引いて、剣はオスカーの顔を真つ二つに裂いた。

ごくりと、唾内に広がる鉄臭い味を飲み込む。

「これが理由だ」

目の前で霧散していくオスカーの残骸に、セツナはその言葉しか見つけることができなかった。

◆

いつも通りの時刻。いつも通りのアラーム音で目を覚ます。

リビングのソファでくつろぎ、朝食の黒パンと不味いコーヒーを飲む。ふと、テーブルの隅にある本が視界に入った。持ち主が放置したのだろう「恐怖の四季」。それを手に取りページを捲る。どうやら短編集のようで、「スタンド・バイ・ミー」の原作になったのは「エピソードだけらしい」。

久々の読書を楽しんだ後、セツナはグランザムの血盟騎士団本部に向かった。

「そうかね。そんな事が」

報告を全て聞いたヒースクリフは神妙そうに言う。

「オスカーの所業に気付かなかったのは私のミスだ。済まなかった、セツナ君」

「これから新しいメンバーを補充するか」

「いや。今回のことを踏まえて、これからの任務は全て君に一任したい。できるかね?」

ヒースクリフの両眼がセツナを見つめる。威圧は感じない。彼は

純粹に、セツナにできるかと聞いている。

「ああ」

ヒースクリフは苦笑する。喜んでいいのか迷いがあるように。でも、どこかそれが偽物のように思える。

それでも構わない。心細さはなかった。元々仲間意識など皆無だった。リーランドがギルドからの独立を考えていたことも、ニコライが元オレンジプレイヤーだったことも、オスカーが忠誠故に殺人を犯していたことも知らなかったのだから。

むしろ1人がいい。そっちの方がやりやすい。

「早速だが次の任務だ。第15層を拠点としているオレンジギルド『ビスマルク・ヘッド』の殲滅を命じる。潜入か襲撃か。方法は君に任せるよ」

「了解」

4人でひとつ屋根の下に集う共同生活。共有する苦楽もなく、夢も語り合わない仮初めのジュブナイルは終わった。スタンド・バイ・ミー傍にいてとは思わない。本当にいてほしい人は既にいない。

ビスマルク・ヘッド。そこに奴はいるのか。奴を見つけ出すまで、セツナに立ち止まることはできない。

黒のコートを翻し、セツナは振り返ることなく会議室を後にする。本部を出てすぐ目標のもとへ——、とはいかずセツナは寄り道をす。ギルドのことを知っている情報屋のもとでもアイテムショップでもなく、フィールドの荒野に繰り出し地面が途切れる外周の淵に立つ。

リーランド。オスカー。ニコライ。

消えていった者達の名前を呼んで追悼らしいことをするも、セツナは未だに悲しみも寂しさも見出せずにいる。オスカーを殺した感触と、口の中にある血の味はまだしつかりと残っているというのに。それが全てデータで作られた仮想の産物なのではないかという思いにとらわれた。

セツナはオブジェクト化させた「恐怖の四季」を無造作に投げ捨てる。本は無限に広がる空へと乗り出し、一瞬だけ浮遊すると重力に

従って下へ下へと落ちていく。

その姿が雲の中へと消えていったところで、ぱりん、と小さく破碎音が聞こえた。

後編

プロローグ

殺す……っ!!

その殺意を左右の剣に込めて、キリトは戦う。

これはデュエルではない。これはゲームではない。今なら、目の前で自分の攻撃を叩き続けるこの男の言葉が分かる気がした。

これは、ゲームであつても遊びではない。

S A Oの開発者、茅場昌彦はマスコミの取材でそう言っていた。それを全プレイヤーに宣言した男が、目の前でヒースクリフというアバターを動かしている。

かつてのキリトなら歓喜しただろう。自分の生きる世界を創造した神に等しい人物に挑めるのだ。だが、それはゲームだったらの話だ。これはゲームではない。この世界は、もはや自分の、全てのプレイヤーが生きる現実だ。

これは殺し合いだ。人間同士の争いで最も野蛮で、最も原始的な。キリトはこれまで駆使してきたシステムによる攻撃を使わない。だが、自ら繰り出す攻撃が全て通常時よりも速い現象を認識する。全てが加速しているように感じる。脳から発せられる信号が、一瞬よりも速くポリゴンの体を動かしていく。

まだだ。まだ足りない。

もつとだ。もつと速く。

ヒースクリフはキリトの攻撃全てを防いだ。盾を縦横無尽に動かし、隙ができれば鋭い一撃を放ってくる。

キリトは恐怖を見つけ出す。相手にしているのは、この2年間で4千人もの人間を殺した男である事を。自らの手ではなく、設計したナーヴギアの機能によつて。被った者の脳を焼き、仮想からも現実からも葬った殺人者。それだけの死を背負っておきながら、この男は自分が殺すプレイヤーの中に混ざってきたのだ。キリトはヒースクリフの目へと視線を集中させる。

この男は正気だ。抱えきれない罪を背負い4千人の死者に睨まれながら、それでも正気を保つていられる。そして、今キリトをも殺そうとしている。

恐怖を振り払うように、キリトは《ジ・イクリプス》を放つ。二刀流最上位剣技。連続27連撃。

ヒースクリフの口元に笑みが浮かぶ。

そして、キリトはミスと敗北を悟る。悟りながらも、体はシステムに従って連続技を放っていく。それをヒースクリフの盾が全て受け止めていく。

土壇場で自分の腕でなく、システムに頼ってしまった。敵として対峙した彼がデザインしたシステムの剣技に。

最後の一撃が、盾に描かれた十字模様の中心に命中する。直後、その命中したダークリパルサーの刀身が甲高い金属音と共に折れた。

「さーらばだ——キリト君」

ソードスキルのリスク、硬直時間。システムで動きを止められたキリトの頭上に、ヒースクリフの長剣が掲げられる。刀身が血色に輝き、振り下ろされる。キリトはごめんと、愛する妻への謝罪を胸に目を閉じようとした。

だが、その目は見開かれた。

視界に栗色の長い髪が入り込んだ。ヒースクリフの長剣と自分の間に、麻痺で動けないはずの彼女が割って入ろうとしていた。

駄目だ、アスナ!!

キリトは抗う。この世界の絶対的存在である、システムに。

全てがスローモーションに見える。まるで時間が停止したかのよう。その中でキリトは動き出す。まだ続けているはずの硬直時間を打ち破り、その代償なのか痛みが全身を貫く。それでもキリトは腕を伸ばした。今にもヒースクリフの剣が触れようとしているアスナに。

加速する意識の中でキリトは願う。

アスナ、生きてくれ——

加速が終わると同時に、手が届いた。

第17話 特異点には分岐を

剣ほどのリーチがある鉈が眼前に迫って来る。セツナはそれを鞘で防ぎ、お返しとばかりにゾディアークの眼前へと剣を突き出す。だが、ゾディアークは剣先が顔に達する寸前でセツナの腹を蹴り、体を退けて間合いを取った。

セツナは自分の腹に張り付いた赤のエフェクトを一瞥する。ゾディアークは筋力パラメータを上げているようで、視界に映るHPは3割ほど減少した。

これが、2人の戦闘で生じた初めてのダメージだ。互いにカーソルはグリーンだったため、先にダメージを与えたゾディアークのカーソルがオレンジに変わっている。

「油断は禁物だなあ。それとも、僕を殺した後にカルマ回復クエストを受けるのが面倒なのかな？」

「そんなところだ」

セツナは花に覆われた地面を蹴る。一瞬で間合いを詰め、青い光を帯びた刀身をゾディアークに向ける。細剣技《リニア》のシステム補正されたスピードは、セツナの鍛えられた敏捷パラメータも相まってゾディアークの肩を浅く抉った。

セツナは唇を噛み締める。左胸を狙ったつもりなのだが、ゾディアークは回避した。あの副団長ほどのスピードがあれば、狙い通り命中しただろうか。

《リニア》は基本技であるため、硬直時間は1秒もない。セツナは剣と鞘に込めた力を一層強め、ゾディアークに斬りかかる。セツナの攻撃を防ぐゾディアークは笑っていた。この戦闘を心ゆくまで楽しんでいる。剣戟で散る火花の奥に、彼の頬にあるケロイドが歪んでいるのが見える。

楽しいか、ゾディアーク。

お前はこの時のために、この世界で生きてきたんだろう。

俺も同じだ。俺もあんたを殺すために生きてきた。

地獄の日々だったよ。喉が渴いて、美味くもない血の味でしか渴き

を消す事ができない。

眠るとき、ナミエのことを夢に見る度に気が狂いそうになった。

あんたはどうだ。

ずっと俺と戦う事を夢見て、クリスマスイブの夜にサンタクロースを待つ子供のように胸を躍らせていたのか。

今、あんたの頭にあるのは天国か。

俺の頭にあるのは地獄だよ。

『虐殺器官』にあつたな。地獄は頭の中にあると。

その意味がよく分かる。俺は地獄から逃れることはできない。

俺は罪から逃れることはできない。

だがそれは、あんたも同じはずだ。

あんたに罰を与えてやる。

あんたの命で、ナミエを殺した罪を償わせてやる。

ゾディアークの鉈が、セツナの剣と鞘を弾いた。セツナの体が大きく仰け反る。

「残念だなあ。もう終わりか」

ため息を吐きながら、ゾディアークは黄色い光を帯びた鉈を横薙ぎに一閃させる。

セツナは真上へと投げ出された右手に力を込めた。システムが構えを取ったと判断し、ハーデイスクラウンの刀身が青く光る。一切の雑念を振り払うと、全ての動きがスローモーションのように遅く感じる。システムアシストに身を委ね、肉迫してくる紅の鉈に片手剣技《コバルトクラッシュ》を叩きつけた。

激しい炸裂音と共に火花が散る。ゾディアークの鉈は上半分が吹き飛び、地面の花に突き刺さった。数瞬の後、地面に刺さった上半分と、ゾディアークの手に残っている下半分がポリゴンを散らした。

ゾディアークの表情が、驚愕を浮かべたまま固まる。セツナはすかさず構えを取った。右手の剣と左手の鞘に紅い光が宿る。

疑似二刀流上位剣技《みょうおうはぎん明王覇斬》。

左右の刃をコンマ1秒の隙も与えず、ゾディアークに叩き付けていく。視界は猛スピードで繰り出される剣の光で覆われ、その隙間から

見えるゾディアークの体には剣尖の跡であるエフェクトが貼り付いていく。

最後の15撃目が、ゾディアークの胸を貫く。ゾディアークはタフな事に、まだHPを1ドット残していた。ゾディアークは数歩下がって、花畑に1本だけ生えた樹の幹に背を預ける。軽く小突いただけでHPが尽きそうだというのに、ゾディアークは笑っていた。疲れたように、でもどこか清々しい笑みを浮かべたまま、回復結晶もハイポーションも使う気配がなかった。

「楽しかったよ……。でも残念だなあ。君とはもつと戦いたかった。願う事なら、この世界が続く限り永遠に……」

セツナはゾディアークの顔に剣を向ける。ゾディアークは抗わらない。

戦いとは命のやり取りと、ゾディアークは戦う前に言っていた。命が尽きかけている今、ゾディアークはそのポリシーに従うのだ。

勝者が生き、敗者は死ぬと。

「向こうで会ったら、また遊ぼう」

「ああ、先に逝って遊んでこい」

笑みを浮かべるゾディアークの額に、剣を刺す。1ドットだけ残っていたHPが完全に消滅し、その体は光を散らすポリゴンになって砕けた。

花畑に吹く風が、ゾディアークだった欠片を外周から広がる空へと運んでいく。あの時の、花卉と一緒に飛んでいったナミエと同じように。

セツナは空に拡散していく欠片を、一片も残さず蒸発して消えるまで眺めた。最後まで見納めると、疲労がやってきた。復讐を誓ったあの時から1年半以上の間溜め込んできたものが、一気に体の隅々へと浸食していくようだった。

セツナは唾を飲み込む。血の味はしなかった。それも驚きなのだが、更に驚くことに喉の渇きが消えたのだ。

呪縛から解き放たれた。事実を受け止めれば、そうなるのだろう。確かに、達成感がないわけではない。

お望み通りじゃないか、早速刹那。

お前の大切なナミエを殺したゾディアークは死んだ。

お前が手を下した。

ナミエの無念は晴らすことができた。

もう、奴がこの世界で好き勝手することはない。

もう奴のせいで、お前と同じ悲しみを味わう人間はいないんだ。

お前はよくやったよ。

きつとナミエも喜んでいるさ。

自分自身を労い、やがてそれが馬鹿馬鹿しくなる。セツナはそんな自分を嘲笑う。そして、セツナはナミエが消えていった空に尋ねる。そこにナミエの影を求めて。

「ナミエ、俺はお前を愛していたのかな」

隣に感じていた彼女の温もり。空へと吹く風が、それを打ち消した。

セツナは地面に突っ伏した。ナミエが消えた時でさえ出なかった涙が溢れた。鼻水と唾液も、糸を引いて花へと落ちていく。

「ナミエ、教えてくれ！俺はお前を愛していたのか？お前は俺を愛してくれていたのか？」

ゾディアークを殺せば、何かが変わるのではないかと思っていた。犯罪者プレイヤーを全て殺せば、ナミエは赦してくれるのではないかと思っていた。

彼女が再び現れて、赦すと笑ってくれるのではないかと根拠もなく思っていた。

でも、何も起こりはしない。

空は何も答えず、ただ雲を浮かべている。あの時消えていったこの空に、ナミエはいない。

分かっていたはずだ。それなのに、現実から目を背け続けていた。目的を果たして、その現実を突き付けられた。

ナミエは死んだ。

死者は決して赦してくれない。

もう顔を見ることも、声を聞くこともできない。

彼女から赦しの言葉を受け取ることも、罵倒の言葉を受け取ることもできない。

ナミエを守れなかったセツナの罪は、決して償うことはできない。犯罪者とはいえ人を殺してきた罪も、償うことはできないのだ。

完璧な絶望はないと、誰かが言っていた。

だがこの時セツナが味わったものは、紛れもなく完璧と言って良い絶望だった。

セツナは泣き続けた。確信が持てないことへの恐怖に泣いた。自分分はナミエを愛していたのか。ナミエの言葉を聞くことができない今、それが分からなくなってしまった。

「俺は一体何をしてきた！俺は何を守ってきた！俺は何を手に入れた！俺は何のために戦ってきた！俺は何のためにこの世界に来たんだ!!」

◆
傾きかけた陽が外周から覗いている。陽をいっぱい浴びたグラザムの尖塔群が、温かい日光を反射し無機質な冷たい光に変えていた。

広場の転移空間から出てきたセツナは、石畳が敷き詰められた街の大通りを歩く。

一応ヒースクリフに報告はしておこうとメッセージを送ろうとしたのだが、何故かフレンドリストから彼の名前が消えていた。命令を聞かないから絶縁だなんて子供じみたことをするような人間じゃない。うっかりフレンド登録を解除してしまったのだろうと深くは考えず、直接報告するためにグラザムへと来たのだ。

セツナは街を歩きながら、街に漂う雰囲気を感じ取った。冷たい印象を与えるグラザムが、より一層冷たさを増しているように見える。滅多に来ない街だが、普段なら武器や防具を品定めするプレイヤー達で賑わっている街だ。特に今の時間帯はフィールドから多くのプレイヤーが戻ってくる頃で、商人プレイヤー達もかきいれ時のはずだ。それなのに、商人達は客の呼び込みもせず皆うなだれている。声を張り上げて客引きをしている商人はNPCだけだ。他のプレイ

ヤー達も通路の端で壁にもたれかかり、中には寝そべる者もいる。

ボス攻略で何かあったのだろうか。まるで《軍》に占拠されていた、少し前までののはじまりの街みたいだ。

「嘘です、そんなの!!」

血盟騎士団の本部が見えてきたところで、その声は聞こえた。聞き覚えのある声だ。数秒置いて、本部の両扉から赤い装備を纏った小柄な人影が飛び出して来る。前を見ずに走ったせいで、それはセツナにぶつかってきた。避けようと思えば避けられたのだが、疲労のせいで体が思うように動かなかった。

「ごめんなさ……、セツナさん!」

小柄な少女は謝罪する途中で、セツナの顔を見て驚愕の表情を浮かべた。少女の右肩に乗っている水色の綿毛に覆われた小竜が鳴き声をあげる。

会うのは約半年ぶりだろうか。彼女の目尻に涙が浮かんでいることから、どうやら再会を喜べる状況ではないらしい。

「シリカ、何があった」

セツナがそう尋ねると、シリカの目尻に浮かんでいた涙が零れた。もう治まらないようで、シリカはセツナに抱きつき声をあげて泣いた。

護衛していた時と一緒にだなど思いながら、とりあえずセツナはシリカの頭を撫でてやる。状況は掴めないが、良くない事が起こったのは確かなようだ。

セツナは落ち着いたシリカを連れて本部の扉を潜った。脇に立っているはずの門番はいなかった。

ロビーでは白と赤の装備で彩った団員達が集合していた。彼等もまた、街のプレイヤー達と同様に重苦しい雰囲気を感じていた。ロビーに居るのは団員だけではなく、エギルとクライン率いる風林火山のメンバーもいた。ロビーに入るセツナに気付いたエギルが歩み寄ってくる。

「セツナ、お前攻略に来なかつただろ。何してたんだ?」

「急用ができた。それよりエギル、何があった」

エギルは数瞬だけ黙り込む。眉間のしわが深くなっていた。

「……キリトが、死んだ」

「何……っ」

普段は決して動揺を表に出さないセツナが、この時ばかりは驚愕の視線をエギルに向けた。冗談でも質が悪い。あの本物の二刀流使いが、こんな所で脱落するというのはのか。

「ボスに殺されたのか」

「いや、ボスは倒した。その時点で14人死んだが……」

「ならなぜー」

「ヒースクリフだ」

壁を背にして床に座り込んでいたクラインが、呟くように言った。会う度に見せていた明朗な表情はなく、深く窪んだ目も相まって山賊のようだ。

「奴は、茅場昌彦だったんだよ。奴は俺達に混じって、俺達をモルモツトみてえに観察してやがったんだ！」

クラインは壁に拳をぶつけた。セツナはクラインの口から出た現実から逃げ出したい衝動に駆られる。だが、辻褄が合ってしまう。

この世界の創造主である彼なら、自分ために最強のアバターを設定することは容易だ。

自分が率いるギルドの運営に消極的だったのは、配下に情報を与えすぎて正体を悟られないための自制だったのか。

セツナは右手にはめた《ソウルバイカー魂を噛む者》を見つめる。ヒースクリフから与えられた殺人用装備。似たような効果を持つ防具やアイテムの話は聞いたことがない。アルゴでさえ、この装備に関する情報を持っていなかった。

セツナは悟る。

この装備はセツナのために作り出された。復讐に身を委ねて生きるセツナに、茅場昌彦は実装するはずのなかった装備を特典として与えた。

全てはこの世界を鑑賞するために。

この世界で絶望に暮れる者達。この世界を受け入れる者達。希望

を捨てず戦いへと臨む者達。欲望を膨らませ、悪意に身を委ねる者達。

人々の抱えるエゴイズムが、この世界に何をもたらすのか。茅場昌彦は介入を極力避けて、その行く末を眺め続けてきたのだ。

そこで彼は何を見出したのだろうか。

囚われた住人達を解放しようとする人間の勇ましさか。

住む世界が変わっても他者を傷付ける人間の愚かさか。

「奴の正体を見破ったキリトは、その場で奴と戦った。奴は報奨^{リワード}だとかで、勝てばゲームをクリアさせると言った。そんで……」

エギルは続ける。彼も現実を受け入れられずにいるのか、声が震えている。

「そんで、キリト以外は全員麻痺をかけられたんだが、アスナは何故か麻痺を解いたんだ。キリトを庇おうとして、キリトはアスナを守るために……、死んだ」

死んだ。

そのワンフレーズを聞いて、セツナの横にいたシリカは再び泣き出した。多分、彼女はさっきもそれを聞いて本部を飛び出したのだろう。クラインも泣いていた。手で両眼を覆っているが、頬を伝う涙が見える。

「馬鹿野郎が……。カッコつけやがって……。許さねえって言ったのによー！」

キリトはソロだと聞いている。背中を分ける仲間もなく、ずっと一人で孤独な戦いを続けてきた。だが今、キリトのために泣いている者がいる。

「本当に馬鹿だぜ。たった1人で勝とうだなんてよ……」

「ヒースクリフは、どうした」

「奴は転移した。100層で、ラスボスとして俺達が辿り着くのを待つそうだ」

残りの層は25。クォーター・ポイントとはいえ、1層のボスを攻略するのにトップレベルのプレイヤーが14人も死んだ。それに加えて最強の聖騎士は第100層の最終ボスに転向。二刀流使いは死

亡。犠牲は大きすぎる。

「アスナは。姿が見えないが」

「アスナも転移した。キリトが戦う前に、茅場に頼んだんだ。もし死んだら、アスナが自殺しないようにしてくれてな。団員がマップ追跡したらセルムブルグにいることが分かって、さつきりズベツトが様子を見に行った」

「セルムブルグ……」

目的地を定めたセツナは扉へと歩き始める。

「おいセツナ！」

「俺も様子を見てくる。元だが、俺も団員だ」

大切な者を失った悲しみを、セツナは知っている。

セツナは復讐することで生き延びた。

生きて罪を重ね続けることを選択した。

結果として、セツナは頭に地獄を抱えている。

彼女には地獄を抱えて欲しくない。

祈りながら、セツナはグランザムの街を走っていった。

◆

建物の色が白亜に統一されたセルムブルグに転移したセツナは、アスナの家を目指した。3ヶ月前に一度行ったきりだが、場所は覚えている。

だが、その必要はすぐに消えた。優雅な街並みに似合わず、街にいるプレイヤー達が大通りの先にある湖畔に向かっていた。通りを駆けていたセツナは足を止め、近くにいたプレイヤーに話しかける。

「何が起こった」

「アスナさんが、湖に飛び込もうとしているらしいんです」

それを教えてくれたプレイヤーに礼も言わず、セツナは湖畔目掛けて全力疾走した。前を走るプレイヤーを何人も追い越した先に人だかりができていた。

彼等が見守る中で、栗色の髪をなびかせながら少女が光る湖面へと走り出す。だが、彼女の体は薄紫色の障壁に阻まれ、石畳の床に弾き返された。再び湖へと走り出そうとする少女を、ピンク色の髪をした

少女が羽交い絞めにして阻止する。

「アスナ、もうやめなつて！」

「離して！ キリト君が、キリト君が！」

腕を振り払ったアスナは剣を抜き、リズベットに片手突き攻撃を放つ。圏内であるためダメージはないが、鍛えられたパラメータによつてもたらされる衝撃でリズベットは尻もちをつく。

アスナはゆっくりと歩を進めた。リズベットは親友の恐ろしい形相に怯え動けずにいる。

セツナは人混みをかき分け、2人の間に割って入った。「セツナ！」と、背後にいるリズベットの上ずった声が聞こえる。

「アスナ……」

セツナは彼女に呼びかける。

セツナの姿を眼中に収めたアスナが何を思ったのか。セツナが何か邪悪なものに見えたのか、アスナは絶叫しながら剣を振り上げた。

セツナは剣を抜き、アスナの腹に《リニア》を叩き込んだ。隙だらけのアスナは防御する間もなく、その体を宙へと躍らせる。そのまま湖へと落ちるはずなのだが、アスナの体はまたも障壁に弾かれ、床に伏した。

倒れたアスナは動かなくなった。セツナが彼女の長い髪を掬い上げると、幼子のように眠る彼女の顔が現れた。

「セツナ、アスナは？」

「気を失っただけだ」

野次馬達のどよめきが聞こえる。「あいつは何者だ？」「アスナさんを突き飛ばすなんて……」と、突然現れたセツナに好奇の目を向けている。

「リズベット、アスナを部屋まで運ぶぞ」

「あ、うん」

セツナはアスナを抱きかかえた。野次馬達を睨むと、彼等は2つに分かれて道を開ける。「ベン・ハー」でキリストが連行される場面を思い出した。

この接触はハラスメント防止コードに抵触するか曖昧だ。コード

が発動する場合としない場合がある。もし抵触していて、アスナが目
を覚ましてコード発動ボタンを押してしまったら、セツナは牢獄エリ
アに転送されてしまうだろう。

そんな恐れていた事態にはならず、リズベットの案内でセツナはア
スナがホームにしている部屋に着くことができた。道は知っている
のだが、なぜ知っているのかとリズベットから怪しまれるのが面倒だ
から知らない振りをしていた。

アスナを寝室のベッドに寝かせて、そつと布団をかける。疲れたの
か、リズベットは床に座り込んだ。

「ありがとうセツナ。何でか分からないけど、来てくれて助かった」
「話はエギルから聞いた」

「そつか。じゃあ、知ってるんだね」
「……ああ」

リズベットはぎこちない笑顔を取り繕い、立ち上がる。
「疲れちゃった。少しだけ休んでこ」

2人はリビングのソファに腰かけた。窓から見える街は、夕陽が差
し込み茜色に染まっていた。

「エギルに知らせなくちゃね。アスナは見つかってたって」

リズベットはウィンドウを呼び出し、メッセージを打ち込んでい
く。ウィンドウを消すと、ソファの背もたれに身を預けた。

「びっくりしたわよ。いきなりエギルから呼び出されて何かと思っ
たら……。信じられないよね。キリトが死んじゃうなんて」

「ああ」
「あだし、ずっとキリトのことが好きだったんだ。でもアスナのこと
も大好きだから、2人が結婚の報告に来てくれたとき、凄く嬉しかっ
た」

最初こそ明るいリズベットだったが、話していくにつれて声がか細
くなり、震えていった。とうとう耐えられなくなり、リズベットの目
から涙が零れた。

「まだ結婚して2週間しか経ってないのに、こんなやつてないよ……。
キリトのばかあ」

リズベットは声をあげて泣いた。一緒にモンスターに腹に飲み込まれた時よりも激しく嗚咽を漏らしていた。

アインクラッドで、互いの生命線を共有する結婚に至るケースは稀だ。詐欺や裏切りが横行して、プレイヤー達は疑心暗鬼になっているのだ。それでも結婚を決断したのは、それほど互いに想い合っていたのだろう。

「アスナの様子を見て来る」

セツナはそう言ってソファから立った。リズベットはずっと泣き続けていた。

寝室のベッドに横たわるアスナは、寝息を立てて眠っている。さっきの憎しみに満ちた形相の面影はない。

セツナも傍から見れば、あのような顔をしているのだろうか。ただ憎悪のままに生き、目に映るもの全てを壊そうと暴れる怪物に。

怪物になった俺を、ナミエは愛してくれるだろうか。

いや、とセツナは無駄な願いを消す。ナミエは死んだ。彼女がセツナを愛してくれる可能性は永遠に消えた。彼女がセツナを赦してくれる可能性も永遠に消えた。

セツナはアスナの穏やかな寝顔を眺める。彼女は一体どんな夢を見ているのだろうか。幸せな夢だろうか。目が覚めて現実を突き付けられた時、彼女は完璧な絶望を味わうのだろうか。

セツナは眠っているアスナに尋ねる。

「アスナ、あんたも俺を赦してくれないのか……」

アスナと出会ってから、ずっと思っていた。それはとても身勝手に虚しいものだ。

ナミエに似たアスナの笑顔。それを見て、セツナはとある可能性を感じてしまった。

アスナなら、俺を赦してくれるのかもしれない。

我ながら短絡的だと思う。ただナミエに似ているから。ナミエと同じ笑顔だから。それだけで、彼女の代替としてアスナに赦しを求めてしまった。

身勝手にも程がある。償えない罪に代理人を立てて赦してもらお

うなんて。でも、その可能性も潰えた。

キリトを失ったことで、アスナもきつと罪の意識を抱えるだろう。ナミエを失ったセツナが抱えるものと同じ罪。生き残ってしまったことの罪。

そのことに罪を抱える必要はない。でも、罪の意識は一度抱えてしまつたら消えない。呪いのように縛られてしまうのだ。そんなアスナに、セツナを赦すことはもうできない。

「セツナ……」

背後からリズベットの声が聞こえる。彼女は小さな靴音を立てて、セツナの隣へと歩いてきた。

「アスナは、これからも前線で戦わされるの？」

「……分からない。彼女次第だ」

「あたし、もうアスナに戦ってほしくない。辛すぎるよ……。この子の隣に、キリトがいないなんて……」

リズベットは懸命に涙を堪えているようだった。どんな言葉をかけたらいいのか、セツナには分からなかった。

リズベットのように、多くのプレイヤーが絶望していることだろう。プレイヤー達の希望が失われてしまった。

キリト。

アスナ。

ヒースクリフ。

ヒースクリフに至っては、正体が悲劇の元凶だったのだ。これほど酷いシナリオはない。

これまでのアインクラッドは、まだ地獄ではなかった。世界の創造主によってプレイヤー達は導かれていた。だからこそ窮地に陥つても乗り越えることができた。でもこれからは、創造主によるサポートはない。プレイヤー達は自力で第100層まで進まなければならぬ。犠牲は多く出るだろう。アインクラッドは絶望が包み込む地獄へと変わる。

住人達は頭の中に、逃れることのできない本当の地獄を抱えていくことだろう。

「リズベット、頼みがある」

◆ ヒースクリフの正体が茅場昌彦というスキャンダルは、一晩のうちにアインクラッド中に知れ渡っていた。

発行された新聞の一面を飾り、プレイヤー達の話題の多くを占めていた。そのニュースを知ったプレイヤー達の反応は一律の一言に尽きる。

「誰が攻略組を率いるのか」

攻略組の一角である《聖竜連合》に白刃の矢が立つという声は多いが、それでもヒースクリフのカリスマ性には及ばない。そもそも、彼のカリスマ性は作られたものだったのだ。アインクラッドの管理者という絶対的な権限を使って。

ヒースクリフを失って最も損害を受けた血盟騎士団の本部では、朝早くからギルドメンバー全員が会議室に集められた。昨日の夕方、副団長であるアスナから招集命令のメッセージが彼等のもとに届いた。

これからの方針を告げるのだろう。多くの団員がそう予想した。会議室にいる者の多くが、白と赤の装備に身を包んでいる。黒を基調とした普段着のエギルは、自分が場違いのように思えてならない。

エギルは隣にいるリズベットに尋ねた。

「なありズベット、本当にアスナが招集をかけたのか？」

リズベットは黙ったまま頷く。この場にいる団員ではない者は、エギルとリズベットだけではない。クラインと《風林火山》のメンバー、それにシリカまでいる。昨日、本部に戻ってきたリズベットが全員に来るよう言ったのだ。アスナからの伝言だと。

違和感を覚えずにはいられなかった。キリトと戦う前、アスナを自殺させないよう計らってほしいという彼からの頼みを、ヒースクリフは了承した。彼女はセルムブルグから出られないよう設定するという彼の言葉を、あの時麻痺をかけられ動けなかったエギルはしっかりと聞いていた。

ヒースクリフが約束を守ったのなら、アスナはここには来られないはずだ。リズベットから無事とは聞いていたが、キリトを失った彼女は

にギルドを率いるほどの気力があるのか。

視界にある時計が、招集の時刻を表示する。同時に、閉じられていた会議室の扉が開いた。数列に並んでいる団員達は背筋を伸ばす。部屋の中央にある机の席には誰もついていない。ギルドの上層メンバーも列の中にいるようだ。

壁際で立つギルド外の面々も、扉へと視線を移す。団員達はガラス張りの壁を向いたままだが、団員ではないから加わらなくても構わないだろうとエギルは思った。

扉の奥から、人影が現れる。

「……何でだ？」

無意識に声が出てしまう。エギルが注視するその先にいたのは、セツナだった。

クラインと《風林火山》の面々も、口を半開きにしてセツナを視線で追っている。

セツナはエギルがよく知る黒のロングコートではなく、白の生地に赤いラインが入ったコートを着ていた。一度だけだが見たことがある。シリカと一緒にエギルの店に来ていた時の服だ。

「おい、リズベット……」

エギルはリズベットに視線を移す。リズベットは神妙な表情でセツナを見ていた。彼女は知っていたのだろうか。セツナがこの場に来ることを。ギルドを除名されたはずのセツナが、団服を着て現れた理由を。

セツナは整列する団員達の前に立った。団員達も、エギルと同じ反応を示した。この反応も、エギルにとつては異様だ。除名されたとはいえ、セツナと彼等は仲間だったはずだ。それなのに、団員達の中から「誰だ」と囁く声が聞こえたのだ。彼等はセツナを初めて見るかのように、不審を込めた視線を向けていた。

どういうことだ。セツナは元血盟騎士団のメンバーじゃないのか。

エギルの疑問をよそに、セツナは会議室にいる全員に告げた。

「俺の名前はセツナ。この血盟騎士団の新しい団長だ」

第18話 革命には指導者を

ヒースクリフは茅場昌彦だった。

その正体が知られてしまえば、もう彼は今までのように聖騎士として血盟騎士団を率いることはできない。だから彼は、プレイヤー達の前から姿を消した。このSAOで、プレイヤー達の目指す最終目標であるラスボスとして。

たとえ自分達をデスゲームに放り込んだ元凶としても、ヒースクリフによって攻略組のプレイヤー達が導かれていたのは事実だ。だからプレイヤー達の絶望は大きかったのだ。

敬い、忠誠を誓った人物を失ってしまったことに。

彼の代わりを務めること。それは即ち生き残った約六千人の命を背負うということだ。それを宣言したセツナをエギルは凝視する。

よく店に来て珍しいアイテムを取引するから、それなりに手練れだとは思っていた。でも、まさか攻略組クラスのプレイヤーだとは思ってもいなかった。攻略組として知られるプレイヤーは下層では羨望の的だ。ジャーナリストと名乗る者が「攻略組名鑑」なんてものを発行するくらいだ。その中にヒースクリフやアスナは勿論、血盟騎士団に所属しているメンバー全員の名前が載っている。

エギルが暇つぶしに見たその名鑑に、彼はいなかった。だから血盟騎士団メンバーと知ったときは驚いたし、なぜ彼が無名のプレイヤーなのか不思議だった。

沈黙していた団員達にざわめきが起こる。セツナは続けた。

「俺のことを知る者は殆どいないと思う。それは当然のことだ。俺がギルドに所属していたのは形だけで、その理由はヒースクリフからあった達とは別の任務を受けていたからだ」

「おいセツナ！ 何なんだよ別の任務って」

エギルの隣にいるクライインが叫ぶように言った。ずっと壁にもたれかかっていた彼は、セツナが会議室に入ると飛ぶように壁から背を離れていた。ここに集められた団員外の面々は全員セツナとは知り合いのようだが、彼がこれまでどこで何をしてきたかと知る者

はいるだろうか。

エギルはセツナのことをよく知っているという自信がない。プレイヤー間で自分の情報をさらけ出すなんて間抜けなことは殆どない。それでも、エギルがセツナに関して知っていることと言えば顔と名前くらいだ。売りに来るアイテムの稀少度もまばらで、彼がどの層を中心に活動しているのか推測できない。

クラインの問いかけで、団員達のざわめきが消える。セツナは答える。疑問を投げかけたクラインと、彼と同じことを思っているだろう会議室にいる全員に。

「犯罪者プレイヤーの暗殺だ」

血盟騎士団はヒースクリフの遺産というべきものだ。プレイヤー達と袂を分かつとき、最終層へと辿り着き、自分と剣を交えるときの相手として。

ヒースクリフがスカウトした者達が集まった血盟騎士団はこれからも最前線で戦い、プレイヤー達の希望であり続ける。だから最強の座にいるギルドはプレイヤー達の支持を集めなければならず、ギルドに属するプレイヤーは高潔な志を持つ者でなければならぬ。

そのギルドに殺人者がいた。崇高な目的で動いていたギルドは、実は裏で多くの血を流していた。血盟騎士団が交わした血の盟約は清い血ではなく、酷く汚れた血だった。

セツナが告げたのはそういうことだ。

「貴様、死神なのか？」

団員の中からそう聞く声が飛び出した。「ああ」と、セツナは肯定する。

「俺は死神だ」

死神の噂がプレイヤーの間に飛び交うようになったのはいつからだろうか。エギルがその噂を知ったのは今年に入ってから半年を過ぎた頃だった。馴染みの客と世間話をしていたとき、犯罪者狩りをしている者がいると話題に挙がったのだ。

どうせ根も葉もない話だと思っていた。娯楽の少ないアインクラッドで話題作りのために誰かが流したんだろうと思っていた。で

も噂は真実だと、当事者が語った。セツナは続ける。

「俺はトラビアの悲劇と、ラフィン・コフィン《笑う棺桶》の討伐戦にも関わっていた。
《笑う棺桶》のメンバーの約半数を始末している」

エギルは横にいるリズベットへと視線を移す。リズベットは目を見開き、口に手を添えている。その手は震えていた。

「リズベット、お前は知ってたのか？」

「知らない……。あたし、セツナに頼まれてアスナの指動かして、メツセージ送っただけ……」

リズベットは震えた声でそう言った。

「俺のレベルは攻略組に十分な数値だ。それに、俺はエクストラスキルぎじにとりゅう《疑似二刀流》を習得している」

セツナは腰から剣を鞘ごと抜く。鞘の先端には刃が付いていた。奇妙な剣だ。剣を抜いて、鞘と共に構える。両手に武器を携えたその姿が、キリトと重なった。

「75層で多くのプレイヤーが死に、ヒースクリフと決別した。アスナも、どういうわけかセルムブルグから出られなくなっている。団長と副団長を失ったこのギルドは、俺が率いる」

「待て」と、1人の団員が前に出た。紅の鎧に白亜のマントを翻し、長い髪をオールバックにしたその出で立ちはヒースクリフによく似ている。だが彼とは違い黒髪で、その瞳に金属めいた冷たさはない。「あんたは」

「血盟騎士団参謀職の1人、ギルバートだ。勝手なことはさせせん。ギルドはこの私が率いる」

団員達が「そうだ！」と騒ぎ立てる。ギルバートへの歓声とセツナへの怒声が入り混じり、今にも乱闘でも起こりそうな勢いだ。

「あんたでは力不足だ。もはやプレイヤー同士で下らない張り合いを続けていられる状況ではない。俺に従ってもらおう」

会議室に響き渡る野次の中で、セツナは声を張り上げてそう言った。その声色はエギルが初めて聞いたものだ。セツナの声は控え目で、常に落ち着いているものしか聞いたことがなかった。まだ思春期の幼さが残っているが、どこか凄みがある。その声を発したセツナの

顔もだ。

ギルバートの顔が怒りで歪んでいるのが分かる。彼は震える手でウインドウを呼び出し操作した。

「貴様あ……、なら証明してもらおうぞ。この血盟騎士団を率いるに相応しいか……！」

セツナが宙に指をタツチさせる。恐らく《デュエル》だろう。2人は団員達の前で対峙して剣を構えた。

セツナは右手に剣を、左手に鞘を。ギルバートはやや幅広の刀身が伸びた両手剣だ。2人の剣が、壁全面に広がる窓から差し込む光を反射して鈍く光る。セツナが右手に持つ剣は淡い紅色のグラデーションがかかっている。まるで多くの人間の血を吸ってきた妖刀のように。

剣も奇妙なのだが、セツナの構えもまた妙だった。セツナは鞘を持った左手を前に突き出し、右手の剣を逆手に持ち替え後ろに引いた。2本の刃はしつかりとギルバートの方へと向けられている。

セツナの《疑似二刀流》ぎじにとりゅうがどんなスキルなのかは見当もつかない。ただキリトの《二刀流》にとりゅうを再現するだけなのか、それとも鞘を武器として使うことに意味があるのか。それが計り知れないのは、セツナ以外にそのスキルを習得したと名乗りをあげた者がいないから。セツナ以外に習得した者がいないのなら、《疑似二刀流》ぎじにとりゅうはユニークスキルだ。

ユニークスキルが持つ意味合いは、ヒースクリフが正体を明かした瞬間から大きく変わった。これまでユニークスキルを持っていたのはヒースクリフとキリトの2人だけ。ヒースクリフは《神聖剣》しんせいけんをS A Oの管理者という権限で自らに与えた。キリトには、全プレイヤーの中で最大の反応速度を持つ者として《二刀流》にとりゅうを与えられた。ヒースクリフ——茅場昌彦は言っていた。最終的に自分の前に立つのはキリトだと思っていたと。

ユニークスキルは、条件を満たし、ランダムで習得できる稀少価値の高いスキルではなかった。1万人の中でたった1人だけが持つスキルは、茅場昌彦からゲームで何らかの役割を果たすために与えられ

たプレゼントというべきものだったのだ。ユニークスキルとは、この世界の神から選ばれた者の証だ。

キリトは魔王に立ち向かう勇者となることを期待されていた。だとしたら、セツナも茅場から期待を込めて《疑似二刀流》ぎじにとりゅうを与えられたということか。

あれだけ騒がしかった団員達の沈黙が部屋を包み込んでいた。彼等も反発しておきながら、興味を持たずにはいられないのだ。茅場が与えた力を。沈黙の中で、2人の剣が光を帯びる。

ギルバートは猛スピードで駆け出した。ギルバートのオレンジ色の光を帯びた剣が、真っ直ぐにセツナ目掛けて迫っていく。対するセツナの一手。それを見てエギルは目を剥いた。隣にいるクラインの「んなっ」という上ずった声が聞こえる。

セツナは右手の剣を投げた。さながら槍投げのように。主人の手を離れた剣はギルバートの肩へと刺さり、体を後退させる。意表を突かれ、スキル失敗のペナルティである硬直で動けずにいるギルバートの顔が歪む。驚愕だが、恐怖も混じっているように見えた。

一瞬投剣スキルと、エギルは思った。だが跳躍するセツナの左手にある鞘は、投げられた剣と同じ緋色の光を帯びている。恐らく剣と鞘の両方を備えて発動できる《疑似二刀流》ぎじにとりゅうの技だろう。

跳躍したセツナは宙で一回転し、ギルバートの肩から腹にかけて鞘に付いた刃を滑らせた。ギルバートに赤いエフェクトが貼り付き、クリティカルヒットらしくHPが半分近くまで減った。

力なく仰向けに倒れたギルバートの肩に刺さる剣を、セツナは無造作に抜いた。団員達は沈黙していた。エギルは両隣にいるクラインとリズベツトを見やる。2人とも口を半開きにしたまま、飛び出しそうなほど見開いた目でセツナを凝視している。それは団員達も同じだった。

「まだ納得できない者は前に出ろ。相手をしてやる」

セツナは剣を団員達に向ける。名乗りを上げる者はいなかった。

あの正確な投擲と軽い身のこなし。それだけでセツナが多くのパラメータとスキルを鍛えていたことが分かる。セツナが死神かどうか

かの真偽はともかく、その強さが本物であることは照明された。

セツナは剣を収めた。

「俺のことが気に入らなければギルドを抜ければいい。だが忘れるな。ヒースクリフも、アスナも、キリトもないことを。彼等がいないアインクラッドで最強は俺だということ。」

セツナの隣でギルバートはゆっくりと体を起こした。彼のセツナに向けた目は、呪詛を含んでいるのか。それとも恐怖なのか。エギルには分からない。セツナがプレイヤー達の希望となりえるのか。それとも、プレイヤー間の均衡を崩してしまうのか。

「攻略は明日から再開する。詳細は追って連絡する。それまでは解散。以上」

◆
団員達が時間をかけて、ゆっくりと出ていった会議室の机。5つの席の中心にある、ギルドリーダーがつく椅子。セツナはそこに腰かけていた。

会議室にいるのはセツナと、本部に呼ばれた団員外のメンバーだった。エギル、クラインと《風林火山》メンバー、リズベット、シリカ。そこに団員達と入れ違いで来た顔馴染み加わる。

「なかなか似合ってるじゃないか。その椅子」

茶化す彼女にセツナは語る。いつもと同じ、感情のこもっていない口調で。

「俺は血盟騎士団の団長に就任した。それと、これまでの任務のことも話した。俺の情報はもう価値がない。済まない」

「謝らなくてもいいさ。値が張り過ぎて売り物にならなかつたくらいだ」

小柄な彼女はかぶりを振る。

「まさかお前さんが、自分から正体を晒すなんてナ」

「アルゴ、おめえは知ってたのか？ セツナが死神だつてよ」

クラインがそう聞くと、アルゴは肩をすくめた。

「ああ、そうだヨ。オレっちはセツナが死神だつて知ってタ。それだけじゃない。セツナにオレンジプレイヤーの情報をやってタ」

アルゴは気が抜けた口調で告げる。その何気なく出た言葉の数々が、他の面々に重く突き刺さるようだった。

「そんデ、オレっちは何でここに呼ばれたんだ？」

セツナはアルゴを見据える。

「アルゴ、これからはエギルに攻略に有益な情報を提供してほしい。どうしても金がいるなら俺が工面する」

セツナの視線が、拍子抜けした顔のエギルへと移る。

「エギル、中層にいるプレイヤーが早く攻略に参加できるよう、これからも育成に努めてほしい。アルゴなら、レアアイテム入手のクエストを多く知っているはずだ。見込みのある者は血盟騎士団に入れる」

エギルが店の利益の殆どを、中層を拠点とするプレイヤー達の支援に充てていることは知っている。商人や職人という立場に身を置くプレイヤーは、ゲームとして考えれば異質だ。本当に命懸けのゲームになってしまったSAOだからこそ、彼等のようにサポートを目的としたプレイヤーが現れたのだと思う。その中で、エギルほど善良な商人をセツナは知らない。富を築こうと詐欺まがいの高値取引を持ち掛ける者もいる中で、エギルは攻略に参加できずにいる者達を前線に行かせるため、彼等に稀少なアイテムや装備を殆ど無料に近い額で提供していたのだ。

エギルは黙ったままだ。アルゴはいつものペースを崩さず、「良いヨ」と答える。

「セツナの頼みだからナ。タダでいいサ」

エギルの答えは待たず、セツナの視線はクラインへと向く。

「クライン、《風林火山》のメンバー全員を血盟騎士団に入れてほしい」

「何だとおっ!？」

クラインが噛みつくように言った。

「ギルドが互いに牽制し合うのは、攻略の妨げになる。攻略が厳しくなるこれからは、《風林火山》のような小規模ギルドが生き残れる可能性は低い」

淡々と述べるセツナに向けるクラインの目が陰しさを増していく。目蓋が痙攣したように小刻みに動いていた。

「ぶぎけんじやねえぞ！ 勝手なことばかり言いやがって。大体どういうこった、今まで攻略に出なかつたくせして、今更ギルドのリーダーになるってよ！」

セツナは真っ直ぐとクラインの両眼から視線を逸らさない。彼から向けられた困惑も怒りも、全てを受け止めるように。

「ゲームをクリアさせることは、プレイヤーの総意だ。それを果たすために、あんた達の力が必要なだけだ」

淡々と述べるセツナの口調が気に障ったらしい。だがクラインは更に怒号が飛び出すだろう口を結び、逡巡した後 ゆっくりと言葉を紡いだ。

「おめえがいくら強くてもよ、俺は認めねえ。おめえがクリアするくらいなら、俺がクリアさせる。こいつらと一緒に、俺が茅場の野郎をぶっ殺す……！」

クラインは乱暴に靴音を鳴らしながら、扉へと歩き始めた。《風林火山》のメンバー達がリーダーの後についていく。クラインは扉の前で一旦足を止め振り返る。

「ひとつ聞きてえ。おめえはレッドプレイヤー共を殺して、俺達を守ってたつもりか？」

似たようなことをアスナからも聞かれたな。真実を知って絶望と怒りを向けてきた彼女を思い出した。クラインの怒りは残念ではあるが、同時に安心する。

「初めて会ったとき、あんた達がいた森にはオレンジギルドがいた。俺が始末しなければ、あんた達は襲われていたかもしれない。結果論だが、俺のしてきたことがあんた達を守ったことになる」

クラインは俯いた。目がバンダナの影に隠れて見えなくなる。「おめえがキリトと一緒にだと思っただ俺が馬鹿だったぜ」

そう吐き捨てて、クラインは扉を開け仲間と共に出ていった。

「セツナさん……」

掠れたシリカの声が入ってくる。右肩に乗っているピナが、主人の不安を感じてか小さな瞳を彼女に向けていた。

「本当なんですか？ 犯罪者を……」

「ああ、本当だ。俺はお前が思っているような『良い人』じゃない」
そのセツナの言葉は刃だった。あのと時交わした指切り。再会の約束だったが、シリカはこんな再会を望んではいなかっただろう。

「シリカとリズベットはアスナの面倒を見てほしい。リズベットは店を続けて、武器を作ってくれ。あんたのスキルは必要だ」

シリカは何か言いたいようだが、口を半開きにしたところで止めた。そして消え入りそうな声で「はい……」と頷く。

「セツナ……」

ずっと沈黙を貫いていたリズベットが口を開いた。

「もしアスナが街から出られるようになったら……、攻略に参加させるの？」

「俺も彼女の意思は尊重するつもりだ。だが彼女も貴重な戦力だ。戦う意志があるのなら、彼女にも攻略に参加してもらおう」

セツナがそう言うと、リズベットはつかつかと目の前まで歩いてきた。机に両手を置き、セツナを睨みつける。目尻に涙が浮かんでいた。

「分かった、セツナに協力する。でも約束して。アスナが元気になっても、絶対に攻略に参加させないって」

リズベットはそれだけ言うと、さつき立っていたシリカの隣に戻った。

「約束する。それであんたはどうだ、エギル」

会議室にいる全員の視線がエギルに集中する。エギルは場の空気に流される男ではない。彼は状況を見つめ、そこから導き出した自身の答えを述べてくれるだろう。

「俺は……」

逡巡を挟み、エギルは続けた。

「中層にいる奴らを鍛えてやるさ。言われなくても、そのつもりだ。だが勘違いはするな。お前に協力するわけじゃない。それなりのレベルになっても、お前の率いる血盟騎士団に入るかはそいつら次第だ」

エギルの視線が真っ直ぐセツナへと向けられる。「ファースター

怒りの銃弾」で主演を務めたドウエイン・ジョンソンにも劣らない迫力だ。

「お前みたいな強いリーダーが必要なのは確かだ。でもな、力で抑えつけられるのは最初だけだ。そう長くはもたねえぞ」

◆

世界がその様相を変えるのに、一週間もかからなかったと思う。

それは革命だった。それまで世界を包んでいた雰囲気はがらりと変わり、あたし達はその変化に着いていくのに必死だった。

きっかけは間違いなく第75層のボス攻略だ。あたしはその場になかったから詳しくは知らないけど、そこで起こった出来事をインクラッドで知らない人はいないだろう。あの日から立て続けに、プレイヤー達を驚かせるようなニュースが続いた。

ひとつは、血盟騎士団リーダーのヒースクリフが茅場昌彦だったということ。

これは全プレイヤーを絶望のどん底に突き落とした。攻略組の最前線に立ち、伝説とまで言われた強さとカリスマを備えた聖騎士が、あたし達をこの世界に閉じ込めた存在だった。正直あたしにとつてショックだったのは聖騎士様の正体じゃなくて、彼の正体を見破った剣士の死だった。

彼がいたから、あたしは鍛冶屋としての熱を燃やし続けることができた。この世界で生き抜こうって思えた。その彼がいなくなってしまう。

そしてもうひとつ。リーダーを失った血盟騎士団に、新しいリーダーが現れたこと。

新しいリーダーの男は無名だった。誰も知らないプレイヤーがいきなり最強ギルドを率いると宣言し、それを聞いた多くの人々が困惑の声を上げた。でも無名は表での話。その新リーダーは、裏では有名人だった。インクラッドで発刊された新聞の見出しには、大きくこう書かれた。

【血盟騎士団の新団長に死神が就任】

死神の噂はあたしも馴染みのお客から聞いたことがある。犯罪者

プレイヤーを殺し回っている殺し屋。その存在については両論賛否だ。犯罪の抑止力になっていくから大助かり。デスゲームになったこの世界では、殺人は殺人。

新聞が発行されてから、店に来るお客の殆どがその話を持ち掛けた。あたしが彼の剣を作ったことは知られていないようだけど、それを良いことにお客達は容赦なく彼に対しての意見を飛ばしてきた。

あの聖騎士の代わりが務まるのだろうか。

あまり強そうには見えないけど。

そもそも、死神なんて本当にいたのか。

ただの目立ちたがり屋なんじゃないか。

正直なところ、あたしは彼が本当に死神なのか信じ切れずにいる。どちらかというところ、信じたくないという気持ちなのかもしれない。

皆不安なのだ。本当にゲームがクリアされるのか。新しいリーダーが、自分達を導いてくれるのか。彼のリーダー就任は、まだあたし達に希望を与えてくれるニュースにはなっていない。

ヒースクリフの失踪と同時に、新聞では副団長であるアスナの退任も報道されていた。ご丁寧なことに、夫を失ったあの日に街で湖に飛び込もうとした写真まで掲載された。写真の隅っこにはあたしも写っていた。

アスナは結婚したことを隠していたけど、それもどこから知られたのか報道された。相手が誰なのか、それはまだ知られていないらしい。それはせめてもの救いだ。あの2人のことがどこかで面白おかしく語られているなんて我慢できない。

そんな世間の変わりようなどアスナは知りもしないだろう。隣に無造作に置いたベッドに腰かけたあたしは、その綺麗な顔に呼びかける。

「アスナ、段々寒くなってきたね」

アスナは何も答えない。その目は閉じたまま。まるで辛い現実を視界に収めないように。

あの日、キリトを失った日からずっとこうだ。1日中寝ているわけじゃない。時々目を開けているけど、いくらあたしやシリカが話しか

けても反応してくれない。ずっと虚ろな目で天井を眺めている。食事も摂ろうとしない。この世界の空腹感や満腹感は疑似的なものでしかないけど、あたしは毎日アスナに水を飲ませ、スプーンで食事を食べさせてあげている。そうしないと、アスナが死んでしまうように怖いから。空腹に耐えきれなくなつて、ある日突然アスナが砕けて消えてしまうような気がするから。

血盟騎士団の本部で彼の団長就任を見届けた日から、あたしはセルムブルグにあるアスナの部屋で暮らし始めた。昼はリンダースにある店で武器を作つて、閉店後はリゾート地みたいな街に帰ってくる。

「シリカ、何か変わったことあった？」

「いえ、何も……。ずっと眠つたままです」

シリカは所在なさげに言った。中層を活動拠点にしていたこの幼い少女も、あたしと一緒にこの部屋に移り住んだ。あたしが店にいた間は、シリカにアスナの様子を見てもらっている。こんな小さな女の子には酷な役割だと思う。

「ごめんね。シリカもずっと部屋に籠りっぱなしじゃ退屈でしょ？」

「いいんです。あたしにできることは、これくらいですから。それに、キリトさんの奥さんじゃないですか。もしものことがあったら、キリトさんが悲しみますし」

よく出来た子だと思う。あたしは愛おしくなつて、シリカの頭を撫でた。妹ができたみたいで何だか嬉しい。

「そうだよね。アスナはキリトの奥さんだもんね。あたし達が守らなきゃ」

あたしとシリカはキッチンに行つて食事の支度をした。料理スキルを完全習得していただけあつて、アスナの部屋は調理器具が完備されている。器具のランクとあたしの料理スキルが釣り合わなくて、何だか使うのがもどかしい。

あたしはお粥をスプーンで掬い、アスナの口に流し込む。アスナは口に物が入っても嘔もうとしないから、飲み込めるようにお米がどろどろに溶けるまで調理時間を設定しなければならない。

「ねえシリカ」

零れないよう慎重にスプーンを運びながら、あたしは隣にいるシリカに訊いた。

「セツナのこと、信じられる？」

「あたしは……」

シリカは俯きながら答えた。その反応だけで分かる。きっとシリカも、あたしと同じ気持ちなんだろうな。

「セツナさんのことは信じたいです。でも、分からないんです。あたしを助けてくれたセツナさんが、人を殺していたなんて……」

シリカは泣き出してしまった。肩に乗っているピナが、主人の頬に顔を摺り寄せている。あたしはそんなシリカを優しく抱きしめた。

「分からないんです……。キルトさんがいなくなって、セツナさんが死神で……。何も信じられなくなりそうで怖い……」

胸で泣くシリカの頭を撫でながら、あたしも泣いていた。あたしは嗚咽を必死に押し殺した。この子の前で不安な顔を見せちゃいけない。年上として、あたしはいつものリズベットでいなければ。

「あたしも分かんない。何を信じたらいいのか。でも、今はセツナを信じてみよう。あの人が本当に死神だったとしても、あたし達のためには戦おうとしてくれるのは本当だよ」

セツナが団長になって、もう10日が過ぎようとしている。意外なことには、血盟騎士団を抜ける団員はいなかった。団長就任の翌日から迷宮区の攻略を始めたけど、今のところまだ犠牲者は出ていない。多分、皆誰かにすがっていたんだと思う。あたしと同じように。

アスナの食事を終えたところで、ドアをノックする音が聞こえた。あたしはドアを開けて、来客を出迎える。

「様子はどうか」

フードを脱いだ来客がそう尋ねる。あいつとよく似た黒装束の出で立ち。彼は今や有名人だから、こうして顔を隠さないと街を出歩けなくなった。もつとも、あたしにとってはギルドの団服より、こっちの方が違和感はない。

「いつもと同じ。さっきご飯食べたところだよ。あたし達はこれからだから、セツナも食べてよ」

「ああ」

毎日のように、セツナは攻略を終えた帰りにここへ寄っている。アスナの近況を聞いたためだ。ここ数日はそれに加えて、自然と一緒に夕食を食べるようになっていた。

セツナは迷わず寝室へ入っていく。眠り姫のようなアスナの寝顔を眺めて、セツナは何を思っているんだろう。彼とアスナの間に関係があったのか、あたしは知らない。多分、彼が死神だったことに関係があるのかもしれない。でも、あたしにそれを聞く勇気はなかった。

「セツナ、攻略はどう？」

ダイニングを囲み、パスタ料理を食べながらあたしはセツナに尋ねた。

「順調、と言うべきかは分からない。犠牲者は出ていないが、前よりもペースが落ちているのは確かだ」

「しよがないよ。ずっとばたばたしてたんだし」

あたしは隣に座っているシリカを見やる。ソースが口元に付いていた。それをナプキンで拭いてあげる。

「子供扱いしないでください」

「はいはい」

シリカは不満そうに目尻を吊り上げた。何だかんだで、まだ子供だな。

「料理、美味くなったな」

セツナの言葉が嬉しくて、自然と笑みが零れた。食事は大体あたしがつけている。そんなに高くはないけど、自炊していたからそれなりのものは作れる。

「でしょう。あたしもスキル上げてるんだから」

「材料切ったのはあたしですよ」

シリカが唇を尖らせてそう言った。何だか、子供を持った夫婦みただ。でもパスタをすすするセツナを見て、そんな下らない感慨は消えた。

この人はたぐさんの犯罪者を殺してきたんだ。あたしが作った剣も、殺人のために使われた。

どうしてセツナは死神になったんだろう。死神だったセツナが、どうして今になって攻略に臨む決断をしたんだろう。

セツナの黒い瞳から、彼がどんな感情を以って戦いに赴こうとしているのかは分からない。でも、今のあたし達には彼しか頼れる人がいない。

キリトは死んだ。

アスナは攻略から退いた。

あたし達に信じるか信じないかを選択する余地はない。今は信じることしかできないのだから。

黒の剣士亡き後に現れた、もう1人の黒の剣士を。

第19話 誕生には祝福を

薄暗い迷宮区の回廊に不揃いな靴音が反響している。均整の取れた軍靴とは程遠い一団の装備は、属している集団を示す紅白の鎧。

傍から見ればなんておめでたい色だろうと、すぐ後ろの靴音を聞きながらセツナは思った。現実ではそろそろ大晦日の歌合戦に向けて、歌手の選考が行われていることだろう。

整備された床は気を付けなければ滑りそうなほどに平坦だ。床だけでなく壁も天井も。下層では人力で掘ったかのように荒削りな洞窟だったのに、第76層の迷宮区はまるで機械で掘り進めた後に研磨したように整えられている。中世のファンタジーをモチーフとしたアインクラッドには不釣り合いな精巧さだ。これから上層はこのような整った迷宮を進むことになるのだろうか。

これが感慨なのか不安なのか釈然としないまま、セツナはボス攻略部隊を引き連れて進んでいく。第76層の迷宮攻略を始めて11日。ダンジョンのマッピングが完了し、あとは最深部にいるボスへと挑むのみ。

「この先の安全地帯で10分休憩する」

セツナは団員達に言った。彼等から反応はない。セツナに向けられる視線は前任者が向けられていた尊敬の眼差しではない。ギルドを抜けた者はまだいないが、それがセツナへの信頼故ではないことを理解している。何も言わないということは異論がないことと結論付け、セツナは視線を前へと戻す。

目的までの中間である安全地帯には先客がいた。ざっと6人。見覚えのある装備だ。血盟騎士団に気付いたリーダーの男がこちらを睨む。正確には先頭を歩くセツナに、その視線は定まっている。

「休憩」

安全地帯の圏内に入ったところで、セツナはそう団員達に指示を飛ばす。彼等は磨かれた床に腰を落ち着け、水や食料を口に含む。

「あんたも来ていたか、クライン」

「おう」と、クラインは分かりやすいほどに眉を潜める。

「目的がボス攻略なら、俺達とレイドを組んでほしい」

「共同戦線てか。そりゃあ、俺らが小規模ギルドだつっう憐れみか？」
「違う。《風林火山》も貴重な戦力だ。それに、これからはギルド同士で牽制し合うのは攻略の妨げと、前にも言った」

「そうかい。新しい団長様はかなり慎重と見えるな」

クラインに皮肉が言えるのかと意外に思ったが、それは黙っておく。言えば、この野武士が冷静さを欠いてボスの間へと突っ込んでいくことが予想できる。

「今は俺に対する不快さよりも、状況を見据えて行動してほしい。後先のことを考えなければ命に関わる」

「ああ？　俺達がただ闇雲にこれまで戦ってきたって言いてえのか？」

態度だけで向けてきたクラインの感情が、とうとう露骨に現れた。クラインは食いしばった歯を剥き出しにする。頬に生えた無精髭が震えている。

「これまでではなく、これからのことを言っている。共同戦線を張った方が、互いに生存率は上がる。協力してくれるのなら報酬を払う」「いらねえよそんなもん」

「けっ」とクラインは一旦視線を逸らし、少し熱を冷ました面持ちで視線を戻す。

「むかつくがお前えの言う通りだ。協力はしてやる。ただし、俺達は俺達で戦う。お前えの指揮に入ったわけじゃねえ。ドロップしたアイテムとコルは倒した側のもんで恨みつこなしだ」

「十分だ」

取引が成立したところで、セツナはオブジェクト化させた水瓶をおおる。水は喉を伝い、渴きを潤してくれた。飲み物を飲めば喉は潤う。ゾディアーク以来PKはしていないが、恐らく血の味はもう感じることもないだろう。

これは寂しさと呼ぶべきだろうか。セツナは自分の抱えるものを与える言葉を探す。

でもそれは見つからない。どうでもいいことこの言葉は見つかるの

に、なぜ本当に必要なときに見つからないのか。セツナはただ進む。今はそうすることしかできない。

何度かモンスターとのエンカウントを経て、松明に挟まれた扉へと辿り着く。扉には赤子と我が子を抱く母のレリーフが彫られている。ダ・ヴィンチの絵画「ブノアの聖母」を思い出した。

団員達はウインドウを呼び出し、装備の確認をしている。セツナもポケットに回復ポーションがあるか確認し、手持ちのアイテムに結晶アイテムを追加でポケットに入れた。第75層のボスの間は結晶無効エリアだったようだから同じ事態が起こることは有り得るが、一応備えておくに越したことはない。

「準備はいいか」

セツナは団員達に呼びかける。

「75層と同じように結晶アイテムが使えない可能性がある。ボスの情報がないため、先手を取らずボスの動作パターンを見極め攻撃に移る。前衛はダメージを負ったらすぐ後退してほしい」

反応は待たず、両扉の中央に手をかける。重々しい音を響かせながら、聖母の顔が2つに割れた。

「——おいー」

クラインの声が聞こえ、反射的に振り返る。セツナの目に映ったのは鈍色の閃光、ソードスキルの閃光だ。即座に剣を抜く。防御に成功したが、衝撃でセツナの体は扉の奥へと押し込まれた。

扉がゆっくりと閉じ始めた。こちらへ入ろうとする《風林火山》の面々を団員達が寸でのところで抑え込んでいる。

「セツナ、早く出てこい！ セツナあ!!」

狭まっていく扉の向こう。セツナが注意を向けていたのはクラインの声ではなく、冷やかな微笑を浮かべるギルバートの顔だった。

扉が完全に閉まる。ボスの間に放り込まれたのは、セツナ1人だけではなかった。運悪く《風林火山》メンバーを抑えていた団員の1人が、中へと追いやられてしまったらしい。

「出せ、出せよおっ!!」

扉を叩きながら団員が叫ぶ。まるでデスゲームが始まったあの日

のようだ。

「構えろ」

セツナがそう言うと、団員はこちらを振り返り涙で潤った目で睨んでくる。その目を向けるべきはボスだというのに。

「死にたくなければ戦え。それしかない」

セツナは部屋を見渡す。広い円形の床に沿って置かれた松明に火が灯っていく。松明はセツナ達2人の反対側から時計回りに灯り、一周するとボスの姿が明るみになった。セツナはボスを足元から見上げていく。

細い2本の脚。股に生えた申し訳程度の毛。尻から腰にかけての曲線。2つの豊かな膨らみ。膨らみの先端にあるさくら色の突起。細い首。ふつくらとした紅の唇。コーカソイド特有のくぼんだ目元。髪のない頭。

人間。それも女。その肢体は目測で5メートルくらいだろうか。その顔に視点を集中させると、イエローのカーソルと名前が表示される。

《The Lillith》——悪魔の母。

豊満な巨女は絶叫した。部屋の空気が震え、団員が目を閉じて耳を塞ぐ。

「目を背けるな。奴の動きを見ろ」

言っつてすぐ、セツナは自分の言葉を後悔する。恐る恐る目を開けた団員は巨女を見て悲鳴をあげた。

巨女の股から、ずるずると薄い膜に覆われたものが出てくる。1つ出るとまた次が。2つ目が出るとまた次が産まれてくる。床に落ちたその膜が破れ、中から丸々とした赤子が出てきた。赤子といっても、セツナと同じくらいの背丈がある。産まれたての赤子はつたない足取りで歩き始める。まだ首がすわっていないせいで揺れる顔に無邪気な笑みが浮かんでいる。その姿を注視すると《Lillin》という名前が表示された。

セツナは駆け出した。母は5人を産んでもまだ物足りないようで、6人目を産もうとしていた。セツナは《リニア》を産まれる途中の

赤子に叩き込んだ。まだ産まれていない赤子の体が砕け散る。1秒にも満たない硬直時間の後、母の腹に一閃を見舞った。

リリスは身をよじらせた。我が子を殺され憎しみの眼差しをセツナに向けてくる。巨大な脚が目の前で大きく旋回し、その爪先を紙一重で避けたセツナはバックステップを踏んで距離を取る。

セツナの視界の隅に赤子達が集まっているのが見える。その群れの中から悲鳴が聞こえた。凝視すると、イエローの中にグリーンのカーソルが表示される。

悲鳴が止んだ。直後に聞こえた破碎音と、赤子達の頭上へと舞っていく光の粒子。

迫ってくるリリスの四肢を避け、セツナは赤子達の中に飛び込み、両手の刃で円を描いた。《クリムゾンサークル》によって赤子達が消滅し、その欠片が先に消えた団員のポリゴンと混ざり合う。

蒸発していく粒子の隙間からリリスの顔を覗く。我が子を殺された悲しみで、真つ赤な涙を両眼から流している。

セツナは剣と鞘を握りしめ、その涙に濡れた顔面目掛けて跳躍した。

◆
？

「何のつもりだてめえ！」

クラインに胸倉を掴まれても、ギルバートの顔は涼しげだった。それが更に神経を逆撫でしてくる。

「セツナはお前えの仲間じゃねえのかよ！　こんなモンスターPKだろうが！」

「彼を同志と認める者が我々の中にといても」

ギルバートはクラインの手を払いのけ襟を直す。

「彼は危険な存在です。ただでさえプレイヤー間の均衡は危うい状態だというのに、それを崩壊させるわけにはいきません。クライン殿、あなたも攻略組に身を置くのならお分かりでしょう」

「だから殺すつてのかよ。こんなのレッドプレイヤーと変わらねえ」

「必要なことです。共に中へ入ってしまったフレデリックには気の毒

ですが、致し方ありません」

「くそつたれが！」

クラインは扉へと手をかけた。さつきはセツナが軽く触れただけで開いたというのに、今は微動だにしない。いくら蹴つても殴つても、扉に彫られた聖母は微笑みを崩さない。

「セツナア！」

クラインは叫んだ。中にいるセツナに聞こえているかは分からないが、そうせずにはいられなかった。扉からは何も聞こえてこない。システムによつて、完全に中と遮断されている。

「ちくしょお！」

叫びに応えたのか、扉が開いた。割れた扉の中央からボスの間の空気が流れ込み、それがクラインの髪を揺らす。静寂と暗闇に囲まれた部屋の中央に、セツナはいた。両手に剣と鞘を携えて。

「まさか……」

ギルバートの掠れた声が聞こえたが、それに意識は向けずクラインは剣を納めるセツナを凝視する。

セツナはゆっくりと扉へと歩いてきた。クラインには目もくれず、ギルバートにその黒い瞳を向けている。

「これで満足か、ギルバート」

「……フレデリックは」

「死んだ」

セツナは無感情にその一言を述べた。声にも表情にも、感情というものが一切排されている。

その顔を見てクラインは悟る。彼にとって人の死とは、日常的で珍しくもないことを。

クラインも多く死を見てきた。攻略組というアインクラッドで最も死のリスクが高い場において、目の前で何人も死んでいった。でもこの少年が見てきた死は、自分の比ではない。彼は幾多もの死を見て、それに伴う感情を捨てて今に至る。

クラインは確信する。セツナが死神だったことを。自分達が攻略に勤しんでいた傍で、彼が自分達を守るという大儀のために、犯罪者

を屠ってきたことを。

死に伴う感情を錆として削り落とすことで、死神は誕生したのだ。「貴様なぜフレデリックを死なせた！」

1人の団員が吼えた。クラインはそれに怒りを感じずにいられない。自業自得だ。だがセツナはクラインとは違うらしい。

「彼を守れなかった責任は俺にある。だが、彼をボスの間に放り込んだのは誰だ。誰が俺を殺そうと画策していた」

団員達は沈黙する。誰が言い出したのかはともかく、全員が賛同したのだろう。セツナは続ける。

「今回のことは他言しない。ギルドの沽券に関わるからな。だが忘れるな。同志を死なせ血盟騎士団の名を汚したのは、他でもない貴様らだということを」

セツナの声は、お世辞にも張りがあるとは言えない。耳を澄まさないければ聞き取ることが難しい。だがこのとき彼の声は、空気を震わせたように思えた。彼の言葉がボスの間の、迷宮区に蔓延する妖気と混ざり合って、自分達の耳に入った気がした。

ゆつくりと、ギルバートが進み出る。彼はセツナの前で片膝を付いた。

「ご無礼をお許しください、セツナ団長。私達にはあなたが必要です。どうか、私達をお導きください」

ギルバートの声は震えていた。さっきの涼しげな姿勢がすっかりと消えていた。装備はギルバートの方が豪華だというのに、その姿はまるで王に屈服する最下カーストの賤民せんみんのようだった。

「これからも攻略に励んでもらう」

それだけ言ってセツナはコートを翻す。その視線の向こうにあるのは、次の層へと続く扉だ。

「77層のアクティベートに行く」

団員達を率いて歩くセツナの背中を、クラインは見つめていた。鎧の類は身に着けず、足元まで届くコートは血盟騎士団の所属を示す白亜の生地だが、あしらわれた装飾は他の団員と比べると圧倒的に少ない。必要最低限といった感じだ。

キリトと同じく実用性重視なのだと思う。あの黒いコートを纏った剣士の姿が重なる。

デスゲームが始まったあの日と同じだ。

自分を気遣い、手を引こうとしてくれた彼の手をクラインは拒んだ。共にログインした、今の《風林火山》の仲間達と一緒に生き残るために。

あのとき無理矢理にでも彼を仲間を迎えていれば、未来は変わっていたのだろうか。

「あの時、お前を……置いて行って、悪かった。ずっと、後悔していた」
ヒースクリフと戦う前、キリトはそう言った。後悔を続けていたのはクラインも同じだ。ずっと自分を罰するように攻略へと走っていた彼をなぜ止めなかったのか。ゲームでは強がついてもまだ子供だったのだ。彼より年長であるクラインが守るべきだった。

彼が死んだ今、後悔は呪いのようにクラインを縛りつけている。自分の命と皆の命運を懸けた戦いへと赴く彼を、麻痺をかけられたクラインは見ることしかできなかった。

「セツナ」

セツナは足を止めて振り返る。

「俺達を血盟騎士団に入れてくれ」

「えっ？」と後ろにいる仲間達のどよめきが聞こえた。

「お前えを認めたわけじゃねえ。でもよ、もう嫌なんだよ。誰かが目の前で死ぬのは」

セツナは無表情のまま手を差し伸べる。彼がこんなことをするのは意外で、クラインは戸惑いながらも握手に応じた。

「一緒に戦ってくれ、クライン」

受け入れがたいことだ。でも彼と取り合うのなら、クラインは認めなければならぬ。

セツナによって守られていた世界。セツナが築いた死者の山。

自分達は知ってしまった。自分達は多くの死者達の上に立っていることに。もう目を背けることは許されない。



「プレイヤーの育成はどうだ」

アルゲードにある雑貨屋の2階でお茶を飲みながら、セツナは向かい合って座る店主に尋ねた。

窓から見下ろせる路地は珍しく人通りが少ない。第77層が解放されて2週間。続いて第78層が先日解放されたばかりで、プレイヤー達は未踏の主街区を見に上層へ行っているのだ。街開きと呼ばれる日は客足が少なく、店主もこの日は店を閉めている。

「アルゴが寄越してくれた情報のおかげで順調だ。そろそろ前線に出してもいい奴が何人かいる」

「そうか、なら紹介してほしい」

「前にも言ったろ。KOBに入るかはそいつ次第だつてな。聖竜連合に入りたがっている奴だっているんだ」

「あのギルドは規模だけだ。昨日のボス攻略でも足を引っ張られて何人か死にかけた」

先日挑んだ第77層ボス攻略は血盟騎士団と聖竜連合の合同で行われた。犠牲者は出なかったが苦戦、というより面倒な戦いだつた。聖竜連合は血盟騎士団に強い対抗意識を持っているらしく、セツナが参謀職達と立案した作戦を無視してボスに特攻じみた攻撃を仕掛けていった。致命的なダメージを負った彼等を回復するために、前衛を何人が回復役に回さなければならぬ事態になった。

恐らく、ヒースクリフとアスナを失った血盟騎士団から「最強」の名を奪う狙いがあったのだろう。

「元々危なっかしいギルドだつたからな。攻略のためにオレンジ化までするような連中だ」

「ああ、レッドプレイヤーになったメンバーを何人か始末したことがある」

「始末つて、PKか？」

「ああ」

エギルは目蓋で目を半分だけ覆う。それは知り合いとしての絶望か。それともセツナの言葉にある事実を拒もうとする葛藤か。それを読み取る「X—MEN」のプロフェッサーXじみた能力をセツナは

持っていない。

セツナが死神だったことは、まだ完全に信じられたわけではない。証人がいないのだから当然だ。あの頃は他人との関わりを避けていた。PKの現場を目撃されれば、たとえグリーンカーソルの罪のない者まで殺していたのだから。

「何も聖竜連合だけじゃない。血盟騎士団にもオレンジ化する者はいた」

それがフオローになるのかは分からないが、取り敢えずその事実を述べておく。

「そいつらも、殺したのか？」

「ああ」

「信じられねえな。KOBは清廉潔白なギルドだと思っていたよ。お前を除いて」

「どこの集団にも網目がある。網目から零れていたのは俺だけじゃないということだ」

セツナはトラビアでの出来事を思い出す。膨らみ過ぎて統制が取れなくなった集団に身を置き、自分の欲望を花開かせた軍人達を。

「なあセツナ。お前が死神だってんなら、今まで何人殺した？」

「少なくとも200だ。正確な数は数えていない」

「全部、1人ですか？」

「いや、最初は1人じゃなかった。ヒースクリフが集めた犯罪者狩りの部隊がギルドにあった。勿論秘密裏だが」

「仲間がいたんなら、そいつらは今何してる。まだギルドにいるのか？」

「全員死んだ」

なぜ死んだのか。その質問をエギルはしなかった。代わりにカツプのお茶を飲み干す。懊悩も一緒に飲み込んでいるように見えた。

「セツナ、今KOBはお前が率いておくべきなのかもしれないねえ。だが、アスナがもし戻れるようになったら身を引け」

「それはできない。リズベットと、もうアスナを攻略に参加させないと約束した」

「ああ、そりや俺も聞いたさ。でもな、ギルドの連中がお前に従ってるのはお前が怖えからだ。逆らえない今だけなんだよ。お前がリーダーでいられるのは」

エギルは新聞をオブジェクト化させてセツナに差し出す。何枚も重ねられた紙の束は、全ページに渡って血盟騎士団の新リーダーであるセツナに対する評価が掲載されている。就任から犠牲者を殆ど出さず2層のボスを撃破したことに賞賛を述べる記事もある。だがそれよりも多く、リーダーとしての技量に苦言を呈す文章が目立つ。

「あまり良く思われてはいないみたいだな」

「お前をリーダーと認める奴も出始めているが、それはほんの一握りだ。知り合いに聖竜連合のメンバーがいるんだが、そいつから聞いたんだ。先週ギルバートが本部に来て、同盟を持ちかけてきたってな。お前はそれを知ってるのか？」

それは初耳だった。血盟騎士団と聖竜連合は関係が良好とは言えない。合同で攻略に臨むことは過去に何度かあったようだが、それ以上にギルド間で交流することは皆無に等しかったと聞いている。合同で攻略にあたる際は、よく副団長だったアスナが交渉に赴いていたらしい。

「聞いていない」

「お前をリーダーの座から引きずり降ろそうとしてるんだ。ギルバートはアスナに次いでKOBの3番手にいた奴だぞ。お前が出てこない限りやヒースクリフの後任を務めてたって言われてる」

「3番手であるの實力か」

「問題なのは強さじゃねえさ。奴に味方する奴が多いってことだ。現状じゃ、お前よりも奴の方が味方は多い。それでいいのかわよ」

「俺は権力を握るために団長になったわけじゃない」

セツナは新聞の中にあるコラムの文字列を目で追う。死神がなぜ攻略組を牽引しようとするのか。日々異なる意見や見解が述べられ、誌面で繰り広げられる議論には終わりが見えない。セツナの明言がない限りこれからも続くだろう。

「他のギルドと協力した方が効率が良い。ギルバートが俺よりもリ

ダーに相応しく、彼に生き残ったプレイヤー全員の命を背負う覚悟があるのなら、俺は団長の座から降りてもいい」

セツナはお茶を飲み干し、椅子から立った。

「お前は皆の命を背負うことで、罪を償おうとしてるのか。ゲームをクリアさせて皆を現実に戻すことが、贖罪になると思ってるのか？」
「俺の罪は償い切れるものじゃない。たとえ殺した数より多くを救っても、俺は赦されない。死んで赦されるのなら喜んで死ぬ。だが俺は今死ぬわけにはいかない。勝手なのは承知だ」

セツナはドアを開ける。そのまま部屋を出ようとしたところで、後ろからエギルの沈んだ声が聞こえた。

「お前、罪を背負い続けるつもりなんだな」

エギルが導き出した答えに添削はしない。正直、セツナも答えを導き出せずにいる。たとえ出たとしても確信が持てないだろう。

十字架にかけられたキリストは、自分の血で大地を濡らし人類の罪を償った。

でもセツナは神の子ではない。汚れたセツナの血が流れたところで罪は償えない。

「前線に出せるプレイヤーのリストを、メッセージで送っておいてくれ」

それだけ言ってセツナは部屋から出た。

◆
?

仮想世界には人がいて、音があつて、空気があつて、匂いがある。でもそれらを偽物と断じてしまうのは、現実への回帰願望からだろう。

視界の隅に見えるゲージ化された命。

人や物の上に浮かぶカーソル。

決して壊れないよう規定された建造物。

傷ついても血が流れない体。

人間は必ず汚れる。たとえ外に出ず体に泥を付けず汗をかかなくても。生きている限り新陳代謝で皮膚に古い角質が浮かび上がって

くる。入浴せずに放置すれば角質は垢となり、垢は酸化した臭気を放つ。でも仮想世界の体はそうならない。体に付着した泥汚れはエフェクトであり、ポリゴンの体に血肉と内蔵と骨は詰まっていけない。一応入浴はできるが、それは精神的な娯楽のためだ。

人間は食物を摂取すれば、その残りかすを排泄する。栄養バランスが偏った食生活を続ければ、太るなり痩せるなりの変化が生じる。でも仮想世界ではそれが無い。いくら食べても排泄の必要はない。暴饮暴食しても太らず、絶食しても痩せることはない。ログインした時期の体型がそのまま維持される。

俺達はそれを忌避する。子供は特に。子供は何年経っても子供のままだ。ずっと身長が伸び続け、体重が増え続けてきた子供にとつて、恒常性というものは恐怖だろう。

皮肉なものだ。大なり小なり現実から逃避するために仮想世界へ訪れたというのに、そこで暮らすことを余儀なくされれば現実への帰還を強く求めるなんて。

俺達の身の回りにあるものは全て3Dオブジェクトという現実を形だけコピーしたものに過ぎない。アインクラッドで本物と言えるのは、プレイヤー自身の記憶と意思と感情。つまりは心や魂と呼ばれるもの。

俺はそれらを形作る要素は全て脳にあると考える。現実世界でナーヴギアに接続され、いつ焼き切られるかも分からない頭の中。

昔読んだ小説からの受け売りだが、その考え方に俺は共感した。俺は信仰に疎く、心や魂なんてものは無いと捻くれた考えだったから。頭の中に広がる俺だけの世界。それが本物と遜色ないディテールを与えてくれる。

俺の頭の中にある世界。即ち夢の世界。

夢の中にも人がいて、音があつて、空気があつて、匂いがある。

どこまでも広がる地平。それを埋めるように瓦礫が散らばっている。所々に建物の骨組みが危ないバランスを保ったまま立っている。無造作に散乱している瓦礫はどれにも黒い煤すすがこびりついている。ぼんやりと立っている俺が強く足を地面に押し付けると、少しだけ弾

力があつた。多分、この地面は消し炭が重なつてできたんだと思う。

風が吹いて、それが焦げ臭さを運んできた。俺は風上へと目を向ける。

俺がいる所は火が消えているけど、地平の彼方からオレンジの光が見える。その光は太陽よりは弱い。彼方に浮かぶ雲は真つ赤に染まっついていて、その赤い雲を黒い雲が覆つていく。

「向こうはまだ燃えているみたいだね」

俺の隣で奴がそう呟くように言った。俺はそれに疑問を抱きはしない。ここでは有り得ないことが起きるものだ。

「あんたとまた会うとはな」

「所詮は夢さ。僕は休眠状態にある君の脳が見せる幻でしかない。だが僕が君の夢に出て来るということは、僕は君の中でそんなに大きな存在なのかな」

「そうだな。あんたはナミエを殺した。俺はあんたを殺すために生きてきた」

「彼女を殺したのは僕ではなく茅場昌彦さ。茅場がナーヴギアに仕組んだ機構で彼女は脳を焼き切られた。そうなれば、僕を殺したのも君ではなく茅場ということになる」

澄まし顔で言っているが、奴の額には1本の戦が入っている。そこから流れる血が、奴の鼻筋を伝って顎からぼたぼたと落ちていく。

「あんたの額を刺したのは俺だ」

「でも現実で僕の脳を焼いたのは茅場だ。仮想での死が現実の死に繋がるよう仕向けたのは茅場だ。彼はこの世界の神なんだよ」

「傍から見ればそうだろうな。でも現実でも仮想と同じだ。現実世界も神が創つたというのなら、向こうで人が死ぬように仕向けたのも神だ。でも殺人は殺した人間が罪を被る。人に死を与えた神ではなく人だ」

「なるほど、君は中々思索的な子だね。まだ若いのに」

奴は顎に手を添える。零れる血の奔流が少しだけせき止められた。

「神が罪を問われないのは、神の姿がはつきりしないから。神は果た

して老人なのか。もしかしたら老婆かもしれない。年寄りとも限らないな。子供の可能性もあるよ。僕達が茅場に罪を問えるのは、彼がどんな姿でどんな声をしているのかを知っているからだ。彼が肉体という物質を持った人間だからだよ。だから仮想での死は、全て茅場のせいと責任も罪も転嫁できる」

「俺が殺した者も全て、茅場が殺したことになるのか」

「君が今まで見てきたオレンジやレッド達は、そう思うことで罪の意識から逃れてきたはずだよ。その点に関して、君は異質な存在だね。君は罪を人のものと捉えている」

「神は死んだからな」

俺がその台詞を言うと、奴は頬のケロイドを歪めて微笑した。

「ニーチェか。確かに彼の言葉は、人類を神から解放させるものと解釈できるね。罪を負うのは人。罪を赦すのも人」

血まみれの顔から笑みを消した奴は、俺に刃を差し向ける。剣ではなく、言葉の刃を。

「それで罪を負う君は、どうやってその罪を償うつもりなのかな？」

奴は冷たく問う。

「現実世界で被害者の遺族達は茅場に憎悪を向けるだろう。でももし、ゲームでの状況が向こうで中継されていたらどうだ。ゲームで君が殺す場面が見られたら、それでも茅場に憎悪は向くかな。殺すためのシステムを作ったのが茅場でも、そのシステムが作動する原因が君にあると知ったら、遺族達は君を恨むだろう。仮想では犯罪者でも、現実での彼等は善良だったのかもしれない。子を失った親は嘆くだろうね。あんなに優しくかった子がどうして殺されなければならなかったのかと」

言葉や態度が穏やかだった奴はどんどん残酷になっていく。

「君はニーチェの言葉を借りておきながら、その決意は上辺だけで浅薄だ。どこかで逃れようとしていたんだろう。殺す相手は犯罪者。自分の意思ではなく命令だったから。自分も愛する人を奪われた被害者だから。哀れな悲劇の主人公を気取り、周囲の同情を集めて赦されたかったんじゃないのかな」

「黙れ!!」

俺は剣を抜き奴の頬にあるケロイドを刺す。奴はにたりと笑い、傷口とかろうじて繋がっていた口との間の皮がぶちぶちと千切れた。大きく裂けた口から出る言葉の奔流は止まらない。俺はそれが恐ろしくなり、剣を抜いて後ずさりした。

「たとえば生者が君を赦しても、君の罪は消えない。君に殺された人々はまだ赦しの言葉をかけることができないのだからね。たとえば僕がこの場で君を赦したとしても、それは本当の償いじゃない。ここでの僕は君が作った幻で、本当の僕はもう死んだんだから」

奴が彼方を指差した。その先には未だに燃える街。そこから体に炎を灯した人々が、テンプレのようなゾンビウオークで歩いてくる。髪が焼けながらも。服が焼けながらも。皮膚が焼けて筋繊維が露出していながらも。

彼等の先頭に少女がいた。俺は彼女を凝視する。彼女を包む炎の中から、俺を覗き込む琥珀色の瞳が見えた。

「ナミエー」

瞬間、地平から暴風が吹いた。

ゾンビ達と地面の瓦礫が舞い上がる。俺はその中で、なぜか風に抵抗することができた。隣にいたゾディアークはぼろぼろと体を崩しながら吹き飛んでいく。

重力のままに落下してくるナミエを受け止めるために、俺は両手を広げる。でも俺の体は重力に逆らい、ナミエの方へと引き寄せられていく。

ナミエは俺を見ていた。目蓋が焼け落ちた眼球。剥き出しになった琥珀色の瞳がどんどん大きくなる。

俺の体は上へと昇っていく。空を覆い尽くそうと膨らむ瞳に向けて。赤と黒が入り混じった空が見えなくなり視界が琥珀の色に占められていく。

吸い込まれていく。

◆ 起床アラームの音で目を開く。視界に映るのは、茶色の天井だっ

た。

軽く目眩を起こし、揺れる視界をはっきりさせるために目を擦った。セツナはしばらくの間ベッドの縁から床に両脚を降ろしたまま、何もせずただ宙を見つめていた。やがて空腹が訪れる。

朝食でも摂ろう。

そう思い立ち上がるも、体の重みがいつもより増しているように思えた。6時間も寝たというのに。

ウィンドウを呼び出そうと指を伸ばしたとき、視界の隅にあるメッセージアイコンが点滅していることに気付いた。それをタッチして、未読メッセージの窓を出現させる。

『今すぐ来て！・アスナの目が覚めた！』

第20話 墓前には花を

リズベットからのメッセージを受け取ってすぐ、セツナはセルムブルグに向かった。比較的温暖な第61層も、冬になった今は冷たい風が湖から吹いていた。空が曇っているせいか湖も建物も灰色の影が落ちている。いつもは暖かみのある街だというのに、この日はグラムと同じ冷たさを感じた。

通い慣れたメゾネットの3階に上り、ドアをノックする。すぐに住人がドアを開けてくれた。

「セツナ、入って」

リズベットに促されるまま几帳面に整理された部屋へと入り、そのまま寝室へと向かう。開けられたドアの向こうから懐かしいと思える声が聞こえた。

ベッドに上体を起こして、彼女はシリカとの会話を楽しんでいた。リズベットが寝室に入ると「リズ」と嬉しそうに呼び、続けて入ってきたセツナに丸く開いた目を向ける。

「お客さん？」

セツナはゆつくりと、アスナのいるベッドへと歩く。アスナは訪れた来客を笑顔で迎え入れてくれた。その笑顔にセツナは強く違和感を覚える。

彼女が自分にこんな笑顔を向けるはずがない。セツナの罪を知った彼女なら、セツナを受け入れるはずがない。

「初めまして。キリトの妻のアスナです」

そう自己紹介しながら、アスナは会釈した。セツナの背中に悪寒が走る。彼女の声から生じた違和感が浮き彫りになり確認へと至らせる。セツナはリズベットとシリカにちらりと視線を向けた。2人も陰のある表情を浮かべている。

「セツナだ」

「セツナさんはキリト君のお友達ですか？」

「ああ」

「そうなんですか。良かったあ。キリト君あまり人付き合いしないか

ら、友達ができて嬉しいです。これからも夫をよろしくお願いしま
す」

満面の笑みを浮かべる彼女に陰は感じない。まるで太陽のような
アスナの笑顔が、リズベットとシリカに陰を落としているように思え
る。

「それにしてもキリト君どこにいるのかな。何も言わずに出掛けて、
どこのダンジョン行ってるんだろう」

「あ、そうそう」とアスナは矢継ぎ早に話し始めた。

昨日キリトと街の市場へ買い物に出掛けたときのこと。

先週キリトがカエルモンスタアの肉を大量に持って帰ってきたこ
と。

先月キリトが――

アスナの口からは次々と、キリトとの思い出が語られていった。セ
ツナ達はその話を黙って聞くことしかできなかった。

◆

リンダースの店に来る頃には、すっかり夜が更けていた。とても疲
れる1日だった。

目が覚めたアスナは、あたしの知るいつものアスナだった。いつも
と同じように笑い、からかうとむくれる。とても綺麗でひとつひとつ
の仕草に品があるけど、どこか歳相応の子供っぽい面も見せるから愛
嬌がある。そんなアスナの笑顔が見れて嬉しい。今朝起きたら、隣の
ベッドから「おはよう、リズ」とアスナの声を聞いたときは飛び起き
るほど驚いたし、涙が出そうになった。

でも、あたしはアスナの目覚めを素直に喜ぶことができない。嬉し
さのあまり抱きしめたアスナは、あたしに言った。

「キリト君はどっ？」

その質問に、あたしは思わず真実を言ってしまうところだった。何
とかダンジョン攻略に出掛けたと誤魔化して、しばらくしてから起き
たシリカにも口裏を合わせるように言った。

昨日、先週、先月と、アスナはキリトとの思い出を語った。

あたしはその有り得ない思い出を訂正させることができなかった。

もしアスナに事実を改めて認識させたら、また彼女が人形のようになってしまうさうだから。あたしは臆病者だ。つくづくそう思う。

もしかしてあたしの記憶が偽物で、アスナの語る記憶こそが本物のだろうかとかさえ思ったほどだ。

でもそれは違う。あたしが見ているものは本物だ。エギルから聞いたキリトの死を確かめるために、あたしは黒鉄宮へ行った。石碑にあった《Kirito》の名前には横線が引かれていた。あたしはそれを見て泣いたのを覚えている。

キリトは死んだ。アスナも見たはずだ。でもアスナは、その場面を覚えていないみたいだった。

アスナにはキリトが見えているのだろうか。あたし達の知らないところで、アスナは死んだはずのキリトと他愛のない会話を楽しみ、その思い出を語っていたのだろうか。

答えが出ないまま、あたしはドアの札をCLOSEにしたまま中に入る。今の時間にお店を開けたって、誰も来やしない。あたしに続いて、黒衣の男も中に入った。

「とりあえず、剣研いじやおつか」

「ああ」

あたしはセツナから剣を受け取って、回転する砥石に当たった。鍛冶職人として仕事をすれば、気分も晴れると思っていた。でも淡い赤みを取り戻していく剣を見て、あたしは気付いてしまう。

あたしが作ったこの剣は、人を殺すために使われていた。

あたしは鍛冶職人として大量の武器を作ってきた。あたしが作った武器たちがモンスターを倒すために使われると、この世界を終わらせるために使われると信じていた。

でもこの冥王の冠は違う。セツナはこの剣をモンスターではなく人を斬るために使っていた。それをこの剣は喜ぶのだろうか。変だけど、あたしはそう思わずにいられない。

あたしは武器を単なる道具として見ることができなかった。あたしは金属を丹精込めて熱し、ハンマーで叩き、輝きと共に生まれる武器にいつからか愛着が芽生えるようになった。だからあたしの作っ

た武器を使うプレイヤーには正しく使ってほしい。

銃を作る工場で働く人は、こんな気分になるのだろうか。あたしはまだ仕事だからと割り切ることができていない。シリカの前ではお姉さんぶっているけど、あたしもまだ子供だ。

「セツナ、どうしてレッドプレイヤーを殺してたの?」

「あんた達を守るためだ」

「それだけなの?」

「それだけだ」

セツナは迷うことなく言った。でもあたしは、彼に迷いが無いとはどうしても思えない。

あたしを助けてくれたセツナが、人の命を軽く見ているはずがない。シリカも、血盟騎士団の任務でセツナに助けられたと聞いた。

「セツナさんが本当は優しい人だって、あたしは信じたいんです」

いつか、シリカがそう言っていた。あたしもそう信じたい。あの幼い少女のように、人を信じられる無垢さがほしいと思った。

「あたし達を守るために犯罪者を殺して、今度はあたし達を現実に還すためにゲームをクリアさせるの?」

「そうだ」

現実に帰りたいのは確かだ。いや、「だった」というべきなのかもしれない。今のあたしに熱はない。もう、あたしに熱をくれたキリトは
いない。

今あたしが生きているのはアスナのためだ。キリトが愛したアスナを守るために。同じくアスナを守ろうとしているセツナの剣を整備するために鍛冶職人を続けている。

「セツナ、アスナと何があったの? セツナとアスナは、ギルドの仲間ってだけ?」

研磨が完了した剣を受け取ったセツナは無表情のままだ。無理矢理感情を付けるとしたら不機嫌といった様子だけど、それでも彼は答えてくれた。

「アスナは俺を止めようとした」

「それだけ?」

「ああ」

嘘だと、あたしは直感で悟った。アスナに向けるセツナの目。あたしやシリカよりも、アスナの変化に一番苦しんでいるのはセツナだ。セツナが血盟騎士団の団長に名乗り出たのも、攻略を目指したのもアスナのためだと思う。

セツナに何があって死神になったのかは分からない。本当にあたし達を守りたいと思っているのなら、罪を被らなくてもいい。それなのに、セツナは罪を被ることを選択した。

あたし達を守るために罪を被る。

あたし達を解放するために責任を負う。

その根源にあるのは何だろう。あたしには分からない。あたしの陳腐な想像力の上を、セツナは体験してきたのかもしれない。彼の力はいっだってあたしの想像を上回る。

「あれが、アスナにとってはいいのかな？」

「彼女にとっては幸せなのかもしれない。辛いことを忘れて、見たいものだけが見られる今が一番だ」

「本気でそう思う？」

「……………分からない」

セツナは消え入りそうな掠れる声で言った。元々あまり声は大きくなかったけど、こんな声を聞くのは初めてだ。

「アスナに事実を改めて認識させたところで、それが彼女のためになると思うか」

自分から聞いておきながら、あたしも何ができるのか見つけ出せずにいる。だからあたしも言った。

「あたしも、分からない」

多分、答えは誰にも分からない。きっとそれを知っているのはアスナ本人だけ。

アスナは答えを出して選択した。彼女が彼女であるために。アスナをアスナたらしめたキリトがまだ存在していると思うことを選択したのだと思う。それが最善だ。いっだって最善の選択は、本人にしか見出せないのだ。

セツナから鞘を受け取り、砥石に当てる。摩擦で響く甲高い音のなかに、セツナの声が滑り込んでくるように聞こえた。

「リズベットは強いな。あんたも辛いだろう」

予想外の言葉に、あたしは笑ってしまおう。笑うことも少なくなってきたから、とんだ不意打ちだ。

「強くなかないよ。こうして仕事しないと、今にも泣いちゃいそうだし」

「それでもアスナを看てくれている。感謝している」

「一番辛いのはアスナだよ。あたしに泣く資格なんてない」

「親友を想って泣くなら別だ」

そのセツナの言葉を聞いて、あたしの目元が熱くなった。研磨が完了した鞘をきつく握りしめ、あたしはその熱さを堪える。

「何で、そういう優しいこと言うかな……。セツナも、あいつも……」

あたしは俯きながらセツナに鞘を手渡す。すぐに鞘と剣がぶつかる音が聞こえる。視線を上げて、セツナの手を両手で握った。グロブ越しても彼の温かさが伝わってくる。その仄かな熱を感じて、彼も人間なのだ実感する。

「お願い、セツナがこの世界を終わらせて。セツナが死神なのかはまだ信じられないけど、セツナならキリトができなかったことをやり遂げられるって信じてる」

「元からそのつもりだ。何が何でも、ゲームをクリアさせる」

セツナから受け取った100コル硬貨2枚を、あたしはきつく握りしめた。あたしにできることは、こうして彼の剣を整備することだけ。

「新しい素材が入ったら教えるね。もっと良い剣が作れるかもしれないし」

「ああ、頼む。俺はもう帰って休むが、リズベットはどうする」

「今晚はここにいます。注文もいくつか入ってるから片付けたいしね」

「そうか。それじゃ」

「うん」

工房から出ていくセツナを見送って、あたしは「よし」と両手を叩

く。あまり気乗りしないけど、だからといって商売をおろそかにしてはいけない。

炉に火を点けようと視線を降ろしたとき、あたしの視線の隅に一枚の小さな紙きれが入ってきた。さつきセツナが立っていた所だ。お金を払ったとき、ポケットから落としてしまったのだろうか。

あたしはそれを拾い上げる。固い真っ白な紙面を裏返すと、それは写真だった。

「っ！」

思わず大声が出そうになって、あたしは口に手を当てた。写真にはセツナと女の子が写っていた。2人とも笑っている。セツナのこんな表情は見たことがなくて、一瞬彼だと分からなかった。

少女は知らない子だけど、あたしは何故か初めて見た気がしない。とても綺麗な少女だ。口角をわずかに上げた微笑から品が出ている。

少女の胸元でネックレスが光っている。星型で飾り気のない金属板は、少女の容姿に釣り合っているとは言えない。

あたしはこのネックレスを知っている。

あたしはこの子を知っている。

そんなに年月が経っているわけじゃないけど、あたしにはその記憶がもう遠い昔の出来事のような感慨があった。

◆

それは、あたしがまだ10層あたりで露店商売をしていた頃だった。まだ寒い季節で、あたしは震えながら声を張り上げていたのを覚えてる。

その頃のあたしはとにかく必死だった。第48層の街開きで見つけた家を買うために、わき目も振らずに働いていた。

既に店を開いていた知り合いに工房を借りて、がむしやらにハンマーを振って武器を作る。主街区の人通りが多いメインストリートで丁度いい場所を見つけて、そこで武器を並べてお客に売っていた。

「ねえ、新しい剣買ったら？」

「うん。ちよつと見てみようか」

そのお客は2人組の男女だった。あたしと同年代くらいで、仲良さ

げだったものだから少し嫉妬していた。

「これなんてどうですか？ お兄さんには丁度いいと思いますよ」

あたしは意地悪してやろうと、少年のほうにその頃の会心作を見せてやった。それなりにパラメータが高い武器も作れるようになってきた頃で、会心作の剣は並のプレイヤーじゃ扱い切れる代物じゃない。

「これ、いくらですか？」

装飾の豪華さが価値が分かったのか、少年は物怖じした様子で聞いてきた。見れば少年が腰に提げている剣は質素な片手直剣で、一目でNPCシヨップのものだと見抜けた。

あたしは得意げな顔をしていたと思う。少年の反応が期待通りだったから。接客としては最低だ。でも2人の装備から強そうには見えなかったから、あたしの武器を扱えないだろうと思った。冷やかしなら早く行ってほしいとさえ思っていた。

更に性格が悪いことに、提示した値段に目を剥き唾然とする少年の反応を表情に出さないよう必死に笑いを堪えた。

「買わないの、それ」

後ろから覗き込む少女に、少年は「ああ」と気のない返事をした。

「あの、これは？」

少年が指差したのは、広げた風呂敷の隅っこに置いたネックレスだった。ランクの低い金属は在庫が大量に残るから、こうして小物やアクセサリーに加工して売り物にしていた。シンプルなものなら、工芸スキルをあまり上げなくても作れる。

「ああ、アクセサリーは全部1000コルです」

「そうですか。じゃあ、これください」

少年は一番左に置いた星型のネックレスを指した。あたしの視線は少年の薬指に光る指輪に向いた。

「結婚してるんですか？」

「ええ、まあ……」

少年が照れ臭そうに笑った。かなり驚いた。まさかこの世界で結婚するプレイヤーがいたとは。

同時にあたしの中で罪悪感が生じた。奥さんにプレゼントを買ってあげる優しい人に酷いことをした。

「それ、タダでいいですよ」

「え？」

「おまけみたいなものですし、それに売り物としては粗末なので、お金はいりません」

あたしとしては意地悪のお詫びだったのだけれど、少年は純粋に厚意と受け取ってくれたらしい。

「ありがとうございます」

やり取りを聞いていた少女が、そう言ってあたしに微笑んだ。とても綺麗な子で、同性なのに見惚れてしまいそうになった。年はそう変わらないみたいだけど、どこか大人びた目をした子だった。

あたしはそれを誤魔化すように、「いえいえ」と顔の前で手を振った。

「あたしリズベットっていいいます。近いうちにお店開くので、よかつたら来てください」

「はい、よろしくお願いします。リズベットさん」

少女はそう言って笑った。大人びていながら笑うとあどけなさがある、不思議な魅力を持った少女だった。あたしも笑みを返した。接客は苦手だったけど、自然に出た笑みだった。

「せっかくだし買えばよかったのに」

「俺じゃまだ使えないよ。それより今は家が先だ」

2人を見ていると、恋をするのもいいなと思えた。それ程に2人は仲睦まじく、互いを想い合っているのが笑顔で分かった。

「それじゃあ」とネックレスを持って去っていく2人の背中を見ながら、あたしは祈った。

お幸せに。

それからあたしは何とかリンダースの家を買うことができ、店を構えるようになった。でも、あの夫婦が来ることはなかった。

いや、夫のほうに来た。黒装束に身を包んで。一緒に遺跡を探検して、モンスターに飲み込まれ脱出した末に剣を作った。それが殺人に

使われるとも知らずに。

あたしの予想は単なる早とちりなのかもしれない。できればそうであってほしい。

セツナ、あんたって律儀だよ。あんなの社交辞令みたいなもの。

でも、奥さんも一緒に来てほしかったよ。

あたし、あの子の名前を知らない。

また会えたら、友達になれそうだったのに。

セツナ、あれから何があったの？

あんたの奥さんはどうしたのよ？

◆

？

アインクラッドで葬儀を挙げることは今までなかった。

この病気になることがない世界で、死というものは突然訪れる。そのせいで知り合いが死んだと知るのが、死んでから1ヶ月以上経ってからというケースも珍しくない。多かれ少なかれ毎日誰か死んでいるのだから、その度に葬儀を挙げるもの面倒だ。

でも一番の理由は、この世界で死ねば現実でも死ぬという事実を信じたくないからだろう。

未だにゲーム世界から脱出できないという事実から、現実でナーヴギアを無理矢理脱がそうとすれば本当に脳が焼かれると、大体のプレイヤーは信じている。それでも、本当に死んでしまうのか確信には至っていない。確かめるには実際に死んでみるしかない。

そんなプレイヤー達が葬儀を挙げることに意義を唱えなかったのは、すっかりこの世界の住人になってしまったということなのかもしれない。

葬儀が行われたのはデスゲームが始まって3度目の新年を迎えてすぐの頃だった。

誰が言い出したのかは判然としない。半ば自然的にプレイヤー達の間はその意識が芽生え、下層でプレイヤーの援助を行っている《M M O トウデイ》主導の下で葬儀が手配された。

全プレイヤーがはじまりの街の中央広場に集められていた。デスゲームが始まった日よりもすつきりしたように思える。考えてみれば当然なことだ。あの日から2年以上経って半分近くが死んだのだから。

中央広場にオブジェクト化された祭壇の前に、1人の女性プレイヤーが犠牲者達に弔いの言葉を述べている。彼女は現実で神学を履修する学生だったという。この宗教礼式でという声もなかったため、葬儀は布教率の高いカトリックの礼式に乗っ取って執り行われた。もつとも信仰に疎い自分にとって、どの礼式で行っても同じだとセツナは思う。

「葬式なんて、一体誰のためにやるんだろうなあ」

「死者のためだろう」

「そりやそうだろうけどよ。天国とか地獄とか、そんなもんが本当にあるか分かんねえじゃねえか」

「あんたは無神論者なのか」

「いや、そこまでじゃねえよ。俺あ、あんまり信心深くはねえけどよ、この世界に来てから祈りてえって気持ち少し分かったような気がするぜ」

「祈ったところで、救ってくれる神なんていなかっただろう。現に俺達は救われていない」

「勇ましいこった。神様なんて頼らねえってか」

「神を信じていたら、死神なんてやってないさ」

葬儀が始まる前に、クラインとそんな会話をした。あまり信心深くないと言っておきながら、セツナの後ろにいるはずのクラインはやかに静かだ。仲間意識の強い彼のことだ。きつと黙祷を捧げているに違いない。天国や地獄を信じていない割に、こういった場の礼式は遵守する性分のような。だからといって、彼を中途半端と嘲笑う気にはならない。

無宗教。無神論。物質主義。それらが蔓延した社会で生まれ育つても、未だに人々は自分達が骨を軸にした肉の塊という物質だと受け入れられずにいる。

自分達はタンパク質を主成分に構成されている。

自分達はスーパーマーケットでばらばらにされた状態で並べられる牛や豚や鳥と同じ存在だ。

それはとつくに証明されたことだが、人間は魂だの心だの不可視なものをつ加することで、自分達は崇高で特別だと思いたがる。

神の存在を証明する術はない。

「神が存在しないと証明する術もありません。神とは不可視の存在であり、我々に認識できない領域に存在するのです」

天国も地獄も存在しない。

「それも存在しないと証明する術はないでしょう。死後の世界とは、死者の魂しか行くことができないうのです」

無神論者と宗教家の討論はこんな泥沼な様相を見せるのかもしれない。神とはとことん便利な存在だ。

とはいえ、セツナも人間をただの物質と断じることができていない。

魂。心。そういったものを排しながら殺し続け死神と噂されるまでに至るのだが、意識の奥底にはまだ有神論的な概念が根付いている。ナミエをスーパーの肉と同じと認識することはできない。

人には意識があり、言葉がある。

人には魂があり、心がある。

その深層意識によって血の味を感じるようになったのかもしれない。

弔いの言葉が終わり、パーティーやギルドごとに分かれた列の先頭からリーダー達が歩み出て来る。血盟騎士団の団長として、セツナも祭壇へと歩く。祭壇に集まったのは3人だ。

《聖竜連合》リーダー、リンド。

《MMOトウデイ》リーダー、シンカー。

《血盟騎士団》リーダー、セツナ。

この3人がプレイヤーの代表となっている。聖竜連合と血盟騎士団は攻略の前線に立ち、MMOトウデイは下層にいるプレイヤーのリソースを分配している。

3人の代表者達は祭壇に並べられた花を1輪ずつ手に取った。事前に知らされた進行通り、3人は黒鉄宮へと入っていく。巨大な宮殿のロビーにはプレイヤー達の名簿であり、生死が記録されている長方形の重苦しい生命の碑がそびえ立っている。多くの名前に線が引かれた金属製モノリスの前に、3人は花を置いた。

リンドが曲刀を掲げ吊いの言葉を述べる。最初は雄々しかった声は途中で嗚咽が混じり、途切れ途切れに言葉を紡ぐリンドは泣いていた。シンカーも神秘的な表情でモノリスを見つめている。2人は誰の名前を見て想いを馳せているのだろうか。不謹慎なことに「プライベート・ライアン」の冒頭でハリソン・ヤングが戦没者の墓地を訪れるシーンを思い出した。

セツナも2人にならない、磨かれたモノリスから名前を探す。

Na m i e 2023. 2. 17 14:37 プレイヤーキル

生命の碑はご丁寧に死亡した日時と死因まで記録してくれる。システムエラーを期待して、彼女の名前から横線が消えて蘇るのではないかと何度も訪れたが、とうとうそんな下らない奇跡は起こらなかった。HPが消滅したらシステムは何の障害もなく彼女を砕き、その時間と死因をしっかりとモノリスに記載した。

でもこのモノリスがナミエの墓なのだと思うことはできない。今生命の碑は犠牲者達の慰霊碑として花が供えられたわけだが、モノリスの下に犠牲者達の死体が埋まっているわけではない。この世界で死体は残らない。もし魂があったとしても、この名前が刻まれただけのモノリスに捧げた祈りはナミエに届くのだろうか。大切なのは気持ちだと、誰かが言っていた。でもそれは自己満足だ。まるで葬儀が死者ではなく残された生者のために執り行われるみたいで、自己満足のためなら墓なんて飾りだ。

何よりも、ナミエが彼と同じ墓に入っているというのはセツナにとって耐え難い。セツナはもうひとつの名前を見つけ出す。

Z o d i a r k 2024. 11. 07 11:55 プレイヤー
キル

その忌々しい名前を見ても、不思議と怒りは沸かなかつた。彼の名

前を知ったのは殺したその日で、正直名前なんてどうでもよかった。セツナの記憶に焼き付いたのは彼の名前ではなく、彼の頬に刻まれたケロイドの傷跡なのだから。死亡日時も死因も一致するから、碑に刻まれた《Zodiarck》が彼なのは間違いないさそうだ。でもいまいち釈然としない。死因に【Set sunaに殺されました】と記載されていれば確証が持てるというのに。

死因は一応記載されているに過ぎない。自殺ならどこの層の外周から転落したのか、モンスター戦での敗北ならどのモンスターか、PKなら誰に殺されたのか。そこまでは詳しく記載されない。だが生命の碑が詳細をはぐらかしてくれるおかげで、セツナは多くの任務を遂行することができた。もしこれがPKの犯人まで記載されていたら、セツナはすぐさま捕らえられて何らかの罰を受けていただろう。

早いうちに罰を受けていれば罪は赦されたのかもしれない。

そんな邪な考えをすぐに打ち消す。過去が過ぎていった今、もしもなんて考えは無意味で虚しくなるだけだ。それに罰を受けたとして、たとえ処刑されたとしてもセツナの抱える罪は償われ赦されるのだろうか。そう問われればセツナは否定する。

セツナは自ら手を下してもゾディアークを赦していない。だからセツナが死んでも、人々はセツナを赦さないだろう。

代表者達の献花を済ませて葬儀は終了したのだが、中央広場に集まったプレイヤーはすぐには減らなかつた。聖竜連合と複数の攻略ギルドはすぐ転移門で最前線の層へと向かった。だが大半のプレイヤー達は胸に手を当て、両手を組み、床に膝を付いて死者に祈りを捧げていた。

「セツナ団長、我々も攻略へ向かったほうがよろしいかと」

ギルバートが畏れ多いとばかりに頭を下げながらそう言った。

「ああ、80層に行く」

団員達に招集をかけようとした時だ。

「セツナ」

その声に「何だ」と振り返る。特徴的な声だからすぐに分かった。

「新しい情報でも入ったのか、アルゴ」

「まあナ。ちつと大事な話がある」

「ああ、分かった」

セツナは団員達に呼びかけた。

「2時間後に80層主街区の転移門広場に集合。それまでは解散」

「セツナ団長」

ゆつくりと、その団員はセツナに近付いてくる。長身な男はセツナを見下ろし、険のこもった眼差しを向けてきた。この視線にはすっかり慣れたもので、今更怖気づくこともない。

「我々に猶予はありません。ここは我々に任せ、一刻も早く攻略を進めるべきでは？」

「俺なしで、犠牲者を出さずにダンジョンから出られるのか」

血盟騎士団は精鋭揃いだが規模が大きくない。1人欠けただけでも戦力が大幅に下がってしまう。だから戦力が十分に確保できない限り、攻略に行けないのがギルドの弱点だ。

「勝手な行動で勝手に死なれては迷惑だ。団長命令には従ってもらおう」

「よせ」

クラインがセツナと団員の間割って入った。

「指揮は俺が執る。無茶なんかさせねえさ。それでどうだ？」

クラインなら指揮を執るに十分だ。第75層まで《風林火山》を1人も欠けることなく率いてきた彼なら、そのリーダーシップを思う存分発揮できるだろう。

「任せた、クライン」

「行こう」と、セツナはアルゴと東の路地へと歩き始める。いつものざわめきが戻りはじめた中央広場から、クラインの声が聞こえた。

「おし、それじゃ80層のダンジョンに行くぞ。今日は俺が指揮を団長から任された。よろしく頼むぜ」

第21話 同志には歓迎を

人通りの少ない路地の馬車に隠れたところで、セツナはかつての普段着だった黒のコートに着替えた。

「大変だな。堂々と街を歩けないのハ」

「自分で決めたことだ。仕方ない」

はじまりの街の大通りに出ると、さっきまで向けられていた視線はぴたりと止んだ。まるで通り雨が過ぎたように。今やギルド活動以外でしか着る機会のないこのコートは隠蔽ボーナスが高い。これが主街区内でも適用されてよかったと思う。

「こんな場所で話をするのか」

セツナがそう言った理由は、アルゴに案内されたのがカフェ風のNPCレストランだったからだ。いつも話すときは外で立ち話かベンチに座る程度で、長話をする際はセツナの殺風景なホームだというのに。

街中でプレイヤーとすれ違う時間は1秒もない。過ぎ行くプレイヤー達はアルゴとセツナに気付くこともなく、会話に耳を傾けることもない。だがこうしてカフェで話すとなるとそうはいかない。ずっと席に居座る客に気付かれるリスクが高いのだ。

「ちつと待ち合わせてナ」

拳手で挨拶するアルゴの視線の先で、1人テーブルにつくプレイヤーが同じジエスチャーで応じ立ち上がる。

「待たせたネ」

「いえ、ありがとうございます」

薄手の黒いポンチョを羽織りフードで顔を隠しているため容姿を把握し辛いのが、声からして女のような。女はセツナに顔を向けるとフードを脱いだ。肩まで伸びた髪が揺れる。

「お久しぶりです、セツナ団長」

良く言えば凛々しい、悪く言えば無愛想に彼女はブラウンの瞳をセツナに向ける。

「俺のことを覚えているのか」

「忘れろという方が無理よ」

「そうか。久しぶりだ、レブロ」

全く表情を変えないセツナにレブロは少し不満そうだが、文句を言うことなく椅子に座った。予期していた再会ではない。でもだからといってセツナにとつて驚くほどの出来事でないだけだ。かつての仕事で不確定要素は常に付きまどっていたし、そうしたものから発生する予想不可能の事態に何度も振り回された。つまり、セツナはいちいち驚くことに疲れたのだ。

「鼠のアルゴを使い走りをするとは。あんたの凶々しさは変わらないな」

「あなたに配慮して、アルゴさんに仲介を頼んだつもりよ。私とあなたのギルドは仲良くないし」

「どこのギルドだ」

ポンチョの裾から覗く青い服で大体見当はつくが、一応聞いてみることにする。

「聖竜連合よ」

「最近はこちらの団員と交流を深めていると聞いたが」

「今日はそのことを話したいの」

「オレっちはその情報を仕入れに、こうしてお2人さんの話を盗み聞きしようってワケ」

アルゴはいたずらな笑みを浮かべると、いつ注文したのか運ばれてきたランチセットの黒パンをかじった。

「お金になるかは分かりませんけど」

レブロはそう前置きした。

「KOBのギルバートさんが聖竜連合に同盟を持ちかけてきたのは本当よ。こちらの上層部も最初は拒否してた。団長のあなたには無断だと本人が言っていたから。まず確認したいのだけれど、ギルバートさんが同盟を組みに来ることをあなたは知らなかったの?」

「ああ、知らなかった」

顔色ひとつ変えず答えるセツナにレブロは呆れ気味にため息を吐く。

「あなたリーダーシップないのね。ギルメンの管理くらいできないの？」

「自覚はしている。続けてくれ」

「はあ……」とレブロは吐息と共に肩の力を抜いた。

「最初は受け入れなかったけど、話し合いの結果リーダーのリンドは彼と同盟を組んだ。それから積極的にK○Bとの共同攻略に参加するようになったわ。あなたもそれは感じていたでしょ？」

「ああ。確かに先月の上旬からそちらのメンバーも大人しくこちらの作戦に従うようになった。おかげでボス攻略は犠牲者ゼロで達成できた」

「呑気なものね。同盟には条件があったのよ。ギルバートさんは私達が協力する代わりとして、K○Bからメンバーの引き抜きを提案してきたのよ。ご存知の通りうちのギルドはK○Bへの対抗意識があるから、リーダーは喜んでその提案を呑んだわ」

「引き抜かれるメンバーの中にギルバートも含まれているのか」

「ええ。彼は近いうちにこちらへ移ると言ってた。彼はK○Bじゃ顔が利くとも言ってたから、沢山のメンバーがうちのギルドに移ると思う」

「メンバーの引き抜きか。あまり規模が大きくないこちらとしては痛いな」

ヒースクリフと同じ髪型にするあたりから妄信的な聖騎士至上主義者かと思っていたが、中々したたかな男だ。

「呑気なこと言ってる場合？ K○Bは攻略組から脱落するわよ」

「聖竜連合と血盟騎士団が共同戦線を張ることは悪いことじゃない。あんたの話を聞いて、俺はむしろ血盟騎士団がそちらと合併してもいいと思ってる」

「あなた何のために団長になったのよ。かなり強引なやり方って聞いたけど」

「ゲームをクリアするためだ。ただ名声や権力欲しさに団長なんてやっているわけじゃない」

「それよりも」とセツナが言うと、レブロは上体を少し引いた。無意

識のうちに彼女を睨んでしまったらしい。

「あんたは何故それを俺に教える。聖竜連合にいるあんたに都合の良いことだろう」

「怪しいのよ」

「自分のギルドがギルバートに乗っ取られると思っているのか。攻略に繋がるなら好きに泳がせておけばいい」

「そうじゃないわ」とレブロは声色を強くした。何やら勘違いをしていたらしく、大人しく続きを聞く。

「ギルバートさんがうちの本部に来るとき、いつも付き人みたいな男がいるのよ。KOBメンバーじゃないみたいだし、交渉の場にただの友達を連れてくるなんて不自然でしょ?」

「確かに。そのプレイヤーの名前は」

「その人はポールと名乗ってる。中層で強化支援の商売をしているらしいわ」

「ポール」

セツナはその味気ない名前を反芻する。英語の教科書に出てきそうな名前だ。とはいえSAOでも偽名を名乗ることは可能だ。パーティやギルドといったシステム上の関係を築かずメンバーリストに並ばない限り、名前というものは隠すことができる。セツナも仕事上ジョンだのフライデーだの多くの偽名を名乗ってきた。

「アルゴ、そのポールを知っているか」

丁度スープを飲み干したアルゴは首を横に振る。

「いいや、そんなヤツ聞いたことない。イマドキ強化支援なんて成り立つのか?」

「ええ、だから怪しいの」

強化支援。

レベルやスキル上げに効率の良い狩場の情報提供。ジョブや使用する武器に適した強化プランを立案するコンサルティング。それを生業とする者の多くはβテスターであり、MMORPG全般に精通した筋金入りのコアゲーマーだ。

一見情報屋に近いものだが、強化支援の場合はプレイヤーの強化に

重点を置いている。情報屋を食品だけでなく日用品や服まで取り扱う百貨店に例えるなら、強化コンサルタントは強化手段のみを売る専門店といったところだ。扱う情報が断然少ないから、商売としては楽だ。

その商売はデスゲーム開始当初こそ珍しくなかったのだが、今となってはそんな事業に手を出す商人プレイヤーは皆無に等しい。生き残りをかけて必死なプレイヤーを獲物に強化詐欺が横行したせいで、同業界隈の信頼が転落の一途を辿り自然消滅したのだ。

現時点で似たことをしているプレイヤーはエギルとアルゴだけだろう。エギルは私財を投げ打っている分かなり善良だし、アルゴも情報屋としては信頼に足る。もつとも、2人に強化支援を要請したのはセツナではあるが。

「アルゴの情報にない商人か」

「今のご時世にそんな商売してる奴なら、それなりに知られているはずだ」

モンスターやアイテム入手のみに関わらずお勧めのレストラン、お勧めの鍛冶屋なんて情報も扱っているアルゴが知らないのは不自然だ。

「あなたはポールと話したことはあるのか」

「本部でリーダーのもとに案内したとき、1度だけ」

「どんな男だった」

レブロは逡巡の後に答える。

「何ていうか、不思議な人だった」

「抽象的だな」

「悪かったわね」

ポール。セツナは再びその名前を思い浮かべる。

これ以上レブロから彼について聞いて聞いても収穫は無いなどセツナは思った。レブロとの会話で出てきた彼の人物像は判然としない。彼女は実際にポールの顔を見て話をしたはずなのに、全く彼について浮かび上がってこない。少なくとも、ポールという男が留意すべき人物であることは確かだ。

「なら俺とフレンド登録して、随時そのポールのことをメッセージで知らせてほしい」

フレンドの招待メッセージを送ろうとウィンドウを呼び出したとき、「もし……」とレブプロは不安げな瞳を向けてきた。

「ポールが危険な人だつて分かつたら殺すの？」

セツナは窓を操作する手を一旦止める。

「俺はもう死神じゃない。もし彼が攻略の害になるとしても、処遇はあんた達に任せる。それに危険とも限らない」

「だとしても、野放しにしてたらK.O.Bの戦力が減るのは変わらないじゃない」

「言っただろう。血盟騎士団がそちらと合併しても構わない。もうギルド同士で下らない争いを続ける余裕はなくなった。俺達が現実に還るには、プレイヤー全員が統率されなければならない」

◆
第80層主街区に戻ってきた血盟騎士団の面々を、街に滞在しているプレイヤー達がざわめきと共に迎える。層を重ねるごとに面積が狭くなっていくアインクラッドの構造上、80層目となると迷宮区の塔は主街区の目と鼻の先にあると言っている。

主街区でありながら村と呼ぶべきメルモンドの大通りを歩くギルドの面々は、疲労を顔に出しながらセツナの後ろを歩く。セツナはいつものポーカーフェイスを保っているが、それは途中参加で他の面々より疲労が少ないからだと言う声が武器屋のほうから聞こえてくる。

確かに疲労は少ないが、ギルドと合流するためにたった1人で最前線の迷宮を入口から進み、モンスターとのエンカウントを乗り越えたのだ。合流した後も先頭に立ちモンスターと戦ったのだから、どちらかといえば疲労が一番大きいのはセツナだろう。

団員達はそれを分かっているのか、意外なことに途中参加に関して文句を言う者はいなかった。合流した際、団長であるセツナに殺意とも取れる冷たい視線を向けてくる者はいたが。

「どうにか今日も生き残ったな」

転移門広場に着くなり、クラインが誰に向けてなのか労いを漏ら

す。

「まだボスの間に辿り着いただけだ」

セツナが嗜めるとクラインは伸びをしながら「分かってるさ」とぼやいた。

「んで、明日はボス攻略か？」

「いや、エギルから紹介された4人の入団試験をする」

「おいおい、ボス戦の前に戦力を増強しようってか。いくらレベルが十分でも、いきなりボス戦に駆り出すにやあひよっ子だぜ」

「ボスを相手に上手く戦えるかを見るために試験する。戦力は多い方がいい」

エギルがプレイヤー育成支援の目的を「生き残る」から「攻略組になる」へと方向転換して2ヶ月が過ぎようとしている。メッセージで送られてきた4人のプレイヤーは、エギルが面倒を見ている者の中ではトップクラスらしい。試験を行うことはエギルを通じて既に伝わっているはずだ。

「明日、参謀職は9時本部に集合。それ以下は休暇とする。以上で解散」

団員達にそう言うと、セツナは一足先に転移ゲートの揺れる空間へと歩いた。

「転移、セルムブルグ」

視界を光が覆い尽くし、数瞬で消えると寂れたメルモンドとは打って変わり華やかなセルムブルグの街が現れた。もう夕刻で、湖面に太陽が映り込んでいる。毎日見るこの景色は飽きることがない美しさだ。

毎日この時間、この場所で。

「日曜日のこの時間、この公園で」

溶解した琥珀のような湖面を見て、ふと波絵と初めて会った日を思い出した。セツナはすぐアスナのメゾネットには行かず、沿岸で層全域に広がる湖を眺める。湖面に映る丸いオレンジ色の太陽はまるで眼球のようで、あるはずのないナミエの視線を感じている。

「セツナさん？」

声が聞こえた背後へ振り向くと、水色の羽をはためかせた子竜がセツナの顔へと飛んできた。セツナが右手を差し出すと子竜はそこにとまる。

「もうピナ、セツナさんびつくりしちゃうでしょ」

紙袋を両手で抱えたシリカがぱたぱたと靴音を立てて近付き、あどけない笑みを向けて来る。

「今日の攻略は終わったんですか？」

「ああ、アスナの部屋に行こうとしてたところだ」

「あたしもリズさんからおつかい頼まれて、いま帰りなんです」

「一緒に行こう」という言葉もないまま、2人は並んで街を歩いた。

「持ってやる」

無造作にシリカから紙袋を取り上げる。シリカはくすりと笑った。

「やっぱり、セツナさんは優しいですね」

「勘違いだ」

「ううん、セツナさんは良い人です。あたしを助けてくれたもん」

「あれは任務だ」

「いつもそればかり」とシリカはむくれた。シリカの頭に乗っているピナも、何か言いたげな視線を送ってくる。

「あのときのセツナさんの任務って、本当は何だったんですか？」

「タイタンズハンド残党を全滅させることだ。シリカは連中をおびき寄せるための囷だった。場合によっては、お前を殺すことも視野に入っていた」

「でも、結局あたしを助けてくれましたよね。あたしだけ転移させて」

「殺さずに済むなら、それに越したことはない」

「ほら、やっぱり」

シリカは含みのある笑みをこぼす。何がおかしいのかセツナには分からない。隣で殺される可能性があったと言われているのに。でも今のシリカには無垢さが消えている。笑っているのか、困っているのか判断が難しい。

「それって、できることならあたしを助けようとしたってことじゃないですか」

「面倒事を増やしたくなかっただけだ」

「もう、どうしてそうやって悪者ぶるんですか？」

「実際悪者だ」

苦しまぎれの反論も虚しくなってくる。シリカは殺人がどういう罪なのか理解しているのだろうか。

「シリカ、お前は俺を信じられるのか」

「はい、信じられます」

「何故だ」

「セツナさんが、キリトさんに似てるからです」

なんて曖昧な理由だ。シリカの返答に呆然とせずにはいられない。

「理由になっていないぞ」

「そうですね。でも、初めて会ったときセツナさんを信じられたのも、キリトさんに似ていたからなんです。だからセツナさんなら、キリトさんみたいにたくさんの人達を助けてくれるって、そう思うんです」

シリカの言葉は迷いが無い。でも憂いのある表情から、ただ妄信しているわけではなさそう。多分、悩んだ末に自分で答えを出したのだろう。

「リズさんが言っていました。セツナさんが死神だったとしても、あたし達のために戦おうとしてくれてるのは本当だつて。セツナさんは怖いけど、それでも、あたしはセツナさんのこと信じてますから」

シリカが向けてくる視線に顔を背けたくなる。これまで憎悪や疑念ばかりを向けられてきたせい。セツナはその行為が困惑だと認識する。まさか自分が誰かに希望めいた感情を持たれるとは思ってこなかった。

以前はそんな感情を向けられても偽物と無視してきた。場合によつては殺すことにもなったし、期待を裏切つて全員を死なせてしまうこともあった。それに伴う感傷も誤魔化して、ただ復讐することに思考を割いてきた。

結局、俺は自分のことしか見ていなかった。セツナはそう自覚する。

復讐もナミエのためとしておきながら、それは単なる自己満足だったと既に証明された。だとしたら、ゲームをクリアするという目標も自己満足に過ぎない。

「信じてくれるなら、期待に応えないとな」

セツナにはそれしか言うことができなかった。

いま、この少女の期待を裏切ってしまう恐怖が確かにセツナの中で存在している。誰に何と言われようと目的遂行を最優先してきた。全て自分が納得するため。何らかの結末を得るために。

これまで迷いがなかったのは、納得も結末も被るのは全て自分だったからだ。しかし今は違う。セツナの行動すべてに生き残った全プレイヤーの命運が懸かっている。ゲームクリアが万人の望む結末であつても、それまでの過程で納得するのは何人いるだろう。

理解はしていたが、こうして自分のものとして実感するのは初めてだ。あの本物の二刀流使いは、こんな重責を背負いながら前線で戦ってきたのか。

自分はあるの二刀流使いのように、プレイヤー達の希望にはなれない。

そんな無責任なことを思うと、ピナが乗っているわけでもないのに両肩が重く感じた。

◆

ノックの後に開いたドアから、栗色の髪を揺らしたアスナが笑顔で迎え入れてくれた。

「お帰りシリカちゃん。セツナさんもいらつしやい」

セツナから紙袋を受け取ったアスナは彼の服を足元からゆつくりと見上げていく。

「セツナさん、血盟騎士団なんですか？」

彼女の言葉で、セツナは自分が団服のままであることに気付いた。「ああ」

「わたしも早く前線に戻らないといけないんですけど、リズに止められちゃって」

キッチンで調理器具を出していたリズベットが口を挟んでくる。

「まだ本調子じゃないんだから、アスナは休んでなきや駄目よ」

「もう、分かっているわよ。でもやっぱり心配じゃない。ダンジョンだとキリト君にメッセージ届かないんだし。本当、今日もいつまで籠っているんだか」

アスナはまんざらでもなさそうに笑った。その顔を覗き込む自分の凶々しさに今更ながら気付かされる。

「あいつのことは俺とギルドに任せてほしい。無茶しないように見張っておく」

なんて無責任な言葉だと自嘲するが、その罪悪感が真似事のように思える。オレンジギルドに潜入していた頃も、今のように他人につけ込み、騙し、最後には殺してきた。

それでもアスナは美しい笑顔を見せてくれる。

「これからもキリト君のこと、よろしくお願いしますね」

紙袋を抱えてキッチンに戻るアスナを見ながら、セツナは全てを告白してしまいたい衝動が湧き上がるのを感じている。

アスナ、キリトは死んだんだ。あんたはそれを見ているはずだ。

あんたの見ているものは現実じゃない。夢い夢だ。俺達はあるが目を覚まさないよう嘘をつき続けているんだ。

もしアスナが、はじまりの街での葬儀に参列していたら目を覚ましたのだろうか。アスナと部屋にいるようリズベットに頼んだのはセツナ自身だが、そんな悪戯めいた企みを考えてしまう。

「セツナさんも食べていってください」

そんなものは求めていないと、アスナの笑顔に吐き捨てたくなる。リズベットとシリカがいる前で言えるはずは当然なく、シリカと一緒にダイニングの椅子に座る。

彼女には俺が見えているのか。

◆ リズベットと料理を楽しむアスナを見て、そんな疑問を抱かずにはいられなかった。

「戻ったぜ」

少し疲労を感じる声色で、クラインは4人のプレイヤーを引き連れ

て会議室に入ってきた。彼に続く4人は団服を着ておらず、それぞれが自分の趣味に合わせた装備を纏っている。重厚な鎧で全身を固める者もいれば、金属製の防具は胸当てだけという者もいる。鎧の下に來ている服も色彩がばらばらだ。

幹部席の中央——団長の席でセツナは彼等を迎える。4人を机の前へと促したクラインは、彼等が横1列に整列すると壁際へと離れた。

「あんたから見てどうだ」

「問題はねえと思う。上層のモンスターにビビってたが、すぐに慣れたみてえだ」

「そうか、ご苦労だった」

「へいへい」

不貞腐れた様子でクラインは腕を組む。この任務を言い渡した際、彼はあまり乗り気ではなかったようだ。4人を上層、それも最前線の迷宮区に連れ出すことに反対していた。だからこそ同伴してほしいと説得した。説得というより、半ば団長命令に近かったが。疲れを浮かべる表情から、おそらく何度か危ない目に遭ったのだろう。

セツナは並んだ4人を右から見ていく。全員男。年はセツナと同年代と、やや年上といった面々だ。彼等もセツナに視線を送る。最強ギルドの団長を前にした緊張、それ以上に疑念を感じる視線を送り返してくる。

成人した幹部達の中央に明らか未成年の少年が腰掛けているのだ。この世界での強さが見た目ではなくレベルとパラメータという数値であることは誰もが承知だが、それでも外見というものが重要であることは変わらない。

4人の視線は全てセツナに集中している。セツナが血盟騎士団の新団長として知られているのもあるが、一番はセツナが横にいる幹部達よりも目立つ装いをしているからだろう。

「リーダーたるものそれに相応しいものを着なさいねえ」

そのクラインの提案で、セツナは新しい団服を作った。提案といっても、クラインら元《風林火山》メンバーの団服を作るついでだった

のだが。

血盟騎士団の団服は白を基調とし、ギルドのエンブレムと赤のラインを入れたものに統一されている。ただ前団長のヒースクリフはそれを反転させたように、赤を基調としたローブと鎧を着ていた。それが団長であることの証らしく、現団長のセツナもそれと同じ色調の服を職人プレイヤーに見繕ってもらった。

本来の目的であるクライン達の団服は、ただ鎧に血盟騎士団のエンブレムを入れるだけで終わった。装備の色合いも近かったため、それで問題なしとした。

団長であることを示す赤いコートに袖を通してこの日からギルド運営にあたるわけだが、卸したてのせいかぎこちない。

「君達に攻略へ挑む覚悟はあるか」

セツナは4人に問う。

「はい、あります」

右から2番目に立っている青年が声高に答える。続けて「はい」、「私もです」、「勿論です」と残りも3人も。

「これからは過酷な戦いになる。それを承知の上でギルドの門を叩いてくれた勇氣に感謝する」

こんなものは形だけだ。クラインが同伴したとはいえ、模擬攻略から無事帰還した時点で彼等の入団試験合格は決まっている。エギルから今後も入団候補にあがるプレイヤーが紹介されるだろうが、毎回こんな入団式を執り行うのは面倒だ。

セツナは憂鬱を隠しながら立つ。新しく仲間を迎える4人を見据えた。

「血盟騎士団にようこそ」

第22話 敵には殺意を

上層への道を阻む大トカゲが《The Abaddon Salamander》という名前だと確認できたのは一瞬だけだった。

照明が弱いボスの間で、ひび割れた皮膚から覗く筋繊維が発光している部屋の主は視認しやすく攻撃も回避もしやすい。現れたときはそう思っていた。

壁や天井を這うボスに振り回され、戦闘を開始して1時間は経った気がする。しかし時刻表示を注視する隙すら危険なこの状況では、一体どれほど時間が経っているのか正確には分からない。何人が死んでいるのか、それともこれから死人が出るのかも分からず、プレイヤー達は武器を振るっている。

部屋の空気が揺れるのを感じながら、セツナは肉迫してくる大トカゲの巨体を回避する。すぐ隣で団員が短い悲鳴をあげるのが聞こえる。一瞥して彼の左肩に赤いエフェクトが張り付いているのを視認する。

「下がれ」

指示を飛ばしたセツナは駆け出す。クライン達がいる一団へ尾を振る大トカゲに光を纏った剣と鞘の計15連撃を見舞う。

《The Abaddon Salamander》は反撃しながらも、セツナの《明王霸斬》の15撃目を受けたところでよろめいた。その隙を逃してはならないと指示を飛ばす。

「スイッチ」

咆哮をあげながら、クラインをしんがりにプレイヤー達は一斉に武器を振った。ソードスキルを放つ武器の光がボスの間に煌めき、大トカゲは耳障りな叫びで空気を震わせる。

《The Abaddon Salamander》は叫びながら天井を仰ぐ。遙か最上層にいる主人に助けを求めるように。そして、その体が爆散する。ボスの間に体を構成していたポリゴンが降り注ぎ、余韻に浸る間もなく目の前に獲得経験値が表示された窓が現れる。

「死人は出たのか？」

床に腰を下ろしたクラインが聞いてくる。セツナはマップを呼び出し、この場にいるプレイヤーの反応を数える。

「死者は出ていない」

そう言うと、クラインは「はあ」とため息を吐きながら床に四肢を投げ出した。でもすぐに上体を起こし、腰の鞆に刀を納める。

「そんじゃ、アクティベート行くか」

「ああ」

「待つてくださいいよお」と、背後から恰幅のいい元《風林火山》メンバーの男の声が聞こえる。

のんびりとした声が途切れた。直後に聞き慣れた破碎音。それを聞いて奇妙なことに、死んだなど冷静に判断する。

隣で即座に振り返るクラインと同じように、セツナも背後へと視線を向ける。その先にはボスの間を照らすダイヤモンドダストと、その先にいる青のユニフォームを着た《聖竜連合》のメンバーが剣を手にして立っている。

《聖竜連合》の男がにたりと笑い、その顔にフォーカスを当てると頭上にオレンジのカーソルが。

ポリゴンが全て蒸発する前に、青の衣装を纏ったプレイヤー達は一齐に剣を構えた。逡巡しているうちに2人が消滅する。ようやく感情が追いついたクラインは咆哮をあげて、仲間を消した男に刀を振り下ろしていた。

セツナは襲ってくる《聖竜連合》のメンバーに《月弧刃》を見舞う。相手の首から上がするりと落ちて、それが床に着地する前に体と一緒に消えていく。

久しぶりのPKだというのに、そこに感慨や恐怖と呼ぶべきものはなかった。当然、血の味もない。冷静に次の標的を定め、相手がまだグリーンならわざと攻撃させてオレンジ化させた上で殺す。どこの部分を斬ればダメージを多く与えられるかもまだ覚えていて、PKに適したソードスキルの構えもしっかりと体に叩き込まれていた。

ボスの間に響いていた剣戟音が止むまで、セツナは善良なグリーン

を保っていた。視線を巡らせるとオレンジカーソルが点在している。彼等はどうにも効率的なPKを知らないようで、襲ってきた相手がオレンジ化する前に攻撃してしまつたらしい。

運良く死ななかつた《聖竜連合》の3人はロープで縛られている。その1人にクラインは近付き、その頬に手加減なしに拳を打ち付ける。

「てめえらの目的は何だ！ 何で襲ってきた!!」

殴られたのはセツナと同年代の少年だった。まだ髭も生えていないふつくらとした頬は、何度殴打されても若々しい張りを保っている。殴りながらクラインは泣いていた。怒りなのか悲しみなのか。どちらの側に付けばいいのか分からない感情を拳に乗せていた。

「よせ、このままでは死んでしまう」

冷静な団員がクラインを羽交い絞めにする。クラインはしばらくの間じたばたしていたが、やがてぐったりと腕を降ろし、完全に悲しみへと付き涙を流していた。

「団長、彼等はどうしますか?」

冷静を装う団員がセツナに聞いてくる。クラインのような感情を見出せないセツナは、仲間を失った彼に対する共感と慰めの言葉も見つけることができなかつた。

「オレンジ化した者は捕虜を連れてカルマ回復クエストへ。残りはアクテイバートに行く」



「こちら側の死者は8名。聖竜連合の死者は12名です」

書記係の青年がそう説明する。犠牲者の詳細はセツナと他の参謀職達に見えるよう机の前面に展開されたウィンドウに表示されている。

第81層主街区の転移門を解放してすぐ、セツナ率いる血盟騎士団の攻略隊はグランザムの本部に帰還した。カルマを回復してきた団員達が遅れて戻ってくると、すぐに参謀職による会議が行われた。

犠牲者の多くが攻撃隊だった。攻撃特化のためにパラメータを上げている彼等は不意打ちに対処しきれず、また彼等を守る守備隊も自

分を守るのに手一杯だった。組織としての戦力を追求するあまり、各々の役割に合った強化をするギルドの構成員はどうにもパラメータが偏る。

セツナもまた防御に関しては薄っぺらいのだが、あの奇襲で生き残ることができたのは回避特化型であることが大きい。とにかく敏捷度を優先し、攻撃に当たりさえしなければ問題はない。

セツナの隣に座る攻撃隊長であるクラインは固く口を結び、目には敵に対する殺意をみなぎらせている。当然のことだと、残酷なことに怒りも悲しみも探しあぐねているセツナは傍観者に似た冷静さで思っている。

最初の犠牲者になった男に加え、元《風林火山》のメンバーはもう1人がボスの間で死んだ。これまで仲間を1人も欠けることなく守り抜いてきたクラインにとって耐え難い事実だろう。クラインは1人を殺した《聖竜連合》の戦士と戦うことに夢中で、その間に守るべきもう1人を死なせてしまったことに怒っているのだ。

仲間を殺した《聖竜連合》に。仲間を死なせてしまった自分自身に。セツナは剣を交えた敵達を思い出す。彼等の目にはしっかりとした殺意があった。目の前にいるセツナを本気で殺しにかかってきた。これまで殺してきたオレンジプレイヤー、その中でも凶悪なレッドプレイヤーを名乗る者達と同じ殺意を向けていた。

散々見てきたそれに気付かず、仲間を死なせてしまった責任は自分にある。そう自覚しながらも、セツナは何を悲しめばいいのか、誰を憎めばいいのか分からない。

襲ってきた彼等自身か。彼等を率いる《聖竜連合》のリーダーか。それともこの世界を作り上げた茅場昌彦で、プレイヤーとして間近で見っていたヒースクリフか。

「捕縛した3名はどうした？」
「自殺しました。最後まで黙秘を貫いたと、マーカスから報告を受けています」

ボス攻略に参加していなかった偵察隊長の質問に書記係は少し肩を落としてそう述べる。「それと」と前置きし、書記係は続ける。

「エギル氏が育成支援していたプレイヤー3名が、79層の迷宮区でPKされたそうです。3名とも、血盟騎士団の入団試験を受ける予定でした」

「PKの犯人は？」と偵察隊長が聞く。

「彼等に同行し生還したライカというプレイヤーによると、襲ってきた集団は青の装備を身に着けている者が多かったです。聖竜連合かどうかは、確証に至っていません」

「血盟騎士団と聖竜連合は対立していたのか」

セツナの質問に書記係は「いいえ」と答える。

「個人でのいさかいは何度かありましたが、ギルドをあげての対立はありません。アスナ前副団長が交渉に尽力し、合同攻略の盟約を交わしていました。それでも、攻略以外での関係は良好とは言えません。前副団長の後任はギルバート副団長に任せていたのですが……」

言葉を途切れさせた書記係は、セツナの右隣の席に視線を移す。副団長に与えられた席は無人で、寂しさを主張するように白亜の椅子は敷かれたクッションを晒している。

「ギルバートはどうしたんだよ。招集はかけたんだろ？」

苛立ったようにクラインは聞く。書記係は逡巡した後、職務として答える。

「先ほど、ギルバート副団長と他10名がギルドから退団しました。丁度、攻略隊がボス攻略へと向かっている最中です」

「はあっ？」

クラインは目を剥く。クラインだけでなく、ボス攻略に赴いていた守備隊長も。守備隊長が尋ねる。

「退団の理由は」

「不明です。メンバーリストから彼等の名前が消え、黒鉄宮で確認したところ生存しています。時期からして、今回の事態との関連も調査しています」

「分かったことは」

「今のところは何も」

書記係は議題を戻そうと新しいウィンドウを呼び出すが、セツナは

それを遮るように発言する。

「ギルバートは聖竜連合と個人的な同盟を結んでいたと聞いている」
会議に参加している全員の視線がセツナに集中する。隣のクラインは噛み付くように聞いてくる。

「お前え、何でそれを黙ってた!」

「落ち着けクライン」

守備隊長が嗜めるとクラインは再び口を結んだ。「団長、ご説明を」と書記係が促してくる。

「彼は近いうち、こちら側の団員を引き抜いて聖竜連合に移ろうとしていたそうだ」

「情報源は?」

「鼠のアルゴだ」

大人しく聞いていたクラインはそう長く我慢できなかったようだ。

「てめえ、そこまで知ってたんなら何で言わなかったんだ! 対策ぐらいは練れただろうが!!」

「血盟騎士団が聖竜連合に吸収されてもいいと考えていた」

淡々と述べるセツナの発言に全員が息を飲んだ。彼等にしてみればギルド間の競争意識が攻略へと繋がっていたのかもしれないが、生憎そんなものとは無縁に暗殺をしてきたセツナには知ったことではない。

「だが、今回の事態でそれはなくなった。聖竜連合がオレンジギルド化したのなら、ラフィン・コフィン笑う棺桶のように討伐も検討しなければならぬ」

「団長、それは性急すぎます」

そう進言するのは慎み深い守備隊長で、あくまでセツナよりも「大人」な対応を試みせる。

「聖竜連合を騙るオレンジプレイヤーかもしれません。ギルバートとも無関係かと」

「だが、そう考えるには時期が重なり過ぎている。この一連の出来事は、さつき俺達がボス攻略をしている間に起こった。そうだな」

「はい」と書記係は肯定する。

「現に攻略隊はその1つに遭遇した。こちらは被害を被っている。聖

竜連合と共同戦線を張ることは難しい」

「だとしても、我々は戦力を失いすぎています。計19人も失ってしまつては、もはや攻略など不可能です」

「俺が他のギルドに掛け合う」と、クラインが割って入る。大分落ち着いたようだが、目には未だに怒りが存在し、口調も強い。

「攻略組のギルドに協力してくれるよう頼むんだ。交渉は俺が引き受ける。そうすりゃ戦力も補充できんだろ」

「ああ。クラインに任せる。それと、ギルバートには協力者がいるという情報も入手した。名前はポール。中層で強化支援を営んでいるらしい」

その味気ない名前に、参謀職達はどう反応していいのか困っているようだ。偵察隊長が発言する。

「そんなプレイヤーは聞いたことがありません。そもそも、今時強化支援なんて商売が成立するのでしょうか？」

デジャブのようなものを覚えたが、すぐにアルゴが同じことを言っていたのを思い出す。

「調査中だ。ポールについての情報はこれしかないが、この事態の遠因である可能性も視野に入れておいてほしい」

「団長」と守備隊長が。

「まずは対話を図るべきです。このまま聖竜連合と軋轢を生むような会議を続けても、どうにもなりません」

「そうだな」とセツナは意見に同意を示す。

「聖竜連合のリンドに会談を要請する。日程は先方の都合に合わせて、それまで団員達は待機。圏外に出る場合、最低でも3人で行動し、必ず転移結晶と解毒結晶を持って。結晶無効化エリアには入らないように。以上で会議を終了する」

◆

ゾディアークを殺したあの日から、夢を見るようになった。あの日以前にも夢は見ていたのだが、奴を殺してから見る夢は明らかにそれまでと毛色が違っている。

以前はもっぱらナミエとの思い出が夢として投射されていた。一

緒に映画を観て、カフェでお茶を飲んで、ショッピングモールで買い物をして、最後はナミエがバイオリンを弾いて目が覚める。

でもゾディアークを殺してから、思い出は夢に出てこなくなった。目が覚める度に悲しみに暮れていたのに、気付けば俺は彼女が再び夢に出てきてくれるよう願っている。夢の中でもいい。幻でもいい。彼女に笑顔を見せてほしいと。彼女にバイオリンを弾いてほしいと。

新しい夢は酷く物々しい。焼け野原になった街、血で赤く染まった海、氷漬けの人間が立ち並ぶ冷凍室。それらの場所に俺はいて、そこで死者と話している。話し相手になる死者は、大体が俺の目の前で死んでいった者達だ。しかも、死に方にひどくリアリティがあった。S A Oでの死とはポリゴンを散らしての消滅なのに、彼等はしっかりと血を流した姿で現れる。

我ながら捻りがない。P D S Dで戦場の悪夢を見る兵士は戦争映画でよくあるものだ。そう斜に構えていたおかげか、俺は自分のいる場所をすんなりと受け入れることができている。

不定期に訪れる夢は前兆もなくこの日もやってきて、その舞台となる地下壕に俺は立っている。一見ホテルのように豪華なのだが、「ヒトラー 最後の12日間」で見たことがある場所だったから地下に作られた空間だと分かった。

どうやら宴会をしていたらしく、テーブルには大量の酒瓶とグラス、吸殻が山盛りになった灰皿が乱雑に置いてある。酒を飲み交わしていた親衛隊員達は酔いつぶれてしまったのか、椅子や床に伏して動く気配がない。床で雑魚寝している隊員を踏んでみても起きず、ふと彼の右手を見ると拳銃を握っていることに気付く。そして頭に視線を移すと、こめかみに小さな穴が。

ああ、自殺したんだなと思いつつ俺は廊下を歩く。何気なくドアを開けると食卓を囲む家族がいる。子供達は行儀の悪いことに皿に顔をつっ込んでいたり、椅子から転げ落ちたりしている。両親もそれを注意するどころか子供達と同じ醜態を晒していて、威厳もへったくれもあつたものじゃない。

廊下に戻ると、死体のひとつがもぞもぞと動きつたない足取りで立

ち上がる。何とも異様な死体だ。20世紀が舞台のはずなのに全身を重い金属の鎧で固めている。真ん中から二つに斬られた顔を繋ぎとめようと両手でこめかみを抑えながら、割れた口を動かしている。「現代のドイツで、第二次大戦を起こした責任は誰にあると教えているか、知っていますか？」

「ヒトラーと、ヒトラーを元首に選んだ国民」

「その通りです、隊長」

笑うと割れた顔がずれる。それを戻そうと、死体は顔を抑えつけるのに忙しい。

「ドイツは祖父母の代が犯した罪を、しっかりと子にも受け継がせようとしているのです。世界規模の戦争を起こしたのはヒトラー。しかしナチスドイツは投票で元首を決める民主的な国家でした。事の発端はヒトラーではなく、彼の狂気に気付かなかった国民達と。今の代も国をあげて罪を背負っているのですよ」

「生まれたばかりの赤ん坊にも罪を背負わせるのか。随分と酷だな」
「ええ、俺も生まれてくる子には罪はないと思っっていますよ。ですが、ドイツはそれを赦さない。ドイツ国民は、その血が罪とユダヤ人を虐殺したのですから。自分達の子にも血の罪を背負わせなければ償えないのです。罪とは、個人のみが背負うものではありません。受け継がれるのですよ。隊長が俺の罪を受け継いだように」

「オスカーだけじゃない。リーランドとニコライの罪もだ」

「ええ、全く。隊長は俺達の罪を背負ってくれました」

「それであんた達の罪は償われたと」

「いいえ、それはありません。ヒトラーが死んでも、世界は彼を赦さなかったではありませんか。そんな都合の良いものではありません。罪を他人になすりつけることはできても、個人の罪は消えませぬよ。隊長が団長の命令で殺していたと被害者ぶっても、隊長は殺しすぎましたからね」

「ああ。だが俺達の存在は必要だった。誰かが犯罪者を殺すことが」
「確かにそうです。俺達はプレイヤーを守るために存在しています。でも、成果はあったのですか？ 隊長が1人で任務を行うように

なつてから」

俺は逡巡する。黙って廊下を歩き、階段から地上へ出る。庭では火葬が行われている。穴から炎が燃え上がり、穴の底をよく見ると黒焦げになった人のシルエツトがある。それを見守る親衛隊員には全員、額に小さな穴が穿たれていて、そこから血をぼたぼたと流し続けている。

親衛隊員達に混ざって、焼かれている総統閣下を眺めながら俺はようやく答える。

「殺した連中が拠点にしていた層は、しばらくの間だけ平和だった。でも、またすぐに犯罪を働く連中が現れた。俺のことが死神として噂になつても、笑う棺桶が壊滅しても犯罪者は生まれ続けた」

「ふむ、残念です。俺達は罰を受ける覚悟で殺していたというのに」
オスカーはこんな挑発的な男だっただろうか。ぼんやりと思っていると、オスカーは暖をとるように炎へ手をかざす。

「彼は赦すまじ人間ですが、その最期だけは真つ当なやり方だったと思いますよ。逃げずに罪を背負い、その罪を誰かに押し付けることなく、自らの命と共に終わらせた」

「逃げられなかった、だろ。ドイツが国として成り立たなくなつて、逃げ場がなかったから自殺した。戦争の罪だつて、彼は最期までユダヤ人のせいにしていた」

「隊長は違うと?」

「俺は少なくとも、自分の罪をヒースクリフやゾディアークに押し付けるつもりはない。この罪は俺のものだ」

「背負つてばかりの罪は、ただの自己満足ですよ。罪は償わなければ意味がない。こうして地獄のような風景を夢に見ても、罰とは言えません」

俺はそれに反論することができない。分かっている。俺の隣にいるのは本物のオスカーじゃない。オスカーは死んだ。隣の男はオスカーの姿を模した幻で俺の分身だ。

炎の中から焼死体が起き上がる。総統閣下が自殺する直前に結婚した夫人と思つていたが、どうやら違うらしい。皮膚は黒焦げで髪も

全て燃え上がっているが、ぎよろりと剥き出しになった瞳から、俺にはその焼死体が誰なのか分かった。

「彼女なのですね。隊長が罪を背負う理由は」

「ああ。俺はナミエに赦してもらえればそれでいいと思っていた。犯罪者を殺すのも、ナミエのためと目を瞑っていた。人でなしになった俺を変わず愛してくれたら、それで赦されると思った。でも何も変わらなかった。相変わらず俺は罪を抱えたまま生きている」

「死者からは赦しも罰も得ることはできませんからね。死ぬ前に地獄に落ちてしまふなんて、辛いことです」

「知らないのか」と、俺はオスカーをからかってみせる。話しているのはもう一人の自分なのに、肝心なところを忘れていることを自嘲する。俺は自分のこめかみを指差す。

「地獄はここにある」

俺がそう言うと、オスカーは顔がずれるのも気にせず笑う。この男がこんなに笑うところを見たことはなく、俺は意外に思いながら2つに割れたオスカーを眺める。

「確かにそうでしたね。隊長とお話できて良かった」

オスカーは炎の中に入っていく。新しい燃料を得た炎は更に燃え上がり、火山が噴火したように周囲を飲み込んでいく。見守っていた親衛隊員も、穴の縁に立っていたナミエも。

自分をも飲み込もうとしている炎に臆すことなく、俺はただ燃え盛るナミエを見つめ続ける。彼女の瞳が炎の色と混ざり合っただけ見えなくなったところで、俺は目を閉じた。

◆
目を開けると地獄は綺麗さっぱり消えている。レンガ造りの街では鎧に剣を携えた人々が通路を行き交っている。間抜けなことにベソで眠ってしまったらしく、セツナはまだ明けきらない目をこする。

「やっと起きた」

見上げると、不機嫌そうな顔をしたレブロが立っている。

「団長様がこんな街中で昼寝なんてしていいわけ？ 危機管理ができ

てないわよ」

「俺だつてたまに昼寝ぐらいはしたい。それで、あんたは何でここに
いる」

「攻略の帰りよ。今日K O Bはオフなの？」

「そんなところだ」

「ふうん。じゃあちよつとお茶していかない？ 話したいこともある
し」

「メッセージを送ればいいだろ」

「せっかく誘つてあげてるのに素っ気ないわね。いいから行くわよ」

面倒だなと思ひながらセツナは立ち上がり、通路の人々を縫うよう
に歩くレブロの後を黙つてついていく。

「あの後、しばらくの間はじまりの街に籠つてたの」

街を歩きながら、無言に耐え切れなかつたのかレブロは身の上話を
始めた。

「その頃は軍の取り締まりが酷くてね、何度も軍の連中に徴税だとか
でアイテムを奪われたわ。街中で裸にひん？ かれそうになつたとき
助けてくれた男がいたんだけど、その人は本部に連行されちゃつて、
それから会つてない。私つて男運ないわよね」

自虐気味に笑うレブロだが、隣で歩くセツナは何の反応も示さな
い。それでもレブロは話し続ける。話さなければいけないとばかり
に。

「安心してなくて前いたギルドを裏切つたのに、全然安心できないから
街を出たわ。せめて中層のモンスターくらいは倒せるようになりた
いと思つてレベル上げてたら、今のギルドにスカウトされたの」

「ここにしよう」と、セツナは話を無理矢理中断させてNPCレスト
ランに入る。

「今日、ギルバートさんが正式に聖竜連合に入ったわ。引き抜いてき
た人達も一緒にね」

注文したシチューと黒パンが運ばれてきたところで、レブロがそう
告げる。

「ポールも入つたのか」

「彼は入っていないわ。あくまでギルバートさんの個人的なアドバイスで感じて、ギルド専属になるつもりはないみたい」

「そうか」と短く応じ、セツナは料理に手をつけずに続ける。

「昨日ボスを撃破した直後に、攻略に参加していたあんたの仲間にも襲われた」

「え？」とレブロは目を見開く。

「知らなかったのか」

「私は何も。メンバーリストから15人減っていたのは確認していたけど、幹部から聞いたのは脱退したってだけ。その人達はもうなくなったの？」

「12人が死んで、捕縛した3人も自殺した」

セツナは思わずため息を吐いてしまう。

「前はこちらの心配をしていたのに、自分のギルドの心配をするべきじゃないのか。メンバー同士で隠し事をしているようじゃ、存続は危うい」

「一気にメンバー11人を減らしておきながらよく言うわよ」

「19人だ。そちらに8人殺された」

レブロは驚愕の表情を浮かべる。セツナの口から出たおぞましい事実はどう言えいいのか見つけようと逡巡している。だが結局、レブロは見つけることができず話題を転換させる。

「これからどうするつもり？ もうそっちのメンバーは10人くらいしかないじゃない」

「近いうち、そっちのリーダーを問いただす予定だ。俺もできることなら融和を図りたい」

「意外ね。あなたって危険因子はとにかく殺すってイメージだったけど」

「もう死神じゃない」

それだけ言ってようやく冷めたシチューを食べる。レブロは黒パンをひと口だけかじり、沈んだ声色で聞いてくる。

「ねえ、どうして私を殺さなかったの？」

「グリーンは抹殺対象外だ」

「でもあなた、マディーンタスクのグリーンを殺したじゃない。私は何で生かしたのよ？」

「奴はうっかり殺した。あのときも言っただろう」

レブロは納得がいかないと言いたげに視線を送ってくる。無視して食事を継続するが、睨み続けるレブロに耐え切れなくなる。つくづく面倒な女だと口に出さない悪態をつく。

「気まぐれだ」

「気まぐれ？」

「ああ。あんたは更生の余地があると判断して生かした。また犯罪を働いたとしても、顔も名前も知ってるから探し出して殺すのも簡単だ」

「他にも、私みたいに見逃した人はいるの？」

「いや、見逃したのはあんただけだ。あんたにオレンジに戻る度胸はないと思った。だから、まさか聖竜連合にいたのは驚いた」

「驚いた素振りなんて見せなかつたくせに」

そう言つてレブロは食事を再開した。

◆

完成したばかりの剣を掴み、鏡のように研磨された刀身を凝視する。正確なパラメータはまだ分からないが、洗練された輝きから力強さを感じる。

「うん」

なかなかの出来だ。見栄えも良いし、店に飾ろう。そう思つてあたしは剣を抱えたまま工房から出る。窓から夕陽をいっぱい浴びた店内を見て、あたしはもう閉店しなければと思ひ至り、剣をカウンターに置いた。

「鍛冶職人のリズベットだな？」

ドアの札をCLOSEDにしたところで、物々しい口調の団体客がやって来た。来客達の装備は統一されている。馴染みのお客が似た装備をしていたから、あたしには彼等が何者なのかすぐに分かった。「すみません、今日はもう閉店なんです」

「いや、今すぐに剣を作ってもらおう。我らがリーダーの新しい剣だ。」

「光栄に思え」

その不遜な態度にあたしはカチンとくる。こういったお客はたまにいる。職人プレイヤーはいつも安全な圏内にいると思つて下に見るお客が。

「生憎ですけど、お客さんは平等というスタンスでお店をやつてるんです。いくら巨大ギルドのリーダーでも、特別扱いはできません」

圏内ならHPは減らないとか、ハラスメント防止コードに守られていてという意識で、あたしは毅然とした態度で臨む。商売ならお客は神様という姿勢でいるべきかもしれないけど、こんな理不尽な神様がいてたまるかと思う。

先頭にいる男は癩に障つたのか顔を歪めるけど、あたしはキツと目つきを鋭くする。

「仕方ない、連行しろ」

その言葉が何を意味するのか理解する前に、あたしの頬に衝撃が走った。痛みはなかった。でもそれが不気味だった。痛くも痒くもないのに、あたしの体は轟音と共に店の奥へと吹き飛ばされて、壁に激突したところで止まった。

男達はぞろぞろと店内に入ってきて、律儀なことに店番NPCが「いらっしやいませ」と頭を下げている。

先頭の男はカウンターに置きっぱなしだった作りたての剣を掴み「ほう」とうめく。

「良い剣だ」

そう言つて自分のストレージに納めてしまった。あたしはそれを止めることができず、思い通りに動かない脚を震わせる。

「今日からリンダースは聖竜連合の管轄下に入る。攻略のため、我々のために働いてもらう」

第23話 思い出には写真を

何が起こっているのか、あたしは必死に考える。でも、4人の男に前後左右を囲まれて見慣れたリンダースの街を歩かされていることしか分からない。あたしは目の前を歩く男の背中を虚ろに眺めながら歩き続ける。

1度だけ逃げようと試みた。でもすかさず男達はあたしを攻撃した。衝撃でとんだ先には仲間が待ち構えていて、あっけなく取り囲まれて逃げることを諦めた。この手口はボックスと呼ばれるものと聞いたことがある。まだ《アインクラッド解放軍》が存在していた時期、はじまりの街ではこのような手口を使った恐喝が横行していたらしい。

「なあ、こいつこのまま本部に連れてくのか？」

「殺さないと言われている。仕方ない」

「いやそりゃ分かってるよ。たださ、リーダーに引き渡すにや勿体ないんじゃないかって」

「ああ、そりゃ確かに。結構いい女だ」

男達は愉快そうに笑う。右側を塞ぐ男があたしの全身を見て気味の悪い笑みを浮かべている。あたしは何となく、これから起こる最悪のシナリオを想像してしまった。

？でしよ、と想像を足蹴にしたくなる。あたしは今年で18だけど、この世界でのアバターは15歳当時のままだ。まだ発育しきっていないし、年齢より童顔だから誰の目から見ても子供のはず。そんなあたしを、この男達は女として見ている。おぞましい。吐き気を催したあたしは手で口を塞ぐ。

さつきまで転移門広場を目指していた男達は進路を変える。もはや庭とも呼べるほど街の構造を知り尽くしているあたしには、進路の先が宿屋であると分かってしまう。

「ねえ、少し止まって」

あたしがそう言うと、背後にいる男が「どうした？」と聞いてくる。

「下着がずれたから直したいの」

にたりと気持ち悪く男達は笑った。あたしは精一杯に媚びを売った視線を彼等にくべる。正直、こんな自分が嫌になる。アスナだったら毅然と立ち向かうのに。

「いいだろう」

あたしはしゃがんでスカートの中に手を入れる。右太ももの付け根に近いところ。そこに忍ばせておいたポーチを手探りで見つけると、慎重に中身を取り出す。

そして素早くスカートから出した手を掲げて叫んだ。

「転移、オークス！」

手の中にある転移結晶に気付いた1人が、あたしの腕を掴んでもぎ取ろうとする。でも既に遅く、あたしが手から零した転移結晶は地面に落ちる前に砕けた。

「このっ——」

迫る男達の手が光に遮られて見えなくなる。数秒の光の後、あたしの視界に見慣れない村が広がっていた。

転移先に指定しておきながら、あたしはこの村が何層にあるのか知らない。万が一のときはオークスという村に転移しろ。そう言われていた。

何も敷かれていない土にあたしの影が落ちる。振り返ると、光の残照を散らした男達が立っている。4人全員が怒りに顔を歪めて、手にそれぞれの武器を携えている。

「このアマあ……………」

彼等の背後で光が煌いた。何事かと、全員が振り向く。その光が消える前に、先頭にいた男の顔が真っ二つに割れて、「え？」という表情を固めたまま消滅する。残った3人の視線はあたしへと。正確にはあたしではなく、あたしの目の前に立つフードを被った黒装束の剣士へ。いきなり現れた剣士に驚いて、あたしは尻もちをついてしまう。

剣士は腰のホルダーに繋げてある鞘を外した。鞘の先端には刃が付いていて、それをもう1本の剣として二刀流さながらに構える。

男達は駆け出した。剣士はゆっくりと歩き、彼等の迫りくる剣や斧をいなしていく。剣士は手際がよかった。武器を腕ごと斬り落とし、

プレイヤーのウィークポイントである頭や左胸ばかりを斬っていく。血飛沫のような赤いエフェクトを振りまく剣士の得物をあたしは知っている。

やがて、ものの数分と経たないうちに3人は碎け散った。PKができるということは、この村は圏外にあるんだなど、あたしは混乱の中でそれだけは冷静に判断できた。

剣を納めた剣士はフードを脱ぐ。いつもの無表情のまま、もう1人の黒の剣士は手を差し伸べてきた。

「立てるか、リズベット」

◆？

夜も更けて、日付が変わろうとしている。すっかり疲れたはずなのに、眠気はない。

家に戻るよう言われたけど、あたしはカルマ回復クエストを受けようとするセツナに我儘を言って着いていった。セツナはあたしの目の前で4人を殺した。それもプロフェツショナルさを感じる手捌きで。あたしはそれを見て、彼が本当に死神だったんだと確信した。

彼が怖い。そう思っているけど、あたしの中で彼は死神ではなく、あたしに熱を取り戻させてくれたセツナだった。おめでたい女だと自分でも思う。自覚はあるけど、あたしはそれでも彼と離れることが怖かった。傍にいてほしかった。

クエストを受けている間、あたしは殆ど喋らなかつた。時折足場の悪いフィールドを歩く際の、セツナの「足元に注意しろ」という言葉に「うん」と応える程度だった。聞きたいことはたくさんあるのに。あたしの恐怖心が抑え込めるほど小さくなるのに数時間を要した。

無事グリーンに復帰したセツナは家に送ろうとしてくれたけど、あたしはそれを断った。今のあたしをアスナやシリカに見せたくない。そう言ったら、彼は主街区の宿屋にチェックインした。

客室に入ると、セツナはコーヒーを淹れてくれた。あたしは「ありがとう」と受け取って飲むけど、その不味さに顔をしかめる。忘れていた。セツナは料理スキルがゼロだった。

「どうして、あたしが転移したって分かったの？」

「分かったんじゃない。リンダースが聖竜連合に占拠されたと聞いた。間に合って良かった」

万が一のときにはオークスに転移しろ。転移結晶は奪われないう、見つからない場所に肌身離さず隠し持つておけ。3日前、いつものようにアスナの部屋に来たセツナはそう言った。どういうことか分からなかったけど、あたしとシリカは彼の言葉に従って、常時転移結晶を持っていた。

備えあれば憂いなし。その言葉の通りに万が一のときは訪れた。これは喜ぶべきなのだろうか。セツナの予期したことが起こって、最悪の事態は免れた。でも、あたしはセツナが死神と信じざるを得なくなった。

自分勝手な落胆だ。セツナはただ真実を言っただけなのに。勝手にキリトと重ね合わせて、期待していた。

「どうして、聖竜連合が……」

「分からない。だが、あのギルドは危険だ。占拠されたのはリンダースだけではないらしい。店のこともあるだろうが、もうリンダースには近付かないほうがいい」

「うん……」

「落ち着いたら家に帰るぞ。あそこはまだ安全だ」

家は安全なんだ。良かった。

そう思ってあたしは不味いコーヒーを啜る。セツナも何食わぬ顔でコーヒーを飲んでいる。

「何か食べるか」

「大丈夫。お腹空いてないから」

そのやり取りを最後に沈黙が漂う。あたしがコーヒーを飲み切るまで続いた沈黙はとて長く、永遠のように感じる。

「セツナ」

あたしは一枚の紙片をオブジェクト化させる。いつもポーカーフェイスのセツナも、流石にあたしが持っているものには驚いたようで、少しばかり目を見開いた。

「失くしたと思っていた。ありがとう」

すぐにいつもの無表情に戻って、セツナは写真を受け取る。心なしか、あたしには写真を持つセツナが辛そうに見える。聞かずにはいられない。あたしの想像が真実なのか。そうでないのか。

「その女の子なの？ セツナが死神になった理由……」

「リズベットには関係ないことだ」

「関係あるわよ！」

あたしはそっぽを向くセツナの腕を掴む。

「セツナ……。あたし、セツナとその子に会ったことあるんだよ。あたしが露天商してた頃、ネックレスをあげたの覚えてる。セツナとその子、結婚してたんでしょ？」

セツナは何も答えない。表情を険しくして、口を真一文字に結んでいる。あのとときの面影は全くない。言葉はなくても、その顔が答えなのかもしれない。

セツナはきつと、最悪の事態に見舞われたんだと思う。それがセツナを死神にしてしまった。

「アスナがあんたを止めよとしたのは、その子のことを知ったから？」
「理由を聞いてどうする」

セツナは鋭く言う。

「アスナと同じように、リズベットも俺を止めると言い出すのか。もう無駄だ。俺は死神じゃなくなった。それに今更犯した罪から逃れることなんてできない。アスナでさえ、俺を罰することも赦すこともできなかった」

「それは……」

あたしは何も言い返せない。去年の中頃、工房に来たアスナは突然泣き出して、うわ言のように「ごめんなさい」という言葉を繰り返しながら泣いていた。確信が持てる。あの懺悔はセツナに向けたものだったのだと。

あの清く正しいアスナでさえ、セツナを止めることも罰するところも、そして赦すこともできなかった。あたしにその代わりが務まるはずがない。あたしはとことん無力だ。ハンマーを振ることしか能が

ない。

気付けば、あたしは泣いていた。目元が熱くなって、温かいものが頬を伝っていくのを感じる。

「何で泣く。あんたからすれば他人事だろう」

「あんたが泣かないからよ……。自分のことなのに……。ケロつとしててき……」

「俺は何も話してない。勝手に想像されて泣かれても困る」

「うん、分かっている……。こんなの無責任な同情だつて……」

彼女と仲睦まじく歩いてきたセツナ。無感情のまま表情が固定されたセツナ。過去と今の彼が別人のようで、他人の空似だと、あたしの妄想だと思いたい。それなのに、セツナは肯定も否定もしてくれなかった。彼もどう言えばいいのか分からないのかもしれない。あたしの想像は当たっているのかもしれない。

「リズベット。このことは、誰にも言わないでほしい」

あたしが散々泣いたあと、セツナはそう言った。

「言えないよ。辛すぎるもん……」

写真をストレージに納めたセツナは無言であたしを見ていた。もしかしたら全てを話してくれるんじゃないかと思ったけど、とうとう話すことはなかった。多分、アスナには話したんだと思う。自分が味わった絶望と苦しみを。抱えてきた罪を。そうだとしたら、セツナはアスナに救いを求めていたのだろうか。アスナに赦しを、罰を受けて解放されることを望んでいたのだろうか。

部屋を出ていくセツナにそう聞きたかったけど、その勇氣は出なかった。

結局あたしは宿で一睡もできず、朝になってから家に帰った。

◆ 「状況を」

会議室にギルドメンバーが集まったのを確認し、団長の席に腰掛けるセツナは書記係を促す。書記係はウィンドウを展開し、クラインの尽力もあつて3日間で約30人に増えたメンバー達へと開示する。

「昨日、81層から20層までの主街区が、一部を除いて聖竜連合に占

領されました。反発したプレイヤー達は圏外へ連れ出されPKされたとのこと。正確な数は調査中です。グランザムは転移門と街の入口は24時間体制で血盟騎士団が守備にあたっていますが、55層のフィールドは聖竜連合に独占された状態です」

セツナは書記係が開いたウィンドウを眺める。窓の中には無機質なフォントで、団員達がひと晩かけて集めてきた各層の状況が綴られている。昨晚リズベットに転移させた第3層は占領下に置かれていないため、特に目に留まるような記述はされていない。書記係は続ける。

「我らが団員も4名がPKされました。アルゴ氏の情報によると、聖竜連合は占領下のプレイヤーをギルドに勧誘しています。今後、更に勢力は増していくと予想されます」

クラインが書記係に尋ねる。

「何で下層と一部の層は傘下に置かなかったんだ？」

「推測ですが、狩り場やクエスト報酬の価値が低い故と思われます。中層で占領を免れた61層と22層はフィールドにモンスターが出ず、またクエストも殆ど発生しない観光地となりました」

「攻略への価値はないってか……」

「ええ」と書記係は相づちの後に続ける。

「既にご存知かもしれませんが、グランザムも聖竜連合の侵攻を受けました。街に滞在していた団員達で撃退し、ギルドメンバー1名の捕縛に成功しました。戦闘は圏外で行われましたが、死者は出ていません」

書記係が新しいウィンドウを出す。記録結晶で撮影したと思われる画像の中にはロープで縛られ、土の上で窮屈そうに座る男が苦悶の表情を浮かべている。しかしまず目が向いてしまうのは鬚まげを結った髪型で、クラインよりも侍然としている。

「ヤマトー！」

クラインが驚きの声で画面の男を呼ぶ。「知り合いか？」と隣に座るセツナが聞くとクラインは「ああ」と返す。

「よく刀スキルの情報交換してたんだ」

そう言うと、クラインは書記係に「続けてくれ」と促す。

「クライン隊長の仰る通り、このプレイヤーはヤマタという名前です。アルゴ氏から提供された情報によりますと、彼は聖竜連合の結成時から所属しているメンバーで、熟練の刀使いとしてギルド内でもトップクラスの實力者です」

書記係はまた新しいウィンドウを展開する。どうやら記録結晶の動画モードで撮影された映像らしく、画面中央には頂点が右を向いた正三角形の再生ボタンがある。

「これから流す映像は、捕縛したヤマタの取調べです」

「まさか、手荒な真似はしていないだろうね？」

そう茶化すのは偵察隊長だ。背景にある壁紙から、取り調べは本部で行われたようだ。圏内でダメージも毒もないのだから、拷問どころか尋問としても生温い。しかしそれはセツナが拷問を受け、また拷問をした経験があるから思えることだ。慣れていない者からすれば、いくら圏内とはいえ攻撃時の衝撃や音だけでも精神に負担をかけるのかもしれない。

「取調べを担当したユリウスによると、ヤマタは抵抗することなく質問に答えたそうです。まずは映像をご覧ください」

画面中央の再生ボタンが消え、左上にあるタイムコードが時間を刻み始める。ヤマタは苦虫を噛み潰したような形相でこちらを睨むが、話し始めたその口調はひどく落ち着いている。

『拘束して拷問とは、血盟騎士団も堕ちたものだな』

『あくまで取調べだ。あんたに不当な暴力を加えるつもりはない』

『ならばこの仕打ちは何だね』

『俺達血盟騎士団はあんた達をオレンジギルドと同義の存在と判断し拘束している。暴れてもらっちゃ困るのでね』

『血盟騎士団……、あの薄汚れた死神に従ってもまだ、誇りを保てるというのか？』

『確かに反発は否めないが、今の団長がかなりの實力者であることは確かだ。死神だろうと、攻略が進むのなら致し方ない』

『攻略のためなら死神にも魂を売り渡すか……』

『あんた達も攻略のためならオレンジ化も辞さないスタンスだっただろう。ここでギルドの誇り云々を議論するつもりはない。質問に答えてもらおう。なぜ各層主街区の占領を始めた？』

『……………我々は攻略のために日々邁進している。それなのに、中層にいるプレイヤー達は遊び呆けてばかりで、クエスト報酬もドロップアイテムも全てかっさらおうとしている。このデスゲームをクリアさせることは全プレイヤーの総意のはず。リソースは我々攻略組を最優先に分配すべき』

『だから、主街区をギルドで占領してプレイヤーからアイテムやコルを奪うと。《軍》と大して変わらないな』

『あの俗物どもと一緒にするな。我々には攻略という目的がある。プレイヤー達を解放するという崇高な目的がな。そもそも、プレイヤーが一致団結すれば、もっと早く攻略を進めることができたはずだ。それを貴様ら血盟騎士団が現れたせいで……………。貴様らがトッププレイヤー集団であることに固執するあまり、ギルド間の競争心を煽った。名声を挙げようと無謀にボスへ挑み、果てていった者達がどれほどいるか』

『俺はギルドの中じゃ古株だが、そんな事実はない。むしろ攻略組に無茶をしないようギルドは呼び掛けてきた。で、あんた達が事を起こしたのはリーダーの命令か？』

『そうだ。我らのリーダーが決められた。全プレイヤーを攻略へ参加させると表明された』

『あのリンドが命令したのか。信じられないな』

『リンドだと？ 笑わせるな。あんな腰抜けの小僧など、リーダーの器ではないわ』

『リンドはもうリーダーじゃないのか？』

『然るべきことだ。新たなリーダーを迎えた我らは、このゲームをクリアさせる』

『新しいリーダーの就任に内部での反発はなかったのか？ それとも、新リーダーの過激さに気付かなかったとか？』

『反発などあるものか。むしろリンドの容量の悪さに皆うんざりして

いたところだ』

『他のプレイヤーから奪うという方針を知っておきながら、あんた達は新リーダーを受け入れたと』

『そうだ』

『だが、この間までの聖竜連合は最低限のモラルは持っていた。犯罪行為こそ働いてはいたが、殺人までは犯さなかった。少なくともあんた達には、プレイヤーが攻略にとって最も重要なリソースであると認識していたはずだろう』

『ああ、今でも思っている。だが我々に逆らう者はリソースではない。ただの穀潰しだ』

『そう思うようになった経緯は？』

『……………分からん』

消え入りそうなヤマタの声で映像は終わった。画面が暗転し、中央に再生ボタンが現れる。

「ヤマタはこの後、監獄エリアへ送られました」

ウインドウを消した書記係が語る。

「このヤマタはギルドの中でも穏健派として知られていました。私は以前、交渉の席で彼と話したことがあります。我々に対して友好的な姿勢を持つ人物でした」

話を聞くクラインは眉間を押さえている。ヤマタとはそれなりに親しい仲だったのだろう。《風林火山》は無頼派と聞いていたのだが、クラインはどうにも他人に感情移入しすぎるきらいがある。

「新リーダーの名前は」

セツナの質問に書記係は「不明です」と答える。「ヤマタからも聞き出せなかったそうです」と付け加えて。

「しかし」と書記係は若干口調を弱める。

「エギル氏によると、アルゲードに侵攻した聖竜連合メンバーの中に、退団した元団員がいたと」

その報告に会議室の雰囲気が増す。団員達にどよめきが起こり、参謀職達は皆眉根を寄せている。

ギルド、特に攻略組ではギルドを抜けた者に対する風当たりは強

い。攻略の貴重な戦力を削ぐ行為で、ゲームクリアを目指すプレイヤー達にとつては裏切り者という風潮さえある。生存を懸けた詐欺や裏切りが横行するデスゲームだ。一度失った信頼を取り戻すのは絶望的と言っている。この世界で集団の連帯感や帰属意識というのは固い。

「退団したメンバー達が聖竜連合に移り、ギルド運営に関わっていると」

「それはまだ分かりません。団長は彼等の行方を追って、またギルドに戻そうとしていたのですか？」

「既に新しいギルドを見つけてしまったのなら仕方ない。彼等が抜けたのは俺が気に入らなかつたからだろう。勧誘しても戻る可能性はほぼない」

セツナは無然と言い放つ。口を開く者はいない。皆分かり切っていることだろうし、この雰囲気ですぐ不用意な発言は自身の立場を危うくする。しかし会議の進行に滞りを生むわけにはいかず、沈黙は偵察隊長によって破られる。

「過激さを増した聖竜連合が攻略を進めるとなると、いささか不安だな。連中なら、死者を出しながらも強引にやりかねん」

議題修正の糸口を見つけた書記係は偵察隊長の言葉に食いつく。

「ええ、危険な状況です。聖竜連合が要する人数は攻略組の4割を占めていました。更に増えるとなると、かつてのアインクラッド解放軍のような支配体制がアインクラッド全域に及ぶことが予想されます」
「軍のように、聖竜連合の支配体制もすぐ瓦解してくれればいいのだがな」

ここまで来ると、もう出すべき結論が見えてくる。守備隊長がセツナに進言してくる。

「団長、我々も戦力増強に努めるべきです。グランザムもいつ陥落するか分かりません」

「でもよ」と俯いていたクラインが顔を上げる。

「これ以上仲間を増やせんのか。俺だって知り合い皆に声かけてやつと今の人数なんだぞ」

書記係が思い出したように報告する。

「占領された層から逃げてきたプレイヤーの多くが下層へ流れ込んできた」と、MMOトウデイのシンカー氏から連絡を受けています」

「ならそのプレイヤー達を勧誘する。彼等も聖竜連合に反感を持っているだろう」

セツナの発言を皮肉るように、偵察隊長が鼻を鳴らす。分かっているくせにと、セツナは密かに皮肉を返す。

「団長も過激ですな。聖竜連合と事を構えるおつもりですか？」

「ああ。このまま聖竜連合に攻略の主導権を握らせるのは危険だ。死者が出ている以上、あのギルドはもはやオレンジギルドと変わらな
い」

そう言ってセツナは立ち上がる。団員達の視線を一身に受けるが、それに対するリーダーとしての感慨も愉悦も湧かなかった。

「ギルド活動での攻略は一旦休止し、血盟騎士団は攻略主導権の奪還を目指す。各自、下層にて調査を行い、同志を募ってほしい」

◆

漂う浮きは揺れる水面に任せてわずかに動くばかりで、獲物がなかった様子はない。竿を引き上げると針に付けていたはずの餌は消えている。

「また駄目だったか」

隣で同じく竿を片手に座るエギルが何気なしに言ってくる。セツナは餌箱をクリツクし、ポップアップメニューを出して竿をターゲットトする。針にワームが括り付けられた。竿を振り糸の先端が少し離れた水面に沈むと、再び長い待ち時間が訪れる。

「あんたの釣りスキルはどれくらいだ」

「700ぐらいだな。セツナは？」

「ゼロだ」

「ゼロって……。まさかお前、釣りをするのは初めてか？」

「現実で釣り堀に行ったことはある」

「本当に戦闘スキル以外は鍛えてねえんだな。にしても……………」

エギルは湖を囲む針葉樹林を見渡す。

「ここは静かだな。他の層の騒がしさが嘘みたいだぜ」

聖竜連合が各層に侵攻した日、アルゲードにいたエギルは事態を察して転移結晶で逃げたらしい。転移先がはじまりの街で良かった。あの街なら、『MMOトウデイ』の庇護を受けることができる。彼と同じ理由で逃亡してきたプレイヤーがはじまりの街にこつた返しているらしい。

「シリカから聞いた。お前、もし何かあったら転移結晶で圏外村に逃げるように言ってたらしいな。お前はこのことが起きるって分かっていたのか？」

「その可能性があった。ボス攻略の後に起こったことがギルドの命令だったとしたら、血盟騎士団の関係者にも危害が及ぶと思っていた。それに備えたただけだ」

「確かに。現にKOBに入ろうとした奴らも殺されたしな」

そう言うエギルの声は沈んでいる。侵攻でエギルが面倒を見ていたプレイヤーも犠牲になったらしい。

「あんたは、下層でまた店を開くのか」

「ああ。金になりそうな商品は何とかストレージに納めたからな。はじまりの街に店をやってる知り合いがいるから、間借りさせてもらおうさ」

「あの街なら安全だろうな。プレイヤー同士のインフラが整っているから、今のところ一番治安がいい」

「そういや、昨日もKOBが街で聞き込みしてたな」

「ああ、俺も色々な街に行っていた」

引きを感じたのか、エギルが竿を引く。糸の先には針があるだけで、短くため息をつきながらエギルは次の餌を付ける。

「まさか、占領された層に行ったりしてねえよな？」

「行ってきた」

「無茶するなおい」

「俺の独断だ。他の団員には行かせていない」

「よく無事に戻れたもんだ。KOBの団員は問答無用で圏外に連れ出されてPKされたって話だぜ」

「隠密行動は得意だからな」

「……………死神の頃に鍛えたスキルか」

「ああ」

浮きが水面に沈み、竿に引きが伝わってくる。素早く竿を引き上げると、針には革製のブーツが。

「占領された街の様子はどうだった？」

ストレージに納めたばかりの《ボロボロのブーツ》をゴミ箱へと移したセツナは、針に餌を付けながら答える。

「街中をギルドメンバーが巡回していた。一般プレイヤーも少なからずいたが、圏外でリンチされていた」

「そうか……………」

「アスナが復帰していれば、こうはならなかったと思うか」

エギルはすぐには答えない。しばらく逡巡した後には、はっきりとした口調で言う。

「ならなかっただろうな。お前はリーダーとしちや有能とは言えねえ」

「自覚はしている」

沈黙が訪れる。

時々竿を引き上げるも、セツナの竿は餌が取られていくばかりで餌箱の残りも少なくなっていく。エギルは何度か釣り上げたが、手の平に収まるサイズの小魚しか収穫がない。

「どう、釣れた？」

様子を見にやってきたリズベットに、エギルは成果を見せる。

「うわ小物ばかりね。セツナは？」

「収穫なしだ」

「まさかあんた、釣りスキルまでゼロなわけ？」

「ああ」

リズベットは深くため息をつく。

「とんだ戦闘馬鹿ねえ。まあいいわ。2人とも戻ろ。もうパーティ始めらるって」

セツナとエギルは竿と餌箱をストレージに納める。

「温かくなってきたわね」

針葉樹の森を歩きながら、リズベットがそう漏らした。まだ肌寒くはあるが、寒気はピークを過ぎて春へと向かおうとしているのが分かる。

「にしてもいいところよねえ。何回か来たことあるけど、開放感あるわあ」

「あの2人ここに住んでたんだな。人も少ないし、新婚生活にはうってつけだ」

リズベットとエギルが談笑しているのをセツナは眺める。森の中を吹き抜ける風は緑の香りを運んでくる。

「家に帰らないと」

そうアスナが言い出したのは一昨日だった。突然思い出したように、アスナはキリトと過ごした家に帰ると言い張った。リズベットとシリカは困惑していたが、セツナはそれに賛成した。その頃には聖竜連合のメンバーが優雅なセルムブルグに住み着くようになり、引越越しを考えていた。元とはいえ、血盟騎士団の副団長だったアスナをできるだけ聖竜連合から引き離しておきたかった。もし見つかつて彼女の状態を知られたらどんなことになるか。キリトを餌にすれば、今のアスナはどんな嘘でも鵜呑みにしてしまうだろう。

聞いた話によると、キリトはヒースクリフと戦う直前に、自分が死んだらアスナが自殺しないように計らってほしいと頼んだ。それを了承したヒースクリフは彼女がセルムブルグから出られないよう設定していたらしい。その言葉の通り、アスナは街から湖に出ようとすれば障壁に跳ね返され、転移門や転移結晶も使えなくなっていた。だがキリトの死から4ヶ月が経った今、もう自殺する心配なしと判断されたのか、アスナに掛けられていた縛りは解除され層の移動ができるようになった。

アスナとキリトが住んでいた第22層は聖竜連合の傘下から外れていたから都合が良かったのだが、夫婦の新居であるログハウスを初めて見たとき、セツナは密かに自分の決断を激しく後悔した。2人の家は、かつてセツナがナミエと1週間だけ暮らした家だった。

自分が住んでいた家。今は他人のものになってしまった家。

間取りは全く同じはずなのに、家に入ったときに懐かしきなんて愛おしい感情は湧かなかった。そこはアスナとキリトの好みに合わせた家具が置かれていて、必要最低限のものだけ置いていた頃の面影はすっかりなくなっていた。

アインクラッドで、ナミエと2人で過ごした中で思い出になるような場所は殆どない。家を買う前は各層の宿屋を転々としていたから、デスゲーム開始当初を除いてひとつの層に長く留まることがなかった。家に住んでいたのは1週間だけだったが、それでもそこはナミエとの思い出がたくさん詰まった唯一の居場所と言つていい。リビングでナミエのバイオリンを聴き、寝室では彼女と愛し合った。

でも残酷なことに、仮想世界の家は汚れも染みも付かない。リビングにも寝室にも、以前過ごした時間の残り香はない。別人の住居に変わった家は、セツナとナミエの痕跡をひとつも残さず消去していた。

新婚夫婦の家に居座るのは気が引ける。リズベットとシリカはそう口を揃えていたのだが、ずっと一緒に住んできたアスナは歓迎した。「賑やかなほうが楽しいじゃない」と満面の笑顔で。自由に動けるようになった彼女が不用意に出歩かないよう見張るため、共同生活は続けなければならない。リズベットはセツナも一緒に住むよう頼んできた。

「聖竜連合が来たとき、アスナを守って」

そう言われてしまえば断ることはできなかった。モンスターが出ないとはいえ家は圏外にある。アスナを襲おうとする荒くれ者を返り討ちにするのに、リズベットとシリカでは心許ない。《閃光》の異名を持つアスナも、前線から離れている今となっては攻略組との差が伸びている。1番の懸念はアスナの許可だったのだが、セツナをキリトの友人と信じる彼女は喜んで受け入れた。

こうして副団長の護衛任務という名目でセツナを加えた奇妙な共同生活が始まった。

「遅えぞお前えら」

家が見えてきた頃、串に刺した肉を啜えたクラインが舌足らずにそ

う言ってくる。エギルとクラインを招待したガーデンパーティーは既に始まっていた。「なっ」と息を飲むリズベツトは芝生を踏み鳴らしながらクラインへと近付く。

「あんた、乾杯まで待ってって言ったじゃない！」

「悪い悪い、美味そうだったもんでつい。てか本当に美味えぞこれ」「やかましいわ、少しは我慢しなさいよ！」

ばつが悪そうに笑うクラインにリズベツトは文句を言い続ける。リズベツトはクラインの武器を作ったことがあり、2人は職人と客の間柄らしい。

「それじゃ、面子が揃ったところで乾杯するかね」

エギルの「乾杯！」という音頭で、参加者達は手に持ったグラスを掲げた。家の前には大テーブルが運び出され、アスナが腕を振るった料理が隙間なく置かれている。

「むう、こりや本当に美味しいな」

バーベキューを食べるエギルが唸る。セツナは毎日のように食べているが、それでもアスナの料理は飽きることがない。

「もう、お肉ばかり食べてるじゃないですか」

「そうよ。ほらこれも食べて。あたしとシリカが作ったのよ」

口々に不満を漏らすシリカとリズベツトがサラダの皿を差し出す。ただ食材を切るだけという指摘は野暮だろう。バーベキューの串を一旦皿に置いたセツナは、フォークで葉物野菜を刺して口に運ぶ。ドレッシングはオリーブオイルの香りを見事に再現している。

「美味しい」

シリカとリズベツトは「いえい」とハイタッチする。シリカの大きな挙動でピナが肩から転げ落ちる。

ふと視線を移すと、アスナは嬉しそうに料理に勤しんでいた。大型グリルで皮がパリパリに焼き上がったチキンを切り分け、石窯からチーズとトマトがたっぷり乗ったピザを取り出す。その皿が空になると、エギルが釣った魚をシンプルに塩で味付けして焼いていく。

「アスナ、このソース辛すぎない？ 美味しいけど」

バーベキューにかじりついたリズベツトが眉を潜める。セツナは

試しに同じソースがかかった肉を食べてみる。マスタードのようだが、確かに辛味が強い。アスナが調合配合を間違えるとは思えない。当のアスナは申し訳なきように、でも満更でもなさそうな顔をしている。

「ごめんね。それキリト君用だった。キリト君辛いもの好きだから。この前だって、ユイちゃんに激辛フルコースに挑戦だなんて言い出して」

アスナは上空にある天井を仰ぐ。あの蓋の向こう、遥か上層にいると信じて疑わないキリトを探すように。

「パーティするって言ったのに今日も攻略に行っちゃって。もう病気ね」

既に慣れたシリカとリズベットは偽りの笑顔を見せるが、その様子を初めて間近で見たクラインとエギルは目を剥く。手に持っている串とフォークを静止させ、やがてゆっくりとした動作で食事へと戻る。セツナもまた、アスナの言葉に「ああ」と適当な相づちを打つことしかできなかつた。

「ねえ、写真撮らない？」

デザートのアップルパイを堪能した後、アスナが言った。参加者達は一瞬だけ表情を陰らせたが、リズベットはすぐに明るい表情に戻り「いいね」と記録結晶をオブジェクト化させる。

家を背景にして、長身のエギルとクラインは後ろに、前にはアスナを真ん中にシリカとリズベットが並ぶ。

「セツナさんも一緒に映りましょうよ」

撮影係を買って出たセツナにそう言うのはアスナだ。記録結晶はセルフタイマーでの撮影も可能としている。だがそれでもセツナを被写体から外すようにしたのは、セツナが存在を写真として残すことに抵抗があつたからだ。アスナは以前、セツナと出会ったことを忘れていた。写真に残ったセツナを見て、この状況の可笑しさに気付くことを恐れた。

そんなセツナと皆の憂いなど知らないアスナはテーブルをオブジェクト化させる。写真が嫌いと言ったところで乗り切れそうにな

く、セツナはアスナに記録結晶を手渡す。よくキリトとの思い出を撮っていたアスナは手慣れた様子で記録結晶を操作した。寝室のコントロールボードを埋め尽くす2人の写真をセツナは見たことがある。

アスナに手を引かれ、セツナは前列の真ん中、アスナの隣に立たされる。アスナは嬉しそうだ。セツナは尋ねる。

「キリトは映らなくていいのか」

アスナは苦笑いを浮かべる。

「キリト君は写真が苦手で、あまり映りたがらないんです。すみませ
ん、付き合いの悪い人で。あ、そろそろですよ」

現実のカメラと遜色ない効果音で、シャッターが切られた。

第24話 開戦には狼煙を

早朝からグランザムでは厳戒態勢が敷かれている。街の出入り口、転移門広場は団員達が数十人規模で警備にあたり、転移門広場から血盟騎士団本部までの通路両脇にも団員達が並んでいる。警備を任された団員は大多数が入団して日も浅く、武器は勿論防具の類も統制が取れているとは言い難い。通りに店を構えるNPCが客引きをするが、彼等はそれを無視して佇む。

予定時刻まで残り15分のところで、転移門の空間がより歪になる。歪む空間の中から鎧に身を包んだ一団が現れ、前後に2人ずつ囲まれた男だけは武装せず青のローブを身に纏い悠然と歩く。広場を警備する団員達の表情が険しくなり、おもむろに剣に手をかける者もいるが、抜くには至らず通路へ躍り出る一団の背中をただ眺める。

一団は迷うことなく街を歩く。目的地までの道のりには団員達が脇を固めているため迷いようがない。街の構図を知らなくても団員達が無言で教えてくれるのだが、一団を率いるローブの男にとってグランザムの街は庭のようなものだ。

歩きながら、男は街中にそびえ立つ尖塔を見上げ息を吸い込む。どこの街にも特有の臭気があるのだが、グランザムにはそれが無い。街路樹すらない自然が廃された鉄の都。永遠の不滅を追求し鋼鉄で造られた建物。鉄は腐らないから臭気を出すことはない。それが街に冷たさをもたらす。

本部の門で到着した一団を書記係が出迎える。書記係は男の顔を見て目を見開く。職務をそつなくこなす彼の珍しい表情が可笑しく、男は微笑する。

「久し振りだな、ダレン」

「……………案内いたします」

最優先は職務と切り替えたダレンは門を開き、一団を中へ招き入れる。本部の中にも警備は敷かれている。ロビーの壁際に計4人。彼等が入ってきた一団を凝視する。彼等の視線は意に介さず、男はダレンの案内に従って階段を上がっていく。

「こちらです」

他のものよりも一際大きな扉の前で、ダレンが中へと促す。

「彼等も同席して構わないかな？」

「……ええ、2人までなら許可します」

「ありがとう、ダレン」

前を歩いていた2人は扉の右へと移動し、そこで直立したまま動かなくなる。さながら神殿を守護する番人の像のように。

ダレンは扉を2回ノックする。

「団長、先方がお越しになりました」

「ああ、入れてくれ」

ダレンが扉を開けると中から光が漏れ出してくる。背後に2人の警護人を引き連れ、男は足を踏み入れる。

◆
？

「お久し振りです、セツナ団長」

参謀職達の机が撤去され、代わりに設置されたソファからセツナは立ち上がる。書記係の案内で向かいにあるソファの横で、護衛2人を引き連れた来客は足を止め、書記係は一例して会議室を後にする。

「新しいリーダーがあんただったとは。足労を感謝する。ギルバート」

聖竜連合のリーダーとしてやって来たギルバートは苦笑する。サプライズを意図していたのか、いつもの無表情を貫くセツナに反応を求めているように見える。

「突然ギルドを抜け、更にこうして押しかける形になって申し訳ありません」

「いや、構わない。こちらも話し合いの場が欲しかったところだ。退団のことも糾弾するつもりはない」

「感謝します」とギルバートは会釈する。セツナは彼のために用意したソファを手で指し、ギルバートは腰掛ける。ソファの両隣に立つ護衛達はセツナを睨みつけるが、その感情を読み取る気も起こらず、セツナもソファに座る。

この会談を持ちかけてきたのは聖竜連合だ。前リーダーのリンドに血盟騎士団から要請していたのだが、彼がリーダーから退いたことが判明してからは有耶無耶になり、対話は不可能という諦めの雰囲気だ。ギルド内に漂っていた。そんな最中の2週間前、グランザムに白旗を手にした使者と名乗る男が転移門広場に現れた。彼はその場で自身を包囲した団員達に封書を送り出した。

「そちらの団長に渡してほしい」

それだけ言って使者は転移門へと消えていったらしい。拘束して取り調べをするべきだったとクラインは主張したが、何もせず使者を返した団員達の判断は正しかったと思う。もし拘束すれば、不当な暴力と聖竜連合に正当な攻撃の機会を与えてしまう。

事の報告と共に封書を受け取ったセツナは中に1枚だけ納められた便箋を呼んだ。

血盟騎士団ギルドリーダー セツナ殿

ギルドを代表し、あなたとの対話の席を求めます。

便箋にはその短い要件と、先方が指定する日時だけが書かれていた。参謀職達は罨と警戒しながらも、その要請を受けることを勧めた。正直、期待は全くと言っていいほどなかった。会談を受けることにしたのも、相手の出方を伺うため。いずれは牢獄エリアに送ることになるであろう聖竜連合リーダーの顔と名前を認識しておくため。団員達には聖竜連合を打倒しようという気運が高まっている。

団員達の中で枷のようなものが外れかけているのを感じながら、セツナは数日後に再びグランザムにやってきた死者に了承の旨を伝えた。

「先に質問をしたいのだが」

鋭いセツナの視線にギルバートは臆さず微笑で応える。

「ええ、構いません」

「なぜ主街区に侵攻した」

「侵攻とは、随分と誤解されているようだ。我々はただ、各層で勧誘をしていただけですよ」

「そちらのメンバーにPKされたという報告を受けているが」

「私もそれは聞いています。とても残念なことです」

ギルバートは顔から笑みを消して視線をやや下げる。

「あんたの命令ではないと」

「私は穏健に進めるよう指示しました。しかし、中には過激な行為に走る者も多く、まだギルド全体の意思が統一されていない面もあることは事実です」

「80層のボス戦直後に俺達を襲ったのは、その過激派なのか」

「ええ。我らが聖竜連合はデスゲーム開始初期に結成されたドラゴンナイト・ブリゲードを前身としています。他のギルドと合併して現在に至るのですが、巨大化した結果ギルド内で派閥が生じてしまっています。一部のメンバー達が血盟騎士団に強い対抗意識を持っていることもあり、あなた方を襲ったのはその者達なのです」

「内部分裂を起こしておきながら、なぜ更にギルドの巨大化を図る。内部での抗争が激化するだろう」

「仰る通りです。しかしプレイヤー達の意味で共通するものがひとつだけあります。セツナ団長なら、ご理解されているのでは？」

ギルバートの言う通り、セツナにはその答えが分かっている。セツナのみならず、プレイヤー全員が分かり切っている。

「ゲームクリアか」

満足そうにギルバートは再び笑みを浮かべる。

「セツナ団長も就任時に仰っていましたね。もはやプレイヤー同士で下らない張り合いを続けていられる状況ではないと。その時、私はセツナ団長の言葉が信じられずにあのような無礼を働きましたが、次第にあなたに共感するようになったのですよ」

よく言えたものだ。ボスの間に押し込んでモンスターPKしようとしておいて。その皮肉を秘めるに留める。

「そうか。それは光栄だ」

「いえ、とんでもない。しかしながら、血盟騎士団は規模があまり大きいとは言えません。プレイヤー達の意思を統一するには攻略組、それも大きなギルドが牽引しなければならぬと思います」

「聖竜連合はそれを可能にすると」

「私がリーダーに就任した聖竜連合は、新たな方針としてプレイヤー全員を攻略の戦力として育て上げるつもりです。元より我々は攻略組最大の規模を誇っていたため、育成支援に必要な人も財も揃っています。残りの階層も僅かな今、もうギルド間で牽制しながら攻略を進めなくてもいいのです」

1問えば10返してくる。ここまで話してくれれば、おのずと話は見えてくる。彼が何のためにここまで来たのか。彼が何を要求してくるのか。

「さて。それでは本題に移らせてもらいます。セツナ団長、血盟騎士団の指揮権を私に譲って頂きたい」

「それは、血盟騎士団が聖竜連合と合併するという事か」

ギルバートは首肯する。

「攻略を目指すという点で私達は共通しています。あなた方を同志として迎え入れれば、こちらの過激派も鎮めることができるでしょう。悪い話ではありませんよ」

そう、悪い話ではない。

言葉だけ聞けばその通りだ。ギルバートは微笑を絶やさず返答を待っている。セツナは彼の目を見据える。瞳は好意的な善意の色を浮かべている。だが、それをセツナは信じることができない。

人の善意を信じていたのはもう昔のことだ。かつてのセツナであればギルバートの言葉を偽りなく受け入れただろう。人には誰かのために自分を犠牲にできる意思があり、それがセツナの好んでいた勇猛果敢な戦士の物語を生み出すことができたのだと。

だがこの世界に来てセツナは知ってしまった。現実には物語ではない。物語の中にある善意とは所詮作り物であると。誰しもが野蛮になれる素質を秘めていると。それを数えるのが億劫になるほど見えてきた。

セツナははつきりと述べる。

「その提案を受け入れることはできない。確かにそちらの戦力なら、ゲームクリアを果たすことは可能だろう。だが、あんた達を信用することはできない」

ギルバートは少し驚いた様子で、僅かばかりに目を見開く。セツナは続ける。

「先日も、あんたのお仲間が殺されたと報告を受けた。そちらの指揮に下れば軋轢が解消されるほどの単純な問題じゃないだろう」セツナは見逃さない。ギルバートの瞳にある善意が陰りを見せたことを。その奥に潜む黒いものを。こういった輩は何人も見てきたし始末してきた。本性を引き出すのが厄介な輩だ。

「いいのですか？ これは和平の機会だというのに」

「立て続けに起こっている犯罪行為を治めることができているあなたに、攻略を主導させるわけにはいかない」

「残念です、セツナ団長。あなた方が我々の攻略を阻むというのなら、私は徹底抗戦させてもらいます」

ギルバートは立ち上がり背を向ける。歩き出したその背中に護衛達が付いていく。

「それでは、失礼」

それだけ言つてギルバートは扉の奥へと消えていった。廊下で待機していたのか、すぐに書記係とクラインが入ってくる。

「団長、協議のほうは？」

「聖竜連合との合併を持ち掛けられた」

「お前え、まさかそれ受けたんじゃねえだろうな」

「いや」とセツナは前置きする。

「交渉は決裂した。血盟騎士団はこれから、占領された層の解放に動く」

◆
?

SAOの料理は簡略化されすぎてつまらない。

それはアスナの口癖だ。それでも、現実で料理なんて家庭科の授業でしか経験がないシリカにとっては奥の深い領域になっている。

食材を切り分ける際は大きさと形を設定し、包丁で食材をタップするだけでいい。でもスキル練度が低ければ設定通りの形や大きさはならず歪になってしまう。焼きや煮込みの際は調理時間をタイ

マーで設定するだけでいい。でもスキル練度が低ければ満足に火の通っていない生焼け生煮えか、逆に火を入れ過ぎて黒焦げにしてしまう。

SAOでの食事はNPCレストランで摂っていたし、圏外で食事を摂るほどフィールド探索に熱を上げなかったこともあって、非常食を作ることもしなかった。そんなシリカが料理を嗜むようになった理由は、単純に暇つぶしだった。

5ヶ月前から部屋にこもる生活をするようになったシリカは暇を持て余していた。その頃は寝たきりになっていたアスナの様子を見る役目を与えられていたが、物言わないアスナと会話に華を咲かせることもできず、ただ部屋でぐうたらに過ごすだけ。気を利かせたセツナは本を貸してくれた。読書家のプレイヤーが記憶した文章を写した本が発刊されているらしい。これはいい暇つぶしになると思ったのだが、セツナが貸す本はどれも難解で内容が殆ど頭に入っていない。ラインナップは『すばらしい新世界』、『星を継ぐもの』、『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』と、彼はSFを好むらしい。

アスナが元気になっても家にこもる生活は変わらなかったのだが、自然とスキルを完全習得している彼女に料理を習うようになった。アスナには何を調理させても美味しく仕上がる。ランクの低い食材でも味付け次第で高ランク食材にも勝る料理にしてしまう。高ランク食材なんて使えば、本当に頬が落ちてしまいそうだ。

「シリカちゃん上手になったね」
スープの味見をして、アスナは笑顔を向ける。アスナの下で修業を積んで、もうシリカの料理スキルも900の大台を超えた。

「もう完全習得も近いし、わたしが教えることはもうないかも」
シリカは照れ臭く笑う。

「でも、アスナさんには敵わないです。お醤油の調合なんて、あたしにはできないですよ」

「わたしだって最初から上手くいったわけじゃないわ。色んな食材を試して、失敗だって多かつたんだから」

アスナの腕前は、ただスキル練度によるものだけではない。たとえ

シリカがスキルを極めたとしても、アスナに勝る料理は作れない。アインクラッドで手に入る調味料と味覚再生エンジンを全て解析するなんて、相当の根気が必要だ。しかもアスナは攻略の傍らでそれをやってのけている。

「ただいまあ」

ぐったりと疲れた様子でリズベットが入ってくる。

「お帰りリズ」

「お帰りなさい」

ソファにうなだれるリズベットにシリカはお茶を出す。アスナ特製のハーブティーだ。

「お店はどうでした？」

「はじまりの街でお店やってる知り合いに頼んで、工房を貸してもらったわ。まあ、露天商に戻っちゃったけどね」

リズベットはお茶を飲んで穏やかなため息をつく。すごく根性のある人だ。お店が差し押しさえ同然の状況で、まだ商売を続けている。

「リズ、お店移っちゃったの？ わたしリンダースの雰囲気好きだったのに」

会話を聞いていたアスナがそう言うってくる。「あっ」とリズベットは一瞬だけ焦りの表情を浮かべる。

「まあ、はじまりの街は人が多いから。大量に作って、大量に安く売ることにしたのよ。もう軍もないし、街を出る人も多みたいだしさ」アスナには外の状況を教えていない。ただ今まで通り攻略を進めていると嘘をついている。

ヒースクリフは攻略組を導いている。

キリトは前線で思う存分暴れている。

アスナはそう信じて疑わない。アスナの攻略復帰を良しとしないのも、キリトが彼女を案じての意向だと嘘を重ねている。とても辛いことだけど、最も辛いのはキリトが死んでしまったことをアスナが思い出してしまうことだ。

「さて、それじゃ晩御飯にしましょう。シリカちゃん、セツナさん起こしてくれる？」

「はい」とシリカは階段を上がり客間へと向かう。客間に入ると真っ先に視線が向くのはベッドで眠るセツナだ。彼のために用意された部屋の家具はベッドだけで、私物はひとつも置かれていない。

「セツナさん」

シリカは眠る彼に呼び掛ける。眠るときも険しい表情は変わらない。

一緒に住み始めて分かったことだが、セツナは意外にもずぼらな一面がある。たまに起こしに部屋を訪ねると、決まって布団もかけずコートも着たまま眠っている。でもそれは仕方のないことなのかもしれない。ここ最近の家を出るのが夕方、帰宅は朝方と昼夜逆転している。今日も朝帰ってきて食事を終えるときすぐに就寝した。

「セツナさん！」

シリカが肩を揺さぶり、ピナが口で顔を突いたところでようやく目を開ける。

「セツナさん、ご飯ですよ」

「ああ………」

ゆっくりと上体を起こして、セツナは目を擦る。意識はすぐに覚醒したのか、おもむろにベッドから降りるとウィンドウを呼び出して紙束をオブジェクト化させる。

「今日の朝刊だ」

「ありがとうございます」

差し出された新聞を受け取ると、シリカはすぐ自分のストレージに納める。新聞はシリカが外の状況を知るための貴重な情報源だ。リズベットから聞こうにも、アスナの前では伏せなければいけないことが多すぎる。セツナも家にいるときは食事が寝るときだけだ。

リビングに降りると、既に夕食の準備が整っていた。リズベットがセツナに悪戯な笑みを向ける。

「起きたわね寝坊助。10時間以上は寝たんじゃない？」

「2日振りの睡眠だ。それくらいは寝てもいい」

ダイニングを囲み、「いただきます」と手を合わせて食事を始める。
「今日はシリカちゃんが作ったのよ」

アスナは嬉しそうに言う。チキンのスープを飲んだリズベツトは「うん」と頷く。

「上達したじゃない。アスナを越すんじゃない？」

「そんな、アスナさんほどじゃないですよ」

シリカは恐る恐るセツナを見やる。セツナはぶつきらぼうにスープを飲み、豚肉のソテーへと手を伸ばす。ソテーもシリカが焼いたものだ。

「もうセツナ、女の子が作ってくれたんだから感想ぐらい言いなさいよ」

リズベツトが茶化すと、セツナは無表情のまま一旦手を止める。

「美味しい」

「良かったあ」

シリカはほっと胸を撫で下ろす。男性に料理を振る舞うのは思いのほか緊張する。嬉しい反面、この料理をキリトに食べてくれないことを思うと危うく悲しみに暮れそうになる。シリカはそれをぐっと押し殺し、スープを口に流し込む。

食後のコーヒーを楽しんだあと、セツナは身支度を始めた。剣をホルダーに刺し、回復系アイテムと転移結晶をポーチに詰めていく。

「そうだ。セツナさん、これ持って行ってください」

アスナはキッチンに向かい、すぐにバケツト2つを手に戻ってくる。

「お弁当です。キリト君に渡しておいてください」

そういえば、さつきシリカが夕食を作っている横でアスナはサンドイッチを作っていた。セツナは差し出されたバケツトを受け取る。

「あいつは大食いなんだな」

セツナがそう言うと、アスナは少し不満そうな顔をする。

「もうひとつはセツナさんの分ですよ」

「俺の」

「キリト君がお世話になってるお礼です。これくらいしかできませんけど」

アスナは笑顔を向ける。セツナは彼女の顔を一瞥すると、受け取っ

たバケツトをストレージに納める。

「ありがとう、渡しておく」

「よろしくお願いします」

「行ってくる」とセツナは暗くなった外へと出ていく。

キリトさんの分はどうするんだろう。

彼の背中を見て、シリカはそう思った。2人分食べるのだろうか。誰かにあげるのだろうか。それとも捨ててしまうのだろうか。どんな方法であれ、帰宅したときにセツナは2つとも空になったバケツトをアスナに渡すだろう。そしてキリトの居場所を聞かれれば、まだ迷宮にこもっていると伝えるのだろう。

シリカはたまらず階段を上がった。リズベツトと共同の寝室に入り、ベッドにうつ伏せで飛び込む。ピナが顔を擦り寄せてくるのが愛おしく、そのペールブルーの体を抱きしめる。

泣いちや駄目だ。

もう散々泣いたし、一番泣きたいのはアスナだ。

ピナが苦しそうに鳴き声をあげ、我に振り返す。「ごめんね」と背中を撫でると、少し気持ちが落ち着いた。

気分転換に、さつきセツナから受け取った新聞を開く。1面の見出しには大きく【第27層奪還成功】と書かれている。1ヶ月前から、ずっと戦況ばかりが掲載されている。

アインクラッドは3度目の変革を迎えた。

1度目の変革はデスゲームの開始宣言。

2度目の変革はヒースクリフの正体の露呈。

そして3度目は、血盟騎士団と聖竜連合の抗争。

血盟騎士団の方針が聖竜連合に占領された層の奪還へと変わってから、双方の対立は表面化した。巨大化しているに違いない聖竜連合に対抗すべく、血盟騎士団も次々と団員を迎え入れ規模が膨れ上がっている。入団者の多くが占領された層から逃げてきたプレイヤーだが、はじまりの街から1歩も出なかったプレイヤーも入団するようになった。

その勇気を称える内容が新聞には書かれていたけど、シリカは彼等

の根底にあるのは勇氣ではなく恐怖なのだと思う。

「はじまりの街が聖竜連合に支配されるのは時間の問題だ。また《軍》が好き勝手やっていた頃に戻っちまう。過ちを繰り返さないために、武器を手に立ち上がるべきだ」

街で木の実を拾い集めて生計を立てて暮らしていた男は、インタビューでそう言っていた。衝撃的なことに、写真の中で彼の隣にはシリカと同一年くらいの男の子が写っていた。少年も血盟騎士団の入団者で、まだ前線に立ってるレベルじゃないからエギルの元でレベリングとスキル修行に精を出しているらしい。

これは戦争だ。

いつかの記事で、そんなことが書かれていた記憶がある。

正直、シリカには実感が無い。普段は外に出ないのだから当然なのだが、戦争とは無縁の生活をしてきたから、戦争なんて歴史の授業で習う程度の認識しかない。

でも、怖いことが起こっているということとは分かる。新聞にはこの層で戦闘が行われ何人が死んだのかが書かれている。これまでもSAOで死は常に潜むものだったが、最近は1日に何十人死んでも大したニュースにならなくなった。

攻略はどうなった。

その疑問を持つプレイヤーは多いと思う。でも、主張する者はいない。それどころではなくなったから。

上層に行けば、聖竜連合に入らされるか殺されるか。それが下層にいるプレイヤー達の認識だ。情報屋でさえギルドの内情を掴めていないせいも、聖竜連合は謎だらけで得体が知れず、それが更にプレイヤー達の恐怖を煽っている。

聖竜連合と戦う意向を示したセツナは何を思うのだろう。プレイヤー達の意識が攻略から遠ざかり、子供まで戦わせようとしている。

まだ現実で暮らしていた頃、シリカは紛争地域で戦わされている子供達の映像をニュースで見ることがある。子供達を戦わせているのは先進国を倒そうと意気込む組織の大人だった。あのときはまだ幼かったから、それが何を意味するのか分からず父親に聞いたことがあ

る。

「パパ、どうしてあの子達は鉄砲持ってるの？」

父親は少し困った顔をしたけど応えてくれた。

「持っていないさいつて、大人に言われたからだよ。嫌だって言えないんだ」

「どうして？」

「……………そうしなければ、とても怖いことをされるんだよ」

歯切れの悪い答えで納得できなかったけど、父親の口からはそれしか言葉が見つからなかったのだろう。今でも理解しているとは言えないが、きつとあの子供達はシリカの想像を遥かに越える苦境にあるのだろう。

細腕には重い銃を持った小さい戦士達。

いずれ前線に立つはじまりの街の小さい剣士。

シリカは恐怖する。対岸の火事が自分の世界にも及んでいることに。人がどれだけ死んでも、誰も目を向けなくなっていることに。

その人々を率いているのがセツナであることが、シリカの恐怖をより深くしていった。

◆

？

「なあ、本当に奴の話は信用できんのか？」

「それをこれから調べに行く」

「本当でも嘘でも、どうせ作戦は継続するんだろ？」

「ああ」

鼻を鳴らし、クラインは後頭部を乱暴に搔く。

「一番のネックはクラインさんですよ。パラメータなんて殆ど脳筋じゃないすか」

「分かってるつつの」

元《風林火山》の青年の苦言を受け流し、クラインはセツナへと視線を戻す。

「で、侵入経路はどうすんだ？」

「いつもの手でいく」

「そうかい。奴さんらが現れるまで待機ってか」

「そう長く待つこともない。あそこのクエストは深夜にしか発生しないからな。アルゴからも裏は取れている」

「なら安心だな」

そう言いながらもクラインはどうにも気乗りしない様子だ。隣にいる元《風林火山》の青年が聞いてくる。

「団長、たった3人で大丈夫なんですか？」

「少人数の方が目立ちにくい。もし目標を逃がした場合、あんたの追跡スキルを頼りにすることになる。頼んだぞ、サダヒサ」

サダヒサは緊張気味に「はい」と返事をする。追跡スキルの達人とクラインが推薦したから今回の作戦に同行させることにしたが、少々不安を拭えない。

「着替えるぞ」

そう指示したセツナはコートを装備から外し、代わりに青を基調とした装いに変え、更に鎧で防具を固める。2人もセツナと似た装備へと切り替える。鎧の感触を確かめながらクラインが愚痴を漏らす。

「この装備、重くて動きずれえんだよな」

「街にいる間の辛抱だ」

部屋から出ると、ドアの前で書記係が待機していた。

「準備は整ったようですね。3人の行動はマップ追跡します。不測の事態に陥った場合、余裕があればメッセージを。まず生存を最優先し、危うい状況になれば転移してください」

作戦前の啓蒙じみた指示に、セツナはいつも通りに「了解」と返す。
「武運を」

その言葉と共に送り出されたセツナ達3人は夜のグランザムへと繰り出す。街にはまだプレイヤーが行き交っているが、大半がセツナ達の同胞だ。作戦内容はギルドメンバー全員に知れ渡っているため、敵と同じ格好をしたセツナ達を見ても警戒を向ける者は誰もいない。

転移門広場は警備の団員達で埋め尽くされている。これから戦地へと向かおうとしているセツナ達に激励を送り、彼等の声援に包まれながら3人は目元まで覆う兜を装備する。

「行くぞ」

静かなセツナの声に、クラインとサダヒサは頷く。門へと足を進め、歪む空間の中で3人は一斉にシステムへと告げる。

「転移、アークソフィア」

第25話 問いには答えを

光が晴れ、視界には第76層主街区アークソファイアが広がっている。まるで宮殿の庭のように整備された花壇が、かすかな風に揺られている。

そんな美しい街を眺める暇もなく、転移門の前で待機していた青鎧の男が近付いてくる。

「名前と所属を」

「ビッグス、第27師団」

セツナに続いてクラインとサダヒサも。

「レイン、第27師団」

「アンジエロ、第27師団」

男はオブジェクト化させた紙束を捲る。ギルドメンバーリストを見れば確實だが、ページが長くなっているリストをスクロールする手間を省くための簡略化なのだろう。リストのページは、男が捲る名簿のように所属部隊ごとの細分化ができない。

「認識票^{タグ}を」

男は名前を確認できたのか、紙束をストレージに納めて慥然と言う。3人はポーチから金属製プレートを差し出す。楕円形のプレートには各々が名乗った名前と所属部隊の番号が刻印されている。男はじつと認識票を凝視し、「よし」と強張った表情を少しだけ緩める。「同志と認める」

男は敬礼し、3人もようやく慣れ始めた敬礼を返す。金属が擦れ合う音を鳴らしながら、3人は怪しまれない程度で足早に転移門広場から街へと繰り出す。

この検問を突破する手口は、聖竜連合との対立が決定的になってすぐに確立されたものだ。最初の奪還作戦はいかにも聖竜連合らしい装備を職人に作らせ、占領下にある主街区に潜入しようと試みた。だが団員達からの連絡が途絶え、後になって生命の碑で名前に横線が引かれた。死因にPKという報告を遺して。

最初の作戦が失敗に終わったことを踏まえ、血盟騎士団は敵のメン

バーを拘束することに注力した。迷宮区タワーから敵陣に侵入し、フィールドをうろついていたメンバー達を拉致し身ぐるみを剥ぎ、そこで彼等が認識票ドックタグなんて軍隊じみた物を支給されていることが分かった。模造品の製作も検討されたが、商人の鑑定によれば第32層の鉱山でしか採れない金属が使われていることが判明し断念することになった。最初の捕獲では5人が作戦に参加したが、それでも成功したのは1人だけと危険に見合わない収穫だった。

武力衝突が本格化してから1ヶ月が経った現在では、層の奪還時に拘束したメンバー達から奪った認識票と名前が使われている。こんな金属製プレートを持つだけで大丈夫なのかという懸念の声もあった。検問でマップ追跡されて、提示した認識票の本来の持ち主が牢獄エリアにいるなんてばれたら即アウトだ。しかし案外この方法は上手くいっている。名前と所属。それに認識票と追い打ちをかければ簡単に仲間と認めてもらえる。主街区の転移門はプレイヤーの出入りが激しい。それが相まって、あまり時間を食いたくない検問係の対応はおざなりになる。

何てぞんざいなセキュリティだ。指紋や網膜といった生体認証が普及した社会で生まれ育ったセツナはそう思う。そこにいる人間が本人であるという確証を得ない情報は怪しむべきなのに、あの検問係はセツナ達が認識票を持っているというだけで同志と受け入れてしまった。質の悪いことに、その緩い警備のせいで侵入を許していることに気付かず、何度も領土を奪われている。

でも実際、そういった確実なセキュリティが存在しない時代があったことも事実だ。身分証を持っているだけで別の人間に成り代われる。それを持つだけで仲間と照明できてしまう恐ろしく不用心な時代が。そんな時代をモチーフとしているアインクラッドに、現実での高度なセキュリティシステムは持ち込めない。ゲームマスターの茅場昌彦がシステムをアップデートに盛り込めば話は別だが。

とはいえ、血盟騎士団の警備も強固とはいえない。いつ聖竜連合の侵入を許してしまうかも分からない危うい状況にある。それを防ぐべく、血盟騎士団は検問の際にメインメニューの開示を求めている。

自分のステータスをさらけ出すことをゲーマーは拒むらしいのだが、致し方ない。そうしなければ安全な街に入れることはできない。一応、所属ギルドの欄以外はなるべく見ないという配慮をしているようだが。

行き交うプレイヤーの殆どが聖竜連合の街はまるで鏡の国のようだ。皆が同じ色の服を着ていて、同じ赴の鎧を打ち鳴らしている。「スター・ウォーズ」のストームトルーパーのように。皆同じ。集団とはそういうものだ。現にセツナ達は彼等と同じ格好をしていることで、聖竜連合という統制された集団に紛れ込んでいる。

南門から街を出ると、遠くで撒き散らされたポリゴンの光が見える。多分、安全地帯で反乱分子の処刑を行っているのだろう。門の両脇で待機している門番に敬礼し、3人はすぐ近くに広がる森へ入る。

森の中をしばらく進んだところで止まった。3人は鎧と兜を装備から解除し、代わりに黒のフード付きコートを身に纏う。クラインは地味とあまり気に入っていないが、普段着として愛用しているセツナはこのコートがどれだけ動きやすいか熟知している。フードを被り行進を開始する。まっすぐ目的地へ向かうなら平原を通るのが一番だが、生憎そこは聖竜連合に独占されている。森の中は歩き辛いから滅多に使われないし、更に隠蔽ボーナスの高いコートを着ていることもあって、発見されるには高い索敵スキルを必要とする。

隠密スキルを最優先に上げること。セツナは主街区奪還に選抜した団員達にそう指示した。

これからの戦いは対モンスターではなく対人だ。それも正面から立ち向かうのではなく、迂回し、背後から忍び寄り、ウィークポイントを攻撃し、数秒で拘束するか殺す。

戦闘に直結するスキルしか鍛えていないクラインはかなり苦労していたらしい。彼としてはこんな隠れながら進める作戦は屈辱だろう。侍に憧れるあまり、目立って仕方ない武者鎧を防具に選択してしまう男だ。

目的地までの道中で、セツナ達はポリゴンが散っている安全地帯へ

と近づく機会に恵まれた。予想通り、ポリゴンは処刑された反乱分子達の残骸だった。彼等は1列に並んだ木製の十字架に縛られ、処刑人達が合図と共にその腹へライトエフェクトを纏った槍を刺していく。まるでキリストの受難のように。ある者は1撃で、またある者は数撃持ちこたえたが、皆もれなくポリゴン片へと変わっていった。

この状況も今となっては珍しくない。奪還作戦の後、聖竜連合が反抗するプレイヤー達を処刑していたなんて報告は毎度のことだ。

「くそつたれが」

次の受刑者達が磔にされているとき、クラインが静かな怒りを漏らす。

「終わらせたらよ、あいつらを助けようぜ」

「その頃には全員殺されている」

素っ気ない言葉にクラインを更に立腹させる。

「プレイヤーを解放するためにこんなことしてんのに、助けねえなんてよ………」

「その場しのぎの同情で作戦を失敗させれば、犠牲者はもつと増える」
「沢山を生かすために、あいつらは見捨てるのか……?」

「そのおかげで今までの作戦は成功してきた」

作戦上において倫理は障害でしかない。そんなものは捨ててしまえ。いつの間にか、そんな意識が蔓延している。人の死。アインクラッドではそれが身近なものになっている。生命の碑は毎日名前に横線を引くことに忙しい。そのスピードは、皮肉なことに血盟騎士団が層を奪還した直後に早まっていく。

支配している指揮官を拘束すれば、この層は安全になるはずだ。そう都合の良いものにはならず、指揮官を失った街は混乱に陥る。血盟騎士団が鎮圧にあたるのだが、街にいる聖竜連合は圏外に出て特攻じみた攻撃を仕掛けてくる。その様子は地獄絵図だ。全員拘束なんて器用な真似はできず、乱戦の死者は100を越えてしまうこともある。これでも、犠牲者を最小限に留めようとした努力の結果だ。

森をモンスターとのエンカウントを避けながら南東へと突き進み、セツナ達は目的地へと到達する。森の風景は変わらないが、エリアの

一角にフラグM o bのイベントが発生する石碑がある。

第76層では、毎週金曜日の午前0時から3時までの間に発生するイベントで経験値稼ぎが行われている。この層から命懸けで脱出してきたプレイヤーは、そう言っていた。層の指揮を任された女指揮官は、自らもレベルを上げるためにフラグM o b攻略へと赴くらしい。

SAOにおいて貴重な女性プレイヤーにして層の指揮官。指揮官という安全な空調のきいた部屋でふんぞり返っているイメージがあるが、女性となるとそうはいかない。女性プレイヤーが上官の相手をさせられていたなんて報告も多い。彼女らが凌辱から逃れるには、ギルドにおいて貴重な戦力へのし上がるしかない。

『目標地点に到達。待機する』

書記係へとメッセージを送り、待機すること2時間。情報は確かだったらしく、森の中で列を成して行軍する一団が見えた。先頭を歩くのも情報通り女だ。華奢な体軀に見合わない鎧で身を固めている。「行くぞ」

セツナの指示で、クラインとサダヒサが左右へと分散する。その姿が木々の群れに消えていくと、セツナは索敵スキルに見えれない範囲ぎりぎりまで近づき、ポーチから職人お手製の火炎瓶を投げ込む。列の真ん中で火炎瓶は炸裂し、暗かった森を炎で照らしてくれた。パニックに陥る一団から、セツナは敏捷度と体術スキルにものを言わせて接近し、女指揮官に体当たりして森の中へと押し込む。

女は抵抗こそしたが、背後には既に回り込んでいたサダヒサが麻痺毒のダガーを突き立て無力化する。更にクラインがローブで縛り上げ、ついでに叫び声をあげないよう猿ぐつわをする。仕上げにセツナは指揮官の手を掴み、ウインドウを呼び出す動作をさせてギルドから脱退させる。これでマップ追跡の手段は消えた。システム上に登録されたお友達が探す可能性もあるので、安心はできないが。

後方にいる一団がパニックになっているうちに、セツナ達は担架に指揮官を乗せてその場を離れた。運ばれている間、指揮官の女は必死にもがいていた。口に挟まれた布のせいで漏れない叫びをあげる彼女に、かつて自分が《軍》にされたようにセツナはダガーで麻痺毒を

継続させていく。

セツナは思い出す。かつて中央アジアの一部地域で行われていた、こうして女性を誘拐して花嫁にする風習の話を。交際どころか話したこともない、町で一目見ただけの娘を一家ぐるみで家に連れ込み、泣き叫ぼうが構わず結婚式を挙げてしまいうらしい。

ふと、セツナは自分が無力の女性を連れ出していることに背徳感を見出す。無神経になれ、鈍感になれ。余計な倫理など捨ててしまえ。そう団員達に呼びかけているのは自分なのに。良心が残っているとしても矮小だ。

森を抜けた先にある平原で、女指揮官を降ろす。サダヒサに周囲の見張りを任せ、クラインが兜を脱がせる横でセツナは書記係にメツセージを送る。

『目標を拘束。尋問する』

これではらくすれば、血盟騎士団は大部隊を編成してアークソフィアへ攻め入る手順になっている。でもものんびりはしてられない。指揮官の失踪を知れば、街にいる聖竜連合はフィールドの搜索を始めてしまうだろう。

セツナは顔の上半分が露になった指揮官を見やる。縛られてもまだ抵抗を続けていて、でも麻痺毒のせいで動作は亀のように遅い。その顔を見て、セツナは驚きとも落胆とも取れる曖昧な感傷を覚える。

「レブロ」

「知り合いか？」

「ああ」

セツナは緑色の粘液が滴る剣をレブロの喉元に添える。

「叫んだり騒いだりすれば殺す。返答以外のことを喋ってもだ。分かったのなら領け」

レブロはセツナに怒りの視線を向けた後、ゆっくりとした動作で頷く。口元の布を外すと、弾力のある唇がぷるりと揺れた。

「あなたのギルドでの立場は」

呼吸の荒いレブロは吐息だけを口から出している。クラインが「おい」と脅しかけるも、彼にも吊り上がった目を向けている。初めて

会ったときと同じ目だ。恐怖に怒りを上塗りしようとする虚勢を懸命に貫こうとしている。

剣を握る手に力を込めたセツナは、刀身を僅かばかり喉元に押し込む。レブロの白い肌に切り傷の形をしたエフェクトが貼り付いた。彼女の目から怒りが消えて、完全に恐怖の色へと変わる。

「……………第76師団指揮官」

「与えられた任務は」

「76層の治安維持と、プレイヤーの育成」

「治安維持に処刑は含まれているのか」

「私の判断よ」

これがあのレブロなのか。指揮官が彼女だったという事実よりも、彼女の言葉にセツナは驚愕する。

レブロはいつも自分のギルドに怯えていて、安心することを最優先に考える女だった。それを自ら進んでレベリングに精を出し、逆らう者達を殺すなんて。

ギルドの内情についての報告も、抗争が始まった途端に途絶えた。危険と判断し彼女とのフレンド登録は解除したため、その後の彼女が何を経てこの層の指揮官へと登り詰める選択をしたのかは知らない。「以前のあんたは、ギルバートが関わり始めたギルドに疑念を持っていたはずだ。何故今、そのギルドのために働いている」

「現実に還りたいから」

「心境が変化した過程を聞いている。なぜギルバートに忠誠を誓った」

「あなたが頼りないからよ。死神さんが攻略を率いるなんて、プレイヤー達が納得しないわよ」

「ギルドは俺の指示通りに動いている」

「私達を敵と決めたからでしょ。皆で共通の子を虐めて、結束を固めるのと同じ」

セツナは拳を頬に見舞う。こればかりはクラインも「やめろ！」と腕を掴んで制止してくる。

「お仲間さんもドン引きじゃない。本当に血盟騎士団はあなたの思い

通りに動いているの?」

「返答以外の発言は許可していない」

「そう言っておきながら、あなたは私を殺さないじゃない。私からギルドの情報を聞き出すまで殺せない。それでしょ?」

セツナは気付く。いつの間にか、レブロの瞳や声色から恐怖が消えていることに。彼女は虚勢故に挑発しているのではない。確固たる自信があるのだ。この状況下にありながら、ギルドに対する忠誠を覆さないという自信が。

ぺつ、とレブロが唾を吐いた。飛び出した唾液はセツナの右頬に命中し、生暖かい粘質の液体がゆつくりと下へ伝っていくのを感じる。

「攻略を邪魔するテロリスト共」

今度は怒りが読み取れる。それもはつきりとした怒り。彼女が本気で怒っているのが分かる。セツナに、クラインに、見張りをしているサダヒサに。3人が所属する血盟騎士団に。

「あなた達は勝てないわ。たとえ降参しても、私達は1人残らず殺す」
恐怖が嘲りへ。嘲りが怒りへ。怒りが殺意へと変わっていく。その殺意には見覚えがある。ボスの間でセツナ達を襲った聖竜連合の攻略隊。穏健派から過激派へと転向したヤマタ。レブロの目は彼等と同じ殺意を秘めている。

「何があんたをそうさせた」

「これは私の意思よ」

同じだ。この1ヶ月で拘束した者達は、最初こそ怯えるなり喚くなり様々な反応を見せていたが、最後には揃って明確な殺意を剥き出しにしてきた。

彼等は狂っているのか。レブロもまた狂っているのか。そうなっ
てしまえば、まともな返答は期待できない。

おぞましい。ナミエを失い、ただ復讐と喉の渴きを癒すために生きてきた自分を見ているようだ。抑えきれない衝動に身を委ねるその姿は見るに絶えない。自らが犯した罪を自覚していないなら尚更だ。

俺も狂っているのか。

違うと、内側から迫る迷いを振り切るようにセツナは聞いた。

「どうしてあんたは狂った」

「私は狂っていない。狂っているのはあなたよ」

自分は誰かに強要されて殺してきたんじゃない。自分の意思でゾディアークを、犯罪者を殺すと選択した。それなのに迷いは消える気配がない。それが本当にナミエを想ったのことなのか、自分の根底にあるのが愛しい感情なのか分からなくなっている。

自分の動悸が早まっていくのを感じる。

「何故だ」

セツナは問い続ける。レブロは答えずに沈黙を決め込んでいる。それでもセツナは問わずにはいられない。その問いがレブロに対してなのか、自分に対する問いなのか曖昧になっていく。

「あんたは何故——」

「離れるセツナ！」

クラインの手がセツナの両肩を掴む。されるがままに上体を後ろへと反らされ仰向けに倒れる。

レブロはどうやら、自分から首を剣に押し込もうとしていたらしい。押し込む前にセツナが剣を放してしまったから、彼女の首は体にくっ付いたままだ。

「何でだよ……………」

クラインは静かに、それでも激しく怒気を込めた口調で言う。

「何でこんなことすんだよ……………」。ゲームクリアって目的は同じだろうが……………」

セツナはゆっくりと立ち上がる。サダヒサも自分の背後で起こった状況を把握すべく、見張りを忘れてセツナ達へと視線を向けている。

自分の意識じゃないようだった。まるでレブロの狂気が自分の中に乗り移ってくるような錯覚を覚える。

「もう、まともに返答できる状態じゃない」

その判断ができるほどに冷静さが戻ってくる。

レブロは地面の草に顔を埋めている。微かにすすり泣く声が聞こえた。なぜ泣いているのか。そんな質問にも答えてくれそうにはな

かった。

不意に視界のメッセージアイコンが点滅を始めた。タッチしてウィンドウを開く。

『主街区に向かった部隊が苦戦している模様です。団長は至急、加勢に向かってください』

アークソフィアのある方角へと視線を向ける。街灯の光が漏れだす街の横で、おぼろげだが青い光が見える。

「どうしたんですか？」

「主街区の制圧に苦戦しているらしい。アークソフィアに行つてくる。サダヒサとクラインはここで待機。敵が近付いてきても交戦は避けて移動しろ」

指示を飛ばしたセツナは森へと駆け出す。索敵マップを展開しながら進む道中、事態を知らされていないのか処刑が継続されていた。来た時と同じように繰り広げられている悲劇に目を背け街へと急ぐ。

「なんでや！　なんでワイらがこんな目に遭わないかんのや!!」

通り過ぎると、背後から嗚咽交じりの声が聞こえる。必死さを感じる大声だったが、距離が広がっていくうちに聞こえなくなる。もう殺されてしまったのか。それともこれから殺されるのかは分からない。

彼等の死も、これから増える死に埋もれていくのだろうと思いつつ、セツナは走り続けた。

?

◆
1時間半にも及ぶ戦いを経て、血盟騎士団の部隊はグランザムに帰還した。オレンジに転向したセツナはカルマを回復しなければならず、クエストを終えた頃には午前4時を過ぎていて、外周から白みはじめた空が見えた。街の街灯も消えていた。

帰還していた団員達が路地の端でうなだれている街を歩き、セツナは本部へと入る。本部のロビーにも団員達がすし詰め状態で休息をとっていた。

「お疲れさん」

会議室に入ると、行儀悪く机に座っているクラインが疲れた顔で出

迎える。部屋にはセツナの他にクラインしかいない。多分、他の参謀職達は奪還したアークソフィアにまだ残っているのだろう。

「サダヒサは」

「あのレブロとかいう女を監獄に連れてった。今回は何人死んだ？」

「こちら側の死者は24人。聖竜連合側は分からないが、多分街にいた連中の殆どは死んだ」

「……………そうか」

クラインは頭を垂れる。慰めになるかは分からないが、セツナはアスナから持たされたバケットを差し出す。目の前に何かがあることに気付いたクラインは、間の抜けた顔でバケットとセツナの顔を交互に見る。

「アスナの手作りだ」

「いいのか？」

「2つ持たされたからな。余っても仕方ない」

「おう……………」とクラインはバケットを受け取り、中に入ったサンドイッチにかぶりつく。

「……………美味え」

食欲に火が点いたのか、クラインは立て続けに頬張り一気に食べた。セツナも自分のサンドイッチを食べる。本当に美味い。見た目はサンドイッチなのだが挟まれているのは肉のパティとレタスで、味付けは照り焼きソースだ。その味は紛れもなく、現実で部活帰りによくチームメイト達と食べていたハンバーガーだった。

「これ、キリトのために作ったんだろ？」

「ああ」

数瞬の沈黙を経て、クラインはバケットに手を突っ込み2つめのサンドイッチ、もとい照り焼きバーガーを掴みがつくように食べる。食べながらクラインは泣いていた。鼻をすすりながら、時折むせ返りながらも構わず食べ続け、一気に飲み込んだ。

「俺、デスゲームが始まったとき、キリトと一緒にいたんだ」

クラインは涙を手甲で拭いながら語り始める。懺悔室で神父に告白するように。その声はとても彼とは思えないほど弱々しい。

「生き残るために一緒に来いって言われたのに、俺……、断ったんだ。そんなとき一緒にログインしたダチを見捨てられなくてよ」

クラインは鼻をすすり続ける。

「あいつの気遣いを踏みにじったつてのに……、あいつヒースクリフと戦う直前に、そのこと謝ってきたんだ。他人に無関心な振りしてお人好しだぜ。本当に……。俺は、あんときの俺を赦せねえよ。あいつから貰った蘇生アイテム……、売り飛ばしちまった……」

セツナは黙ってサンドイッチを食べる。この手の懺悔に似た告白は、本人に全て吐き出させるのが一番だ。

クラインも罪を背負っている。傍から聞けば、別に背負う必要のない罪だ。でも彼はそれを背負うと選択してしまった。キリトを死なせ、同じギルドの仲間を死なせ、自分だけがのうのうと生きていることが赦せず。

死者は赦してはくれない。なら誰が赦してくれるのか。そう問い続けてきたセツナは気付いてしまう。

償いの対象が既にはない罪を赦せるのは、罪を抱えた本人だけだ。

自分は死者のために何かした。自分は贖罪に値する苦行を味わった。自分は罪に相当する罰を与えられた。だから罪は消えた。

気の持ちよう。開き直り。つまりはそういうことだ。

それは本当の意味での贖罪じゃない。でも、それ以外に罪の意識が消える方法はもうないのだ。死者も神も赦してはくれないのだから。

それでも、とセツナは自分の在りようが導き出した結論と矛盾していることを理解する。

セツナは自分を赦すことができない。セツナが赦してほしいのは自分ではなく、罪の対象であるナミエであることは変わっていない。滑稽だ。償いのために罪を背負い、負の連鎖に陥った末に出した結論も足蹴にしてしまうなんて。

「団長」

ノックもせず偵察隊長が入ってくる。クラインは慌てて涙を拭いた。

「32層も奪還できたか」

「いえ……、失敗しました」

他の団員達に漏れず、偵察隊長も疲れ切っている様子だ。いつもの気迫がなく、声もしわがれて老け込んでしまったように思える。

「損失は」

「マップから反応が消えたのは……、48人です」

それは、第32層奪還のために編成した部隊の3分の1に及ぶ人数だった。第32層は金属素材が豊富に採れる鉱山があり、いわば武器作成、しかも大量生産するのに要となる層と言っている。聖竜連合の補給を断つために、同時進行で作戦を行った第76層よりも多くの人員を割いた。作戦成功をより確実にするためだ。

しかも48人。第76層奪還の死者24人と合わせれば、とても少ない損失とは言えない。血盟騎士団のギルドメンバーは1300人を越えている。聖竜連合から逃れた攻略組と下層に留まっていた者、更に《MMOトウデイ》を吸収して巨大化させたのだが、実際に戦闘に駆り出せるメンバーは3割程度で、層奪還に生じる犠牲で数は目を追うごとに減少している。大半の者が強化に専念しなければならぬのだ。

か細い声のまま、偵察隊長は続ける。

「鉱山麓の村を制圧しにかかりましたが、鉱山の中に増援が潜んでおり、戦況が不利と判断し転移結晶での撤退を命じました」

「そうか、判断は正しかった。よく戻ってきてくれた」

形だけの労いをかけ、セツナは扉へと歩く。団員達の状況を書き係から聞かなければ。そう思ったのだが、コートの裾を掴まれ立ち止まる。セツナを止めるのは、ひどく怯えた表情を浮かべる偵察隊長だった。まるで幽霊でも見てきたたような顔だ。

「団長……、敵はPKを心得ています……。死んだ者の多くが、成す術もありませんでした……」

「対策を練る。今日はもう休め」

そう言ってセツナは偵察隊長を引き剥がす。意外な光景だ。死神と呼ばれたセツナにあからさまな嫌悪感を示していた彼がすがりつ

いてくるなんて。それほどまでに緊迫した状況だったというのだろうか。だがセツナは、偵察隊長の身に起こった事態を想像することができた。俯瞰から客観視するのではなく、自分にも同じことが起こったかのように主観的な想像で。

セツナが加勢に駆けつけたアークソファイア前で行われた乱戦。血盟騎士団が街を包囲し、街の転移門から増援が現れるとお約束のように起こるいつもの戦いだった。でも、その時ばかりは様子がいつもと違った。聖竜連合達はやみくもに武器を振るのではなく、しっかりと頭や左胸を狙ってきた。麻痺毒を仕込んだ攻撃によって倒れて、なぶり殺しにされた団員もいる。

対人、即ち人殺しの技術。彼等はそれをしっかりと心得ていた。

PK手口は以前から一般プレイヤーの間に広く知れ渡っていた。レッドプレイヤーの襲撃に備えるためであり、公表されても実行に移す者なんていない。ポピュラーな手口の中で最もお手軽で確実なのはポータルPKくらいで、それ以外は純粹にプレイヤーとしての力量や特殊なスキルの習得が必要になってくる。そんな技術を身に着けないのはSAOがゲーム故なのだが、それ以上にゲームとして「不必要」だからでもある。

対人戦闘なんてものは腕試しだ。PKで経験値は手に入らないため、嗜虐的愉悦を感じる以外にメリットはない。だから、いくらレッドプレイヤー対策だろうと一般プレイヤー達がPK手口の研究に手を出すことはしなかった。

だが、本来ならば攻略組ギルドであるはずの聖竜連合はPKを熟知しているようだった。そうになると、おのずと彼等が擁しているものが見えてくる。

聖竜連合にPK技術を提供した者。その人物を探し出すことが、この戦争の雌雄を決する。

◆
?

コンクリート造りの監獄は窓がなく、昼も夜もない。こんな場所に長くいたら体内時計が正確性を失い生活習慣が狂いそうだ。それで

も囚人達が健康被害を訴えないのは、肉体が血も内蔵も詰まっていな
いポリゴンで形成されているおかげだ。現実の肉体は常時健康状態
が監視された状態にあるから、その点は心配がない。

階段を下り、セツナは口ウソクの弱々しい火を頼りに監房の廊下を
進む。

「ねえあんた。外はどうなってるの?」

通りがかった監房から女の声が聞こえる。一瞥すると、燃えるよう
な赤い髪の女が鉄格子を掴んで物乞いのように卑屈な目を向けてい
る。見覚えがある。以前ヒースクリフから壊滅させるよう命令を受
けていたオレンジギルドのリーダーだった女だ。セツナが手を下す
前に第3者の介入を受け、ここに収容されている。確か名前は口ザリ
アといったか。

「ねえってば」という声を無視して、セツナは廊下を進んでいく。無
数にある監房のひとつで足を止め、鉄格子の奥にいる女に語りかけ
る。

「調子はどうだ、レブロ」

コンクリートの床にうなだれていたレブロは頭を上げる。

「……………最低ね」

虚ろな声。目もまた虚ろで何を映しているのか分からない。構わ
ずセツナは質問を重ねる。体調が悪くなるはずはない。

「層の占拠を命令したのはギルバートか」

「そうよ」

「なぜあんたはギルバートに忠誠を誓った」

レブロは再び頭を垂れて黙りこくった後、顔を左右に振る。

「……………分からないわ。私があなた達を敵視する意識は確かにあつ
た。でも…………、どうしてそう思うようになったのか分からないの
……………」

「そうか」

ある程度予想できた答えだ。占領が始まった直後に拘束されたヤ
ママも、自分の意識の変容を答えることができなかった。

報告によると、この監獄に送られたヤマママは獄中で死んだ。死因は

回線切断だった。監房から消えていることが確認されてしばらく、生命の碑に刻まれた彼の名前に線が引かれたことが確認されている。パニックや絶望。過度な精神的負担による意識障害でナーヴギアが脳の信号を拾えず、回線が切断された状態が2時間続き死亡するという事例はデスゲーム初期に頻発していたらしい。

「あんだ達に对人戦闘を教えたのは誰だ」

唐突に話題を変えたことに、レブロは少し驚く素振りを見せる。

「どうしてそんなことを？」

「以前の聖竜連合はオレンジ化を辞さない集団だったが、犯罪行為に特化しているとは言えなかった。むしろ犯罪者狩りを推奨する節すらあった。なのに、ギルドのPK戦術は洗練されていた。ノウハウは最近、ギルバートがそつちに移ってから持ち込まれたんだろう」

レブロは焦点の合わない目で宙を眺め、うなづく。

「あなたの言っていることが当たってるかは分からないけど……。確かに、ギルバートさんがリーダーになってから、ギルドの強化方針が変わった……。気がする」

「強化を主導していたのはギルバートか」

「ううん、違うわ」

「なら誰だ。誰がメンバーを育成していた」

セツナは思わず答えを急いでいる。潜んでいた焦りが明確になり、最初は距離を置いていた鉄格子に自分から近づいていることに気付く。

かなりまどろっこしい聞き方だが、セツナにはレブロから出てくる人物に大方の検討がついている。その人物の名前を出していたのはレブロの方なのだから。

セツナに戸惑いの目を向けながらも、レブロは答える。

その名前は何度聞いても簡潔で味気なく、それがどこか不気味でもあった。

「ポールよ」

第26話 観客には興行を

この意思は、殺意と呼べるのだろうか。転移時の光がおさまっていくなか、俺はそう思った。

死神として殺していた頃、俺のなかには標的に対する憎悪があり、それは殺意と明確に自覚できるものだった。

このプレイヤーを殺せば、この層は安全になる。

このギルドを潰せば、この周辺の層は安全になる。

殺した者達は皆初対面で、しばらくの間は仲間として苦楽を共にしていたが、いざ殺すときに俺は一片の迷いもなく殺していた。殺す理由にはヒースクリフから受けた命令よりも、俺の中にある憎悪が大半を占めていた。

俺はナミエを殺された。

あんた達はナミエを殺したわけじゃないが、奴と同類だ。

だから死んでほしい。

俺は確かに彼等を憎んでいた。その場に居合わせてしまった不幸な目撃者にも申し訳ないという気持ちはあったが、必要だからと殺すのに迷いはなかった。

でも俺の憎悪は、ゾディアークを殺してから嘘のように消えた。あれだけ犯罪者達を憎んでいたのに、復讐を果たした俺にはそれまで自分を満たしていたものが抜け落ちてしまったらしい。

俺は空っぽになってしまった。殺す理由を失ってしまった。でも俺のアバターは殺すために培ってきたスキルと経験値に満ちていて、できるからという理由でこれから標的を殺そうとしている。

青の衣装。重苦しい鎧。顔半分を覆う兜。いつもと同じ潜入用の装備を身に纏っているせいか、気分はいたって平常だ。この作戦がどれだけ重要なのか、理解しているが実感が追いついていない。隣にいるクラインを見やると、緊張と興奮を押し殺すように口を真一文字に結んでいる。

「名前と所属を」

村の広場で待機している検問係が近付いてくる。答えるのは俺で

もクラインでもなく、2人の前にいる女だ。

「レブロ、第76師団」

見慣れた光景。今まで自分もやってきた光景だ。レブロは紛れもなく本人としてここにやってきたのだが、彼女は2ヶ月も前に俺によつて無理矢理ギルドから脱退させられている。ほんの小さな、でも看過できない不安を感じながら、俺は紙束を捲る検問係を兜越しに見つめる。

「76層の指揮官殿でしたか。層が奪われた際に行方不明になったと聞いていますが」

「KOBに捕縛されていたけど、彼等が助けてくれたわ」

そう言つてレブロは俺とクラインを手で示す。

「そうでしたか。ご無事で何よりです」

「リーダーはいる？ 報告したいことがあるの」

「ええ、邸宅におられます。きっと、レブロ様の帰還を喜んでくださいますよ」

「ありがとう。申し訳ないけど、招待メッセージを貰える？ 無理矢理抜けさせられて」

「え？」と検問係は、レブロの後ろにつく俺とクラインに視線を向ける。なぜ彼等から招待を受けないのかと彼の内なる疑問が聞こえる。「ここに来るまで忘れちゃつた」

レブロが照れ隠しに微笑すると、検問係はそこで考えるのを止めてしまったようだ。貴重な女性プレイヤーは重宝される。虐げられることもあるが、力があれば男よりも強力な女王になることもできる。実話を基にした「東京島」のように。

メッセージを受諾し、晴れて聖竜連合に復帰したレブロは敬礼した。俺とクラインもそれにならない、検問係も敬礼を返す。

念のために認識票を提示して、俺達は村の家々の中でも一際大きく突き出した屋根を目指して歩き出す。

そこで俺はようやく、自分がこれから殺しに行くんだなど実感することができた。この実感こそ、殺意なのだろうか。親しくもない、つい最近出会ったばかりで憎しみも抱いていない人間だけど、その人間

を殺すという目的がある。

現実で戦争映画を観る度に、俺は疑問を抱いていた。「プライベート・ライアン」、「ブラックホーク・ダウン」、「アメリカン・スナイパー」に登場する兵士達は、どうして無慈悲に敵を殺すことができるのだろうか。純粋なフィクションなら、作り話と言うだけで解決してしまう。でも多くの戦争映画は実話をもとに製作されている。第二次世界大戦、ソマリア内戦、イラク戦争。実際に起こった戦争の中で、兵士達は容赦なく敵に弾丸を叩き込んできたはずだ。

映像の中で語られる戦う理由とは、もっぱらお国のため、祖国にいたる家族のため。でも、そんな理由が蓋となって、心を完全に覆い尽くせるのだろうか。国や家族を守るために死地へ赴く。殺人の罪を背負う。そんな尊い自己犠牲の精神だけで、危険な戦場へ行く理由を作ることができないだろう。少なくとも、軍隊は兵士をできるだけ死なせないよう必要な装備を与える。敵が発砲してきたら反撃できるように銃を。弾丸が当たっても致命傷にならない防弾チョッキを。戦地においても兵士は生きること躍起だ。自己犠牲という意思とは矛盾している。

多分、彼等の根本にあるのは愛国心や家族愛ではなく、自分にできることだからという理由なのかもしれない。体を鍛え、訓練を受け、敵を殺すための技術を持っている。だから殺す。

俺は、画面の中で戦っていた彼等と同じなのかもしれない。敵を殺せる人材が必要という需要に応えるために、自分の殺人技術を提供するというビジネス精神に基づいている。

料理人は作れるから料理を作る。音楽家は弾けるから曲を弾く。軍人は殺せるから敵を殺す。

殺すのは誰かのため。殺すのは利益のため。意図はともかく殺すという目的があるのなら、俺の標的への意思は殺意と呼ぶべきか。だとしたら、この作戦を決めた会議にいた全員の意思も、殺意と呼べるのかもしれない。

◆

？

「それでは決議を取ります。ギルバートとポールの暗殺に賛成する方は挙手を」

書記係がそう言うと、会議に出席する参謀職の中からゆっくりと、ひとつ、ふたつと手が挙がっていった。ゲストとして招集されたアルゴを除き、会議に出席する5人のうち挙手したのは新任の偵察隊長、クライン、俺の3人だった。守備隊長も手を挙げようか迷っている素振りが見えたが、過半数が賛成の意を表した時点で決議は取れた。

「議題を、暗殺作戦へと移します」

物騒な作戦に、会議室に漂う緊張の高まりを感じた。明らかにこれまでとは毛色の異なる作戦になったからだ。

血盟騎士団はこれまでの奪還作戦で、PKを避けるという方針を徹底していた。殺す場合は自身の生存が脅かされる場合に限り許可する。だが戦争と呼ばれるほどにスケールが大きくなってしまったこの戦いで、団員達は生存のために敵を殺さなければならなかった。

できるだけ殺すな。そう指示されながらも、実行された作戦で死者は必ず出る。1人や2人のみならず、何十何百という単位で。

それでもPKを避けつつ奪還は続けられていたのだが、抗争が始まって2ヶ月経つ頃には、そんな生命の尊重は限界がきていた。既に占領された層の半分近くは奪還に成功したのだが、その代償として血盟騎士団は前任の偵察隊長と名だたるトッププレイヤー達を浪費してしまった。まだレベルが伴っていない団員を戦地に送ることも多くなり、作戦時に生じる損失も増えている。

ポールという人物が、聖竜連合にPK戦術をもたらしている。そのレブロから発した情報は徐々にだが参謀職達の間にも、暗殺という選択肢を浮かべさせた。

リーダーであるギルバートとポール。2人を排除すれば、聖竜連合の統率を瓦解させることができるのではないか。

その可能性は以前から存在した。それでもあえて議題には出さず放置していた選択を表に出した。ある意味でこの会議は記念すべきものだ。

「シュミットは取調べで、ギルバートが最前線の層で攻略隊を率いていることを話しました」

書記係が出した新しいウィンドウに、取調べを受けたシュミットの顔が浮かぶ。以前はギルドでデイフエンダー隊リーダーを務め、つい4日前に拘束された際に自分はギルドの上層部だと喚き散らしていた男だ。最初は威勢が良かったが、麻痺毒で動けない状態で目にピックを刺されると奇声をあげて泣いていたのを思い出す。元は小心者だったらしく、たつぷりと恐怖を植え付けたら俺が剣を掴むだけでギルドの情報を洗いざらい話してくれた。

偵察隊長が質問する。

「最前線というところ1層か？」

「いえ。シュミットによると聖竜連合は87層まで攻略を進めていました。ここから先は、団長に説明をお願いします」

取調べを担当した俺は頷き、椅子から立ち上がると書記係の展開するウィンドウの横へ移動する。

「ギルドの拠点は56層のままだが、ギルバートは攻略の指揮を執るため本部には滞在していない」

「なるほど」と若き偵察隊長が短くため息をつく。

「前線に勇ましく立つ姿を、ギルメンに見せて支持を集めてるわけですか。それに俺達の知らない81層より上なら、簡単に攻められない」

「そうだ」と応え、俺は続ける。

「シュミットはギルバートの親衛隊に所属していたから、彼について詳しく聞き出すことができた」

「ですが、彼を拘束したのは19層でしたね。傘下から外れているあの層に何故いたのですか？」

そう質問するのは守備隊長だった。

「前に所属していたギルドのリーダーの墓参りに来ていたらしい。19層の警備を担当していたヨルコとカインズが捕縛してくれた」

「間抜けな野郎だぜ」とクラインが苛立たしげに頭を搔く。つまりない冗談にも聞こえるが、笑う者は誰もいなかった。

「ギルバートは85層のケルシュという圏外村でプレイヤーホームを購入している。ポールもそこに滞在しているようだ。アルゴ、ポールについての情報は」

椅子にふんぞり返っているアルゴはお手上げという身振りをする。「情報屋仲間がこぞってそいつのことを調べようとしたケド、強化支援をしているポールのことは何も分からなかったヨ」

クラインは椅子から立ち上がったアルゴを睨む。

「おいおい、何も分かんねえってこた無ねえだろ。強化支援の商売してたんなら、客とか商売仲間とかいたんじゃねえのか？」

「ポールってプレイヤーはいたにはいたサ。でもそいつが強化支援をしてたって情報はナイ。それと生命の碑で調べたら、ポールは1ヶ月半前にモンスター戦で死んでル」

システム上では既に死亡しているプレイヤー。ならば幽霊だ。そんな馬鹿なことを言う者は議場にいない。単純に偽名を名乗っているだけだ。ギルドメンバーに名を連ねず、ギルドの誰ともフレンド登録もパーティも組まず本当の名前を隠し通してきた。もしかしたら本物のポールに責任を押し付けようとしていたのかもしれない。映画監督が責任逃れの名義として使っていたアラン・スミシーのように。

「名前が何にしても、暗殺することに変わりはないじゃないですか。問題はこの作戦を誰がやるかってことですよ」

偵察隊長の言葉で、出席者全員が無表情に固まり視線を泳がせている。大量の死者が出ると分かっているがら今まで奪還作戦を立案してきたというのに、たった2人を殺す作戦ではおかしなことに倫理的ハードルが高まっている。

これまでの作戦は、できるだけ死者を出さないよう、誰も殺さないことを呼びかけるものだった。上手くいけば誰も死なないかもしれない。でもこの作戦は、少なくとも2人は死ぬ。2人の死者を出さなければならぬ。PKに対する罪悪感に苦しみ、前線から退いた団員もいる。

血盟騎士団を勝利へと導くために罪を背負う。これはそういう作

戦なのだ。

「ちらり、と参謀職達の視線が、ある一点に集中している。俺には彼等の意図が分かってしまう。」

「彼等は気付いていない振りをしていた。暗殺というやり方がずっと楽であることを知りながら、ずっとその選択を取らなかつたのは自分達の誇りと名誉を守るためだつた。認めたくなかつたのだ。」

「自分達の身近にいる暗殺のスペシャリスト。これまで200のPKを手掛けてきた死神をリーダーとして有していることに。」

「俺は沈黙を破る。」

「俺がやる」

「クラインを除く参謀職達はわざとらしい驚愕を、アルゴは複雑そうな表情を浮かべている。」

「ただ、補助としてもう1人欲しい」

「数秒だけさっきの雰囲気に戻るが、すぐに手が挙がる。」

「なら俺と一緒に行く」

「俺はクラインの目を見据えて聞いた。」

「いいのか。場合によってはあんたが殺すこともありえる」

「ギルバートとポールを殺せば、この戦いは終わるんだろ。ならやるしかねえ。これ以上誰かが死んでくのはご免だ」

「そう言うクラインの顔は険しく、悲しげでもあつた。俺は「頼む」と短く言った。」

「案内役としてレブロを作戦に同行させる。決行は明後日だ」

？

◆
ケルシュの村にいる聖竜連合のメンバー達は仕事熱心だ。夜でも休むことなく村を巡回している。中層あたりでは僅かばかりに一般プレイヤーがいたが、この村にいるのはギルドメンバーだけらしい。

「ギルバートが購入したとされるプレイヤーホームは、さながら村の領主が住む屋敷と呼ぶべきものだった。ギルバートとポールだけでなく親衛隊も寝泊まりするのだから、それなりの広さが必要なのかもしれない。」

1ヶ月近くギルドから離れていたレブロもリーダーの新しい邸宅を見るのは初めてだったらしく、その大きさに息を飲んでいいる。

3人は地理を確認するため屋敷の周辺を1周回ることにした。怪しまれないよう、巡回しているように見せるために屋敷を注視しないよう気を配りながら。ヨーロッパの様式、いつの時代がモチーフかは分からないが屋敷は3階建てで、吹き抜けにある中庭の中央には噴水が休むことなく水音を立てている。

裏口はなく、入れるのは表のドアだけ。2階のバルコニーに跳ぶことも考えたが、夜とはいえ巡回する警備陣に見つかってしまいかもしれない。消去法で、3人は表のドアから侵入する方法を取ることにした。

村に入った時点で、既にセツナ達は同志として迎えられているらしい。ドアを守護する警備の男はただの木偶で、レブロがリーダーに報告したいことがあるという旨を話したらあっさりの中へ迎え入れてしまった。

堂々と本拠地へと潜入できた3人は、赤い絨毯が敷かれた廊下を歩いた。屋敷の周りを歩いたときのように、巡回するふりをして。多くの部屋が親衛隊の寝室として使われていた。中にいる全員が眠っている部屋もあれば、隊員達がカードゲームに興じている部屋もある。

「ギルバート様、明日も早いのです。お休みになったほうが」

2階に上がったところで、その声は聞こえた。咄嗟に廊下の角に隠れる。

「あまり寝なくても支障はないさ。あと13層なんだ。もう寝る時間すら惜しい」

「あなたはプレイヤー達の希望なんです。あなたについていけば、本当にこのゲームがクリアされるかもしれないって、皆思ってるんですよ」

「そう言ってくれると嬉しいが、私は何もしていないよ。君達の強化を手伝ったのはポールだ」

「ポールさんですか。確かに彼はすごい人ですけど、どうしてギルドに入らないんでしょう？ あの人はサブリーダーに相応しい人なの

に」

「彼は自由を好む性分だね。ギルドとかパーティとか、そういうった集団に縛られるのを嫌がるんだ。それでも、ポールは我々に協力してくれている。一刻も早くクリアさせて、彼も現実に還さねば」

「そうですね。それなのに、血盟騎士団の連中は邪魔ばかりしてきます。あいつら、そこまでして最強なんて名声が欲しいんですかね。ギルバート様ならどう思います?」

「ふむ。ヒースクリフがいなくなつて、あのギルドの戦力は大幅に落ちてしまった。それでも、蜜の味を知ってしまったら簡単には捨てられない。その歪みに耐えかねてここに移つたが、やはり心が痛むな。元とはいえ同胞と争うのは」

「仕方がないことです。連中はもう害虫と変わらないんですから」

「ああ、仕方がないな。さて、私はそろそろ休むとするよ。引き続き、警備を頼む」

「ええ、お休みなさい」

セツナは堂々と廊下の角から出た。仲間の格好をしている今では、下手にこそそこそ動くと怪しまれる。「あ…」と危うく声を出しかけたクラインと、レプロの足音が背後から聞こえてくる。

ギルバートと話していた青年は巡回に戻り、階段を下りていった。それと同じタイミングでギルバートのドアノブを掴む手が見える。ドアが閉まるとセツナは振り返り、手でドアを指し示す。クラインとレプロは頷き、セツナは聞き耳スキルで周囲に耳を傾ける。近くに足音は聞こえない。

素早く、静かにドアの前に立ち、ノブを捻る。ドアが全開する前に隙間から入り込み、剣を抜くところらを振り返ろうと顔を横に向けていたギルバートの首に剣を刺す。部屋の照明は消されていて、ギルバートの首を貫通したハーディスクラウンの切っ先が、窓から入り込んだ街灯のおぼろげな光を反射して紅く煌いている。セツナは剣を捻り、真っ直ぐ下へと、首から腹にかけて切り裂いた。ぱっくりと空いたギルバートの裂け目から窓が、窓の奥に広がる村が見える。

数瞬の硬直を経て、ギルバートは消滅した。アインクラッドの攻略

を牽引するリーダーとしては、あっけない最期だった。

「後はポールだな」

クラインは霧散するギルバートの残骸を眺めながら言う。既にギルドの求心力は排除したが、さっきの会話でもう一人の目標もギルドで重要なポストにいたことが分かってしまった。ギルバートを失っても、聖竜連合はポールを次のリーダーに持ち上げて再起するかもしれない。

「ポールの部屋を――」

セツナはそこで言葉を止め、素早く部屋を見渡した。

「おい、どうしたんだよ」

「剣を構えろ。まだ誰かいる」

セツナがそう言うのと、クラインは顔に緊張の色を浮かべながら刀を抜く。夜の部屋は大部分が影に包まれている。一瞬だけ。ほんの一瞬だけが確かに見えた。部屋を包み込む影の一点で浮かぶ、プレイヤーを示すグリーンのカーソルが。

窓から月光が射し込んでくる。ケルシユは外周に近い区域にあるようで、雲の切れ間から現れた月が部屋を照らし出した。

月光に晒されて、部屋のソファに腰を据えていた男が影の中から姿を見せる。男は不敵な笑みを浮かべている。

「死神が来るには、いい夜じゃないか」

セツナは男に剣を向ける。

「名前は」

「ポール。ギルバートを殺したってことは、俺も殺すつもりでここに来たんだろう。スリルがあつていい」

掴み所のない男。それがポールに対する第1印象だ。艶のある声。言葉の端々に抑揚のあるイントネーション。

「お前は……………」

セツナはポールの顔を凝視する。視界に彼のカーソルとHPが浮かぶ。

彼の顔を見るのは初めてのはず。なのに、この妙な緊張感は何なのかと疑問が浮かび上がる。

セツナはこの緊張感に覚えがある。内なる衝動を駆り立てるような、まるで自分が塗り替えられてしまうような戦慄。「チャイルド・プレイ」を彷彿とさせるポップで不気味なもの。

そして、セツナは緊張感の正体を見出す。

月光を浴びる男は笑っている。今宵は、記念すべき初めて出会う夜ではなかったのだ。

セツナだけでなく、幾度も攻略組が追っていた存在。

追跡を逃れ、とうとう誰にも見つけることができなかつた男。

悪のカリスマ。

殺人ギルド《ラフィン・コフィン笑う棺桶》のリーダー。

セツナは意図せずその名前を口に出した。

「……………P O H」

第27話 演出には音楽を

「お前の噂は聞いていたよ。まさか聖騎士が、死神の雇い主だったなんてな」

月光に晒された顔は感慨深そうにセツナを見つめてくる。喉元に突き付けられた剣には紅のグラデーションがかかっていて、それが真つ白な壁紙に反射している。

月が部屋を照らしてくれたせいとか、セツナの索敵スキルによる暗視モードが解除される。少し暗くはなったが、相対するその顔がはつきりと見える。ややくすんだ金髪にパープルの瞳。現実にはたら不自然な容姿はカスタマイズされたものだろう。だがこの男には不自然な組み合わせがよく似合っている。元の素体が良いのだろう。明らかに純粹な日本人の顔ではない。別の人種の遺伝を感じさせる。

ポールはレブロの方へ視線を移し、悲しそうな顔をする。

「レブロ……、お前はひどい女だな。ギルドの下っ端だったお前を指揮官にまで育ててやったのは誰だと思ってる？ 幹部共に抱かれるしかなかったお前を救ってやったのは誰だ？」

レブロの荒くなっていく吐息が聞こえた。何か言おうとしたようだが、クラインの声が割って入る。

「てめえ……。本当にP O H^{プー}なのか……？」

クラインも刀を喉元に向ける。2刀を突き付けられてもポールは余裕を崩さない。絶対的不利な状況にあるのに、彼はこの状況を楽しんでいるかのようだ。

ポールは答える。

「ああ、俺はP O H^{プー}だ」

「偽名を使って、聖竜連合の連中にPK技を教えたってか。このくそつたれの人殺し野郎が」

「俺はやり方を教えただけで、殺したのは連中の意思だ」

「何言ってるやがる……。てめえが余計なことしたせいで、どれだけ死んだのか分かってんのか！」

「分かっているさ」

あつけらかんとP.O.Hは言ってみせる。その一言には色々な意味が含まれている。

自分は人殺しの技術をギルドメンバー達に教えた。
自分は多くの人間を殺戮へと駆り立てたと。

「俺は自分の言葉がギルドメン達を人殺しにさせると分かっていた。ついでこの前まで正義の味方ぶってた奴が、率先してK.O.Bを殺すと粋がってるのを見るのは面白かったな」

クラインは歯を食いしばっている。現実ならば唇に血が滲んでい
るだろう。

「ラフコフを潰された復讐のつもりか。人でなしの癖して、仲間の仇
を取ろうってのか」

「あんな連中なんざどうでもいいね。むしろリーダーなんて飽きてい
たのさ。やっぱり高見の見物を決め込むのが1番だからな。サル同
士で殺し合うのは最高のショーだ。あのときビールでも持っていれ
ばよかった」

セツナは思い出す。《笑う棺桶》討伐を決めた、ギルド拠点の情報。
ヒースクリフも、アルゴでさえも情報の出処が分からなかった。又聞
きよって攻略組に広まった伝言ゲームを仕組んだのは――

「あんただな、笑う棺桶ラフィン・コラインの拠点を流したのは。あの討伐戦は、あんだ
の自作自演だったのか」

P.O.Hは頷く。

「死神があんなに早く来ることは予想外だったがな。だがおかげで奴
らの恐怖を煽ることができた。恐怖によって、戦わなければ生き残れ
ないという意識が芽生えた。あいつらは勇敢だったよ。歴戦の勇者
達に臆せず立ち向かった。それで死んでいった」

「よほどあの戦いが楽しかったみたいだな。今度は聖竜連合と血盟騎
士団の殺し合いを見たいわけか」

「最高だと思わないか？ 同じ目的を持った仲間同士で殺し合うん
だ。昨日の友は今日の敵ってな。お前のおかげで上手くいった。死
神を悪く思う連中はたくさんいたからな。あつという間に、ギルド中
が打倒K.O.Bって盛り上がった」

「てめえはクズだ」

クラインが静かに、怒りを込めて言う。

「他の連中に殺させておきながら、てめえは安全な場所で涼しい顔してふんぞり返ってやがる。あんだけ憎かった聖竜連合の連中が今になって哀れになってきたぜ。てめえのせいでいかれちまって、ただの獣と同じになっちまった」

「さつきも言っただろう。殺したのはあいつらの意思だとな。聖竜連合の連中は獣なんかじゃない。油断しきったボスを倒した後を見計らってKOBを襲ったし、どこの層がレベル上げに効率が良いかを判断し占領した。お前達を殺すのも、KOBが攻略の妨げになるからと動機があった。しっかりと戦略を立て、理由を付けて殺すことができる、知性を持った人間だ」

「さつきサルって見下してたじゃねえか。今度は人間だって庇うのかよ」

「時と場合によるってことさ。殺す前は知性を持った人間でいられるが、いざ殺すときは生存本能を剥き出しにしたサルで、獣になる。あんなも認めたらどうだ。人間も動物だ。サルから進化し、文明なんて持たなかった時代には女も裸で外をうろついていた。そんな獣の血を受け継いでいるとな。こんな仮想世界を作るほどに文明が進化しても、人間自身は動物であることから逃れられない。腹も減るし、眠くもなるし、男は女を前にすれば犯したくなる」

「哲学者気取りか。そうやって小難しいこと考えてるてめえは賢いつもりかよ。確かにてめえには人を殺させる力があるみてえだな。今、俺はてめえを殺したくて仕方ねえ」

「俺を責めているが、お前達も殺しているだろう。俺の言葉なしにな」
「てめえらが殺そうとしてきたからだ！」

クラインはとうとう苛立ちを剥き出しにした。隠密行動を徹底するよう言うておいたのに、仲間を多く殺す原因を作った男を前に我慢の限界がきているらしい。

クラインの神経を逆撫でするように、POHは笑みを崩さない。

「そう、それだ。お前達が層を制圧するとき、必ず死者が出ただろう。」

最初に層が奪われてた皆さんの仲間が死んだとき、ギルドの中でこんな意識が広まっていった。『やらなければこちらがやられる』とな。お前さん達も、そんな理屈で殺していたんじゃないのか?」

P O Hに反論したのはクラインではなくセツナだった。「層をあんた達の支配から取り戻すためだ。殺すことが目的じゃない」

「俺だって殺すこと自体が目的じゃない。誰だってそうだ。殺されそうだから殺す。仲間を守るために殺す。そいつが食い物や金目のものを持つてるから殺す」

「殺人自体は、目的のための手段だと言いたいのか。確かにそれならハードルも低くなるな。殺す必要性を強調して、ギルドメンバーを煽ったのか」

P O Hは満足そうな表情を浮かべる。

「随分とお利口さんじゃないか。そう、殺さなきゃならないと思わせることが重要だ。人間、結局は自分の命が大事だからな。この世界じゃ思いやりなんてのは命取りになるから面白いほど上手くいく。身の危険を感じさせることで、仕方なく殺させるんだ。一度殺してみれば分かる。鬼や悪魔になんてなりやしない。ちゃんと血も涙もある人間のままで。人でなし? 違うね。俺もあいつらも立派な人間だ。むしろ、屁理屈こいて俺達を害獣扱いしてるお前らの方が罪深い」

「現にあんたはアインクラッドの害獣だ。あんたにそそのかされた聖竜連合は逆らうプレイヤーを殺し、血盟騎士団は問答無用で殺している。プレイヤーの数が激減して、攻略の戦力は減っていく一方だ」

「俺が事を起こさなくても、死人は出るだろ?」

セツナは口をつぐんでしまう。確かにその通りだ。抗争なんて起きなくても、攻略に死者はつきものだ。層の解放に反比例して戦力は落ちていく。それは避けられないことで、プレイヤーの間では仕方のない事として処理されていた。

「お前は死者が出ると分かっているながらも、同胞を迷宮区に送り込むはずだ。だがそれに歯向かう奴はいない。何故なら必要だから。攻

略しないと現実に戻れないからってな。俺とお前のやり方は本質的には同じだ。たとえば酷なやり方でも、目的と必要性を説いて意欲を掻き立てる。そうすることで誰だって勇敢になれるし、残酷にもなれる」

「セツナはてめえとは違えー!」

クラインが食ってかかる。

「セツナは攻略のために、俺達を現実に戻すためにギルドのリーダーになったんだ。てめえと一緒にすんな!」

「それはどうかね? そいつは大量殺人者だ。いくら相手が人でなしのくそつたれでも、そいつは無慈悲に命を奪ってきたんだぞ。それを1人で成し遂げるのは勇敢だが、かなり残酷じゃないか」

殺すこと自体は目的じゃない。

殺意は目的の手段にすぎない。

この作戦に赴くとき、セツナは自分の意思を殺意と呼びあぐねていた。これまで抱いていた憎悪と悲しみのない殺人に殺意はあるのかと。

だが、セツナは明確に2人を殺すことを目的としてこの村にやってきた。その目的の目的は、血盟騎士団が攻略の主導権を取り戻すため。そのために自分の技術を提供するというビジネス精神によって。

ビジネス。愛国心。集団意識。それらを根底としても、殺すという意思が明確にある。ギルバートを殺すことが最終目的でなくても、たとえ手段に過ぎなくても、セツナにはしつかりと彼を殺すという意思があった。あの意思は、弁解のしようがない殺意だったのだ。

「誰もが残酷になれる素質を持っている。集団ではなく個を基準とした生存競争なら、それはより際立つ。自分が生きるために他人を蹴落とすことに躊躇しなくなり、心から良心という蓋を取っ払うんだ。良心がなくなれば、残るのは暴力性だけだ。人間には、生まれつき暴力が捨てられない本能として備わってるのさ」

セツナはつぐんでいた口を開く。

ゾディアークと対峙したときの会話を思い出す。彼が抑えることのできなかつた暴力の性。それを正当化してしまった物語のタイト

ルを。

「……………虐殺器官」

出た言葉にクラインは困惑している。彼とは対照的にP O Hは喜んでいよう、更に口角を上げる。

「医学的根拠は何もなかったが、あの本は役に立ったな」

「笑う棺桶は、あんたの洗脳を実験するためのものだったのか」

「実験なんざするまでもない。俺の現実での仕事で必要なスキルだったんでね。それに、俺のしたことは洗脳じゃない。俺は良心を取り除いただけで、意思選択は尊重してやったつもりだ」

「現実での仕事だ？」

クラインの声に揺らぎが生じる。さっきまでの怒りは維持されているが、同時に怖れているように声を震わせる。

「まさか……………、てめえは現実でも殺させてたつてののか……………？」

「仕事だ、仕方ないさ」

それだけ言うと、P O Hは窓から見える月へと視線を移す。向けられた2本の剣など見えないように。とてもリラックスしている。

「そうだな。洗脳となるとデリケートだ。かなり慎重にやらなきゃならないし小道具も必要だ。例えば、音楽とか」

「音楽だと」

P O Hは靴で床をタップし始めた。たん、たん、とまるでメトロノームのように。

「クラシックを聴くと、音が脳波に影響してリラックス効果を生み出す。規則正しいリズムとランダムなリズム。その中間にある微妙なラインを保たなきゃならない」

靴のタップは時折規則性を欠いたりリズムを刻んでいる。人間がやると、どうしてもずれが生じる。

音楽によるリラックス。

ヒーリング・ミュージック。

「モーツアルトの曲は人を癒してくれるんだって。眠くなるのがよく知られているけど、ストレス解消の効果があるの。海外じゃ、病気の治療にモーツアルトの曲を流すらしいよ」

そう自慢げに話していたナミエも、モーツアルトの曲を弾いてくれた。セツナの脳裏にメロデイが浮かぶ。バイオリン協奏曲第4番だ。よく眠くなって、目をつぶると金切り声みたいな音を出して起こされた。

P O H^{プー}の声がメロデイの合間から聞こえてくる。

「眠気を誘発し、リラックスできた状態にまで持ち込む。そうすることで正常な判断を鈍らせる。だがまだ完全じゃない。止めのひとさしが必要だ」

セツナは本当に音楽を聴いているような錯覚に囚われた。そこに違和感を覚える。

このメロデイはセツナの脳内で再生されているものじゃない。セツナは本当に曲を聴いている。

耳から、正確に言えばシステムの聴覚再生エンジンから。

「クライン、耳を塞げ」

頭を上下させていたクラインが「うおっ」と上ずった声をあげる。どうやら眠気に誘われていたらしい。

P O H^{プー}はバイオリン協奏曲第4番を奏でていた。会話しているように見せかけて、声に曲のリズムと抑揚を乗せて聞かせていたのだ。どす、とくぐもつた音が聞こえた。

セツナは音がした横へと向く。自分の腹から突き出した刃を見つめるクライン。クラインの背後に佇む、虚ろな目をしたレブロを。

セツナは反射的に、レブロの顔面に拳を見舞った。受け身もとらず窓際に激突した彼女に接近し、立ち上がるうとしたその啞内に剣を刺す。

月が雲に隠れた。暗視モードに切り替わった視界の中で、剣を咥えたレブロが目を見開いている。刃を上向きに捻り、頭を真つ二つに斬り上げた。首から上が真つ二つに割れたレブロは目を見開いたまま、暗闇の中で光を断末魔のように散らして消滅する。

「クライン、大丈夫か」

クラインはP O H^{プー}に刀を向けることを忘れず、腹に刺さった短剣を引き抜いて無造作に捨てる。

月が消えても部屋の中には光が入り込んでいた。窓とは反対にある開け放たれたドア。レブロは閉めなかつたのだろうか。死んでしまった今では確認しようもないが、廊下の照明が部屋の中へと入り込んでいる。

「さっさと殺しちまうぞ。何しでかすか分かんねえ」

クラインはそうやって刀を振り上げる。

たん、たん。

不規則なメトロノームの音はまだ続いている。その不規則さにも違和感がある。いくら人によるものとしても乱れすぎている。音楽性なしのリズム音痴だ。

いや、とセツナはそれがメトロノームの真似でないことに気付く。このリズムには聞き覚えがある。20世紀を舞台にした映画ではよくそのシーンがあつた。

たん、たん、たん、たん、たん、たん。

トン・ツー。

「モールス信号——」

クラインが刀を振り下ろそうとした瞬間、ドアから武装した親衛隊がなだれ込んできた。あのメトロノームはP.O.HのS.O.Sを告げる前時代の通信だったのだ。

突然の出来事に刀を引つ込めたクラインは、大きく立ち回れない部屋の中で応戦する羽目になった。懸命に防御に徹しているが、数人がかりを相手に鎧にはエフェクトが次々と貼り付いていく。

親衛隊員の1人がP.O.Hの腕を掴んだ。セツナは地面を蹴り、素早く肉迫するとその腕に剣を一閃して切断する。同時にポーチから非常用の回廊結晶を取り出す。

「コリドー・オープン」

部屋の中に光の渦が発生する。渦の形成が完了するや否や、セツナはP.O.Hの首に腕を回して組み付く。それに気付いた親衛隊員達が迫ってくるが、攻撃されるのも構わず両手を広げたクラインに阻止される。

「セツナ、行け！」

「クライン、あんたも——」

「いいから行けってんだ。ぜってえにP_{プー}OHを逃がすんじゃないやねえぞ！」

光の回廊が狭まっていく。猶予はなかった。セツナがP_{プー}OHと共に光の中へ飛び込むと、ソードスキルの斬撃音が聞こえた。それがクラインのものなのか、親衛隊のものなのかは分からなかった。

ダイブするような体制で飛び込んだため、転移先で2人揃って床を転がる。

P_{プー}OHは武器をオブジェクト化させた。中華包丁のような短剣。その武器が、あのアインクラッド最悪の殺人鬼であるという確証を持たせる。

セツナも兜と鎧を装備から外す。簡素なシャツ姿になったが、鎧なんて動きづらいで着ないほうがいい。

「結晶無効化エリアか。考えたな」

宝箱がひとつ置かれただけの殺風景な部屋を見渡し、P_{プー}OHは呟く。出口に設定したのは第27層の迷宮区。それもトラップ空間だ。

P_{プー}OHはモンスター発生装置の宝箱へと走るが、セツナはそれよりも速く、彼の前に立ち塞がる。ホルダーから鞘を引き抜き、疑似二刀流で構えを取る。

P_{プー}OHは高々と宣言した。

「イツツ・ショウ・ターイム！」

セツナが突き出した剣尖を中華包丁が食い止める。続けざまに鞘を振り下ろすが、先端の刃が脳天に届く寸前でP_{プー}OHの脚がセツナの腹に届く。受け身を取って転倒を防ぎ、再び地面を蹴って肉迫する。

武器の多さではセツナに分があるというのに、P_{プー}OHはハンデをものともしない。突き出された鞘の、刃のない中腹を脇で挟み込んできた。一瞬だけ動きが封じられる。その一瞬を狙うP_{プー}OHが包丁を振り下ろした。剣で防ぎ、さつきやられた仕返しにその腹へ蹴りを見舞おうとする。P_{プー}OHは見計らったかのように鞘を放し、バックステツプを取った。セツナの右脚が宙に虚しく突き出される。

「ゾディアークが期待していたから、お前なら俺に喜びをくれると

思っていた。だが見当違いだったな。やっぱり、あいつの代わりはいないってことか」

P O Hは落胆したように肩を落とす。芝居がかかったものじゃない。陽気な扇動者と呼ばれた男とは思えないほど自然な落胆だ。

「ゾディアークはただの戦闘狂だった。あんたとは暴力の趣向が違う」

「あいつと会ったのか。殺したのか？」

「ああ」

「残念だ」とP O Hはため息をついた。

「あいつとは本の趣味が合ったのに。ゾディアークは正直な奴だったよ。自分の心に蓋をすることなく正気のまま殺せる奴だった。悪魔の子とは、あんな奴のことを言うのかね」

「あんただって負けぢやない。自分の手を汚さずに殺した分ゾディアークより質が悪い」

「何だ知らないのか。良いこと教えてやるよ。アジトが襲われた後、俺はしばらくゾディアークと一緒にいた。俺といる間、あいつは1人も殺さなかったよ。ただひたすらレベル上げてた。それが詰まらなくて別れたんだがな」

「何が言いたい」

「あいつはお前を想い続けていたってことさ。お前と戦う日を楽しみにしていた。羨ましいな。想い人に殺されるってのは」

あの男の名前が出てきたことに、セツナは懐かしい憎悪を感じ始める。救いのないことに、セツナはまだゾディアークを憎み続けている。

「あんたもそんな最期を望むっていうのか。驚きだな。あんたに誰かを想う情緒があるのか」

「あるさ。俺は俺に喜びと希望を与えてくれたあいつを愛している。あいつをこの手で殺せれば、俺は自分を殺したっていい」

かなり意外なことだった。セツナは思わず警戒を緩めて、アイコンクラッド最悪の殺人鬼の嬉々とした表情を眺める。

人と人とも思わず、悪魔と恐れられた男が愛などと言っている。だ

がセツナはそれを理解できてしまう。セツナが殺してきた犯罪者達にも願いが、苦悩が、エゴがあった。多くの人間を殺してきたセツナを突き動かしていたのもエゴだ。

「それなのに」とP.O.H^{プー}の声から気迫がなくなった。陽気さが完全に消え、絶望と悲しみの影を感じさせる。

「あいつは死んだ。ヒースクリフに殺された。こんな悲しいことはない。運命の出会いだったってのに。俺はあいつを殺すために生まれてきたって思えたのに」

セツナの脳裏にとある剣士の姿がよぎる。セツナと同じく暗闇にいながら、セツナと違って闇を斬り拓こうとした黒の剣士が。

「あなたが愛したのはキリトだったのか」

P.O.H^{プー}の目には涙が浮かんでいる。

「ヒースクリフが憎いなら攻略を進めるべきじゃないのか。100層に行けば奴を殺せるだろう」

「復讐なんて馬鹿げてる。奴を殺しても俺は満たされない。殺したってあいつは戻ってこない」

至極真つ当だった。殺人鬼の言葉とは思えないほどに。諭されている気分だし、気持ち痛いほど分かってしまう。

セツナも同じだ。ゾディアークを殺しても、それはセツナにとって終わりにはならなかった。ナミエが死んだ事実も殺してきた事実も変わらないままで、セツナは罪を抱えたままさまよっている。

ゾディアークの死で得たものといえば、喉の渇きが消えたこと。結局セツナの罪は誰も赦してくれないという確証だった。

「俺が愛したのは強さじゃない。あいつの気高さだ。お前なら、あいつの代わりになってくれるんじゃないかと思っていた」

「そうか、それは残念だったな」

セツナは剣を一閃する。P.O.H^{プー}は泣きながら攻撃を防ぐ。

「虚しくなったから殺し合わせて滅ぼすつもりか。そんなことが無駄なのは分かっているだろう」

「分かっているさ。もう何もかもどうでもいい。だからこんな世界は滅ぼすんだよ」

P O Hの包丁がハーディスクラウンを弾いた。生じた隙を逃さず、包丁の刃が眼前へと迫ってくる。咄嗟に鞘で防ごうとするが、寸前で包丁の軌道がわずかに逸れて左手首をすばっと切断する。

鞘を握ったまま床に落ちた左手が消滅する。半歩下がったセツナはHPバーの部位欠損アイコンが点滅していることなど意に介さず跳躍した。宙でライトエフェクトを纏った刀身を首めがけて一閃するが、P O Hの包丁に阻まれる。地面に着地する寸前、セツナは顔面に拳を見舞われた。身動きが取れない宙で避けることもできず、浮いたまま壁際へと飛ばされる。

防具が貧相なせいで、たった1撃にも関わらずHPが4割減少していた。P O Hは包丁を片手にゆっくりと歩いてくる。

「団長！」

入口の方向から声が聞こえた。見ると、それほど広くない部屋の中に赤と白の団服を着た騎士達が次々と入ってくる。団員達は迷うことなくP O Hを包囲し剣を向ける。さすがに切り抜けるのは不可能と諦めたのか、P O Hは包丁を捨て両手をあげた。

「P O H!？」

彼の得物で分かったのか、団員の1人が驚愕の声をあげる。ロープで両手を縛られている間、P O Hは抵抗しなかった。目に殺意を宿していない彼は、訪れた年貢の納め時を受け入れているように見える。

「団長、奴は……………」

偵察隊長がP O Hから視線を逸らさずに聞いてくる。セツナは再生した左手で鞘を拾いあげる。

「ポールはP O Hだった」

セツナがそう言うのと団員達はざわつきだした。

「団長、止めをお願いします」

この期に及んでまだ殺したくないか。

内心呆れながら、セツナはP O Hを見やる。

この男を殺せば、アインクラッドに平穏がもたらされる。死者は出るだろうが、それでもプレイヤー達は安心してフィールドへ繰り出し攻略に臨むことができる。

セツナはP.O.Hに尋ねる。

「あんたは言ったな。殺したのは彼等の意思だと」

「ああ」

「なら、あんたに彼等の殺意を止めることはできないと」

「そうだな。連中は自分で殺すと選択した。俺の言葉は魔法なんかじゃない。殺しをやめるとしても、それも連中の意思だな。まだ良心の残っていればの話だが」

「そうか」

短い会話の後、セツナは剣を納める。「どうしたんですか」、「こいつは殺さない」と団員達が矢継ぎ早に言ってくる。

彼等も殺意を持っている。

殺さなければならぬと。

殺さなければ自分が死ぬと。

P.O.Hと同じように、セツナも彼等の殺意を引き出した。

「ここでは、殺さない」

「団長！」

勇ましく偵察隊長が早口に言う。

「奴は最悪の殺人鬼です。監獄に入れるのも生温い。生かしておくのは危険です」

「ここではと言った。今葬つても聖竜連合の求心力を排除したことはならない。この男の死は、プレイヤー達が見届ける必要がある」

「まさか、街で処刑でもするんですか？」

「そうだ。皆に知らせる必要がある。殺人鬼が死に、心おきなく攻略を進めることができる」と

セツナは無感情にP.O.Hを見据える。P.O.Hもまた無感情で、確定した死に何を思うのかは読み取れない。

「明日、ツールバーナでP.O.Hの公開処刑を執行する」

◆

？
迷宮区の出口へと向かう間、P.O.Hには絶対的な安全が保証されていた。

彼は死ぬべき男なのだが、そのときは今ではない。だから、迷宮区に駆けつけてきた20人編成の部隊はモンスターからP.O.Hプーに指一本触れさせまいと守った。それに不満を持つ者はいる。友人を《笑う棺桶ラフィン・コフィン》に殺された団員は珍しくなかった。

当のP.O.Hプーはというと口にさるぐつわを噛ませられて、発言と手の自由を奪われた状態で歩かされている。

《笑う棺桶ラフィン・コフィン》が壊滅した後、オレンジプレイヤー達の活動は潮が引くように減少した。P.O.Hプーの言葉が本当なら、彼等は操られていたわけではなく、自らの意思によつて犯罪行為を止めたことになる。まだ良心というべきものが残っていて、それが善良な道へと歩かせた。

人間は選択できる。善意に行くか、悪意に行くか。P.O.Hプーという求心力を失ったことで、人々の意識には良心という蓋が殺意を覆つてくれるのかもしれない。

でも、とセツナは不安を拭うことができずにいる。

ゾディアークの死はセツナに終わりをもたらしてはくれなかった。だとしたらP.O.Hプーの死も、抗争に終止符を打つてはくれないのだろうか。

人は死んでもその人の言葉は残る。本は時代を越えて人々に物語を伝える。

もしP.O.Hプーの言葉を受け継いだ者がいて、それが2人目のP.O.Hプーになつてしまつたら、再びインクラッドは混沌に突き落とされてしまふだろう。人々がどんなに善意へ向かう努力をしても、蓋が取られ、覆いをなくした悪の花が花粉を撒き散らして。

それでも、人々は善意へと向かい続けてくれる。願望に近いが、セツナはそう思う。たまに利己的に生きて他者を蹴落すことがあつても、世代を重ねて集団を、国や社会を築けば、他者と協力し、他者のために生きることと安定性と合理性を見出せるはずだ。人類が最初は個の生存に必死だった生き物でも、文明を持つことで集団に適応していった。長い目で見れば、人間という動物は紛れもなく善意へと向かつている。

リーダーを失った聖竜連合が、新しいリーダーを擁してこれからも

独立したギルドとしてやっていくのは不可能に近い。聖竜連合を打倒するために、アインクラッドのプレイヤーは殆どが血盟騎士団に入っている。聖竜連合も吸収されることだろう。プレイヤー達の意思は統一されつつあるのだから。

迷宮区から出る頃には夜明け近くだった。天井と地面の間にしか見えない空は白みはじめている。

セツナはウインドウを呼び出し、メッセージを打ち込む。

『ギルバートを暗殺。P^プOHは捕縛した。カルマ回復クエストの後、帰還する』

返信はすぐに届いた。文面を読んで喉のあたりにつつかえを感じた。だがそれ以上に眠気という生理的欲求がセツナを圧倒していて、付随するはずの感情が曖昧になっていた。

『お疲れ様です、団長。先程、クライン隊長の死亡が生命の碑で確認されました』

第28話 罪人には裁きを

「お疲れ様です、 団長」

門の前で佇む団員に「ああ」と気のない返事をして、セツナは第一層の迷宮区目前に位置するツールバーナの街に足を踏み入れる。

上層の主街区よりも規模が大きい街は賑わいを見せている。小さな噴水のある広場では商人達が露店を広げ客引きに忙しい。とりわけ繁盛しているのは新聞屋で、号外が積まれたテーブルにプレイヤー達はこぞって集まっている。

「セツナ団長！」

誰かがそう言うと、広場にいるプレイヤー全員の視線が、嫌でも目立つ真紅のコートを着たセツナに集中した。中には目もくれずに歩き続ける者もいるが、恐らくNPCだろう。目を輝かせた、年の近そうな少年剣士が近付いてくる。

「ようやくP.O.H^{プー}を捕まえたんですね。ありがとうございます。これで安心して攻略を再開できますよ」

少年が手にする新聞には、大きく「P.O.H^{プー}捕縛。聖竜連合を扇動し大量殺戮の罪で処刑」という見出しが書かれている。セツナがカルマ回復クエストをしている間にニュースは広まっていたらしい。情報屋に知らせるよう指示したのは他でもないセツナだが。

「処刑は何時にするんですか？」

「午後の1時だ」

「絶対に見に行きます！」

少年は尻尾を振る子犬のように騒いでいる。自分が何を言っているのか分かるのかと聞きたい。公開処刑なんて趣味の悪い見せ物を主催しておいて無責任な質問であることは自覚している。

これからあんたが見るのは殺人なんだぞ。目の前で人が死ぬことに耐えられるのか。それとも、あんたも現実で死ぬなんて信じない輩なのか。

「ありがとう」

「ありがとう」

「ありがとう」

「ありがとう」

セツナを取り囲む群衆が口々にそう言ってくる。一点の曇りもない賛辞と熱狂。セツナは人垣をかき分けながら進み、広場から抜け出すと狭い路地へと入る。

腹の底で何かが暴れているような感覚を覚える。それが胃もたれという、この世界では起こるはずのないものだど気付くのに少しばかり時間を要した。

誰にありがとうと言っている。

俺は死神で、多くの人間を殺して、ギルドの分裂を起こして、抗争にアインクラッド全土を巻き込んだ悲劇の元凶だ。

それなのに、彼等のセツナに対する感情は目に見えて変わっていった。団長になった当初は懐疑の目を向けていたのに、聖竜連合との抗争が激化してからはグランザムに行くこと凱旋パレードのように歓声を向けてきた。

ポリゴンの体なのに吐き気を覚え、口を手で覆う。何も食べていないし、それ以前に胃自体が存在しない。口から出るのは吐息と糸を引く唾液を模したオブジェクトとエフェクトだった。

気分が少し落ち着くと、装備を普段着の黒コートに切り替える。フードで顔を覆い隠し、再び街へと繰り出す。

広場から南に伸びる路地ではプレイヤー達が長蛇の列を成している。列を追っていくと、横幅のある血盟騎士団の経理係がチケットを売っている。傍に「公開処刑見物チケット販売」と書かれた旗を立てて。

「お兄さん、エールビールいかが？」

両手に瓶を持った女性プレイヤーが話しかけてくる。顔を見られないよう俯き加減を維持する。

「代金は」

「今日は特別にタダよ。こんな日は飲むに限るわ」

「そうか。じゃあ一本」

につこりと笑う女性から瓶を受け取り一気に煽る。喉を鳴らし、口

の端から零れるのも構わず飲み干し、口元についた泡を手で拭う。

「良い飲みっぷり！」

そう言っただけで売り子の女性は次の客のもとへと歩いていく。

処刑が娯楽として見せ物にされていた時代があったことは知っている。そんな時代でも、親は子に「命は大事にしましょう」だなんて言い聞かせていたのだろうか。

命は大事にしましょう。

アインクラッドでもその倫理は守られていたはずだ。人の数は減るばかりで、いくら男女が体を重ねてもポリゴンの肉体で子供を産むことはできないのだから。たとえ犯罪者でも生かして監獄に送るというのがセオリーだった。なのに、ツールバーナにいる連中はどうだ。

命は大事にしましょう。ただし、犯罪者の命はゴミと一緒に捨てましょう。

セツナは、公開処刑を行うにあたってプレイヤー達から反感を持たれる覚悟でいた。なのに、彼等の反応は正反対だ。処刑される男の死を望み、喜び、殺すセツナに賛辞を送っている。

これがP.O.Hの処刑ではなかったら、彼等は反対したのだろうか。最悪の殺人鬼というブランドが、この熱狂を生み出しているのだろうか。

街を南へと進むと、地面を掘って作られたすり鉢状の劇場へ辿り着く。古代ギリシャの様式で作られた劇場はそれほど大きくはないが、100人は入れるほどのキャパシティがある。この劇場では毎週金曜日にNPCによる演劇が催され、プレイヤーでも予約すれば使用は可能だ。

階段状に整備された観客席を下り、演者用の控え室の前に行くと、扉の前にいる団員が「立ち入り禁止だ」と行く手を阻んでくる。そこで自分の顔が彼には見えていないことを思い出し、セツナはフードを脱ぐ。団員の表情が無然から唾然へと変わる。

「団長、これは失礼しました！」

慌てて敬礼する彼を「いや、いい」となだめる。

「団服だと街を歩き辛くてな」

「団長はいまや英雄ですからね。皆、団長に感謝していますよ」

「俺が死神でもか」

「我々を守るため、だったじゃないですか。団長が我々のために尽くしてくれたことは理解していますよ」

この団員はセツナの団長就任当初、よく命令に異議を唱えていた。死神に攻略なんて任せられないと。団長に死神は相応しくないと。

彼もまた、広場の少年剣士と同じ眼差しをセツナに向けてくる。もううんざりだと思いながら、セツナはドアへと視線を移す。

「P.O.Hはこの部屋か」

「ええ、中にも2人を見張りとして入れています」

「P.O.Hのさるぐつわを外してはいないな」

「ずっと付けさせたままですが、本当なんですか？ 奴の言葉を聴くと人殺しになるって」

「奴はそうやって他人に殺させてきた。自分の手を汚すことなく」

「どんな魔法ですか、それ」

団員は笑いながらそう言った。セツナはドアを開ける。それほど広くない楽屋の中心でP.O.Hはあぐらをかいていて、両隣には槍を携えた団員2人が立っている。

「お疲れ様です、団長」

「ご苦労。少し外してくれ。その男と話したいことがある」

「よろしいのですか？ 万が一拘束を解かれたら……」

「万が一のために、ドアの前で待機してくれ」

団員達は互いに目を合わせた後、「かしこまりました」と部屋を出ていった。ドアが閉まれば、システムの保護によって外に話し声が漏れることはない。

セツナはP.O.Hの背後へと回り、さるぐつわに使われた手拭いの結び目を解く。

「いいのか？ 俺が喋るとお前は人殺しになるかもしれないぞ」

「元々人殺しだ。あんたに人の殺意を解き放つ力があるとしても、もう解き放たれている俺に効果はないんじゃないのか」

P O Hは小さく笑う。

「そうだな。お前は俺を殺す気満々だものな」

視界に映る時刻は9時を回った。あと4時間で死ぬとは思えないほど、P O Hの表情は穏やかだ。

「あんたは言っていたな。俺達のやり方は本質的には同じだと。あんたには、血盟騎士団の団員が聖竜連合のメンバーと同じに見えるのか」

「ああ、見えるな」

「殺意を引き立たせるのに個を基準とした生存競争を下地に行っているなら、あんたの言っていた事とは矛盾している。俺達は血盟騎士団という集団を存続させるために戦っていたはずだ」

「いや、矛盾はしていないさ」

「どういうことだ」

「他人に対する暴力性や殺意ってのは、要は利己的な思考だ。最初こそ自分1人が得するために他人を蹴落そうとするが、自分と同じ思考の集団に入れば、仲間を蹴落とす理由はなくなる。目的が同じなら結託したほうが得だし、収穫の持ち分が少なくとも1人である分より生存可能性も高まる」

「利他的になるのも結局は自分のためということか。たとえば自分のためでも、最終的に人間は集団意識が強くなるのか」

「その通り。多少の自由はなくなるが、命には換えられない。選択肢の中に殺しを入れるよう思考を誘導させることはできるが、その後はそいつ次第だ。解き放った殺意はひとり歩きして、自分のために殺すか集団のために殺すかはそいつが選択する」

「だが解き放たれた大半の殺意は、集団への帰属として機能していたと」

「その通りだ」

「聖竜連合も笑う棺桶も、結局はギルドの目的のために殺していた仲間想いな連中だとも言うつもりか」

「聖竜連合はそうだな。だがラフコフは違った。あれは元々自分のことしか考えないゴミ野郎共ばかりを集めた。だからこそあいつらを

人殺しにできたんだが、ゴミがいくら悪事を働いても結局はゴミだ。どうせなら誇り高い騎士達をゴミに突き落とすほうが面白い」

討伐戦の思い出に浸っているのか、P.O.Hは乾いた笑い声をあげている。

「あなたの趣味を聞くつもりはない。あなたはプレイヤーを扇動していくのに、ひとりひとりに言葉を聴かせていたのか」

「いや、風潮つてのは伝播するもんだ。ほんの数人に聴かせれば、後はネズミ算式に広がっていく。まるで波のようにな」

「制御することはできないのか」

「できないね。洗脳や催眠術とは違う。ああいうのは意識や思考を無理矢理捻じ曲げる。俺は思考に殺しというワードを追加させただけだ。殺しも十分得なやり方だな。まあ、洗脳してやったのも何人かいるが。例えばギルバートとか」

「ギルバートを通じてあなたの言葉をギルド中に伝播させたわけだな」

「あいつはちよろい奴だった。お前に負けたことを根に持ってたからな」

他の団員達の前で敗れたギルバートの醜態。その羞恥がセツナに対する憎悪となり、殺意へと昇華してしまった。だとすると、あのときから既に混沌の兆候があったのだ。

「集団のために、排斥するために殺すのだとしたら、もう排斥の対象がなくなった集団はどうなる」

セツナの質問にP.O.Hは逡巡を見せる。今まで饒舌に答えてきたというのに。やや間を置いてP.O.Hは答える。

「晴れて本来の目的に向かって動き出すだろうな。お前が言っていたように、殺しは手段に過ぎない。ナチスがユダヤ人を絶滅させることができたなら、より一層国の結束は強くなっただろうよ」

「意思が統一されれば、もう殺意の波は引くのか」

「そいつはどうかね。全員で目標に向かって馬鹿歩きするに違いないが、この世界は少しばかり特殊だ。殺す対象が人からモンスターに変わるだけで、殺意が鳴りを潜めることにはならない」

P O Hの言葉でセツナは気付く。

この殺人鬼は、扇動は現実での仕事で必要なスキルだったと言っていた。なら彼は、現実でも他者を殺戮へと駆り立てていたことになる。だとしても、現実でも数千数百という規模の扇動を容易に成し遂げていたのだろうか。法が整備された日本で暴力や殺人なんてかなりのリスクが付きまとう。決して洗脳ではなく思考が正常に機能した状態であれば、リスクを考慮して犯罪は踏み留まるはずだ。

しかしこの仮想世界は、現実とは倫理観が異なっている。社会が築かれているにしても、犯罪者はカルマを回復するだけで免罪され、司法による裁きはない。現実では持ち歩いているだけで逮捕される剣や槍を持ち、日常的にモンスターを殺しているプレイヤーには、既に何かを殺すことに躊躇がなくなっている。

「アインクラッドの環境が、殺意を解き放つのに適しているんだな」

P O Hはセツナと視線を交わす。さっきまでの笑みは消えていた。

「お前……………」

P O Hは最後まで言わなかった。驚くことに、この男はセツナに怖れのような感情を抱いているらしい。

「あなたの力を有効活用してやる」

セツナがそう言うときとP O Hはさっきと同じ笑みを浮かべる。

「面白い奴だよ、お前は。殺すほどの魅力はないがな」

「光栄だ」

セツナは皮肉を飛ばす。

「お前と一緒にいれば、俺の心は埋まるのかもしれないな」

随分と長く話し込んでいるうちにすっかり忘れていた。この男はあと4時間後に死ぬのだ。P O Hはそんな死への恐怖も焦りも見せないし、隠しているようにも見えない。我ながら悪趣味だと思いつつ、セツナは言葉の針を突き刺す。

「それは残念だな。あなたの命は残り数時間だ。これから先のことを知ることはない」

「確かに。でもいいさ。もう何もかも」

P O Hから出た諦めの言葉は、偽りのない感情だと分かった。絶好

のチャンスだというのに、P.O.Hは音楽を使った洗脳を仕掛けてこないし、純粋にセツナとの会話を最期のひと時として過ごしているように思えた。

考えてみれば、この男が捕まってしまうことがおかしい。1年と約半年前からアインクラッド中がこの男を捕まえようと探し回り、ギルド討伐まで追い込んだにも関わらず捕縛することはできなかった。あの晩も、圏外村のギルドハウスなんてPKリスクの高い場所を拠点としていたのもP.O.Hらしくない。彼を今まで捕まえることができなかったのは、この男が常に安全圏にいたことが大きい。

「そんなにキリトを愛していたのか。何もかもどうでもよくなるほど」

「ああ。愛なんて利用しやすいもんだと嘲笑ってた俺が、愛に突き動かされるなんて皮肉なもんだな。俺の心は空っぽだよ。あいつが死んだ後も、あいつの代わりになるものを探し続けた。お前が血盟騎士団の団長になったと知ったとき、お前なら愛せるかもしれないと思ってた」

気色の悪さに悪寒が走るが、セツナにP.O.Hを糾弾する言葉は見つからない。セツナ自身もその嫌悪の対象になるのだから。P.O.Hがキリトの代替としてセツナを求めたように、セツナもナミエの代替としてアスナに赦しを求めた。

「俺はキリトにはなれない」

「こうして話せば確信できるさ。お前はあいつとは違う。あいつは光を求めようとしていたが、お前はどうか。ただ真っ直ぐ暗闇の中、地獄へと迷うことなく進んでるじゃねえか。お前を殺せたって俺は満たされない」

「今でも、キリトを愛しているのか」

「ああ」

P.O.Hは迷うことなく答えた。多分、P.O.Hのキリトに対する愛情は一般的なそれとは違う。この男にとって愛とは、恋愛感情とか家族愛とかを越えた執着なのだろう。常軌を逸した執着心だ。でも、会話を重ねるうちにセツナはこの男が単なる狂人には思えなくなってい

た。

この男は正気のまま、自分の行動が何をもたらすかを自覚した上で選択してきたのだ。殺すことも、愛することも。

「こんなことを言うのは癪だが、あんたが羨ましいよ。大切な人を愛しているとと言えるのは」

「お前も大切な人がいるのか？」

「いた。でも死んだ」

「そいつを今でも愛しているのか？」

「愛している、と思いたい」

「何だ、煮え切らない言い方だな」

セツナはいつの間にか、自分の口調が穏やかになっていくことに気付く。

「確信が持てない。俺は彼女のことを愛していたのか。彼女は俺を愛してくれていたのか」

「まるで『美女と野獣』だな。真実の愛を得られなければ、お前はずっと呪われたままってことか」

そういえば、とセツナは思い出す。ナミエはデイズニーの美しく脚色された「美女と野獣」が好きだった。彼女はこう言っていた。

「最初からお互い好き好きってなるより、2人が愛し合っていく過程が良いと思うの。そっちのほうがわくわくするじゃない」

野獣は真実の愛を見つけなければ人間に戻れない呪いをかけられた。野獣とベルが互いに愛し合うことが、2人の愛を真実と証明する。

なら、証明されるまで2人が互いを思う描写は愛と呼べないのか、とセツナは思う。ベルの解放を許したときの野獣は、既にベルを愛していたと言えるのではないかと。解放されたベルが野獣のもとへ戻った時点で、既に彼女も野獣を愛していたのではないかと。

「もう今となっては、真実の愛と証明できなくなってしまうが」

「辛いことだな」

「あんたの愛は、真実と言えるのか」

「人を愛することに真実だとか偽物だとか、いちいち証明書を発行し

なきやならないのかね」

P O Hの言葉は的を射ている。何も結婚したから真実と言えるわけではないし、離婚したから偽物と言えるわけでもない。互いに財産目的で結婚するのもかもしれないし、離れたほうが上手く付き合えるから離婚するのもかもしれない。

「要は自分次第だな。そいつを愛していたか愛していなかったかは」

「あんたに愛について説教されるなんてな」

P O Hは笑った。

「俺だつて思つてもみなかつた。愛なんてあいつと出会うまで知らなかつた。俺達は似た者同士だ。愛する者を失つて、空っぽのまま生きる。ただし俺はこれから死ぬ」

「怖くないのか」

「死ぬのが怖いのは、この世でやり残したことがあるからだ。俺にはもう未練はない。むしろほつとしてくるくらいだ。あいつがいない生き地獄から解放される」

「おつと」とP O Hは思い出したように、にやりと笑った。

「お前からすれば、この言い方が一番いいか」

セツナにはその言葉の意図が分かる。両手を縛られたP O Hに代わつて、彼の額を指差してやる。その言葉は、2人揃つてほぼ同時に口から出てきた。

「地獄はここにある」

この間までタイトルすら思い出せなかつたというのに、その台詞が深く頭のなか、脳のなかに刻まれている。始めから地獄に落ちるよう作られた構造。地獄とは神秘的な神の産物ではなく、人間が創り出す物質的な産物なのだ。セツナは今、自らが創り出した地獄に自分から落ちている。罰の業火も番犬による八つ裂きもなく、放置されたまま無為に赦しを求めて彷徨っている。

「最期にお前と話せて良かった。楽しい時間だったよ」

「そうか」

それだけ返すと、セツナは再びP O Hの背後へ移動し布を首に回す。

「ヴァサゴ・カザルス」

布を口に挟もうとしたとき、P.O.Hプーはそう言った。そしてもう一言付け加える。

「俺の現実での名前だ」

ゲーマーというのは、現実での自分を殆ど話さないという。それは彼等がゲーム上では別の人生を過ごすという意識からくるもので、中には現実での自分を嫌悪している者すらいるようだ。

現実どころかインクラッドでも謎だらけだったこの男は、最期に現実での存在を示す名前をセツナに明かしてきた。もうすぐ死ぬからという虚構からなのか、それともセツナに何かを託そうとしているのか。その意図は分からないが、質問なんて野暮なことをする気にはならなかった。意図なんてものは、本人が胸の奥にしまっておくに限る。

「早速刹那はやみせつな」

布を噛ませ後頭部で縛りながら、セツナはそう言った。口から出たのは紛れもなく本当の名前で、この世界にやって来たときに持ち込んできた現実での意識が付随するはずの名前だった。それなのに、早速刹那はやみせつなという名前が持つ響きはあまりにも今のセツナとかけ離れていて、別人を騙っているように思えた。

部屋から出ていくとき、一度だけP.O.Hプーのほうへ振り返った。その顔はとても安らかで、自分の運命に対する受け入れを既に済ませていた。

◆
トールバーナの宿屋で3時間ほど睡眠を取った後、セツナは劇場へと戻った。

地面をくり抜いて造られた劇場の斜面は階段状の観客席になっている。底にある舞台を取り囲むように、催される演劇を見下ろす。客席は既に満席で、チケットを入手できなかった者達はすり鉢の淵に立って底を除こうと首を懸命に伸ばしている。

団員の案内で裏口から楽屋へと入ったセツナは、装備を団長用の紅

コートへと切り替える。襟を整えながら、隣に立つ書記係に尋ねる。

「聖竜連合の様子は」

「大人しくしています。ケルシュにいた親衛隊が主街区に攻めてきましたが、それほどの数ではなかったので鎮圧は完了しました」

「死者は」

「こちらに死者は出ていません。聖竜連合のほうは少なくとも13人の死亡が確認されています」

「そうか」

ひと呼吸おいて、書記係は淡々と言った。

「そろそろお時間です。舞台のほうへ」

「ああ」

腰に吊ったハーデイスクラウンを少し抜き、刀身の赤みを確認すると鞆に納める。舞台へと繋がる四角に切り取られた光の先から歓声が届く。その光に向かってセツナはゆっくりと歩き出す。

外に出ると光量の著しい変化で視界がホワイトアウトを起こす。視力が回復しつつあるなかで、来たときよりも大きさを増した歓声が耳の中で渦巻いてくる。

やがて視力が完全に回復する。視界を埋めているのは、すり鉢の斜面からセツナを見下ろす観衆。そして前方数メートル先には、2人の団員に挟まれるようにP.O.H^{ブー}が座っている。

セツナがゆっくりとP.O.H^{ブー}へ近付き、それに伴い2人の団員は離れて通路口の両脇へと移動する。最前列に座る者の多くが記録結晶を構えている。おそらく記者で、今日の夕刊に世紀の瞬間として掲載するつもりだろう。記者達の間には、腕を組んで歓声も飛ばさず無然としているエギルがいる。興奮している観衆の中で彼の表情は浮いている。最前列という特等席を手に入れた彼もチケットを買ったのだから、とても望んでこの場にいるようには見えない。

セツナが剣を抜くと、歓声がぴたりと止んだ。

劇場に緊張が走り、観衆が固唾を飲んでこれからのショーを静かに待つ。セツナは後頭部にある布の結び目を斬る。切れた布は床へ落ち、ほどなくして砕け散る。観客席から微かなどよめきが届いてきた。

「最期に言い残すことはないか」

セツナがそう言うと、P○Hは垂れていた頭を持ち上げ観衆をゆつくりと見渡す。観衆のどよめきが消えて、さつきまで歓喜を浮かべていた彼等の目には恐怖の色が浮かんでいる。

やがて、P○Hは語り始めた。

「お前達は俺のことをこう思っているだろう。血も涙もない鬼、悪魔だとな。だが、俺は人間だ。お前達と同じように笑い、泣き、誰かを愛する心を持った。今日、お前達は1人の人間が死ぬ光景を目撃する。この殺戮ショーを思う存分楽しめばいいさ。だが忘れるな。鬼でも悪魔でもない俺が死んでも、何も変わらない。お前達のなかに、殺意というものがある限りな」

すり鉢状の劇場は音響効果に優れた構造で、P○Hの声はよく響いた。

「イツツ・ショウ・タイム！」

その言葉で締め括ったP○Hは再び頭を垂れる。

「さあ、ひと思いに頼む。セツナ」

セツナにしか聞こえないほど小さな声で、P○Hは促してくる。ハーディスクラウンを掲げると刀身の赤みが増し、緋色の光を放つ。システムに抗うことなく、セツナは剣を一直線に振り下ろす。

斬撃とソードスキルの音響エフェクトが、劇場に響き渡った。

片手上段技《緋炎斬》ひえんざんはP○Hの首をいとも簡単に斬り落としてみせた。床に落ちたP○Hの頭部はサッカーボールのように転がり、一瞬だけ静止した後には消滅する。残された体も、セツナの横でポリゴンの欠片となって宙へと舞っていく。

遅れて割れんばかりの歓声が雪崩のように押し寄せてくる。歓声に包まれているなか、セツナは蒸発しながらも最期の瞬間まで自己主張するように煌めくP○Hの欠片を見送った。

たった一撃。

そう、たった一撃で最悪の殺人鬼は消滅した。

システムのオーバーアリストもなく、他のプレイヤーと同じようにありふれた存在であり、ガラスに似たポリゴンを散らして。

観衆の反応は、ある意味 P O H が望んでいたものだろう。 P O H は最期まで、プレイヤー達に狂騒のスペクタクルを発信する表現者であり続けた。

彼が観衆に向けた言葉は呪詛だったのだろうか。それとも祈りだったのだろうか。

ヴァサゴ・カザルス。

彼はセツナに、その名前と共に何かを託したのだろうか。託すとしたら、やはりこれからも発信しようとした悲劇の台本だろうか。いや、彼のやり方でいえば曲の楽譜というべきか。様々な憶測が頭蓋を駆けまわっていくが、彼が死んでしまった今となっては分からない。これから起こる変遷から、 P O H の、ヴァサゴの見ようとしたものが見えるのかもしれない。

ヴァサゴはこの世界が続く限り、アインクラッドを恐怖と混沌に叩き込んだ大罪人として語り継がれていくことだろう。

大半の死者は語られることなく忘れ去られていく。寂しい花畑で消えていったゾディアーク。宵闇のなかで首から腹を裂かれたギルバート。思考を操られたまま頭を割られたレブロ。仲間に見取ってもらえなかったクライン。他にもセツナが人知れない場所で殺した者達。そして、ナミエ。

人々に存在を、言葉を残すことができたヴァサゴは、罪人の中で最も名誉ある死を遂げることができたのかもしれない。

第29話 悲劇には時の氏神を

「次の2名で最後です」

平原のなか、モンスターが現れない安全地帯で団員が手にした名簿を読み上げる。

「ザザ、ジョニー・ブラック」

名前を呼ばれた2人は苦悶と絶望の表情を浮かべながら、白亜の鎧を装備した団員数人に抱えられ草の上に座らされる。必死の抵抗を試みてはいるが、両手に縛られたロープと麻痺毒のせいで完全に身動きが封じられている。

「ねえヘッドは？ ヘッドはどうしたんだよ？ ザザ、俺達どうすりゃいいの？」

目に涙を浮かべながらジョニー・ブラックが喚いている。隣で座るザザは何も答えず、ただ憎しみに満ちた視線をセツナに送っている。

《笑う棺桶》のメンバーとしてP.O.Hと共に恐れられた2人なのだが、その露になった素顔から恐怖をもたらす者の片鱗は全くうかがえない。率直に言ってしまうとごくありふれた青年2人だ。特別顔立ちが整っているわけでも不細工でもない。

かつて被っていた仮面や頭陀袋のおかげでイメージが独り歩きしてくれたようだが、監獄から「釈放」される際に保釈金としてアイテムとコルを全て消去したため、もはや全盛を誇っていた時期の影がすっかりなくなっている。

「あの人は……」

ザザが呟くように言う。真っ赤にカスタマイズされた両眼をセツナに向けて。

「P.O.Hは、どこにいるっ？」

「死んだ」

セツナは短く告げた。ザザの目から殺意の影が消えて、隠されていた恐怖の色が露になっていく。セツナは更に続ける。

「この俺が殺した。大勢の観客の前でな」

ジョニー・ブラックが「嘘だ！」と泣き喚いた。ザザは口を半開き

にしたまま硬直している。

「早く済ませるぞ」

セツナが指示を飛ばすと、斧を持った団員2人がザザとジョニー・ブラックの横につく。セツナが右手を挙げると団員達は同時に斧を掲げる。

「嫌だ!!」

ジョニー・ブラックが涙と鼻水と涎まみれの顔を振る。それを無視してセツナは挙げた右手を降ろす。

オレンジの光を纏った2本の斧が2人の青年の首をはねた。片や悲しみの表情を、もう片や無の表情を固めた頭部が草の上を転がり、体と共に砕け散った。

名簿を持った団員が淡々と述べた。

「これにて、監獄エリアに収監された全囚人の処刑を完了。お疲れ様でした」

◆

?

アインクラッド全土を巻き込んだ血盟騎士団と聖竜連合の抗争が終わって1ヶ月が経った。

約2ヶ月半にも及んだ抗争はスケールを増して戦争となり、やがて「アインクラッド大戦」と呼ばれるようになった。「聖血戦争」という名称も検討されたが、戦後のアインクラッドにおける影響を考慮し、大戦という大仰なものが定着している。

リーダーを失い、更に協力者として殺人鬼と関係を持っていた聖竜連合は解体され、血盟騎士団に吸収された。一部の者は反旗を翻しグランザムに侵攻を仕掛けてきたが、彼等は血盟騎士団の圧倒的な勢力に敗れた。戦争末期の時点でプレイヤーの所属は聖竜連合か血盟騎士団かの2択になっていて、聖竜連合メンバーの殆どはなし崩しに血盟騎士団との併合を受け入れた。

2ヶ月半の間に約3500人が死んだ。1層を奪還するのに100人に達するほどの犠牲を出し、更に聖竜連合が反乱分子を毎日のように処刑していたことで、その数値は叩き出された。とても甚大な被

害だ。デスゲーム開始から戦争までの2年半の死者は約4000人。それに大差ない人数がたったの2ヶ月半で死んだのだ。

そんな戦争を勝利へと導き、最悪の殺人鬼を葬った団長のセツナは英雄視され、生き残ったプレイヤー達の指導者としての支持を集めた。プレイヤー達にとつて、英雄セツナが過去に行っていた犯罪者狩りも「自分達を守るためだった」と正当化すべきものとして扱われた。

P.O.Hは処刑される間際、自分が死んでも何も変わらないと言っていた。でも、彼が消えた後のアインクラッドは否応なく変革を余儀なくされた。P.O.Hの死はアインクラッドにおける混沌の終わりと、新しい秩序の始まりをもたらしした。

P.O.Hの処刑が執行されてからというもの、プレイヤー達は監獄エリアにいるオレンジプレイヤー全員を処刑すべきと主張しはじめた。大衆はもとより、ギルドの参謀職達まで。

「奴等は攻略の邪魔だ」

「対話による解決？ そんなことを言っていたから笑う棺桶討伐で犠牲者が出たんだ」

「ただ生かしておいたって穀潰しになるだけ」

「犯罪者の命なんてゴミより軽い」

そう口々に出てくる言葉の奔流は収監者全員の処刑を経ても治まることはなく、やがて「ゴミ掃除」と称した犯罪者狩りがプレイヤーの私怨によって横行するようになった。フィールドの人氣が少ない場所を根城にするオレンジプレイヤー達はまだしぶとく存在していたのだが、プレイヤー達はくまなく探して犯罪者を見つけると問答無用でPKしていった。まさに魔女狩りのごとく。

戦後から3週間経つ頃にはオレンジプレイヤーの目撃情報はなくなり、アインクラッドは完全な犯罪撲滅を成し遂げた。

「晴れて本来の目的に向かって動き出すだろうな」

P.O.Hの言葉通り、排斥の対象を殲滅したプレイヤー達は攻略を再開した。聖竜連合は第87層まで攻略を進めていて、残り13階層と目標が近いことからプレイヤー達は意気込んで迷宮区へと入っていった。だが、第87層のボスを倒すまでに58人が犠牲になった。

当然の結果ではある。戦争で戦力の中核を担っていた戦士達が次々と死んでいったのだから。生き残ったプレイヤーの大半が、戦前では中層以下を拠点としていた。難易度の低いクエストやボスばかりを相手にしてきた彼等は、上層のボスどころか迷宮区のモンスターにさえ歯が立たず死んでいった。

「十分なマージンを取れば被害は最小限に抑えられる」

「焦らずしっかりとレベルを上げてからボスに挑むべきだ」

そう主張する戦争を生き残った攻略組もいた。だが彼等の言葉は少数派の意見で、一刻も早く現実に戻りたがっている多数派の意見に揉み消されていった。大勢が死んだ戦争の後で、プレイヤー達はもう人も人が死ぬことに慣れてしまったらしい。元々この世界で死んだら現実でも死ぬことに確証はなく、その分勇敢に強力なモンスターやボスに挑むことができた。弊害としてPKの心理的ハードルも低くなったが。他人の死に対しては当然なのだが、自分の死に対しても無頓着になっていく。戦前は始まりの街に留まっていた者達でさえ、外部からの助けに見切りをつけていた。

その様相を指導者として観察できたセツナは理解する。

ポールとして聖竜連合の殺意を解き放ったP.O.Hの言葉と音楽は、きっかけに過ぎなかったのだと。生きるためにモンスターを、場合によつてはプレイヤーを殺さなければならぬアインクラッドでは、殺意を覆う良心など薄っぺらいメッキでしかなかった。プレイヤー達の意識の奥深くに隠されていた暴力性や殺意は、このデスゲームが始まったときから表層へゆつくりと、だが着実に現れ始めていたのだ。

それでも、生命の碑で毎日おびただしい数の名前にラインが引かれることになっても、プレイヤー達は希望を失っていなかった。1人の死は悲劇だが、百万の死はなんとやら、と誰かが言っていた。第87層攻略の死者を知っても、プレイヤー達は100人死ななくて良かったなんて言う始末だ。むしろ、ゲームクリアが先かプレイヤーの全滅が先か、そのスリルを楽しんでいるように思える。

デスゲーム開始とヒースクリフ失踪に注ぐ3度目の変革で、命の価値はことごとくすり減っていき、善良な命でさえ安くなっている。

デスゲーム開始から2年と7ヶ月。残る階層は12。生存者は約2500人。

それがアインクラッドの現状だった。

◆
?

すっかり顔ぶれが変わったなど、会議室にいる面々を見ながらセツナは思った。アインクラッド大戦を経て、血盟騎士団の参謀職は総入れ替えに近い状態になっている。異動の理由は単純なことに、前任者の死亡だ。この場で戦前と変わらない面子は団長であるセツナと、作戦時には常に後方でサポートに徹していた書記係だけになった。

今の血盟騎士団で、結成当初から在籍している団員はいるのだろうか。今や全プレイヤーが所属するアインクラッド唯一にして最大ギルドになった血盟騎士団だが、結成時に掲げていた理念は失われてしまった。団員は全てトッププレイヤーであり、貴重な戦力をいわずらに消費しないよう安全な攻略を模索していたはずだった。

「先日、ボスの間までのマップピングが完了しました」

第88層攻略会議の場で、書記係は偵察隊が持ち帰ってきたマップデータを展開する。

「そこまでの損失は？」

クラインの後任である攻撃隊長が質問する。書記係は淡々と答える。

「31名です」

何の感情も込められずに報告された犠牲者達。名前ではなく数字で片付けられ、死の瞬間に味わったであろう恐怖も疑念もそぎ落とされた。その31という数字が人を表すことを認識できていないのか、守備隊長は「妥当ですね」と感想を漏らす。

実際に犠牲者達の死を見てきたはずの偵察隊長が述べる。

「損失の全てが、元聖竜連合メンバーです」

その報告を聞くと、他の参謀職達は満足そうに頷いた。

「彼等も十分役に立ったじゃないですか」

攻撃隊長が曇りのない笑顔で言った。戦後の攻略で、先陣を切らさ

れるのは元聖竜連合メンバーだ。戦争を引き起こした責任を問われ、レベルが伴っていないなくても彼等はモンスターやボスに特攻し見事に玉砕していく。体の良い処刑だ。彼等の死も戦後処理の一環として片付けられていく。

「例によって、ボスの間は結晶無効化エリアであることが予想されます。十分な余裕を持ち、攻略隊は100名で編成します」

慎重すぎるとも取れる数字は、無論犠牲者が出る前提で算出される。命というものはどこまでも安い。

「よろしいですか？ 団長」

書記係がそう促してくる。セツナは「ああ」と返事をする。

「ボス攻略は2週間後に行く。参加する団員の選出を今日のうちに済ませ、各自レベリングを——」

「団長」

偵察隊長がセツナの言葉を遮った。

「87層の攻略に1ヶ月も費やされたのです。一刻の猶予もありません。攻略は明日にでも行うべきです」

「それは無謀すぎる。今のプレイヤー達のレベルではいずれ全滅する」

「レベルが伴っていないなくても、前衛の壁戦士^{タンク}達が注意を逸らしている間に大人数で攻撃すればボスにも渡り合えると実証されているじゃないですか」

「彼等が壁と呼べるのか。ただの捨て駒だろう」

第87層のボス攻略にはセツナも参加していた。安物の盾を支給された元聖竜連合メンバーが壁役としてボスの注意を逸らしていたが、全員ことごとく振り払われてポリゴンを散らしていった。前の1列が消えると次の1列が構え、それも消えると次の壁が前に押し出されていった。

偵察隊長は彼等の死に対しての責任などおくびにも出さずに言う。「ええ。そのために彼等を血盟騎士団に入れたんです。戦争を起こした責任は取らせなきやなりません」

戦争を起こしたことに對する責任。それはギルバートにも、P O H^{プー}

にも全てを押し付けることができなかった。ギルバートの親衛隊がグランザムを攻めようとした事実もあって、残りのメンバーもいつ逆らうか分からない反乱分子の予備軍にされている。

「アインクラッドの平和のため、ゲームをクリアするためでもあるんです。団長だって、そのために死神として犯罪者を殺していたんじゃないですか？」

セツナは他の参謀職達を見やる。全員がセツナに訝しげな視線を向けている。いくら団長とはいえ、満場一致で決まった事項に口を出す権限は既に失われている。セツナは王ではなく指導者としての支持を集めたのだ。導くのではなく、皆の意思を代弁・代行する者として。

もう歯止めはきかない。

「……………分かった」

それしかセツナには言えなかった。

「ただし3日後だ。装備を整える時間も踏まえ、それだけの猶予はあってもいい」

やれやれという呆れた感慨が、参謀職達の表情から読み取れる。書記係はただ淡々と進行をこなす。

「それでは、3日後にボス攻略へ挑みます。以上で会議を終了します。お疲れ様でした」

◆

『ギルドの仕事が終わってからでいい。店に来てくれ』

参謀会議のあと、書記係と攻略隊の編成についての打ち合わせをしている最中にエギルからのメッセージは届いた。

アルゲードの転移門広場に着いた頃には既に夕刻だったが、聖竜連合から解放された街の賑わいは鎮まる気配がない。とはいえ、以前よりは静かになった。ただでさえ狭い路地にプレイヤーが縁日のようにひしめき合っていたというのに、今はするすると道の真ん中を歩くことができる。

真つ直ぐエギルの雑貨店へ向かうと、既に今日の営業が終わったら

しく木製の質素なドアが閉じられていた。ノックしてしばらくすると、中から巨漢の店主ではなく小柄な鍛冶職人が出てくる。

「セツナ、待ちくたびれたわよ」

「何でリズベツトがいる」

「あたしも呼ばれたのよ。さ、入って」

「アスナは」

「家にいるわよ。さっきご飯作って待ってるってメツセージ来たから」

「そうか」

リズベツトはいつもの調子だ。明るく勝気で陰なんて見せない。最近ではリンダースの店を再開できたことで、更に張り切って武器を作っているらしい。

リズベツトに連れられて2階へ上ると、丸テーブルを囲むエギルとシリカがいた。エギルは無然とした表情でカップのお茶を啜り、隣でピナを頭に乗せたシリカは所在なさげに座っている。

「何か用か、エギル」

セツナがそう聞くと、エギルはおもむろに立ち上がる。つかつかとセツナの前に立つと、これが用件だと言わんばかりに拳を振るってきた。拳は頬の寸前でシステムの障壁に阻まれたが、大音響と共にセツナの体が右へと吹き飛び壁に激突する。ダメージも痛みもないが、微かに左の頬が痺れた気がした。間髪入れずエギルは倒れたセツナの胸倉を掴んでくる。

「ちよつとエギル！」

「やめてください！」

再び拳を振り上げたエギルをリズベツトとシリカが背後から2人がかりで羽交い絞めにする。それでも2人の少女を片手で持ち上げてしまいそうなほどに屈強な巨漢は、見た目に違わず容易に振りほどく。少女達は床に尻もちをついた。

「八つ当たりだって分かってるさ。お前はよくやった」

エギルは震える声で言いながら、再びセツナの胸倉を掴み無理矢理立たせる。その両眼はしっかりとセツナの顔を捉えた。

「クラインは誰も死なせねえって言った。そのためにセツナは戦ってるって。なのに……、なお前は何してんだ！ 毎日たくさん死んで、それでもお前は顔色ひとつ変えねえ。お前に感情ってやつはねえのかよー！」

「責任は感じている。今の状況になったのは、俺の力不足だ」

エギルの目尻には涙が浮かんでいる。死んだ友人のことを想つてなのか、それとも面倒を見ていたプレイヤー達を想つての涙なのかは分からない。多分、両方なのだと思う。攻略に参加する団員はエギルから育成支援を受けていた者ばかりだ。当然、その中で犠牲者も多く出ていた。

「クラインは俺のせいで死んだ。赦してもらおうとは思わない」

「また罪を背負うってか。そうやって背負ってばかりで、反省すればいいと思ってるのか！ なんもんだの自己満足だろうが!!」

「罰は受ける。望まれるなら団長の座から降りる。殺してくれても構わない」

「ふざけんな！」と、エギルは無造作にセツナを突き飛ばす。受け身も取らず、力なく床に腰を打つても痛みを感じない。セツナは痛みを欲した。エギルの慟哭と憤怒を、痛みとして自分に伝えてほしいと思った。そうすれば罪の重さを生々しく認識することができる。でもエギルは殴ることも蹴ることもしない。

「責任から逃がしてたまるか。お前はたくさんの死を背負ってんだ。お前が殺した奴等だけじゃない。お前が団長になってから死んだ皆の分もだ。皆の死に罪の意識があるなら生きろ。生きてリーダーを続ける。お前には、このゲームをクリアさせる責任があるんだ」

「分かっている。犯罪者を殺すと決めるときから、罪も責任も背負うと決めた。クラインと同じように信じてくれるなら、俺にチャンスをくれ、エギル」

セツナは揺るがない視線をエギルに向けた。鋭く、見る者によっては不遜な態度にも見える険しく吊り上がった両眼を。

全て受け入れるつもりだった。自分に向けられる怒りも憎しみも殺意も全て。赦されるのなら死ぬと断言できるし、抱える罪が死で償

えるほど軽くないことも知っている。

互いに視線を送り合い、逡巡した後、エギルは「くそっ」と吐き捨てて椅子に腰かけた。

「大丈夫？」とリズベットが肩を貸してくれた。彼女は純粹に厚意でやってくれていることが分かる。でも、その優しさがむしろセツナを苦しめる。そんなものは求めていない。あんたも俺に罰を与えてくれと、マゾヒズムな願いを叫びたかった。

4人全員が椅子にかけたところでセツナは聞く。しつかりとエギルの両眼を見据えて。

「支援しているプレイヤー達の平均レベルは」

「50くらいだ。60台に入った奴から前線に送られていく。マジジ
ンもろくに取れてねえのによ」

「そうか。1層を攻略するのに何十人も犠牲が出ている。今のペー
スで進めれば、上の層に行くほど犠牲者は増えるだろう」

「そんな……………」

シリカが言葉を詰まらせる。セツナは続ける。

「3人にも、いざれ攻略に参加してもらおうときが来る。圏内でも経験
値を稼げるクエストを受けて、レベルを上げてほしい」

「ねえセツナ、まさかアスナも……………」

「アスナは参加させない」

リズベットの質問にセツナは即答する。一拍置いて更に付け加え
る。

「約束だ」

リズベットは安心したように胸を撫で下ろした。

「俺は次の攻略から参加する」

エギルは力強くそう言った。「え？」とシリカとリズベットが彼を
凝視する。

「お前に任せてたら、またとんでもねえ数の犠牲が出ちまう。俺が
壁戦士として、攻略隊の皆を守ってやる。いいな、セツナ」

「ああ」

壁戦士はアバター構成のなかで最も防御力が高く、その分死亡率も

低い。ただしボス攻略では必ず先頭に立って仲間を守らなければならず、逃げることでできない恐怖と葛藤が付きまとう。エギルの選択は、他のプレイヤーの恐怖を一身に引き受けることだ。

「頼む、エギル」

エギルは「ふん」と鼻を鳴らした。

「頼まれなくてもやってたぜ。誰も死なせやしない」

誰も死なせない。その言葉の重みは、全プレイヤーの命を預かる立場にあるセツナに重くのしかかる。団長として、指導者としてプレイヤー達を現実に戻すと宣言したにも関わらず、毎日多くの犠牲を出している。次々と新しい罪を重ね、もう取り返しはつかなくなった。

正直、セツナに罪を償おうだなんて考えはもう消滅している。償おうにも償いきれないし、消える気配のない罪悪感について考えあぐねていることに疲れてしまった。何人が死のうとも、何人が苦しもうと、もう麻痺してしまった良心は痛まない。

ただゲームをクリアする。悲しみと罪が充満する仮想世界に終止符を打ち、その先にある結末を得ることが、セツナに残された明瞭な目的だった。

◆
？

第88層ボス攻略の日、エギルは攻略隊の面々に呼び掛けていた。

「いいか、勝つために死のうだなんて馬鹿なことは絶対に考えるな。皆で生き残って、現実に戻るんだ。お前らの命はお前らだけのものじゃない。お前らを大切に想っている人達のもんでもあるんだ」

学校の道徳教育で教師が言いそうな台詞だった。でも、実際に生き死にが関わっている状況下で、彼の言葉は攻略隊の励みになったことは事実だ。

エギルが堅固な壁戦士として活躍してくれたおかげで、第88層攻略の犠牲者は10人に抑えられた。攻略隊の面々はエギルに賛辞を述べていたが、当の本人は守り切れずに消えていった10人を想って感傷に浸っていた。

多分、エギルはアインクラッドで2年以上過ごしていながらも、命

の価値を高く保ち続けていたのだろうとセツナは思う。

お前らの命はお前らだけのものじゃない。彼のその言葉には説得力がある。エギルは現実には自分と同等かそれ以上に大切な人を置いていったのかもしれない。自分が死んだら、その人はどうなってしまうのか。自分が死んで、その人を悲しませ守れなくなってしまうことが一番辛い。セツナの推測でしかないが、その意思が彼の命に対する価値観をより高めていった。自分だけでなく、自分以外の命にも例外なく。

エギルは奉仕精神こそ強い男だったが、他者のために自分が死のうという思考を決してしなかった。

「俺がいなくなったら、誰が奴等を守るんだよ」

彼はそう言っていた。店の儲けばかりを優先する守銭奴を気取っていないながら、蓋を開けてみれば損得勘定なしに動いてしまうお人好しだ。皆を守るために生きる。生きて現実に還る。攻略の度に彼はそう言っていた。

でも、エギルは死んだ。

きつかけは些細なミスだった。

第93層のボス攻略で、壁戦士として《The Kraken Lord》の攻撃を捌いていたのだが、HPをすり減らす彼を気に掛けた後衛の回復係がポーションを手渡そうとした。だがタイミングが最悪なことに、ボスの巨大イカが突如現れた後衛のプレイヤーに長くうねった脚を絡ませようとしてきた。エギルはポーションを持ってきてくれた彼を庇ったばかりに脚に拘束され、吸盤の中に仕込まれた歯に頭を噛まれて砕け散った。

エギルが消えた途端ボスを取り囲んでいた攻略隊の陣営は瓦解し、辛くも倒すことはできたが全滅寸前にまで追い込まれた。130人が投入された第93層の解放に生き残った攻略隊は、セツナを入れて11人だけだった。

いくら命が安くなってしまったとはいえ、生き残った者達はエギルの死に泣いた。彼はプレイヤー達にとっては尊敬する師だった。街へ帰還するとエギルのために、簡単ではあるが葬儀が執り行われ多く

のプレイヤーが参列した。

「エギルさんのために、絶対にこのゲームを終わらせよう」

プレイヤー達はそう意気込んで、更に攻略へと邁進した。

エギルが死んでからというものの数ヶ月、プレイヤー達の死は一気に加速した。壁役はエギルにひどく依存していたから、後任の壁戦士がボスの攻撃を防ぎ切れずに消滅するなんてことは珍しくなくなった。それでもプレイヤー達は、朝食の席で隣にいた者が夕刻にはいなくなっても、悲しみも恐怖もせずに迷宮区へと入っていった。まるで死など取るに足らない通過点であるかのように。

更に痛手なことに、アルゴも死んだ。

アルゴは情報収集のために自ら危険なフィールドに出ていたから、数々の修羅場を潜り抜けるために戦闘スキルを鍛えることにも抜かりなかった。短剣と潜伏スキルの達人として攻略に招集されたアルゴがどうやって死んだのか、その詳細は分からない。

第95層攻略の日、迷宮攻略も含めて380人も犠牲の末にボスを倒したのだが、生き残った者のなかにアルゴの姿はなかった。生命の碑で確認したところ、彼女はどうかボスと戦っている時間帯に死んだらしい。生き残りでアルゴの死を目撃した者はいなかった。

アルゴに攻略への参加を要請したのはセツナだ。セツナの頼みにアルゴは承諾してくれた。

「疑似二刀流なんてユニークスキルを間近で見れる機会はそうそうないしネ」

アルゴは笑いながらそう言っていた。おどけた態度ばかり取っていたが、一度だけ彼女の本心を聞くことができた。

忍び寄ってくる死神の足音を敏感に聞き取っていたのかは分からないが、アルゴは死ぬ前日、第95層ボス攻略を翌日に控えた日にアスナの料理が食べたいと言った。家に招待されたアルゴをアスナは歓迎した。2人は既に顔見知りだったらしい。アスナが腕を振るったチーズフォンデュを味わって食べたアルゴは食後の散歩にセツナを誘ってきた。何か大事な話でもするのだろうかと思って同行したのだが、アルゴは退屈な世間話ばかりした。

「あんな美味しいモンを今まで食わなかったなんて、惜しいことしたナ」「食いたくなったらいつでも来ていい。アスナも喜ぶ」

「そりゃ嬉しいネ。まったくキー坊のやつ、あんな飯を毎日食ってたなんて羨ましいヨ。オネーサンも恋ぐらいすればよかったナ」

他愛もない会話の最後、アルゴは初めて聞く沈んだ声でそう言っていた。自称「オネーサン」として振る舞っていたアルゴの不安げな顔を見たのは、そのときが最初で最後だった。残酷なことにアルゴの抱える脆さを垣間見ても、彼女を守りたいだなんて感情はセツナのなかで見つからなかった。

デスゲーム開始からプレイヤー達の支えになっていた2人を失い、それからの攻略は泥沼と言っている。1階層を解放する毎に数百という犠牲を払い、第98層まで到達した時点で生存者は1000人を切った。更に質の悪いことに、第98層からは主街区が存在せず、層全域が迷宮区という構造になっていた。上層へ登る毎に狭くなっていくアインクラッドの構造上、層全域といっても第1層の迷宮区よりも小規模ではある。だが強力なモンスターが際限なく雪崩れ込み、先頭に立っていた者は成す術もなく消えていった。

それでもプレイヤー達は立ち止まることをしなかった。自分のレベルではマージンが取れていないことを知っていてもだ。生きるために戦っているというのに、プレイヤー達の死にぶりは死の欲動デストルドーが膨れ上がったかのように精力的だった。

数百という数を率いて迷宮区に赴く様はまさに死の行軍デス・マーチだったが、攻略隊の面々から絶望の匂いは感じなかった。彼等は死地ではなく希望がある樂園へ向かうように穏やかな顔をしていた。

以前、まだ現実で暮らしていた頃。セツナはサッカー部の合宿で富士登山に挑んだことがある。登れば登るほど酸素は薄くなり、いくら呼吸を荒げても酸素が足りないという体の悲鳴は高山病として現れた。頭痛と吐き気に苦しみながらも、山頂に立つ鳥居目掛けて脚を動かしているとき、自分は紛れもなくゴールへと向かっているという確信があった。

途中で下山したいと言っていた部員達も鳥居が見えると弱音を吐

くことを止め、ただ黙々とゾンビのように鈍い動きで登り続けていた。

ゴールが見えると人は止まらない。たとえ自分の心と体が死へ向かっているとしても。

絶望ではなく希望のたれに向かう死への道。ヴァサゴが見たかったものは、そんな風景だったのだろうか。たとえそれを求めていたとしても、キリトを失った彼が満たされることはなかったに違いない。

◆
？

ガネーシャロード、ドラゴニユートロード、ウエアウルフロード。迷宮区に現れるモンスターの名前にはLordが付く。フィールドにいるモンスターとは一線を画す、種族の支配者を意味する敬称。その戦闘能力は高く、人型で武器を装備しているため強力なソードスキルを放ってくる。しかも、上位であればスキルにカスタマイズが加えられて自分が知るスキルとは異なる動きに翻弄される。

プレイヤーにとってはかなり厄介なロード集団が群を成して襲いかかってきたのは、索敵スキルの補正がなければ何も見えない第99層の回廊だった。この先にいる主には近付けさせないとばかりに、剣を携えたモンスター達は暗闇から攻略隊へと咆哮をあげながら突っ込んできた。おかげで攻略隊は大混乱に陥った。覚えてたののソードスキルを闇雲に放ち、HPバーがイエローゾーンまで削られてもお構いなしに次の攻撃がやってくる。

彼等を守りながら、なんて器用な芸当はセツナにはできなかった。防御に関しては回避特化型で、仲間を守るために防ぐよりも避けて自分1人が助かるようにとアバターを鍛えていた。元々連携など視野に入らず1人での戦闘を前提としていたのだから、手の打ちようがない。《疑似二刀流》で鞘を防御に使えるようにはなったが、それでも耐久値は盾に劣る。

回廊に反響する咆哮がモンスターのものか、プレイヤーのものか判別などできなかった。散っていくポリゴンの欠片が誰のものかなんて分かるはずがなかった。

どれほどの時間、モンスターの群れと戦っていたのかは定かではない。咆哮と破砕音は徐々に小さくなり、やがて最後のウエアウルフロードをセツナが倒した頃、回廊は恐ろしいほど静かだった。

「……………シリカ」

セツナは同行していたはずの仲間を呼ぶ。その姿を暗闇から探し出そうと視線を右往左往させる。

「リズベツト」

反響する声は暗闇のなかへと吸い込まれていく。

「あたしも、セツナさんの力になります」

「絶対にアスナを現実に還さなきゃ」

そう言つて共にダンジョンへと挑んだ彼女らの姿はどこにも見当たらなかった。

「誰か——」

不意に炎が灯った。回廊の壁と床を照らし、消えると同時に水色の羽が視界に入り込んでくる。綿毛に包まれた小竜《フェザーリドラ》。本来なら下層に生息するそのモンスターがこのダンジョンにいる理由はひとつしかない。

「ピナ」

セツナは小竜の吐くブレスを避けながら呼び掛ける。ピナはセツナの声にも何も反応を示すことなく鉤爪を突き出してくる。

「俺が分からないのか」

家に帰宅する度、シリカの肩からセツナの方へと飛び移り顔を擦り寄せてきた人懐っこさは感じない。ピナは完全にセツナを殺すべきプレイヤーとして認識しているようだった。聞いたことがある。主を失った《使い魔》は通常モンスターとして再びプレイヤーに襲いかかると。

セツナはブレスを放とうと胸を膨らませたピナを剣で一閃した。《フェザーリドラ》は多くの特殊能力を持つが、直接的な戦闘能力は高くない。体を両断されたピナのHPは一気に尽きて、体がポリゴンを散らして消滅した。

再び静寂が訪れる。ありえない、とセツナは置かれた状況から逃避

したくなる。第99層は生き残ったプレイヤー約400人全員で挑んだ。それがセツナ以外1人残らず。ボスの間に到達する前に雑魚モンスターによって壊滅させられたというのか。

セツナはポーチから転移結晶を取り出す。

「転移、はじまりの街」

転移時の光が消え、視界に入り込んできた街は閑散としていた。セツナが現れた転移門広場には常にプレイヤーがごった返していたというのに、誰も転移空間から現れてこない。

目の前を通りかかる女性に話しかける。

「この街のプレイヤーは……」

「はじまりの街へようこそ。大通りに行けば、誰かしらいるわよ」

容姿の整った女性は笑みを浮かべながらそう言った。

女性に言われた通り大通りに出る。確かにプレイヤーはいる。セツナを見つけると「いらっしやい」、「回復アイテムいかが?」と声を張り上げるNPC達が。「お兄さん、お食事はどう?」と声をかけてくる女性NPCを無視し、セツナは大通りから出て黒鉄宮を目指して歩く。石畳の床を踏む毎にセツナの脚は震えていた。この先で最悪の地獄へと突き落とされるかもしれない。それでもセツナは歩いた。仮想で突き付けられる現実を見届ける責任があったからだ。

黒く磨かれた宮殿の正門を潜り広間へと入る。ゆつくりと歩を進め、金属製モノリスの前に立つ。恐ろしく静かな宮殿のなかで、セツナはモノリスに刻まれた名前を見上げた。

ほぼ全ての名前に横線が引かれていた。

誰が生きていて誰が死んでいるのか。こんなにも分かりやすい名簿はない。無慈悲なラインが埋め尽くそうとしている名簿のなかで、まだ引かれていない名前は完成直前のジグソーパズルの穴のように目立っている。

《Set suna》と《Asuna》。

その2人だけが、現時点で生き残ったプレイヤーだった。

どうしてこうなったのか。疑問の答えはすぐに出る。そう、自分のせいだ。

ヴァサゴから託された悲劇の楽譜を歌い上げ、人々の殺意や暴力性を解き放てば、こうなることは予測できたはずだ。人がどこまで野蛮になれるか、どこまで勇敢になれるかも十分に理解していた。妄信的な野蛮さは公共の敵を滅ぼし、盲目的な勇敢さは際限なく前進させた。これはその結果なのだ。

キリトが死ななければ、こうはならなかったのだろうか。アスナが血盟騎士団を率いていれば、犠牲を抑えて攻略を進められたのだろうか。セツナが団長にならなければ、悲劇は防ぐことができたのだろうか。

モノリスを前にして様々な憶測が脳内を駆け回っていく。でも今やその全てが無意味だった。この世界で生きているのはセツナの他に1人しかいない。

セツナはモノリスに背を向けて黒鉄宮を出た。脚の震えはもう治まっていた。疲れたのだ。罪悪感を覚えることすらも。何も考えることなく街を歩くと、活気に満ちたNPCの声だけが響いていた。

◆

自分がどの道を歩いてそこに辿り着いたのか、セツナは覚えていない。気付けば見慣れたログハウスの前に立っていた。

「お帰りなさい」

ドアをノックすると、陽だまりのような笑顔でアスナが出迎えてくれた。

「ただいま」

リビングに入るとぱちぱちと暖炉が薪を燃やす音が聞こえる。残暑が過ぎるとすっかり肌寒い季節になった。

「もう、遅かったじゃない。今日の攻略そんなに大変だったの？」

「ああ、うん」

いつものように素っ気なく返事をしながら、視界の隅にある時刻表示に焦点を合わせる。20時をとくに過ぎていた。はじまりの街にいたときは15時くらいだったから、どうやら回り道しながら帰路についていたらしい。

「飯できてるよ。食べましょう」

エプロン姿のアスナは次々と皿に盛り付けられた料理をダイニングに運んでいく。今晚の献立は真っ赤なソースがかかったステーキだ。

「今日は新しいソースに挑戦してみたのよ。すごく辛いけど、これくらいが丁度いいかなって」

アスナのステーキには茶色のソースがかかっている。特製なんだなど思っていると、アスナの口から出た名前が何の障害もなくセツナの耳孔に入り込んでくる。

「キリト君には」

訂正することなく、セツナは椅子に座り「いただきます」とステーキを食べ始める。本当に辛かった。むせ返るほどではないが、本来の味が分からず刺激が唞内を突き刺してくる。

キリトという名前で呼ばれるようになったのはいつからだろう。初めて呼ばれたときの日にちは覚えていない。ただシリカとリズベットがともシヨックを受けていたことは覚えている。アスナが眠った後、深夜のリビングで2人は泣いていた。あの強いアスナがどうしてと。

強く気高くて、見た目はセツナと年の近い少女だ。心のどこかで誰かの温もりを求め、愛する者のいない寂しさに耐えかねたのだろう。彼女の気持ちがよく分かるという傲慢さは持ち合わせていないが、セツナはキリトを演じることにした。アスナをこれ以上悲しませてはいけない。単純にそう思ったからだ。

リズベット、シリカ、エギル、クラインからキリトの話し方や癖を聞き、求められる人物像全てを取り込んでセツナはキリトに成り代わった。こうして彼の振りをして過ごしていると、断片的ではあるが彼がどんな少年だったのか理解できた気がした。孤独なソロプレイヤーなのに、関わった者の多くを救っている。一匹狼を気取っているが、本心ではどこかで他者を求めていたのかもしれない。ただ人付き合いが苦手なナイーブな少年。そんなイメージだ。もしキリトが本当に他者を拒んでいたのなら、アスナと結婚することはなかったはず

だ。アスナはキリトを演じるセツナに、これでもかというほど甘えていたのだから。彼がアスナを心の底から愛していたことは断言できる。

激辛ステーキと格闘しているなか、セツナはアスナのナイフとフォークが動いていないことに気付いた。まさか真実に気付いてしまったのでは。そんな不安を抱えながら、セツナはキリトの口調で聞いた。

「アスナ、どうしたんだ」

アスナはナイフとフォークを置いた。

「キリト君。わたし、幸せだよ」

「……………ああ、俺もだよ」

心にもないことを言うのに苦はなかった。素性を隠しながらオレングレイヤーに近付き、騙し殺していた日々がもう1年も前のことだと思ふと、随分時間が経った。

「いきなりどうしたんだよ」

「何だか、良いのかなって思っちゃって。わたし、こんなに幸せで」

「良いに決まってるじゃないか」

「……………うん、ありがとう」

アスナの声色は沈んでいる。数秒間の逡巡の後、アスナは唇を噛んだ。痛みを求めているようだった。

「キリト君。わたし、前にキリト君とよく似た人に会ったことがあるの。顔も名前も思い出せないんだけど、とても悲しい人だった。大切な人を失って、罪を背負い続けて、どんどん自分から苦しもうとしていたの。わたし、彼のこと救いたかった。でもできなかった。正直ね、キリト君のこと彼と重ねてたの。キリト君のことが好きなのは本当よ。でもソロでいるキリト君を見ると……………、怖かった。キリト君が彼と同じところに行っちゃうと思って……………。ごめんね。キリト君は知らない人と重ねられて迷惑だよ。わたしって、本当に自分勝手……………」

「そんなことないさ。アスナが俺を想ったのことだったんだろ」

セツナがそう言うと、アスナは少しだけ笑った。

「うん。でもこうして幸せを感じていると、彼はどこで何をしているの
かなって、時々思うの。今も苦しんでると思うと、わたしの幸せがま
るで彼の不幸と引き換えになってるみたいで怖くなるの」

「アスナが誰のことを話しているのか、セツナにはすぐに分かった。
だから言葉は迷うことなく出てくる。」

「アスナが気に病むことはないさ。その人はきつと感謝してるよ。ア
スナに手を差し伸べてくれて。それだけでも、救われたんじゃないか
な」

そう言うとアスナは喜んでいいのか複雑な表情をして、やがて微笑
を浮かべた。

「うん、ありがとう」

アスナはようやくステーキを食べ始めた。食後にハーブティーを
飲みながら他愛もない会話をして、やがて眠気が訪れると寝巻に着替
えて2階へ上がった。

キリトを演じるようになってから、セツナの寝床はベッドが2つ置
かれた夫婦の寝室になった。セツナが寝ていた客間のベッドは既に
片付けられている。アスナはセツナという同居人がいたことを忘れ
ていた。

壁のコルクボードにはたくさんさんの写真が貼られている。パンを食
べるキリト、リングゴを食べるアスナ。2人仲良く並んでいる写真も多
い。コルクボードのなかにガーデンパーティーの写真はなかった。現
像した写真をアスナは嬉しそうに眺めていたのに。多分、一度貼られ
た後にリズベットかシリカに剥がされたのだろう。

大きく伸びをして、セツナは窓際のベッドで横になる。すぐに眠気
が訪れたが、腹部に重みを感じてすぐに意識が水面へと押し戻され
る。目を開くと、目の前にアスナの顔があった。

「どうしたんだ」

「キリト君、明日も攻略だからっていつもすぐ寝ちゃうんだもん。わ
たしだって、寂しいんだよ?」

見ると、アスナは下着しか身に着けていなかった。飾り気のない白
だが、元の素材が良い彼女にはそれくらいシンプルなものがよく似合

う。

「今日ぐらいは、いいでしょう。」

アスナと偽物の夫婦生活を送るなかで、セツナは決して彼女に手を出すことはなかった。そんな気分になれなかったし、何よりもキリトを裏切ってしまうような気がした。たとえ仮想でもだ。キスどころか手を繋ぐこともしなかった。

いや、とセツナのなかで甘い誘惑が浮かび上がる。

これでいいんじゃないか。

この世界にはもう、セツナとアスナしかいない。ゲームクリアは絶望的だ。ならばクリアせずに、この2人だけの楽園でアダムとイヴとして生きていくことが最も幸福なのではないか。

アスナはセツナをキリトと思い込んでいる。なら、セツナはアスナをナミエと思えばいい。そうすれば2人とも幸せだ。お互いを愛し合える。邪魔をする者は誰もいない。

そうだ、これでいいんだ。

アスナの艶やかな唇が迫ってくる。セツナはアスナの顔へ手をゆっくり伸ばす。

自分に覆い被さろうとするアスナの影に抗うことなく、セツナは目を閉じた。

最終話 別れの時にはさようなら

雲一つない夜空だ。星もひとつもない。真っ黒な被膜が世界を覆い隠しているようだ。浮かぶ月はまるで被膜に開いた大きな傷口のように弱く世界を照らしている。

俺は月を見上げる顔を降ろして、目の前に広がる海を眺める。波が俺の足元まで迫ってくるけど、俺のブーツを濡らすことなく引いていく。そしてまた迫っては引いてを繰り返す。

波は砂浜にたくさんのものを運んでくれる。貝殻に流木に死体。まるで打ち上げられたイルカやクジラのように彼等はぐったりしている。そういえば、外国で腐敗したクジラの腹が破裂したというニュースを聞いたことがある。腐敗すると体内にガスが溜まって膨れ上がり、許容量を過ぎると皮膚を割いて辺りに血と体液と臓物を撒き散らすらしい。打ち上げられた人々はまだ死んで間もないようで、今は破裂する心配はなさそうだ。

「お久しぶり」

聞き覚えのある声が聞こえる。浅瀬にテーブルと2脚の椅子が設えられていて、1脚には既に女性が座っている。

「ご一緒していただける？」

女性が俺に微笑む。俺はブーツが濡れるのも構わず水のなかへ足を入れ浅瀬を歩く。海水の抵抗にわずらわしさを感じながらも、彼女の向かいに置かれた椅子に腰を落ち着かせる。彼女はサーバーの身をカップに注ぎ俺に差し出してくれた。俺は湯気を立てるコーヒーマグの香りを楽しみ、ゆっくりと啜る。前に一緒に飲んだときよりも格段に美味かった。

「久しぶりだ、エステル。せっかくの服が台無しだな」

俺がそう言うと、彼女は物憂げに目蓋が垂れた目を細めてまた微笑む。純白のワンピースは品の良い彼女によく似合っているのだが、右肩から胸にかけて鮮血に染まっている。血は更にじわじわと染み込んで範囲を広げていく。

「せっかくの再会なのに、そんな言い方するかしら？」

「女の扱いには慣れていない」

不満そうな顔をする彼女を尻目に俺は再びコーヒーに口をつける。

「攻略の調子はどう?」

「最悪だな。ゲームオーバー寸前だ」

一拍置いて俺は続ける。

「俺が全てを壊した。罪のある命も、善良な命も全部」

俺は水平の彼方を眺める。月光を穏やかに揺れる海面が反射している。まるで黄泉へと続く道のように、きらきらと海面を走る光はこちらへと伸びていた。光の道の上に誰かが立っている。全身ずぶぬれで髪の毛の先端から水を滴らせながら、彼女は俺とエステルを見つめている。

「とても綺麗な人ね」

「ああ」

「ぞっこんなのね」

「そうでなかったら死神にも团长にもならなかった」

「あなたがたくさん殺して、ゲームをクリアさせようとしたのは彼女のため?」

エステルの質問に俺はすぐ答えることができなかった。答えを急ぐ問題でもないし、彼女がそんなせつかちな女性には見えなかった。

コーヒーを2口飲んだところで、俺はようやく答える。

「分からない。俺はナミエのために殺していたのか、自分の罪を償うために攻略を目指したのか」

「自分の罪、数えたことある?」

「ああ。ナミエをこの世界に連れてきた罪。ナミエを死なせた罪。人を殺した罪。同族殺しを扇動した罪。皆を死地へと行かせた罪」

「途方も無いわね」

「そうだな」と相づちを打ち、俺は無意味な告解を続ける。

「生き残ったプレイヤーを救えば、この世界が消えてくれれば、俺の罪も消えるんじゃないかと思っていた。でも違った」

「そうね、命に優劣はないもの。犯罪者だから特別価値が無いわけでも、善良だから特別価値があるわけでもない。命は等価値よ」

「途方もない罪を抱えた俺の命もか」

「ええ。あなただけじゃない。彼女もよ。特別なものなんて何も無いの。皆平等よ。誰だつていつかは死んでしまう。私のようにね」

「そう、なのか……」

疑問を口にしながら俺は光の道に立つ彼女を見つめる。彼女は何も言ってくれない。その虚ろな目に何を映しているのかも分からない。

「でも俺にとって、ナミエの命は特別だった。誰を犠牲にしたって構わない。彼女が生き返ってくれるなら何人殺してもいいと思った」

「誰にだって大切な人はいるわ。自分にとって大切な人の命は特別と思うものよ。それが所詮オブジェクトでも、骨を軸とした筋肉と肉の塊でもね。それが一般に愛と呼ばれるものよ」

「なら、俺の彼女に対する気持ちは愛と呼べるのか」

俺がそう聞くとエステルは苦笑する。

「愛情の形は人それぞれよ。ある人にとっては愛と呼べても、またある人にとっては愛と呼べないのかもしれないわ。要は気持ち次第ね」

「同じことを言っていた男がいた」

「あら、どんな人？」

「最悪の殺人鬼だ」

そのことを言つてやると、エステルは子供っぽくむくれた。

「失礼ね。殺人鬼と一緒にしてほしくないわ」

「そんなつもりはない」

愛しているのかいないのか。愛情と呼ぶべきなのか曖昧な俺を反映しているかのように海は穏やかな風に煽られ波打っている。水面の彼女の姿さえも曖昧になり、やがてどろどろと海面に溶けて消えていく。

「ずっと彼女に会いたいと願っていた。夢でも幻でもいい。また笑ってくれて、俺のためにバイオリンを弾いてほしい。でもゾディアークを殺してから、彼女は泣きも笑いもしなくなった」

「ここでは全てがあなたの思い通りよ。幸せな夢を見ることだつてできるのに、あなたはあえて地獄を夢見て進んで苦しんでいる。あなた

を罰しているのはあなた自身よ」

「罪を抱えて、苦しみ続けることが罰になるのか」

「それを選択したのはあなたじゃない。サディストのようにたくさん殺してきたけれど、実はマゾヒストなのかしら？」

エステルはこんなに意地悪な女性だっただろうか。そう思いながら、俺は仕返しとばかりに言う。

「ここであんたが何を言っても、それはあんたの言葉じゃない」

「ええ、そうね。ここはあなたの創り出す世界だから、見える景色も聞こえる声も取捨選択することができる。でも忘れないで。あなたの記憶にある言葉は創ったものではなく真実だったことを」

エステルはそう言うときコーヒーを飲み干して立ち上がる。ゆっくりと水音を静かに立てながら浅瀬を歩き、俺のほうへ振り返る。あの夜と同じように、月光に照らされた白い肌が反射していた。

「セツナさん、あなたは生きてね。あなたの力は人を殺すだけじゃなくて、救うこともできるはずだから」

エステルの声色と表情はあの夜と全く同じだった。本物じゃないと分かっているけど、俺にとつて目の前にいる彼女はいつも物憂げな顔をしていたエステル本人だった。

「これは、私自身の言葉よ」

そう言うときエステルは姿勢を真っ直ぐにしたまま海面へと身を投げた。飛沫が上がり、ぶくぶくと泡立った海面に浮き上がってくることはなかった。

俺もカップに残ったコーヒーを飲み干し、浅瀬の上に立つ。目を開いたまま体をゆっくりと前に倒す。重量で加速していき、海面に衝突する。浅瀬だというのに、立っていたところはくるぶしが浸かる程度だったというのに、俺の体は底の見えない海中を深く潜っていく。

ああ、これも俺が創ったんだなと思いつながら、俺は一切の光が差し込まない暗闇へと閉じ込められた。あまりにも暗くて自分が目を開いているのか閉じているのかさえ分からなくなる。最初は抗っていた水の流れに身を任せ、海中を揺蕩たゆたっているうちに眠気が訪れる。

夢のなかの眠りは、俺の意識を現実での目覚めへ導いた。

?

◆
朝食後のコーヒーは、アスナとキリトの穏やかなひと時だ。コーヒーを飲んで頬を緩めるキリトの顔が愛おしく、アスナも自然と笑みを零す。

コーヒーを飲み終えてすぐにキリトは支度を始めた。黒のレザーコートに身に着ける彼の姿にどこか懐かしさを覚える。ここ数ヶ月の間、彼はヒースクリフを彷彿とさせる真紅のコートを着ていた。いつの間にかキリトは血盟騎士団の参謀職を務めるようになったらしい。妻として誇らしい。夫が最前線で活躍しているのは。

「そうだ」とアスナは思い出し、黒光りする剣をオブジェクト化させる。

「キリト君、これ」

キリトは逡巡した後「ありがとう」と剣を受け取る。

「新しい剣に変えたの？」

「ああ……、うん」

エリユシデータはキリトが長く愛用していた剣だ。第50層フロアボスがドロップしたもので、リズベットの見立てによると魔剣クラスらしい。

「これでも厳しくなってきたな」

「そうなんだ。モンスターもどんどん強くなってるんだね」

「ああ。でも御守り代わりに持つとくよ」

そう言うと、キリトはエリユシデータをストレージにしまった。アスナはつい笑ってしまう。

「ただ出し入れしただけだね。ストレージは共有化されてるし」

「そうだな」とキリトも控え目に笑う。

「それじゃ、行ってくるよ」

その言葉を聞くと、アスナの胸に不安が渦巻いてくる。もし彼が戻ってこなかったらと。毎日のことだ。アスナが前線から退いて、毎朝危険な迷宮区へ行くキリトを見送る度に不安が襲ってくる。

「ねえキリト君、やっぱりわたしも――」

「それは駄目だ」

アスナの言葉をキリトは鋭く遮った。

「これからの攻略は危険なんだ。特に今日行くところは。アスナを行かせるわけにはいかない」

「そんなに危険なら尚更よ。もしキリト君に何かあつたら………」

「大丈夫」

俯くアスナにキリトは優しく言った。ぽん、と頭に手が添えられる。

「必ず帰ってくるさ」

アスナは顔を上げる。身長は同じくらいのはずなのに、今日のキリトは一回り大きく見える。

このやり取りも毎日のことだ。日を追うごとに彼とのレベルは差を広め、置いていかれる自分かもしかしい。

「うん、待ってる………」

アスナは弱々しく言った。

「……だから、絶対に帰ってきてね。キリト君の好きなもの、作って待ってるから」

「ああ」

キリトは優しく笑った。アスナに背を向けてドアへと歩き出す。アスナは夫の背中を見つめながら祈る。今日も無事に帰ってこられますようにと。

外でドアを閉めようとキリトが振り返る。その一瞬だけ視線が合った。閉まりかけたドアから覗く彼は、とても悲しそうな目をしてた。夫のあんな目を見たのは初めてだ。まるで別人のように思えた。

「キリト君——」

アスナは夫の名前を呼んだ。でもキリトは止まることなくドアを閉めて、その姿を消してしまった。

◆
?

研磨を重ね、僅かな光で紅い光を反射するハーディスクラウンが天

使の剣を払いのける。

第99層フロアボス《The Guardian Angel》。整った、しかし10メートルはありそうな青年の姿をした天使は3対の翼を羽ばたかせてホバリングする。セツナは体術スキルを駆使して壁を走り、円柱に伸びるボスの間を螺旋状に登っていく。同じ高度に達したところで、疑似二刀流突進技《オミナスバイト》を放つ。壁を蹴り、宙ですれ違い様に一閃し翼の1枚を斬り落とす。

着地を決めてすぐさま上空を見上げる。自慢の翼をもがれた天使は怒りに顔を歪め、黄金に輝く剣を掲げて一気に下降してきた。すぐにその場から離れ、セツナがいた地点に天使の剣が振り下ろされる。演出として撒き散らされる粉塵のせいで視覚が阻害されるも、埃のなかに浮かぶレッドのカーソルを目印に左へ迂回する。黄金の剣が粉塵を切り裂いた。

僅かな隙間から覗く敵の姿を視認し、セツナは跳躍する。狙い通り天使の背中に着地した。天使は上半身に何も身に纏っていないため、皮膚に浮き出た筋肉はダビデ像のように完璧な造形美をたたえている。その美しく、翼の生えた背中に2本の刃を突き刺す。天使が痛みを悶えさせた。残った5枚の翼をせわしなく動かして上昇して振り落しにかかってくる。セツナは剣だけを抜き、背中に突き出した鞘を掴んだまま背中を大振りに切り裂く。5枚の翼が根本から次々と斬り落とされ、天使としての勳章を失った青年は重力に引き寄せられ墜落していく。

ただの巨人に成り下がったボスはイカロスのように、真つ逆さまに床へ激突する。衝突の直前に背中から離れたセツナは地面を転がり、うづくまる巨人を眺める。8本あったHPバーは残り1本を切っている。

巨人が剣を手に立ち上がると同時に、セツナは両手の刃を構え懐に飛び込む。剣と鞘を一瞬の隙もなく降り続け、腹筋が割れた腹に次々とダメージエフェクトを刻んでいく。

疑似二刀流最上位剣技《帝釈天剣舞》たいしゃくてんけんぶ。太極拳の演武のごとく、視認することすらも困難な高速剣戟が繰り広げられる。連続する衝突音

と迸る閃光。斬る度に散る火花で目がくらみそうになる。だがシステムによつて動かされた体は止まることなく斬撃を浴びせていく。

26 撃目、2本の刃をクロスに薙いだ。最後の1撃で巨人のHPが消滅し、断末魔の雄叫びをあげる美麗な顔面が爆散した。部屋中にポリゴンの欠片が降り注ぎ、目の前にリザルトメニューが表示される。だがセツナのレベルは上限である100に達した。スキルロットにあるものも全て完全習得した。セツナのアバターは剣士として完成している。もう鍛える必要はない。

剣を納めハイポーションを飲み干す。ゆつくりとHPが回復し始めたのを確認し、セツナは次の層、最上層へと続く扉へと歩き出す。後に続く足音はない。セツナひとりだけの足音が主を失ったボスの間に反響している。でも寂しさはなかった。

この世界で消えた1万人近くの死者達。彼等が背後に歩いていて、睨まれ、ときには見守られているかのような視線を感じる。

これが死を背負うということか。そんな感慨めいたものを覚えながら、セツナは歩き続けた。背後に死者達の影を感じながら。

◆
?

アスナはリビングのソファに腰掛け、窓から見える景色を眺めていた。今日は良い天気だ。森の中から小鳥達が飛び去っていく。

今日の夕飯のメニューを考えるも、なかなか決まらない。リズムベツトかシリカに相談でもしようと思ったが、家にはアスナひとりだけだ。何故かメッセージも送れない。いつの間にかフレンドリストから彼女らの名前が消えていたのだ。彼女達だけでなく、アスナのフレンドリストには名前がひとつもない。おかしい。システムにエラーでも生じたのだろうか。

おかしいといえば、今朝のキリトも様子が変わった。口数が少ないのはいつものことだけど、朝食を食べている間、彼は一言も発することがなかった。いつもは早く食べ終わってしまうのに、今朝はゆつくりと味わうようにパンとスクランブルエッグとサラダを食べていた。味わってくれるのは嬉しい。でも素直に喜ぶことができない。

そしてあの目だ。家を出ていくときに一瞬だけ見せた悲しそうな目。どうしてあんな顔をしていたんだろう。必ず帰ってくると言っていたのに。

そういえば、今朝のキリトは剣を腰に吊っていた。いつもは肩に吊っているのに。背も少し伸びた気がする。髪や目の色はカスタマイズできても、身長まで容姿をいじることができないはずなのに。嫌な予感がする。彼はキリトなのか。不安は急速に膨れ上がっていく。

いや、とアスナは首を振る。髪を振り乱したせいで、束が数本だけ唇に貼り付いた。

「あれはキリト君よ。そうに決まってるじゃない……………」

そう自分に語りかけ、アスナは階段を上り寝室に入る。

キリトと結婚してこの家に住み始めてからの思い出は、写真として壁のコルクボードに残してある。写真のなかにいるのは紛れもなくキリトだ。アスナが愛した夫。斜に構えて飄々としているけど、寝顔はとても無邪気な愛おしい彼とこの家でずっと暮らしてきた。

ここ数ヶ月は撮った記憶がないけど、それは彼が攻略に忙しく休む暇がなかったから。キリトはアスナを現実へ還すために危険な戦場へ赴いている。今朝だつてそうだ。アスナのために、攻略組の仲間達と共に迷宮区へ入ったはずだ。

そうだ、とアスナは思い出す。結婚しているアスナならキリトのステータスを自由に見られるはず。アスナはメインウィンドウを呼び出す。そこに映し出された事実息を飲む。

メニューで閲覧できるはずの、配偶者であるキリトのステータスがなかった。表示されているのはアスナのものだけ。唐突に、いつものか分からない記憶が脳裏によぎる。

「死ぬつもりじゃ……………ないんだよね……………」

「ああ。必ず勝つ。勝つてこの世界を終わらせる」

その記憶が何なのかアスナには思い出せない。どうしてキリトは辛そうに笑みを見せていたのだろう。どうして彼の背後にはヒースクリフが立っていたのだろう。

何故か涙が止まらない。キリトは生きて、アスナと今日まで一緒に過ごしてきたはずなのに。何も悲しいことなんてない。

「キリト君は生きてる……。今日も絶対に帰ってきてくれる……。……」

アスナはコルクボードの写真を一枚ずつ見ていく。夫婦で共有した思い出。幸せな時間。ボードの右端。あまり目立たない場所に見覚えのない写真があることに気付く。

写っているのはキリトでもアスナでもない。アスナと同年代くらいの幼さが残る男女が、肩を寄せ合って微笑んでいる。

「あなたは……。誰……。？」

アスナは写真のなかで笑う彼に問いかける。当然、写真は何も答えられなかった。

？

長い階段の先に、四角く切り取られた光が見える。開け放たれた出口から風が入り込んできて髪とコートの裾がなびく。ようやく階段を上り終えて、セツナはアインクラッド最後の層へと足を踏み出す。

第100層はこれまでの階層で一番狭い。街もフィールドも迷宮も存在しない。ただ一直線に石畳の通路が伸び、その先には血を被ったように紅く塗り上げられた城がそびえ立っている。

ラストダンジョン、（とうぎよやくきゆう）紅玉宮。

そこに最後のボスがいる。SAOプレイヤーが目指してきた最終目的。プレイヤーとして血盟騎士団を率いてきたヒースクリフ。SAOの開発者であり、ゲームマスターとしてこのデスゲームを始めた、（かやばあきひこ）茅場昌彦が。

セツナはゆっくりと歩き出す。最上層は天井がなく、見渡す限りの空が広がっている。よく晴れた雲ひとつない蒼穹だ。空を美しいと思ったのは久しぶりかもしれない。

「よお、セツナ！」

紅玉宮までの道で、セツナの耳に聞き慣れた声が入り込んでくる。声だけでなく、目の前には頭にバンダナを巻いた武士然とした男の姿が見える。彼だけではない。セツナの行く先には他に何人もセツナ

を待つように立っている。全員見覚えがある。

決してあり得ないことだ。だがセツナはこの不可思議な現象を受け入れる。

「まったく無茶しやがってよお。でもお前えは大した奴だぜ」

クライン。殺伐としたデスゲームで、自分のことよりも他人のことばかり心配していたな。そんなあんたに惹かれた者は多かつたはずだ。済まない。あんたも、あんたの仲間も、守ることができなかった。「お前は俺達の死を背負ってここに来たんだ。いいか、絶対にしくじるんじやねえぞ」

エギル。あんたの言葉は重くのしかかってきた。でもあんたは、結局は俺に力を貸してくれたな。あんたの助けがなかったら、絶対にここまで来られなかった。

「ほんと、あんたって勝手なくせしてあたし達がいないと何にもできないいわね」

リズベット。その通りだ。俺は1人では何もできない。あんたの鍛えた武器は大きな助けになった。丹精込めて作ってくれた剣を殺人なんかに使って、本当に済まなかった。

「セツナさん、あたしは信じてました。セツナさんならできるって」
シリカ。幼いのに、よく着いてきてくれた。足手まといと思っていたが、お前は本当に芯が強い戦士だったよ。ピナ。流星はお前が選んだ主人だ。

「お前さんのお陰でネタをたっぷり仕入れることができたヨ。結構面白かつタ」

アルゴ。あんたには世話になりっぱなしだったな。いつか礼をするつもりだったが、とうとうできなかつた。でもどうせ、あんたは「いないヨ」って笑い飛ばすんだろな。

「ありがとう。俺の大切な人を守ってくれて」

キリト。……済まない。俺では彼女を本当の意味で救ってやることはできないのかもしれない。それでも俺は戦う。戦うことしか、俺が彼女にしてやれることはない。

一步一步。石畳を踏みしめるセツナの隣で彼女が歩いている。

ずっと会いたいと願っていたはずなのに、いざそのときが訪れても思考は乱れることなく冷静だった。

「私との約束、覚えてる？」

「忘れるわけがない。お前のことを忘れる日なんて、一度も」

約束を交わしたのはもう2年以上も前だということを出す。すっかり時間が経ってしまった。でも、1日も忘れたことはない。セツナにとって約束とは、彼女が消えた日から呪いへと変わってしまった。

「ずっと傍にいと約束したのに、俺はお前の傍にいてやれなかった。でも、俺の心のなかにはいつもお前がいた。お前が、俺の傍にいてくれた」

ふっ、とセツナは笑みを零す。

「どうしてかな。ずっとお前のために戦ってきたはずなのに、今の俺は別の女のために戦おうとしている。お前以外は何もかもどうでもよかったのに」

自分の行動は矛盾している。全ては彼女のために。そう思っているながらも、自分のやってきたことがただ罪を重ねていくだけの無意味なものだとセツナは理解している。理解しておきながら、これまで突き付けられた真実から目を背け続けていたのだ。

でも、今は素直に受け入れることができる。矛盾も。無意味さも。

「分かっていたさ。いくら殺しても、いくら救っても、お前が生き返るわけじゃない。俺は俺のエゴのため、自分勝手に理由を付けていただけ。これは、その罰なのかな。足掻き続けて、足掻く度に地獄に突き落とされて、しまいにはお前を裏切ったことに苦しんでいる。全部自業自得なのに」

隣にいる彼女を見やる。彼女は照れ臭そうに俯き、慈愛に満ちた琥珀色の瞳をセツナに向けた。

「優しいね、刹那は。そうやって悩んでばかりなところ、全然変わっていない。でもね、私はそんな刹那だから愛していたの。今でも愛してる」

セツナは知っている。隣にいる彼女は幻で、彼女の言葉も幻にすぎ

ないと。幻と知っていても、彼女の言葉を聞いて初めて、そして確信へと至ることができる。

何もかも遅すぎた。

彼女を失い。

多くの人間を殺し。

多くの罪を犯し。

途方もない死を背負い。

自分さえも殺した末に。

セツナは、早速刹那は確信する。

「俺もだ。愛してる、波絵」

その言葉に迷いがなくなるまでどれほどの月日をかけてしまったのだろう。

最初から何も変わっていないなかった。

たとえ復讐に身を落としても。

違う人のために戦おうとしても。

在りし日も。

亡き今も。

波絵を愛している。

ただ、それだけのことだったのだ。

気付くと、波絵の姿は消えていた。寂しさはあるが、もう迷いはない。気持ちは空のように晴れやかだ。やがて一本道が終わり両扉の前に立つ。

自分の背を優に超す荘厳な両扉を押し開け、セツナは城へと足を踏み入れる。

紅玉宮は外見とは裏腹にかなりシンプルな間取りだ。城がダンジョンとしての役割を果たしているのだとばかり思っていたが、狭い通路も部屋へ繋がる扉も用意されず、ロビーがそのまま玉座の間として広がっている。玉座の間は奥の一面が全面ガラス張りになっていて、太陽の光を部屋のなかへ迎え入れている。血盟騎士団本部の会議室みたいだ。そのガラスを背にした豪華な装飾が施された玉座に、彼は腰かけていた。

真紅の鎧に身を包み、右手に剣を、左手に盾を携えた、灰色の髪と真鍮色の目をしたヒースクリフが。

「よくぞここまで辿り着いた」

かつてのように、ヒースクリフは笑みを浮かべてセツナを歓迎する。セツナはヒースクリフの顔に焦点を合わせる。彼の頭上にはボスである証拠としてレッドのカーソルと《The Health cliff》というフォントが表示されている。

「君は総合的に見れば彼に劣るが、対人での戦いに関しては最強の腕を持つている。だから、彼亡き後でここに来るのは君だと思つていたよ。流石は、私が見込んだだけのことはある」

かやばあきひこ
「茅場昌彦」

セツナはヒースクリフの本当の名を呼んだ。元血盟騎士団の団長ではなく、最終ボスとしてもなく、そのアバターを操る者に尋ねた。

「何故俺に疑似二刀流を与えた」

セツナの言葉にヒースクリフは苦笑する。

「せつかくの雰囲気台無しだな」

口では不満を漏らしていても、それでも今の彼はどこか嬉しそうに見える。

「この城で魔王である私と戦う勇者は彼だと思つていた。万が一彼に死なれてしまつては、私は楽しむことができない。だが彼に不死属性を与えてプレイヤー間の均衡を乱すこともできない。だから保険を掛けさせてもらった。君にも二刀流を授けることだね」

ヒースクリフの瞳には光が宿っている。彼は間違いなく、この場面をゲームのクライマックスとして楽しんでいる。セツナの《疑似二刀流》はこの時のために与えられたものなのだろう。《疑似二刀流》だけじゃない。

賊狩りに明け暮れていたセツナを拾つたのも、セツナにオレンジプレイヤーの暗殺を命じていたのも、セツナをトッププレイヤーに育て上げたのも、全てはこの時のため。セツナがゾディアークを殺すことを目的に生きてきたのと同じように、彼も自分に立ち向かう者を迎え入れるために、この世界で生きてきたのだ。

ただ手のひらで踊らされていただけ。傍から見ればそれだけかもしれない。

セツナはその事実を肯定する。しかしそれに気付いていたとしても、セツナの行動は何も変わらなかつたと断言できる。セツナを選択肢は始めから決まっていた。その選択がヒースクリフに、茅場昌彦かやばあきひこにとって都合が良かったただけだ。

「だが」

ヒースクリフの瞳が一瞬だけ陰りを帯びる。

「どうしても腑に落ちないことがある。目的を果たした君がなぜここまで来たのか。君のことだ。ただ現実に戻りたいという理由ではないだろう。なぜ彼女を救おうとする？」

ヒースクリフの視線は真つ直ぐとセツナに向けられている。セツナもその真鍮色の瞳に視線を固定する。あの少年もそうしただろうと思ひながら。

セツナと似た雰囲気を纏いながらも、セツナでは決してできなかったことを成し遂げられたはずの、あの黒の剣士と同じように。

そしてセツナは答える。

「多分、あいつと同じ理由だ」

ヒースクリフは「ほお」とまた笑みを零す。セツナの言動ひとつひとつが彼を楽しませるための前座に思える。別に構わない。相手が何を感じていようと、セツナが目標と定めた者にすることはただひとつだけなのだから。

殺す。

そのシンプルで、純粋な殺意を込めてセツナはヒースクリフを睨む。ヒースクリフはその殺意を受け止めるべく、玉座から重い腰を上げる。

セツナはハーデイスクラウンを鞘に納めたまま大理石の床に突き立てた。右手で柄を握り、ゆつくりと紅色の剣を抜く。そして左手で鞘を握り、大理石の床から引き抜いて2本目の剣として構える。

ヒースクリフも剣を抜く。これまで見たことがない嬉々とした表情をしている。邪なものを感じない、ゲームを心ゆくまで楽しむ子供

のようだ。

「やはり君は面白いな、セツナ君。君の物語を書きたいと思うほどだ。最強と呼ぶに相応しい力を持ちながらも決して英雄になることはなく、その力も愛する者を失わなければ決して得ることがなかった、真の悲劇の主人公の物語だ」

何てつまらない物語だろうと、セツナは嘲笑する。これがそんな下らない創作の産物だったらどんなに良いかと思う。

主人公というものは、物語の読者に勇気と希望を与えるものだ。セツナは他者からそれらを奪ってきた。ヒースクリフはまるでセツナが悲劇に翻弄されたかのように言うが、むしろセツナは悲劇をもたらした側だろう。

これは得るものの代償として全てを滅ぼした、愚かな少年の物語。その根底にあるものに復讐という言葉はあまりにも稚拙で、愛という言葉は美しすぎる。

これは、そんな物語だ。

◆

?
目蓋を透過して届くおぼろげな光を感じて、結城明日奈は目を覚ました。

眩しい光が視界を白く覆い尽くし思わず目を閉じる。再びゆつくりと目蓋を開けると、やがて目が慣れて黒のパネル張りの天井を映し出す。

明日奈は困惑する。明らかに家の自室ではなかったからだ。どうして知らない天井の下で眠っていたのか。状況を把握すべく、明日奈は頭を持ち上げようと試みる。でも頭はびくともしない。まるで頭自体が鉄球になってしまったかのようなようだ。それが「力が入らない」という感覚であることに気付き、明日奈は眼球のみを動かして自分のいる部屋を見ようとする。

微かだが、金属を引っ掻いたような音が聞こえた気がする。左のほうだ。音の正体を探ろうと頭を数センチ動かすだけでかなりの踏み張りが必要だった。ようやく動かすことができた視界に白衣を着た

女性が入り込む。見たところ看護師らしい。ということとは、ここは病院なのか。看護師は目を見開いて明日奈を凝視している。オレンジ色の液体が詰まったパックを持つ右手が宙で静止している。更に左上を見上げると銀色の支柱があつて、そこに吊るされたパックの中心はそろそろ尽きてしまいそうで、どうやら交換しようとしてくれたらしい。

看護師は何か言っているが、明日奈にはその声が聞き取れない。聴覚がまともに機能していないらしい。自分は何かの病気なのだろうか。そんな不安がせり上がってくる。

看護師は慌てた様子でベッド横のカーテンを開けて病室から出ていった。病室は思っていたよりも広い。病室でイメージできる白亜で統一された味気ない部屋ではなく、ベージュの壁紙とマホガニーの木材に彩られた暖かみのある雰囲気だ。

頭を持ち上げてみようとするが、これがどうしても上がらない。枕に預けたまま揺り動かしてみると、どうやら何か被らされているらしい。布団の中から両手を出して感触を確かめてみようとしたが、被り物を触る前に明日奈は自分の腕を見て絶句した。まさに骨と皮だけ。太らないよう食事には気を付けてはいたが、ダイエットとしてこれほどが過ぎている。肌も透き通るように白い。まるで何年も日光を浴びていないように。

やがて先程の看護師が、ネクタイを締めたシャツの上に白衣を纏った中年の医師を連れて戻ってきた。医師は明日奈の目にペンライトを当て、胸に聴診器を当ててくる。触れられることに抵抗はあつたけど、医療行為なのだから仕方ない。それよりも、どうして自分が病院なんかにいるのか、どうして自分はこんなによせ細っているのか、その理由を聞きたかった。でも声が出せない。喉を震わせようとするけど、声帯の筋肉が麻痺したかのように動かすことができない。

看護師の支えでようやく上体を起こすことができた。でも姿勢を維持できず、補助は継続している。看護師に肩を支えられた明日奈の顎に医師は手を伸ばした。顎の下にあるハーネスを解除して、頭に覆い被さっているものがゆっくりと明日奈の頭から引き離される。

明日奈が被っていたものは、バイクにでも乗るのかと思ってしまう濃紺のヘルメットだった。後頭部のあたりからケーブルが伸びている。しかも結構な年季が入っていた。細かい傷があちこちに刻まれていて、塗装が剥がれ落ちている部分もある。医師と看護師はそのヘルメットを、まるで恐ろしいものであるかのように見つめている。

看護師に何か言ったあと、医師は部屋から出ていき、病室には明日奈と看護師1人が残された。

まだ意識がはつきりしない。自分はどれくらいの間眠っていたのだろうか。こんなに痩せて、しかも点滴で栄養を補給されていたとなると相当の期間だろう。眠りのなかで夢を見ていたような気がする。とても長く壮大な夢だ。でもどんな夢だったのか思い出せない。思いうそくとすると、黒いもやのなかへと消えてしまう。

時間の感覚すらも忘れてしまったのか、どれくらい経ったのか分からない。しばらく呆けているとドアから息を荒げた両親と兄が病室に入ってくる。

「明日奈！」

母親が涙を浮かべながら明日奈を呼ぶ。3人が来る間に、ゆっくりとだが聴覚が戻ってきた。母親だけでなく、父親と兄も涙を流していた。自分はそのなにも重病だったのだろうか。

「ああ……。明日奈、良かった……。本当に良かった……」

嗚咽を漏らしながら、母親は明日奈に抱きついてきた。のしかかっていた重みに耐え切れず、体がリクライニングを上げたベッドに沈み込む。母親は泣きじゃくったせいで流れたアイラインが頬に筋を引いている。母親が泣く姿を見たのは初めてだ。父親も鼻をすすって、兄も「ごめん」とうわごとのように呟いている。

「ごめん、明日奈……。僕のせいで……。僕があんなものを貸したから……」

どうして兄が謝るのだろうか。明日奈の知る兄はとても優秀な人だ。謝らなければならない問題を起こしたところを見たことがない。

「父……。さん。母……。さん。お兄……。ちゃん」

明日奈は掠れる声を絞り出した。これでも叫ぶ勢いで発した。

「わたし……、どれくらい……」

母親が明日奈の頭を撫でながら言う。

「あなたは3年も眠っていたのよ。本当に心配してたのよ」

3年。そんな長い期間を自分は眠っていたというのか。言われてみれば、3人とも前より痩せて、少し老けた気がする。いや、時間が経っているのは明日奈も同じだ。ということは、自分は今18歳なのか。なんてことだ。学生の貴重な時間を3年間も無駄にってしまったなんて。勉強が遅れてしまう。そうだ、手を付けていなかった数学の課題を片付けなければ。そうしないと教師に叱責されてしまう。友人達から人生の脱落者と嘲笑されてしまう。

明日奈の焦燥感をよそに、安堵の表情を浮かべた家族達は医師と看護師にお礼を言って帰っていった。仕事に戻らなければならぬらしい。

その後は簡単な検査を受けただけで、経過観察のためにもうしばらく入院する必要があること、筋力を取り戻すためにリハビリを受けることを聞いて病室へと戻った。そんなに時間が掛かることはなく、病室に戻ったのはまだ14時を過ぎた頃だった。

何もすることがなく、明日奈はぼんやりとテレビを観ていた。元々なかったものだが、退屈しのぎにと看護師が窓際の机に置いてくれた。とりあえず3年の間に何があったのか知ろうとニュース番組にチャンネルを設定した。

画面のなかで男性アナウンサーが原稿を読み上げ、画面下に文字のテロップが表示される。

『速報です。2022年11月6日の正式サービス開始と同時に1万人のプレイヤーがログアウト不可能となったオンラインゲーム、ソードアート・オンラインが、本日11時6分にクリアされました』

ソードアート・オンライン？

何だっけ。クラスの男子の間でそんなタイトルのゲームが流行っていた気がする。

『先ほど入りました、総務省SAO事件調査委員会の発表によりまずと、生存者は1名……、え……、し、失礼しました。ゲームに囚われた

被害者は全員死亡しました』

原稿を読み間違えたらしく、男性アナウンサーが深く頭を下げる。番組はソードアート・オンラインの概要説明へ移り、画面はゲームの映像へと切り替わった。空中に飛ぶ巨大な城が映し出される。

明日奈は自分の認識に疑問を抱く。何故あの建物が城だつて分かったんだらうと。何層にも積み重なったスズメバチの巣みたいなのに。

数瞬の疑問。その次に明日奈の知らないはずの出来事と感情がスナップ写真のように、脳裏に隙間なく敷き詰められていく。

そうだ、と明日奈は思い出す。

わたしは、あの城のなかにいた。あの城に閉じ込められ、戦い、親友や仲間と出会い、やがて黒衣の剣士と恋に落ち、結ばれた。

リズベット、シリカ、エギル、クライン。

そして、キリト。

明日奈が愛し、妻となり、森のなかで共に暮らした彼はどこにいたのだろう。ゲームがクリアされたのなら、キリトもどこかの病院で目を覚ましているはず。

でも、ニユースのアナウンサーは最初に生存者はひとりと言っていた。どういうことなのか。ひとりだけの生存者が明日奈なら、キリトは死んでしまったのか。

画面のなかでアナウンサーは新しく渡された原稿を読み上げる。

『ゲームのクリア条件である最終ボスは相討ちで撃破され、撃破を達成したプレイヤーも死亡したとのことです』

そんなことはない、と明日奈は強く否定する。何もかも鮮明に思い出せる。あの世界でキリトと交わした最後の言葉を。彼は帰ってくると言っていた。生きて帰るって約束してくれた。キリトが、あの強く優しい少年が負けるはずがない。

違う、と強い声が自分のなかで聞こえた気がした。明日奈は記憶を辿る。彼と過ごした最後の朝。それよりも前、最後の夜のことを。

あの夜。明日奈は寂しさからキリトを求めた。ずっと攻略が忙しくてかまってくれなかったから、子供のように甘えたくなったのだ。

でも、明日奈はキリトに拒まれた。唇が触れ合う寸前に人差し指を押し当てられた。泣きそうになった明日奈にキリトは言った。

「ごめんアスナ。明日も攻略でき、しかもダンジョンにかなり手こずったんだ。ボスも厄介だと思う。悪いけど、今日は寝かせてくれな
いかな」

肩を落とした明日奈にキリトは優しく微笑んでくれた。記憶にあるキリトの顔。鮮明に覚えているはずなのに、何故か彼の顔がおぼろげではつきりしない。

「大丈夫、死にはしないさ。約束する」

キリトの顔が影に覆われていく。影は顔の中心で渦巻き、その造形が次第に作り変えられていく。顔が見えない。声も変わっていく。

「アスナの待っているこの家に、絶対に帰ってくるから、な」

顔を覆っていた影が消えた。宵闇のなかで、キリトではない少年が明日奈にぎこちない微笑みを向けていた。

そうだ、彼だ。

明日奈をあの世界から還してくれたのは、キリトではなく彼だったのだ。

キリトと同じ黒いコートを着て、キリトと同じ黒い髪の少年。

とても強く、とても悲しかった人。

誰よりも罪を抱え、愛を知っていた人。

今なら思い出せる。

彼の顔。

彼の声。

彼の名は――

「せ……………つ……………な」

明日奈の両眼から涙が零れる。涙は止まることなく頬を伝い、顎から落ちて診察衣を濡らし続ける。

明日奈は反芻した。

忘れないと誓った。

でも、一度は忘れてしまった。

そして再び、今度こそ決して忘れないと誓うその名前を。

「セツナ……」

モノローグ

昇る朝日がガラス張りの紅玉宮こうぎよくきゅうのロビーに射し込んでくる。時間が経つとやがて陽は落ちて代わりに月が昇る。月も部屋に太陽ほど強くないが光を注いでくる。

日光の力強さにも月光の儂さにも感慨を覚える暇もなく、俺は剣を振り続ける。この部屋で戦いを始めてどれくらいの日数が経ったのか、数える余裕もない。3日だった気がするし、10日だった気もする。

ヒースクリフの剣が横に弧を描く。円弧の僅か数ミリ外へと上半身を引いた俺の首元に危うく鋭い刀身が触れそうになる。振り切った奴の剣が宙を踊るところを見逃さず、俺は奴の顔面目掛けて剣を突き出す。だがすかさずヒースクリフは盾を眼前に構え阻む。続けて鞘も突き出したい衝動に駆られるが、それを抑えて代わりとして盾に蹴りを入れる。反動で俺の体は後方へ跳び、十分に間合いを取ったところに着地する。

一瞬だけ自分のHPを見ると半分近くにまで減っている。まともに攻撃を受けた記憶はない。奴の攻撃は全て防いだつもりだが、どうやら僅かに体の節々を掠められていたらしい。

ポーチからハイポーションを取り出すと、ヒースクリフは床を蹴って間合いを詰めてきた。しっかりと盾を前に掲げて。俺は跳躍して壁一面に張られたガラスを走る。走りながら小瓶の中身を飲み込んで、HPが全快するのも待たずにガラスを蹴ってヒースクリフへと斜めに高速落下する。左手の鞘は真っ直ぐに奴へと伸びていったが、当然といわんばかりに盾に弾かれる。

そう、当然だ。だから俺は、重力に従って床へ流れる俺の背中に奴が的確な1撃を与えてくるだろうと予想していた。奴がどう動くかも視認せず、俺は宙で体を反転させて右手の剣でガードの構えを取った。予想通り、ヒースクリフの長剣が俺の剣と交差し金属同士の衝突音と火花を散らす。剣の奥にあるヒースクリフが笑ったような気がした。重力に加わる剣戟の衝撃で、俺の体は一気に床を転がる。しっ

かりと受け身を取り、すぐに立ち上がり殺すべき敵を睨む。

「素晴らしいな。人間を相手に戦うノウハウをしつかりと心得ている」

「あんたのおかげで身に着けたものだ。皮肉だな。自分が与えた力で殺しにこられるなんて」

「元々そのために血盟騎士団を結成し、彼に二刀流を与えたのだ。飼いや犬に手を噛まれたなんて憤るつもりはないよ。むしろ私はこの状況がこれまでの人生で最も楽しい。既に我々が戦いを始めて丁度ひと月が経とうとしている頃だ。だが飽きることはない。激しい空腹も喉の渇きもあるが、それ以上に時間が経つにつれて更に楽しさが増していく」

ひと月。隙を突かれて攻撃されるのではないかと確認はしていないが、それほど時間が経っていたとは。そう思うと一気に空腹が襲ってきた。続けて疲労と眠気が。この疲労感が奴の狙いなら性格が悪すぎる。奴も俺と同じ状態のはずなのに、そんな様子はおくびにも出していない。管理者権限のオーバーアシストでも使っているのか。いや、そんなことはないはずだ。この状況をゲームのクライマックスとして待ちわびたヒースクリフが、そんな興が醒めることをするわけがない。

「謝罪しよう、セツナ君。君をキリト君の代替としていた。だが君は私の予想を超えてくれた。これほどの時間が経っても屈しない精神力。君は紛れもなく、私と剣を交えるに相応しい勇者だ」

血盟騎士団の団長だった頃と同じ真紅の鎧で身を固める魔王の瞳を見て、俺はぞつとした。これまで見てきた殺人鬼に見られる狂気じみた光が全くないのだ。この男は自分の享樂に1万人を巻き込み、彼等の慟哭と死を見届けていながら完全に正気を保っているのだ。

彼等を殺したのは俺だ。その認識は変わらない。ナーヴギアに仕組まれた死の技巧。起動条件であるHPゼロへと導いてきたのは紛れもなく俺だ。だが、この世界での死の定義を創り上げたのは奴だ。

ゲームで死んだら現実でも死ぬようにしたいな。
どうすればその仕組みを作れるだろう。

そうだ、ナーヴギアの出力を上げよう。

そうすれば電子レンジのように、マイクロウエーブで脳に内側からしっかりと熱を入れてチンすることができる。

そのためには大容量のバッテリーセルを搭載しなければ。

そうそう、確実に脳を焼けるようハードの形状も頭をすっぽり覆うようにしなければ。

この男はそんなことを正気のまま思考し、遂には実行へと移した。自分の行動がどれだけの死を背負い、どれだけの死者に睨まれるかを自覚したままやり遂げたのだ。

ふざけるな、なんて正義の味方じみた怒りを俺は見つけ出すことができない。俺にそんな怒りを持つ資格はない。たとえば世界の仕組みを構築したのが奴でも、仮想世界のなかで死への誘いを発動させた俺も奴と同じ殺人者だ。

奴は罪悪の重圧を感じているのか。俺は疑問を抱かずにはいられない。200以上の命を奪い、奴に導かれ生き残った4千近くを死へと至らせた俺は今にも壊れてしまいそうだ。それなのに、奴は1万人近くの死を設計したにも関わらず、それでも俺との戦いを楽しんでいる。

俺はおそろおそろヒースクリフのHPバーに焦点を合わせる。10本あった命のゲージは残り3本にまで減っている。余裕があるとは言いがたいのに、奴は焦りなど微塵も見せない。最終ボスとしての威厳なのか。それとも奴の《神聖剣》にはまだ切り札があるのか。

「さて、セツナ君。私も余裕がなくなってきた。そろそろ決着をつけさせてもらおう。空腹もそろそろ限界だ」

控え目に笑うヒースクリフの表情が冷ややかなものへと変わる。ゲームとは本気でやるから楽しいのだと、ゲーマーのクラスメートが言っていた。その言葉の通り、奴は本気で俺を殺しにかかるつもりだ。

盾を掲げてヒースクリフが駆け出す。馬鹿正直に真正面から攻撃を仕掛けたところで防御されるのは目に見えている。ましてやここでソードスキルなんて自殺行為だ。たとえば最強の《帝釈天剣舞》たいしゃくてんけんぶを繰

り出したところで、奴には俺の動きが手に取るように分かるはずだ。ヒースクリフが剣を後ろへと引いた。恐らく突進技を放つのだろう。俺は奴の脚を見る。前へ前へと俺目掛けて走ってくる奴の脚がブレーキをかける瞬間、それを見逃さなかった。

俺は地面を滑った。直後、俺の顔があつた宙をヒースクリフの剣が斬る。空気が揺れる音を聞き取りながら、俺は体術回避技《スライドターン》で奴の背後に回った。大理石の床に俺の足によって描かれた弧のエフェクトが貼り付いている。俺は両手の刃を奴の背中へと振り下ろす。だが俺の攻撃はあつさりと防がれた。奴は俺に背を向けながら左手の盾を背中へと回した。心臓を攻撃されると分かっていたらしい。俺がPK技術を習得していることを知っているのなら的確な判断だ。

十字盾の中心に叩き付けられたハーデイスクラウンは火花を散らし、悲鳴に似た衝突音をあげて紅の刀身が折れた。1ヶ月にも及ぶ死闘の末、とうとう限界が来てしまったのだ。刀身の上半分が床に甲高い音を立てて落ち、直後に右手に残った下半分と共にポリゴンの欠片を散らしていく。相棒を失った感傷に浸る間も与えずヒースクリフの剣が振り下ろされる。咄嗟にかざした左手の鞘の中腹に命中してしまい、容赦なく火花を散らしてへし折られる。一応盾にも使われる金属で作ったものだが、魔王の前ではなまくらも同然ということか。リズベットに罰金を取られるな。ああ、でも彼女は死んでしまったんだ。そんな悪ふざけが過ぎたことを考えていると、耳孔にヒースクリフの勝利宣言が入り込む。

「さらばだ、セツナ君」

俺の頭上に掲げられたヒースクリフの剣が紅の光を帯びる。

俺はバックステップを取らず、左右どちらかに避けることもせず、前へと、ヒースクリフの懐へと飛び込んだ。剣を振り下ろそうとした奴の頬に拳を打ちつける。スキルモーションを妨害されたためか、奴の動きが止まった。俺は新しい剣を装備することもせず、ただ奴の顔を殴り続けた。

戦いの根源にあり突き詰めたもの。

即ち暴力。

この最後の戦いに神聖さを求めるなら、俺の戦い方はひどく野蛮で冒険的なものだ。でも人の暴力性を見てきた俺は知っている。いくら研ぎ澄まされた剣を握っても、いくら豪華な鎧を見繕っても、所詮戦いとは暴力だ。相手を殺すことを目的とし、相手が死ぬまで痛めつける野蛮なもの。

かやばあきひこ 茅場昌彦。あんたは学生時代から既にゲームデザイナーとして名を馳せていたそうだな。机で開発と研究に没頭していたのなら、学友と殴り合いの喧嘩なんてしたことないだろう。俺のいたサッカー部は血気盛んな連中が多くてな。しょっちゅうやっていたわけじゃないが、反りが合わないとか殴り合ったものだよ。お互い頬を腫らして、体中に痣を作つて、口を切つて血を吐いて、2人ともぼろぼろになる頃にはどっちが勝ったかなんてどうでもよくなった。それで喧嘩した奴とは親友になった。拳を交えて語り合うなんて、あんたみたいな頭の良い人間には猿のじゃれ合いに見えるだろうさ。どんな気分だ。猿に殴られる気分は。

奴のHPが減っていく。グリーンだったバーはイエローへ突入し、残り1本のうち半分を切った。

俺は殴りながら抗った。剣によつて生き死にが規定される世界に。システムという絶対者に。

唐突に俺の右手がイエローの光を纏った。体に染み付いた動作でスキルを発動させてしまったらしい。ヒースクリフは笑みを浮かべる。自ら設計したシステムに委ねた動き。俺は抗っておきながら無意識にシステムにすがってしまった。光を帯びた俺の拳はヒースクリフの顔面ではなく奴の盾を殴った。普通に殴るよりも速いはずなのに、奴は動かされた俺の拳がどう動くか知っていたのだ。

腹に痺れに似た感覚が走る。刺されたのか、と俺は無感情に腹に深々と刺さる刀身を見下ろす。満たされていた俺のHPがゆっくりと減少していく。痛みもないのに、これで本当に死ぬのだろうか。恐怖はない。俺に殺された者達も、いまわの際に抱いたのは恐怖ではなく疑問だったのかもしれない。

俺の思考はクリアだった。慌てて剣を抜こうと身を引くのではなく、腹に抱えたまま、右手の人差し指と中指を真つ直ぐ揃えて真下に振る。呼び出されたウィンドウを的確に素早く操作し、OKボタンを押してウィンドウを消した。腰に重みが乗る。

俺は出現したばかりの新しい剣を抜いた。解き放たれた漆黒の刃が鋭く光る。片手剣なのにかなり重い。振れないことはないが、俺の戦闘スタイルとは相性が悪い。剣を見たヒースクリフは初めて見る驚きの表情を浮かべる。

「うおおおおおああああああつ!!」

俺は吼えた。獣のように。咆哮と共に俺は黒光りするエリユシデータ突き出した。誰かが背中を押してくれたような感触と温かさがあった。俺の背後に立つ死者達か、それともこの剣の本来の持ち主か。

俺の咆哮がロビーにこだまして、まるで2人分の声に聞こえる。視えざる何かの力と共に、俺の握るエリユシデータはヒースクリフの胸を貫いた。

ヒースクリフのHPが減少してレッドゾーンに突入する。奴はそれを意に介さず、自分の胸に刺さる漆黒の刀身を見つめている。俺のHPバーは奴よりも速いペースで減っていく。

俺は剣を捻った。傷付ける内蔵は詰まっていけないが、奴のHPの減少が僅かだが加速する。

俺のHPバーの残量がヒースクリフに追いつこうとしている。先に尽きるのはどちらか。もはや俺達は剣を抜こうとせず、互いを刺したまま立ち尽くしている。

そして、ヒースクリフのHPが消滅した。一瞬遅れて俺のHPも。視界にメッセージが表示される。

[You are dead]

体の感覚が失われていく。腹に剣を抱えた痺れも、右手に握る剣の感触も。この世界における俺の存在が分解されようとしている。ヒースクリフの体が光を放っている。視界の隅にある俺の右手も光っている。ああ、死ぬんだなど、俺はようやく実感が湧いた。

目を閉じると同時に聞き慣れた破碎音が響く。ヒースクリフも砕けたのだろうか。確認しようにも、目蓋を開けたところで暗闇が広がり何も見えない。薄れていく意識のなか、無機質な合成音声が届く。

『アインクラッド標準時 11月 20日 11時 6分 ゲームはクリアされました』

最期を迎える瞬間も、俺は波絵を想い続けているだろうと思っていた。

でもこのとき俺が思い浮かべていたのは波絵ではなく、俺をキリトと呼ぶ彼女の顔だった。

このアウンズがアインクラッド全域に及んでいるなら、聞いている彼女は何を思っているのだろうか。喜んでいいのか、意味を理解できずにいるのか。聞こえていないのなら、キリトだと思っている俺のために食事の準備をして帰りを待っているのか。

もしかしたら、俺が寝室に貼った波絵との写真を見つけて困惑しているのかもしれない。だとしたら悪いことをした。でも、彼女には知ってほしかった。俺と波絵という存在がいたことを。気に入らないなら捨ててもらっても構わない。

そんなことを思っていると、張り詰めていた気持ちが不思議とやわらいだ。

◆

まだ生きている。

そう思えたのは、広がる景色があまりにも美しいからだ。もし死後に天国と地獄があるなら、俺は間違いなく地獄に落ちるはず。だから自分がある場所は一見すれば天国と呼ぶに相応しいが、本当の天国ではない。

それにしても美しい景色だ。思わず思考を止めてしまいそうなほどに。周囲のどこを見渡しても空が無限に広がっている。遥か彼方にある太陽は連なる雲を朱色に照らしている。仰げばすぐ夜空が迫っていて、昼と夜の境界はどちらにも染まりきれない紫色のグラ

デーションがかかっている。

固い床の感触が靴底にあるのだが、俺の足元に床はない。雲の切れ間からも雲が流れていて地面が見えない。ここから落下したら無限に落ち続けるのだろうか。

ふと降ろした視線の片隅、空の一点に俺がいたアインクラッドが浮かんでいる。何層にも積み重なった空飛ぶ城。現実で見たSAOの資料に載っていたものと同じ外観だ。なかにいると果てしなく巨大だったが、こうして遠くから眺めていると小さいものだなど感慨を覚える。

天空に浮かぶ城は崩壊している途中だった。まるでラピユタのように、下部のフロアから城を構成する素材が剥がれ落ちて雲海へと消えていく。

俺は試しにウィンドウを呼び出すアクションをしてみる。効果音と共にウィンドウは出現したのだが、メニューが存在せず「最終フェイズ実行中 現在54%完了」という文字だけが表示されている。ウィンドウが提示してくれるのはそれだけで、俺は窓を消す。ここは死後の世界などではなく、まだSAOのなかだ。何故か俺は崩落していく城の頂からこの空へと放り出された。

「なかなか絶景だな」

ぼんやり立ち尽くしていると不意にその声は聞こえた。右にいつの間にか男が立っている。現実で初めてSAOのことを知ったゲーム雑誌で見たことのある顔だ。白衣を着た学者然とした男は無表情のまま、崩れていくアインクラッドを眺めている。その無機質な金属じみた瞳は聖騎士ヒースクリフと同じだった。

「茅場昌彦か」

この世界の創造主。

あの城で繰り広げられた悲劇の根源。

1万人近くの人間を殺した虐殺者。

少し前までヒースクリフとしての彼に確かな殺意を抱いていたというのに、本来の姿である彼に対して湧き上がるものは何もない。

「この世界は終わるのか」

俺の質問に茅場は「そうだな」と静かに答える。

「現在、アーガス本社地下5階に設置されたSAOメインフレームの全記憶装置でデータの完全消去作業を行っている。あと10分ほどでこの世界の何もかもが消滅するだろう」

「アスナは……、どうなった」

茅場はウィンドウを呼び出す。

「彼女は先ほど無事ログアウトした。心配には及ばない」

「死んだ者達はどうなった。本当に現実でも死んだのか」

俺がそう聞くと、茅場はウィンドウを消した。逡巡も挟まず無表情のまま言う。

「死者が消えていくのはどこの世界でも一緒さ。彼等の意識は帰ってこない。君とは最後に少しだけ話をしたくて、この時間を作らせてもらった」

その事実を聞いても、俺は落胆しなかった。理解はしていた。3年という年月が経っても外部からの助けはなかった。ゲームで死んでもナーヴギアの欠陥で現実へ無事戻れたのなら、生還者と同じ方法で次々とプレイヤー達は救出されたはずだ。

茅場の作り上げた理論は完璧だった。一片の狂いも生じることなく、この世界で消えた者達は現実からも消えてしまった。

「何故こんなことをした」

俺は思わずそう聞いている。質問に怒りも悲しみも乗せてはいない。単純に気になったのだ。この天才ゲームデザイナーが、仮想世界に何を求めていたのか。

この質問の答えに茅場は逡巡を挟んだ。

「何故——、か。私も長い間忘れていたよ。何故だろうな。フルダイブ環境システムの開発を知った時——いやその遥か以前から、私はあの城を、現実世界のあらゆる枠や法則を超越した世界を創り出すことだけを欲して生きてきた。そして私は……私の世界で懸命に生き、創造主である私を超えるものを見ることができた……」

それが君だ。そう言いたげに茅場は俺に視線を向け、そして自分の創り出したインクラッドへと戻し言葉を続ける。

「子供は次から次へいろいろな夢想をするだろう。空に浮かぶ鉄の城の空想に私が取りつかれたのは何歳の頃だったかな……。その情景だけは、いつまで経っても私の中から去ろうとしなかった。年経るごとにどんどんリアルに、大きく広がっていった。この地上から飛び立つて、あの城に行きたい……。長い、長い間、それが私の唯一の欲求だった。私はね、セツナ君。まだ信じているのだよ——どこか別の世界には、本当にあの城が存在するのだと——……」

俺にはこの男の欲求が、微かだが理解できた気がした。俺は波絵と一緒にいられる世界を求めた。どこへだつていい。映画というコンテンツがない世界でも。本というメディアがない世界でも。サッカーというスポーツがない世界でも。ただ波絵と出会い、心を通わせ、結ばれるならどこでも。この男にとってそれは、あの崩れゆく城のある世界だった。

彼もまた、楽園を求めていたのだ。

「さて、セツナ君。報酬といつては何だが、君には2つの選択肢がある。1つは、このまま私の作ったシステムによって死を迎える選択。もう1つは、無事に元の世界へ還る選択。後者を選ぶなら、私は君にこれを託したい」

そう言う茅場の右手のなかで何か小さなものが輝いている。卵の形をした結晶だった。

「それは」

「これは、世界の種子だ。芽吹けば、どういうものか解る。判断は君に託そう。消去し、忘れるもよし。しかし、もし君が、この世界に憎しみ以外の感情を残しているのなら……。これを元の世界で芽吹かせ、更に種を蒔いてほしい」

俺は茅場の手のなかにある結晶を眺める。結晶は微弱ながらも力強さを感じる光を放っている。

世界の種子。

もしそれが芽を出し育てば、新しい世界が花開くのかも知れない。でも俺は、そんなものに興味はない。

俺は崩落が上層にまで及ぶインクラッドへと視線を移す。楽園

と信じたあの城は地獄だった。波絵を失い、人がどれだけ野蛮になれるかを知り、一緒に戦ってくれた仲間も次々と死んでいった。憎しみ。俺はあの城にそれ以外の感情を想起することができない。たとえ世界の種子ザ・シードによって楽園と呼ぶに相応しい世界が生まれたとしても、俺にとつてどの世界も楽園にはなれない。生まれる世界のどこにも、死んでしまった波絵はいないのだから。

考える時間なんて必要ない。答えは決まっている。

「死なせてくれ。波絵のいない世界で生きる意味は、もうない」

俺は静かに、はつきりと答えを提示する。

俺はいま、確信を持って波絵を愛していると言うことができる。

この確信は捨てたくない。

彼女を愛したセツナとして、早速刹那として死にたい。

茅場の苦笑が聞こえた気がした。

「……残念だが、君ならそう選択すると思ったよ」

「なら聞くなよ」

「もしかしたら、という期待を抱かずにはいられないよ。想定外の展開はネットワークRPGの醍醐味だ。キリト君が私の正体を見破ったのも、キリト君ではなく君が私を倒すことも、私にとっては予想以上のものだった」

俺は自然と笑みを零す。おかしなものだ。殺し合った仲だというのに、こんなに穏やかな会話をしているのは。

アインクラッドの崩壊はいよいよ終盤に差し掛かっていた。俺達が戦った紅玉宮こうぎよくきゆうは分解され底の見えない雲間へと落ちていく。アインクラッドは完全に崩壊した。浮遊城があったところには雲が流れ出し、早くも空飛ぶ城があったことなど忘却したかのように見える。

「——さて、私はそろそろ行くよ。そうだ、言い忘れていたな。ゲームクリアおめでとう、セツナ君」

何気なく無感情に発せられた茅場の言葉で、俺は自分がゲームクリアを果たしたことを思い出す。全プレイヤーの悲願だったというのに達成感らしきものはなかった。ただ、終わったんだなという哀愁が胸のなかを満たしていた。

気付けば茅場の姿が消えていた。音もなく。彼も現実で死を迎えるのだろうか。それとも、現実へ帰還するのだろうか。考えても無意味だし、どうでもいいことだ。

俺は死ぬ。生きて元の世界へ還る選択がありながら死を選んだ。後悔はない。

黄昏を映す世界は終焉へと向かっていく。空も雲海も太陽も白い光に覆われていく。それらのオブジェクトが光の粒子となって蒸発していく。消えるときは影も形も残さない。それがこの世界の絶対的なルール。そのルールを住人に提示してきたこの世界自身が消えようとしていた。

世界はいよいよその役目を終える。周囲の空間が光に呑み込まれていく。最後まで残っていた俺の体もまた、光の粒子を散らして足元から崩壊していく。

体が軽い。どこまでも飛んでいけるような気がした。この世界でも現実世界でもない、次の新しい世界へ旅立とう。霧散していく俺の欠片が一筋の道のように光の彼方へと伸びていく。この道が光へと導いてくれる。

「お別れだ」

俺は誰もいない空間でそう呟く。現実に残していった者達と現実へ還る者。両親、姉、友人達、部活の先輩と後輩達、監督、そしてアスナへさようならと告げる。

俺は一足先に逝かせてもらう。父さん。あなたの付けてくれた名前前の通り、俺の人生は刹那のように短かった。父さんが俺の名前に込めた願いがこんなものじゃなかったことは知っている。でも俺は自分の人生に後悔はない。納得して死を迎えられるのはそうないことだと思う。この気持ちを父さんと母さんと姉ちゃんに伝えられないのは残念だ。

俺の体がふわりと浮いた。自分の体を構成していた粒子の道を辿っていく。道の先にある一際まばゆい光へと進むにつれて笑い声が聞こえてくる。俺に力を貸してくれた仲間達の声だ。俺を迎えに来てくれたのか。この先にある次の世界への道中で彼等とは別れる

のかもしれない。彼等は喜びに満ちた世界へ。俺は業苦に満ちた世界へ。もし再会が叶うのなら、俺にはあんた達が見えるだろうか。分からないのであればそれでいい。また初めからやり直せばいい。犯した罪が抜け落ち、全く異なる存在になった俺なら、あんた達と友達として出会う資格を得られるだろう。

彼等の声を越えて俺は更に進む。道の先にある光のなかに少女がいる。少女のもとへと辿り着いた俺は彼女に消えかけている腕を伸ばす。

波絵、お前は俺を赦してくれるか。

俺を愛してくれるか。

波絵は穏やかに微笑み手を差し伸べる。俺の目から涙が溢れた。絶えず流れる滴が俺のなかにある穢れを洗い流していくように思える。

俺は波絵の手を掴んだ。波絵は以前と変わらず俺を受け入れてくれる。目の前の愛しい人を俺は抱きしめた。俺のなかにあるのは憎悪でも慟哭でもない。もう彼女への明瞭な愛しさしか残されていない。

愛してる。

今までも。

これからも。

たとえ世界が終わっても。

たとえ全て消えてしまっても。

ずっと。

ずっと永遠に――

すべてがその形を失い光となって空間を満たしていく。色彩を失い、線を失い、境界を失った光の中で全てが溶け合いひとつになる。

何もかもが白の光に包まれ、光が虚無へ還るなかで一粒の滴が落ちた。

永遠の宙を落下していく滴はほどなくして蒸発し、光の粒を振り撒いたのちに消えていった。

エピソード

あなたの記憶の片隅でもいいから、どうか忘れないでほしい。

私達が見ていたのは夢ではなく現実だったのだと。私達が感じていた恐怖も、怒りも、悲しみも、喜びも、快樂も、全て本物だったのだと。私達はあの世界で生きていたのだと。

これは、仮想に生きた者達の物語だ。

——結城明日奈「ソードアート・オンライン たった1人の生還者」

？

秋の冷たくも日光に温められた風が頬を撫でて過ぎ去っていく。私の人生を一変させたあの日とよく似た日和であることを、80年経った今でも鮮明に思い出せる。

「結城さん、紅葉が綺麗ですよ」

私の乗る車椅子を押してくれる女性介護士がそう言うってくる。「ええ」と私は返事をして紅と黄のコントラストを彩る木々を眺める。2世紀を迎えて機械による管理体制を敷く医療技術も進歩したが、こうした生身での会話が認知症予防に効果的とされていることから介護士という職業は未だに存在している。もつとも、齢100に近い私は物忘れこそあるものの、認知症を発症せず何とかこうして独白する術を維持することができている。

敷地内に入ったことでオーグマー^{オーグメント・リアリティ}上の拡張現実が施設の説明をしてくれる。

【SAO事件被害者追悼公園】

2022年に発生したSAO事件被害者への追悼の意を込めて建設された国定公園。敷地の中心には被害者の名前が刻印された慰霊碑が建立されている。

続けて最寄り駅へのアクセスと近くの飲食店の情報が立て続けに飛び込んでくる。あまりにもやかましいから、私は拡張現実の展開をオフに設定する。

「申し訳ないけど、しばらくひとりしてくれないかしら？」

「え、大丈夫ですか？」

「何かあったら、オーグマーが知らせてくれるわ」

私の体には健康監視システムが入れられている。今のご時世、60歳を越えるとナノマシンによる健康管理が一般的だ。介護施設に入所すれば、職員のオーグマーに体調の変化がすぐに送信される。「分かりました。あまり遠くに行っちゃ駄目ですよ」

「ええ、分かっているわ」

介護士が去っていくと、私はオーグマーを通じて車椅子に「前進」と指示する。車椅子の車輪がゆっくりと回り始め、整備された公園の道を進んでいく。

しばらく進んだところで巨大な長方形の石碑が建っている。心なしか、黒鉄宮にあった生命の碑によく似ている。オーグマーの視覚補正で刻印された名前は見えるが、本名で綴られているため仮想世界でどんな名前だったかは分からない。

あれから80年が経とうとしている。

悪夢のデスゲーム、ソードアース・オンラインがクリアされから。

◆
？

病院であの世界のことを思い出した後、私はずっと罪悪感に打ちひしがれていた。病室のベッドで何日も泣いていた。

どうして自分が生きてしまったのだろう。

彼を救いたかった。

なのに、自分が救われてしまった。

でも、私はいつまでも泣くことはなかった。生きなければ、と思っただからだ。あの世界で生きた人々の死を、ただの悲劇で終わらせるわけにはいかないと思った。その想いは現実での出会いで更に強くなった。

殺人の罪に苦しんでいた朝田詩乃^{あさだしの}。

病と闘った紺野木綿季^{こんのゆうき}。

詩乃とは、私が入院していた病院の精神科で出会った。3年間を仮

想世界で過ごした私は精神と身体の齟齬が生じていたためにカウンセリングを義務付けられていた。年の近い私達だが、詩乃がなかなか心を開いてくれなかったこともあって親交を深めるのに時間を要した。

それは仕方のないことだった。詩乃は学校でいじめを受けていたから、他人に対して疑心暗鬼になっていた。でも、少しずつだけ心を開いてくれた詩乃は自分が脆くなってしまった理由を、抱える罪を打ち明けてくれた。

詩乃には殺人の経験があった。望んだものではなく、不可抗力だ。幼い頃、強盗事件に巻き込まれ、母親を守るために犯人から銃を奪い撃ってしまったらしい。それは仕方のないことだ。周囲にいたはずの大人ではなく、何故幼い彼女が手を下さなければならなかったのかと怒りさえ覚えた。

でも詩乃は、自分を苦しめている過去を私に話してくれた。だから私も自分の過去と罪を打ち明けた。私がSAO唯一の生還者であること。私が救いたかった少年に救われたこと。

最初こそ詩乃は疑っていた。それもそのはずだ。総務省はSAOプレイヤーが全員死亡したと公表した。唯一の生還者である私が被害者遺族から理不尽な憎悪を向けられないという配慮だった。

自らの苦悩を話すことはとても勇気がいるものだ。詩乃も最大の勇気を出してくれたし、そのことを彼女自身が何よりも理解していた。だから、詩乃は私の話を信じてくれた。そうして私達は親友になった。

彼女は罰せられることを望んでいたのかもしれない。でも私は、彼女のおかげで救われた命もあるはずだと思った。だから、私は実家に頼んで彼女が巻き込まれた事件現場にいた人を探してもらった。詩乃に会ってくれたのは、事件現場の郵便局で働いていた女性と、彼女が当時身籠っていた娘だった。

「明日奈のおかげで、わたしは少しずつだけ前に進もうと思えるんだ。明日奈が教えてくれたんだよ。この世界は、本当は優しく、温かいんだって」

2人と対面を果たした詩乃は私にそう言ってくれた。でも、私に感謝の言葉を受け取る資格があるとはどうしても思えない。私がしたことは下手をすれば詩乃を更に苦しめかねないものだったし、純粋に詩乃のためを想ってしたわけでもない。それでも詩乃はそれから、私と生涯を通じて親友でいてくれた。

そしてもうひとり。私の生き方を決めさせてくれた少女のことも忘れてはならない。

紺野木綿季と出会ったのもまた病院で、私がリハビリを受けていた時期だった。木綿季とは患者同士の交流会で知り合った。とはいっても、木綿季はPC画面越しでの参加だったが。

彼女はメデイキュボイドという世界初の医療用VRマシンの被験者だった。出会ったばかりの頃、木綿季にはあまり笑わない女の子という印象を抱いた。それはHIVに感染した故の悲壮というわけではなく、以前入院していた横浜の病院に置いていった、双子の姉の死だった。

病でやせ細り、ただ死を待つだけの幼い彼女を私は放っておくことができなかった。私は木綿季の病室を尋ねて、時には詩乃も交えて話をした。彼女自身は無菌室から出られないから仮想空間越しの会話だったけど、それでも少しずつ、木綿季は私と詩乃に笑顔を見せてくれるようになった。とても無邪気な笑顔だ。それを見ただけで、本来はよく笑う女の子だということがよく分かった。

木綿季もまた、罪の意識を抱えていた。メデイキュボイドは世界に1台しかなく、木綿季と同じ病に侵された彼女の姉は自分が病と薬の副作用で苦しむことを承知で、妹にメデイキュボイドを譲ったらしい。機器を運用する設備の都合で私が入院していた病院に移って間もなく、木綿季の姉は亡くなったらしい。木綿季は姉の最期を看取ることができなかったと気に病んでいた。同時に、彼女は自分がメデイキュボイドを横取りしたせいで姉が死んだと苦悩していた。

でも私は、木綿季の姉は妹にそんな苦悩を抱えさせるためにメデイキュボイドを譲ったとは思えなかった。誰かのために自分の命を投げ出そうとする者が呪縛を残すはずがない。願望に近いけど、私はそ

う木綿季に伝えた。

私の言葉で木綿季の罪悪感を消すことはできない。でも、少しでも軽くはできたらいい。だから彼女は屈託のない笑顔を取り戻したのだと、私は信じていた。

私と詩乃と木綿季の交流は4ヶ月続いたけど、やがて木綿季の容態が悪化した。私と出会った頃から既に危うい状況だったらしい。木綿季はとても頑張った。生まれてから15年もの間、ずっと病と闘い続けてきたのだ。最期の時だけ、私と詩乃は木綿季のいる無菌室への立ち入りを許可された。

「明日奈、詩乃。ぼく、頑張って生きた。何も生み出せず、与えることもせず、死ぬために生まれてきた命でも、生きてる意味があった。明日奈と詩乃に会えて……、良かった。ありがとう……。」

それが、木綿季の最期の言葉だった。仮想空間越しではなく、生身の彼女自身から発せられた声だった。話すことも辛かったはずなのに、彼女は力を振り絞り私と詩乃に言ってくれた。私が抱きしめると、木綿季は笑顔のまま眠り、息を引き取った。

木綿季の死を経て、SAOの犠牲者達のために何かしようという決意が確固なものになった気がする。でも、私はすぐに行動することができなかつた。行動を起こすのに私はまだ子供で、知るべきことが多かつたから。

私は退院した後、両親の言いつけ通り家で通信教育を受ける日々を送った。両親は住まいを別の街に移し、私が幼い頃から働いている家政婦も解雇されていた。私を世間の目から隠す目的だったのだろう。親族や親しい知人は私がSAOに囚われていたことを知っているはずだし、全員死亡と報道された被害者の私はそう簡単に外出許可を得ることができなかつた。家族も随分身辺に変化があった。

父親はレクトの代表取締役を辞任していた。私がSAOにいる間、SAOを運営していたアーガスは莫大な負債を抱えて解散し、事後処理とSAOサーバーの管理はレクトに委託されていた。そのレクトの子会社であるレクト・プログレスが「アルヴヘイム・オンライン」という新しいVRMMOを運営していたのだが、父親の部下である

須郷伸之すじょうのぶゆきが子会社の社員を使って非人道的な実験を行っていた。フルダイブ技術による洗脳という邪悪な実験は被験者の死亡という事態によって外部に知られることになり、主導者である須郷は逮捕され、レクト・プログレスは解散。レクト本社も父親を含める経営陣が辞任するほどの大打撃を受けた。無論、運営していたアルヴ Heim・オンラインもサービス終了に追い込まれたという。

家に隠されていた私のもとには頻繁に客人が尋ねてきた。SAO 事件発生後すぐに発足した「総務省 SAO 事件調査委員会」の役人を名乗る男性だった。唯一の生還者である私から SAO で何が起こったのか聞き出したかったのだろうけど、生憎私にもあの世界での出来事全てを把握することはできていない。私が攻略の前線にいたのはデスゲーム開始からの2年間で、残りの1年は家にこもって最愛の夫が生きているという妄想に取りつかれていたのだから。

でも私の体験は彼にとってはかなりの収穫だったらしい。回収されたナーヴギアのデータ解析は不可能ではないが、1万という数のプレイヤーデータを読み解くには膨大な時間を必要とする。知っている限りのことを話した私は、聴取を担当した役人の菊岡さんにも情報提供を求めた。まず私が知りたかったのは、あのデスゲームを始めた茅場昌彦かやばあきひこがどうなったのか。

結論から述べると、茅場は死んだ。それが発覚したのはゲームがクリアされてから3ヶ月が経った頃、茅場の協力者を名乗る女性が警察に自首してきたことで捜査が劇的に進展を遂げた。

ヒースクリフとしてプレイヤーを監視していた茅場は現実では行方をくらまし、長野県の人里離れた森の山荘に潜伏していたという。腐乱した彼の遺体と共に発見されたナーヴギアを解析したところ、彼の機器には他のプレイヤーに仕掛けられていた電磁波発生装置はなく、自由にログアウトできる状況にあつたらしい。でも、彼の死亡推定時刻はゲームがクリアされた2025年の11月20日とされた。

その最期も不可思議なものだった。彼はナーヴギアを改造して作成した機械で自分の脳に超高出力のスキヤニングを行い、脳を焼き切った。記憶と思考といった大脳の電気信号を全てデジタルコード

に置き換えネットワークに存在することを目論んでの死だったのだが、狂気以外に言葉が見つからない。世間の反応も私と似たようなもので、茅場の死は自殺と処理された。

1万人の死者を出したゲームと首謀者の自殺。更にVR技術による実験と致命的なスキヤンダルが立て続けに起こったことから、他にも展開されていたVRMMOは全て運営中止になった。安全性が保障されたVRマシンの開発でイメージの払拭を試みる企業もあったが、批判的な世論は覆ることなく、黎明期^{れいめいき}を迎えていたVR事業は全盛期へ入ることなく衰退した。

その変遷を家のなかで過ごした私は、高校までの教育課程を修めるとアメリカの大学へ進学した。SAO事件から2年以上が経つても事後処理は完璧とはいかず、アーガスに命じられた被害者遺族への賠償も未払いという事態が発生していた。留学もまた両親の意向で、ほとぼりが冷めるまで私を日本から遠ざけたかったのだと思う。

大学を卒業した私は父親が取締役会長として復帰したレクトに入社した。入社後は真面目に職務をこなし、3年目で小さいながらもプロジェクトのリーダーを任されるようになった。リーダーシップが血盟騎士団の副団長だった頃に培われたものだと思うと少し複雑だが。

この頃までの私は、両親にとつてはとても「良い子」に過ごしてきたと思う。言いつけに逆らわず両親、特に母親が望んでいたエリートコースを進み出世街道にも乗っていた。でも、私自身は微塵も納得していなかった。SAOにいたという過去を隠し、詩乃以外の友人や会社の同僚には常に高校時代から海外留学していたという嘘をつき通してきた。何よりも、あの世界で過ごしてきたことを忘却しようとする自分自身が赦せなかった。

それでも私は罪悪感に耐え続けた。まだ若い私に行動を起こす力はなく、機が熟す日まで待ち、己を研磨し続けた。彼はどんな気持ちで私をこの世界へ送り出したのだろう。その疑問は常に心のなかにこびり付いて、どんどん大きくなっていった。

そして30歳を迎えた年。私は遂に行動を起こした。それまで抱

えていた葛藤を全て吐き出すことにした。決め手になったのは相談相手になつてくれた詩乃の言葉だ。

「明日奈がそうしたいなら、私はするべきだと思う。世間には信じてもらえないかもしれないけど、知らないままだと事件の被害者達はゲームが始まった日に死んだことになる気がする」

悩んだ末に私が選択した方法は、あの世界で生きた人々の物語を書くことだった。

私は託された気がした。「後を頼む」と。「自分達の物語を現実で伝えてほしい」と。

私は物語を書くとき、あの世界にいた約1万人の死者に見つめられているような視線を感じた。多分、彼も似た視線を感じていたのだと思う。

殺めてきた死者。

自分の目の前で碎けていった死者。

2年もの期間を経て完成した原稿を大手の出版社へ持ち込んだとき、編集者は私がSAO唯一の生還者であることに疑問を持っていたものの、話題性のある企画として書籍化には積極的だった。

文才なんて持ち合わせていないけど、私の原稿は製本され、増刷を重ねて全国の書店に並べられた。

タイトルは「ソードアート・オンライン たった1人の生還者」。

私はあの世界で過ごした3年間を赤裸々に綴った。デスクゲームに巻き込まれた経緯。病的なほど攻略に費やしていた日々。黒の剣士との出会い。夫との結婚生活。夫の死と、壊れていった私の心。そして、もうひとりの黒の剣士。思い出せる全てのことを書いた。

世間の注目は半端なものにおさまらず、私の自叙伝はベストセラーに名を連ねた。私のしたことは特定秘密保護法に違反する行為だったから告発されるはずだったが、それ以上に生存者がいたことを隠していた政府への批判が激しく、私は裁かれなかった。むしろ裁かれたのは総理大臣が辞任した政府だったのかもしれない。

とはいえ、私をペテン師と疑う声もあった。総務省が私をSAO生還者と認めてくれたおかげで収束したのだが、良くも悪くも世間か

ら好奇の目を向けられる私を守る義務は会社にはないと、私は自主退職を父親から迫られた。父親には落胆させてしまつて申し訳ないと思つている。でも、生き残つた私には伝える義務があつたのだと確信を持つて言える。

こうなることは予想できたから、私は素直にレクトを退社した。家族とも縁を切つた。その後の私は全国各地へ、時には海外へ渡り自分の体験を語つた。

落ち着く暇もない日々だつた。連日記者が取材を求め、時には身内をS A Oで喪つた遺族が尋ねてくることもあつた。多くの来訪者の中には、私が驚く人物も含まれている。

「キリトの、桐ヶ谷和人の妹です」

総務省はS A O内での情報を一切公表していない。遺族には被害者がゲーム内で使つていたキャラクターネームを教えていたらしいが、それ以外は全て秘匿された。あの世界ではプレイヤー同士の戦闘が頻繁に起こつていてPKでの死亡も多かつたから、遺族同士で訴訟を起こしたら途方もない件数になる。ゲームでの殺人は全て自殺した茅場昌彦に押し付ける形で落ち着いているのだ。だから遺族にとって身内がゲームの中でどう死んでいったのか、その唯一の情報源が私の本だつたわけで、私を尋ねてきた長田直葉ながたすくはという女性は本の中に兄が使つていた名前を見つけたらしい。

私は直葉に糾弾される覚悟だつた。何故兄の傍にいながら守つてくれなかつたのかと。でも、直葉は私を責めなかつた。むしろ感謝された。

キリトは、和人は直葉の本当の兄ではないらしい。和人の本当の両親は生まれてすぐに亡くなり、叔母の家に引き取られた。だから直葉との血縁は従兄になる。直葉はそれを和人がS A Oに囚われていた間に母親から聞いたのだが、和人自身は幼い頃には既に知つていたらしく、それが原因かは分からないが兄妹に溝を生じさせた。やがて和人はコンピュータに興味を持ち、ゲームに没頭していった。そんな彼が世界初のVRMMOと銘打たれたS A Oに手を出すのは必然だつたのかもしれない。

直葉は後悔していた。友達を作るどころか家族との会話すらも少なくなつた兄と接する努力をなぜしなかつたのかと。和人がとうとう帰らぬ人となつてから、その後悔は増していった。

「兄はとても人付き合いが下手だったので、明日奈さんの本に出てきてびっくりしました。あの人が結婚までしちやうなんて。兄があの世界で頑張つて生きようとしたのは、明日奈さんのおかげです。兄を支えてくれて、本当にありがとうございました」

直葉はそう言って私に頭を下げた。とても気丈な女性だ。私に憎悪を抱くことをせず、その後も頻繁に顔を合わせる仲になつた。

きりがやかずと
桐ヶ谷和人。

あの世界で私の夫だつたキリトの本当の名前。

できることなら共に現実へ還り、その名前で呼びたかつた。妄想ではなく本当の結婚をして、彼との家庭を築きたかつた。

もうひとり、忘れてはいけない人物がいる。私が全てを思い出した日から1日たりとも記憶の中から零すまいとしてきた、もうひとりの黒の剣士。

セツナ。

それが、私をあの世界から返してくれた人の名前。恩人であり、帰還した私の罪の象徴。私の本の後半部分は、大半が彼への懺悔という構成になつている。

はやみせつな
早速刹那。

それが、彼の現実での名前。

私がそれを知ることができたのは、彼の家族と会つたからだ。彼が亡くなつた日はゲームクリアが果たされたその日だつたから、遺族もすぐに分かつたらしい。

遺族から聞いた現実の彼は、妄想での彼とは全くの別人だつた。本と映画が好きで、サツカーに情熱を注いでいた少年。ゲームには全く興味を持たなかつたそうだが、彼が何故SAOの世界に来たのか、その理由を私は本人から聞いている。

共働きの両親に代わつて面倒を見ていた彼の姉はこう言っていた。

「小さい頃から一度決めたらやり通すまで気が済まない子でした。せ

めて近くにいる私だけでも弟の味方でいてあげれば、違う結果になっていたのかもしれませんが」

彼女は泣いていた。泣く資格なんて無いのに、私も泣いてしまった。姉の抱いていた罪悪は、私が抱いてきたものと同じだったからだ。あの時こうしていれば。そんな無意味な思考を重ねずにはいられない。でも重ねればその選択をしなかった自分を責め立ててしまう。

セツナは殺人者だった。でも、刹那を家族として愛する人は確かにいた。姉は弟が人を殺していたと知っても、変わらず彼を愛していた。

仮想と現実では別人なのかもしれない。でもセツナも、早速刹那も、同じ意思を持った人間だとわたしは思いたい。私があの世界でアスナとして、同時に結城明日奈として生き、戦い、夫を愛したように。彼も彼として、あの世界で生き抜いたのだと信じたい。

セツナ。

私は彼の名前を呼ぶ。

あなたが私に与えてくれた命が、あなたの物語を形作り、世界中の人々へ染み渡るよう祈りながら。

セツナ。

もし叶うのなら、私はあなたに言いたいことが沢山ある。たとえばあなたが私の言葉を受け取ってくれなくても、私は言い続ける。あなたの目蓋のない耳に入るまで、何度でも。

あなたへの言葉が、あなた達の物語を紡いでくれる。あなたへ向ける言葉が、私を前へと進ませてくれる。

「結城さんは、彼のことを愛しているのですか？」

講演会でよくそんな質問をされる。

いいえ、と私は決まってそう答える。そうだったらロマンチックなのですが、と付け加えて。

私が愛しているのは、夫ただ1人。彼がたった1人の妻を愛したように。

多分、彼に対する気持ちをひとつで片付けることはできない。感謝

もあるし、それ以上に懺悔が大きい。それは隠居生活に入り、体験を多くの人前で語らなくなった今でも変わらない。

◆
?

「おつきいねー」

舌足らずな幼い少女が慰霊碑に目を輝かせている。少女にはこの碑石が何を意味しているのかまだ分からないようだ。

「お嬢ちゃん、お父さんかお母さんはいないの？」

私が声をかけると、こんな車椅子に乗った老婆には何もできまいと思っただのか、少女は警戒心を見せない。

「ママが迷子になっちゃったの。こーゆーおつきなもの近くにくれば見つけやすいと思っただの」

女の子というのは、いつの時代になってもませたものだ。

「そう、お利口さんね」

私がそう言っただけで頭を撫でると、少女は乳歯が抜けた歯並びに羞恥を見せずにはにかんだ。

「ねえ、おばあちゃん」

「ん、なあに？」

「これ、字がいっぱい書いてあるね。なにが書いてあるの？」

「これはね、お名前なのよ」

「どうして、こんなにたくさんのお名前が書いてあるの？」

どう説明したものか。私はしばし考えてから答える。

「昔、お婆ちゃんがまだ若かった頃、たくさんの方が死んでしまったの。皆がとても悲しんで、こうしてこの人達がゆっくり眠れるように綺麗な公園を作って、お墓を建てたのよ」

「このお名前の人たち、みんな死んじゃったの？」

「そうよ。お婆ちゃんはね、この人達と同じ場所にいたの。ここにはお婆ちゃんのお友達と旦那さんの名前もあるの」

「そうなんだあ」

少女が慰霊碑を見上げてみると、彼女の母親らしき女性が駆け寄ってきた。オーグマーで追跡できたのか、それほど息があがっていない

い。

「駄目じゃない離れちゃ。迷子になるところだったでしょう」

「迷子になったのはママのほうだもん」

少女が口をとがらせる。母親は私に「ありがとうございました」と頭を下げ、娘の手を引いて去っていく。去り際、少女が振り返って手を振った。私も手を振り親子を見送る。

私は特に行き先を指定せず車椅子を走らせた。並木道をゆつくりと通り紅葉を眺める。

もし過去が少しでも変わっていれば、私も子供を産んで家庭を築く人生があつたのかもしれない。私はS A Oで生きた人々が時代の流れと共に忘却されることを阻止するために人生を捧げた。そのためにキリト以外の男と結婚することなく、独身を貫いてきたことに後悔はない。

あの慰霊碑に刻まれた人々は、私を赦してくれるだろうか。まだ赦されてはいないのかもしれない。詩乃も直葉もこの世を去った今、未だ現世に留まる私はあの世界で死んでいった死者達の怨念によつて生かされているのかもしれない。

まだ赦していない。

自分達のことをもつと伝えろ。

のうのうと生きることが罰だ。

死にゆく者を見つめ置いて行かれることが罰だ。

それで赦されるのなら、私は甘んじてその罰を受けよう。自力で歩くことができない老いぼれでも、まだ語り継ぐことはできる。でも、今日のところは少しだけ休ませてほしい。

私は池のほとりで車椅子を止める。穏やかに揺れる水面に紅葉と銀杏いちじょうの葉が浮いている。

私は目を閉じた。暖かい日和と少し冷たいそよ風が心地いい。次第に意識が薄らいでいく。誘ってくる眠気に私は身を委ねた。

◆
?

私は白い光の中にいる。

どこを見渡しても何も無い。果てしなく続く光の中。

不意に笑い声が聞こえる。振り向くといつからそこにいたのか、とても久しい、でも一日も忘れまいとしていた顔触れがいる。あの頃の、あの世界の姿のまま。彼らが私に優しい笑みを向けてくる。

みんな……、と呟く私の目から涙が零れる。涙が流れる目尻から、長い人生で積み重ねてきたしわが消えていることに気付く。体を見下ろすと服まで変わっている。わたしは少女の姿になっていた。あの世界にいた頃の、白亜の戦闘服に剣を携えたあの姿に。

わたしは皆に駆け寄る。ずっと会いたいと願っていたキリトの胸に飛び込み、その感触と温もりを確かめるように抱き合った。アスナ、とキリトが優しくわたしの名前を呼んでくれる。隣でユイがママと嬉しそうに声をあげる。でも、わたしはそう長く喜んではない。見慣れた面々のなかに彼がないのだ。どこにいるのだろう。わたしは周囲を見渡す。

目まぐるしく動くわたしの視線はとある一点で止まった。光の向こう、そこに人影がある。とても小さいけど、わたしにはそれがはつきりと見えた。

気付けばわたしは全速力で走っている。背を向けて去ろうとする彼を指して。

行かせない！

あなたはまたそうやってわたしの前に突然現れて、また突然去っていくの？

そんなことさせない。

あなたに言いたいことがある。

ずっと、あなたが去ったあの日から言いたかったことが。

そして、わたしはその手を掴んだ。彼は歩みを止めて、ゆっくりと振り返る。その目は最後に見たあの日と同じ悲しそうな目で、私はたまらず涙を流しながら全てを吐き出す。

ずっと言いたかった。

ごめんなさい。そしてありがとう。

あなたを忘れてはいけなかった。皆にあなたという人がいたこと

を知ってほしかった。

あの世界で、誰よりも悲しい人がいた。誰よりも愛を知っている人がいた。

その人が私をあの世界から還してくれたって。

セツナ君。あなたはわたしを赦してくれる？

わたしがそう聞くと、セツナは無言のままぎこちなく、でも優しい笑みを見せてくれた。今まで見たことのない穏やかな顔だ。答えとしては十分だった。

気付けば、彼の隣に少女が立っている。とても美しい少女だ。わたしはすぐに分かった。彼が残した写真に写る彼女を見たから。

あなたなんだね。彼が愛した人は。

少女は照れ笑いを浮かべる。隣にいるセツナも彼女へ慈しみの笑顔に向けている。

私達のもとに皆が集まってくる。私にはもう、これが夢なのか現実なのか区別することがどうでもよくなっている。

いま、わたしは罪の意識から解放された。

愛する人と仲間に再び会うことができた。

罪悪の対象から赦しを得ることができた。

わたしは満たされている。大切な人達に囲まれて、光のなかで幸福が集束していく。

さあ、行こう。

キリトの言葉で皆が歩き出す。キリトがわたしの右手を、ユイが左手をとり行進へと導いてくれる。すぐ後ろには手をとり合ったセツナとナミエもいる。

わたし達は光のなかを、その彼方にある更なる光を目指して歩き続ける。

どこに行くの、とわたしはキリトに尋ねる。

分からない、とキリトは答える。

行けるところまでだ、と後ろを歩くセツナが言った。

皆が笑みを零して頷く。そう、怖れるものは何もない。

わたし達は自由だ。どこへでも行ける。

行けるところまで、行きたいところへ、歩いていこう。

◆ 2105年11月2日。結城明日奈は西東京市のSAO事件被害者追悼公園で容態が急変。搬送先の病院で死亡が確認された。死因は老衰。享年98歳。

同伴していた介護士によると、とても安らかな最期だったという。

「ソードアート・オンライン パラダイス・ロスト」――完――

あとがき

「ソードアート・オンライン パラダイス・ロスト」、4ヶ月の期間を経て、ようやく完結しました！

大学の卒業式までには完結という目標をなんとか達成し、ようやく今夜からぐっすり眠れそうです。まあ、すぐに引越しの準備に取り掛からなければならぬのでゆっくりもしてられないのですが。とにかく、肩の荷が下りました。

元々本作は漫画としてpixiv様に投稿するつもりだったので、私が画力不足なせいではなかなか始めることができず放置状態にありました。だからだと過ごしていたせいで学生生活も終わりが近づいてきたことの焦りから「何かやり遂げなくちゃ」と発起し小説としてハーメルン様への投稿へと至ります。卒業まで終わらせるために急ピッチで書いたので荒削りな部分が否めませんが、多分私の実力では時間があってもこれ以上良い文章を書けるとも思えないです。情けないことに(笑)。

寄せられた感想には大変勇気づけられました。設定の曖昧な部分や原作キャラの乖離を突いた鋭い指摘も頂き、原作「ソードアート・オンライン」の人気の高さを痛感させられます。本作はあまりにも惨たらしい展開が続く、結末も気持ちのいいものとは言えませんが、私としてはこんな鬱展開を最後まで書き切ったことが何よりも嬉しく思います。物語の舞台であるアインクラッドの閉塞感と疑心暗鬼になつていく人々を描くことを目指した結果、私の悪ふざけが高じた結末になりました。

さて、せっかくなので本作の執筆にあたっての裏話と、本作に登場しなかった原作キャラクター達のその後について言及したいと思います。

え？ 別にいい？

まあまあそう言わずに。

《執筆の経緯》

単純に原作が面白かったからです。ただ、殺伐とした世界観なのに

原作が割と明るいテイストだったことに「勿体ないな」と感じ、とことんシリアステイストにした本作の執筆へと至りました。

原作との矛盾はなるべく作りたくなかったので、「いてもいなくても変わらない空気のような存在」という所から主人公セツナの設定を作っていきました。そこから、影に生きる殺し屋ということにしました。「必殺仕事人」みたいな殺し屋集団にすることも考えましたが、登場人物の背景を深く掘り下げたかったのでセツナ1人にしました。番外編で血盟騎士団の暗部を描いたエピソードはその名残です。

《映画ネタについて》

私が崇拜する伊藤計劃いとうけいかく氏が筋金入りの映画ファンであり、著作にも映画ネタを取り入れていたことのオマージュ（という体のパクリ）でございます。映画ネタって、不思議と比喩表現に深みが出るように錯覚するんですよ。セツナは1990年代から2000年代の映画が好きという設定でしたが、近未来の2020年代にどういう映画がメジャーなのか分からないので古い映画が好きという設定にしました。

《結末について》

実はフェアリー・ダンス編やファントム・バレット編の構想も練って最後にはセツナが幸せになるような結末を考えていました。しかし、話が進むにつれてオリキャラばかりが出てきて原作キャラとの絡みが殆どないという事態が生まれました。私はオリキャラと原作キャラとの絡みに二次創作の面白さを見出しているので、まだ原作キャラを立てることができるアインクラッド編で完結させるはこびとになりました。代わりにとんでもない結末になってしまいました。それはご愛敬ということで（笑）。

友人から「セツナはアスナのことを好きになったの？」と聞かれたので同じように思っている方もいるかもしれません。そうだったらロマンチック（？）なのですが、セツナが愛しているのはナミエただ1人です。アスナはセツナを救おうとしてくれたので、それに対するお礼として彼女を救おうとしました。アスナがナミエに似ているから死なせたくなかったとか贖罪のためとか色々理由は考えたので

すが、結局セツナは優しかつたんでしよう。人殺しだけど、彼にも人の心があつたということだと思えます。

《セツナについて》

私の暗い性格と中二病要素をふんだんに詰め込んだ栄えある主人公です。名前は構想を練っていた時期、ガンダム00の円盤を見てふと「セツナでいつか」という大雑把な理由で決まりました。最初はとりあえずクールな男として描いていましたが、いざ書き始めたら無骨で人間味がなさ過ぎたので読書と映画好きなサツカー少年という設定にしました。作中での描写から察しのいい方は既に分かっているかもしれませんが、モデルは原作主人公のキリトです。ビジュアルはキリトをたくましく成長させた感じに落ち着きました。性格面では「もしキリトがアスナを亡くしたらこうなるだろうなく」という想像で考えていました。なのでキリトに似ているけど、アスナという大切な人がいる彼と失ったセツナは対極ということになります。という気取ったこと言っていますが、実際はただリア充の転落を見たかっただけです。セツナは私のリア充に対する憎しみ（嫉妬）から生まれた主人公なのです。

嫉妬から生まれた主人公は、最終的に全てを滅ぼす魔王となりました。たとき。

《ナミエについて》

既に故人なので空気ですが、一応ヒロインです。作中では憂いを含んだ美少女ということになっています。しかし、考えによってはセツナがSAOプレイヤーを全滅に追い込む遠因を作ったとんでもない悪女です。

実は終盤でセツナが彼女の日記を発見して読むというイベントを考えていました。日記の中で実はナミエはセツナと一緒にSAOにダイブしたことを後悔していて次第に彼を恨むようになっていった、という酷なエピソードを盛り込む予定でしたが「流石にそれはセツナがかわいそう（笑）」と思い相思相愛だったということにしました。

皆さん勘違いしないでください。彼女は悲劇のヒロインなどではありません。むしろ彼女が悲劇を引き起こしたんです！

《レブロについて》

忘れている方も多いかもしれませんが、第2話に登場したオレンジギルドの生き残りです。実は最初のプロットではS A Oがクリアされた後フアントム・バレット編のヒロインとして再登場する予定にありました。現在のプロットに落ち着き後編に再登場させて分かりましたが、フアントム・バレット編を書いたとしても彼女のヒロイン性を引き出せる実力は私に無いです（笑）。

ちなみにフェアリー・ダンス編のヒロインはナミエの現実での親友で、ナミエをS A Oに誘ったセツナとあーだこーだする予定でした。

《P O H^{プー}について》

ほぼ出オチみたいない扱いでパパッと死なせる予定でしたが、人間味を持たせた結果かなり後編の展開に関わるキャラクターになりました。情報が少なく扱い辛かったので独自解釈を入れて彼の人物像を組み立てていきました。なので多分最も原作とかけ離れていると思います。ちなみに彼が聖竜連合で使っていたポールという偽名は伊藤計劃氏の著書「虐殺器官」の登場人物ジョン・ポールが由来です。語呂も近いし丁度いいかなと。

気になった方は是非とも「虐殺器官」を読んでください！ 名作です！

《アスナについて》

後編での病み具合は原作ファンに叩かれるのを覚悟で書きました。前編ではセツナにフルボッコにされたり後編ではお留守番状態だったりと散々な扱いだった彼女でしたが、実質本作のヒロインとして活躍してくれたと思っております。アスナがキリトに猛アタックして結婚に至った理由は、セツナとの出来事を経てキリトを彼と同じ道に進ませたくなかったからという原作とのすり合わせのつもりです。

ま、結婚2週間で未亡人になったけど！

《キリトについて》

完全に空気になってしまいました。原作ファンの皆様ごめんなさい。本格的に登場させるかどうかは前編終了まで本気で悩みました。でも結果としてセツナとの絡みが殆ど無かったからこそ、モノローグ

で彼の剣で留めを刺す場面でセツナとの奇妙な絆のようなものを演出できたのではないかと思えます。

登場させるべきとは思いましたが、セツナと出会った所で面白い絡みを展開できるほどの実力がありませんでした。2人ともコミュ症の似た者同士ですから、多分会ったとしてもろくに会話できないぜ。なぜ分かるのかって？ 実体験です！

【原作キャラのその後】

《桐ヶ谷直葉》

原作と同様、兄が愛した仮想世界を知るためにALOを始めましたが、兄の死を機にゲームには一切手をつけないようになりました。兄を亡くしたことで長い間落ち込んでいましたが、彼女をALOに誘った長田慎一（レコン）が責任を感じ支えてくれたおかげで立ち直りました。高校・大学でも剣道で優秀な成績を修め、卒業後は警察官になり学生の頃から交際していた慎一と結婚しました。明日奈と会った時期には既に2人の子供を持つ母親になっています。良かったね長田君。

《朝田詩乃》

「ザ・シード」が存在しないためGGOを始めることはなく、学校でのいじめによってPDDSDが深刻になり、明日奈が入院していた病院の精神科でカウンセリングを受けていました。SAO事件でカウンセリングを義務付けられていた明日奈と病院で出会い、彼女との交流で過去のトラウマを克服することができました。明日奈がSAO事件唯一の生存者であることは本人の口から聞いていましたが、他言はしませんでした。後に結婚し幸せな家庭を築きます。新川恭二？誰ですかそれは。

《新川恭二》

SAOで兄の昌一（ザザ）が亡くなりGGOも存在しないため死銃事件を起こすことなく自宅に引きこもる日々を送ります。（不可抗力とはいえ）殺人経験を持つ詩乃への憧れは今作の時間軸でも変わらず、彼女がカウンセリングを受けていたことを知ると激昂し殺そうと

しますが、あえなく逮捕されました。それだけでも短編がひとつ書けそうなのですが書く予定はありません。だってこの子「アサダサン!!」しかイメージないもん。

《紺野木綿季》

原作では横浜の病院に姉と一緒に入院していましたが、今作の時間軸ではメデイキュボイドを使用するため、姉と離れて設備が整っている明日奈と同じ病院に移っています。姉の死を看取ることができず傷心しきっていました。明日奈と出会い彼女との交流を経て明るい性格を取り戻していきます。2026年3月末に容体が急変し、明日奈に抱きしめられながら息を引き取りました。なぜ二次創作なのにユウキを救わない! という方もいるかもしれませんが。言わせていただきます。俺も自分に腹立つてんだ!

《アリス》

UWが存在しない時間軸なので彼女も存在しません。「ザ・シード」がないんだからしようがないじゃないか。

《ユイ》

原作と同様キリトのアイテムとしてシステムから切り離されましたが、彼が死亡したためアスナの所有するアイテムとして彼女のナーヴギアのローカルメモリに保存されています。SAO事件後はナーヴギアが回収されましたが、捜査のためにセーブデータの解析とか行われるでしょうし消去はされていないと思います。ぶっちゃけ放置。

アスナの会話の中だけで登場しましたが、アスナはユイとの出来事も断片的としか覚えてなく、「わけはともかく自分達には娘がいた」と認識していました。滅茶苦茶だけど仕方ないじゃん。あの娘病んでたんだもん。

《須郷伸之》

原作と同様、人間の感情・意思・記憶をコントロールする研究に着手し、今作の時間軸ではレクト・プログラムの社員を被験者として研究を進めていました。ですが被験者の死をきっかけに研究が世間に露呈してしまい、部下共々逮捕されました。その後は原作と同様、レクト・プログラムの解散。結城彰三もレクトのCEOを辞任。会社が

運営していたA.L.Oはサービス終了になりました。歪みねえな。

《菊岡誠二郎》

原作ではキリトの聴取を担当していましたが、本作ではアスナを担当しています。アリシゼーション計画のためにUWの作成を進めていましたが、「ザ・シード」が存在せず仮想世界を作成する資金も人材も確保できず計画は頓挫してしまいました。資金はともかく人材が確保できなかった理由について。SAO事件で約1万人の犠牲者が出たことでVR事業は世間から反感と偏見を持たれ、関連企業は次々と倒産していき業界は一気に衰退していきます。エンジニア達も業界の将来を絶望視し転職していく人が多かつたため、自衛隊も隠れ蓑としてラースを設立することが不可能になってしまいました。明日奈が晩年の頃のVR技術は医療・軍事目的のみに使用されるようになっていきます。何かこの人が一番悲惨な目に遭ってるかも。

《茅場昌彦》

原作と同様SAOクリアと同時に脳のスキヤニングを実行し死亡しました。精神の電腦化に成功したかどうかは触れていませんが、成功していたらキリトに代わって「ザ・シード」を託せる人物をネットの海から探し続けているのかもしれない。まあ、明日奈が晩年の頃を見ると見つからなかったみたいだけど。

最後になりますが、私の自己満足に付き合っ頂き、そしてセツナの物語を見届けていただき、本当にありがとうございます。

少し気が早いですが次回作の構想に着手しております。また鬱展開になるかは未定ですが、そのときは温かく見守って頂けたら幸いです。

それでは、またお会いしましょう！